

---

# ウルトラマンティガ&ハートキャッチプリキュア！～光と闇の超決戦～

ソラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ウルトラマンティガ&ハートキャッチプリキュア！〜光と闇の超決戦〜

### 【Nコード】

N5245Q

### 【作者名】

ソラ

### 【あらすじ】

砂漠王デューンとの戦いから3年後人々は平和の時間が流れたいたのだが突如ここの大樹から新しい種が生み出された。それはここの大樹が最初に生み出した伝説のプリキュア・キュアアンジェからのメッセージだった。コレは戦いを終えたつばみ達プリキュアと新しい力を手にした大人、琢磨、傑の新しい敵とのぶつかり合いが繰り広げられる戦いの物語である

## プロローグ〈夢〉（前書き）

新しい戦いのプロローグは夢から始まったのだった……邪神の復活と巨人の存在……その正体とは？

## プロローグ〜夢〜

此処は400年前のとある国のとある場所・・此処に今一人の男と一人の女が立っていた・・・

???「レナ・・よくやったよコレでしばらくは砂漠の使徒も奴も地球に災いをもたらす事はないだろう・・コレでボクも此処にいる理由がなくなった」

レナと呼ばれる女性は黒髪の長髪で黒いレースの入った服を着ていた・・男は今も泣きそうな彼女に優しい言葉を掛けた・・顔に手を添えて悲しむ彼女に最期の別れを言うために・・

レナ「でもいつまた砂漠の使徒や邪神が蘇るかは分かりません。貴方の力がまだ必要です・・ダイゴ、お願いです!!地球に残ってください!!じゃないと私はまた一人になってしまいます・・」

ダイゴと呼ばれる男はレナの訴えを聞きながらも首を横に振った・・  
・自分達は元々は結ばれてはいけない関係なのだ・・君の中には新しい命が・・ボクの力を受け継ぐ命があるのが唯一の救いだ・・

ダイゴ「レナ泣かないで。大丈夫ボクは遠くから君を見守っているよ。そして君がピンチになったらボクは戻って来る。」

レナ「ダイゴ・・」

ダイゴ「さよならレナ・・キュアアンジェ!!!」

ダイゴはIの字型の形をしたモノをレナに渡して彼女に背を向けて離れていく・・そしてダイゴから渡されたモノをそしてこれから地球を守らなくてわならない使命を後世に託すという重大な仕事があったのだから・・徐々に景色が白くなっていった・・

大人「はっ!!!・・またあの夢かコレでもう一週間同じ夢の繰り返し・・でもデューンが倒したはず・・邪神って何のことなんだ?」

夢から覚めた大人は汗で身体中びしょびしょだった・・・実は今までヴィジョンは大人の夢であった・・・しかしリアル感がありすぎて気持ちが悪かった・・・そんな中カーテンを開けると朝日があたりを包みこんでいたのだった。

砂漠王デューンとの激闘から既に3年の月日が経過していた。かつての仲間もそれぞれ自分の夢に向かって歩き出していたのだった。大人とはあの戦いのゆりの監督の元で後猛勉強してつぼみ達が通ったよっている明堂院学園の大学部に進学し琢磨は大人とは違う大学ではあるが一応進学をして今は日本一周の為にバイクをかう為にせつせとバイトをしている。傑は外交官の夢をかなえるために明堂院学園の姉妹校のアーバンド大学の外国語学部にもその大学の教育学部に入學していた

つぼみ、えりか、いつきの3人はそのまま明堂院学園の高等部に進学し今の仲良く過ごしていた。ゆりは大人と同じ明堂大学に入学して自分達の夢を見つけるために頑張っているのだった・・・

大人「さてと、今日は5限までだったな。晩飯どうしようかなあ」  
流石に大学生ともなれば一人暮らしをせざるを得ない環境となり大人は大学の寮に住まいを移していたのだった。一人暮らしとなれば面倒なのは食事だ・・・今日はどうするかと悩みながら大学へと自転車で向かうのだった・・・

大人「天道さんとかマンティス達は元気にしてるかなあ？・・・天道さん達はあの後も《もう俺達の教える事は何も無い・・・後はお前達で人生を切り開け》って言ってハイパーゼクターで元の世界に戻っちゃったし・・・マンティス達は残りの人生で楽しみたいって言って旅に出た・・・今思えば懐かしいな・・・皆どうしてるかな？」

大学についた後も大人は上の空だった・・・何せあの激闘からもう3年が経過した・・・すると今までと同じ平和がやってきたのだ・・・  
・・・そして帰り道あてもなく何処かに行こうと自転車置き場に行

こうとしたその時後ろから声が聞こえてきた・・・聞き終えボ絵のあるあの声を・・・

ゆり「大人！！・・・もう何度呼んでも返事ないんだから」

大人「あ？・・・ゆり・・・久しぶり・・・ってほどでもないか同じ大学だから顔ぐらいは見るし」

ゆり「そうね？・・・あ、そうだ今日時間ある？つぼみ達が久々に仲間で集まらないかってメールが来たんだけど」

大人「へえ～またあの3人何か企んでるな？よし分かったどうせ暇だからいいよ 場所は？」

ゆり「植物園でやるみたいよ。」

大人「分かった。準備が出来たらすぐに行くよ」

大人は一度ゆりと別れて自宅に戻る。そしてある程度身だしなみを整えていくと愛車の自転車に乗りこんでいきつ植物園へと向かうのだった。

大人「はあ～大学からは遠いな。さてやつとついた。」

つぼみ「大人さん！！来てくれたんですね」

大人「ああ 久々に仲間の顔を見たかつからね～あれ・・・えりかとかは？」

つぼみ「もうすぐ来ると思います。あつ！噂をすれば・・・」

えりか「ごめん、ごめん～遅くなっちゃった！！」

いつき「えりかかったら色々買いますよ」

大人「相変わらずだね・・・二人とも」

えりか「いつき「大人さん！！お久しぶりです」

大人「うん。久しぶりだね」

大人達は久々の再会にテンションが上がっていた。そして遅れてゆり、琢磨、傑、夕も合流してきた。

8人「カンパイ！！！！」

8人は植物園のテーブルでジュースを飲みながら昔の話をしたり今

の現状を報告したりと和気あいあいになっていたのだ。

つぼみ「アレからもう3年もたつんですよね。何だか信じられませんよ」

えりか「ほんとだね。あの戦いが嘘みたいだからね」

いつき「でもコレはボク達だけの秘密・・・誰にも言えない」

ゆり「ええ。私達の頑張りが今の未来なんですもの・・・」

大人「未来かあ」

つぼみ達の言葉に大人は夢の事を思い出していた・・・覚えていた単語はキュアアンジェ・・・そして邪神・・・どういう意味なのだろうか？もしかしたらまた何か起こる予兆なのか？・・・この事を話すべきかな？・・・いや止めておこう。この話をしたら仲間によけない心配をかけるだけだ・・・今は黙っておこう・・・そう思っこの場で夢の話をしなかった・・・しかしこの夢こそ新しい戦いの予兆である事にまだ大人は気がつかなかったのであった・・・

翌日・・・場面は変わりこころの大樹を育てている妖精達はいつもどおりこころの大樹にこころの種のエネルギーを送り大樹を育てていた。つぼみ達のお陰でこころの大樹は順調の育ちつつあり今は大体人間の子供くらいの大きさままでに成長したのだった。

シプレ「？・・・何ですか」

コフレ「どうしたんです？・・・ああ！！」

ポプリ「うん？・・・わあああ！？」

今日もいつもどおり様子を見行こうとしたシプレ達だったが何と突然こころの大樹が光出しているではないか・・・コレは3年前の事を考えるとまた何かが起こる前兆であり戦いの前触れでもあったのだ・・・案の定こころの大樹から光がなくなつたと思えば其処には今まで見た事がない銀色の種があったのだった。

シプレ「コレは・・・まさか」

コフレ「また新しい何かが地球を狙っていると言う事ですか？」

ポプリ「だとしたらまあポプリ達がいちゆき達のところに行くでしゆね!!」

シプレ&コフレ「うん!!」

妖精達は大急ぎで地球へと向かうのだった。異変の前兆をつぼみ達に知らせるために。

其処の頃大人はというと・・・

大人「はあ〜昨日は唐揚げだったから今日は思いきって牛丼にしようかなあ〜」

授業を終わらせて帰宅途中だったのだ。大学生の特権は時間がある事であるから時間を持って余していたのだ。そんな中彼は特に行くあてがなかったため懐かしいあの場所に行ってみた。

大人「うう〜ん〜。はあ〜此処から見える景色は変わらないな〜アレから3年たつんだよな・・・何か懐かしい」

そんな物思いつふけていると頭上から何かの音がしてきた・・・大人「?・・・ぐおおお!?」

なんとそれはシプレ達妖精であり上を向いた大人の顔面に妖精達の身体パンチがクリーンヒットしたのだった

大人「はっひゃああ〜・・・」

シプレ・コフレ・ポプリ「うぐう〜・・・んっ?・・・ああああ〜・・・大人さん!!!」

その場に倒れてしまう大人・・・妖精達はかつての懐かしい顔にああ〜あとやってしまったとも言える様な声を上げてしまう・・・そしてしばらくして・・・

大人「いつつ・・・空から隕石が・・・ん?ここは・・・何処だ?」

つぼみ「あ、気がついたようですね!!」

大人「つぼみ?・・・ここはつぼみの家か・・・ああ頭が痛い」  
シプレ「ごめんなさいですう(汗)」

コフレ「ボク達も慌ててたんですうっ!!!」



ポプリ「大人しゃん大丈夫でしゅか？」

大人「ああ、大丈夫だよ心配かけたね・・・って何でシプレ達が此処に？君達はこころの大樹のお世話をしてたんじゃないのかい？」  
つぼみ「それが・・・コレを！！」

大人「それは・・・こころの種？・・・いや・・・違うね。ハートキャッチミラージュにセットするパワーアップの種に似てる」

シプレ「こころの大樹が何かを伝えるためにシプレ達に託したですう！！」

大人「こころの大樹が？・・・(まさか夢の邪神って奴に 관계が？)

つぼみ「今えりか達には連絡しました。もうすぐ来ると思います」

大人「そうか。じゃあまた植物園に行くんだね？」

つぼみ「はい！！おばあちゃん人も了承は得てあります。」

大人は直感的にそう思った・・・邪神が復活するとも言うのか？でもあり得ないはずだ夢の話だし第一砂漠の使徒は壊滅させたから侵略者なんてもいらないはず・・・でも夢の事が大人は気がかりであった・・・しばらくして全員集まり植物園にある秘密の扉からプリキュアパレス向いプルキュアパレスの奥のブロッサム、マリオン、サンシャイン、ムーンライトの石像がある場所に収めてあるハートキャッチミラージュの所まで辿りついた・・・

つぼみ「やっぱり！！」

えりか「ミラージュの収まる形だね」

ミラージュと取って種を確認してみるとやはり形が同じだった・・・でもなんの種なのだろうか？その疑問だけが残るのだ。  
いつき「でもなんの種なんだろう？」

ゆり「分からないわ・・・でもこころの大樹がわざわざ出したと言う事はまた地球に危機が迫っていると言う事かも知れないわね」

琢磨「そんな筈は・・・だって砂漠の使徒は壊滅したしネイティブの過激派達も天道さん達が片付けたじゃないか！！」

傑「ああ。確かにデューンはこの手で倒したしZECTだって壊滅

させた・・・なのに何で今更種を・・・薫子さん何か聞いていませんか？貴女の前のプリキュアから」

薫子「いいえ。残念だけど私のも分らないわ・・・こんな事は今までなかったし」

全員が困惑する中大人は確信に迫っていた・・・そう自分の夢の中の”ダイゴ”と”レナ”が言っていたセリフにある《邪神》という言葉だ・・・もしかしたら今度の敵は《邪神》なのか

大人「・・・皆聞いてくれ。思い当たる事があるんだ・・・」

大人は全員に自分が見た夢の話をした・・・邪神の存在をほのめかす夢の話・・・全員は大人の話聞いてもう一度状況を推理してみた・・・

ゆり「つまり大人が見た夢から考えると・・・敵は砂漠の使徒だけではなかったという事になるわ。」

夕「そんな！！砂漠の使徒以外だったらネイティブしか・・・」

傑「確かにそうだ・・・でも《邪神》なんてのは初耳だしこのタイミングで大人はそんな夢を見たんだぞ？・・・話が出来過ぎだ」

大人「とにかく種をミラージュにセットしてみよう！！何か分かるかもしれない！！！」

全員「うん！！！」

大人の意見に全員が賛同してミラージュに種をセットする。すると種は輝きだしてその輝きはミラージュにも広がって行った・・・全員「！！！！？」

するとミラージュから光が放たれて人型の影が映る・・・其処には大人の夢に出た人物gあ写っていた・・・

大人「アレは・・・キュアアンジェ！！！」

つぼみ「アレが！？」

キュアアンジェ「私はこころの大樹を守る戦士キュアアンジェ。このころの種がこころの大樹から出されたと言う事は地球に大異変が起き大地を揺るがす怪物ゴルザ、空を切り裂く魔龍メルバ、炎であらゆるものを燃やす怪物ガルラが復活します。」

えりか「コレって・・・もしかして」

いつき「キュアエンジェからの警告・・・」

キュアアンジェ「後世のプリキュア達よ・・・貴方達の力ではゴルザ達を倒すことはできません。かつての私も空からやってきた光の戦士達が私と共に邪神と共に戦いゴルザ達を倒して全ての黒幕である邪神を辛くも封印する事が出来ました。そしてその光の戦士達は自分達が戦いに使った身体をティガの地に残して星雲に帰って行きました。後世のプリキュア達よ！！巨人を蘇らせて再び協力してゴルザ、メルバ、ガルラを倒すのです！！巨人を蘇らせる方法はただ一つ・・・」

此処まで言い終わると映像は消えてしまった・・・

大人「ティガの地にある巨人・・・邪神の復活の前触れだって？・・・」

つぼみ「敵は砂漠の使徒だけではなかった・・・」

傑「決まりだな・・・一旦戻ろう」

全員一度プリキュアパレスから出ていく。すると何やらつぼみの両親がやってきた。

つぼみ「どうしたんですか？お母さん、お父さん」

みずき「つぼみ！！急いで家に戻って。テレビで凄いニュースがやってくるのー！！」

大人「？」

この場にいた全員が一度つぼみの家に行ってテレビのニュースを見てみると・・・

TVキャスター「ごらんください！！！モンゴルに突如謎の巨大生物が出現しました！！！更にイースター島、ナスカの大平原にも同じような巨大生物が出現しました！！！」

其処には青い身体に頭にツノをはやした巨大生物と赤い姿をした龍のような生物と全身が鎧のようなモノに覆われた炎をまき散らす怪獣が泡られ他の姿が映っていた。

大人「あ、あれは！！！」

全員一度つぼみの部屋に集まり状況を整理していた

つぼみ「予言のとうり……」

いつき「じゃあ本当に地球に異変が!？」

えりか「でも何で今になってあんなものが……」

大人「分からない……でもいつきのいうとおり地球に異変が起きているだ……後は《ティガの巨人》だけなんだ」

ゆり「《ティガ》……でもティガって何処なの？」

傑「何かヒントがあれば……」

すると突如ハートキャッチミラーージュが光出していくするとそこには希望ヶ丘市から近くの森であった……

大人「あの場所は……」

ゆり「あの丘の近くのあるとなり町との境界線部分の森ね!!!」

つぼみ「皆行きましよう!!!キュアアンジェの予言どおりなら光の戦士達は私達の味方のはずです!!!あの怪物たちに町が壊されてしまう前に!!!」

えりか「こうなったらやるしかないね……久々に大暴れしちゃうぞぉ!!!」

「

いつき「皆の笑顔を守る……キュアアンジェの意思をボク達が受け継ぐんだ」

ゆり「皆……すぐに行くわよ」

タ「バイクで来て正解だね」

傑「ああ。」

琢磨「久々に走るとしますか!」

大人「ああ。皆行ぞぉ!!!」

7人「おーーーーー!!!」

大人達はそれぞれバイクに乗り込んでティガ地へと大急ぎで向うのだったが3体の怪獣たちも申し合わせたかのようにティガの地へと向かうだった

## プロローグ〜夢〜（後書き）

まずはプロローグです

次回からもう一度つぼみ達はプリキュアに変身します。

次回のお楽しみに

## 第1話「蘇る巨人」（前書き）

前回までのあらすじ

戦いを終えたつぼみ達はそれぞれ自分達の未来に向って歩き始めていたのだ。だがそれは異変の予兆でしかなかった・・・突如蘇る3体の怪獣。一行はキュアアンジェの警告に従いティガの地と呼ばれる場所へと向かうのだった。

## 第1話「蘇る巨人」

つぼみ達はハートキャッチミラージュの映像を頼りに「ティガの地へ」とたどり着いた・・・この森はよくお化けが出るなどの噂が流れていて地元の人間からも気味悪がられているのだった。

つぼみ「此処がティガの地」

大人「この何処かに光の戦士達が・・・」

ゆり「でも何処にあるというのかしら？肝心な場所まではミラージュに映し出されなかつたし」

琢磨「この広い森を探すしか無いのか？」

傑「それしか無いんじゃないか？」

夕「早くしないとあの3匹が大暴れしてるんだから！！！」

大人「ああ。行こう！！」

大人、つぼみ、琢磨、えりか、傑、いつき、夕、ゆりの4班に分かれて森を探索する事にして森に散会する大人達。その間にもゴルザ、メルバ、ガルラの3体の怪獣は申し合わせたかのようにティガの地へと突き進んでいたのだった・・・

大人「やっぱり広い流石に地元の間じゃ不気味な噂が流れているからな」

つぼみ「そうですね・・・ちよつとしんどいです」

大人「大丈夫か？」

つぼみ「はい。何とか」

大人「ちよつと休憩するか？」

つぼみ「だ、大丈夫です！！！！伊達にプリキュアしてませんから！！！！」

大人「そうか。なら急ごう！！」

つぼみ「はい！！」

えりか「ホントにこんなところがティガの地なのかな？」

琢磨「さあ？でもミラージユが示した場所は此処だったから間違いないと思うけど・・・」

えりか「むう！何でキュアアンジェももう少し分かり易くしてくれないかなあ？ああもう！！」

琢磨「落ちついていたの。とにかく時間がないんだ早く探さない」とえりか「だつてえ」

駄々をこねるえりかに手を焼く琢磨。やはりえりかの性格は変わらなかった・・・取り合えず今は早くキュアアンジェの予言どおり戦士を復活させなくてはならない・・・駄々をこねるえりかをしり目に琢磨は必死にティガの地を探す・・・

いつき「傑さん早く！！」

傑「い、いつき・・・体力あるね？・・・お、俺バテてきた（滝汗）」

いつき「もうくだらないなあ。ひよつとして戦いが終わった後鍛えてなかったんじゃないですか？」

傑「え？・・・バレた？」

いつき「バレバレです！！！！」

傑「はい。日ごろの運動不足です。」

いつき「帰ったらボクが稽古付けてあげます。」

傑「それだけはやめてえ！！！！」

流石にいつきは日ごろ鍛えているだけの事はある傑の様にはてる事はなかったのだが傑は既にはててであった・・・平和ボケと言えは仕方がない・・・というかいつきの家庭環境が特殊だと思われるのだが・・・

ゆり「光の戦士が封印されている・・・どういつ形で封印されているのかしら？」

タ「え？でもミラージユじゃ此処にあるって・・・」



ゆり「考えてもみてよ。あの巨大な生物は私達では倒せないとキユアアンジェは言っていた・・つまり私達が探している光の戦士つて言うのもは巨人であるのならあの巨大生物と同じくらいの大きさと考えるの自然じゃない？そうすると封印する場所もかなり大規模なものになるはず」

夕「ああ！！そうか！！」

ゆり「巨人なんてこんな森で隠せるものなのかしら？」

夕「確かに。うん分らないね」

ゆり「もしかしたらプリキュアパレスやこころの大樹のような特別な加護で守られているのかもしれないわ・・今は頑張つて捜しましよう！！！！」

夕「うん！！！！」

ゆりの鋭い推測に夕は驚きが隠せなかった。確かに彼女の理論は納得がいく部分が多い。いや恐らく殆ど当たっているかもしれない・・だがその答えも探し出せば分かる・・二人は時間がないと焦りながらも探し始めた・・・

大人「・・・！！！！（声が聞こえる・・・）」

《選ばれし者よ・・・私は此処だ・・・早く・・・》

つぼみ「はあ、はあ、中々見つかりませんねえ・・・ちよつと休憩・・ん！？大人さん？」

8人では探すには広い森を探索しながらも必死に探すのだが中々見つからない・・森の吊り橋近くで大人とつぼみはいた。どこを探しても見つからないのだが大人には声が聞こえたのだ何かの呼び声が・・・大人はつぼみの呼びかけも耳に入っていないように橋をわつてあたりを見回す・・あたりをよく見てみるとなんと黄金色に輝くピラミッドが出現したのだつた・・・

大人「はっ！！！！」

つぼみ「アレは？」

その頃の他のメンバーはと言うと・・・傑はばてばてになってい

た・・・

傑「はあ、はあ、はあ・・・」

いつき「大丈夫？」

傑「なんとか・・・はあ、はあ」

えりか「いつき！！傑さん！！！」

いつき「えりか、琢磨さん！！どうだった？」

琢磨「いや・・・ホントに此処にあるのかな？」

ゆり「皆！！！」

いつき「ゆりさん！！！」

夕「どうだった皆？」

傑「ぜんぜんダメだ・・・はあ」

ゆり「おかしいわね・・・」

えりか「え？」

夕「もしかしたら今の私達には見つからないかもしれないの」

えりか・琢磨・いつき・傑「！！！！！！」

ゆり「ええ。あくまでも推測だけど」

ゆりは自分の仮説を全員に説明した。光の戦士達が巨人であるのなら今まで他の人に見つかっていなかったのは不自然であるということとだ。仮にプリキュアの特異能力の加護があるという事なら話は別であるかもしれないがそれにしても過去にプリキュアであった自分達がコレだけ探しても見つけないのはおかしい

傑「成程・・・確かにゆりの推測が正しいのなら怪しすぎるな。」

琢磨「でもゴルザとかは出てきてるじゃないか？戦士だったいるかもしれないじゃんか！！！」

いつき「確かに。もしかしたら何かあるのかもしれない」

えりか「何かって？」

傑「そこまでは分からない・・・でも今は探してみるしかないな・・・」

6人は歩いていきながらも探索を再開しようとするのだが大人とつぼみがいる橋の下の所に行くと・・・

傑「ああっ!!！」

えりか・琢磨・いつき・ゆり・夕「「「「!!?!?」「」「」」」」  
えりか「大人さん?・・・それにつぼみ!!!」

大人はピラミッドの方へと向かって走っていった。近くでつぼみの驚く声が響いたがそれに構わず大人はピラミッドに向かって走り出していくのだった。

琢磨「大人お!？」

えりか「ちよ、ちよっと!!!」

夕「馬鹿あ!!!」

つぼみ「大人さん!!!」

つぼみも急いで後を追う他のメンバーも急いで彼の後を追うのだった。

その頃ゴルザとガルラは地底を突き進みメルバは翼で空を飛んでテイガの地へと突き進んでいたのだった

ニュースキヤスター「先程体長50メートル以上の巨大生物が日本列島に上陸し北北東に進んでいます。またこの生物がモンゴルに現れた生物とナスカに出現した生物と同一ではないかと防衛庁は調査しています。また近隣の住人には避難するように呼び掛けています。

「  
3体の怪獣は着々とテイガの地へと向かっていた・・・このままではつぼみ達が巨人たちを蘇らせる前に3体の怪獣たちが日本をめちゃくちゃにしてしまう・・・

その頃つぼみ達は・・・もとい大人はピラミッドの前まで来ていた・・・

つぼみ「はあ、はあ、はあ・・・やっと追いついた・・・」

えりか「おーい!!!」

つぼみ「ああ!!!えりか!!!それに皆さんも!!!」

琢磨「大人は?」

つぼみ「あそこです！！！」

ゆり「大人！！戻りなさい何かがあるか分からないわ！！」

傑「大人おー！！！！」

だが大人はつぼみ達の説得には耳を傾けずにピラミッドを眺めていた・・・そして近づくと手がピラミッドのなかに入った・・・彼はその後なんの躊躇もなくピラミッドのなかに消えてしまったのだった・・・つぼみ達も急いでピラミッドの方に走る。近づくと凄い光を放つていて眩しい・・・試しにつぼみが手を伸ばすを手が中には言った・・・

つぼみ「す、凄いですう！！！！」

いつき「中は空洞みたいだね・・・入ってみよう！！！！」

えりか「うん・・・」

7人は恐る恐る入っていく・・・ピラミッドの中は真っ白で眩しく目をあけるのに少し慣れが必要な位であった・・・

つぼみ「大人さん？・・・」

つぼみは大人に呼び掛けるのだが反応がない・・・大人は上を見ていた・・・それにつられて上を見てみるとそこには3体の巨人の石像があつた。キュアアンジェの予言どおり石像は存在したのだつた・・・大人は巨人の石像に近づき真中の石像の足先に触れた・・・いまだに信じられなかったがコレは紛れもない現実である・・・あとはこの戦士を蘇らせる事が出来れば・・・問題はそこだけであつた・・・

その頃薫子は花咲家のテレビで怪獣たちの様子を伺っていたのだがどうやら後少しでゴルザ、メルバ、ガルラはティガの地にたどりつくところまで着て来たのだつた・・・

薫子「大変！！早くしないと・・・」

薫子は何とかしてキュアアンジェの立体映像から戦士を蘇らせる方

法を解き明かそうとしていたのだが中々進展しないのだつた・・・

つぼみ「あ、おばあちゃんから？・・・もしもし・・・えええ！！

！あの怪物たちがこっちに向かってるんですか！？」

大人「何っ！？」

薫子「急いで戻ってきて・・・自衛隊の殲滅部達がそっちに向かっているそうよ！！！」

つぼみ「分かりました！！！」

琢磨「でも折角みつけたのに・・・」

ゆり「やむを得ないわね・・・此処は撤退しましょう！！ゴルザ達がそこまで来ているそうよ」

大人「待ってくれ！！巨人は？・・・巨人を蘇らせる方法は？」

つぼみ「おばあちゃんが頑張ってくれてるそうですけど・・・どうしても進展がないそうです・・・」

つぼみは大人に残念そうにそう言うのだった・・・大人はため息を吐いて巨人を見上げる・・・折角此処まで来たのに・・・ダメなのか・・・？・・・なんだ脳裏に何かか語りかけてくる・・・止めるお！！止めるお！！！！

大人「あああああああーっ！！！！！！！！！！」

タ「大人お！！待ってよお！！！！」

傑「オイ！！！！」

大人は突然大声を上げながらその場から走り去ってしまった・・・折角みつけたのに蘇らせる方法がないのならどうしようもないそんな絶望の中つぼみ達も大人を追いかけるのだった・・・

そしてしばらくするとゴルザが最初にピラミッドの前に到着するのだった・・・

琢磨「近くで見るとおぞましいな・・・」

ゴルザ「グルルルウ！！！！」

ゴルザは低いうなり声を上げると額のツノから光線を放っていきピラミッドに当てていく。するとピラミッドはみるみる砂が崩れる様に溶けていき石像が露わにされたのだったそしてそのそれに合わせるかに様にガルラとメルバも到着するのだった・・・そして3体

が石像を破壊しようと近づいたその時・・・

大人「やめろおおおおお!!!!!!!!!」

大人は瞬速で自身が封印していた能力仮面ライダーカブトの力を解放するために瞬時にカブトゼクターを呼び出してそれをライダーベルトに収めていくとヒイロカネと呼ばれる鎧に包まれた仮面戦士仮面ライダーカブトに変身していく。次にカブトゼクターのツノを反対側に倒して鎧を拡散させる・・・カブトはシャープなスタイルであるライダーフォームへと変身する。そして最大の能力であるクロックアップと呼ばれる光速移動能力を發動してゴルザとガルラにパンチを見舞わせて更にはメルバにカブトクナイガンで射撃していく・・・

琢磨「あのバカあ!!!変身!!!」

傑「無茶しやがって!!!変身!!!」

夕「ホントにもお!!!・・・変身!!!」

琢磨達も急いで自分達の変身アイテムを召喚する。琢磨は青のクワガタ型のゼクターのガタツクゼクターを傑は黒いカブトムシ型のダークカブトゼクターを、夕は白銀の蝶型のゼクターのバタフライゼクターを手に取っていくと琢磨と傑は大人と同じくライダーベルトに、夕は首に付けているブローチ型のアイテムライダーブローチにバタフライゼクターをセットしていくと3人はヒイロカネの鎧に包まれていき琢磨は仮面ライダーガタツク、傑は仮面ライダーダークカブト、夕は仮面ライダーフェアリーにそれぞれ変身して大人のサポートに回る。

つぼみ「私達も変身しましょう!」

えりか「いつき・ゆり「うん!!!!」」

シプレ・コフレポプリ「プリキュアの種いくですう~~~~!!!」

つぼみ・えりか「いつき・ゆり「プリキュア・オーブンマイハート!!!!!!」」

つぼみ達4人は光り輝くワンピースのような姿になりピンク、青、黄色、藍色のそれぞれのプリキュアの種を妖精達に召喚させると変



カブト「こうなれば・・・ハイパーキャストオフ!!!」

電子音「HYPER CAST OFF!!! CHANGE HYPER EETLE!!!」

ハイパーカブト「うおおおおおおおっ!!!!!!」  
カブトはハイパーゼクターを使ってハイパーフォームに変身するとそのままパーフェクトゼクターを構えて一気にゴルザを一刀両断してやろうと振り翳すのだが・・・

ゴルザ「グオオオオ!!!ガアアアアアアアツ!!!!!!」  
ハイパーカブト「なっ!!!?・・・うわあああああああ  
あっ!!!!!!」

ブロッサム「カブトおおおっ!!!!!!」

カブトはゴルザの額からのビームを直接受けてしまい爆発と共に森の奥へと飛ばされてしまった・・・

ブロッサム「許しません・・・私、私・・・堪忍袋の緒が切れました  
ああ!!!」

ブロッサムはゴルザにフルパワーラッシュを行っていくのだがゴルザの硬い皮膚には自分のパンチやキックは全然歯がたたなかつた・・・

サンシャイン「はあああっ!!!!!!」

ダークカブト「うおおおおおっ!!!!!!」

ガルラ「!?!?ガアアアツ!!!!!!」

サンシャイン「サンフラワーイージス!!!!!!」

ガルラとサンシャイン・ダークカブトペアの戦いも激しさを増していた・・・ガルラの火の球をサンシャインが石像に当たらないように石像にバリアを張りながら更にサンフラワーイージスを発動させると言う瞬速の技サバキを見せるのだがガルラは火炎弾を連続で乱射してきた・・・このままでは砕けてしまう・・・

ダークカブト「いい加減にしろお!!!!クナイガン・アックスモード!!!!!!」





!!!!

ガタツク「うわああああああああああっ!!!!!!!」

マリク「ガタツクうううううう!!!!!!!」

ガタツクはそのまま森へと落ちていくと姿が見えなくなってしまふ  
・ムーンライト、マリク、フェアリーの3人は怒りを隠せなかつた  
・特にマリクは

マリク「アンタ・・・よくもガタツクを!!!!!!絶対に許さない!!!海より広いアタシの心も此処らが我慢の限界よ!!!!」

マリクは決め台詞を言うとそのままメルバに突進していく!!!!!!絶対にガタツクの仇はこの手で取ると誓うかのように

大人「(ぐうう・・・身体が動かない・・・俺・・・此処で死ぬのか?・・・こんな所で・・・)」

《ヒ・・・口・・・ト・・・》

大人「(誰だ?俺を呼んでるのは)」

《テ・・・イ・・・ガ》

大人「(テイガ?・・・それは地名じゃ?)」

《チカラガホシイカ?》

大人「(力だつて・・・ほしいさ・・・今よりもっと強い力がない!)」

《ナラバワガナヲサケベ》

大人「(お前の名前を?)」

《サスレバチカラガテニハイル》

大人「(分かったよ・・・叫べばいいのだから?・・・お前の名前を・・・お前の名前は・・・テイガ!!!!!!!)」

大人はその瞬間白い光に包まれていった。正体不明の光となつて

傑「がああつ!!!!??傷が深い・・・流石にお手上げか・・・」

《アキラメルナ》

傑「え？」

《ワレガお前にチカラヲカソウ・・・》

傑「力だつて？」

《オマエガタダシクツカエバセカイモスクエル》

傑「・・・いいぜ!!! どうせこのまま死んでしまう・・・だったらお前の力を俺にくれえ!!!」

《イイダロウ：ワガナヲサケベ・・・サスレバワレノチカラガテニハイル》

傑「お前の名前?・・・」

《ソウワガナハ》

傑「お前の名前は・・・デユナミス!!!!!!」

傑は声の主の名を叫んだ瞬間に青い光に包まれていった・・・

琢磨「このまま・・・俺は消えるのか?・・・」

《キエテクナイカ?》

琢磨「!?!?・・・誰だ!?!」

《トイニコタエヨ・・・キエタクナイカ?》

琢磨「当り前だ!!!俺にはまだやりたい事が沢山あるんだ!!!!!!今消えるわけにはいかない・・・」

《ソノココロイキ・・・キニイッタ・・・ワレノナヲサケベ・・・サスレバオマエハキエルコトハナイ・・・》

琢磨「お前の名前?・・・お前の名前は・・・」

《ワガナハ・・・》

琢磨「アース!!!!!!」

琢磨は赤い光に包まれていった・・・

ブロッサム「プリキュア・ピンクフォルテウェイブ!!!!!!」

マリリン「プリキュア・ブルーフォルテウェイブ!!!!!!」

サンシャイン「プリキュア・ゴールドフォルテバースト!!!!!!」

ムーンライト「プリキュア・シルバーフォルテウェイブ!!!」  
フェアリー「ライダーバースト!!!」

5人の渾身の必殺技が炸裂していきあたりに爆炎が漂っていくのだがゴルザ達は無傷でありダメージの一つすらないように思った・・・  
ブロッサム「そんな・・・」

マリ「アタシ達の攻撃が効かない？」

サンシャイン「どうすれば!!!」

ムーンライト「くっ!!!」

フェアリー「このままじゃ石像が!!!」

ゴルザ「ガアアアアアアッ!!!」

メルバ「キシヤアアアアア!!!」

ガルラ「グウウウウウウウウウウウ!!!」

5人「うわあああああああ!!!」

ゴルザ達は今度は自分達の番だとばかりにビームと火炎弾をブロッサム達に見舞わせていくとブロッサム達はふっ飛ばされて変身が強制解除されてしまった・・・そしてサンシャインが張っていたシールドが粉々に砕かれてゴルザ達は3体の石像に手を添えていき石像は倒されてしまう。まだ破壊はされていないが完全に絶望的な状況だった・・・そしてゴルザは真中の石像をメルバは右の石像をそしてガルラは左の石像にそれぞれ近づいていった・・・

つぼみ「あああっ・・・だめええええええええええええええええっ!!!  
!!!!!!!」

つぼみの悲痛な叫びが森に響き渡る。その瞬間に白、赤、青の光が石像の額に吸収されていった・・・ゴルザ達は一瞬何だあたりを見回したがなにもなかった・・・改めて石像の方に向き直りそのまま踏みつぶそうと足が下ろされていく・・・だがなんとそれに合わせて石像の腕が動きゴルザ達の足を受け止めた・・・

ゴルザ達は首をかしげる・・・そしてよく見ると石像の胸のランプの部分が青く輝いていた・・・  
大人・琢磨・傑が融合した石像達「「「チャアアアアアッ!!!」」」

「」

そして次の瞬間巨人が石像ではなくなり動き出した！！！！ゴルザ達は脚を上げられてバランスを崩して倒れてしまう……

つぼみ「巨人です！！！！巨人が蘇りました！！！！」

いつき「でも何で？」

つぼみは興奮した様子でそう言う……いつきは理由が分からずに混乱してしまうのだったが頼もしいと言わんばかりの目で3人の巨人の見ていくのだった。

石像が破壊される危機一発の瞬間大人・琢磨・傑は光となって巨人と融合した。巨人は3人の生命を得る頃で長き眠りから目覚めたのであった！！！！

## 第1話「蘇る巨人」(後書き)

今回は石像が蘇る所までです。さて次回はティガ及びオリジナルウルトラマンの能力を紹介します。

次回は期末テストがあるのでしばらくお休みします。

次回もお楽しみに

## 第2話「3人の名前」(前書き)

前回までのあらずし

ティガの地へと向かった大人達は光のピラミッドの中にいた3体の巨人の石像を発見する。時同じくしてゴルザ、メルバ、ガルラの3怪獣も日本に上陸してきたのだった。

一行はライダーとプリキュアに変身して石像を守ろうとするが大人、琢磨、傑はゴルザ達の攻撃を受けて瀕死の重傷を負う・・・プロツサム達は彼らの為に必死になった戦うが変身を強制解除されてしまい絶体絶命に陥るが3つの光が石像に転移し巨人は蘇ったのだった!!!!!!

## 第2話「3人の名前」

赤と紫の巨人「チャア！！！」

赤い巨人「ジュウ！！！」

青い巨人「シュウ！！！」

ゴルザ「ガアアアオオオオーーーーッ！！！」

メルバ「キシヤアアアアアアアーーーーッ！！！」

ガルラ「グアアアオオオオオウウッ！！！！！」

3人の巨人は右腕を天に突き出して左手を顔の隣に置くという独自の構えを行って起き上がると構えを取って3体の怪獣に近づいていく。そしてゴルザは赤と紫のに体色に銀色のラインと金色と銀色のプロテクターを胸につけている巨人にガルラは赤と銀色の体色をした巨人にメルバは青と銀色の体色をした巨人に向かっていく。3人の巨人もそれに合わせてそれぞれの相手に向かっていく。

ゴルザ「ガアアアッ！！！！グオオオオオオッ！！！」

赤と紫の巨人「チャアアッ！！！！ハアアッ！！！」

赤と紫の体色の巨人は細身の体格ではあるがスピードと力のバランスは取れているような印象だ。彼はすぐにゴルザの首にチョップを二発打ち更に掴みかかってひざ蹴りそしてそのまま首を掴んでヘッドロックを仕掛けるといふ技サバキでゴルザを攻めていく。だがゴルザはそれを持ち前の腕力を使い力任せにヘッドロックを解くと離れていきビームを打とうとツノにエネルギーを溜めていく。しかし巨人がそれをさせまいとゴルザの顔に掴みかかり組み合うが力ではゴルザが勝っていて巨人が振り回されることとなった。

ゴルザ「グオオオオオオアアア！！！！グルルルル」

赤と紫の巨人「グウウウ！！！！？・・・ジュウアア！！！！？」

とうとう巨人はゴルザに力負けしてゴルザの拳を受けてふっ飛ばされる。更にゴルザは追撃のビームを放つが巨人は側転をして身軽な



動きで避ける・・・だがゴルザは彼が体勢を立て直す前に体当たりで彼を思いつき吹き飛ばしたのだった。ゴルザは《どうだ？このやるー》とでも言わんばかりに彼に向って咆哮をあげる・・・彼はゴルザの動きを観察するように一度見つめると

赤と紫の巨人「ンンンンーーーーッ！！！！・・・ジュワアアッ！！」

彼の額が赤く光った。次に両腕を額のクロスさせるように添えて両腕を振り下ろすと色が赤と紫から赤一色に代わった。すると見かけもがっちりとした筋肉質になり華奢だった身体は瞬時にパワーファイターへと変化したのだった。

ゴルザ「ガアアアッ！！」

ゴルザは《それがどうした！！！！》と言う様にビームを放つが巨人はそれを片手でガードする。よく見ると半円銃の光の壁が彼を守っていた。

赤一色となった巨人「ハッ！！！！」

ゴルザ「グガアアアアアアアア！！！！」

ならば接近戦で勝負だとゴルザは巨人に近づくがそれと同時に肘を突き出してゴルザのボディに命中させるそして更にゴルザに自分の腕を背中に回して逃げられなくするとゴルザの背中で組んだ腕に力を込める

ゴルザ「ギギガアアアアアアア！！！！！！！！！！？？？？？」

赤一色となった巨人「ウウウンン！！！！・・・チャアアアアアアアアーーーーッ！！！！！！！！」

ゴルザは背中に激痛が走り堪らず彼から離れるが彼は逃がさずにゴルザの上半身を掴むとそのまま頭から地面に叩きつけてやる。

赤い巨人「デユワ！！」

赤い巨人は体格はガツチリして見かけはパワーファイターとも言える。向ってきたガルラにパンチを重たい見舞わせて怯ませるとそのまま頭を抱えてバクドロップで投げ飛ばす

ガルラ「ガアアアオオオオ！！！！」

近距離では不利だと察したガルラは赤い巨人に向かって火炎弾を放つ。だが赤い巨人はそれを受け止めるとそれをガルラに跳ね返していきガルラに逆にダメージを与えてやる。

ガルラ「ガアアアアアッ！！！！」

だがガルラもいつまでもやられつ放しではないと長い尻尾で赤い巨人を転ばせると馬乗りになるように上に覆いかぶさりそのまま零距离から火炎弾を放つ。流石に彼もコレには彼もダメージは避けられなかった。

赤い巨人「チュウウワアアア！！？？・・・デヤアアアッ！！！！」

だがダメージを受けながらも何とかガルラの顔にパンチを見舞わせて押し倒すとそのまま尻尾を掴んで投げ飛ばす。

赤い巨人「ハアッ・・・ンンンン！！！！ハアアッ！！！！」

そして彼は一度手を胸の前でクロスさせると・・・腕に炎が宿る。

彼はどうやら炎を使いの戦士の様である。

ガルラ「ガルルウウウウウウ！！！！ガアアアアアアアッ！！！！」

！！！！

ガルラは怒りに任せて赤い巨人に体当たりを放つが赤い巨人は炎が宿ったその上でガルラにパンチを放ち怯んだすきにかかと落としをガルラの頭に放つ。

青い巨人「シュウア！！！！」

メルバ「キシヤアアアア！！！！」

青い巨人の体格は赤と紫の巨人と同じく細身の体であった。メルバと組み合うがメルバの方が腕力が強い様で青い巨人は押し倒されそうになるが身体を青く発光させてメルバをふっ飛ばす。更に彼は腕に青い光を集めるとメルバに放つ。

メルバ「ギシヤアアアアウウ！！！！」

メルバは不利と判断して空に飛び立ち青い巨人を翻弄しようとするが青い巨人もすぐに空へと飛びメルバを追う

一方ゴルザと戦ってきた巨人はゴルザを格闘戦で圧倒してトドメを放とうと近づくのだったが空に飛んでいたメルバが彼に向かってビームを放つ・・・

赤一色になつた巨人「グアアアアツ!!!?」

するとその隙にゴルザは地面に穴を掘り逃げようとしていた巨人は追いかけてようと近づくがメルバがさせまいとまたビームを放つ。そしてしばらくすると胸の青いランプが赤く光って点滅を始めたのだ  
ランプ音「ピコン、ピコン、ピコン」

赤一色となつた巨人「!!!・・・ジユツ!!!」

メルバは青い巨人の追撃を避けながらも今度は赤い巨人にも攻撃を放っていく。

赤い巨人「ジユワア!!!・・・グウツ!?!・・・ハアアツ!!!」

赤い巨人は紅い光弾をメルバに放つがメルバはそれを避けて空を飛びまわる・・・するとその隙にガルラにも逃げられてしまうのだ  
た・・・

赤い巨人「ヂユウ!!!!!!・・・!!!」

ランプ音「ピコン、ピコン、ピコン」

そして今度は赤い巨人の胸のランプが点滅を始めていく・・・二人とも何やら焦っているようにも見えてる・・・そんな彼らにメルバは一匹となつたが果敢に向ってくる。すると赤一色となつた巨人の額が今度は青く輝くと・・・

赤一色となつた巨人「ンンンン!!!・・・デヤアア!!!」

今度は赤一色から紫一色となり身体も赤と紫の様にシャープとなった。そして素早く飛びあがると飛び蹴りをメルバに見舞わせてやるとメルバはそのまま地面に落下していった。それと同時に青い巨人も地面に降り立ち3人がメルバに向かって構えを見せる。

メルバ「キシヤアアアアアー!!!!!!!!!」

紫一色の巨人は両腕を水平に広げて光を集めていくと腕をそのまま上に上げて素早く左手を腰に当てその上に右手を添えると言つ手裏

剣を投げるようなポーズを取るとそのまま右腕を素早くメルバに向けていくと光の矢の様なモノがメルバに放たれる。

赤い巨人は両腕を交差させると赤い光が集まり左腕が上に右手が下になるようなポーズを取りそのままを右腕を縦に左手をその上に横にクロスさせていくと赤い光線がメルバに向けて放たれていく。

青い巨人も腕を前方に交差させるまでは同じだが右手を上左手を下になるようなポーズを取ると青い光が集まる。その後左手を縦に右手をその上に横にクロスさせて青い光線を放っていく。

紫一色となった巨人「ウーーン！！！！チャアアツ！！！！」

赤い巨人「ウーーン！！！！ジュツワアアアツ！！！！」

青い巨人「ハッ！！！！ハアアアアアアツ！！！！」

メルバ「！！？・・・ギシャアアアツ！！！！？？」

3人の巨人の攻撃を受けるとメルバはまるでガラス細工が壊されるように粉々に砕け散った。そして巨人たちはポーズを崩すと同時にランプの音と点滅も早くなっていき3人は空を見上げる。

3巨人「チュワアアア！！！！」

ものすごいスピードで空に飛び立つ3人。そしてそのまま何処かへと消えていったのだった。

つぼみ・えりか・いつき・ゆり・タ「……………」

「」

つぼみ達はその光景を呆然と眺めていた。彼らの力はプリキュアを超えていて凄まじいものだ。キュアアンジェが彼らを蘇らせると言ったのも、彼ら巨人の石像を簡単にみつけれないようにしたのも納得ができた。だがつぼみ達は喜ぶ気にはなれなかったのだ・・・何故ならカブト達がゴルザ達に殺されたのだから・・・

つぼみ「カブト……………」

えりか「仇は取れたけど…………3人は…………」

いつき「くっ！！」

ゆり「……………」

夕「……!! 皆何か聞こえない? ……ほらあ!!!」

つぼみ・えりか・いつき・ゆり「「「「!!!」」」」

夕の言葉に全員が耳を澄ませてみた・・すると自分達を呼び掛けて  
いる声だ・・この声に全員が振り返るとそこには走って来る影が  
あった。その正体につぼみ達は歓喜余って涙が出てきた。

大人・琢磨・傑「「「おーーーーーい!!!」」」」

その正体は大人、琢磨、傑であった。なんと3人は生きていたのだ。  
つぼみ達は急いで彼らの元に走っていく。

つぼみ「《おーーーーい》じゃありませんよ!!! 心配させてホントに  
もう!!!」

えりか「ばか! ばか!!! ばかあ!!! アタシ達の涙を返せえ!!!  
!」

いつき「でもよかった無事で」

夕「バカ3人組!!!」

つぼみと夕は大人を叩いていきえりかは琢磨をポカポカと拳で叩き  
いつきは傑に涙で濡らした顔を見せる。4人はそれだけ大人達を心  
配していたと言う気持ちの表れであった。

大人「つぼみ!!! 夕・・ちよ、痛いつて(汗)」

琢磨「ごめん、ごめん(汗) 悪かったつて!!!」

傑「心配かけてゴメン!!!」

ゆり「ホントに心配したのよ!!! 一体何があったの?」

大人「俺はビームが当たる寸前でクロツクアップしたんだけど・・  
衝撃で飛ばされて。そのまま気絶してるみたいで」

琢磨「俺は森に落ちた時木がクツションになって助かった」

傑「俺も琢磨と同じだよ。木のお陰で助かったんだ」

ゆり「全く運がいいんだから!!! じゃ帰りましょう!!!」

夕「うん!!! この後心配かけた3人にキーキでも奢ってもらおうか?」

つぼみ・えりか「おお!!! いいですねそれ!!!」

大人・琢磨・傑「「「いいわけないだろ!!!」」」」

いつき「何言ってるんですか!!! 3人は働いてないでしょう?」

大人「うっ……確かに(汗)」  
タ「というわけで奢ってもらおうよ？」

大人・琢磨・傑「……いやああー！！！！お金があゝ！！！！」  
「  
8人はそんな風にふざけい合いながら植物園へとバイクで帰還するのだった。

そしてその夜には大人達3人の僅かな現金でケーキパーティーをして盛り上がっていった……全員が解散してそれぞれの家に帰る。

誰もいない植物園の一室にハートキャッチミラージュがあった。何か音が聞こえる……しばらくすると輝きを放っていきキュアアンジェの立体映像ホログラムが現れた。

キュアアンジェ「巨人を蘇らせる方法はただ一つ。ヒロト、タクマ、スグルの3人が光となる事です。その巨人たちの名は……ウルトラマンティガ、ウルトラマンアース、ウルトラマンデユナミス」

同じころそれぞれ自分の家に帰宅していた大人、琢磨、傑の3人はその声が聞こえていた。

大人「ウルトラマン……ティガ？」

大人はそう繰り返した……自分が選ばれた？だから助かったのか……！?……胸に何か入ってる？

大人はそう思っただけでジャケットの胸ポケットを見てみるとそこには夢で出てきたIの字アイテム《スパークレンズ》が出てきた……赤と紫の巨人のプロテクターと同じ金色のレリーフが入ったソレを大人はただ見つめていた……

琢磨「ウルトラマン……アース？」

あの声の主の名前……じゃあ俺を助けたのもそいつか？……！?……何か入ってる？

琢磨も同じころ何処からか聞こえた声に困惑していた……あの時

俺は重傷を負ったのに何もなっていなかったかのように身体がピンピンしている・・・そして上着を見てみるとそこには紅い変身アイテム《アーススパークレンス》が入っていた・・・真中のクリスタルの様なモノが赤く光り火を宿しているかのようなのだ

傑「ウルトラマン・・・デユナミス・・・」

俺が助かったのはそのせいか・・・あの時の声もそいつの声・・・！？・・・何だ？

傑も3人と全く同じころに聞こえた声に自分が助かった理由が理解できた気がした・・・そして不意に上着を見てみるとそこには蒼い変身アイテムの《デユナミススパークレンス》が出てきた・・・青いクリスタルのようなそれは水のように透き通っていた・・・

3人はそれぞれに与えられた力がどんなものかまだ分からなかった。

そしてこの時真の敵が動き出していた事も・・・3人の超人と新しい敵との戦いはまだ始まったばかりである。光の戦士プリキュアと超人はこれから起こる異変をどう乗り切るのか・・・それはまた次の話で語られることとなるだろう・・・

## 第2話「3人の名前」（後書き）

ゴルザとガルラを逃がした理由は後々分かります。メルバには原作どつりにやられて頂きました。

さて次回は大人達に託された秘密を語ろうと思います。

次回もお楽しみに



### 第3話「受け継がれる力」(前書き)

前回までのあらすじ

3つの光と共に巨人たちは蘇りゴルザとガルラは逃がしてしまおうがメルバは見事に撃退した。そして巨人の力は大人、琢磨、傑の3人に光は受け継がれたのだった。その名はティガ、アース、デュナミス。

### 第3話「受け継がれる力」

日曜日の昼下がりに大人達は植物園に集まっていた。というのも先日現れたゴルザ達の事や蘇った巨人の事を整理するためだった。巨人たちは何故蘇ったのかそれが今回の一番の議題だった。全員の推測を並べても答えが中々出ないのだった。シプレ達はそんな彼女達をしり目にキュアフルミックスで食事を取っていた。

シプレ・コフレ・ポプリ「……チューチューチュー」  
コツペ「……」

ゆり「分からないわね。どうして巨人は蘇ったのか」

つぼみ「光が3本巨人たちに宿ったのが見えたんですがね。あの光は一体何だったんでしょう？」

いつき「分からない。キュアアンジェのメッセージも巨人を蘇らせる方法の所で途切れていたし。」

えりか「でも何であんな事したんだろ？蘇らせる方法が分からないとアタシ達の力にならないじゃん？蘇らせるって言ってるのにさあ」

タ「それは巨人の力を悪用させない為じゃないかな？実際にあの巨人たちのパワーは凄まじいものだったし。砂漠の使徒とかに悪用される事を恐れた故の措置かもしれない。」

ゆり「いずれにしてもあの巨人たちが私達の味方であると言う事はゴルザ達を退けてメルバを撃退してくれた事から証明されたわ。」

大人・琢磨・傑「……」

つぼみ「どうしたんですか？3人とも」

大人「え？……あ、ああ何でもないよ」

琢磨「ああ。別に何でも」

傑「……うん」

えりか「あゝそうか3人は森に飛ばされちゃったから実感わかないんですね？だったらいいのがありますよお！！」

つぼみ「巨人たちの容姿が分かるVTRを作ったんです。専用の部屋があるのでそこに行きましょう」

大人・琢磨・傑「……!?」

するとつぼみは何やら大人達を植物園のゲストに花の資料を見せるときに使う視聴覚室のような部屋へと案内する。どうやらこっそりと携帯電話のカメラ機能で巨人たちが戦っていた映像をしつかりと録画していたようだ。そしてそれを上手くDVDに焼いて大人達にも見れるようにしてくれたらしい。部屋の機械にDVDを挿入していくと大画面映像が流れ始めたのだ。ある程度巨人たちの戦いの様子を見ていき巨人たちがゴルザとガルラを追い詰めた所でメルバの援護で巨人たちのランプが点滅するところでゆりが映像を止めさせると何やら確信を抱いた口調で自分の推測を語り始めた。

ゆり「胸のランプが赤く点滅し始めてから巨人たちがメルバを倒すまでほんの数秒間……私が思うにあの巨人たちは決められた時間でしか活動できないじゃないかしら？」

大人「何でそう思うんだ？」

琢磨「ああ。言いきれぬ根拠は？」

ゆり「えりか。ランプが点滅し始める所まで戻して。」

えりか「はいはい!!」

ゆりの指示でえりかは映像をランプが点滅する前の所まで戻す。

ゆり「ゴルザとガルラが逃げたのに巨人は追わなかった……いえ追えなかったのよ。だからこそ巨人たちはメルバを倒すことに集中し始めた……あともう一つ気になる事があるわ。えりか紫と赤の巨人が色が変わるところに切り替えて。」

えりか「はい ちよっと待ってくださいね」

ゆりは更に自分の推測を他のメンバーにも分かるようにえりかに指示を出す。そして紫と赤の巨人の色が変化する前の部分の映像を出させる。

ゆり「ゴルザと戦っていた巨人の身体のストライプは最初はレッドとパープルの二色だった……でもストライプがレッド一色になる

と筋肉質の体系になった。いわばこのタイプではパワーファイターのように凄まじい力を発揮できるのよ。」

大人「だったら最初からレッドで戦えばいいのに」

傑「確かに言えてるな。わざわざ敵に有利なる様な事はする必要ない気がする」

大人と傑はそう言うていくがゆりはその二人の質問に答える様な顔になるとえりかの方を向く。

ゆり「私も最初はそう思ったわ。えりか次はパープル一色に変わる場面を出して。」

えりか「ほい」

今度は赤一色になった巨人が紫一色になった映像を見せる。そしてまた自分の推測をゆりは続けて話していく。

ゆり「パープル一色になった時は動作が機敏なるみたいなの。つまりレッド一色だとパワーが高くなった分スピードが遅くなっていると考えられるわ。そしてその反対にパープル一色の場合はスピードが格段に速くなるけどその分パワーが落ちるという理屈が成り立つ。つまり敵に与えるダメージが大きいのはレッドの方なのよ。でもメルバの様な身軽な怪獣はパープルでも倒せる」

大人「そうか敵の特徴に合わせてあの巨人は自分の身体をコントロールする事が出来るんだ!!!」

大人は納得が出来た。あの時の記憶はあまりなく覚えていた部分も薄っすらとしか記憶にないのだ。だがゆりの仮説を聞いて納得できた。自分が持つ力の事を。複雑な心境ではあったがどういう形にする力を理解する事はたいせつであるからだ。

ゆり「ええ。えりか次は赤の巨人と青の巨人の映像を。」

えりか「はあ」

今度は赤の巨人と青の巨人の解説を始めるゆり。琢磨と傑はその映像に釘付けとなっていた。

琢磨・傑「.....」

ゆり「さっきの赤と紫の巨人で例えるなら赤い巨人はパワーファイ

ターで青い巨人はスピードファイター。赤と紫の巨人のように力を  
使い分けるよ言う事は出来ないみたい。」

琢磨「へえ〜。あ、赤い巨人は炎を使ってる」

傑「青い巨人は・・・光線を出した。」

ゆり「ええ、青い巨人も赤い巨人のように自然的な何かの特殊な力  
があるのかもしれないけど今の所は分からないわ。じゃ話を戻し  
て何で巨人が蘇ったのかだけだ」

ゆりはハートキャッチミラーージュにあの銀色の種をセットするとキ  
ュアアンジエの映像を出す。

キュアアンジエ「後世のプリキュア達よ！！巨人を蘇らせて再び協  
力してゴルザ、メルバ、ガルラを倒すのです！！・・・」

ゆり「薫子さんがあの後も何度も試しているみたいなんだけど相変  
わらずノイズの部分は修正できないみたいなのよ」

キュアアンジエ「巨人を蘇らせる方法はただ一つ・・・ヒロト、タ  
クマ、スグルの3人が光となる事です」

大人・琢磨・傑「・・・！！！！！！」

つぼみ「やっぱり肝心な所は聞き取れませんか」

えりか「うん。これじゃメッセージの意味がないよねえ」

いつき「確かに。」

ゆり「本当ね。でもタの言ってる事にも一理あるから一丸には悪い  
とは言えないけど」

タ「結果的に巨人は蘇ったしね」

い、今確かに聞こえた・・・自分達が光になる事が蘇らせる方法だ  
と・・・だがつぼみ達には聞こえていないらしい。どういう事な  
んだ？俺達は気でも狂ったのか！？そんな事をさえも頭によぎる3  
人はキュアアンジエの立体映像ホログラムを見つめていく。すると彼女の立体  
映像グラムは同じ事を繰り返ししていく。今度は3人に語りかける様に。

キュアアンジエ「巨人を蘇らせる方法はただ一つ・・・ヒロト、タ  
クマ、スグルの3人が光となる事です」

大人・琢磨・傑「・・・光と・・・なること・・・」

つぼみ達はスッキリしない顔になりながらそう言うが大人達は逆に困惑した顔をしながら思わずキュアアンジェのセリフを口走ってしまった。するとえりかが問いかける様に大人達の方を向く。

えりか「ナルト？」

大人「え!？」

琢磨「あ、いや・・・」

つぼみ「あ、そう言えばそろそろお昼ですね〜ラーメン食べたいんですか？」

傑「あ・・・うん。」

えりか「だつたらちよつと待っていてくださいね〜私達がつできてますから」

大人「え?・・・あ、でも作るって言うても」

いつき「実はボクの家には自家製のラーメンの麺があるんですよ。丁度良かった。すぐに持って来ますよ!!」

つぼみ「なら私は材料を買いにスーパーに行きましょうか!!」

えりか「あ、ならアタシはつぼみと一緒に行くよ」

ゆり「なら私はお椀とかを持ってくるわ」

タ「ゆりのだけじゃ足りないからアタシも家からもってくるよ。大人達は留守番してて。すぐに支度を済ませて料理するから」

大人「え、ああ〜じゃあお願いするよ」

何やら色々誤解が生じて残されたのは大人、琢磨、傑の3人だけとなつてしまった。大人達はすぐに立体映像ホログラムの方を向くと。ホログラムが喋り出した。

キュアアンジェ「ヒロト、タクマ、スグル・・・またの名をウルトラマンティガ、ウルトラマンアース、ウルトラマンデユナミス」

大人「貴女は立体映像ホログラムじゃないんですか？」

キュアアンジェ「この姿は立体映像ホログラムよ。でも貴方達に話しかけている私は当時のキュアアンジェの分身。つまり心があるの。だから貴方達と会話出来るのよ」

琢磨「それもプリキュアの力なのか？」

キュアアンジェ「いいえ。プリキュアだけの力ではないわ。こころの大樹の力と光の戦士達の力の結晶」

傑「じゃあ質問を変える。なんで俺に・・・いや俺達に貴女の声が聞こえるんだ？」

キュアアンジェ「貴方達が超人だから」ウルトラマン

大人「！！・・・違う！！俺は・・・俺達は俺達だ。超人なんかじゃない！！！」ウルトラマン

大人はすぐに否定した。俺が・・・超人だって？カブトの次は今度は超人に目覚めたと言うのか？・・・そんな事認めたくない。カブトの力はまだ人間として認められる。プリキュアだってそうだ。だウルトラマンけど超人は別だ・・・次元が違うじゃないか・・・ゴルザ、メルバ、ガルラと力の意味では違いはない。これ以上自分に特殊能力なんていらないと思ったからこそその思いが大人からこぼれたのだ。キュアアンジェは大人に意味有り気な瞳で見つめていく。

キュアアンジェ「貴方達3人の身体にはかつて私と共に戦った光の戦士達の遺伝子が受け継がれているのよ」

大人「何なんだそれは？」

キュアアンジェ「貴方達が持っているスパークレンスこそ貴方達が超人という戦士に選ばれた証」ウルトラマン

大人「琢磨・傑「！！！！！！！！！！」」

3人はすぐに持つてきてきているスパークレンスを取りだした。大人はそれを見るなり手が震えていた・・・そして・・・

大人「こんな物お！！！」

琢磨・傑「！！！！！！！！！！」

大人「大体アンタが砂漠王のデューンを完全に倒せなかったから3年前につぼみが・・・つぼみだけじゃない。ゆりも、えりかも、いきも薫子さんだつて苦しむ事になったんじゃないか！！。自分達の尻拭い彼女達にさせておいて今度は巨人と協力して邪神を倒せだつて？・・・いい加減にしてくれよ？またつぼみ達が傷つくのかよ・・・ふざけるのも大概にしるお！！！！！！」

大人は自分のスパークレンスを勢いよく床に投げ捨てた。そしてキュアアンジェを睨みつけると今の自分の思いをぶちまけるかのよう  
に次々と思つた事を口にする。興奮しているようで口調も普段と比  
べるとかなり荒くなつていた。あの時の戦いは犠牲が多かつた。特  
にネイティブ殲滅作戦の時は自分達にカブトの力をくれた安西の犠  
牲になつた事が一番の傷だつた。その事が今でも彼の心の中に暗い  
モノを生み出しているのだ。それを察したかのように大人を見ると  
静かに口を開いた。

キュアアンジェ「・・・確かに私の力不足で砂漠の使徒を完全に消  
す事は出来ず今度は邪神を倒す事を貴方達に託すしかなかった。」  
大人「アンタはゆりが言うには伝説にして最強のプリキュアなんだ  
ろ？それにあんなの仲間には巨人もいたんだろ？なのにどうしてデ  
ューンもその邪神とかも倒せかつたんだよ！？おかしいよな？あ  
んなに凄い力があるのに・・・何でなんだよ！？」

キュアアンジェ「ウルトラマン超人はプリキュアと違って人類の選択にまでは干  
渉しない。何故なら彼らは光だから。でもヒロト、タクマ、スグル  
の貴方達は別よ。貴方達は光であり人である・・・」

大人「！？」

《光であり人ある》・・・どういう事なんだ？・・・俺が選ばれた  
のは運命だとも言うのか？下らない！！！！そんなの俺は信じない  
！！

大人は言葉がなくなつてしまった。今度は自分達が<sup>ウルトラマン</sup>超人として重大  
な選択を迫られるかもしれない。その時自分は正しい選択が出来る  
のか・・・そんな思いが大人の中をグチャグチャに掻きまわし  
ていった。そんな風に考え込んでいた数秒後につぼみが部屋に入つ  
てきた。それと同時にキュアアンジェの立体映像も消えてしまった。  
つぼみ「お待たせしましたあ！！もうすぐラーメンができますよ！  
！！つて・・・どうしたんですか？3人とも・・・あら何ですかコ  
レは？」

大人「！！・・・あ、つぼみゴメンそれ俺のなんだ。ありがと」



つぼみ「あ、大人さんのですか。もうすぐ支度が出来るので下に降りましょう!!」

琢磨「ああ。分かった」

傑「先に行くぞ? 大人」

大人「!?!? ああ。」

大人はつぼみからスパークレンスを取り返すとソレを見つめていた。  
・コレが俺の超人の証ウルトラマン。信じたくはないが受け入れるしかないのかもしれない。・大人はそう思いながらスパークレンスをし  
まうと琢磨と傑に続き部屋を出るのだった。

とある海底ではキュアアンジェの警告の邪神と呼ばれる者が蠢いた。  
いた。

??? (ボス) 「ゴルザ達による石像の破壊は失敗したか。・・やはり知性が低い怪獣という者どもでは役に立たんし話にならんか」  
闇の中に潜んでいるソレはヒューマノイドタイプのように人型の姿に見えるが人間の様な影ではない。海底に人間がいるわけがないのだから当然である。だが声は低く男の様な声であるのだが機械のように濁らせた声でありはつきりとは分からなかった。良く見ると他にも複数の影があった。

??? A 「ダーク様。今度は私の配下にお任せを。」

ダーク「ほう。キリエル人か? 何か策があるようだな。・・いいだろう今回は貴様に任せる。」

キリエル人「ありがたき幸せ。私の頭脳わたくしで必ずや光の戦士達とプリキュアを葬って御覧にいれましょう」

ダーク「楽しみにしているぞ? キリエル人」

キリエル人「はっ!!!」

その声の主はどうやら《ダーク》と呼ばれるらしい。そしてダークが《キリエル人》と呼んだ者は自分から名乗りを上げる様に声をあげると彼は闇の扉を開いてその場から地上へとワープする。残され

たものは彼の戦いを巨大な水晶玉の様なもので見届ける事にしたのだった。

大人達は昼食を終えるとまた巨人の事を考えてみたが結局のところ考えても仕方がないと判断したため気晴らしに全員で久々にどこかに出かける事にした。

えりか「久しぶりだよね〜8人で何処かに行くなんてさ!!!」

つぼみ「そう言えばそうですね。さて今日はどこに行きましょうか？」

いつき「折角だし町のショッピングモールに行こうよ!!!あそこなら色々あるしさ」

タ「おつ!!!いつきナイスチョイス」

ゆり「荷物持ちもいる事だしね」

大人・琢磨・傑「!!!」

大人「荷物持ちって・・・」

琢磨「俺達の事じゃ・・・」

傑「ないよね？」

つぼみ「えりか・いつき・ゆり・タ」「当然でしょ？」「」

大人・琢磨・傑「」

大人「結局そう言うフラグですかああああ!!!!!!」

「」

大人達の事は無視して今日はいつきの提案でショッピングモールに行くこととなった。此処に最初に来たのはネイティブとの戦いの時でありそれ以来はあまり来ていなかった。このショッピングモールにはオシャレな洋服ショップは勿論ゲームセンターやボーリング、更にはバスケットや卓球などが出来る運動施設や映画館などバラエティに富んだでいているんなものが沢山あるのだが・・・勿論女性達の興味は服などの買い物にしかなかったのだった。

大人「何かデジャブを感じる・・・」

琢磨「ああ・・・何でだろうな？」

傑「それにしても・・・」

大人・琢磨・傑「・・・重い！！！！」

3人は荷物を絶妙なバランスで持ちながらもつぼみ達の面白い物に付き合っていた。そしてひと段落して今度は自分達が楽しみたいと言う提案をつぼみ達が飲んでくれたので大人は料理グッズやレシピ本があるコーナーにつぼみ、夕、ゆりを連れていき琢磨はバイクのハーツがヘルメットがあるコーナーにえりかを傑は外国の様々なものが置いてるコーナーにいつきを連れていくというようにグループに別れていくこととなった。

大人「ほうほう《角煮がとろとろに仕上がります》か。でも高いなあゝ今月は思わぬ出費があつて厳しいからな・・・はあゝ。コレは来月だな」

つぼみ「大人さん料理に興味があつたんですね。意外でしたよ！！」  
夕「そうそう。昔は出来なかつたのに。」

大人「え？・・・そりゃ一人暮らしすれば料理ぐらいね」

ゆり「もしかしたら貴方の師匠の影響かしら？」

大人「バレタか。そのとおり。天道さんの影響だ。」

つぼみ。夕「成程」

大人「さてと。今日はコレだけにしとくか」

つぼみ「あれ・・・今日は本だけですか？」

大人「とあるケーキをバクバク食べる美少女達のお陰で今月ピンチですから？」

つぼみ・夕「うっ！！！！」

大人「冗談だよ。そんな顔するなっ」

夕「冗談って・・・こらあ大人お！！！！」

つぼみ「ヒドイですよあゝ」

ゆり「ふふっ（この子達たらホントに楽しそう。不思議ね私まで楽しくなっちゃう！！）」

えりか「うわあ〜バイクのパーツって色々あるんだね〜」

琢磨「ああ。バイクってのはただの機械じゃない。人の思いが詰まってる・・・そんな気がするんだ」

えりか「ふふっ・・・ふふふっ。ははははっ」

琢磨「な、何だよ？急に」

えりか「い、いやだって琢磨さんには似合わないセリフだなあ〜って思ってる」

琢磨「ノノノ悪かったなあ！！！」

えりか「へへっ」

琢磨「ったく。お前にだけは言われたくないわい！！・・・なんてな〜」

えりか「ねえ琢磨さん！！いつかアタシをバイクに乗せてくださいよ。ガタツクのじゃなくて琢磨さんの思いが詰まったバイクを！！」

琢磨「分かった。じゃあ俺からも頼みがある。」

えりか「何ですか？」

琢磨「えりかがファッションデザイナーになったら俺のバイク用のジャケットを作ってくれ。それでソレを羽織って君を俺のバイクに乗せる。」

えりか「なあ〜んだそんな事か！！。分かりました！！約束ですよ？」

琢磨「ああ。約束だ！！！」

傑「アメリカではこう言うのが文化的に根付いているのか・・・面白い」

いつき「外国のモノって面白いものばかりですね！！！」

傑「うん。考え方や文化が違うだけでいろんなものが違う。世界って不思議だ。だから俺はいろんな世界と関わる仕事がしたい。」

いつき「それが外交官っていう傑さんの夢」

傑「ああ。俺は3年前の戦いが終わってからある事を考えてきたんだ。」



ていた。最初は爆発物の爆発かと思われていたが近くで不気味な笑みを浮かべた男がいた事に大人達はこの段階では気がつかなかったのであった。

### 第3話「受け継がれる力」(後書き)

お待たせしましたぁ!!! 続きです。今回はリクエストにあったキヤラを登場させました。因みにボスキヤラについては決めてありますので皆さん推理してみてください!!!

さて次回はバトルが始まります!!!!!! 敵の宣戦布告に大人達はど  
う戦うのか!?

次回もお楽しみに

#### 第4話「動き出した影」(前書き)

前回までのあらすじ

キュアアンジェいわく大人達にはかつて彼女と共に戦った光の戦士達の遺伝子を受け継いでいるために大人達はウルトラマンの力を手にしたと言う事らしい。

大人は必死に否定するが運命は変えられない・・・  
そして同じころ海に潜む巨大な闇の存在が動き出すのだった。



#### 第4話「動き出した影」

建設中の無人ビルが爆発したとの知らせを受けてある組織が動き出していた。その名は《GUTS》。《GUTS》とは砂漠の使徒の侵略によって地球が砂漠化された事から教訓を得た国連が発展拡大し日本を中心とした地球平和連合という組織の別名《TPC》内部のエキスパートたちが集まりで自然災害、怪奇現象などの様々な分野の解決に努める特殊チームである。知らせを聞きつけたGUTSはエースパイロットのシンジョウ、科学とメカの専門家のホリイが専用戦闘機ガッツウイング一号に乗り込んで現場に向かったのだ。た。

ホリイ「ホンマに綺麗サツパリと蒸発してもうたもんやな」

シンジョウ「感心している場合じゃないぞ。建設中だったからまだ良かったようなものを・・・こんな爆弾が人がいるビルとか近くにあるシヨツピングモールで爆発してみる被害は甚大に・・・」

ホリイ「爆弾ちゃう」

シンジョウ「え？」

ホリイ「爆発物の痕跡ちつともあらへん」

シンジョウ「どういう事だよそれは・・・じゃあ何であのビルは爆発を・・・」

ホリイ「何とも言えへん・・・とにかく調査や」

シンジョウ「そうだな。リーダー応答願います!!」

ムナカタ「此方本部。どうした？シンジョウ」

GUTSの基地ダイブハンガーで状況報告を受けているのはGUTS隊副隊長で通称は《リーダー》のムナカタであった。ムナカタはシンジョウとホリイの報告を受けるとウイングを着陸させて身辺調査を許可するのだった。

ムナカタ「ヤズミ、爆発物でないとすると・・・」

ヤズミ「遠隔的に何らかの力を加えたと考えられます。開発局のチ

ヤネルを希望ヶ丘に集中するように申請してみます。」  
ムナカタ「頼むぞ。・・・しかし一体何があつてあんな爆発が？」

その頃ホリイとシンジヨウはビルの爆発を調査するため現場近くでガッツウイングを着陸させる。それと同じころに大人達は混乱が続くシヨツピングモールの中で何とか全員合流できたのだった。

大人「なんだつたんだ今の爆発は？」

つぼみ「まさかゴルザ達か？」

琢磨「だつたら何で姿を見せないんだ？アイツらだつたらこんなことするとは思えないんだけど」

傑「確かに・・・こんな回りくどい事が出来るとは思えないしな」

いつき「じゃあ一体誰が？」

ゆり「とにかくその場所に行ってみましょう！！何か分かるかもしれないわ」

7人「うん！！！」

大人達はもしかしたらゴルザ達が出てくるかもしれないと思い爆発があつたビルの方へと向かった。大人達がついた事には既にホリイとシンジヨウが周辺区域の閉鎖及び調査にあたっていたのだった。

ホリイ「この先は立ち入り禁止です！！引き返してください・・・

あ！！ゆりちゃんやないか久しぶりやな！！！」

ゆり「えっ！？・・・ホリイさんじゃないですか！！久しぶりですね」

ホリイ「ホンマやなあ〜お父さんが失踪する前にあつたのが最後やからもう8年も前やな・・・立派になつたなあ〜！！」

大人「ゆり誰だいこの人は？」

ゆり「GUTS隊員のホリイさんよ。前にお父さんの研究室を手伝つてくれた人なの」

つぼみ「つまり科学者さんですか？」

えりか「凄い〜」

ホリイ「いやいや、それほどでもないでえ〜」

ゆり「ホリイさん一体何があつたんですか？爆弾か何かでビルが爆発したそうですけど」

ホリイ「爆弾ちゃうんや・・・それ以外はサツパリわからん・・・いま調査しとる最中や。とにかく危ないから帰って。」

シンジヨウ「ホリイ隊員何をしてるんだ？早く調査をして本部に戻るぞー！」

ホリイ「わあとるがな。じゃあまた今度な。此処は危険やから早く帰ってや」

会話している所にシンジヨウが現れて調査をするように促すのだった。ホリイはゆり達に帰るようだけ言つとその場を後にして調査へと戻るのだった。

大人「仕方がない。大人しく引き上げるか・・・」

ゆり「そうね。GUTSが調査してる様じゃ入れないでしょうし」

ホリイにそう言われると大人達は此処にいても仕方ないためしつぶとその場を後にする事になった。

そして植物園に戻ることにしたのだったのだがその途中で青い影が大人達の目の前に通りかかった・・・最初は幻覚かと思っていたのだが・・・

大人「い、今青い影が・・・見えたよね？」

琢磨「た、確かに・・・か、影が・・・」

傑「・・・ゆ、幽霊？」

つぼみ「ま、まさか・・・」

えりか「う、嘘でしょ!？」

いつき「・・・(汗)」

ゆり「私も見えてわ・・・行ってみましょう。」

夕「ちよ、ゆりマジで?」

一同ビビっている中ゆりだけは違ったようで影が走った所まで走って行った。大人達はおっかなびっくりになりながらもゆりに続いていく。するとそこには確かに青い影があり何やら笑っているかのよ

うにも見えた。

大人「な、何だあれは・・・」

つぼみ「ほ、ホントに幽霊!?!」

えりか「あわわわ・・・」

いつき「・・・(滝汗)」

琢磨「ゆ、幽霊が実在した!?!」

傑「バカ・・・そんな事・・・」

タ「じゃ、じゃあアレは何よ?」

ゆり以外の面々はかなり動揺してる中でもつぼみ、えりか、いつきはかなりビクビクとビビっていたのだった・・・

ゆり「皆落ちついて・・・こんな下らない事で私達を惑わすなんてバカらしいわね・・・いるのは分かっているのよ・・・出てきなさい!!!」

7人「!!!?」

大人達はゆりの堂々とした態度にもそうだったが誰かがいるらしい発言に一番驚かされた・・・そしてその言葉に合わせるかのように男が物影から姿を現すのだった。

???「騒がないでください。私は貴方達と話をしに来ただけです大人」話だつて?・・・アンタ一体何者だ?」

???「私は・・・私はキリエル人の預言者です。メッセージを伝えるだけのね。」

つぼみ「キリエル人の?」

えりか「預言者?」

いつき「メッセージ?・・・!?!?・・・まさかあのビルの爆発もキリエル人の仕業なのか!?!」

預言者「はい。ではなぜ私が貴女達の前に現れたのかをお教えしましょう。それは貴女達がプリキュア、そして仮面ライダーである事も私は存じてるからですよ」

8人「!!!?」

預言者「時間がないので手短に・・・それではまずキリエル人に敬

意を称してください。先ず貴方達が」

大人「何？・・・何で俺達が？」

預言者「本当に時間はあまりないですよ？・・・貴方達が今この場で地球人類を代表して敬意を表さないと・・・次は希望ヶ丘市の北区を・・・」

ゆり「止めなさい！！！」

預言者「汚れを焼き払う炎は神聖なもの・・・しかしソレを止める事が出来る貴方たちなら」

つぼみ「ふざけないでください！！！」

えりか「何が神聖な炎よ・・・町を壊してめちゃくちゃにしかできないくせに！！！」

いつき「皆の笑顔を奪うモノが神聖なものなんて絶対に認めない！！！」

預言者「・・・答えは？プリキユアそして仮面ライダー・・・敬意を称します？」

8人「・・・」

預言者「残念だ・・・また無駄な犠牲が出るとは・・・ふん！！」男は大人達に本当に残念そうにそう言うと言葉と預言者の男は光を放つてその場から消えた。全員が呆然としながらもその場に立ち尽くすしかできないかったがその場には奴が技と残したものらしき一枚のカードが落ちていた・・・

大人「・・・一体何だったんだ？・・・！！・・・それよりも早く北区に！！！」

ゆり「待つて大人！！！」

大人「しかし！！！」

つぼみ「今から行っても間に合うかどうか分かりませんよ！！！」

大人「じゃあどうするんだよ！！！」

ゆり「・・・そうだ！！ホリイさんに連絡を試みるわ」

ゆりは急いで携帯電話を取り出すとホリイに連絡を取る・・・



イルマ「これは・・・ヤズミ隊員監視衛星で何処から攻撃があつたか調べて。」

ヤズミ「了解!!!」

GUTS隊体長イルマの指示でヤズミがすぐに動き出す。そしてその頃の大人達は

大人「アイツ・・・本当にやりやがった」

琢磨「くっそお!!!!!!」

傑「くっ・・・」

つぼみ「とにかく生存者の救出に行きましょう!!!」

えりか「やるっしゅ!!!!!!」

いつき・ゆり「うん」

シプレ・コフレポプリ「プリキュアの種いくですう~~~~!!!」

つぼみ・えりか・いつき・ゆり「プリキュア・オープンマイハート!!!!!!」

つぼみ達は生存者の救出に向かう為連れて来ていた妖精達にプリキュアの種を出させるとそれぞれココロパヒューム、シャイニーパヒューム、ココロポットに装填して変身を開始し光に包まれる。

ブロッサム「大地に咲く一輪の花キュアブロッサム!!!!」

マリン「海風に揺れる一輪の花キュアマリン!!!!」

サンシャイン「陽の光浴びる一輪の花キュアサンシャイン!!!!」

ムーンライト「月光に冴える一輪の花キュアムーンライト!!!!」

ブロッサム達は変身が終わると大急ぎで爆発があつた現場に向かう。夕はバタフライゼクターを呼び寄せると変身の準備をしていきながら大人達の方を向く。

夕「3人ともアタシ達もいくよ?変身!!!!」

電子音「HENSIN」

大人・琢磨・傑「変身」

電子音「HENSIN」

大人達も夕に促されて変身していき住民の救助に当たる。だが被害

はかなりの者だったらしく死者及負傷人は多数発見されることとなった。大人、琢磨、傑は自分の無力さにくやしさが溢れ出た・・・そして時間は流れていきその日の夜帰宅した大人は暗い部屋で一人でスパークレンズを眺めてた・・・金色のラインとレリーフが光る超人の証の変身アイテムを

大人「(あの時すぐにウルトラマンになってあの場に向かえばあんなに犠牲者は出なかったんじゃないか?・・・結局俺には何も守れないのか?・・・!?!?・・・そう言えばアイツ消える前にこのカードを投げつけたよな・・・投げつける・・・指紋・・・!!!・・・そうだ!!!)」

大人は何か思いついたように携帯電話を取り出してある人物に電話をかける。その相手とはかつての仲間である彼であった。

大人「もしも須藤さんですか?大至急調べてほしい人の指紋があるんだけど明日いいですか?はい!!!お願いします。」

大人は電話を切った。相手はかつて仮面ライダーザビーの須藤だ。須藤はあの後に警視庁に配属となり今は捜査一課で働いている。そうカードの指紋を須藤に調べてもらい人物を特定しようと言うのだ。大人「何が預言者だ・・・」

翌日、

須藤「調べてほしい事って?」

大人「このカードの指紋を持つ人について何ですが」

須藤「指紋照合か?・・・分かった何か分かり次第すぐに連絡するよ」

大人「お願いします!!!」

須藤「ああ。」

大人は例のカードを須藤に渡して指紋を調べてもらう事にしたのだ。そうすればあの男の正体やキリエル人についても何か分かるかもしれない・・・そう思ったからだ。そして時間が流れて夕がたになつて須藤から連絡があった。



大人「須藤さん何か分かりましたか？」

須藤「・・・君彼指紋を何処で手に入れたんだい？」

大人「え？それは・・・俺達の前に現れたってどうか」

須藤「そんなバカな！！」

大人「！？・・・どういうことですか！？」

須藤「いいかい。よく聞いてくれ。この指紋の人物であるイタハシ・ミツオは3年前に死んでいるだよ」

大人「3年前に死んでいる？」

須藤「ああ。何処で仏さんの指紋を手に入れたかは聞かないけどに気になるのなら住所も教えるから向ってみるいい。」

大人「分かりました。ありがとうございます」

あの男はすでに死んでいた？・・・なら俺達の前に出てきた男は一体何なんだ？・・・そんな疑問が生まれてきくるが今はそれよりもこの事を伝える事が先だと思ひ琢磨達を呼び出す。

琢磨「マジかよ！！」

傑「死んでいる人間が俺達の前に？」

大人「ああ。その男の住所も手に入れた。今日皆で行ってみる」

つぼみ「えりか・タ」「えええええ！！！！？？？」

大人「何驚いてる？」

つぼみ「だ、だってその男の人は死んでるんでしょ？」

えりか「・・・何か抵抗あるっていうか・・・その」

タ「怖い・・・」

大人「そうか・・・じゃあ来なくていい」

つぼみ「え？」

大人「俺はもうあんな被害を出したくない・・・そのためにもキリエルの事を知る必要があつてと思つたから調べただけなんだ・・・。つぼみ達がイヤなら無理して来る必要はない。俺一人だけでも調べに行くつもりだ。」

つぼみ「・・・そう言う事なら私も行きます！！！！」

大人「!？」

えりか「しゃーない。付き合うか」

いつき・ゆり・タ「うん。」

琢磨「カッコつけるなよ。俺達は仲間だろ？」

傑「そうだぜ?・・・リーダー?」

大人「・・・ふつ。じゃあ今夜植物園の前に集合だ。」

同じころGUTS隊隊本では爆発物の原因をリサーチしていた。そしてやっとヤズミが共通点をはじき出したのだった

ヤズミ「間違いない・・・分かったぞ!!!宇宙開発局?監視衛星のチャンネルを至急戻してください!!!地下です!!!」

そうどうやらエネルギー波の様なものが地下から出現して周りの建物を粉碎していたらしいのだ。原因が分かれば対処法はすぐにも準備はできる。GUTSはすぐに対策にとりかかると決まっていた。

大人「このマンションか」

琢磨「此処って希望ヶ丘でも有名な高級マンション街じゃんか」

傑「須藤さんの調べによればイタハシは大手の商社の部長。まあ当然と言えば当然か。」

タ「とにかく行ってみよう。さつと終わらせてさつさと帰りたいからさ」

大人「ああ。」

つぼみ・えりか・いつき「はい。」

ゆり「うん。」

シプレ「いくですう」

コフレ「冒険ですっ」

ポプリ「頑張るでしゅ」

大人達は恐る恐るだがイタハシが住んでいたマンションへと入っていた・・・彼ら達の後ろでその様子を監視していた影があるとは知らずに・・・イタハシが住んでいた部屋の前までついた8人は最

初こそ入るのを躊躇ちゆうじゆしたが思い切つて入つてみた。すると中には何もなく殺風景のままであつた……。本当にコレが人の住んでいた部屋なのか？……。そんな事さえ思ふ様になつた……。しばらくすると妖精達が何かの気配に気がついたらしく声を上げる。それに合わせて全員が振り返る。

大人「アンタがキリエル人？」

大人が問うた瞬間に衝撃波で全員がマンシヨンの壁に磔はりつけにされるように飛ばされてしまった

8人「うわああつ！！！！！」

シプレ・コフレ・ポプリ「ああああ！！！」

つぼみ「ぐうつ！！！？？。どうして私達何ですか？」

つぼみも同じくキリエル人の影に問い始める……。すると突然例の預言者であるイタハシが姿を現わした。

イタハシ「貴女達が神になりかねない力を持っているからですよ」  
琢磨「神？」

えりか「アタシ達が神様になるってどういうことよ！！！」

イタハシ「キリエル人は貴女達の持つチカラが降臨する前からこの地球に来ていたんですそれなのに後から来た者に好き勝手にされては堪らない。」

傑「後から来た？」

いつき「ボク達の力に好き勝手にされるって……。！！！（アレは……）」

ゆり・タ「！！！！（矢車さん、影山さんも！！！！）」

イタハシ「分かりますか？……」

イタハシが大人達に語りかけている後ろでは何と矢車と影山が駆けつけていた。

矢車「大人お！！！」

影山「大丈夫か！！！」

大人「二人とも気を付けてください！！！」

イタハシ「！？」

矢車「喰らえ!!!」

矢車と影山はGUTSの専用武器のGUTSハイパーガンをイタハシに向ける。姿は人間であったため霧吹き上の麻酔モードを発射する。するとイタハシの姿は消えていた。

矢車「大丈夫か？」

大人「ありがとうございます。」

つぼみ「お二人とも何でここが？」

影山「須藤から聞いてな後をつけてたんだ。」

大人「あの人も人が悪い」

影山「民間人が何言ってるんだ。これからは慎んでくれ」

つぼみ「はい。」

イタハシ「最後の預言を語ろう!!!」

傑「最後？」

イタハシ「貴方達が生きて聞く事の出来る《最後》という意味だよ。次に聖なる炎が焼くのはここだ!!!」

矢車「何だと!？」

次のターゲットはこの場所という事らしい。このままでは他の住人にも被害が及ぶ。矢車達は急いでこの事を本部に報告すると警報ベルとアナウンスでマンションの住人達に避難を呼びかけるのだった。イルマ「了解。矢車隊員、影山隊員、民間人の避難を頼みましたよ。」

ムナカタ「巨大なエネルギーを止める!!ヤズミ隊員有効と思われる装備は？」

ヤズミ「分からない・・・しかし地下にまで届かせるには電磁波しか無いです。」

ムナカタ「・・・ホリイ隊員マイクロウェーブをガッツウインゲ一号に搭載」

ホリイ「了解!!!!!!」

ムナカタ「シンジヨウ隊員は1号に搭乗、レイナ隊員は2号機でホ

リイ隊員と共に支援を」

シンジヨウ・レイナ「了解!!!!」

GUTS隊のホリイ、シンジヨウ、レイナの各隊員は迅速に準備を整えると次の爆破現場であるイタハシの住んでいたマンション街へとガッツウイング一号、二号で急行する。

矢車「住民の方にお知らせします至急このビルから避難してください爆発する危険があります!!!!」

影山「君達も早く非難を!!!!」

大人「……いいえ俺達も手伝います!!!!」

影山「何を言うだ!!!。民間人だろ?」

琢磨「お願いします!!!!手伝わしてください!!!!」

矢車「……分かった。影山俺達はこのマンションのA塔に行つて避難誘導をするぞ。大人達はこのB塔を頼む」

8人「はい!!!!!!」

シンジヨウ「ホリイ隊員マイクロウェーブ砲の照準ポイントを指示してくれ」

ホリイ「ちよお待つて今アイツの動きを解析中や」

大人「向こうへ避難してください!!!!向こうへ!!!!」

つぼみ「急いでください!!!!あ、大丈夫!?行って!!!!」

えりか「早く向こうへ!!!!」

大人達は住民の避難を何とかさばいている所だった着々とキリエルのエネルギー波が近づいてきているため大急ぎで住民たちを避難させるのだった

ホリイ「出たでシンジヨウ。目標はポイント206。交差点や!!!!シンジヨウ「了解!!!!」

ホリイ「シンジヨウ、ワンチャンスや。しかも通過するのは0.3

秒

シンジヨウ「よし任せろ!!!」

シンジヨウはウイングで照準ポイントへと向かう。だがまだ住民の避難は3分の2程度しか終わっていないかったのである。

レイナ「矢車隊員、影山隊員。聞こえる？攻撃ポイントはポイント206」

矢車「待つてくれまだ避難が終わってない!!!」

影山「急いで!!!」

レイナ「急いで!!!攻撃はそのワンチャンスしかないの!!!」

シンジヨウ「矢車、影山・・・頼むぜ!!!」

矢車達は大急ぎで住民の非難を行い何とかポイント206付近の住民は避難を完了させたのだった・・・そして急いで大人達にも非難する世に呼び掛ける。

矢車「大人。そっちの首尾は？」

大人「何とか非難は終わらせました。で、俺達は？」

矢車「我々も非難を開始する。君たちもココから急いで住民たちがいる場所に移動するんだ。」

大人「はい!!!」

矢車「避難完了!!!」

シンジヨウ「おっしゃ!!!」

矢車、影山達はマイクロウエーブの影響がない場所まで自分達も移動する。大人達も住民たちがいる場所に行こうとしたのだが大人は何かの影をみつけた。またその頃シンジヨウはウイングでポイント206へと向かうのだった。

大人「あっ!!!」

琢磨「どうしたんだ？」

大人「あそこに子供が!!!」

傑「何っ!？」

大人「俺が急いで連れてくるから琢磨達は先に行け!!!」

琢磨「!!!おい・・・大人お!!!」

大人は琢磨の制止を振り切り子供が残されているマンションの前まで大急ぎで向かうのだがその間にマイクロウェーブの発射が始まるう  
としていいた……

ホリイ「発射5秒前……」

大人「くっ！！！此処からじゃ間に合わない！！！」

ホリイ「4……3……2……1……」

大人「（くっそおおおおお！！！！！！）」

ホリイ「0！！！！！」

大人は走るのだがこの距離では間に合わない……だが見殺しにできないとスパークレンズを取りだしてスイッチを入れて起動させる。すると大人の身体は光に包まれて赤と紫の巨人ウルトラマンティガへと変身するのだった。

つぼみ「あれは！！！」

えりか「あの時の巨人！！！」

いつき「でも何で？……！！！」

琢磨・傑「（大人）」

ティガはギリギリのところまで少女をその巨体な手で優しく包み込んで保護するとつぼみ達がいる所に下ろす。

つぼみ「この子を助けるために？」

ティガ「……」

ティガは頷く。周りにいた矢車達や住民の人々も彼の姿に釘づけになるがそれと同時に聞き覚えのある声。

イタハシ「君を待っていたのだよウルトラマンティガ！！！」

ティガ「！！？（この声は……まさか）」

イタハシ「君はこの星の守護神になるつもりかね！？おこがましいとは思わないか？」

ホリイ「あそこに人がおる……誰や？」

ティガ「……（俺が守護神だって？……何を言ってるんだコイツ）」

イタハシ「君が巨大な姿を現すずっと前からこの星の愚かな生き物

たちはキリエル人の導きを待っていたのだよ!!!君は招かれざるものなのだ。見せてやるうキリエル人の力をキリエル人の怒りの姿を!!!!」

イタハシの周辺から炎が上がるとそこから白と黒の悪魔の様な姿をした巨人の様なものが現れた。

つぼみ「アレがキリエル人の正体・・・」

ゆり「いいえ。多分身体のサイズまでをもあの巨人に合わせて変身したのよ。」

いつき「挑戦するために・・・」

ティガ「ハッ!!!!」

キリエロイド「キリ!!!!」

ティガ「ハッ!!!ジャアア!!!」

キリエロイド「キリイイイ!!!!!!」

ティガ「ハッ!?!?・・・又ワアアアッ!!!!」

ティガとキリエル人のファイティングモードであるキリエロイドの両者が町の中で凄まじい格闘戦を繰り広げていく両者とも譲らない戦いを繰り広げていくが格闘戦ではキリエロイドが有利のようでありがに得意のキックで果敢に攻めていきティガをケリ飛ばしてしまう。

ティガ「ハアアッ!!!!(コイツ強い・・・だけど負けるわけにはいかない!!!!)」

キリエルは巧みなキックと技サバキでティガを圧倒するがティガも負けるものかと応戦していきキリエロイドを投げ飛ばす。それにより流れが変わったのかキリエロイドに反撃のパンチをキックの格闘技を放つ。更に右手から青い光の矢である《ハンドスラッシュ》をキリエロイド放ちダメージを与えていくとキリエロイドは怯んだ。その隙に腕を交差させる。

ティガ「ウーーーーー.....ハアッ!!!!!!」

えりか「色が変わった!?!」



ティガはパープルの迅速の戦士ティガ・スカイタイプへとタイプチェンジを行いスピードで圧倒し抵抗としていく。キリエルもその程度など受け流してくれるとばかりに応戦するがティガ・スカイタイプの猛攻はキリエロイドの想像以上のようにスカイタイプの身軽な技サバキに圧倒されていき投げられてしまう。

キリエロイド「キリイイイ!!!」

ティガ・スカイタイプ「チャアアッ!!!」

キリエロイド「グオオオッ!?!」

ティガ・スカイタイプの身軽な動きでジャンプすると踵落としをキリエロイドの頂頭部に叩きつける

琢磨「よし!!!」

更に回し蹴りチョップ、キックなどでキリエロイドにダメージを与えて更にコレで終わりだとばかりに投げ飛ばす。だがキリエロイドもこれ以上は好きにさせるものかとティガ・スカイタイプに炎で攻撃していく。更にその隙についてティガ・スカイタイプに掴みかかりそのままビルへと投げ飛ばすと追撃の炎を見舞わせていきティガ・スカイタイプに大ダメージを与えていく

ティガ・スカイタイプ「グアアアアア!!!」

ティガ・スカイタイプはまだやれると構えようとするがそれと同時に胸のランプである《カラータイマー》が青から赤に変わる

カラータイマー「ピコンピコンピコン!!!!!!」

ティガ・スカイタイプ「ハッ!!!」

カラータイマーが点滅を始めるとティガ・スカイタイプは焦り始める  
つぼみ「このままじゃ巨人が!!!」

えりか「アイツ・・・調子に乗っちゃって!!!こうなったらアタシ達も援護しよう!!!」

いつき「うん。彼が頑張ってるのにボク達がないもしいわけには  
いかない!!!」

ゆり「皆・・・行くわよ!!!」

つぼみ「えりか・いつき」「はい!!!」「」

シプレ・コフレポプリ「プリキュアの種いくですう〜!!!」  
つぼみ・えりか・いつき・ゆり「プリキュア・オープンマイ  
ハート!!!!!!」

つぼみ達4人は光り輝くワンピースのような姿になりピンク、青、  
黄色、藍色のそれぞれのプリキュアの種を妖精達に召喚させ変身ア  
イテムを取りだす。つぼみとえりかはココロパヒュームをいつきは  
その色違いで黄色のシャイニーパヒュームをゆりはコンパクト型の  
変身アイテムであるココロポットにそれぞれのプリキュアの種をセ  
ットしていく。するとつぼみ、えりか、いつきは香水を身体に噴き  
かけていく事でピンク、青、黄色の光に身体が包まれゆりはココロ  
ポットの生み出した銀色の光のに身を預けると光に包まれて姿が見  
えなくなると夜の町に4色の光が輝きあたりを照らす。

ブロッサム「大地に咲く一輪の花キュアブロッサム!!!」

マリリン「海風に揺れる一輪の花キュアマリン!!!」

サンシャイン「陽の光浴びる一輪の花キュアサンシャイン!!!」

ムーンライト「月光に冴える一輪の花キュアムーンライト!!!」

ブロッサム・マリリン・サンシャイン・ムーンライト「ハート

キャッチプリキュア!!!!!!」

琢磨・傑・タ「変身!!!!!!」

電子音「HENSIN」

琢磨・傑・タ「キャストオフ!!!!!!」

電子音「CAST OFF」

電子音「CHANGE STAG BEETLE」

電子音「CHANGE BEETLE」

電子音「CHANGE BUTTERFLY」

ガタック「戦いを支配せし戦いの神・仮面ライダーガタック!!!」

ダークカブト「闇を司りし黒点の神・仮面ライダーダークカブト!

!!!」

フェアリー「聖なる翼を持せし白銀の神・・・仮面ライダーフェア

リー！！！！」

キリエロイド「キリイキリイ！！！！」

ティガ・スカイタイプ「デウアア！？・・・又ウアアツ・・・」

ティガ・スカイタイプはカラータイマーが鳴り始めるとスタミナが足りなくなってしまったのかキリエロイドに追いつめられる形になる。更に追い打ちのパンチをキツクの猛攻を受けそしてトドメの炎が彼に迫る。だが・・・

サンシャイン「サンフラワー・イージス！！！」

ティガ・スカイタイプ「！！？（コレは・・・はっ！！）」

キリエロイド「キリ！！？」

炎が当たる直前にヒマワリの形をした光の盾がティガ・スカイタイプを守る・・・カラータイマーが鳴り響く中周りを見てみるとそこにはマントを見に纏って空を飛んでいたブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライトが更にビルの上にはガタツク、ダークカブト、フェアリーがいたのだった。

ブロッサム「よく頑張ってくれました。貴方は私達の仲間です・・・だから私達も一緒に戦います！！！」

マリン「最初にあつた時は不思議に思ってたけど今の戦い方を見て分かったよ。貴方はアタシ達と同じだってね。だからアタシ達も全力で貴方をサポートする」

サンシャイン「貴方の太陽の様な心しつかり伝わりましたよ。だから貴方と一緒に戦う！！！」

ムーンライト「光の戦士である貴方の戦いしつかり見させてもらってたわ。貴方の心も私達が守る！！！」

ガタツク・ダークカブト「まけるなあ～！！（大人、頑張れ！！）」

フェアリー「頑張つてえ！！！！アタシ達も貴方の味方だからあ！！！」

ティガ・スカイタイプ「！！！！（皆あ！！！！）」

ティガは何とか立ち上がるうとするが身体に力が入らない・・・  
そんな彼を嘲笑うかのようにキリエロイドが声を上げる

キリエロイド「キリイイイっ！！！！・・・キサマラア！！！！キリエ  
ル人ニサ逆ラウノカアアア！？キリエル人コソ人類ヲ導ク絶対ノ存  
在デアリ神ダト言ウノニイイ！！！！」

ブロッサム「貴方なんか神でも何でもありません！！！！」  
キリエロイド「何イ？！」

マリ「アンタは逃げ遅れた女の子の事を気にもとめなかった」  
サンシャイン「でも彼は女の子を救うために現れて貴方から人々を  
守るために戦っている！！」

ムーンライト「本当の神は人々の命を悪戯に奪ったりはしないわ！  
！！貴方はただ神になりたいだけの化け物よ！！！！」

ガタツク「そのとおりだ・・・お前は神なんかじゃない！！！！」  
ダークカブト「我儘な子供と何も変わらないんだよ！！！！」

フェアリー「アタシ達はアンタなんか絶対に認めない！！！！」  
ブロッサム「沢山の人を苦しめた拳句自分が絶対の神だと言い張る  
なんて・・・私、堪忍袋の緒が切れましたあ！！！！」

マリ「アタシもアンタのこれ以上の横暴は許さない！！海より広  
いアタシの心も此処らが我慢の限界よ！！！！」

サンシャイン「貴女の傲慢さは決して許さない・・・その心の闇私  
の光で照らしてみせる！！！！」

ムーンライト「これ以上悲しみを作らせはしない。全ての心が満ち  
るまで私は戦い続ける！！！！」

キリエロイド「オノレエ！！！！」

キリエロイドは激昂してブロッサム達に炎を放つがサンシャインの  
サンフラワイ スがそれをガードする。そして自分達が小さい事  
を利用してキリエロイドにブロッサム達はパンチとキックをガタツ  
ク達は陸戦メカでブロッサム達を援護する・・・その間にティガ・  
スカイタイプは何か立ち上がりブロッサム達に合図を送る。

ティガ・スカイタイプ「チャアア！！！！（皆、奴から離れるんだ）」

ブロッサム「!?・・・皆一度離れましょう巨人が何かするそうです!!!」

キリエロイド「キリイイっ!!!」

キリエロイドは今度こそトドメと炎を放つがティガ・スカイタイプはそれをギリギリで避けていきすぐに立ち上がる。

ティガ・スカイタイプ「フン!!!ハッ!!!」

キリエロイド「キリイイっ!?・・・グオオオオオ!?」

右手をカラータイマーの上に左手をその下に重ねてエネルギーを溜めるとそのまま右手を上にかざして《ティガフリーザ》という光線をキリエロイドの頭上に放っていく。するとそれは爆発して絶対零度の吹雪がキリエロイドに降り注ぐとキリエロイドの身体は凍て付き固まっていき氷の塊が形成される。その間にティガ・スカイタイプはもう一度腕を額に組んで白い光と共にティガの基本形態のマルチタイプに戻る。

ティガ「フンッ!!!・・・チャアアアアアアアアアアッ!!!  
!!!!!!!」

そして腕を腰に当ててから前方に組んでその腕を水平に広げると白い光りが腕の集まりそのまま右腕を縦に左手を右腕の肘に重ねていつてし字を作つて光線を放つ。ウルトラマンティガ最強の光線のゼペリオン光線である。

爆発音「ドカアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」

ブロッサム・マリン・サンシャイン「やったああ!!!」

ムーンライト「流石よ。ありがとう」

ガタック・ダークカブト「(やったな大人)」

フェアリー「凄い!!!」

ティガ「・・・チャア!!!」

ゼペリオン光線が直撃したキリエロイドは跡形もなく粉々になり残されたのは破片のみだった・・・ティガはカラータイマーの点滅が早くなると空を見上げると空に飛び立つて何処へと消えていったのだった。

ブロッサム「所で・・・大人さんは？」

大人「ブロッサム!!!」

ブロッサムの疑問に皆（ガタツクとダークカブト以外）はあたりを見回すと声が聞こえてきた。全員が合流し朝日が昇る空とともに月曜日を迎えた。そして全員学校での授業を終わらせて植物園に集まる事になった。

そして時間は流れて植物園にて・・・

つぼみ「巨人、強かったですね!!!」

えりか「うん。巨人サマサマって感じ。」

いつき「うん。でも何で町中に現れたんだろ？」

ゆり「それは分からないわ。」

大人「あの・・・思うんだけどさ。怪獣にもゴルザやメルバやガルラっていう個々の名前があるのに巨人だけが巨人、巨人って呼ばれるのは何か可哀想な気がするんだけど。」

タ「そう言えばそうだね。名前かあ。」

大人「・・・案がないなら赤と紫の巨人は《ウルトラマンティガ》

なんてどうかな？」

つぼみ「ウルトラマンティガ？」

琢磨「あ、俺も案があるんだけど・・・赤い巨人は《ウルトラマンアース》っていうのは？」

傑「・・・青い巨人は《ウルトラマンデュナミス》ってのはどうかな？」

つぼみ「えりか・いつき」「おお!!!」「」

ゆり「いいわね・・・ウルトラマン。カッコ良くて」

タ「うん!!!何かあってるよ。光の戦士って感じで!!!」

こうして巨人の名前が決定した。というのもキュアアンジェが言ったのをそのまま取っただけなのだが。つまり自分達が戦士として戦うと言う事を大人達は受け入れたと言うなのかもしれない。最初は否定した大人だったが自分達には仲間がいる・・・だからもう迷わ

ない！！だからこそ巨人の名前を皆につたえたのかもしれない・・・

その頃とある海底では

ダーク「キリエル人よ・・・所詮貴様の配下とやらも大したことはなかったか。」

キリエル人「こ、これは様子見でございませう。今一度チャンスを」

ダーク「ええい。下がれ。雑魚に用はないわ！！！」

キリエル人「・・・ははっ」

ダーク「テイガよ・・・やはり貴様は私の邪魔にしなければならないようだ・・・だが必ず貴様を倒してくれるわ。」

キリエルが消えた玉座の間のような部屋に一人たたずむダーク。その姿は何処かテイガと似ているようにも見えた・・・果たしてそれは錯覚か・・・それとも・・・

#### 第4話「動き出した影」(後書き)

今回はティガがメインでした^^意外と描写が難しいです。さてコレからは色々忙しい時期になるので更新も遅れてしまうかもしれません^^しかし楽しみにしていてください!!

では次回もお楽しみに



## オリジナルウルトラマンの設定〈アース編〉

ウルトラマンアース 《ポテンシャルデータ》

身長53m

体重4万6千トン

ボディカラー 赤と銀色。

《基本データ》ウルトラマンティガ・パワータイプに相当する力を持ち主。ティガ・パワータイプを超える力を持つのだがスピードではティガ・パワータイプを下回るため遠距離戦や空中戦では苦戦を強いられる。しかし水中での戦いや重量級のクラスの怪獣との格闘戦やスタミナが高い事を活かした長期戦での戦いはその真価を発揮するのである。また炎を操る特殊能力があり状況に応じて炎を自在に操り敵との戦いを有利に進める事が出来る。

### 《変身アイテム》

アーススパークレンス

ウルトラマンアース専用の変身アイテム。スパークレンスとの違いはウイング部分のレリーフやグリップ部分グリップの上の古代文字が刻まれている部分が赤くクリスタルに炎が宿されている事である。原作のティガのスパークレンスと同じ能力で琢磨を《光》に変換してウルトラマンアースの姿に変身させる。またクリスタル部分から炎を発して敵を怯ませる事が出来る効果がある。

### 《必殺技》

ボルテックストリーム

ウルトラマンアース最強の光線技。手順はティガのゼペリオン光線と同じように手を腰に当てるとその後前方に交差させていきその後左腕を上、右腕を下になる様に広げて炎のエネルギーを腕に集めて

いきそのまま右腕を縦にその上に左手をクロスさせて十字を作った後に発せられる破壊光線。しかしエネルギーの消費は凄まじく最後の切り札として使われる。またエネルギー集約時に炎のエネルギーを調節する事で破壊力を操作できる。

破壊力が低い技（炎を使った技もあり）

バーンナツクル

炎を腕に纏い自身のパンチの破壊力を増大させる技。元ネタはウルトラマンエースの《フラッシュハンド》第2話にてガルラ戦にて初使用  
ウルトラスライサー

ティガのハンドスラッシュと類似する光のカッター光線。威力は低いが敵に隙を作らせるのに有効である。第2話にてメルバに初使用。

## オリジナルウルトラマン設定〈デユナミス編〉

ウルトラマンデユナミス 《ポテンシャルデータ》

身長53m

体重4万2千トン

ボディカラー 青と銀色

《基本データ》ウルトラマンティガ・スカイタイプに相当するスピードの戦士で水を操る事が出来る戦士である。パワーやスタミナではティガ・スカイタイプよりも下回り肉弾重視の格闘戦や重力クラスの怪獣との戦いは不向きだが多彩な光線技や水を使った戦術、そして何よりもスカイタイプと以上の迅速の技サバキによる格闘戦と飛行能力で敵を追いつめる事が出来る。また水に冷気を送り込んで氷を作る事も出来る。

### 《変身アイテム》

デユナミススパークレンス

ウルトラマンデユナミス専用の変身アイテム。アーススパークレンスとおなじくウィングのレリーフ、グリッブ、古代文字が刻まれている部分の色が青である事が特徴。またクリスタルには水の力が宿っているクリスタルに水を集める事で水の剣を造る事が出来る。(この設定の元ネタは烈火の炎の閻水)

### 《必殺技》

インブレイス・バースト

ウルトラマンデユナミス最強の必殺技。エネルギー集約ポーズはアースと類似しているが違いは右手が腕に来て左手が下になる事である。また十字に組む腕も左手が縦になり右手が横になる事である。またアースと同じくエネルギー消費が凄まじく最後の切り札として使用される事や水のエネルギーを調節して破壊力を操作できるなど

の共通点がある。

破壊力が低い技（水を使った技もあり）

デュナミスボム

右手に光を集めて敵に叩きこむエネルギー弾。威力は低く主に敵に組みつかれた時に使用する。第2話に手メルバに初使用。

デュナミスセイバー

水を腕に集めてそれを冷気で固めた氷の剣。ただの氷ではなくデュナミスの体内エネルギーによって作りだした氷であるため鋼鉄をも切り裂く事が出来る。元ネタは（ウルトラマンアグルのアグルセイバー及び烈火の炎の閻水）

デュナミススラッシュ

氷を使用したのこぎり状のカッター。（元ネタは勿論初代ウルトラマンのウルトラスラッシュ）

## 第5話「怪獣からのSOS」(前書き)

前回までのあらすじ

ダークからの刺客キリエロイドにティガが立ち向かう。大人はその戦いで例え自分が光の戦士とバレットとしてもつばみ達は自分を受け入れてくれるそう思い全員に巨人の名前を提案するのだった。

## 第5話「怪獣からのSOS」

とある海底にのダークが封印されている玉座の間にて

ダーク「さて・・・次はどうするか・・・」

????「ダーク様。次は私が」

ダーク「貴様は・・・バルタンか」

バルタン「フオフオフオフオ・・・キリエルの低能を信じることなく我々バルタンの科学力を御信用ください」

ダーク「ほう？勝算はあるのか？」

バルタン「ご安心を。既に作戦は開始されております」

ダーク「そうか・・・楽しみにしているぞバルタンよ」

バルタン「はっ！！！」

ダークの新しい刺客が動き出していた。そしてバルタンの作戦とは。

時同じくして地球から数光年離れている惑星の《サウリア》この惑星には地球には存在しない怪獣であるレッドキングなどが数多く生息して人間達と同じように心があるかのように仲良く暮らしていたのだった。だがその平和は今打壊されていた。

レッドキング「ピガオオオオオウ！！（貴様ら何者だあ）」

バルタン（下っ端）「フオッフオッフオッフオッフオ！！！！キヤマラ下等生物デモ十分我々ノ計画に役立つダロウ・・・利用させて貰ウゾ！！！」

レッドキング「ピギャウウウ（そんな事させるものか・・・この星から出ていけ！！）」

レッドキングはバルタンに向かっていくがバルタンの分身技には歯が立たずに何もできなかつた。後ろでは子供のレッドキングがブルブルと震えていた。

レッドキング（父）「・・・ガウウウ！？？・・・ピギャウウウ！

！（ぐうう・・・私も此処までか・・・息子よ・・・お前は逃げる）」

レッドキング（子）「ギャウウウウ!!!（父ちゃん!!!・・・  
そんなの嫌だよ・・・俺も戦うよ!!!）」

レッドキング（父）「ガウウウ!!!・・・ピギアアアアアア  
ッ!!!（我儘を言うな。お前はこの星のリーダー一族の最後の一匹  
何だ。お前だけでも生き残らなくてはならない）」

レッドキング（母）「ピギアウウ（さあ行きなさい。私達が時間を  
稼ぐから）」

レッドキング（子）「ギャウウウ・・・ギャウウウ!!!（母  
ちゃん!!!・・・分かったよ。グス・・・うわああああん!!!  
!」

惑星は今火の海であった。怪獣たちは必死に抵抗するもバルタン達  
には通用しなかった。あるものは捕えられ円盤にと詰め込まれ、ま  
たあるものはバルタン達に殺されたりと平和な惑星も地獄と化して  
いた。この星のリーダー一族のレッドキング家族は果敢に息子のレ  
ッドキングを逃がすためにバルタン達に戦いを挑んでいった。子供  
のレッドキングは振り向かず走り続けた。怪獣と言ってもまだ子  
供であるため体長は人間の子供と殆ど変わらない為バルタン達にも見  
つかりにくかった。彼は必死に逃げるのだった。そして森の奥まで  
逃げ延びた。

レッドキング（子）「ギャウ、ギャウウ（父ちゃん・・・母ちゃん  
・・・ゴメンなさい!!!）」

レッドキングの子供は何とか被害の少ない場所まで逃げていたのだ  
が逃げる場所など何処にもなかった。どうしたらいいかわからない  
為泣きじゃくるしかなかった。

???「パムパムう（お〜いチビキング!!!）」

レッドキング（子）チビキング「ギャウウ!?（あ、ハネジロー  
!!!）」

???「ガクッ!!!パムパム!!!（ムーキッドだって!!!いい  
加減に覚えてよ）」

しばらくするとハネジローと呼ばれる黄色い小動物の様な怪獣が現れた。どうやらこの怪獣も逃げ延びたらしい。ハネジローとチビキングは仲が良くて友達同士であった。

チビキング「ギャウギャウ」（俺達どうなるのかな？）

ハネジロー「パム・パムパム！！」（こうなったらしょうがない・

・ボクが開発したカプセルで逃げよう）」

チビキング「ギャウウ！！？・・・ギャ、ギャウウ！！」（カプセル！？・・・こ、怖い）」

ハネジロー「パムパム！！パムムパムウ！！」（何弱気な事言ってるんだよお！！君はレッドキングの息子だろ！？ボク達の星が滅茶苦茶にされてしまったけどボク達には何もできないんだ。生き残るしか出来ないんだよ！！！！）」

チビキング「ギャウウ・・・ギャウギャウウ！！」（分かったよ・・・でも何処に行くんだい？）

ハネジロー「パムパムパム！！」（此処から数光年ある地球って星に行こう・・・そこは此処と同じような星だって聞いた事あるんだ。だからそこに行こう）」

チビキング「ギャウ・・・ギャウウウ！！」（うん。父ちゃん、母ちゃんオレは生き残るよお！！）」

チビキングとハネジローが作った小動物が入れるぐらいのカプセルでサウリアから地球へと向かうのだった。自分達の故郷から離れるのは心苦しかったが自分達の代わりに命を落とした仲間達の思いの為に逃げる事を選んだった。

その頃地球では

大人「アレから3日立つけどキリエルは何もしてこない。諦めたのか？いやアレだけで諦められるとは思えない」

琢磨「まあ確かにな。ゴルザ達も姿を見せないし」

傑「アイツらが何処にいるかは今は分からないけどまた出てくるよ



うなら今度こそ俺達がトドメを刺せばいい」

大人「そうだな。今度は絶対に！！」

大人、琢磨、傑はあの丘に集まっていた。アレから3日も経つが何も変化がない事に不信感を抱いていたのだ。平和なのはいいことだがその平和が逆に不気味だった。そして不意に大人が空を見上げると

大人「まあ平和ならいい事なんだけど……！！？」

琢磨「アレは流れ星！？」

傑「い、今は昼間の筈なんだけど」

不意に空を見上げると森の方に流れ星いや隕石の様なものが落ちていったのが見えた。大人達は何事だと思いいその場所に行くとはやらかプセルの様なものがあつた。

大人「アレって……宇宙船？」

琢磨「まさか新しい敵か？」

傑「落ちつけて……違うかもしれない。大体この大きさに入っている宇宙人なんて想像がつかないんだけど」

3人は恐る恐る近づいていくとカプセルが突然開いた。

大人「こ、コレって」

琢磨「……怪獣の」

傑「……子供！？」

中には目をグルグルと回したチビキングとハネジローがいたのだった。大人達は目が点になったがとにかく保護しようと二匹を植物園に運ぶのだった

つぼみ「えりか・いつき」「か、か、かわいいいいい！！！！」

ゆり「……（か、かわいい）」

つぼみ、えりか、いつきの3人はハネジローとチビキングの可愛さに興奮した様子を見せていた。中でもいつきは二匹をみて普段見せないテンションでハシヤギまくっていた。

タ「ホントだね！！！！でも何で宇宙船なんかに？」

大人「さ、さあ？」

琢磨「そればかりは俺達のも分からないよ」  
傑「シプレ達は何か知らないか？」

シプレ「うむ、分からないですう」

コフレ「ボク達も初めてみるですっ！！！」

ポプリ「ポプリでもしゅ！！！」

大人「そうか・・・？し、目が覚めるみたいだ」

大人の声に全員が静かになる。最初の起きたのはハネジローであったりを見回す。そして大人達をみるや否や・・・

ハネジロー「パアアアアア！！！！？・・・パ、パム！？・・・パ、パム！（わああああ！！！！・・・び、びつくりした・・・あ、チビキング！！起きろお！！！！）」

チビキング「ギャウウウ・・・ギャウウ！！！！・・・ギャ、ギャウウ？（ううん・・・あ、ハネジロー！！。こ、此処は？）」

大人「気がついたみたいだ・・・」

チビキング「ギャ、ギャウウ！！！！（わ、わああ！！な、何だあああ！！！！？）」

ハネジロー「パムパム！！（落ちついて。大丈夫だから！！）」  
チビキングは大人達をみるなりハネジローの後ろに隠れてしまう。  
それに比べてハネジローは落ちついていらしくチビキングを宥めるのだった。

大人「君達は何処から来たんだい？何で地球に？」

ハネジロー「パムパムっ！！！！（それは・・・コレを見て！！）」

大人「？・・・！！！！こ、これは・・・」  
つぼみ「・・・ひどい」

えりか「そうか・・・逃げた来たんだね」

いつき・ゆり「・・・」

チビキング「ギャウウ・・・ギャウウウウ！！！！（と、突然オレ達の星が襲われたんだ・・・うわああああんっ！！！！！！）」

ハネジローは大人達の近くまで飛ぶと目から光を放っていき惑星サ

ウリアの出来事を大人達に伝えるために自分の記憶を映像化した映像を見せる。そこにはバルタン達による破壊されていくサウリアの自然と捕えられていく怪獣たちの姿だった。それを見た大人達は言葉を失ってしまった。砂漠の使徒以外にこんな残酷な事をする連中がいたとは・・・チビキングは今まで溜めていたモノが一気に爆発したかのように涙を流した。

## 第5話「怪獣からのSOS」(後書き)

ちよつと怪獣たちの登場に困ったので惑星があるという設定にさせていただきました。次回はバルタン達が動き出します。

次回もお楽しみに

## 第6話「冷徹な思想」（前書き）

前回までのあらすじ

惑星サウリアのから辛くも脱出チビキングとハネジロー。宇宙ではまだ侵略者がいることに大人達は言葉が出なかった。

## 第6話「冷徹な思想」

チビキング「ギャウウウ〜（何も出来なかった・・・父ちゃんも母ちゃんも戦ったのにオレは何もできなかったんだあ！！！！）」  
大人「・・・」

つぼみ「悔しかったんだね・・・よしよし」

ハネジローが映し出した映像を見た8人は何も言葉が出なかった。チビキングは今まで我慢していたものが一気に溢れだして泣きだしてしまう。それを見たつぼみが優しく抱き抱える。

ハネジロー「・・・パムウ〜（・・・チビキング）」

琢磨「そうか・・・お前の家族もこの星人に」

えりか「砂漠の使徒以外にもこんな事する奴らがいたなんて・・・絶対に許せない！！！」

傑「こいつ等まだ小さいのによく頑張ったよな・・・こんな小さい子供を泣かすなんて。」

ハネジローは映像を出し終わると頭を下に向けてチビキングと同じように悲しそうな声を上げる。それを見た琢磨はハネジローの頭を撫でていつて励ましえりかは今までに見せた事のない怒りのこもった声を上げる。自分達もかつて砂漠の使徒に世界を砂漠化された時の絶望と悲しみは計り知れなかった。でも自分達には力があつたから今の青い地球がある。でもこの二匹には力がなく悔しさと悲しみのなか自分達の故郷を捨てて逃げてきた・・・こんな事絶対に許されるわけがないのだ・・・そんな思いがえりかの身体の中でメラメラと炎のように燃えているのだった。勿論それはえりかだけではなく大人もつぼみも琢磨も傑もいつきも夕やゆりも同じだった。植物園の中でチビキングの悲しい鳴き声が響き渡る

時同じころのとある海底ではダークとバルタンが作戦について話していた。

ダーク「バルタンよ惑星サウリアの怪獣たちをどうするつもりだ？」  
バルタン「奴らは今後の我々の兵器として利用するのでございますよ。そして既に私達バルタンの科学力で試作品第一号が完成済みでございます。今からプリキュアと光の巨人たちを殲滅にかかります」

ダーク「・・・期待しておこう。行けバルタン！！！」  
バルタン「ははっ！！！！！」

バルタンの作戦とは自分達の同胞達の活躍によって手に入れた惑星サウリアの怪獣たちをバルタン星の科学力で改造を行い自分達の兵器として利用することだったのだ。これならば例え作戦が失敗しても実験材料という手柄があるためキリエル人のような失態にはならないと思ったのだった。だがこの行動が自分を地獄に落とすきっかけになるとはバルタンもまだ知らなかったのだった。

チビキング「があゝぎゅふふふふ（ぐうぐう）」

ハネジロー「ペア〜〜ペア〜〜（すやすや）」

つぼみ「よく眠ってます。怪獣と言ってもまだまだ子供ですね」

チビキングとハネジローは長旅で野疲れで植物園でぐっすりと眠っていた。つぼみは二匹に毛布をかけてあげると起こさないように下に降りていった。

大人「あの二匹は？」

つぼみ「疲れてグッスリです。特に泣いていた子はすぐに寝ちゃいました。」

大人「そうか。・・・よっぽど怖かったんだろうな」

つぼみ「ええ。平和だった日常がいきなり壊されて見ず知らずの星に逃げた来たんですから」

大人「そう言えばえりか達は？」

つぼみ「あの子たちを少しでも元気にしようって何か考えてるみたいです。えりかと傑さんが特に張り切っていました。」

大人「そうか。えりからしいと言えればえりからしいな。」

つぼみ「はい。」

つぼみは笑っていたが大人は表情が堅く下を向いていて何か思いつめているようだった。そして突然声を上げた

大人「・・・なんか悔しいよ」

つぼみ「え？」

大人「俺は・・・敵は砂漠の使徒だけだと思ってた・・・でも違った。邪神やキリエル人、更にはアイツ等の故郷を奪った奴ら・・・俺は砂漠の使徒さえ倒せば悲しみが消えると思ってた」

つぼみ「・・・大人さん。でもそれは・・・」

大人「分かっている！！・・・でも守れる力があるのに何もできない自分が悔しいんだよ。」

下を向きながら大人は悔しそうに言った。俺達は守る力があるのに自分達にしかその力を使えなかった。故郷を奪われる辛さを知っているのに守れなかった・・・特に今の自分はウルトラマンの力もあるのに・・・知らない故に守れる命を守れないと言う悔しさが大人から溢れ出ていたのだ。

つぼみ「大人さん・・・それは私も同じです。」

大人「!？」

つぼみ「私も砂漠の使徒を壊滅させたことで全てが終わったと思ってました。でもそれだけではなかった。この広い宇宙にはまだまだ憎しみに囚われて悲しい事をする人がいることを知りました。・・・だからせめてあの子たちの心の叫び、困っているなら力になりたい。それが今の私達に出来ることなんです。」

つぼみは胸に手を当てて優しくそう言った。もう過ぎてしまったこととは変えることが出来ない・・・ならばせめてあの子たちの悲しみを自分の愛と優しさで包んであげたい・・・自分達が出来なかったことの穴埋めはそれしか出来ないのだから・・・それが3年前の砂漠の使徒やネイティブ達との戦いで彼女なりに学んだ事であった。自分達は決して神ではないのだから・・・

大人「・・・そうだね。今の俺達に出来る事はそれしかないんだ



よな・・・アイツ等の悲しみを俺達が0に近くするしかないんだよな」

つぼみ「はい。もう悲しみを増やさないようにしてあげればいい・・・それが私達の出来る事でありするべき事なんです。」

大人「(つぼみ・・・君はホントに優しく、そして強くなつたね・・・嬉しいけどなんか寂しいよ・・・)」

大人はつぼみの言葉に自然と悔しさが消えていった。確かに過ぎた事をいつまでも悔やんでいても何もならない。それは事実であるのだ・・・なら今度はこれ以上悲しみを増やさないように・・・悲しみを自分達が受け止めてあげればいい・・・彼女の優しさの後ろには昔とは違う強さが見えた・・・大人はつぼみの成長した姿にどうしてか懐かしさと寂しさが芽生えてきた・・・小さい頃は自分にべつたりで自分以外の他人には心を開かなかったのに

そんな事が頭に過ぎっている中突然シプレ達が慌てた表情で植物園に入ってきた。

シプレ「二人とも大変ですう！！！！」

大人「どうしたんだ？シプレ」

シプレ「怪獣が出てきましたですう！！！！」

つぼみ「なんですって！？・・・ゴルザですか？」

シプレ「ち、違うですう！！で、でもゴルザなんかより凄い凶暴ですう！！！！」

大人「まさかチビたちの星の生物たちが！？・・・つぼみ急ごう！！！！」

つぼみ「はい！！！！」

大人とつぼみはシプレを先導させてカプトゼクターで怪獣が暴れていると言つ場所に向かう。そしてその怪獣とはなんと・・・

レッドキング(父)「ピギヤウウウウウ！！！！！！」

レッドキング(母)「ピギヤアアアアア！！！！！！」

なんと暴れているのはチビキングの親である2匹のレッドキングで

あった。2匹のレッドキングは紅い目から邪悪な眼光を放ちながら町を破壊していき人々を襲う。それを阻止しようとマリリン、サンシヤイン、ムーンライトがマントを纏い空中戦をガタツク、ダークカブト、フェアリーはライダーシステムの陸戦メカで、更に既にGUTS隊のウイング1号、2号までもが出撃していた。

大人「……まるで戦場だ」

逃げ回る人々、辺りに起こる炎と爆発、ウイングから発射されるミサイルとレーザー、暴れるレッドキング達……平和だったはずの希望ヶ丘がいきなり戦場となったその様に大人は言葉が失った。

つぼみ「……どうしてこんな事を」

シプレ「つぼみ……シプレ達も戦いに行くですう。変身ですっ！  
！！」

つぼみ「はい！！！！」

つぼみも言葉が出なかつたが今は迷つてる場合ではないとつぼみはココロパヒュームを取り出していき光の衣装に服装が変わる。

シプレ「プリキュアの種いくですう！！！！」

つぼみ「プリキュア・オープンマイハート！！！！！！」

つぼみはピンク色のプリキュアの種をココロパヒュームに装填していきピンク色のそこから発せられる光の香水を身体に噴きかけていきキュアブロッサムの変身する。

ブロッサム「大地に作一輪の花キュアブロッサム！！！！！！」

名乗りあげてポーズを取る。

ブロッサム「シプレ行きますよ！！！！！！」

シプレ「はいですう！！！！！！」

ブロッサムはシプレをマントにして身に纏うと凄まじいスピードでマリリン達のもとに向かう。

大人「これ以上悲しみを増やさせはしないの為に得たティガよ俺に力をくれ！！！！！！！！」

大人はブロッサム達から資格になる場所に移動するとスパークレンスを取り出す。今こそこの力を使って皆を守る時だという決意に同

調したかのようにスパークレンスも光を放っている。そのままそれを天に掲げると……

大人「ティガアアアアアアアアアア!!!」

大人はティガの名前を叫びスパークレンスのスイッチを起動するとスパークレンスから発せられたまばゆい光に包まれていき姿が変わっていく。

ブロッサム・マリン・サンシャイン「ティガ!!!」

ムーンライト「来てくれたのね」

フェアリー「待ってたよ!!!」

ブロッサム達は仲間のティガの登場に待ってましたでもいうように笑みを見せるとマントで飛んでレッドキング達を惑わせながら町の被害を食い止めようと奮闘する。

ホリイ「あれはあの時の……」

シンジヨウ「光の巨人!!!」

矢車「彼はやはり……」

影山「俺達の味方なのか？」

ムナカタ「……何者にせよ敵ではないようだな。全員あの巨人を援護せよ!!!」

ホリイ・シンジヨウ・矢車・影山「了解!!!」

ガッツウイングの機体の中でホリイ、シンジヨウ、矢車、影山、ムナカタのGUTS隊面々もティガの事を信頼し始めていた。彼の正体が分からない以上は信用は出来ないが自分達と利害が同じなら協力するまでだ……。ムナカタはそう判断すると各員にティガの援護を命じる。

ティガ「チャアアア!!!」

ティガは右手を空に突き上げ左手を顔に添えるような独自のポーズとともにその巨大な姿を現すとレッドキング達に向かっていく。

ダークカブト「大人の奴この前の迷いが完全に吹っ切れたみたいだな……」

ガタック「迷いか……。俺もこの力が俺が使っているのか迷って

る・・・誰にも相談できないし・・・」

ダークカブト「俺もだよ。でもその答えは俺達が見つけるべきなのかもしれない。この力を使いながら」

ガタツク「・・・そうかもな」

ダークカブト「俺達も行こう!!!力を得た責務を果たす為に。」  
ガタツク「ああ。」

ガタツクとダークカブトは大人と同じように誰にも気づかれない場所に移動すると変身を解除して琢磨はアースパークレンス、傑はデュナミスパークを取り出していき

琢磨「アーーーースうううう!!!!!!」

傑「デュナミスウーーーーー!!!!!!」

それぞれ赤い光と青い光に包まれていき二人の姿が光の戦士に変わっていき光が消えてなくなる頃には光の巨人ウルトラマンアースとウルトラマンデュナミスが現れる。

アース「シユワ!!!」

デュナミス「ハッ!!!」

ブロッサム「アースとデュナミスも来てくれたんですね!!!」

マリン「よっしゃあ!!!これなら絶対に負けないよ!!!」

サンシャイン「うん!!!」

ムーンライト「3人とも彼らに負けないように私達の力を見せるわよ!!!」

ブロッサム・マリンサンシャイン「はい!!!」

アースとデュナミスの出現にブロッサム達はコレで仲間揃ったと強気な態度になっていくがムーンライトはティガ達に負けないように自分達の力を見せてやろうとブロッサム達を先導しティガ達と共にレッドキングに向かっていくのだがそれに合わせる様に黒いオーラの影が現れる。

全員「!!!???」

「???」  
「フオフオフオフオフオフオ!!!・・・地球人よ・・・プリ

キュアよ、光の戦士たちよ聞け！！私はバルタン星人！！もし覚えておきたまえよ私が作り上げた《作品》を簡単に壊せないと云う事を」

ブロッサム「貴方はあの子達の星を滅茶苦茶にした異星人！！！！」  
マリン「今度は地球に狙いをつけたってわけ？」

バルタン「あの子達の星？・・・惑星サウリアの事を言っているのならそれは違うな・・・あの星には我々の兵器の《材料》を調達しにいったただけだ」

サンシャイン「兵器の材料・・・まさか！！！」

ムーンライト「惑星サウリアの怪獣達が目的であんな破壊を！？」  
バルタン「その通りだ・・・あの星の生物たちは実に我等の兵器の材料には適してたのだ。故に《資源確保》の為に星を殲滅したまでだ」

フェアリー「たったそれだけの理由で・・・《資源確保》のためにあんな事をしたって言うの！！？」

ティガ「・・・(ちよつと待てじゃあ今日の前にいる怪獣ってまさかチビ達の仲間なんじゃ!?)」

バルタン「ウルトラマンティガ・・・貴様の考えている事は当たっているぞ？貴様の読み通り子の怪獣たちはサウリアの怪獣を私が改造したものだ！！！」

ティガ・アース・デュナミス「！！！」

ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト・フェアリー「！！！」

全員の動揺が一気にレッドキング達とバルタンに向けられた・・・つまりは彼らはただバルタンに利用されているだけに過ぎず無理やり暴れさせられているだけだったのだ・・・こんな卑劣な真似を行つたバルタンにブロッサムであるつばみはバルタンを普段彼女が見せた事のない形相で睨みつけると・・・

ブロッサム「ふざけないでください！！！！・・・平和に暮らしていたあの子達の日常を奪い両親とも離れ離れにされて故郷を離れたあ

の子達の気持ち貴方に分かるんですか!?!??. . . あの子達が  
どんなに辛い思いで地球に逃げてきたかが貴方に分かるんですか  
!?!?

バルタン「. . . 下らん。私は私の科学力でこの星を制圧するの  
み。」

ブロッサム「そんな事絶対にさせません!?!!」

バルタン「フン!?! ならばやってみるがいい。行けレッドキング達  
よ!?!!」

レッドキング(父)「ピギャアアアアアアアウウウウ!?!!  
!」

レッドキング(母)「ヒギャアアアアアアアアアアア!?!!  
!」

ティガ「ハッ!?!」

アース「フウ!?!」

デユナミス「デア!?!」

バルタンの号令に合わせてレッドキング達が自分達に向って来る。

ティガ達はレッドキング達を迎え撃とうと構えるのだったがその前  
にブロッサム達が彼らの前に立つ。

ブロッサム「待ってください!?!!」

ティガ・アース・デユナミス「!?!?!?」

ブロッサム「あの怪物たちの私達に任せてください!?!!」

ティガ「. . . (ブロッサム・お前)」

マリン「お願い!?!。アタシ達が助けてあげたいの。」

アース「(マリン. . .)」

サンシャイン「彼らは利用されてるだけ. . . 悪意がないのなら傷  
つけないんです」

ムーンライト「必ず救ってみせる!?!!だから貴方達はあの異星人  
を」

デユナミス「(サンシャイン. . . ムーンライト. . .)」

ティガ「. . . ジュウ!?! (分かった. . . 必ずあの二匹を救ってく

れよ!!!)」

ティガはいやティガやアース、デユナミス達はブロッサム達の必死の決意と熱い思いが伝わったらしくブロッサム達のレッドキングの事を全てを任せると言うかのように首を縦に振る・・・アースもデユナミスも賛同したように頷く・・・彼女たちなら救えるかもしれないと確信したかのように。

ブロッサム「ありがとうございます!!!任されたからには必ずあの二匹を助けて見せます!!!」

マリン「うん!!!うっしゃー行くよ!!!」

サンシャイン「あの二匹の心の闇を私の光で照らしてみせる。」

ムーンライト「プリキュアの力が破壊だけじゃない事をバルタンに教えてあげなきゃね」

ブロッサム達はレッドキング達をティガ達はバルタンに狙いを定めてそれぞれの戦いをする方向のだった。そしてバルタンはプリキュアの奇跡を目の当たりにすることとなる事にまだ気がついて気なかつたのだった

第6話「冷徹な思想」(後書き)

今回は前篇となりました(汗)次回こそはバトルを描きたいと思  
います^^

次回もお楽しみに



## 第7話「バルタンの誤算」(前書き)

前回までのあらすじ

突如出現した二匹のレッドキングは惑星サウリアで暮らしていたチビキング達の両親であった。そしてダークの第2の刺客バルタンも現れて惑星サウリアの出来事を冷徹に語る。怒りに燃えるブロッサム達はレッドキング達を救うために戦いを挑む。

## 第7話「バルタンの誤算」

レッドキング（父）「ピギヤウウウウウウウウ！！！！」

レッドキング（母）「ピギヤアアアアアアアア！！！！」

レッドキング達はバルタンに命令に従うべくティガ達に突進していくが彼らの前にブロッサム達が現れ二匹を静止する。

ブロッサム「貴方達の相手は私達です。」

レッドキング（父）「ギシャウウウウウウ！！！！」

二匹は《邪魔するなあ》とブロッサム達に襲いかかるが小回りが利く彼女達はレッドキングの攻撃を可憐に避けて見せる・・・そして気がつけば二匹はバラバラにされていてブロッサム・マリンのチームとサンシャイン・ムーンライトのチームに別れさせられているのだ。当然コレはブロッサム達4人の作戦であり町の被害を最小限にするとともに自分達に有利になる様に形勢なるように仕向けた事であったのだ。

ブロッサム「貴方達の苦しみ、怒り全てがバルタンに利用されてい

るだけ・・・だから必ず助けて見せます！！！！」

マリ「ちよつと痛いけど・・・我慢してよ！！！！」

ブロッサム・マリ「プリキュア・ダブルインパクト！！！！」

レッドキング（父）「ピギヤアアアア！！！！??？」

ブロッサム、マリンのペアは体格が一回り大きいレッドキングにターゲットを絞り先ずは体力をなくそうとある程度のパワーでセーブしながらレッドキングに攻撃を仕掛ける。勿論レッドキングも攻撃はするのだが素早い二人の動きに攻撃が当たらないのだ。業を煮やしたレッドキングはビルを持ち上げて岩投げをするかのように2人に自分が持つ腕力を見せつけるかのように得意げな顔でアピールを見せる。

レッドキング（父）「ピギヤアアアアウウウウ！！！！・・・グッフフフ！！！！」

ブロッサム「な、なんて力なんですか!？」

マリ「す、スゴイ……って感心してる場合じゃないっての!!  
!!マリ「シュート!!!」

ブロッサムはビルを軽々と持ち上げたその姿に言葉を失うのだがマリは危険を感じてレッドキングに向かってマリ「シュートを発射してしてビルを破壊を狙うのだがマリ「シュートに驚いたレッドキングは思わずビルを持っていたその手を離してしまいがビルが重力に従って彼の足の上にゴチンと凄いい音を立てて落下したのだった

レッドキング(父)「!!!?……ピ、ピギヤア~~~~グウウウウ

~~~~っ!!!」

ブロッサム「あ、あら(汗)」

マリ「自分の足にビルを落としちゃったよ……痛そう」

ブロッサム「そうですね……あ!!今がチャンスです。今うちにフォルテツシモの準備を!!」

マリ「え!?!でもデザトリアンじゃないのに効果あるのかな?」

ブロッサム「分かりません……でも傷つけずに正気に戻す頃が出るかもしれません……やってみる価値はあります!!!」

マリ「……分かった!!試してみよう!!」

レッドキングはあまりの痛みに思わず頭を抱えて飛び回るのを見てブロッサムとマリ「はあ……あとでも言うかのような顔していたがコレはチャンスだと思いフラワータクトを召喚しようと自分のプリキュアのコスチュームの胸の所にあるクリスタルに手を当てる。

ブロッサム・マリ「集まれ花のパワー!!!」

ブロッサム「ブロッサムタクト!!!」

マリ「マリ「タクト!!!」

二人の掛け声に合わせる様にブロッサム、マリ「のクリスタルはピンクと青の光を放つ。ピンク色の光からはブロッサム「の専用アイテムのブロッサムタクトがブロッサム「の手に、青い光からはマリ「の専用アイテムのマリ「タクトが召喚されて二人の手に握られるそし

て中心のクリスタルドームを回すと先端にピンク青の二つの光がタクトに集まり輝きを放っていくとプリキュアの聖なる花のエネルギーが溜まる。

ブロッサム・マリリン「集まれ二つの花の力よ！！プリキュア・フロラルパワーフォルテッシモ！！」

二人はタクトでフォルテッシモ記号の様な形をしたピンクと青のエネルギーを作り出すとそれを身に纏った後二人は手をつないでレッドキングにもものすごいスピードで突撃していくと貫通してレッドキングの身体にハート型の穴が開く。

ブロッサム・マリリン「ハートキャッチ！！！！」

ブロッサム・マリリン「はあああああああー！！！！っ！！！！！！！！！！」

次の瞬間レッドキングは大爆発を起こして辺りに爆風が漂う。そして二人はタクトのクリスタルドームを回していき花のエネルギーを送り込んでいくと後ろにピンクと青の花がレッドキングを優しい光が包み込むように浄化していく・・・

ムナカタ「アレがプリキュアの技か？」

矢車「リーダー彼女達を援護しますか？」

ムナカタ「焦るな矢車・・・彼女達の攻撃がどんなものか分からない。それに今無理に攻撃をしたら彼女達の邪魔になるかもしれない・・・」

・・此処は様子を見よう

矢車「はっ！！！！（フォルテウェイブが決まれば恐らく大人しくなるだろうがね）」

矢車と影山はかつてキックホッパー、パンチポッパーとしてブロッサム達と戦った事があるため彼女達の力は殆ど分かっていた。だからこそフォルテッシモが決まればレッドキングも大人しくなるかもしれないと言う事は予想が出来ていたのだ。そしてウイングの中からブロッサムとマリリンが浄化していくのを見守るGUTS隊達勿論失敗すれば即座に攻撃を再開する準備を整えているため迅速な対応は臨機応変に出来るようになっていた。

レッドキング（父）「ピギヤア〜ウ・・・」

光がおさまるとそこには正気を取り戻したレッドキングがあたりを見回すような仕草をしていた・・・赤く光っていた目はレッドキング特有の白目のない黒い目となっていた事が正気を取り戻した証拠であった

レッドキング（父）「ピギヤ〜ウ!?（私は一体今まで何を?）」

ブロッサム「やりました!!!」

マリン「やっぱりプリキュアの力って凄い!!!」

レッドキング（父）「ピギヤウ、ピギヤア〜!?（君達が私を?）」

ブロッサム「大丈夫です。暫くそこで休んでてください。」

マリン「すぐに貴方のもう一匹の仲間も助けて見せるから」

レッドキング（父）「ギャ、ギャウウ・・・（ありがとう・・・そして申し訳ない）」

レッドキングはその場に膝をついて身体を休める様に動かなくなる。当然GUTS隊はレッドキングに攻撃することはしなかった。折角の感動を打ち砕く事はしないうムナカタの気配りと矢車と影山の配慮があったからである。

サンシャイン「はああああーっ!!!」

ムーンライト「ふっ!!!やああああーっ!!!」

サンシャイン、ムーンライトのペアともう一匹のレッドキングの戦いにも時間の経過と共に流れが出来始めていた。的が小さい事や小回りが利く事、更には技の多さなどがその要因でありレッドキングのパワーも彼らには通用せずに体力だけを削られていく・・・勿論これが二人の狙いである。

サンシャイン「花よ舞い踊れ!!!プリキュア・ゴールドフォルテバースト!!!!」

此処でサンシャインがクリスタルから黄色の光を放つとタンバリン型のサンシャイン専用アイテムの『シャイニータンバリン』が召喚

される。そして外側のドーム部分を回していくと中心にエネルギーが溜まり必殺技のゴールドフォルテバーストが発射される。勿論これは囿でレッドキングの動きを封じるためのものであるため沢山のヒマワリの花の様なエネルギー弾がレッドキングの動きを封じる。レッドキング(母)「グギャアアウウウ!?」

レッドキングはどうかして逃れようと暴れ回るのだが力ではこの技の拘束を解くことなど不可能であった・・・そしてその際にサンシャインとムーンライトはどうするかを考える。

サンシャイン「何とか動きを封じましたけどどうしましょう?このままではあの子を甚振る事にしかない・・・」

ムーンライト「そうね。今はフォルテバーストで動きは封じられるけどコレじゃ根本的な解決には・・・」

ブロッサム「サンシャイン、ムーンライトー!ー!」

ムーンライト「!?!?!? ブロッサム!」

サンシャイン「マリン!」

此処で父親の方のレッドキングを浄化できたブロッサムとマリンがサンシャイン、ムーンライトと合流するのだった。そして傷つけずに助け出すにはフォルテウェイブが有効であると言う事を説明する。ムーンライト「分かったわ・・・なら全員でフォルテッシモよ!!」

ブロッサム・マリン・サンシャイン「はい!!」

サンシャイン・ムーンライト「プリキュア・フローラルパワーフォルテッシモ!!!」

先ずは先陣を切ってサンシャインとムーンライトがムーンタクトとシャイニータンバリンをクロスさせていくと黄色と藍色の光に包まれると合体して一つの大きな光になる。そして次は

ブロッサム「次は私達です。いきますよ?マリン」

マリン「やるっしゅ!!!」

ブロッサムとマリンももう一度フラワータクトを召喚していきフォルテッシモの準備に入る。

ブロッサム・マリリン『集まれ二つの花の力よ！！プリキュア・フロ  
ーラルパワーフォルテツシモ！！』

ピンクと青の光が融合して一つの光なる。またサンシャインとムーン  
ライトの光りも合わさって4つ分の光が動きを封じられているレ  
ッドキングの身体を貫通してハート型の穴が開く。そして4人は浄  
化のエネルギーをレッドキングに送り込んでいく

ブロッサム・マリリン・サンシャイン・ムーンライト『はあああああ  
ああああー！！！！！！！！！！』

レッドキング(母)「ピ、ピガウウウ・・・」

光がおさまるとともに正気に戻ったもう一匹のレッドキングが横に  
倒れていた。どうやら今の戦いと無理な改造がたたり体力を使い果  
たしたらしい・・・そのまま息を荒くしながら身体を休める・・・

ブロッサム「大丈夫!？」

レッドキング(母)「ピ、ピギヤウウウ(な、何とか・・・)」

マリリン「・・・改造された負担とアタシ達との戦いで体力を使い果  
たしたんだ」

サンシャイン「・・・平気でこんな事をするなんて」

ムーンライト「絶対に許せないわ！！皆私たちもティガ達の援護に  
行くわよ！！！！」

ブロッサム達プリキュアがレッドキング達を浄化し終えたその頃テ  
ィガ達はバルタンと戦っていたのだがかなりの苦戦を強いられてい  
た。バルタン特有の分身攻撃や光波バリアーという光線を無力化す  
るバリアによって3人がかりでも中々思う様に戦えないのだった。  
・此処でアースはバーンナックルで拳に炎を纏いデユナミスはデユ  
ナミスセイバーを発動させて氷の剣を造り出す。

アース「デヤアアア(うおおおおお！！！！！！)」

デユナミス「ダアアアアアアアア(はあああああっ！！！！)」

二人は勢いよく走りながらアースは炎の拳でデユナミスは氷の剣で  
バルタンに攻撃を仕掛けるのだったがバルタンが易々と攻撃をさせ

てくれるわけがなかった。

バルタン「愚かな!!」

アース・デユナミス「!!!??」

何とバルタンの腕が二人の腕を掴んでいくとそのまま勢いよく投げ飛ばされてしまった続いてティガがプロテクターにエネルギーを送り込んでティガスライサーを放つがそれは光波バリアで碎かれてしまった

ティガ「グウウ!!(強い・・・何かつけいる隙があれば!!)」

バルタン「フオフオツフオフオ!!!貴様らでは私には勝てん。大<sup>お</sup>人<sup>とな</sup>しく私の実験材料のサンプルになりたまえ!!!」

ティガ・アース・デユナミス「ウワアアアアアア!!!」

バルタンの缺から白色破壊光線が放たれると辺りを爆発させながらティガ達3人に大ダメージを与えエネルギーを消耗した3人のカラータイマーが鳴り始める。

カラータイマー「ピコンピコンピコン!!!」

ティガ「グウ!!!・・・アアツ!!!」

アース「ウウウ・・・グウフオオ・・・」

デユナミス「ガアアア・・・ウウウ!!!」

3人は悶え苦しむが決して諦めなかった・・・このまま負けるわけにはいかない・・・この町を守るのは自分達しかいないのだ・・・その使命感を胸にフラフラのカラダに鞭を打ちなんとか立ち上がるがすぐにバルタンが近づき3人に缺での衝き攻撃としなやかな足でのキックを見舞わせてふっ飛ばす

バルタン「ふん・・・キリエルが負ける理由が分からん。所詮貴様らなど下等生物と同じ。私になど勝てるわけがない!!!」

ティガ「ハア、ハア・・・グウウウ!!!」

バルタン「先ずは貴様からトドメを刺してやるう・・・ウルトラマンティガ!!!」

バルタンが最初にティガからトドメを刺そうと缺で首を掴んで持ち上げると腹にもう片方の缺を押しあてる。そして赤い光を集めてい



くと特徴的な笑い声を発する……ティガは必死に抵抗するがバルタンの鉄から逃れられない……アースとデュナミスはティガを助けようと身体を動かそうとするが力が入らず思う様に動かない……ティガもアースもデュナミスも諦めかけたその時

ブロッサム・マリリン・サンシャイン・ムーンライト「はああああああー……っ……!!!!!!!!!!」

バルタン「っ!?……グオオオオオオ!!!!??」

トドメの一撃がティガに決まる前に4つの光がバルタンの横っ腹に直撃してバルタンを勢いよく後ろにふっ飛ばした。ギリギリのところでブロッサム達がティガを助け出したのだ。

ティガ「ウワアツ……ハツ!!」

ティガは膝について呼吸を整えていた。一瞬の出来事で何が起こったのか分からなかったが声のほうを見るとそこにはブロッサム達が堂々とポーズをとり彼らの窮地に駆け付けたのだった。

ブロッサム「お待たせしました!!あの子たちは無事に助け出せましたよ!!」

バルタン「な、何い!?……私の完璧な作品が貴様ら下等生物に破られたと言うのか!」

ブロッサムはティガを労わる様に近づきレッドキング達を無事に助けた事を伝える。それを聞いたバルタンが驚きの声を上げるがそれに反論するかの様にマリリン達がバルタンのほうを睨みつける。

マリリン「あの二匹はアンタの作品なんかじゃない。ましてや町を破壊する道具でもないよ!!」

サンシャイン「平和に暮らしていたあの二匹の日常を壊した揚句自分達の目的の道具にした……その行為は決して許されないわ!!」  
ムーンライト「貴方のエゴで犠牲になったあの二匹の痛み、悲しみ、怒り……ありとあらゆる感情を受けてみなさい!!!!」

バルタン「フオフオフオフオフオ!!!!奴らの悲しみや怒りだと?笑わせる……下等生物に感情など……」  
ブロッサム「黙りなさい!!!!」

バルタン「何!？」

マリン、サンシャイン、ムーンライトが自分達の思いをバルタンにぶつけるバルタンは理解できないと彼女達をあしらう様に笑い声をあげて更に見下した言葉を発しようとしたがそれをブロッサムが無理やり止めた。

ブロッサム「先ほどから下等生物と彼らを見下していますが貴方の心のほうがよほど劣っています!!!!」

バルタン「何だと!？貴様などに私の思想など分かるわけが・・・」  
マリン「分からないよ・・・それに分かりたくもない!!!!!!弱いものを虐めて自分のいいように利用する卑怯者の思想なんかね!!」  
バルタン「き、貴様らあ!？」

ブロッサム「貴方の下らない目的の為に罪もない二匹を利用するなんて・・・私堪忍袋の緒が切れました!!!!」

マリン「海より広いアタシの心も此処らが我慢の限界よ!!!!」  
ブロッサムとマリンの決め台詞の後にティガ、アース、デユナミスの3人も立ち上がる。カラー タイマー点滅が早くなるがそれでも関係ないと構えを取りバルタンを睨みつける。

ティガ・アース・デユナミス!!!!「シャアアアアア!!!!」  
ティガ「(例え貴様の科学力が如何なるものであるうと俺達ウルトラマンとプリキュアが悪しき野望を打ち砕く!!!!)」

バルタン「己えゝ下等生物どもがあ!!!!喰らええええ!!!!」  
ブロッサム「やああああつ!!!!!!てやああああつ!!!!!!」

マリン「たあああーっ!!!!やあああ」  
サンシャイン「サンフラワー・イージス!!!!!!」

ムーンライト「ふんっ!!!!!!はあああああーっ!!!!!!」  
ティガ「ハアアアッ!!!!!!フン!!!!!!チャアアアアア!!!!!!」

アース「デアアア!!!!ハアアッ!!!!!!シャアアア!!!!!!」  
デユナミス「シュワアア!!!!!!ダアアア!!!!!!」

バルタンは自分の心のほうがレッドキング達よりも劣っていると言われると激昂して腕の鉄から赤、白の光線、光弾を放っていくがテ

イガ、アース、デユナミス、ブロッサム、マリソ、サンシャイン、ムーンライトが町に被害が及ばないように全て跳ね返す。すると光線・光弾乱れ撃ちがバルタンに返されて逆にバルタンが大ダメージを受けることとなった。

バルタン「ぐ、ああああ．．．な、何故だああ!?!」

バルタンはダメージを受けると信じられないと言う様に叫んでしまう。この隙にティガ、アース、

デユナミスの3人が必殺技の準備を始める

ティガ「ハッ!!!!!!ソーーーーーッ!!!!!!ハアアアアアアアアアアアアアアッ!!!!!!」

アース「フッ!!!!!!ハアアアアアア!!!!!!デヤアアアアアアアアアアアアアアッ!!!!!!」

デユナミス「フッ!!!!!!ウオオオオオオッ!!!!!!タアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!!!!!」

バルタン「グアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!!!!!  
!!!!!!わ、私も此処までか．．．だ、だが我々バルタンの同胞はただ全宇宙に散り散りとなっているのだ．．．その同胞が貴様らを．．  
．．グッオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ティガのゼペリオン光線、アースのボルテックストーム、デユナミスのインブレイスバーストの3大光線がバルタンの身体に放たれるとバルタンは最後の捨て台詞を吐き捨てるで大爆発を起こして消滅した。

ティガ・アース・デユナミス「ジュワアアア!!!!!!!!!!」

ティガ、アース、デユナミスの3人はバルタンの消滅を確認すると空へと飛び立っていた。

ブロッサム「ありがとうございます。ティガ、アース、デユナミス」  
その姿をブロッサム達はしっかりと見送る。戦いが終わり休んでいるレッドキング達の所に行くとGUTS隊のウィングが既に近くで着陸していたのだった。

ムナカタ「麻醉弾とワイヤーをスタンバイ」

シンジヨウ「了解!!」

ブロッサム「あ、あの!!あの二匹をどうするつもりなんですか?」  
既にムナカタが何やら準備を始めていた。まさかこの二匹を殺すんじゃない?そんな不安をブロッサムが思わずムナカタに問い掛けてしまふムナカタ「・・・心配はいりません。悪意がない以上は我々が責任を持って保護します。貴女達の努力は無駄にはしません!!」

マリ「ホントに!?!」

サンシャイン「よかつたあ!!!!」

ムーンライト「・・・宜しく願います」

どうやらあの二匹はTPCの管轄内で保護されることになるらしい。それを聞いた4人特にブロッサムは喜びが隠せなかったのだった。

カプト「ガタツク・ダークカプト・フェアリー」お〜いブロッサム!!!!」

ブロッサム「あ、カプト、それに皆さん!!」

カプト「凄かつたな4人とも」

ブロッサム「そ、それほどでもないですよ」

マリ「あ、ブロッサム顔が赤いよお〜」

ブロッサム「そ、そんなことないですよ〜」

カプトにほめられた時なぜかブロッサムは照れている仕草を見せていた為マリ達にからかわれる。そして一同は戦いで壊された町の修復を手伝いを行い一日を費やすのだった

その頃のとある海底

ダーク「バルタンめ・・・あと一步のところまでプリキュアを甘く見たな・・・まあいい。奴の同族はいくらでもいるから代わりは沢山いる。それに奴は奴で私にとっては 資源 でしかないからな」

ダークにとつてはバルタンの死などどうでもよく寧ろ使い捨ての駒としか見ていなかったのだ。下等生物と他の生物を蔑んでいたバル

タン自身もダークからすれば使い捨ての下等生物であつたと言つ事  
なのかもしれない。闇が広がる深海でダークはティガ達ウルトラマ  
ンとブロッサム達プリキュアの脅威に苛立ちが募るのだった。

## 第7話「バルタンの誤算」(後書き)

今回はバルタンを強くしすぎたかな?でもバルタンの設定を活かすならこれ位強いと思います^^;

さて次回はダークの最後の側近を紹介しようと思います。

次回もお楽しみに

## 第8話「データ収集」(前書き)

前回までのあらすじ

ブロッサム達の渾身の力がこもったフォルテツシモで二匹のレッドキング達を巢食う事が出来た。バルタンは自身の科学力に溺れた事が仇となりティガ達に逆転のチャンスを与えて3巨人の合体光線の前に敗れ去った。

追伸：ブロッサムファンの方本気でゴメンなさい！！！！どうしてもつぼ大で描きたかったんです！！！！ファンの方に不快な思いをさせてしまう事を此処で謝るとききます！！！！ 土下座

## 第8話「データ収集」

大人「ああ、身体中痛い……こりゃライダーの能力以上に性質が悪いかも」

先日の戦いのダメージが身体に残っている大人……いくら力が超人レベルでもそれを使うのは所詮は人間であるため受けたダメージはそのまま大人のカラダに蓄積されるのだった。その為今日は学校が休みである事もあり一日中家でダラつこうと思ったのだが大人の携帯が鳴る。

大人「……誰だ？……つぼみだ……どうしたんだろ？はいももし。」

電話の相手はつぼみであった。つぼみからかかってくるのは珍しいため何だろうと思つて電話に出る大人

つぼみ「もしもし大人さん今時間大丈夫ですか？」

大人「一応今日は暇だけどどうかしたの？」

つぼみ「いや、その……もしよかったら遊びにでも行かないかなと」

大人「あ、いいよどこに行こうか？」

つぼみ「実は特に考えてないんです……それに私と二人きりだと……その」

大人「ん？夕の事言ってるの？……実は俺夕とは別れたんだ」  
つぼみ「えええ！？」

大人「まあまだ誰にも言っていないから知らないのは無理ないか。だから……別につぼみと二人だけでも問題ないよ？」

そう実は大人と夕は別れていたのだ。理由を話すと長くなるのだが簡潔に言うとうと大学に入ってからお互いに夢を目指す事に集中することとなりお互いに『仲間』である関係は変わらないのだが『恋人』としての関係は解消することでお互いに同意したのだった。因みに言いだしたのは大人に告白した夕であった。



つぼみ「・・・（なら私にもチャンスがあるかもですね）だったら映画にもどうぞでしょ？」

大人「映画かあ〜そう言えば映画館では長らく見てないな。じゃあそうしようか」

つぼみ「はい！！じゃあお昼過ぎに植物園に集合しましょう。」

大人「ほいほい〜じゃあ昼過ぎに〜」

大人はそれだけ言うと電源を切る。これは色々と楽しみだと大人は痛みが走る身体を動かして荷支度をすませようと動きだす。つぼみとのデートがそれだけ楽しみと言う事なのだろう

その頃のとある海底のダークがいる玉座の間では

ダーク「キリエルもバルタンも使い物にならんな・・・こうなれば私が・・・いや邪神復活の為に私の闇が必要であるが故に迂闊なことはできん・・・くっ！！！」

とある海底でダークは苛立った態度が隠せなかった。キリエルに続きバルタンの作戦も失敗したのだから当然と言えば当然だ。バルタンのおかげで怪獣たちと言う資源は手に入ったがプリキュアがいる以上また浄化されてしまうのが落ちである事は明白だった・・・こうなれば自分が出るしかないかもしれないとダークは一瞬考えるが邪神復活の為に自分の『闇エネルギー』が必要であるため自分かもし万が一負ける様な事があれば全てが水の泡となるため迂闊なことは出来ない・・・ではどうすればいい？と考えているところの一つの影が彼に近づいていた。今度は人間の女性のような影だった。

????「ダーク様・・・今度は私が」

ダーク「お前はサロメ星人のドクタークレイズ・・・プリキュアに有効な作戦があるか？」

クレイズ「はい。対プリキュア兵器は完成しつつあります・・・しかし完成の為に3年前に砂漠の使徒の科学者のサバクが残した研究の『遺産』に適合できる者が必要です・・・私は『月の影』

と呼んでおりますが」

ダーク「『月の影』とは例のアレか？……だがアレはムーンライトに敗れたと私は記憶しているぞ？一度破れた者が勝てるとは思えぬが？」

サロメ「ご安心を……私の作戦に狂いはありません。必ず《適合者》をみつけたします。そして対ウルトラマンの兵器は我々サロメの高度なロボット技術にお任せを。オリジナルのデータ収集の作戦も既に考案済みでございます。」

ダーク「いいだろう。キリエル人やバルタンの二の舞にらん事を期待しよう……行け！！」

サロメ「ははっ！！！！」

クレイズは闇の扉から姿を消す。対プリキュア用の兵器の『月の影』とは一体何なのか？そしてクレイズがいうサロメのロボット技術とは

つぼみ「ちよつと早すぎましたね……はあく初デートなだけに緊張します」

ちなみにつぼみはこれが初デートであり前日にえりかといつきからアドバイスを受けたがそれでもかなりの緊張してしまっているのであった。

大人「ちよつと早かったかな？……そうでもなかったみたいだ。おっい！！待った？」

つぼみ「いいえ。私も今来たところですから」と、とうとうこの時が来ちゃいましたあく。物凄く緊張します」

とか言いながら実際は緊張のあまり30分前から待っていたつぼみである。前日えりかといつきに協力してもらいデート用のコーディネートを手伝ってもらった事などいろいろと準備はコッソリとしてきているのであった。

大人「（つぼみってこんなに可愛かったっけ？……な、なんだろ？今日は可愛く見えるぞ）」

今日のつぼみのコーディネートに心の中でそんな叫び声をあげてし

まう大人・・・何せつぼみのイメージは未だに自分の妹の様なイメージしかない為『可愛い』という感情が今まで芽生えていなかった・・・だが今日は違った。一人の女の子としての魅力が今日は感じられたのだった。

大人「じゃそろそろ・・・行こうか？」

つぼみ「は、はい!!」

お互いにしばらく心の中でいろいろ考えていたがそろそろ出掛けようかと大人が声を掛ける。つぼみもそれに合わせて一緒に植物園から出口へと歩く。しかし実はその後ろには・・・

えりか「昨日突然デート用のコーデを教えてくれって言うからおかしいと思ったらこう言う事だったんだあ〜」

いつき「つぼみは大人さんに気があるみたいだね。意外だったなあ〜」

ゆり「ええ。でも大人と夕が別れていたって言うのも新事実ね。(本当はこう言う事したくないけど・・・つぼみと大人の事が気になっちゃうし・・・今回はいいわよね・・・)」

なんと植物園の物陰でえりか、いつき、ゆりの3人がつぼみの応援(本当は興味本意)をしようと実はえりか経由で様子を見に来たのだった。応援というよりは殆ど面白半分の行動にしかみられないが・・・そんな監視(えりか達)があるとは知らないで二人は色々雑談しながら目的との映画館にたどり着いた。

大人「色々あるね〜つぼみは何見たい？」

つぼみ「そうですね。アクション系もいいですけど恋愛ものも捨てがたいです!!」

大人「う〜んどうしようかなあ。」

えりか「映画で何を見るかで悩んでるみたいああ〜もう何かじれったいなあ!!!」

いつき「つぼみはともかく大人さんも結構優柔不断みたいですね」  
ゆり「まあいいんじゃない？二人ともそう言う所は似てるんだし」

二人が何を見るかで悩んでいるすぐ近くでえりか達は歯がゆそうに状況を見ていた。するとやっと決まったようである。今回はどうやらアクション系映画にしたらしい。

大人「先に行つてくれ飲み物とか買つてくるから」

つぼみ「分かりました。」

つぼみを先にシアターに行かせて大人は何か飲み物でも買おうとシヨップに行くのだがその途中で見覚えのある顔が見えた・・・

大人「・・・今えりか達が見えたような？気のせいか？おっと早くしないと映画が始まつてしまう」

そんな疑いを持ちつつも大人はつぼみを待たせては不味いと思ひ急いで適当に飲み物とポップコーンを買いつぼみがいるシアターへと向かうのであった。

えりか「あ、危なかつた（汗）」

いつき「大人さん感が鋭いから見つかるかと思つたよ」

ゆり「私達も映画見に行きましょうか？」

えりか「そうですね〜つぼみの事が気になるし!!」

いつき「（まだ続けるんだ）」

えりか達も大人とつぼみに見つかからないようにチケットを買いに行き同じシアターで映画を見ることにした。そして映画が終わり今度は近くの遊園地に行く事になった。

大人「いろいろ増えてるな〜小さい頃言つて以来だから懐かしい」

つぼみ「ホントですね。何から乗りましょう!？」

大人「やっぱり最初はアレでしょ!!」

つぼみ「ですね!!いきましよう」

というわけで最初に乗ったのは定番のジェットコースターにのりその次はコーヒーカップ、ゴーカートと色々なアトラクションを堪能する。そして最後はやはり定番の観覧車に・・・

大人「うわぁ〜いい眺め」

つぼみ「うう〜（汗）」

大人「あら？どうしたつぼみ・・・あ、もしかして高いところダメだった？」

つぼみ「は、はい・・・観覧車だから大丈夫だと思っただんですけど・・・やっぱり駄目でした（泣）」

大人「あらら（汗）。でも大丈夫だよ俺がそばにいる」

つぼみ「あ・・・／＼／＼（大胆すぎです・・・は、恥ずかしい）」  
大人は高い景色に怯えるつぼみの手を掴んで落ちつかせる。つぼみは大人の大胆な行動に顔を赤くする・・・そして観覧車の中でいいムードとなる。

大人「はあ〜今日は楽しかった！！」

大人は身体を伸ばし今日一日の事を振り返った。久々にこんなにリフレッシュ出来てかなり充実した一日だった。大学に入ってからは一人でいる事が多かったからこんなに楽しくて充実したのは本当に久しぶりだったのだ。

つぼみ「そう言ってくれると嬉しいです・・・あ、あのもしよかつたら・・・また誘っても？」

大人「勿論！！」

つぼみ「あ、ありがとうございます！！じゃ、じゃあ今度は何処に行きましょう!？」

大人「おいおい。そんなに急がなくても」

つぼみ「あ、すみません（汗）」

大人「ははっ　そう言う所は変わらないね」

えりか「いいムードじゃん」

いつき「二人ともお似合いって感じ」

ゆり「ホントね。楽しそう」

後ろにはとある3人組が様子を見ているがそんな事に気がつかない二人は遊園地での帰り道中昔の事や自分の夢の事そして今の事を語り合った。つぼみは植物学者になる事が夢は変わらないらしい。そして宇宙に美しい花や大地を作りたいそんな大きな夢を持っていた。そのためにも今大人がいる明堂院大学の進学を考えているとか。ま

さに最高のムードだったのだが突然二人のムードをぶち壊す輩が町に出現するのだった。

テレスドン「グオオオオオオオオ！！！！グアアアアアアア」

大人「ちょよ・いきなり怪獣が出た」

つぼみ「！！！！（折角楽しんでいたのに……もう！！！！）」

えりか「ちよと二人とも何ぼつとしてんの！！！！」

大人「！？……えりか、いつきにゆりまで何でここにいるの？」

えりか「え？……あゝそれは色々と……ってそんな事は後でいいから今は町を守るよ！！！！」

つぼみ「はい！！！！」

大人「つぼみ達は奴の気を引いていてくれ。俺は町の人々の避難と琢磨達に連絡を取るから！！！！」

いつき「分かりました！！！！」

大人は近隣の町に被害が出る前に避難誘導をするとその場を後にする。当然目的はそれだけではない。

ゆり「皆いくわよ！！！！」

シプレ・コフレポプリ「『プリキュアの種いくですう……！！！！』

つぼみ・えりか・いつき・ゆり「『プリキュア・オープンマイハ―

ト！！！！！！』

ゆりの合図に全員突如現れた地底怪獣テレスドンに全員の視線が一転に集まると光に包まれて私服を光を放つワンピースの様な姿に代わるところの種を妖精達に召喚させてソレを変身アイテムのココロパヒューム、シャイニーパヒューム、ココロポットに装填しつぼみ、えりか、いつきは光の香水を浴びプリキュアのコスチュームを装着しゆりはココロポットから放たれる藍色と銀色の光に包まれてプリキュアコスチュームを身体に纏う。全員が変身完了し4人でポーズをビシッと決め名乗り上げに入る。

ブロッサム「大地に咲く一輪の花キュアブロッサム！！！！」

マリリン「海風に揺れる一輪の花キュアマリン！！！！」

サンシャイン「陽の光浴びる一輪の花キュアサンシャイン!!!」  
ムーンライト「月光に冴える一輪の花キュアムーンライト!!!」  
ブロッサム・マリリン・サンシャイン・ムーンライト「ハートキャッチプリキュア!!!」

テレスドン「ギシャアアア!!!」

ブロッサム・マリリン「はあああー!!!」

テレスドンに先制攻撃とブロッサムとマリリンのダブルパンチがテレスドンの腹部に叩きこまれるがテレスドンの堅い皮膚には通用しない。

ブロッサム「な、なんて硬さなんですか？」

マリリン「まるで鋼鉄だよ」

テレスドン「ガアアアウウウ!!!」

ブロッサム・マリリン「きゃあああああ!!!」

テレスドンは強靱な肉体の防御力をブロッサム達に見せつけると今度は此方の番だと巨大な腕をブロッサム達に叩きつけてブロッサムとマリリンを町のほうに思いつきり吹っ飛ばすがそれをサンシャインとムーンライトが受け止める

ブロッサム「あ、ありがとございます」

マリリン「なんてパワーなのよ・・・あの堅い身体にはアタシ達の攻撃は通用しないよ!!!」

サンシャイン「せめて町を守る事が出来れば・・・」

ムーンライト「こうなったら一気に決める方がよさそうね。皆でフ

ォルテウェイブを!!!」

ブロッサム・マリリン・サンシャイン「はい!!!」

ブロッサム・マリリン・サンシャイン・ムーンライト「集まれ花のパ

ワー!!!」

ブロッサム「ブロッサムタクト!!!」

マリリン「マリインタクト!!!」

サンシャイン「シャイニータンバリン!!!」

ムーンライト「ムーンタクト!!!」

ブロッサム・マリリン・サンシャイン・ムーンライト「はああ!!!」  
こうなれば一気に浄化して大人しくしよう全員がクリスタルに手  
をあてそれぞれブロッサムタクト、マリインタクト、シャイニータン  
バリン、ムーンタクトを召還させるとそれぞれクリスタルドームを  
回していつてエネルギーをタクトとタンバリンに充填させる。

ブロッサム「花よ輝け!!!プリキュア・ピンクフォルテウェイブ!  
!!!」

マリリン「花よ煌めけ!!!プリキュア・ブルーフォルテウェイブ!!  
!」

サンシャイン「花よ舞い踊れ!!!プリキュア・ゴールドフォルテバ  
ースト!!!」

ムーンライト「花よ輝け!!!プリキュア・シルバーフォルテウェイ  
ブ!!!」

全員の必殺技がテレスドンに叩きこまれ浄化の手順に入ろうとした  
がその瞬間に新手が出現しブロッサム達に光線が放たれる。

ブロッサム・マリリン・サンシャイン・ムーンライト「うわああああ  
あっ!!!!!!」

何とテレスドンの援軍として用心棒メカ「グランドランザー」と呼  
ばれるドクタークレイズのロボットメカが2体現れる。いくら自分  
たちが持つプリキュアの力が浄化の属性があるとしてもそれは「心」  
があるものにしか通用はしない・・・機械相手にはまったくもって  
無意味なのだ。ブロッサム達はそれでもあきらめずに立ち向かうが  
体力だけが消費されていく一方ロボットのグランドランザーやテレ  
スドンは体力ではかなり上回り持久戦では不利だった。

ブロッサム「はあ、はあ、はあ・・・このまま持久戦になれば私達  
が不利です」

マリリン「あの真中の奴はともかくあの二体のロボットにはアタシ達  
の必殺技は通用しないよ!!!」

サンシャイン「どうすれば・・・」



ムーンライト「弱音を吐くのは止めなさい！！私達は絶対に負けられないのよ？」

ムーンライトはそう言って励ますが実際には自分たちが不利なのは明らかであり諦めなくなる気持ちは分かる。だが自分達が諦めてしまったら町は破壊され人々に絶望に落とすことになる。だがその気持しさえも撃つ砕くかのようにテレスドンと二体のグランドランザーが炎をブロッサム達に向けて放つ。

サンシャイン「サンフラワー！ージス！！！」

サンシャインが特大の光の盾で炎を防御する。だが3体の合体攻撃の勢いに押され始め盾の真中から全体に亀裂が走る・・・このままでは碎けて自分ごと町が全てが炎に包まれてしまう・・・サンシャインは踏ん張るが限界が近づく・・・そしてテレスドン達が炎の勢いを上げてきたその時・・・

突如青白い光線が炎を消し去った。そして今度は赤い光線と青の二つの光線が3体の怪獣に降り注ぐ。

ブロッサム・マリリン・サンシャイン・ムーンライト「！！！？？」

ティガ「チャアアアアア！！！！」

アース「デヤアアアア！！！！」

デュナミス「ハアアアアア！！！！」

その正体はティガ、アース、デュナミスの3人のウルトラマンであった。ティガが飛行しながら両腕を光させて後に前方に突き出す事で発射される『ハンドシユーター』で炎を相殺しその隙にアースの炎属性を持つ光線『バーニングシユート』、デュナミスの水の属性を持つ『スプラッシュトルネード』が2体のグランドランザーとテレスドンに当てて3体を怯ませる。

ティガ「ハッ！！」

アース「フッ！！」

デュナミス「シャア！！」

3人は地上の降り立つや否やティガはテレスドンにアースとデュナ



ースのボルテックストームがグランドランザーに叩きこまれて大爆発を起こす。

デュナミス「ハアアツ!!」

グランドランザー「ギガガガガガガツ!!!!!!」

デュナミスと二体目のグランドランザーの闘いもデュナミスのデュナミスセイバーの剣サバキと素早さを活かした攻撃に圧倒されていた。やはりマシーンと言う心がない相手にはウルトラマンの相手にはならないと言うことらしい。

デュナミス「フン!!!!ハアアアアア」

そして止めのインブレイスバーストがグランドランザーを突き破り大爆発を起こして消滅するのだった。そして残ったのがテレスドンだけとなった。

ティガ・パワータイプ「チャアアアアア!!!!!!」

テレスドン「ギシャツウウウウウ……ギシャアアアア……

」

パワータイプ力あふれる攻撃にテレスドンとの闘いにも決着がつきそうであった。フラフラになりながらも何とか立ち上がるテレスドンにティガ・パワータイプは止めの一撃の準備にかかる。

ティガ「ハツ!!!デヤアアアアアア!!!!!!……ハアアアアアア!!!!!!」

両腕を左右から上にあげ、胸の前に高密度に集めた超高熱の光エネルギー粒子の塊を作りだしそれを相手に向かって投げつける。これぞティガ・パワータイプの必殺技のデラシウム光流である。

テレスドン「ギャアアアアアアアウウウウウウ!!!!!!」

カラータイマー「ピコンピコンピコン」

ティガ・アース・デュナミス「ジュワアア!!!!!!」

デラシウム光流を受けたテレスドンは断末魔の悲鳴を上げると大爆発を起こして消滅した。そして構えを解き集まった3人は空を見え

げるとそのまま飛び立っていった。

ブロッサム達も変身を解きふうくとため息をついたとこまでは良かったのだがつぼみは何か言いたげに3人を見つめていた。

つぼみ「ところで3人とも何であのタイミングで現れたんですか？」

えりか「あ、それはそのお（汗）」

大人「もしかして俺達二人の事をずっと見てたんじゃないの？映画館の時から」

いつき・ゆり『（ギクウ！！）』

大人「凶星か・・・」

つぼみ「もう、恥ずかしいじゃないですかあ！！！」

えりか「ごめんごめん」

つぼみは顔を赤くしながらえりかを追っかけえりかはそんなつぼみから逃げ回る。いつきはゆりはそんな姿を見てにこやかに笑う。こんな平和な時間を守るためにウルトラマンの力があるのかもしれない。だったらこの力は人を守るために使おう大人はそんな思いの中ウルトラマンティガとして戦う事に完全に迷いがなくなったのだ。

クレイズ「バルタンが捕まえてきた怪獣も少しは使えるじゃない・

・これでウルトラマンのデータは完全に集まったわ。あとは月の影の適合者さえ見つければ」

サロメ星の科学者ドクタークレイズはその姿を別の所から眺めているのだった。あの3体の怪獣たちも彼女の仕業であるのだがそれは『データ採取』が目的であり初めから期待などはしていなかったのだ・・・ウルトラマンのデータは集まったから後は『月の影』の適合者を探し出す事であった・・・そしてまた同じころ・・・

????「此処が・・・希望ヶ丘・・・」

希望ヶ丘の入り口である少女が立っていた・・・それがクレイズ

の探している人物なのか？・・・そして『月の影』とは一体何の事を言っているのだろうか？

## 第8話「データ収集」（後書き）

最後の幹部の宇宙人を誰にするかで時間がかかってしまいました（汗）  
いやあ〜恋愛描写はやはり難しいですね・・・何せ作者の私が経験  
あまり・・・ゲホゲホ・・・失礼^^；  
そしてもう一度言います。ブロッサムファンの方本気にゴメンなさ  
い!!!!!!

次回もお楽しみに

## 第9話「漆黒の戦士」(前書き)

前回までのあらすじ

ダークの新しい刺客ドクタークレイズが3人のウルトラマンのデータを収集するべくテレスドンとグランドランザーを送り込みデータ採取を行い次の作戦の準備にかかっていた。そして同じころ希望ヶ丘に謎の人物の影が・・・

## 第9話「漆黒の戦士」

????「此処が希望ヶ丘・・・此処に私の探しているものがあるかもしれない」

希望ヶ丘の近くの丘で少女が町を見下ろしていた。此処が自分が長い間探していたものが見つかるかもしれない。3年間という長い間ずっと探していた大切なものがこの町にあるかもしれない・・・少女はその希望も思いを胸にゆつくりと丘から町へと歩いて行った。

その頃海底ではクレイズがダークに呼び出され状況報告を行っていた。ダークは何やら深刻そうな声を上げながらクレイズに話しかけるのだった

ダーク「クレイズよ。早速だが対ウルトラマン用の兵器の製作度合いはどうなっている？」

クレイズ「順調でございます。先日のテレスドンとグランドランザーから採取したウルトラマンのデータをフル活用し急ピッチで製作を。」

ダーク「・・・では 月の影 の適合者は？」

クレイズ「現在全力で調査を行っておりますが中々適合者らしき人物は・・・」

ダーク「そうか・・・では出来る限り早く適合者を探し出せ。」

クレイズ「はっ!!!」

ダーク「ついでにお前にいい情報を与えよう。かつてこのダークがキュアアンジェと光の戦士ウルトラマン達に敗れたのは奴らが強かったのもあるがそれ以外にこころの大樹の持つ奇跡とウルトラマンの持つ光が融合した事が大きな敗因だった・・・」

ダークはかつて自分がこの地球に来た時の事を思い出していた。

あの時はプリキュアも一人だけでプリキュア自体は大した事はなかったのだがそれを補うかのように手強かったのは光の戦士ウルトラ



マンであった。だが俺は最後の決戦時にプリキュアの力をを甘く見たことで屈辱にも戦いに敗れこの漆黒の海底に封印される事になった。あの時の奇跡の力の正体は分からなかったがあんたの力さえ潰せていけば……

その後悔に怒りがこみ上げてくるダーク……だからこそ今回は邪神を復活させて攻撃の手を完璧にさせれば今回は絶対に負ける事はない……より慎重になっている理由の要因である。

クレイズ「こころの大樹の奇跡とウルトラマンの光？」

ダーク「そうだ。あの時邪神が復活していればそれぞれ一つずつを潰す事はたやすかったのだが邪神の復活が間に合わなかった事も重なり私は敗れることとなった……故に今回は邪神復活に専念することにしたのだよ。その時間稼ぎとして宇宙や別次元から貴様らを呼び寄せた。」

クレイズ「……ではそれを肝に銘じ必ずプリキュアとウルトラマンを我が手で息の根を」

ダーク「期待しているぞクレイズ……お前が率いるサロメ星の精鋭部隊のロボット技術と科学力は私も高く評価している。バルタンやキリエルと違ってな。では行けクレイズ！」

クレイズ「ハハッ！！！」

クレイズは玉座の間から闇の扉を使い出ていく。残されたダークは海底の闇の中でかつての闘いの事を思い出していたのであった。

闇の扉を潜り出てきた所はサロメの拠点としている超巨大工場であった。此処はサロメの科学の中枢ともいえここで先日襲撃させえたグランドランザーも生産されているのである。そして今此処に対ウルトラマン用の兵器が造られているのである。

クレイズ「どう？完成度合いは」

助手「順調ですドクタークレイズ。これこそあと少しで完成します対ウルトラマン用の兵器が」

クレイズ「ふふ。データは完全に集まっているわ……これが完成

すればバルタンやキリエル人をも配下に置く事が出来る。そして我々サロメがダーク様の最高幹部の座に！！」  
クレイズは笑いが止まらなかった。何故ならば今製作している兵器は完璧であり負ける要素がないと考えているからである。

全く同じ頃の希望ヶ丘のとあるスーパーに大学の授業を終わらせたゆりがいた。

ゆり「今日はどうしようかな。昨日はシチューだったから今日は和物で行こうかしら」

ちなみに今日の夕食担当はゆりであるため買い出しもゆりがしているのである。そしてしばらくして大体食材を買い取ったので食材を持って帰宅しようとするゆり。その帰り道・・・  
ゆり「ちよつと買いすぎたかな？」

買い物袋を持ってゆりは自宅の帰り道を歩いていくのだが珍しく食材が安かったので買いすぎてしまった。生ものもあるしとにかく急いで帰ろうと急いで歩いていると・・・  
???「きゃっ!?!」

ゆり「わっ!?!・・・ごめんなさい!!大丈夫ですか？」

急いでいた事もあり人とぶつかってしまった。買い物袋に入っていた野菜などの食材が道にこぼれてしまった。ゆりには珍しい事である。ぶつかってしまった相手はつぼみやえりかと年があまり変わらない少女で特徴的なおかつば頭誰かに似ている雰囲気があった。

???「私は大丈夫ですよ。貴女は？」

ゆり「大丈夫です。すみませんぶつかってしまっ

???「いえいえ。それにしても多い荷物ですね。よかったら運ぶのを手伝いましょう。」

ゆり「あ、でもそんな事出来ませんよ。」

???「いいえ。またぶつかってしまう事もあるかもしれません。」

それに此処で会ったのも何かの縁です。手伝わせてください」

ゆり「・・・そこまで言われると断れませんね。じゃあお願いしま

す」

ゆりはその少女の行為に甘え食材を家まで運んでもらうことにした。その途中で色々雑談しながら時間が流れていった。彼女の名前はアンナという名前で記憶がないため旅をしているらしい。

ゆり「じゃあアンナさんは記憶を探す為にいるんなところに旅を？」  
アンナ「はい。私がどこで生まれたのか、親はいるのか、兄妹はいるのか、その答えを探す為に色々旅をしているんです。記憶があるのは旅を始めた3年前からしかなくて・・・」

ゆり「・・・3年前・・・」  
アンナ「どうかしたんですか？」

ゆり「え？・・・何でもありませんよ。ただ3年前には私もいろんな事があつたんです。本当にいろんな事が」

3年前・・・それはゆりにとって数多くのモノを失った年であり数多くの大切なものを貰った年でもある。思い返すと色々な事があつた。

最初は私の心に深い傷を付ける事が多かった。父の失踪のすぐあとに私はこのころの大樹に選べれてキュアムーンライトとして砂漠の使徒との戦いを始めた。その時出会った相棒の妖精コロソ。

彼が最初の失った大切な人だった、彼は私が強さを過信した事と誰も傷つけないと言うエゴのせいで私をサバクの攻撃から守って死んでしまった。このころの大樹の奇跡で魂は無事であつたけれどもう二度と彼の体に触れることも会う事も出来ない。

2番目はダークプリキュア。彼女は私を光自分を影と称して私を着け狙っていた。その本当の理由はサバクが・・・いいえサバクとして砂漠の使徒に協力していた私の父に自分を一人の娘として認めてもらいたかったからだだった。そして父は言った。ダークプリキュアはお前の妹だと。私は妹を殺してしまったのだ・・・。

そして最後の失ったのは私の父だ。父は私を砂漠の使徒のボスの破壊王デューンから守るために自分の身体を犠牲にして消滅してしまつた・・・。

私は何度も何度も絶望のどん底に叩き落とされた。父を失った時は憎しみに染まり怒りにまかせて戦おうとしてしまった。でもそんな私を支えてくれたのがつぼみ、えりか、いつき、大人、琢磨、傑、夕という仲間たちだった。特に私を慕ってくれたつぼみに私は助けられ励まされ道を踏み外すことなく自分をプリキユアとして戦わせてくれた。最初は危機感がなく彼女たちを戦わせることになった自分が不甲斐無くて情けなくて彼女たちに冷たくしてしまっていたがそれでも彼女達は私の過去に何があったかを知ると心配してくれた。その時に私は仲間の大切さに気がついたのだ。だから私にとってあの3年前の闘いはつらく苦しい事もあったけどそれ以上に私に大切なものを教えてくれた宝物でもあるのだ。今も振り返れば懐かしい

．．．  
「

アンナ「そうなんですか．．．私も失った記憶には何か大切なものがある気がしてならないんです．．．だから必死になって探しているんですけど中々見つからなくて。この街に来たのも手掛かりが無いかと思ってなんですよ」

「　　貴女の大切な記憶が」

アンナ「ありがとうございます」

アンナはゆりに笑顔で例を言った。ゆりは彼女の顔を見て誰に似ているかがやっと気がついた．．．ダークプリキユアに．．．妹に似ているのだ．．．でもそんなはずはない。彼女は死んだのだ．．．私がこの手で殺したのだから．．．他人の空似だろう．．．自分にそう言い聞かせて無理矢理に納得させた。

そしてしばらくしてゆりの自宅のアパートにつき部屋の入口まで荷物運ぶ。

ゆり「ありがとうございます。助かりました」

アンナ「いえいえ。それほどの事でもないですよ。では私はこれで

．．．  
「

アンナがそう言うつと一礼して立ち去ろうとしたがゆりは彼女を引き

とめた。

ゆり「待つて。よかつたらご飯を食べていきませんか？」

アンナ「え？しかしいきなり見ず知らずの者がそんなお世話になるわけにはいきませんよ。」

アンナはそんなつもりはないと断ろうとしたのだがそれに対するかのように腹の虫がなつた・・・思わずアンナは顔が真っ赤になるがゆりは笑いながら彼女を見つめて遠慮はいらないと言う。

ゆり「でもお腹は正直みたいですよ？それに貴女も言ったじゃないですか。『此処で会つたのも何かの縁』だつて。だから夕食ぐらいはご馳走しますよ」

アンナ「・・・ではお言葉に甘えて・・・」

顔を真っ赤にしてアンナはゆりの行為に行為に甘え夕食をご馳走になる事になつた。ゆりは久々のお客に腕によりをかけて夕食を作つた。

アンナ「ゆりさん凄いですね！！こんな色々なものが作れるなんて」  
ゆり「お母さんと二人で暮らしてるから料理は自然を覚えちゃったんです。」

アンナ「へえ〜凄いですね。家庭的です！！」

ゆり「そんなことないですよ」

感激のアンナの顔を見て同じように笑顔を返す。そして二人で食事を頂く。

アンナ「ご馳走様でした！！美味しかったですあ〜」

ゆり「お粗末さまでした。口にあつたようでよかったです」

アンナ「いやあ〜ホントにおしかったです」

味もかなりものでアンナは大満足のようであつた。外を見ると既に日が落ちていて夜となつていた。満月の月明かりが辺りを照らす。

アンナ「さてと・・・夕食もご馳走になつたしそろそろ私は」

ゆり「何処か行くあてはあるんですか？」

アンナ「いえ特には・・・」

ゆり「だつたら今日は泊つていってくださいますよ。同じ女の子をこん

な夜に一人にするわけにはいきませんから」  
アンナ「・・・なんかすみません。色々」  
ゆり「いいえ。これもついでですから」

アンナは今夜は成り行きでゆり家に泊まることとなった。勿論最初はそうも出来ないと思ったが彼女の行為であるなら仕方ないとお世話になることとなった。そして翌日。

ゆり「ん・・・はあくよく寝た。ん？置手紙・・・」

目が覚めたゆりが最初に目に留まったのはテーブルに置いてあった置手紙だった。内容はアンナからの感謝の言葉が記されていた。

ゆり「ありがとうございます・・・かそう言うのは直接言うてほしかったのに・・・」

ゆりは何やら残念そうにそう言うと大学へ行く荷支度を終わると家に鍵をかけて外に出るのだが・・・その瞬間近くで爆発音がした。

ゆり「!?!?・・・何？」

外を見ると巨大な何かが町を破壊していた・・・その身なりは何と

ゆり「あれは・・・ティガ!?!?・・・でも色が違う・・・町  
の被害を食い止めなけい!!」

その正体はなんとウルトラマンティガに似ている巨人であった。だがラインは黒と赤で目は赤く日光りを放ち町を黒い光線を放って破壊の限りを尽くしていた・・・ゆりは鞆からこころポットを取り出す。

ゆり「プリキュア・オープンマイハート!!!」

ゆりの姿が私服から光のワンピース調の姿になり眼鏡もなくなり辺りが藍色の光が放たれる、そして藍色の種を取り出しそれをココロポットにセットしてココロポットをつまみを回転させて種をココロポットの中に入れると藍色の光に全身が包まれていく。そして髪の色は黒からムーンライトのシンボルカラーの藍色に変化し光のワン

ピースもプリキュアのコスチュームへと変わっていった。

ムーンライト「月光にさえる一輪の花キュアムーンライト!!!」

ムーンライト「止めなさい!!!これ以上待ちを壊すのは私が許さない!!!」

ムーンライトはティガに似た巨人の前に立つとそう命令口調で言い放つが巨人は聞く耳を持たなかった・・・

ティガ?「・・・チャアア!!!」

ムーンライト「あれはティガのゼペリオン光線!!!??・・・私がよけたら町が!!!ムーンライト・リフレクション!!!」

ティガの必殺技のゼペリオン光線に似た黒い光線をムーンライトに向けてはなってきた。アレをまともに受けたら自分諸共町が全滅してしまう。ムーンライトは急いでムーンライト・リフレクションを発動させて何とか被害のない場所に跳ね返す。巨人の方を見てみると手に青い氷の剣が発生していた。

ムーンライト「なんとか町は無事みたいね・・・今度はデユナミスのデユナミスセイバー!?!」

巨大な氷の剣が振り回されるがムーンライトは自分が小さい事を利用して何とかかわしながらも攻撃を仕掛けるのだが全く手ごたえがなく体力だけが削られていく。

ムーンライト「はあ、はあ、はあ・・・このままじゃ体力の差で私が負ける・・・でも絶対に負けるわけにはいかない!!!」

息を切らしながらもムーンライトは必死にあの巨人に対抗できる策を考えていたが力も体力も自分にとって明らかに不利・・・でも諦めるわけにはいかない・・・自分の大好きな町を・・・大切な人々を守り抜くために!!!

ムーンライト「花よ輝け!!!プリキュア・シルバーフォルテウェイブ!!!」

ティガ?「ハアアアアア!!!!!!」

ムーンライトはムーンタクトを取り出し必殺技のシルバーフォルテ

ウェイブを放ち一気に決着をつけようとしたがそれに対応して巨人は黒いゼペリオン光線を放って二つの技がぶつかり合う。その直後に大爆発が起きて辺りに爆風が漂う。

ゆり「あああ．．．くっ．．．なんて強さなの」

結果はムーンライトが力負けして変身が強制解除されてしまった。

ゆりの元に巨人が迫る。自分も此処までかとゆりは諦めたように目を瞑る．．．だがその彼女に諦めるなど言うかのように自分に向かってきた人影がいた．．．その正体は．．．

ゆり「．．．？．．．あ、貴女は」

アンナ「ゆりさん大丈夫ですか？．．．次は私が行きます」

ゆり「だ、ダメよ！！普通の相手が敵う相手じゃ．．．」

アンナ「大丈夫です．．．私には特別な力があるんです．．．だから貴女は逃げてください」

ゆり「特別な力？．．．」

なんと自分を助けたのはアンナだった。そしてアンナは黒いステッキ状で先端が青い宝石がついたアイテムと黒いプリキュアの種のようなものを取り出す。

ゆり「（．．．プリキュアの種．．．まさか）」

アンナ「プリキュア・ナイトイリリュージョン！！！」

アンナは私服からつぼみ達他のプリキュアとは違う黒い光を放つワンピース調の衣装に変わると黒いステッキのロッド部分を伸ばすとその中に黒いプリキュアの種を装填する。すると彼女の周りに黒い光が集まり黒いワンピースから黒を強調したコスチュームに変化する。その姿はダークプリキュアにそっくりであったが何処か雰囲気違った。

アンナ？「漆黒の闇から生まれた戦いの戦士キュアナイト！！！」

ゆり「キュアナイト？アレがアンナさんの特別な力？」

ゆりは目の前にいるのがダークプリキュアではないかと一瞬疑ってしまった。なぜなら漆黒の翼がない事以外はダークプリキュアに姿がそっくりであったからだ．．．でも彼女は確かに名乗った キュ



アナイト と・・・そしてアンナが変身したキュアナイトは黒いマントを身に纏うとティガに似ている巨人の前に飛び上がっていったキュアナイト「無益な破壊を行うものは許さない！！お前を闇に沈めこの町の人を守ってみせる」

サロメ星人が拠点とする本部の大ホールではその様子がリアルタイムの映像として送られていてそれを見ていたドクタークレイズはにやりと笑みがこぼれていた。

クレイズ「ふふっ 見つけたわよおゝ 月の影 の適合者・・・まさか希望ヶ丘市にいたなんてね灯台もと暗しとでもいうやつかしら？それとも影は光に無意識に近づくのが宿命なのかしら？・・・さあ見せてもらおうかしらお前の腕を・・・行きなさい！！ウルトラキラートリニティ・・・3人のウルトラマンの力が融合した対ウルトラマン最強兵器よ！！」

そうあの巨人の正体はサロメの科学力と3人のウルトラマンのデータをもとに造られた最強ロボット兵器 ウルトラキラートリニティであったのだ。突如現れた漆黒の戦士キュアナイトとウルトラキラートリニティ・・・果たして両者の実力とは！？

## 第9話「漆黒の戦士」（後書き）

はい。オリジナルプリキュア『キュアナイト』の登場です!!! ^^  
^プリキュアのネタ考えるのに3日もかかってしまった(汗)。  
さて今回はキュアナイトの技およびバトル回になると思います。そ  
してまた更新が遅れてしまつかもしれませんが気長にお待ちくださ  
い!!!

次回もお楽しみに

## 第10話「アンナの過去」(前書き)

前回までのあらすじ

突如町にティガそっくりな巨人が現れ破壊を開始した。その正体はドクタークレイズ率いるサロメ精鋭部隊が製作した対ウルトラマン用兵器『ウルトラキラートリニティ』であった。ムーンライトの攻撃は通用せずに変身が解除されてしまう。

絶体絶命のその時ゆりを助けてくれたのはもう一人のプリキュアであった

## 第10話「アンナの過去」

ウルトラ  
Uキラートリニティ「……ハアアッ!!」

ティガの姿をしたその名はウルトラキラートリニティ。ティガ、アース、デユナミスの3人のウルトラマンのデータを集め3人の必殺技が使えるようにしたクレイズが最強を自称するロボット兵器である。

ウルトラ  
Uキラートリニティは新しい戦士キュアナイトに黒いハンドスラッシュを放って攻撃を仕掛けるが

ナイト「ナイト・シユート!!!」

ナイトは黒いステッキ状のアイテム イリユージョンロッド の青いクリスタルから複数の光弾を発射してハンドスラッシュを相殺させる。先ずはお互い手の内の探り合いと言ったところだが力では互角のように見える。

ウルトラ  
Uキラートリニティ「デヤアアッ!!!」

今度は先に流れを掴んでやろうとアースのバーンナックルを発動させて腕に炎を纏う。そしてナイトに向かって炎の拳を放つがナイトは俊敏な動きでそれを避けていきウルトラ  
Uキラートリニティを翻弄する

ナイト「ナイト・イリユージョンソード!!!」

ウルトラ  
Uキラートリニティ「グオオオ!?!?!?!ダアアア」

イリユージョンロッドのグリップ部分を伸ばしクリスタルにエネルギーをためると黒い光を集めてそのエネルギーを高質化し黒い光の剣を作る。そしてウルトラ  
Uキラートリニティの背後の周り背中を斬りつける。Uキラートリニティはすぐに後ろを向き炎の拳を突き出す。その時には既にナイトの姿はなかった。

ゆり「強い……」

ゆりはキュアナイトと言う戦士の強さに驚きが隠せなかった……キュアナイトと言う戦士の強さにも驚いたが自分やつぼみ達とはまた違うプリキュアがいたという事実が何よりの驚きだったのだ。

ウルトラ  
Uキラートリニティ「!!?!」

ナイト「上よ!!はあああああつ!!!!」  
辺りを見回すのだが何処にも姿がない・・・焦るウルトラ  
ティだが天空からナイトの声が響き渡るとつられて上を見るとそこにはイリユージョンソードを構えたナイトの姿があり急降下しながらUキラートリニティの巨大な頭部を斬りつける。

ウルトラ  
Uキラートリニティ「グオオオオオオオオ!!?!???.?.?.  
ガアアアオオウウグウウ」

頭部に火花を散らしながら苦しむウルトラ  
Uキラートリニティ。傷口から火花を散らしながらロボットの外骨格のようなものが露出している。

ゆり「アレはロボット!?・・・そうかだからティガ達の光線が使えたのね・・・でもあんなモノを作るなんて」

ナイト「作り物の人形なら容赦する必要はないわね・・・このまま一気に決める!!!!」

ナイトはイリユージョンソードを構えながらこのまま一気に決めようとするが二人の間に突如闇の扉が開き宇宙船のような超巨大な母艦が現れた。

クレイズ「見せてもらったわ・・・キュアナイト。私のウルトラ  
Uキラートリニティを此処まで追い詰めるなんてたいして腕前ね?」

母艦からはドクタークレイズの声が発せられウルトラ  
Uキラートリニティの頭上に母艦は移動するとそのままUキラートリニティを回収する。

クレイズ「今回のテストは此処までよ・・・いい戦闘データが取れたわ。次はもつと楽しいシヨウが始まるから期待していなさい・・・ハハハハハツ!!!!」

クレイズの独特の高笑いが辺りい響くと母艦は闇の扉を潜って姿を消すのだった。ナイトもそれに合わせて変身を解いてアンナの姿に戻る。

アンナ「ふう～ゆりさん大丈夫ですか?」

ゆり「私は丈夫よ・・・それよりもどういう事なのか聞かせてもら

えないかしら？貴女が何でプリキュアの力を持っているのかを」

アンナ「・・・分かりました。お話します・・・私は3年前からの記憶がないと言いましたよね。私は3年前のある日とある山のふもとので倒れていたらしいんです。私は近くの村の村人の方に拾われて九死に一生を得ました」

ゆり「・・・じゃあその時から記憶が？」

アンナ「はい。その時は既に記憶がありませんでした。そして倒れていたそばにこのイリユージョンロッドとこのメダルのようなものが落ちていたそうです。勿論私にはこの二つの事も最初は分かりませんでした・・・その村の方々は本当に優しい人ばかりでした。見ず知らずの私に名前や住む場所もくれたんです。でもある日私は自分に有る力について知ることになりました」

ゆり「・・・何があったの？」

アンナ「ちょうど3週間前です。突然赤い竜のような巨大生物が現れたんです。村は破壊され多くの人々が死んでしまいました。」

ゆり「（3週間前ってキュアアンジェの予言の種がこころの大樹から出てきた日・・・赤い竜ってメルバ！？）」

アンナ「私も必死に逃げました。でも逃げ遅れた子供を助けようと引き返したんです。あの竜は私達を虫けらのように踏みじろうとしてきたんですがその時このロッドと種が私にプリキュアの力をくれたんです。」

ゆり「それで貴女プリキュアの力を得たのね。」

アンナ「はい。何とか赤い竜を退ける事は出来ましたけど村は壊滅してしまい生き残ったのは私一人だけでした・・・私が記憶さえしっかりしていれば何とかなかったんじゃないかって後悔してるんです」

ゆり「・・・」  
アンナ「だから私はこの力に選ばれた意味を・・・私が何者なのかを見つげるために旅をしてるんです・・・それが私の出来る唯一の償いなんです」

ゆり「そうだったのね・・・貴女にそんな過去が」

アンナ「はい。」

ゆりは言葉が出なかった。彼女にそんなつらい過去があったとは。自分も大切な人を多く失くしたが彼女はそれ以上につらい思いをしていたのだ。記憶がない事、そしてそのせいで数多くの大切な人を失った事・・・自分とは比べ物にならないほど酷な過去を持っていたのだ・・・ゆりはどう声をかけていいかわからなかった

ゆり「これからはどうするの？・・・また旅を続けるの？」

アンナ「いいえ。しばらくはこの町に留まろうと思います。奴はまた来るかもしれませんが・・・そうなたらあの村と同じ悲しみが生まれてしまいます。私はもう二度とあんな悲しい思いをしたくないし誰かにさせたくない・・・」

ゆり「・・・なら家が必要ね？」

アンナ「・・・え？」

ゆり「この町に留まるなら暮らす家が必要でしょ？そう言うことなら喜んで協力する。だから私の家は狭いけど遠慮なく使ってください。」

アンナ「・・・ありがとうございます！！！」

かくしてアンナはゆりの家に居候することになった。彼女の悲しい過去にゆりが共感を得たのもあるがそれよりも死んだ妹に似ている彼女が放っておけなかったのかもしれない・・・

クレイズ「キュアナイト・・・月の影の適合者はかなりの強さね・・・  
・どうやってアレを覚醒させるかが問題ね・・・私の作ったUキラ<sup>ウルトラ</sup>  
ートリニティをいとも簡単に追い詰めたあの實力・・・最高の素材  
だわ・・・」

クレイズはサロメの工場の自室で今後の作戦をどう進めるか考えていた・・・奴の實力は相当なものだが必ず攻略法はあるはず・・・そして奴をとらえて『月の影計画』を進めなくてはならない・・・手始めに次は奴のデータを集めることにするかと考え部屋で一人笑い声を響かせるのだった・・・

翌日・・・

ゆり「さて今日は忙しくなるわね、アンナさんの部屋にいるものを色々買わないと。」

ゆりは大学の授業を終わらせると急いで自宅に戻るとアンナと一緒に買い物に出かけるのだった。一緒に暮らすとなると色々必要なものがある。パジャマや布団、歯ブラシや茶碗など色々買い集めるのだった。

ゆり「ふう、大体こんなものね。」

アンナ「ゆりさん。本当にありがとうございます。何かから何までお世話になってしまって。」

ゆり「気にしないで。協力するって言ったのは私なんだから。」

アンナ「はい。ふふっ」

アンナも久しぶりに優しい人間と出会い笑ったのは久しぶりだった。旅をしている時はいやな思いもしてきたから人と接する事を忘れいたため思わず笑みがこぼれた。

ゆり「これで大体集まったわね。じゃあ貴女の部屋作りを始めましょうか？」

アンナ「はい！！！」

意気揚々と二人はアンナの部屋作りに取り掛かるのだった。ゆりも長らくこんな事はなかったため本当に楽しそうであった。

大人「長い長い授業が終わった・・・今日はどうしようかなあ、」

大学の授業を終わらせた大人は時間をどうしようかと考えていた。なにしろ大学生の一番の特権ともいえるものは時間があり余ると言うことだ。今日は特にすることもないし怪獣も出なくて何も起きないため暇を持て余していた。

大人「つぼみを誘って何処かに行こうかなあ、・・・ってつぼみはまだ学校か（汗）あ、あ、大学生って暇だよなあ、」

つぼみとまたデートなんて言うのも考えたがつぼみはまだ学校の時



間であるからそれも出来ない・・・仕方がないため一人でどこか適当にぶらつくかとカブトエクステンダーに乗り込む。すると何処からかカブトゼクターが飛んできた。

カブトゼクター「!!!（大人！僕も連れて行ってよ）」

大人「ん？なんだお前も何処かに行きたいのか・・・よしじゃあバツクの中に入りなよ」

カブトゼクター「!!!（やったあ!!!）」

カブトゼクターを鞆の中に入れるとそのままカブトエクステンダーで町を走る。あてもなくただブラブラと自分が住んでいる街を彷徨うのが大人の暇つぶしスタイルであった。そして1時間ぐらい走り時間がある程度潰す。

大人「たまには一人で走るのもいいものだな・・・って一人じゃないか相棒」

カブトゼクター「!!!（そうそう。相棒を忘れるなよ!!!）」

カブトゼクターとも長い付き合いでありお互いに意思疎通が出来るほど心が通じ合っていたのだった。相棒を鞆の中に載せながら二人でのドライブを楽しんでいたが・・・

爆発音「ドオオオオン!!!」

大人「!!!?」

何やら大きな何かが落下する音が辺りに響き渡った。辺りを見回すとそこには修理を完了させた<sup>ウルトラ</sup>Uキラートリニティーが姿を現していたのだった。

大人「アレはティガのパチものか？ニセモノならもつと似せて作れよな・・・ってそんな事を言ってる場合ではないな」

大人はスパークレンスを取り出すと腕を十字に組んでスパークレンスを持っている右腕を時計回りに回して天に掲げてスパークレンスを起動して光に包まれていきウルトラマンティガの姿へと変身して

<sup>ウルトラ</sup>Uキラートリニティーの前に立ちほだかる。

<sup>ウルトラ</sup>Uキラートリニティー「!!!・・・ジャアアッ!!!」

ティガ「チャッ!!!」

二人の巨人が向かい合い睨み合う・・・

ティガ「ハッ！！（コイツ・・・ロボットか？）」

睨みながらもティガはすぐに相手の正体が理解できた。何故ならば怪獣や宇宙人の独特の生物らしい動きが見られず機械的な動きしか見えないからである。

ウルトラ Uキラートリニティ「デヤアアアッ！！！」

ウルトラ Uキラートリニティは右手にデュナミスセイバー左手にバーンナツクルを発動させて序盤から攻めてきたティガは何とかそれを交わしながら反撃の隙を探す。

ティガ「フッ！！・・・ハッ！！」

ウルトラ Uキラートリニティ「シュワアア！！」

攻撃をかわしながら飛び上がりハンドスラッシュを放つがデュナミスセイバーで掻き消されてしまった。遠距離も近距離も攻撃の隙がない・・・しかしこのまま逃げていても勝負には勝てない・・・そう思ったティガは上空でタイプチェンジを行った。パワーと防御力で勝る赤い剛腕の戦士パワータイプへと。

ティガ「パワータイプ「ハアアッ！！チャアアア！！！」

ウルトラ Uキラートリニティ「フン！！ハアアアッ！！！」

ティガ「パワータイプ「ハアア！ハアアッ！！ンーーーーハアアアッ！！！」

ウルトラ Uキラートリニティ「グオオオ！？・・・ガハアアア・・・」

ティガ「パワータイプ「ハッ！！デヤアアアア！！」

ウルトラ Uキラートリニティ「ぐお・・・ガハアアア！！」

ティガ「パワータイプ「チャア！！」

ティガは斬りつけられながらも怯むことなくパンチとキックの攻撃を浴びせて強引に戦いを進めてやろうとしてやる。そしてウルトラ Uキラートリニティを無理やり押し倒して投げ飛ばしてやるとスタミナを切らしてフラフラになるそしてこのまま止めを刺そうとティガ・パワータイプは必殺技のデラシウム光流を放とうとエネルギーを集約していこうとしていくのだがその後ろから突如ティガ・パワータイプ

に向かって光線が放たれた。思わず後ろを振り返るとそこには……  
ティガ・パワータイプ「ハッ!? ……!!!」  
そこにいたのは何とアースとデュナミスの色違いの巨人だった……  
前方にいる<sup>ウルトラ</sup>ヒキラートリニティと同じく目が赤く黒と銀と赤のライ  
ンの体色をしたロボット兵であった……

## 第10話「アンナの過去」(後書き)

今回はちよいと短めにしてみました

次回からは月の影計画の真相やアンナの正体を少しずつびよ者して  
いきたいと思います。

また次回からも更新が遅れてしまいかもしれません(汗)

次回もお楽しみに

## 第11話「絆の力」(前書き)

前回までのあらすじ

明かされたアンナの過去とクレイズの野望。更に現れた2体のキラートリニティ。

果たしてティガに逆転のチャンスはあるのだろうか

## 第11話「絆の力」

3体は無言のままティガに近づいていく……。ティガは3体の放つ殺気とも呼べるようなオーラに圧倒されてしまい身体が硬直してしまふ……。このままでは自分は殺されてしまふ……。だが逃げれば町が破壊されてしまふ……。そんなジレンマに精神を支配されて恐怖に心が支配されてしまふティガ。

ティガ・パワータイプ「チャアアアアア！！！！（うおおおおお おおお！！！！）」

Uキラートリニティ・Aキラートリニティ・Dキラートリニティ  
「ハアッ！！！！」

ティガ・パワータイプ「ウウアアアアッ！！！！グッ……。アアアッ！！！！ウウウ」

しかし逃げてはだめだとティガは腹をくくり玉砕覚悟でパワータイプで3体に向かって突っ込んでいく。勿論3体のキラートリニティはハンドスラッシュのトリプル攻撃をティガに命中させて吹っ飛ばしてやる。それでも立ち上がりパワーが溢れる重たいパンチャキックを放っていくのだが我武者羅な攻撃が当たるほど3体は甘くはなくティガを嘲笑う名のように弄びながらティガにダメージを蓄積させていき体力とエネルギーを消耗させていく……。そして遂にはティガ・パワータイプ「ウウウ……。アアアア（強い……。俺も此処までなのか！？）」

ティガの精神は追い詰められ絶望が精神を包んでいく……。散々弄ばれた揚句に町を守れずにこのまま自分は負けてしまふのか……。そんな事さえ彼の頭によぎってきた……。3体のキラートリニティは焦ったティガにパンチとバーンナツクルの炎とデュナミスセイバーの斬撃を見舞わせてティガをひれ伏せさせた後終わりと見下し止めを刺そうとUキラはゼペリオン光線AキラはボルテックストームDキラはインブレンスバーストの発射態勢を開始し始めた。

・・・最早此処までかとティガは諦めかけた・・・だがその時・・・

???? 『プリキュア・フォースインプクト!!!!!!』

???? 『プリキュア・イリユージョンソニック!!!!!!』

???? 『ライダーバースト!!!!!!』

突如二つの光線が3体のキラートリニティーに向かって放たれて必殺技を妨害する。ティガは何事だと思い周りを見回すとそこにはブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライト、ライダーのフェアリーそして新しいプリキュアのナイトだったのだ。

ブロッサム「お待たせしました!!!今からは私達も戦います!!!」

マリン「ブロッサムの言う通り!!!アタシ達も今から一緒だよ・・・

・だから怖がらないで。」

サンシャイン「危なかった」。もう大丈夫だよ私達も貴方と一緒に戦うから」

ムーンライト「諦めてはダメよ・・・貴方がどうして蘇ったのかを自分で考えなさい」

フェアリー「ムーンライトの言う通り。自分で考えなさい?・・・

なんてね 仲間のピンチはほつとかないよ!!!」

ティガ「パワータイプ」ハッ・チャア!!!（皆・・・ありがとう

!!!よしお陰で勇氣100倍だ。いくぞ!!!!!!）」

そうだ俺には仲間がいる。彼女たちとはどんな時でも繋がっているんだ・・・俺は一人なんかじゃない・・・3年前からそうだったじゃないか・・・。大人は5人の言葉に戦う勇氣を取り戻し立ち上がりタイプチェンジを行いマルチタイプに戻る。立ち上がったティガの前にナイトが前に現れ自己紹介をする。

ナイト「はじめましてウルトラマンティガ・・・私はキュアナイトです。ブロッサム達や貴方と同じ悪に戦う戦士です。これからは私も仲間に入れてください。」

ティガ「ハッ!!!（勿論だ。よろしくなキュアナイト!!!!!!）」

ティガはナイトに向かってよろしくなと言うようにガッツポーズを

見せると3人のキラーに向かって構えを放ち闘志を見え付けながら  
ティガ、ブロッサム、フェアリーはUキラートリニティーにマリ  
ン、サンシャイはAキラートリニティー、ムーンライト、ナイトはDキ  
ラートリニティーにターゲットを絞りそれぞれ戦いを始めていく。

ティガ「ハッ!!」

Uキラートリニティー「……」

ティガとUキラートリニティーさつきと同じように弄んでやろうと指  
をクイクイと動かして挑発するがティガはそんな挑発には乗ること  
なくゆつくりと近づきながらUキラートリニティーを睨む。流石のU  
キラートリニティーもティガの様子の変化に気がついたのかすぐにデ  
ユナミスセイバーを発動させティガに斬るかかるがティガはそれを  
難なく避けていき反撃のマルチパンチをUキラートリニティーのボデ  
イに放つ。

Uキラートリニティー「グオオオオっ!!?……デヤアアアアア!  
!」

ティガ「チャアアアアア!!!!」

Uキラートリニティー「ガアアアッ!?!」

さつきまで自分たちにおびえていたティガではない……. いったい  
何が彼に変化を与えたのか分からないが自分の負けなどあり得ない  
と自信があるのか攻撃を荒ぶらせてUキラートリニティーはデュナミスセイバー  
をティガにめがけて振りかざすがティガは攻撃を見極めながら格闘  
技で反撃を行いながら秘儀の手刀攻撃である《スラップショット》  
でUキラートの黒混じりのデュナミスセイバーを叩き折る。

ブロッサム「ブロッサムシュート!!!」

フェアリー「フェアリーレイピア・ガンモード!!!」

それと同時にブロッサムのピンクの光弾ブロッサムシュートがUキ  
ラートリニティーに放たれる。Uキラートリニティーは黒いハンドスラ  
ッシュでブロッサムを狙うがブロッサムはそれを難なくかわし逆に  
Uキラートリニティーを翻弄していく。



ティガ「ハッ！！チャアアアアーッ！！」

フェアリー「ライダー・バースト！！！」

そしてその隙にティガはティガスライサーフェアリーは遠距離系の必殺技ライダーバーストをウキラートリニティに向かって放ち胸の黒いプロテクターを破壊して火花を散らせる。

場面は切り替わりマリリン・サンシャインのグループはAキラートリニティ相手に互角に戦っていた。アースの技をコピーしたダークバインナツクルとでも呼ぶべき黒炎を身に纏った拳を振り回しマリリン、サンシャインを近づけさせない。

マリリン「マリリンシュート！！！」

サンシャイン「サンシャインフラッシュュ！！！」

マリリンの無数の水の塊をマリリンシュートとサンシャインの無数の光の飛礫のサンシャインフラッシュュが合体してAキラートリニティにぶつかっていくが黒い炎が全てを掻き消してしまう。

マリリン「なんてやつ・・・アタシ達の攻撃が通じないよ」

サンシャイン「せめて弱点さえつかめれば・・・」

どんな相手にも必ず急所と呼ばれる弱点がある筈なのだ。それさえ見つけられれば小さい力しか持たない自分達でも必ず勝機はある筈だと必死にAキラートリニティの周囲を飛び回りながら弱点を探そうとするのだがその行動に痺れを切らしたAキラートリニティはアースの技の一つの『バーニングシュート』を二人に向けて放つ。

マリリン「アイツ街中であんなモノを・・・」

サンシャイン「私達が避けたら町が・・・サンフラワージェイス！！！」

あの炎が町に向けて放たれたら町は火の海になり町は全滅してしまう・・・そうはさせないとサンシャインが黄金の盾サンフラワージェイスで黒い炎の光線を受け止めていくのだが・・・

サンシャイン「ぐっ・・・このままじゃ持たない・・・」

マリリン「サンシャイン頑張って！！！！ぐうう！！？」



・おらおらおらあああ！！！！）

アースは無言で自分の言いたい事をAキラートリニティに伝えるかのように無言のまま黒い炎を放つ拳をギリギリと握りしめてやるそのままボディにパンチを放ち背負い投げで思いつきり地面に叩きつける。そしてそのまま無理やり立ち上がらせるとボディと顔に向かつてパワーに溢れるパンチとケリを浴びせる。

また画面は切り替わりDキラートリニティとムーンライト・ナイトのグループの闘いもムーンライトとナイトの不利の状況で流れていた。理由はデユナミス元をにされたロボットと言う事がありスピードに特化した戦術であるため隙がない事とそれに合わせて巨大な氷の剣のダークセイバーの剣技で二人の遠距離攻撃を相殺されてしまふ事が重なり二人は攻めに転じる事が出来ない事が主な原因であった。

ムーンライト「強い・・・ロボットとはいえウルトラマンの力の凄さが敵になって改めて認識されるわね」

ナイト「はい。せめて私のイユ ジョンソードの一刺しても奴に喰らわせる事が出来れば勝機はあるんですが・・・」

的はかなり巨大なため狙う事は簡単だが攻撃を当てる事が出来なければ何も意味がない。何とか攻撃のパターンを掴んで反撃に転じようとするのだがDキラートリニティは二人に向けて剣を振るう。弱点さえ見つける事が出来れば勝機は必ず訪れるのだが・・・

Dキラートリニティ「フン・・・ジャアアア！！！」

そろそろ終わらせてくれるとDキラートリニティはダークセイバーを消滅させるとデユナミス最強の必殺技の『インブレイスバースト』の発射態勢に入る。

ムーンライト「まさかこの町ごと私達を！！！」

ナイト「ここからフルスピードで他の場所に飛んでいっても間に合わない！！！」

自分達にはあの力を受け止める力はない・・・だが此処からフルス



何故なんだ！？奴らにあつて自分達にない力とは一体何なんだ！？  
こうなれば主クレイズの為にこの身をささげるのみだとても答えを出したか  
のように3体はティガ達を一度睨む。

Uキラートリニティ「・・・デヤ。」

Aキラートリニティ・Dキラートリニティ「・・・」

Uキラートリニティの合図に合意したかのように頷くと再度前を向  
きUキラートリニティはティガの最強必殺技のゼペリオン光線、A  
キラートリニティはアースの最強必殺技ボルテックストーム、Dキ  
ラートリニティはデュナミスの最強必殺技のインブレイスバースト  
の発射態勢に入る。ゆつくりと自分達の全エネルギーを集めていく  
かのように

ブロッサム「まさかあの3人は自分と町ごと私達を道連れに!？」

マリン「やばいじゃん!皆あの3体を止めよう・・・!?!?・・・  
アース?」

ブロッサムの感は当たっていた。3体は自分とこの町ごと全てを巻  
き込んで自分達を葬り去るつもりなのだ。マリンはさせるものかと  
フォルテウェイブを放とうとしたのだがブロッサム達の前にティガ、  
アース、デュナミスの3人が前に出る。

サンシャイン「デュナミスどうしたの!？」

ブロッサム達は当然驚く。ティガ達は目で彼女たちに自分の意見を  
伝えるようにただ黙って見つめていた。何を伝えていのだろうか?  
ムーンライト「・・・もしかして貴方達3人が迎え撃つと言いたい  
の?」

ブロッサム「そんなのダメです!!私達は仲間じゃないですか・・・  
そんな危険なまねをわざわざさせる事は出来ません!!!」

ムーンライトは彼らの言いたい事であろう事を口にするると3人は頷  
く。あの3体は自分達の分身のようなもの。その決着をつけるべき  
なのも自分達であると言いたいようだ。当然ブロッサムはそんなこ  
と出来ないと猛反対する。見す見す仲間を危険な目にあわせること  
など出来ないから当然と言えば当然だ。だが彼らの心中を察したフ



アース「ウウ・・・ダアアアアアアアッ！！！！」  
デユナミス「ンッ！！ウオオオオオオオ！！！！」

だがコピーなどに負けるつもりはないとティガ達の身体が限界を超えるかのように白く光り出すと光線のエネルギーが高まっていき黒い光線をどんどん押し戻していく・・・3人のウルトラマンは3体のロボの力を超えたのだ。

Uキラートリニティ・Aキラートリニティ・Dキラートリニティ「  
！！！！？？？」

3体のキラートリニティは理解が出来なかった。データでは自分達は負ける要素などないはずなのに・・・機械的な動きしか出来ない事が彼らの敗因だったのだろうか？3体は光線を受けると光を放って爆発を起こしながら消滅していった。

ティガ・アース・デユナミス「・・・」

3人のカラータイマーは気がつけば赤く点滅を始めていた。限界を超えたことでエネルギーを極限にまで消耗されたらしく3人はフラフラだった。何とか立ったままブロッサム達のほうを向くと勝利を分かち合うかのようにグーサインを出すとそのまま空へと飛び立っていった。

その頃サロメ全戦基地指令室では自分が製作した3キラートリニティの末路を見たクレイズは驚きと怒りに心が支配されていた。自分が造った傑作と考えだした計画をぶち壊された事が相当気に入らないと言う事である。

クレイズ「己え・・・プリキュア、ライダー、そしてウルトラマン・・・アタシの傑作をよくも壊してくれたわね・・・こうなればアイツも呼び出すしかないわ。ドクターへロディアをサロメ星から呼び出して頂戴。こうなったら最高の恐怖を味あわせてやる！！。そしてキュアナイト・・・月の影計画の素材 よ・・・貴様も最大限に利用させてもらう」

クレイズは荒々しい声を出しながらモニターに映っているブロッサム達プリキュア、フェアリー、ティガ、アース、デユナミス、そしてキュアナイトをを自身が携帯している銃で打ち抜いてやると指令室を後にするのだった。

「ダーク・クレイズのキラートリニティも破られたか……だが収穫はあったようだなクレイズよ。その点に関しては褒めてやろう。アレが此方の手に収まればプリキュアは下したも同然……クレイズよ早くアレを覚醒させよ」

「ダークは海底で全てを見ていた。キラートリニティが敗れたのは汚点だが月の影計画の重要なキーパーソンを見つけた事がありそれほどクレイズに対して文句はないようである。問題はアレをどうやって味方につけるかであろう……それさえ攻略できれば……ダークは漆黒が広がる海底で次の手を考えるのだった……」



## 第11話「絆の力」(後書き)

サロメのロボット技術はものすごいと思うのは私だけかな？最近はウルトラ兄弟もコピーしたと聞いてDVDを見たのだがジャックとゾフィーの扱いの悪さに嫉妬が……。ゼロVSニセセブンは燃える展開だがせめてジャックとゾフィーも活躍させてあげてよ……。さて今回は……。当分ネタを考えることに集中したので更新がものすごく遅れるかもしれません……。誰かいいネタをくれ!!!!!!

次回もお楽しみに

## オリジナルプリキュア設定〈ナイト編〉

キュアナイト：アンナが変身するその名の通り夜の名を持つプリキュア。つぼみ達に変身する心の大樹が今まで生み出したプリキュアは別系統の戦士。メインカラーはブラックとシルバーでコスチュームはダークプリキュアのコスにブーツをはかせて黒い羽根を取り払いシルバーラインを入れたイメージ。ファイトスタイルはロッドを使った接近戦が主であるがイリュージョンロッドの光線技を使うことでオールマイティーに戦う事が出来る。

アンナ：記憶をなくした少女で「アンナ」と言う名前も3年前にとある村で拾われたときに付けられた前である。自分がどこから来たのか自分が何者であるかを探す旅に明け暮れている。見かけは17歳だが記憶が定かでないため実年齢は不明。容姿は特徴的なおっぱ頭と黒い瞳。どこかダークプリキュアと似ているのだがそれは偶然なのか？それとも……

### 〈変身アイテム〉

イリュージョンロッド：アンナが所持するキュアナイト専用の変身アイテム。ロッド部分を伸ばしプリキュアの種を装填することで先端の青いクリスタルから黒い光のエネルギーが放たれて全身を包んでプリキュアの姿にへと変身が完了する。（イメージはムーソライトの変身）またこれを武器として使用する事が可能で敵の牽制を行うときなどに使うなど応用も可能である。

黒いプリキュアの種。ブロッサム達が所持しているプリキュアの種と同類。普段はアンナのペンダントとして所持されている。

### 〈必殺技〉

プリキュア・ナイトイリユージョンウエーブ；イリユージョンロッドの先端のクリスタルと胸のプリキュアのクリスタルをシンクロさせて放つソニックブーム型の必殺技。この技の特徴は 悪しき心 二のみ反応してそのみを攻撃対象とする能力があることと人体を破壊をおこなう事が出来るという二つの攻撃属性があると言う事である。どちらの属性になるかはナイトの意思によって決定されるためこの技を使うにはより慎重にならなければならない。

イリユージョンソード；イリユージョンロッドにエネルギーを溜めて硬化させて剣を作り出して斬りつける技。剣の表面には文字のようなものが刻まれている。（モチーフがオメガモンの必殺技グレイソード）

ナイトシュート；イリユージョンロッドから放たれる光線。破壊力は低く主に敵の注意をひきつける事に使われる事が多い。

プリキュア・イリユージョンソニック；簡易型のナイトイリユージョンウエーブ。破壊力はナイトイリユージョンウエーブよりは劣るのだが対象に十分なダメージを与える事が出来る。

## 第12話「放電怪獣復活」(前書き)

前回までのあらすじ

ドクタークレイズの兵器の「キラートリニティ」の出現に追い詰められるティガ。絶体絶命のティガを助けたのは仲間のブロッサム達であった。彼女達の言葉にティガは戦う勇気を取り戻し見事キラートリニティを撃退するのであった。

ドクタークレイズはサロメ星からヘロディアを呼び出し次の計画である月の影計画を進めるべく次の準備にへと取りかかるのであった。

## 第12話「放電怪獣復活」

此処は霧門岳と呼ばれる休火山。此処は夏は登山、冬はゲレンデでスキーを楽しむ事が出来る観光スポットで有名であり2月のこの時期はスキーでデートをするカップルで溢れているのであった。冬休みを迎えたつぼみたち一行はえりかの姉もかの仕事のついでにこの霧門岳に三泊四日の旅行に行くこととなったのだ。

つぼみ「スキーも慣れると楽しいですね〜!!」

えりか「だね〜いやっほお!!!」

いつき「いえ〜い」

ももか「ゆり〜先に行くよ!!!」

ゆり「待つてよももかあ〜」

アンナ「スキーというのも面白いです!!!」

ももかの仕事は前日に大体終わらせたので今日はゲレンデでスキーを満喫しているつぼみたち一行。最初は初体験のスキーにおっかなびっくりだったのだが慣れるとかなり楽しいものでスポーツが苦手なつぼみも楽しんでいるのだ。当然えりか、いつき、ゆりもある。

大人「噂には聞いていたけど凄いなあ此処は。」

琢磨「ああ。さてじゃあ俺達も行くとしますか?」

傑「モチ。じゃ御先に!!!」

夕「あ、ずるいぞ〜傑!!!」

琢磨「おい〜慌てるとケガするぞ!!!...つてあの二人なら大丈夫か。じゃ大人〜俺も先に行くから」

大人「ふっ全くあの2人は相変わらずだな。さて俺も行くとします!!!」

上ではそれを大人達が見ていた。自分達もそろそろ行くかと上から傑を先頭に滑り出すのだった。4人とも運動神経はそれなりにあるためスキーを楽しむ。そして時間はあっという間に流れてその日の

夜は定番の中の定番のカレー作りとなった。ちなみに料理の葬式は大人が行うことになっている。

大人「よし玉ねぎ&ジャガイモはこれでいいかな？ 琢磨あゝ人参は？」

琢磨「今皮を向いて適当に切つてるとこ。」

大人「よし。つぼみご飯は？」

つぼみ「もう少しで炊けますよ」

大人「よしよし。夕肉は？」

夕「準備万端！！」

大人「肉よしと。えりかカレーのルーは？」

えりか「勿論ちゃんと持ってきて・・・あ！！！！」

いつき「どうしたのえりか？」

ゆり「・・・まさかルーを買い忘れたとかそういう初歩的なミスをしたと言わないわよね？」

アンナ「まさか・・・違いますよね？」

ももか「・・・違うよね？えりか」

ゆり、アンナ、姉のももかのツツコミに顔が冷や汗まみれになるえりか・・・全員の視線がえりかに集まる。

えりか「・・・す、すみませーん！！ルーを買い忘れちゃいました！！（大汗）」

全員「なんですとおおおお！！！！？？？？？」

えりかは頭を下げて謝りそれと同時に全員の驚きの声が木霊する。

これはかなり困った事態である。当然のことだルーあなければただのスープライスになってしまうからだ

大人「しゃーない。麓に降りて買ってくるか。まだ夕食時にはちよつと早いからまだなんとかなる。」

つぼみ「じゃ私も行きます！！」

大人「了解。えりか当然ついて来るよね？」

えりか「・・・はい（汗）」

元の原因を作ったえりかも当然のごとくつき合わせる大人とつぼみ。

ちなみに今一行がいる貸別荘から山の麓までは歩いて15分の距離であるため3人でも問題はなかったのだった。雪山の自然が生んだ綺麗な景色を堪能しながら3人は麓のスーパーに向かう。

場面は山の麓近くのスーパーに切り替わる。

大人「よし目的のものは買った……って何しとるの二人とも」

つぼみ「え？……食後のお楽しみを……」

えりか「そうそう。食べた後はタツプリと遊ばないと……」

大人「それでトランプと花火を買おうとしていると……因みにその二つの料金は誰持ちだい？トランプらともかくそのデラックス花火セツトなんてかなり値が張るんじゃない？」

つぼみ「えりか『それはやっぱり大人さんが……』」

大人「俺持ちかいな！！……というか何で俺持ち前提なんですか！？」

当然のごとく漫才風のツツコミを二人に入れる大人。二人は暫し大人に背中を向けると何やらひそひそと作戦会議を始めるのだった。

大人「！？（な、何が始まるんだ？）」

そして2分後に振りかえると二人だ黙ってただ大人を見つめてくるのだった。何か言いたげな目で。

つぼみ「えりか『……（何かを訴える目で必死に大人を見つめている）』」

大人「……分かりました。分かったからそんな顔して俺の顔を見つめないでくれ！！（えりかはともかくとしても……つぼみにあんな顔されたらダメだ何も言い返せん）」

つぼみ「えりか『やったあ！！』」

大人「……（こ、コイツら……二人になると恐ろしい。この二人とは買い物に行つてはいけないかもしれない……）」

つぼみとえりかの女の子の眼差し攻撃に大人は何も言い返せずにしぶしぶながら必要なカレーのルーとトランプと花火の清算をすませるためにスーパーのレジへと向かう。その最中でこの二人のチーム

ワークは本当に色々な意味で敵に回したら物凄く恐ろしいかもしれないと思う大人なのだった。

大人・つぼみ・えりか「ただいまあ〜」

買いものを済ませて別荘に戻ってきた3人。丁度時間も夕食時になりすぐにカレーの調理を開始する。流石にカレーとなれば誰も失敗しないが大人の料理の腕は天の道を行き総てを司る男に鍛えられた事はある処らのカレーとは質が違うのだった。

つぼみ「ひ、大人さん凄いです。」

琢磨「いつの間にこんなに料理が出来る様になったんだ・・・やっぱりアレか？」

傑「天道さんの影響だろうな・・・師匠が偉大なだけ弟子の器も大きくなると思う事だろう」

夕「・・・（惜しい事をした。別れたのはもったいなかったかも！！）」

大人「よし！！こんなもんだな。出来たよあ〜」

そう言つて器に全員のカレーを取りわけてテーブルに運ぶ。

全員「いただきます！！！」

えりか「お、おいしい〜！！」

琢磨「美味い！！」

傑「流石だな天道流の弟子！！」

大人「そんな大げさな。一人暮らしするようになるところなるって夕「いやそれにしても美味しいよ！！」

ももか「うん。男の子で料理が上手いってのはかなり高ポイントだしね」

大人「カリスマモデルさんにそう言われるとなんだか照れるな」

ゆり「でもあまり調子に乗らない方がいいと思うけど」

大人「ゆりさんは相変わらず厳しいなあ〜（汗）」

アンナ「本当においしいです。プロみたいですよ！！」

大人「アンナちゃんもべた褒めしすぎだってば〜」



全員『ははははは！！！』』

色々な事を話しながら食事を進めていく面々。この頃は怪獣や宇宙人達の来襲で緊張を強いられていたためこんなに羽を伸ばせる時間はあまりなかったから本当に有意義だった。そして食事を終わらせると買ってきたトランプで恒例のババ抜きをする事になった。

大人「ふっふっふっ！！！俺は天の道を行き総てを司る男の弟子・  
・故にトランプで負けることなどあり得ん！！！！ってまたババだあ！！！！」

つぼみ「大人さんはババ引きに定評があるんですかね？・・・って言ってるそばから私もババを引いてしまいましたあ！！！！」

えりか「二人ともよくババを引くよね〜よしアガリ！！」

いつき「またえりかあ一番か〜あ、ボクもアガリだ！！」

ゆり「コレで4回目なのにまた同じ流れね。私もアガリ。」

ももか「ある意味気が合ってるのかもね〜よし私もアガリ！！」

タ「2回目はまぐれだと思っただけどね〜よし。アタシもアガリっ」と

琢磨「確かに物凄い偶然だよな〜うし俺もアガリ〜」

傑「本で読んだことあるけど《4回目以降の偶然は必然》なんだっ  
てよ〜アガリっ」と

アンナ「そうなんですか？じゃ〜コレで同じ結果になると偶然から必然になるんですね？私もアガリです。」

大人「またこのパターンか・・・次は勝つぞ！！つぼみ〜」

つぼみ「そうはさせませんよ。4回目も勝利は私が貰います！！」

そう実は大人の3戦連敗なのである。こうなつてくると大人の勝負運のなさを疑う事になるのだが見ている残りのメンバーはこの必死さが結構ツボであつたりするものである。

大人「・・・（どつちだ？・・・右か左か・・・さつきは左を引いてババだったから右にババを置いているか？・・・いやつぼみに限ってそんなことまで頭が回るとは考えられない・・・だが俺の裏をかいていると考えるならば左にババを置きあえて右を取らせない

ようにするという事も・・・クソ！！俺は天道さんの弟子だぞ？トランプで4連敗などあつてはならない事だ。」

つぼみ「早くしてくださいよ。(さあ〜どっちを取りますか？太陽の弟子さん)」

大人「まあ慌てるなよ・・・(つぼみめえ〜俺を焦らすつもりか・・・落ちつけ・・・焦ってはつぼみの思う壺だ・・・こうなつたら此処はあえてババを取る覚悟で・・・)よしでは俺は左を取る！！」

つぼみ「それで良いんですね？(さあ来てください！！！！)」

大人「ああ。(来い俺の勝利の女神よ！！！！)」

大人は心の中でそう願いながらカードを引く。引いたのは・・・大人「ババだあ！！！！」

つぼみ「ふふつ 私のアガリで私の勝ちですね？」

大人「な、何でなんだ？・・・どうせ俺なんかダメという事か？・・・」

夕「ま、まあたかがトランプだから・・・そんなに落ち込まなくても」

大人「うう〜(泣)」

琢磨「大人が地獄に落ちた・・・」

流石に4連敗の傷は深かつたのか地獄兄弟のごとくやさぐれるように拗ねてしまう大人。それを励ますように言葉を掛ける夕が大人のそばによる。

えりか「ババ抜きも飽きたし次は大富豪をやるっしゅ！！！！」

琢磨「まだやるのか？よお〜し今日とはことん遊ぶか！！」

夕「ほら元気出しなさいって。次は大富豪ですってよ」

大人「・・・大富豪・・・なら俺は大富豪で天の道を歩く！！！！」

いつき「あははは(大人さんのキャラがおかしくなってる)」

ゆり「・・・負けが続くと人って変になるみたいね」

アンナ「あら」

大人のキャラの豹変ぶりに全員が苦笑いしてしまうが気を取り直して大富豪をするのだが・・・

大人「うう」

ももか「だ、大富豪でも4連敗・・・」

琢磨「こ、こりゃちよつと異常だ」

傑「此処まで来ると流石に怖くなるな・・・」

なんと大富豪でも大人は4連続ビリということになってしまいました  
また連敗街道を走る事になった大人・・・此処まで来るとある意味本当に怖くなるのだった・・・

えりか「と、トランプはここまでにして花火でもやろう!!!」

つぼみ「そ、そうですね!!!花火をやりましょう」

大人「・・・そうだね。花火で癒されよう!!!」

既に暗さがMAXの大人・・・全員が彼に気を使う様に何とか空気を  
変えようと必死になる。特にトランプを大人に買わせたつぼみと  
えりかはとにかく必死になっているのだった。

夕「既に大人のライフは0ね・・・」

いつき「こんな大人さんを見たのは初めてかも・・・」

ゆり「何と言うか・・・不憫ね」

アンナ「彼の勝負運の事はつこまないでおきましょう(汗)」

ももか「3人とも励ましてあげなさいよ・・・」

冷や汗の3人とそれに突っ込みを入れるももか。そして準備をする  
事4分後・・・

つぼみ「冬の花火って綺麗です」

えりか「ホント。花火は夏にするものだけこう言う雪の多い場所で  
やるのもいいよね!!!」

アンナ「これが花火・・・いいですね!!!」

大人「・・・綺麗だな。負の念が消えていく・・・」

琢磨「ま、まだ引きずってるのか」

傑「ま、まあ無理もないだろ・・・8連敗なんだし」

ゆり「・・・(戦いのときはすごくかつこいいのに)」

夕「あぁあ(スイッチは入っちゃったよ)」

ももか「あ、あははは」

約1名を除いて花火を楽しんだつぼみたち一行。しかしそんな最中・  
・この霧門岳のとある井戸では400年の封印がある者の干渉に  
よって解かれてひそかにその牙を研いでいたのだった。

作業員1「はあく何で俺達は仕事などしなければならんのだろうな・

・外はカツプルだらけだと言うのに」

作業員2「そう言うな・・仕事しなきゃ収入ないんだから!!」

作業員1「へいへい。・・早く終わらせて帰って寝よう」

作業員2「そうしたいならさっさと手を動かして仕事を済ませろよ」

霧門岳の麓付近に建設された電気を送るためマグマエネルギー発電  
所では二人の夜勤作業員が発電所内部のメンテナンスを行っていた。  
作業員1「しかし部長も人が悪いよな」残業俺たちに残してさっさ  
と帰ったばかりか家族とスキーなんてさ」

作業員2「しょうがないだろう?部長だって日頃は俺達の雑務をこ  
なしてるんだから。たまには俺達がフォーローしないでどうすんだ  
よ?」

作業員1「そうだな」さてとじやみ見回りしてくるわ」

作業員2「はいよ。俺は此処で調整してるから」

そろそろ見回りの時間だと男は一人夜の暗い発電所を懐中電灯一つ  
を持って調整室から出ていく。もう一人の男は調整室にて最後の調  
整を行うことにしたのだが突如発電所の電力が急激に下がり出した。  
作業員2「な、何だ!?」急に電力が落ちた?」そんなバ  
カな台風の季節でもないのに何でこんな事が」

作業員1「おい!!外に出てみる!!」

作業員2「はあ!?」い、今は遊んでいる場合じゃ!!!」

作業員1「いいから来い!!!何が電気を吸い上げてるんだよ!  
!」

作業員2「何い!?!」

二人の作業員は急いで外に出てみるとそこには何か透明なものに電  
気を吸い上げられている様子が目にとまった。原因は目には見

えない何者かが電気を盗んでいる事だった・・・そしてしばらくして透明何かが光り出すと一瞬だが巨大何かが姿を現したのだった・・・

・

作業員1「い、今は怪獣!?!?!?!?!」

作業員2「しかも言い伝えのあの怪獣に似てるじゃないか・・・」

二人は顔を見合わせるなり顔色が真つ青になってそう言い合う。しかしなぜ今になってあの怪獣が復活を遂げたのかが分からない・・・

そして翌日。

矢車「此処が昨日に異常な停電があったという連絡があったマグマエネルギー発電所か・・・」

影山「連絡では怪獣が電気を喰っていたと言う話らしいですが・・・そんなことあり得ますかね?」

ホリイ「わからん・・・せやけども怪獣ちゅーのはワシ等の想像を超えた存在や・・・断定は出来へん」

矢車「そうですね」

ガッツウィング2号に乗り込んで現場に向かう矢車、影山、ホリイの3名。本当ならこのシーズンはスキーでも楽しみたいところだがGUTSの任務に休暇などはなくしぶしぶ出勤することになった。

その事の大人達はと言うと

大人「やつほお!!!」

夕「ちよ、大人飛ばしすぎ!!!!!!」

つばみ「速いですよお〜(汗)」

大人は昨日の負けを晴らすかのようにものすごいスピードで雪面走る

琢磨「昨日のローテーションがウソのようだな」

傑「ああ(汗)。まあそれは置いておいて・・・昨日のあの停電なんだが実はある噂が流れてるんだ。」

琢磨「噂?」

傑「ああ。聞くとところによるとこの近くの古井戸に『ネロンガ』っていう電気を喰う怪獣が眠っているらしくてな。それが目覚めたか

ら停電が起こったとか・・・」

琢磨「電気を喰う？ていうかそんな怪獣がいるなんて信じ難いけどそれが本当だとしたら・・・」

傑「可能性はあると思うんだ。昨日は停電になる様な気性でもないし近年の突然の怪獣の出現とかを考えると逆にこの理論がしっくりくるんだよ。」

琢磨「せっかくのオフタイムに考えたくもない事をお前はスラスラと喋れるな」

傑「まあ考えたくはないけど可能性がある以上は心構えをしつかりしとかなないと。いざとなった時に俺達の力はあるんだから」

琢磨「ああ。そうだな・・・」

大人達が楽しんでいる中琢磨と傑は昨日の停電の話をしていた。もしかしたら考えられる可能性を傑が言うと思わず冷や汗になる琢磨だが傑の理論は間違っていないし逆に筋が通ってそうで嫌な予感がしてくるのだがそうなれば俺達の出番だ思っただった。しかしその考えが現実になるのはこの数分後の事であった。

????「ギシヤアアアウウウウウウウ」

突如雪の被った森林から巨大な唸り声が聞こえてくるかと思ったら二本の角に黄色い背中をした巨大怪獣が姿を現すのだった。

大人「な、なんじゃありゃああああ!!!!??」

琢磨「す、傑が変な話をするから変なのが出て来たじゃないか!!!!」

傑「俺のせいですかあ!!!!?」

3人のコントが始まるがネロンガはそれを当然無視して巨大な身体を動かして前進してくる。

大人「つたく・・・人が休日を楽しんでるって時に。」

つぼみ「ホントですよ!!。せっかく皆で楽しんでたのに」

えりか「二人ともそんなこと言ってる場合じゃないって早く変身して戦わないと」

大人とつぼみはネロンガに対してそう言うが怪獣に人間の言葉など通用するわけがない。二人に対してえりかは半分呆れながらも変身しようとココロパヒュームを取り出すがそれを傑が制止する。

傑「待て。此処は此処にいる人々の非難が先だ。まずは俺と琢磨、大人がライダーに変身して奴の気を引きつけるからつぼみ達は避難誘導を頼んだぞ！！」

いつき「分かりました。3人とも気を付けて」

先ずは大人達がネロンガをひきつけて此処の人々の避難の為の時間稼ぎをするようになった。久々にライダーに変身だと全員がベルトを装着してそれぞれの専用エクステンダーに乗ってネロンガに向かうのだった。

第12話「放電怪獣復活」(後書き)

ネタ作るのに時間がかかったあ!!でも皆さんのおかげでしばらくは大丈夫だと思えます。さて次回は更なる怪獣が登場します・・・その怪獣とは勿論・・・

次回もお楽しみに



### 第13話「霧門岳大噴火」(前書き)

前回までのあらすじ

ももかのモデルの仕事の場所が観光地で有名の霧門岳ということで一緒についてきた大人達一行。久々に全員で大いに遊びゲレンデをエンジョイしていたのだが突如霧門岳付近ではるか昔に封印されていたと言われる『電気を喰う怪獣』のネロンガが現れた。大人、琢磨、傑の3人は怪獣をひきつけて人々の避難誘導を行うのだった

### 第13話「霧門岳大噴火」

大人・琢磨・傑「変身!!!」

電子音「HESIN」

ネロンガ「ガアアアアアアアアアア!!!」

大人達はエクステンダーに乗り込みながらベルトにゼクターを装填していき重厚な鎧を身に纏い仮面ライダーに変身していく。そして琢磨が変身するガタツクがマスクドフォームの遠距攻撃であるガタツクバルカンでネロンガに向けて乱射して自分達に気を引かせる。

ガタツク「来い怪獣!!!お前の相手は俺達だ!!!」

カブト「ガタツクはそのままバルカンで奴を引きつけてくれ。ダークカブト!!!行くぞ!!!」

ダークカブト「OKカブト!!!」

カブト・ダークカブト「キャストオフ!!!」

電子音「CAST OFF」

電子音「CHANGE BEETLE」

電子音「CHANGE BEETLE」

二人はバイクに乗りながらバイクのメーター部分にあるスイッチを同時に押すとバイクの装甲が勢いよく飛び散りエクスマードに変形する。また同時にカブトとダークカブトが身に纏っているの装甲も飛び散っていきシャープなライダーフォームになる。

カブト「いつけえええ!!!」

ダークカブト「はあああああ!!!」

ネロンガ「!?!?!グオオオオオオオオ!!!」

二人はエクスマードに変形させたカブトエクステンダーの角の部分をネロンガの前足の部分に突き立てていきカブトムシが角を使って物を持ち上げる要領でネロンガを押し押してやる。

カブト「ガタツク、ダークカブト……そろそろアレで決めるぞ!!!」

ガタツク・ダークカブト『おう!!!』

ガタツク「キャストオフ!!!」

電子音「CAST-OFF」

電子音「CHANGE STAG-BEETLE」

3人はこのままネロンガに止めを刺そうとバイクを降りてマスクドフォームのままのガタツクはキャストオフして蒼がメインカラーのライダーフォームにチェンジしていくと全員がベルトの右の部分にあるスイッチに手をかける。

カブト・ガタツク・ダークカブト『クロックアップ!!!』

電子音「CLOCK-UP」

ネロンガ「!?!?!?ガゲウウ!?!」

カブト「はあああああ!!!たあああああ!!!」

ガタツク「おらおらおらあ!!!!!!」

ダークカブト「ふん!!!やあああああ!!!」

3人はベルトのスイッチを押すと姿が消える。と言うよりは姿が見えなくなるほど光速で移動できるようになったと言うほうが正しいであろう。ネロンガは何が起きたのか理解が出来ずに辺りをキョロキョロと見回すのだが何処にいるかは当然分かるわけがなかった。その間にも3人はそれぞれの専用武器でネロンガの巨大な身体を切り裂いていく。

ネロンガ「グオオアアアア!?!?!?!?!?グルグルグルウウ!!!」

ネロンガは何とか3人を見つけ出そうとするが出来るわけがない。・  
・こうなれば目に目で対抗してくれるとネロンガの姿が突如見えなくなる。

カブト「なっ!?!?!?消えた」

ガタツク「バカな。・あの巨大が何処に消えたって言うんだよ?」

ダークカブト「分からない。・皆。・気をつける!!!」

突如姿が消えたネロンガに対して混乱する3人。時間が経つと3人のクロックアップは時間切れになり姿を晒す事になった。今度は自

分達がネロンガに翻弄されることなる。

ネロンガ「グオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!」

カブト・ガタツク・ダークカブト「!!!!!???」

突然ネロンガは姿を見せると3人に向かって角から放たれる雷撃で攻撃してきた。3人は咄嗟の不意打ちには対応できずに避けるのが遅れてしまう。

カブト・ガタツク「ダークカブト」うわああああああ!!!!!!!!!」

3人は雷撃攻撃の爆発でもものすごい勢いで雪に覆われる白い地面にライダーの鎧ごと行きおいとく叩きつけられてしまう。ネロンガはその隙に3人に近づこうとするがそれをさせまいと何処からレーザーが飛んできた。

矢車「カブト大丈夫か!？」

影山「無茶しやがって・・・兄貴、ホリイさんデキサスビームを奴のドツテ腹にぶち込んでやりましょう!!!」

ホリイ「待ちや・・・デキサスよりもレーザーで牽制させて奴の気をこつちに引くのが先決や」

援護に来たのは矢車達であった。ウィング2号のレーザーショットでネロンガを制止させて間一髪でカブト達を守ったのである。そして今度は自分達に注意を引こうとレーザーを打つ。

ネロンガ「・・・グルルルル・・・」

ネロンガは形勢が不利だと判断したのかもう一度透明になるとその場から立ち去るのだった。

矢車「逃げられたか・・・」

ホリイ「それよりも仮面ライダー達は大丈夫かいな?・・・」

影山「大丈夫ですよ・・・ライダーシステムも資格者もあの程度では死にません」

矢車「とにかく俺達は奴の情報欲しい。麓に着陸して情報を得よう」

ホリイ「そやな。」

矢車達はウイングを霧門岳の麓に着陸させるのだった。

大人「うう、ううう……二人とも……大丈夫か？」

琢磨「なんとか……」

傑「左に同じだ……」

3人は変身が解除されてしまいフラフラになりながらも辺りを見回すがネロンガの姿は既にどこにもなかった。3人の事が気ばかりになったつぼみ達が大人達の元に走ってきた。

つぼみ「3人とも大丈夫ですか!？」

大人「一応五体満足だよ」

えりか「何言ってるんの!!!ボロボロじゃない」

琢磨「面目ない……奴にあんな能力があるとは……」

傑「予想外だったよ……願わくは止めを刺そうと思ったんだが……」

……

いつき「とにかく別荘に戻って手当てをしないと!!!」

ゆり「そうね。3人とも歩ける？」

大人「ああ。別荘まではなんとか歩けるよ」

ももか「でも辛そうね……肩を貸して一緒に行けば早いでしょ」

琢磨「ありがとう」

傑「すまない……」

大人達はつぼみ達の肩を借りてなんとか別荘まで歩く。

そして場面は別荘に切り替わり。

大人「いたあー!!!!……ううう(泣)」

つぼみ「い、痛かったですか?(汗)」

大人「い、いや……それほどは(汗)」

ゆり「それにしてもボロボロね。ライダーフォームにだったとはいえ此処まで人体に酷いけがをさせるなんて」

大人「ああ。直撃してたらこんなんじゃないよ。いつつつ……」

┌

琢磨「ちょ、えりか、夕さん少しは丁寧……」

えりか「もお〜うるさいな。どうせ痛いんだからちよつとは我慢しなさい!!」

琢磨「い、いやそれはそうですが(滝汗)」

夕「男の子でしょ?大人しくしてなさい!!」

琢磨「ちよ、そんな大量に(汗)いぎゃあああああー!!!」  
えりか「よし終わり」

夕「全く世話がかかるんだから」

琢磨「お、鬼だ・・・えりかと夕は鬼だあ!!!」(泣)

傑「すまない・・・3人とも。この程度は自分でやるものなんだが  
いつき「しょうがないですよ。うわあ〜背中に大きい傷が」

傑「ぐうう・・・結構深いのか?」

アンナ「と言うよりは範囲が大きいです。すぐに終わらせます。」

傑「頼む。」

ももか「じゃあ先ずは消毒を」

傑「ううう!!!・・・結構痛い(泣)」

いつき「我慢してください。すぐに終わらせますから」

3人は傷の手当てを行うのだが痛みは避けられず3人の声が室内に響く。特にえりかと夕に手当てを受けていた琢磨の悲鳴はものすごい物であった。そしてしばらくして手当てが終わると3人の身体は服を脱げは包帯だらけの状態となっていたのだった。そしてしばらくするとももかは別の仕事の時間となり大人達に後を任せて現場に向かうのだった。

大人「しかしアイツは一体何なんだ?突然姿が消えたと思ったら角から雷撃攻撃なんて・・・」

傑「噂は本当だったらいいな。奴ははるか昔に一人の侍に封印された「ネロンガ」っていう雷獣らしい」

琢磨「雷獣ってことは雷を使う怪獣ってことか?」

傑「ああ。ただど言伝え程度の話だったらいいけど・・・何で今になって復活したんだろ?」

大人「まさか・・・宇宙人の仕業か？」

つぼみ「バルタンが言っていた残党がこの地球に？」

えりか「でもレッドキング達が住んでいた星の怪獣たちがいるなら何でわざわざ封印された怪獣を復活させたのかな？めんどくさくない？わざわざ封印を解くなんて・・・」

いつき「確かにえりかの言うことも一理あるね。そんな手間をしても一体だけしか現れないわけだし・・・バルタンの考え方に一気に何体も怪獣を送り込んできそうなのに・・・」

ゆり「・・・もしかしたら何かの外的要因でネロンガが復活したんじゃないかしら？」

アンナ「外的要因っていうと？」

ゆり「そこまでは分からないわ・・・でもそう考えるのが一番筋が通ると思うのよ」

確かにゆりの言う通りである。バルタンなどの侵略者がこのような効率の悪い作戦を考えるとと思えない。現に今までの敵の作戦は町を破壊する傾向が強かったし今回は停電という被害ぐらいで人命の被害は全くなかった。そう考えるとネロンガは何か別の要因で復活したと考えるのが妥当な考えとなるのである。

大人「とにかく調べてみる必要があるね。麓の人に色々と聞いてみよう」

全員「うん！！」

とにかく考えていても仕方ないため今は行動あるのみだと大人達は麓の人々からネロンガについての情報を得ようと麓に向かうのだがそこには既に情報収集を行っているところのGUTS隊の矢車達の姿があった。

矢車「大人！！無事だったか？」

大人「はい。何とか五体満足です」

影山「無茶しやがって・・・でも無事でよかったよ」

琢磨「すみません心配をかけて」

アンナ「大人さんあの此方のお二方は？」

大人「あ、アンナちゃんは初めてだったね。こちらはGUTSの矢車さんと影山さんです。3年前俺達と闘ってくれた仲間ってところだね」

大人さん「彼女はアンナちゃんです。此処だけの話ですけど彼女もプリキュアなんです」

矢車「ほう。君もプリキュアなのか・・・初めまして。矢車想だ宜しく」

影山「同じく矢車さんの部下の影山です。宜しく!!」

アンナ「宜しくお願いします。アンナです。」

大人「自己紹介はこの辺にして。矢車さん達がいると言う事はGUTSも調査ですか?」

傑「もしかして矢車さん達もネロンガの事を?」

矢車「ああ奴の事は大体わかったよ。奴が封印されている古井戸は霧門岳と近くの海に繋がっているらしい」

大人「海と霧門岳に!?!」

影山「ああ。ネロンガを何かが復活させたとなると海から霧門岳のマグマじゃないかと考えられるんだ。でも一番可能性が高いのは前者だね。霧門岳は休火山であるからマグマと言う原因は考えにくいから。」

つぼみ「となると・・・海にネロンガを起こした原因があると考えるべきでしょうか?」

えりか「でも何が起こしたんだろう?」

いつき「分からない・・・矢車さん海にすんでいる怪獣って何か心当たりは何ですか?」

矢車「分らない。ZECTにいた時はワーム専門だったしゴルザ達が出てくるまで怪獣なんて夢の産物だと思っていたな」

ゆり「影山さんは?」

影山「うゝん海に住む怪獣かあ・・・分からないな」

大人「・・・(海に住む怪獣・・・しかし本当に海からって断定できるのか?・・・霧門岳にもつながっているととなると霧門岳にも



何かあると考えるのが自然ではないだろうか？・・・何か忘れてる気がする・・・一体なんだ？・・・喉元まで来てるんだが思い出せない・・・」

矢車達の調査結果を聞いて大人は何かおかしいと思った。海に怪獣がいるとしても何のためにわざわざネロンガが封印されている井戸まで行くと言うのだろうか？そこを住みかに行っているのなら400円の今まで何故何事もないようにネロンガは封印されていたんだろうか？その近くに何か眠っていたにしろなぜ今更封印が解かれたのか・・・本当に海の怪獣が原因なんだろうか・・・俺達は何かを見落としている・・・その思いが大人の中で疑問を更に生んでいく・・・

つぼみ「大人さん？・・・どうしたんですか考え込んでしまってます大人・・・いや海だけに断定するのはまだ早い気がするんだよ・・・だって霧門岳にもつながっているとなるとネロンガのように霧門岳にも怪獣が眠っていてそいつが原因でネロンガが目覚めたとも考えられないかって思ってさ・・・」

ゆり「成程ね。確かに海だけとは断定するにはまだ判断材料が足りないわね。怪獣が出始めたのもゴルザ達が出現し始めてからだし霧門岳にも怪獣が眠っていると考えるのが普通ね」

琢磨「待てよ霧門だけって休火山とはいえ火山だぞ？・・・マグマがある場所に怪獣が眠っているなんて考えられるのか？」

傑「そこまでは何とも言えないけど俺達の常識を超越するのが怪獣だとしたら可能なんじゃないか？」

ホリイ「そのとーりやー！！」

ホリイ「怪獣に人間の常識は通用せえへん。霧門岳も調べてみる価値はあると思うで」

矢車「そうですね。では本部に連絡して地底タンクのピーパーで霧門岳内部を調査できるよう申請してみます」

ホリイ「じゃあ海はドルファアの出番やな」

矢車がGUTS本部に連絡しようとしたその時突如辺りが揺れ始める。その揺れは立っているだけで精一杯なほどであった。

つぼみ「な、なんですか急に!?・・・きゃああっ!!!!」

大人「つぼみ!!!!・・・っと大丈夫?」

つぼみ「は、はい・・・(は、恥ずかしいです)」

つぼみがバランスを崩して転びそうになるがその前に大人が咄嗟に つぼみの身体を掴んでバランスを保つ。つぼみは顔が真っ赤になるが大人は特に何も気にしていないようであった。

えりか「な、何でこんな揺れが・・・な、何あれ!!!!」

全員「!!!!!!」

えりかが霧門岳のほうを指差して大声を上げる。全員が霧門岳のほうを見ると霧門岳から火の柱が上がっている様子であり霧門岳が大噴火を起こしているのだった。山の山頂からは凄まじい勢いで炎が上がりマグマが火口からドロドロと溢れ出ていく・・・その自然の脅威とも呼べるものに全員が言葉を失いじっと眺めてしまうのだった。

大人「な、何で休火山が噴火なんかを!？」

ゆり「休火山が噴火する事は珍しくない事だけど・・・生で見ると凄いわね」

矢車「ノンキにそんなこと言っている場合じゃない!!!!早く此処にいる人々の避難を!!!!」

影山「そうですね!!!!。ホリイさん俺達はウイングで消火活動を」  
ホリイ「了解や。矢車、避難誘導は頼んだで!!!」

矢車「分かりました。大人達も手伝ってくれ!!!俺一人じゃバキきれない。」

大人「勿論です。皆行くぞ!!!!」

つぼみ・えりか・いつき・アンナ「はい!!!!!!」

琢磨・傑「おう!!!!!!」

ゆり「うん!!!!」

タ「ガッテン承知!!!!」

矢車を先頭に大人達も避難誘導に参加するのだった。しかしなぜ突如霧門岳が大噴火を起こしたのかは原因が分からなかった。人々は突然の火山の大噴火に戸惑いを隠せるわけがなく人々は混乱する中避難所へと避難する。大人達も殆ど避難が完了すると避難テントへと向かうのだった。

??? 「グルルルルルツ!!!」

??? 「グオオオオオツ!!!」

マグマがあふれる霧門岳の内部には2体の巨大な影が蠢いていた。

この影が霧門岳を噴火させたのは言うまでもないだろう・・・この2匹の正体は何者なのか!?

第13話「霧門岳大噴火」(後書き)

久々のライダーでの闘いです!! いやあ懐かしいと感じてしまうのはこう言う時なのかもしれません!!。

さて次回はGUTSの大活躍(!? )を期待下さい。

次回もお楽しみに

## キャラクター紹介？～主要人物編～

### オリジナリキャラ

上原 大人 20歳 イメージCV 宮野 真守 /ウルトラマンティガ

前作から引き続き登場。前作の『仮面ライダーカブト×ハートキャッチプリキュア！ライダーシステムと心の大樹』では仮面ライダーカブトの資格者としてハートキャッチプリキュアの面々と共に砂漠の使徒と闘った。本作ではウルトラマンに選ばれ、自分がキュアアンジェと共に戦った光の英雄戦士の血を受け継ぐ子孫の一人である事を知る。現在はゆりの監督のもとで猛勉強をして明堂院大学経済学部経営学科に在学中である。幼馴染で恋人関係だった夕とは恋人関係を解消しており最近では妹分だったつぼみの事が気になりだしているが妹分であった過去が切り離せずに思いを伝えられない。また前作で出会った天道総司の影響で料理の腕を磨いていてその腕は師と変わらないほどにまで上達した。最初はウルトラマンティガとして戦う事を拒み自分の得た力に戸惑いが隠せない部分があったがキリエロイドとの戦いでプロツサム達の言葉にウルトラマンとしての自分を受け入れた。

漆山 琢磨 20歳 イメージCV入野 自由 /ウルトラマンアース

前作から引き続き登場。前作の『仮面ライダーカブト×ハートキャッチプリキュア！ライダーシステムと心の大樹』でも仮面ライダーガタツクの資格者としてハートキャッチプリキュアの面々と共に砂漠の使徒と闘った。現在は大人達とは違う大学に通いながらバイクで日本を一周という夢を叶えるためにアルバイトに励んでいる。アースに選ばれた事で自分がキュアアンジェと共に戦った光の英雄戦

士の子孫である事を知るが自分の力を受け入れて世界を守る為に戦う事を決意する。また最近はいりかとの距離が縮まりいりかが将来デザイナーとなった時に自分のレザージャケットを作ってもらいその後いりかと共に日本を一周する事を約束した。

影山 傑 かげやま すくも 20歳 イメージCV福山 潤 /ウルトラマンデユナミス

前作から引き続き登場。前作の『仮面ライダーカブト×ハートキャッチプリキュア！ライダーシステムと心の大樹』では仮面ライダーダークカブトの資格者としてハートキャッチプリキュアの面々と共に砂漠の使徒と闘った。現在は外交官になる夢を叶えるために大学にて外国語、海外文化、外国経済について勉強中である。デユナミスに選ばれたことで自分がキュアアンジェと共に戦った光の英雄戦士の子孫である事を知るのだが琢磨と同じく自分の力を受け入れ世界を守るために戦う決意をする。最近はいつきとの距離が縮まりいつきとよくプライベートの時間を過ごしているとか。

里中 夕 さとなか ゆう 20歳 イメージCV堀江 由衣 /仮面ライダーフエアリー

前作から引き続き登場。前作の前作の『仮面ライダーカブト×ハートキャッチプリキュア！ライダーシステムと心の大樹』では仮面ライダーフエアリーの資格者としてハートキャッチプリキュアの面々と共に砂漠の使徒と闘った。現在は子供の笑顔を守ると言う夢の為に大学で教育について学んでいる。大人とは相思相愛の関係だったが自分が自分の夢と大人の事を思って自分から別れる事を決意し大人との恋人関係を解消した。しかし大人の料理の腕前を見てその事を後悔している節があるが近年はつぼみが大人の事を思っている事に気がつきひそかにつぼみの事を応援している。大人達のようにウルトラマンの力はないがフエアリーの力を果敢に振るい平和を乱し自由を奪う者は容赦がない怒りを見せつける。

## ハートキャッチプリキュアメンバー

花咲つぼみ はなさき 17歳 イメージC V水樹 奈々 / キュアブロッサム  
ご存知2010年の2月より放送された『ハートキャッチプリキュア!』の主人公。シャイでおつちよこちよいなのな事と弱い者を労わる優しさは相変わらずだが3年前と比べるとメンタル面では成長し芯の強い少女となった。現在はえりかやいつきと共に明堂学園の高等部に進学し高等部でもえりかを部長としてファクション部を設立した。植物学者になる夢を叶えるため日々勉強に励みながらも日々を大切にしている。最近は幼い事に実の兄のように慕ってた大人に恋心を抱いているのだがシャイな性格が災いして告白できずにいる。ゴルザ達の復活で再びキュアブロッサムとして戦うことになり過去の経験を活かして人々心と平和を守るために平和を乱す者と闘う。

来海えりか くろみ 17歳 イメージC V水沢 史絵 / キュアマリン  
ご存知2010年の2月より放送された『ハートキャッチプリキュア!』の主要人物。つぼみの大親友。つぼみとは対照的にアクティブな性格は相変わらずだが3年前と比べると他者の心に気を配れるようになりつぼみや他の仲間たちと同じく芯の強い少女へと成長している。現在は明堂学園の高等部に進学し高等部でもファクション部を設立し部長として活躍している。最近は琢磨と共に日本を一周する事と姉のももかのようにモデルやファッションデザイナーになる夢を叶えるために日々努力している。琢磨の事は一応気になっているようだが友達以上恋人未満と言う関係である。ゴルザ達の復活でキュアマリンとして再び戦うことになり過去の経験を活かして人々の心と夢を守るために平和を乱す者と闘う。

明堂院いつき みよどういん 17歳 イメージC V桑島 法子 / キュアサンシャ

イン

ご存知2010年の2月より放送された『ハートキャッチプリキュア!』の主要人物。つぼみ、えりかの大親友であり明堂学園の理事長の孫娘。一人称は相変わらず「ボク」であることと可愛い物に目がない事は相変わらずだがルックスは長髪にスカートの制服と言う女の子らしいものとなり兄のさつきの病気も完治したことで自分に正直になった。つぼみ、えりかが運営するファッション部の部員にして現在の明堂学園高等部の生徒会長を努めている。現在恋人はいないが外交官の夢を抱いている傑に憧れを抱いている節がありプライベートでも仲がいい。ゴルザ達の復活でキュアサンシャインとして再び戦う事になり過去の経験と今なお明堂院武術で鍛えている武道の心得を活かして人々の心と心の闇を太陽のように照らすために平和を乱す者と闘う。

つきかけ

月影ゆり 20歳 イメージC V久川 綾ノキュアムーンライト  
ご存知2010年の2月より放送された『ハートキャッチプリキュア!』の主要人物。つぼみ、えりか、いつきの先輩格で現在は大人と同じ明堂学園大学部に在学中。今現在は自分が何をしたいのかを必死に探している。クールで完璧主義の性格は相変わらずだが3年前の経験で母親のような優しさを持つ女性へと成長した。現在は親元を離れて一人暮らしをしておりその影響で料理の腕が大人と同レベルないしそれ以上となった。ゴルザ達の復活で再びキュアムーンライトとして再び戦うことになり過去の経験を活かして人々の心を守り幸せで満たす為に平和を乱す者と闘う。

プリキュアの妖精たち

シプレ イメージC V川田 妙子

ご存知2010年の2月より放送された『ハートキャッチプリキュア!』の主人公花咲のつぼみのパートナー妖精。3年前の闘いの後



は破壊王デューンによって枯らされてしまった心の大樹が生み出した新しい命を育て守っている。つぼみのお姉さん役は相変わらずでつぼみの事に手を焼いているが姉気分としてつぼみと楽しく暮らしている。

コフレ イメージC Vくまい もとこ

ご存知2010年の2月より放送された『ハートキャッチプリキュア!』の主要人物の来海えりかのパートナー妖精。3年前の闘いの後は破壊王デューンによって枯らされてしまった心の大樹が生み出した新しい命を育て守っている。えりかのマイペースな性格に手を焼いているが本人も満更ではなく弟分としてえりかと楽しく暮らし

ポプリ イメージC V菊池 こころ

ご存知2010年の2月より放送された『ハートキャッチプリキュア!』の主要人物の明堂院いつきのパートナー妖精。3年前の闘いの後は破壊王デューンによって枯らされてしまった心の大樹が生み出した新しい命を育て守っている。いつきと同様可愛いものに目がなく大好きなパートナーのいつきともう一度暮らせる事を密かに願っていたため今はいつきと楽しい日々を送っている。

## 第14話「噴火の元凶」(前書き)

前回までのあらすじ

カブト、ガタツク、ダークカブトの3人はネロンガに立ち向かうもネロンガの特異の技透明化によって惑わされ反撃を受けてしまう。

一行はその後ネロンガについて調べることにしたのだがそれと同じころ霧門岳が大噴火を起こすのだった

## 第14話「噴火の元凶」

此処はTPC極東本部基地のタイプハンガーの会議室。突如起こった霧門岳の噴火対策会議を行ったいる真つ最中であつた。

ミヤザワ「休火山が噴火する事は珍しい事ではありません。ただ問題なのは霧門岳内のマグマの異常な動きです」

サワイ「異常な動き？」

そう宮司局長に問いたただす男はTPCの最高権力を持つ初代総監のサワイ ソウイチロウ である。サワイはミヤザワに何が異常なのかを説明を求める。ミヤザワは状況を説明する為に全員にモニターを見るように指示をするとモニターに霧門岳の断面図を出させる。その図では基地門岳の地下に吸い寄せられるように集まっているマグマの図であつた。

ミヤザワ「見てください。霧門岳の地下にまるで吸い寄せられるようにマグマが集まっています」

ナハラ「ミヤザワ局長は霧門岳の地下にマグマを集める特別な要因がある？」

ミヤザワ「ええ。このまま放っておくと莫大な量のマグマが一気に噴き出します」

ヨシオカ「そんな事になったら大災害だ・・・責任は誰が取るのかね？」

そう問いたただしたのはTPCのハト派の参謀であるナハラ マサユキ 参謀。そして同じくセンスがトレードマークでかつての防衛庁の庁長せあつたTPCのタカ派であるヨシオカ・テツジ警務局長官は難しい顔をしながらそう言う。

ナハラ「一時的にマグマの流れを止める事は出来ないだろうか？」

ナハラはおもむろにそう言う。マグマの流れさえせき止める事が出来れば再び大噴火を起こす事は一時的にはなくなる。一時凌ぎでしかないがそれでも完璧な対策を考える為には時間が必要だ。何か手

があれば・・・全員は何かないかと考えつく・・・カシムラ「そうとな危険を伴いますが・・・ピーパーなら」

最初に口を開いたのはGUTS隊のウィングなどの兵器を開発しているカシムラ・レイコ博士であった。

ナハラ「ピーパー?」

カシムラ「ええ。地底探査用のタンクです」

ヨシオカ「探査?そんな悠長なウツクシイ・・・」

サワイ「よし。ピーパー出動!!!」

かくして霧門岳のマグマせき止め作戦が開始されることとなり指令室には矢車、影山、ホリーの3名以外の隊員が指令室に集まった。

イルマ「地底タンクピーパーで霧門岳地下のマグマの流れを操作できないかしら?」

ムナカタ「ピーパーにコールドビームを搭載しましょう。マグマを凍結して溶岩石にすればマグマの流れをせき止められます」

イルマ「では各員準備に取り掛かって」

全員「了解!!!!」

こうして既にウィング二号で現場に向かった矢車達3名と合流し地点タンクピーパーによるマグマ凍結作戦が開始されることとなった。

大人「大変な事になっちまった」

つぼみ「せつかくのお休みが(泣)」

琢磨「悲惨散々だ・・・ケガもするし」

えりか「それは関係ない気がする」

いつき「気になるのがネロンガだよ。ネロンガがこの状況で現われでもしたらそれこそ大変だよ」

傑「ああ・・・まるで計ったようにネロンガの復活と霧門岳の噴火が重なったからな」

ゆり「タイミングが良過ぎる気がする・・・こんな偶然って本当にあり得るのかしら?」

タ「うん。怖いよね・・・ゴルザ達もアレから全く姿を見せないし」

大人「夕・・・今なんていった？」

夕「え？だから怖いよねって・・・」

大人「その後」

夕「その後はゴルザ達もアレから姿を見せないって」

大人「そうか・・・それだ！！これで繋がった・・・」

大人は夕の言葉に頭の中でもややもやしていたものがハッと晴れたかのような顔をした。全員が頭にクエスチヨンマークを浮かべながら大人を見つめる・・・

つぼみ「大人さん？」

琢磨「どうしたんだよ急に？」

大人「分からないか？ゆりの言うとおりこんな偶然が重なるなんてあり得ない。そして俺達が唯一逃がした敵はゴルザとガルラ・・・此処まで言えば分かるよね？」

つぼみ「ま、まさか今回の黒幕は・・・ゴルザとガルラ？」

そう大人が言いたい事はつまりこの一連の出来事を裏で操っていたのはティガの地で逃がしたゴルザとガルラだと言う事を言いたいのである。突然大人の言う事に全員が困惑する・・・

えりか「で、でも何でその2匹だって断定できるんですか？他に眠っている怪獣がいるかも知れないじゃないですか？」

大人「俺も最初はそう考えたさ・・・でも今までの事から考えるとこの2匹が一番候補に挙がるじゃない？。それにネロンガが封印されていた井戸が霧門岳繋がっているって聞いたと時ピンと来たんだ。ゴルザとガルラがティガ達に反撃の機会を伺う為に何かをし始めた影響じゃないかってね・・・だとしたら今のところ候補に挙がるこの2匹が霧門岳に近づいた事によってネロンガが目覚めてそれと同時に霧門岳も大噴火を起こした・・・じゃないかって考えがね」  
確かにえりかの言うとおり敵はゴルザとガルラの2匹と断定するには判断材料が足りない。だが大人の言う事にも一理ありネロンガが封印された井戸が霧門岳に繋がっている事とこのタイミングの良さ考えると自ずとこの考えに至るのだ。一同は大人の考えに納得し

たかのような顔をする。

いつき「反撃を伺う為の何か・・・それと霧門岳と何の関係が？」

ゆり「マグマ・・・もしかしたらゴルザとガルラはマグマをエネルギーに変える能力があるのだとしたら・・・」

アンナ「だとしたらマグマを吸収して自分を強化を図っている・・・とする」と

タ「もしも・・・ティガ達が敵わないほどにパワーアップしてたとしたら・・・」

アンナの言葉に全員が嫌な予感がした・・・もしゴルザ達が最初に出てきた時よりも凄まじくパワーアップをしていたのだとしたら・・・そう考えるだけでゾツとした。あの時はティガ達のお陰でなんとか撃退は出来たがもしもティガ達が敵わないほどにパワーアップしていたとしたら・・・

えりか「だいじょーぶだよ!!!もしもあの二匹がパワーアップしてたとしても今度はティガも、アースもデュミスもいる・・・それにアタシ達が頑張って負けないようにするだけじゃん!!!今度は絶対にアタシ達も諦めない」

大人「・・・そうだね。絶対に」

えりかの言うとおりであった。例えあの二匹が凄まじいパワーアップをしたとしても自分達は全力で迎え撃てばいい・・・その為に俺達3人の力があるのだから・・・一人で敵わないのなら2人で2人よりも4人で立ち向かえばいい。そうすればどんなに手強くても必ず勝てる。そう信じて。

矢車「これより地底タンクピーパーで霧門岳地下に潜ります」

ムナカタ「了解。二人とも気を付ける・・・地底では一切の支援が出来ない」

影山「分かっています。よしスタンバイOK」

矢車「よし。いくぞ!!!」

その頃霧門岳のちょうど真横に当たる地点ではGUTS隊による霧門岳のマグマ操作作戦が開始されたところであった。地底タンクのピーパーには矢車、影山が乗り込んでいた。そして入口が爆破されるとピーパーは前進していき霧門岳を自慢のドリルで突き進んでいく。

矢車「スピンドラー回転開始」

岩盤を砕くかのように進んでいき目指すのは霧門岳のマグマが溜っているマグマの川がある地点である。

影山「回転数を3000に上げます。……現在地底900m視点を通過。」

そしてしばらくすると気門岳の内部に入り目の前には高温でまるで血液近い色をしたマグマの川が広がっていた。

影山「地底洞窟に出ました。マグマの川が霧門岳の地下に向かって続いています」

ムナカタはウイング2号のモニターからその様子を見ていた。これを溶岩石に固めてしまえばしばらくはマグマの噴火を抑える事は出来る筈だ。

ムナカタ「よしマグマを凍結させるんだ」

影山「了解。」

ムナカタの指示に矢車達はピーパーのコクピット内のボタンを操作して絶対零度を利用したマグマすら凍結してしまう凍結光線のコールドビームの発射態勢に入るのであった。

矢車「コールドビーム発射!!!」

矢車の声とともにコクピット内のCOLDのボタンを押すとピーパーのドリルの先端から青色の光線がマグマの川に無会って放たれていくとそのままマグマは凄まじい冷気で熱を失うとそのまま固められて溶岩石に変化する。

影山「やった!!!」

影山がガッツポーズをとり喜ぶと同じタイミングに何か声のようなものが響いた……。だがこの環境で生物がいるなどあり得ない……

・だが確かに聞こえた。

矢車「!?!?!?!今声が……」

影山「声?」

矢車「怪獣の声のようなものが……聞こえたんだが」

影山「まさか……リーダー直ちに帰還します」

矢車「待て影山」

ムナカタ「どうした?」

矢車「このまま霧門岳方面に行けばマグマを吸い寄せている原因が分かります」

ムナカタ「ダメだ。最初にも言ったとおり地底で何かあってもこちらから支援は出来ないんだ。万が一の事があつたらどうする?」

ムナカタは2人にすぐに帰還するように支持を煽るがそこに無線でサワイが割り込む

サワイ「副隊長。副隊長の言う事は正論だ。だが霧門岳に原因があるとしたら探しておく必要もある。ここは偵察の意味も込めて矢車隊員達には危険を背負わせてしまいが私は先に進むべきだと思う」

ムナカタ「分かりました。矢車、影山……探索を行え。ただし危険と分かつたらすぐに引き返せ」

矢車・影山『了解!!!!』

矢車達はピーパーで霧門岳方面へと突き進んでいく深く進めば進むほど異形な空気とも呼べるようなものが流れ始めて辺りもそれに比例するかのようにな気味な雰囲気漂わせる。そしてしばらくすると霧門岳付近の地底洞窟らしき部分に出た。

矢車「……なんだあれは?」

影山「あ、アレは目?」

二人はコクピット内から洞窟の柱辺りに光る4つの物体を見つけた。……よく見ると何かの目に見える……二人は目を凝らしてよく見てみるとそれは怪獣の顔だった。

矢車「アレは……ゴルザとガルラだ!!!!」

イルマ「ゴルザとガルラ!?!」



指令室にサワイと共にいるイルマが思わずそう叫んで聞いた。長らく出てきていないため当然と言えば当然であろう。

影山「間違いありません。ゴルザとガルラは地底でマグマエネルギーを吸収していたんです」

イルマ「どうしてゴルザがマグマのエネルギーを？」

矢車「こいつらが封印されていたネロンガを起こしたのか・・・リーダーどうします？」

ムナカタ「今刺激すればお前達が危険だ此処は一度帰還しろ。体勢を立て直し殲滅作戦を考案する。」

矢車・影山『了解』

この場でゴルザとガルラを攻撃する事は防火服もなしに火災現場に飛び込むようなものだ。此処は一時帰還し体勢を立て直す事を優先し矢車、影山両隊員はゴルザとガルラに余計なまねをせずにその場を後にする。

サワイ「イルマ隊長、今こそゴルザとガルラに決着を付ける時だ。対策は？」

イルマ「追従式ドリルビームが完成しています。現場には私も向かいます」

同じころサワイ総監とイルマも現場に向かう。

そしてしばらくして矢車達は大人達一行を呼び寄せ霧門岳内部の事を報告していた

大人「ゴルザとガルラが霧門岳内部に？」

琢磨「大人の感が当たったか」

傑「それでこれからどうするんですか？」

矢車「本部から追従式ドリルビームで奴らを地上におびき寄せる」

大人「その後は？」

影山「ハイパーレールガンおよび2機のウィング2号のデキサスビーム更には4機ウィング1号で一斉攻撃を行うつもりだよ」

タ「凄い！！それだけの一斉砲撃を受けたら流石のあの2匹もひと

たまりもないはずだよね？」

大人「いや・・・そうとは限らないよ。地底で強化を図っていたんだ・・・最初の時もアレだけ苦戦したのに」

ゆり「そうね。矢車さんその殲滅作戦に私達も参加させていただけませんか？あの2匹を逃がした責任は私達にもありますから」

つぼみ「お願いします！！今度は負けません。必ず倒します」

今回の事はゴルザ達を逃がしてしまった自分達のせいでもある。つぼみ達は矢車と影山に必死に協力させてくれるように許可を請う。今度は必ずゴルザとガルラを倒す為に

大人「（つぼみ・・・あの時俺があの2匹を倒せていれば・・・）」

矢車「・・・」

えりか「お願いします！！」

いつき「僕達にも協力させてください！！」

アンナ「私も・・・手伝わせて下さい！！」

影山「兄貴・・・」

矢車「分かった。ただしお前達の正体がばれるのはマズイ。だから作戦の合流は変身してからだ」

全員「はい！！！！」

こうして大人達一行も殲滅作戦に加わる事となった。そして1時間後にダイブハンガーからサワイとイルマが到着し追従式ドリルビームのセッティングも完了し作戦開始時刻となった。そこには変身したブロッサム達プリキュアとカプト達仮面ライダーがいるのであった

サワイ「私とイルマ隊長が全体の指揮をとる。副隊長ドリルビームを頼む」

ムナカタ「了解」

イルマ「ゴルザとガルラは地底1823mの01座標にいます」

サワイ「ドリルビーム照準をロック」

ムナカタ「照準をロック！！」

サワイの合図にムナカタ以下の部下はドリルビームの照準をゴルザとガルラの脳天に合わせるように捜査を開始し発射態勢に入る。

サワイ「ドリルビーム発射!!!!」

ムナカタ「発射!!!!」

ドリルビームが発射されると辺りに振動が走る。そして地下を映したモニターにビームの行方が映し出される。

ムナカタ「第1ビーム命中……!!!!……第2ビーム命中!!!!」

イルマ「2匹が地上に出ます!!!!」

サワイ「攻撃スタンバイ」

ムナカタ「総攻撃スタンバイ!!!!」

隊員達『了解』

ホリイ「デキサスビームスタンバイ」

レイナ「了解!!!!」

カブト「ハイパーキャストオフ!!!!」

電子音「HYPER CAST OFF」

電子音「CHANGE HYPER BEETLE」

ダークカブト「クナイガン、エネルギー充填開始」

フェアリー「ライダーバースト、発射準備」

陽動に掛かったゴルザとガルラの逆襲に備えてGUTS隊の面々は総攻撃の準備に入る。ハイパーレールガンの一斉射撃更、更に2機のガッツウイング2号のデキサスビーム、ウイング1号のハイパーレーザー更にライダー達の各個人の最強技、更にブロッサム達も遠距離系の必殺技の準備に入る。

ゴルザ「グオオオオオオオオオオ!!!!!!」

ガルラ「グガアアアアアアアアウウウ!!!!!!」

サワイ「発射!!!!」

ムナカタ「発射!!!!」

ハイパーカブト「マキシマムハイパーサイクロン!!!!」

ガタック「ガタックバルカン!!!!」

ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト・ナイト『プリ



すと自分達は別のほうへと移動する。

大人「今度こそあの2匹と決着をつける。琢磨、傑……行くぞ！  
！」

琢磨「おう！！必ず奴らを倒す」

傑「これ以上は奴らの好きにはさせない」

ハイパーカブト達は変身を解除してそれぞれ自分の姿に戻るとスパークレンスを取り出す。今度は絶対に逃がさない……必ず奴らを仕留めると言う思いに共鳴するかのようにはスパークレンスは光を放っていた。

大人「ティガあーーーー！！！！！！！！！！」

琢磨「アー　スーーーー！！！！！！！！！！」

傑「デュナミスうーーーー！！！！！！！！！！」

3人はスパークレンスを空に掲げてスイッチを押して起動させて光に包まれる。白、赤、青の光が発せられる光が止むとそこには右手を天に突き出し左手を顔の横に曲げて添えると言う3人の独自の登場ポーズをしたティガ、アース、デュナミスの3人のウルトラマンの姿があった。

ブロッサム「ティガ！！それにアースとデュナミスまで！！！！」

マリリン「待ってましたよおウルトラマン！！！！」

ムーンライト「皆、私達もあの3人に負けないように……行きましょう」

サンシャイン「勿論……ナイトどうしたの？」

ナイト「皆さん……あそこを！！！！」

ナイトが指をさして方向を見るとそこから雷電が意思を持っているかのように集まるとネロンガも姿を現したのだ。自分を起こしてくれた元凶に復讐でもするつもりなのだろうか？

ブロッサム「ね、ネロンガ！！！！」

マリリン「この忙しい時に……こうなったらネロンガはアタシ達が引き受けようよ！！ティガ達に頼ってばかりじゃプリキュアの名

が廃るつてもんだし」

ムーンライト「マリンがそう言うとは思ってなかったけど・・・そうね。ティガ達にはゴルザとガルラの戦いに専念してもらおうにも・・・ネロンガは私達が倒すわよ!!」

ブロッサム・マリン・サンシャイン・ナイト『はい!!!!!!』

ネロンガに無かつて勢いよく飛んでいくブロッサム達プリキュア。ティガ達に代わって自分達が雷撃怪獣を相手にする。

ティガ達はゴルザとガルラをブロッサム達はネロンガを相手にし霧門岳を舞台にした3体怪獣と光の戦士達の戦いの火蓋は切って落とされた。強化されたゴルザとガルラ、透明化を武器とする電撃怪獣ネロンガを彼らは倒す事が出来るのだろうか？

## 第14話「噴火の元凶」(後書き)

更新遅れました。バイトが立て込んでいてこの時期は忙しいです  
(汗)

原作ではピーパーにはダイゴとシンジヨウだったのであなりましてが矢車、影山コンビではあならないと思つて素直に帰還させちゃいました。さて次回は3大怪獣との大乱闘が始まります

次回もお楽しみに

### 第15話「3大怪獣との激闘」(前書き)

前回までのあらすじ

霧門岳のマグマの流れをせき止めることに成功したGUTSだったが霧門岳内部でゴルザとガルラが潜伏している事が判明した。霧門岳の大噴火およびネロンガの復活はこの二匹が黒幕であったのだ。GUTSは2匹と決着をつけるべく追従式ドリルビームで地上におびき寄せ総攻撃を仕掛けるも作戦は失敗。止むなく大人達はウルトラマンとなり2匹に立ち向かうのだがバットタイミングでネロンガが登場してしまう。ブロッサム達はティガ達にはゴルザとガルラとの戦いに集中してもらうためにネロンガの相手を引き受ける。霧門岳を舞台に3大怪獣との激闘のツ火ぶたが切って落とされるのだった。



### 第15話「3大怪獣との激闘」

アース「!!!（ネロンガか・・・くっ!!!こんな時に・・・待つ  
てる俺が援護を）」

アースはネロンガが出てきた事に焦りを感じ自分が援護に向かおう  
とするがそれをデュナミスがアースの肩を掴んで止める。

デュナミス「シュウ!!!（待てアース。此処はブロッサム達にネロ  
ンガを任せて俺達は奴らを倒そう）」

アース「デヤア!!!（しかし・・・ネロンガの放電攻撃はライダー  
でさえも大ダメージを・・・）」

ティガ「チャアア!!!（アース・・・お前の気持ちは分かる。だ  
けどブロッサム達を信じるんだ。今度こそゴルザ達を逃がさない為  
にも）」

アース「・・・シュウ!!!（分かった・・・そうときまればサツ  
サとこいつらを片づけるぞ!!!）」

ティガ・デュナミス「ハアア!!!（おう!!!）」

ティガとデュナミスの説得に納得しゴルザとガルラの方向を向くと  
身構える。今度こそ絶対に逃がすわけにはいかない為に初戦で見せ  
た余裕はなく完全に本気モードで倒してやると3人は武者震いしな  
がらゴルザ達を睨む。

ティガ「ハッ!!!（いくぞゴルザ、ガルラ!!!今度こそ決着を付  
ける!!!）」

ゴルザ「ギシャアアアアアアアアウウウ!!!」

ガルラ「グガアアオオオオオオオオオオ!!!」

アース「ハッ!!!（先手必勝だ!!!オラアア!!!）」

デュナミス「デヤアア!!!（おおおおっ!!!）」

ティガはゴルザにアースとデュナミスはガルラに向かって頭から突  
っ込んでいき体当たりを放つがゴルザとガルラはそれを難なく受け

止めると逆に3人を吹っ飛ばす。

ティガ「!!!?.....デヤアア!!!（何!?.....くっ!!!...  
喰らえ!!!）」

ゴルザ「.....ギシャウウウウウ!!!」

ティガ「グワアアッ!?.....ウワアアッ!!!」

何と初戦では効果があつたティガのマルチパンチを血管が浮き出ている赤光りする胸で受け止めるとそのまま強烈なネイルクローでティガを思いつきり跳ね飛ばしてしまう。

ティガ「ジャア!!!...ハッ!!!チャアア!!!」

ゴルザ「.....」

だがティガは怯まずゴルザに向かいパンチとキックのコンボ攻撃を放つもそれもゴルザの強化された堅い皮膚には通用しない。それどころか逆にティガの攻撃を煽るかのようにニヤリと笑ってみせるとそのまま左手でティガの足を掴みあげてやると.....

ゴルザ「ギシャアアアアアアアオオオオ!!!」

ティガ「グアアアアアア!!!??」

片手でティガの足を掴んでバランスを崩させることでさえ驚異のパワーであると言うのにそのままティガの腰めがけて右手でネイルクラッシュを放たれてティガはまたもや身体が空中に飛ばされる程の衝撃で吹っ飛ばされる。

ティガ「ハッ!ハッ!!!ハッ!!!.....ンーーデヤアアアア  
ッ!!!」

今度はパンチ主体のラッシュ攻撃を放つていつてゴルザの急所を探り当てようとしていくのだが顔や肩にパンチを放つても平気な顔をしたままのゴルザ。そして放った拳を掴まれると.....

ティガ「グウウ!!!?.....ウオオオオオオ!!!???」

拳を凄まじい力で握られると痛みには怯んでしまうティガ.....そして腕を掴まれたままゴルザの太い足でキックを放たれるとそのまま投げ飛ばされしまう。

ティガ「ジャアア!!!」

ゴルザ「!!!!!!」  
グウウウウウウ!!!!!!」  
ティガ「ハッ!?!」

格闘線がダメなら光線で追い詰めるとハンドスラッシュをゴルザの胸に向かって放つがゴルザはそのハンドスラッシュを吸収してしま

う。  
ゴルザ「.....ギシャウウウウウウウウ!!!!!!」  
ゴルザは勝利を確信したかのような雄たけびを上げるとティガに襲いかかる。パワーアップしたことで自分の能力に自信がついたのか初戦の時よりもパワーと勢いが全然違う。ティガもなんとかこの状況を打破しようと格闘技で応戦するもゴルザのネイルクローや尻尾によるテイル攻撃、キックなどでまともな反撃が出来ない。ティガは距離を取って隙を伺うがそれをさせるものかとゴルザは角から強化された超音波光線をティガに向けて放つ。

ティガ「グアアアアッ!!!!!!」  
ハッ!!!!!!」

こうなればゴルザに出来ない技で反撃する死なないとティガは得意のアクロバティックな動きを見せて翻弄してからとび蹴りを放とうとしたがゴルザにそれを避けられてしまう

ももか「ウルトラマン.....頑張つてえ!!!!!!」

避難地で一番に声をあげたのはなんとももかであった。霧門岳が噴火したと聞いてえりかの事が心配になり戻ってきてしまったのだ。

ティガ「ンーーッ.....ハッ!!!!!!」

ティガはももかの応援に答えるかのようにティガクリスタルを赤く光らせると剛腕の赤い戦士パワータイプへとタイプチェンジを行う。此処から本当の闘いだと言うばかりにゴルザに構えを見せつけながら反撃を開始する。

アース「フン!!!フン!!!フン!!!!!!ハアアーーッ!!!ジュワアア!!!!!!」

ガルラ「グルルルル」

同じころアースとデュナミスVSガルラの闘いも始まっていた。先

ずはアースが自慢の強力パンチとキツクのハイパワーラッシュを放って初戦と同じくパワーで圧倒してやるうと思っただが強化された堅い装甲で打撃は全て防御されしまう。

デユナミス「（奴に打撃は不利か・・・ならばコイツで一氣に！！）」

ただの打撃が無理でもこれならどうだと次にデユナミスが氷の剣デユナミスセイバーを発動させて一氣にガルラを一刀両断してやるうと剣を振るうのだが・・・

ガルラ「・・・ガアアアアア！！！！」

デユナミス「！？」

突如ガルラの両腕の爪が伸びていくとその伸びた爪を缺のように利用してデユナミスのデユナミスセイバーを受け止めてしまう。

デユナミス「！？アアアアアアア！！！！」

アース「ハッ！！・・・ダアアアアアアア！！！！！！」

続いてアースが助走を付けてガルラに向かって勢いよくリアットを放つ。

ガルラ「ゲル・・・グオオオオオオ！！！！」

アース「アアアアアア！！！！」

のだがそれを受け止められると剣のように堅い爪とパワーアップした腕力でアースのボディに火花を散らすほどのダメージを与える。流石のアースもこのダメージは相当なものであり思わず膝をついてしまう。

ガルラ「グッフッフ！！！！・・・ガアアアアアア！！！！」

その隙にアースに強化された超火炎放射を放って追撃をするのだが何とかそれを避けるアース。

格闘線でダメなら光線技でダメージを与えてやると二人はハンドスラッシュを同時に放つがガルラはそれを胸で受け止めて吸収してしまう。

タ「負けないで！！！！アース、デユナミス・・・アタシは力になれない・・・だからアタシの分まで頑張つてえ！！！！！！！！」

アース「ハアアアツ!!!」

デュナミス「シャアアア!!!」

夕の言葉に励まされた二人は立ち上がる。アースはバーンナツクル、デュナミスはデュナミスセイバーを発動してガルラに挑む。例えどんなに強くなつても諦めずに立ち向かう。此処にいる人々を守るため・・・因縁に決着<sup>けり</sup>を付けるために。

ブロッサム「プリキュア・ダブルインパクト!!!」

サンシャイン「サンシャイン・シュート!!!」

ナイト「ナイトシュート!!!」

少し離れた場所ではプリキュアチームとネロンガの闘いが繰り広げられていた。ネロンガは放電攻撃でブロッサム達を近づけさせないが元々遠距離攻撃の技にも富んでいるプリキュア達には放電攻撃しか攻撃手段がないネロンガには不利であった。だが攻撃が多くても一つ一つはネロンガにとって大したものではないため実際は互角の戦いであった。

ネロンガ「ギシャアアアア!!!・・・グルグルグル・・・」

ムーンライト「!?!?・・・皆!!気を付けて・・・ネロンガが消えるわよ」

ムーンライトの予想どおりネロンガは姿を消す。

ブロッサム「ど、何処に!?!」

マリ「まるでカメレオンみたいなやつ・・・」

サンシャイン「あんな巨体がどうやって・・・」

ブロッサム達は姿が見えないネロンガを必死に探すが消失したという言葉が適切であるように完全に景色に同化したネロンガを探すのは至難の業であった。

ネロンガ「・・・」

ネロンガは困惑するブロッサム達に牙をゆっくりと近づけるかのように気配を殺しながらゆっくり近づく・・・そして先ずは狙いを

ブロッサムに絞りギリギリまで姿を消しブロッサムまで50mの所まで距離を縮める。

ナイト「……ブロッサム危ない……！」

ナイトはブロッサムの後ろに現れたネロンガの顔に向かってナイトシユートを放って怯ませる。間一髪ブロッサムはネロンガの奇襲を回避する。

ブロッサム「あ、危なかったです。ありがとうございますナイト」  
ムーンライト「それにしても厄介ね。あの透明化の能力をなんとかしないと私達に勝ち目はないわ」

サンシャイン「せめてあの透明化の仕組みが分かれば封じる事ができるかもしれないのに……」

いくら技数で勝ってもその攻撃が当たらなくては何も意味がない。

透明化されて姿が消されてしまうとネロンガの奇襲を回避することで精一杯だ。透明化を封じない限り自分達に勝ち目はない。

ヤズミ「リーダー！ネロンガの透明化の仕組みが分かりました。

奴は自分の身体に体内の電気を流すことで身体を透明化しているです」

ムナカタ「と言う事は奴は透明化する時は帯電状態と言うことか？」

ヤズミ「はい。つまりはその状態の時は身体煙や誇りを引きつけます。ウイングの電磁探知リーダーで奴の頭上から重油を落としてやればプリキユアを援護できるかも知れません……！」

ヤズミの分析曰くネロンガの透明化のプロセスは自分の身体に体内の電気を流して身体を帯電状態にすることで自分の姿を透明にする事が出来るようである。つまりは透明化の時は帯電状態のためテレビの画面にはほこりが集まると同じ現象が起こり奴の近くで爆発などを起こせばその煙やほこりが奴の身体に張り付く……それをうまく利用すればプリキユア達は勝てるかもしれないのだ。

ムナカタ「了解した。矢車、影山ウイング1号に重油タンクを積んでネロンガの頭上から落としてやれ」

矢車・影山「了解……！」

ムナカタの指示を受け矢車達はウイング1号に重油タンクを積みこみネロンの頭上に向かって飛ぶ。

ネロンガ「グルグルグル……」

そんな事に気がつかないネロンガはスタミナで勝る為持久戦に持ち込んで優位に立つ。

ブロッサム「ま、また……何処に」

マリン「同じパターンだけど攻略法が思いつかないとどうしようもないよ……」

サンシャイン「これじゃキリがない」

ムーンライト「せめて透明化の原理さえ分かれば」

アンナ「くっ!!!」

またもや透明化されてしまうとネロンの奇襲攻撃から逃げるしかない……。それではいつまでたっても勝負がつかない。そうなければ体力などの面で何れは負けてしまう。だがその時空に飛んでいるウイングが重油タンクを落として爆発を起こす。

ブロッサム「!?……や、矢車さんどうして爆発なんかを……」

マリン「……!!!……皆見て!!!」

サンシャイン「アレはネロンの姿?……でも何で?」

ムーンライト「成程……そう言うことね」

爆炎が吸い寄せられるように集まるとネロンの姿になる。その現象を見るなりムーンライトはネロンの透明化の原理が理解できたらしい。

アンナ「ムーンライト?」

ムーンライト「ネロンガは自分の身体を帯電状態にすることで透明化するのよ。でもそれが故に自分の身体に煙やほこりを吸いつけるのよ!!!」

まさにそのとおりである。今のネロンガは陸地の魚に等しく完全に形勢は逆転となったのだ。

マリン「よっしゃー!!!こうなればこっちのもんだね。皆!!!行くよー!!!」





デラシウム光流を吸収してしまう。カラータイマーも点滅を始めてしまう。ゴルザの執念とも呼べるものにティガの技は通用しなのか！？だがティガは諦めるものかと向かってくるゴルザにファイティングポーズを見せつける。

アース「デヤアアアアア！！！！」

デュナミス「ハアアアアアッ！！！！！」

ガルラ「グルウウウウウ！！！」

アースのバーンナツクルで強化された炎の拳とデュナミスのデュナミスセイバーが合わさってもガルラの爪とは互角で一進一退の攻防が続く。ガルラも強化された身体は伊達ではないようで二人の攻撃を受け付けずパワーアップした腕力もただものではない。

アーズ「ウオオオッ！！！！デヤアアアアア！！！」

ガルラ「ギジュウウウウウ！！！！？？？？」

だが長い間均等を保っていた勝負も流れが生まれ始める。アースが渾身の一撃でガルラの片方の爪を叩き折ったのだ。そしてその際にデュナミスのデュナミスセイバーでもう片方の爪を切り落としたのだ。

デュナミス「ハッ！！！！シャアアア！！！！ハアア！！！！デヤアアア！！！！」

！！！！

アース「ダアア！！！！ハアアアア！！！！オオオオ！！！！タアアアア！！！！」

！！！！！！

ガルラが怯んだ隙にアースとデュナミスは絶妙なコンビラッシュでダブルパンチとダブルキックどがら裏の堅い装甲で覆われているボディに向かつて放つ。だんだんと衝撃に耐えきれなくなったガルラの装甲にヒビが入っていき亀裂が大きくなっていく。

ブロッサム「はああああ！！！！！！」

マリリン「やああああ！！！！！！！！！！」

サンシャイン「たああああ！！！！！！！！！！」

ムーンライト「はああああーっ！！！」

ネロンガ「グオオオオオオオオ！！！！？？？」

ブロッサムとマリンのペアとサンシャインとムーンライトのペアのダブルパンチがネロンガの両方の横っ腹に放たれるとネロンガは悲鳴のような咆哮を上げる。

ネロンガ「ギシャウウウウ！！！！！」

サンシャイン「サンフラワージェス！！！！！」

ナイト「イリュージョンソード！！！！！」

ネロンガ「ギシャアアアア！！！！？？？」

反撃しようと角を前に合わせ雷撃を放つのだがそれをサンシャインのサンフラワージェスで防がれてしまう。そしてその隙にナイトのイリュージョンソードでネロンガの角を切り落とす。

ブロッサム「皆！！止めはフォルテツウエイブで行きましょう！！！」

マリ「やるっしゅ！！！！！」

サンシャイン・ムーンライト「うん！！！」

ナイト「私も最強の必殺技で行きます！！！！！」

ブロッサム達ハートキャッチのメンバーは胸のクリスタルを光らせてそれぞれピンク、蒼、黄色、藍色の光を放つとブロッサム、マリ、ムーンライトはタクト型のアイテム『フラワータクト』、サンシャインはタンバリン型のアイテム『シャイニータンバリン』を召還する。ナイトは胸のクリスタルとイリュージョンロッドの青いクリスタルを共鳴させてロッドを天に掲げる。

ブロッサム「花よ輝け！！プリキュア・ピンクフォルテウエイブ！！！！！」

マリ「花よ煌めけ！！プリキュア・ブルーフォルテウエイブ！！！！！」

サンシャイン「花よ舞い踊れ！！プリキュア・ゴールドフォルテバースト！！！！！」

ムーンライト「花よ輝け！！プリキュア・シルバーフォルテウエイブ！！！！！」



ルラは胸から火花を散らしてその場に倒れる。

ゴルザ「グルグルグルウ……！」

ティガ「パワータイプ」「フツ……！ハアアアアア……！  
……！チャアアア……！」

ゴルザ「グオオオオツ……！？？」

デラシウム光流すら吸収してしまうあの光線を吸収する能力を何とかしなければ勝ち目はない……ティガは身体にエネルギーを溜めて腕に集めるとそのエネルギーをためた腕でゴルザにパンチを放つ。通常のパンチとは違い凄まじい火花を散らすこのパンチは「ティガ電撃パンチ」と呼ばれ通常のパワータイプのパンチの数倍の破壊力を持つ技である。

ティガ「パワータイプ」「ハッ……！ジャアア……！」

ゴルザ「ギシャアアアウウウ……！」

更にエネルギーをためた効果はしばらく続くのでティガはそのままキックを放つを先ほどのパンチと同じく火花が散る。この状態のキックは「ティガ電撃キック」と呼ばれる。

ティガ「ハアアアッ……！……ハッ……！ハッ……！ハッ……！  
……！チャアアア……！……トワアア……！……ジュワア……！」

凄まじいダメージに倒れるゴルザ。すぐに立ち上がるがそれに合わせるように肩に踵落とし。更にボディに連続パンチにローキック二連発にアツパーを決める。この連続攻撃には流石のゴルザも大ダメージは避けられない。

ティガ「パワータイプ」「チャッ……！……ジュワア……！……チャアアア……！……！」

そしてトドメの急降下からの破壊力抜群の飛び蹴りを放ちゴルザを倒す。既にグロッキー状態のゴルザには傷口に塩だ。

ティガ「ウ……！……！ハッ……！」

ゴルザが完全にダウンしている隙にティガクリスタルを白く光らせてマルチタイプに戻る。

ゴルザ「グ、グオオウウ……グアアア……」  
ティガ「ジュワアアッ！！！！」

今の状態ならば光線の吸収も発動できない。これで完全に止めたとティガは両腕を交差させてエネルギーを溜めて最強必殺技のゼペリオン光線をゴルザに放つ。ゴルザは胸にゼペリオン光線を受けると爆発を起こしてその場に倒れる。ゴルザとガルラはかくしてティガ、アース、デユナミスに敗れ倒され。ネロンガはブロッサム達に浄化され井戸に封印されたのだった。

ティガ「……ジュワア！！」

ティガはアクロバットジャンプでゴルザの元に近づくとゴルザの身体を持ち上げる。同じころアースとデユナミスもガルラの身体を持ち上げていた。3人は顔を合わせて頷くと同時に空に飛び立つ。

ブロッサム「ゴルザとガルラをどうするつもりなんでしょう？」

ムーンライト「……二度と復活しないよう……ゴルザとガルラの細胞の一つすら残さないようにするつもりよ」

マリン「でもどうやって？」

ムーンライト「……見ていなさい。」

ブロッサム達の疑問にムーンライトはそう答える。ゴルザとガルラが二度と復活しないようにする方法は一つしかない。ムーンライト以外は分からないようだがその答えはムーンライトの考え通りである。

ティガ達は霧門岳の方向に飛んでいくと霧門岳の火口にゴルザとガルラを投げ捨てる。そうつまりは火口のマグマで細胞の一欠けらも残さずに焼きつくすことで二度と復活できなくなると考えたのだ。

ゴルザとガルラの亡骸は霧門岳の火口に落ちていく

ブロッサム「成程……完全焼却ですね」

マリン「これで……もうあの2匹は二度と」

サンシャイン「復活しないんだね」

ムーンライト「ええ。もう二度と……」

ナイト「・・・あの2匹も悲しい存在ですね。・・・心があれば彼らも」

霧門岳はもう一度噴火を起こして辺りに火花の雨を降らす。ゴルザとガルラは完全に消滅したこれでもう二度と復活する事はないだろう・・・爆炎で完全に燃え尽きたはずだから。

第15話「3大怪獣との激闘」(後書き)

ナイトのは必殺技のお披露目でしたが話の構成のせいで目立ちませんでしたね(汗)もっと彼女にもスポットライトを浴びせないと・

・  
さて今回は月の影計画編に突入です。メインはもちろんナイトとムーンライトそしてもう一人……

次回もお楽しみに

長編予告／月の影計画編／（前書き）

オープニング主題歌「NEXT Level」

エンディング主題歌「LIGHT IN YOUR HEART」



長編予告／月の影計画編／

クレイズ「遂に動くわよ・・・月の影計画が」

アンナ「私は・・・いつたい誰なの！？・・・時々出てくるイメー  
ジは！？・・・お、お前は誰なんだ！？」

????「思い出せ・・・もう一人の私よ・・・月を取り込み私が私  
になるんだ・・・」

ヘロディア「実験するにはまだまだ不安定よ?・・・どうする気ク  
レイズ?」

クレイズ「どうするも何も・・・《人形 にしてしまえばいいだけ  
の話よ・・・貴女と私のサロメ星科学でね」

アンナ「う、うわああああ!!!!!!?????」

大人「あ、アンナちゃん!!!!!!」

えりか「何するきよアンタ達!!!!!!」

ゆり「あ、貴女は!?!」

????「久しぶりだな・・・月影ゆり・・・キュアムーンライト  
!!!!!!」

いつき「そ、そんな・・・あ、貴女は3年前にゆりさんに・・・ム  
ーンライトに倒されたはず」

クレイズ「平和を守るウルトラマンティガが地球を……宇宙をも制圧する」

ティガ「ハッ!? (貴様は?まさか)」

アース「(もう一人の……)」

デュナミス「(巨人!?)」

つぼみ「貴女達は……誰なんですか!?!」

???「私は……セイバー……救世主の名を持つプリキュアよ。つぼみ」

???「その相棒の妖精ロモ!!」

クレイズ「その能力はオリジナルをはるかに凌駕する……これこそサロメ星の最強ロボット兵器……これを量産すればサロメが最強となるのよおおおお!!!!!!!!!!」

大人「そ、そんな……ゼクターが作動しない!?!」

タ「どうしたのバタフライゼクター!?!」

???「今こそ決着だ……キュアムーンライト!!!!」

ゆり「いやよ……私はまた妹を殺さなければならぬの!?!」

大人「目を覚ませアンナ！！お前はもう影なんかじゃない・・・  
お前はお前じゃないか！！・・・自分を取り戻せえ！！！！！！」

アンナ「ありがとう・・・お姉ちゃん・・・私・・・幸せだったよ・・・最後にお姉ちゃんに会えてよかった・・・あの時の夢がなくなったもん・・・でももう私は限界みたい・・・バイバイ」

ゆり「アンナーーーーー！！！！」

クレイズ「こうなったら私が自ら！！！！」

大人「これは？スパークレンスから光が！？」

琢磨「俺のも・・・」

傑「ゆりとアンナの思いに共鳴しているのか！？」

つぼみ「プリキュアの種からエネルギーが！？」

えりか「いったい何が起ころっていつの！？」

いつき「綺麗・・・まるで聖夜の光」

ゆり「あんなに沢山の光が・・・アンナの身体の中に・・・」

「???」「私はもう月の影ではない・・・私の名は聖なる夜に咲く一輪の花！！！！」

## 第16話月の影計画編「動きだす陰謀」（前書き）

遂に動きだすクレイズの「月の影計画」その真相とは？そして明かされるアンナの出生の秘密と次元を超えて現れる新しい戦士の影。大人達ウルトラマン、つばみ達プリキュア、クレイズ率いるサロメ軍団、そしてアンナと新たな戦士の思いが絡み合う時物語は動きだす。

## 第16話月の影計画編「動きだす陰謀」

アンナ「此処は……何処！？……ゆりさん！！……み、皆何処に行ったの？」

アンナは闇の中一人で彷徨っていた。自分は確か今はゆりと一緒に希望ヶ丘に暮らしているはずなのに。此処は何処だ？……何で自分はこんな場所を彷徨っているんだ？。あてもなく道を進んでいくと人影が見えた。

アンナ「ゆりさん！？……ゆりさんも此処に迷い込んだんです……！！！」

その人影にアンナはゆりかもしれないと思いき走っていくがその正体に絶句して固まってしまふ。

？？？「待ってたよ……もう一人の私」

アンナ「お、お前は……私！？……そ、そんなバカな」

なんとその正体は服こそまるで墮天使をイメージさせる黒いスカートではあるが顔や体格はアンナそのものであったのだ。こんな事現実にはあり得ない事だ。アンナはすぐにイリュージョンロッドを取り出してもう一人の自分とも呼べる存在に向かって構える。

アンナ（？）「驚くことないでしょ？私は貴女で貴女は私なんだから」

アンナ「そ、そんなことあり得ない……アンナは……私は此処にいる私一人だけだ！！！」

アンナ（？）「私は一人だけか……確かにそうね？普通の人間ならそう答えれば終わりよ……でも私達は普通の人間かしら？」

もう一人のアンナはアンナが必死になる姿に笑ってそう問う。意味ありげなそのセリフに困惑するアンナ。その間に間合いを詰めてくるもう一人のアンナ……自分の正体を彼女は知っているのか？考えてみれば私は記憶がないため普通の人間であるという保証はないじゃいか……私は誰なんだ？その疑問がアンナの頭の中で思考

回路を支配する。そして突如視界が暗くなっていく。

アンナ「っ!?!?・・・ゆ、夢?」

全ては夢であった。いつもの自分の部屋でゆりの家だ。全身汗まみれになりながらも夢で見たもう1人の自分とも言つべき存在の言つた事を思い出すと急に不安が込み上げてきて恐怖で身体は震えてきた。

アンナ「私は・・・いったい誰なの!?!?・・・時々出てくるイメージは!?!?・・・お、お前は誰なんだ!?!?」

最近と同じような夢を何度も見てしまう。もう一人の自分と言つていたあの人物は一体何者なのか・・・そしてアンナの秘密とは一体何なのだろうか?

「???」思い出せ・・・もう一人の私よ・・・月を取り込み私が私になるんだ!?!?」

アンナ「!?!?・・・誰なんだの声の主は・・・私は・・・本当に人間なの?・・・」

アンナは月明かりが照らされる窓から欠けた月を見てそう呟いてしまう。本当に自分は人間なのか?人間であると信じたいけどそれを証明してくれる人も・・・記憶もない。今は仲間がいるから安心してきるけどその仲間も私が人間でないと知ったら・・・彼女の不安に潰れ込む影があるとはこの段階では予想が出来なかった。

クレイズ「遂に動くわよ・・・月の影計画が!?!?」

クレイズはサロメ基地の自室で狂つたようにその声を上げていた。とうとうこの時来たと今まで準備を整えてきた。特にゴルザとガララの戦いで得た戦闘データはかなり役立っていた。もうすぐ最強の兵器が完成しその量産体制も間近である。

クレイズ「ありがとうへロディア。心から感謝するわ」

へロディア「当然よ。サロメの科学が全宇宙を制圧するチャンスとなつたら喜んで協力するわ。」

クレイズは同僚のドクターへロディアに礼を言うとへロディアもそ

れに笑って返す。お互いに持ちつ持たれつがサロメの信条とも呼べるものであるらしく他の星人達のように同族で争う様な馬鹿な真似はしないようである。

クレイズ「ふふっ 後は月の影を目覚めさせるだけ・・・全てのプランは完璧に動いているわあ!!!」

クレイズは興奮のあまり普段なら誰にも見せない笑みでそう叫ぶ。

ヘロディア「実験するにはまだまだ不安定よ?・・・どうする気クレイズ?」

クレイズ「どうするも何も・・・《人形》にしてしまえばいいだけの話よ・・・貴女と私のサロメ星科学でね」

ヘロディアの問いのそう答えるクレイズ。モニターには黒い首輪のようなものが映っている・・・あの首輪らしき物が映し出された。

ヘロディア「そ、それはダークネススパイラル・・・そんなもので完成させていたのね?」

クレイズ「ええ。これさえあれば例え心は拒んでたしても私の命令に従うしかなくなる・・・我々の 人形 になるしかなくなる。」

ヘロディア「ふふふっ・・・面白いじゃない!!!これを大量生産すれば私達が宇宙の頂点に立つのも可能になる・・・」

クレイズ「その通りよ・・・ふふふ・・・はははははは!!!!!!」

大人「よし。これで衣装の記事はそろったね」

つぼみ「はい。あとはリボン用の生地とデザインビーズですね」

えりか「よし、じゃ〜次に行こう!!!」

大人「やれやれ、えりかは買い物時はいつもあの調子なのかな?」

つぼみ「はい。いつもそうです。ありがとうございます大人さん。わざわざ私たちの買い物に付き合わせちゃって」

大人「いいよ暇だからね。でもこれはまた大量に買い込んだね〜」

えりか「いやあ〜溢れ出る創作意欲が止まらなくて」

大人「そ、そうなんだ〜（これだけの材料を買う金が何処から出てくるのかは疑問の思わないほうがいいのだろうか？）」

つぼみ「にしても買いきすぎですよ〜えりか！！」

とある裁縫道具店では大人、つぼみ、えりか、いつきの4人がファッション部の買い物をしていた。最初はえりかかつぼみ、いつきだけだったのだが偶然にも大人とばったり会って大人も買い物に付き合う事になったのだった。町の商店街で布生地を買い次はリボン用の生地を買いに出る。そしてしばらくして買い物済ませて買った物を一度植物園にまで運ぶ。

つぼみ「ふう〜これで全部ですね」

大人「お疲れ様。しかしこんなに大量に買い込んでどうするんだい？」

しかしこれだけの量の材料を買い込む事に疑問を抱いてしまう大人。何せ4人でもかなりの重労働であったからである。

えりか「もちろん新しいデザインの服を作りますけど今年の文化祭用の材料でもあります」

大人「なるほどね。」

つぼみ「普段はデザインを描くのが主なんですけど一カ月に一度はデザインした服を作ってるんですよ。」

大人「ほうほう」

いつき「おしゃれは人を元気にしますからね。僕もそうでした」

大人「奥が深いんだね〜。よしじゃ今度俺の服もデザインしてもらおうかな？」

つぼみ「もちろんです！！必ず」

大人「待ってるよ。」

アンナ「私は・・・一体誰なんだろう・・・記憶があれば・・・失った記憶がはつきりするのかな？」

アンナは久々に散歩に出かけていた。最近よく見るあの夢は一体何なのだろうか・・・もう一人の自分が言う自分の正体は・・・本



当に自分は人間なのだろうか？そんな疑問が頭によぎってしまった。最近には気にせずにはいられなかった・・・この町には何か大切なものがある気がする。そんな気がしてならないのだがそれが何なのかわからない・・・

??? 「何を悩んでいるのかしら？」

アンナ「!？」

突如後ろから声がすると思っただけで視線をやるとそこには女性の姿があった。見かけは眼鏡にスーツを言った何処にでもいるようなOLみたいであつたが見るからにあやしい。

アンナ「別にそんなことないです。貴女には関係ないでしょ？」

??? 「そうかしら?・・・私なら貴女の力になれると思うけど？」

アンナ「生憎ですが私は自分の力で探し物を見つける主義でしてね・・・だから貴女の力は・・・」

見るからにあやしい相手の口車に乗る前にさつさと立ち去ろうと思つたのだが彼女は彼女に向かつて黒いリング状のアイテムを投げつける。それはアンナの手首をがっちりと捕らえる。

アンナ「!??・・・こ、これは?・・・あ、貴女一体何者？」

??? 「教えてあげましょうキュアナイト・・・月の影よ・・・私の名はクレイズ。サロメ星の科学者よ。さあ私の人形となるがいい」

その正体はクレイズであつた。クレイズはリモコンのような機械を取り出すとスイッチを押して黒いリング状のアイテムを起動させる。アンナ「う、うわああああ!!!!????」

アンナの身体に黒い稲妻のようなものが走る。そして次第にアンナの瞳が赤く光るようになりアンナの自我が失われるかのように頭を垂らす・・・

アンナ「・・・」

クレイズ「ふふふつ・・・手に入れたわよ・・・月の影を」

クレイズは闇の扉を出現させるとその中にアンナと共にその場から消えてしまう。アンナにいったい何が起きたと言つたのだろうか!?

ゆり「今日はアンナの好きなかぼちゃの煮つけにでもしようかな」  
その頃ゆりは今日の夕食の材料を買いに出ている。今日はアンナの好物かぼちゃの煮つけでもつくろうかとかぼちゃと適当な肉や野菜を買い終えると家に帰宅しようと思ったのだが……

グランドランザー「……」

突然建物が爆発したかと思えば以前現れたグランドランザーが現れたのだ。

ゆり「アレは前に出てきたロボット兵器！？私一人じゃ倒すのは無理かもしれないけどやるしかないわね」

ゆりはグランドランザーに注意をひきつけるべくココロポットを取り出すと変身の準備をする。

ゆり「プリキュアオープンマイハート！！！」

ゆりは私服から光のワンピースの姿になるとココロポットにこころの種を装填していき藍色の光に包まれるとそのまま髪の色と服が変化していきキュアムーンライトへと変身が完了する。

ムーンライト「月光に冴える一輪の花キュアムーンライト！！！」

グランドランザー「ギガガガガガ」

グランドランザーは無差別に光線を放っていき町を破壊していくのだったが突如銀色の鏡のようなものが自身の光弾を跳ね返してきた。何事だと後ろを振り返る。そこにはマントを纏ったムーンライトの姿があった。

ムーンライト「また出てきたようね？これ以上は好きにはさせないわ！！！」

ムーンライトは高速移動でグランドランザーを翻弄しながら自分に気を引きつける。グランドランザーは邪魔者を消そうと光線を放ったり腕を伸ばしたりするがスピードで勝るムーンライトには効果がない。

ムーンライト「花よ輝けプリキュア・シルバーフォルテウェイブ！！！」

ムーンライトはもしかしたら自分一人でも倒せるかもしれないと思  
い必殺技のフォルテウェイブを放つ。しかしパワーではグランドラ  
ンザーが勝るのかフォルテウェイブを受け止めて握りつぶしてしま  
う。

ムーンライト「やっぱり私一人では力不足・・・一体どうすれば」  
グランドランザー「ゴオオオン!!!!」

ムーンライト「!?!?!?..しまっ」

ムーンライトが考え込んでいる隙にグランドランザーがレーザー光  
線を発射する。今よければ他に被害が及ぶがムーンライトリフレク  
ションで跳ね返せるかどうかは五分五分・・・迷っている間にも  
レーザーは迫ってくる・・・

????「サンフラワーイージス!!!!」

太陽の形をした盾がムーンライトと町をレーザーから守った。この  
技が出来るのは一人だけでありムーンライトが後ろを向くとそこ  
にはブロッサム、マリリン、サンシャインであった。

ムーンライト「皆!!!」

ブロッサム「お待たせしました。」

マリリン「よくも皆さん暴れてくれたじゃない?このツケは高いわ  
よ」

サンシャイン「これ以上町を破壊させはしない!!!!」

3人はグランドランザーに覚悟しろとばかりに睨みつける。グラン  
ドランザーは好都合だと思ったのか4人に向けて無差別光弾を放つ。  
ブロッサム「ブロッサム・シャワー!!!」

マリリン「マリリン・シュート!!!」

だが自分達に直撃する前にブロッサムとマリリンの遠距離技で光弾を  
全て相殺させる。

グランドランザー「!?!?!?」

以前と比べると確実にパワーアップをしている彼女達の力を分析す  
るのだがグランドランザーのコンピューターでは処理が出来ない。  
何故なんだ?と混乱するグランドランザー・・・機械的な処理は

時として思いがけぬ力に対しては脆いものなのか？

ムーンライト「今のうちに一気に決めましょう!!」

ブロッサム・マリン・サンシャイン「はい!!」

シプレ「久々にあの姿を出すですっ!!」

コフレ「プリキュアの最強の力を見せる時ですう!!」

ポプリ「パワーアップの種でしゅう!!」

シプレ達が言うプリキュアの最強の力とはかつて砂漠の使徒との戦いで使った伝説のアイテム ハートキャッチミラージュ から解放される無限の力の事だ。4人はハートキャッチミラージュを取り出す。ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト「鏡よ鏡プリキュアに力を!!!」

ハートキャッチミラージュのピンク、青、黄色、藍色のボタンを押すと4人は祈りをささげる。そして光が4人を包むと4人の個々のコスチュームの色が淡くなり金色をメインとしたティアラやピアスが装備され更にスカートがとがると変身が完了する。その名も・・・ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト「世界に輝く一面の花!ハートキャッチプリキュア・スーパーシルエット!」

4人はそれぞれの専用武器を取り出すとグランドランザーに向かって構えを見せる。

ブロッサム・マリン・サンシャインムーンライト「花よ咲き誇れ!

!!プリキュア・ハートキャッチオーケストラ!!!」

4人は武器で音楽を奏でるかのようにブロッサム、マリン、ムーンライトはタクトを振るいサンシャインはタンバリンをたたく動作をしながら必殺技の名を叫ぶと集約したエネルギーから巨大な女神が降臨する。

ムーンライト「ふんっ!!!」

最初にムーンライトが手をかざすとグランドランザーの目の前に女神が瞬間移動する。

サンシャイン「はぁあ!!!」

次にサンシャインが手をかざすと女神の腕が上に少し上がる。

マリン「たあああ!!!」

続いてマリンが手をかざして女神の拳にエネルギーを溜めさせていく。

ブロッサム「たああああー!!!っ!!!!!!」

最後にブロッサムが手をかざし女神の巨大な拳をグランドランザーに振り下ろさせる。

ブロッサム・マリン・サンシャインムーンライト「はああああああああああ!!!」

女神の手の中に収められたグランドランザーにブロッサム、マリン、フラワータクトのクリスタルドームを回転させてエネルギーを送り込んでいきサンシャインとムーンライトはタンバリンとフラワータクトそのものを回してエネルギーを送り込んでいく。

グランドランザーは次第に抵抗をなくしていき動かなくなる。自分は殺戮兵器であるはずなのに自分の中の何かが消えていく……グランドランザーは動かなくなるとコンピュータがシャットダウンするかのように目の光が消える。

ブロッサム「凄い……機械には心がないはずなのに」

マリン「これがプリキュアの力なんだね……やっぱり凄い!!!」  
サンシャイン「うん!!!」

ムーンライト「……」

ムーンライトは一人納得がいけない顔だった。何かがおかしい……自分達を本気で倒すつもりならこの程度で済ませるのはおかしい……  
……一体目的は何なのだろう？

????「素晴らしい、素晴らしい力じゃないプリキュア達よ」

ブロッサム・マリン・サンシャインムーンライト『!?!?!?』

突然拍手の乾いた音が響く。辺りを見回すと青いスーツのような服装のクレイズが現れた。そこにはもう一人の影があったがブロッサム達は信じられなかった。

ブロッサム「あ、貴女は」

マリ「嘘・・・でしょ？」

いつき「そ、そんな・・・あ、貴女は3年前にゆりさんに・・・ムーンライトに倒されたはず」

全員固唾を呑むような視線でもう一人の人物を見つめる。だがあり得ない事だ。なぜならばその相手は・・・

???「久しぶりだな・・・月影ゆり・・・キュアムーンライト  
！！！！！」

漆黒の衣装に片方しかない悪魔の翼、そして特徴的なおかつぱ頭と片目が金色のオッドアイ・・・その人物の正体は3年前にムーンライトが倒したはずのダークプリキュアだ。

第16話月の影計画編「動きだす陰謀」(後書き)

いきなり怒涛の展開です。これからさらに物語は荒れるでしょう。

次回もお楽しみに

## 第17話月の影計画編？「究極兵器」（前書き）

前回までのあらすじ

サロメ星の科学者のドクタークレイズはアンナを謎の黒い腕輪を使用して拉致する。同じころ町に現れたグランドランザー・・・ゆりはムーンライトとなりグランドランザーと闘う。戦いの最中にブロッサム達が合流しスーパーシルエットのハートキャッチオーケストラでグランドランザーを撃退する。だがその直後に現れるドクタークレイズとダークプリキュアの影が・・・4人はダークプリキュアの姿に絶句してしまう・・・。



## 第17話月の影計画編？「究極兵器」

ムーンライト「そ、そんな・・・まさか」

ムーンライトは言葉を失った。目の前にいるのは幻影でも何でもない間違いなくダークプリキュアだ。3年前にこの手で倒したはずの自分の身体の一部で亡き父によって自分を倒す為に造られた人形いもつこ。あの時彼女は父に認められて何の未練もなく消滅したはずなのに・・・どうして今になって？

クレイズ「何も言葉がないようね？まあ無理もないわ・・・だってこの娘は真正銘ムーンライトの父親であつたサバクによつて作られたダークプリキュアなのだからね」

全員がその言葉を聞いて固まる。そんなバカなこと信じると言うほうが無理な話である。特にブロッサムとムーンライトは彼女の最期をこの目で見た為により一層不信感は強かった。

ダークプリキュア「・・・そんなに信じ難いか？私がこの世に・・・地獄から舞い戻つた事が」

ムーンライト「本当に貴女は・・・ダーク・プリキュアなの？」  
ダークプリキュア「愚問だな。太陽に向かつて『貴方は太陽ですか？』と質問するか？」

ブロッサム「どうして貴女が・・・貴女はあの時確かに消滅したはずじゃ」

ムーンライトとブロッサムは動揺した口調で離しながらもいまだに信じられないと呆然としてしまう。クレイズはその姿に鼻で笑う。  
クレイズ「教えてあげましょうか？私が故郷・・・サロメ星の科学で蘇つたのよ？・・・元のデータは3年前にデューンが破壊した惑星城から採取してね・・・さあダークプリキュア今こそ光を取り込んで貴女がムーンライトとなりなさい！！！」

ダークプリキュア「承知！！！」

ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト「！！！！！！？？」

？」

ダークプリキュアは瞬間移動でクレイズの元から姿がなくなると4人の前に姿を見せそのまま黒い光線を4人に浴びせる。なんとか大ダメージには至らなかったそれでもかすり傷は避けられなかった。

ブロッサム「ま、前よりも倍・・・いいえそれ以上強くなってます・・・今の私達で勝てるかどうか」

マリン「・・・やるしかないよ。アタシ達が倒すしかないんだから」  
サンシャイン「うん。それが彼女の為でもあるのなら」

ムーンライト「・・・」

パワーもスピードも3年前の最終決戦の時と比べると何倍も強化されている。今の自分達で倒せるか分からないがそれでも自分達は逃げるわけにはいかない。ムーンライト以外の面々はタクトを構える。だがムーンライトはいつもと様子が違いその場に立ちすくんだままであった。

ブロッサム「ムーンライト!？」

ムーンライト「!!!・・・な、何でもないわ・・・皆、行くわよ!!!」

ブロッサムに呼びかけられるとムーンライトは目が覚めたかのようにタクトを取り出すと先陣を切って突撃するのだがいつもと違ってぎこちない。

ダークプリキュア「今度こそ私が私になる・・・闇が光を飲み込み全てを奪ってやる!!!」

ムーンライト「ぐう!?!?・・・はああああ!!!」

ダークプリキュアの狙いはもちろんムーンライトただ一人でありブロッサム、マリン、サンシャインの

攻撃を難なく受け流してムーンライトに牙をむける

ムーンライト「ダークプリキュア・・・そこまでして私を・・・」

ムーンライトとダークプリキュアの拳と拳がぶつかり合う。パワーではパワーアップしたダークプリキュアのほうが上なのかムーンライトが押される戦況となってしまう

ブロッサム「はああああー！！！！！！」

マリン「やああああー！！！！！！！！」

サンシャイン「たああああー！！！！！！！！」

ダークプリキュア「・・・邪魔だああ！！！！！！」

ブロッサム・マリン・サンシャイン「うわああああああ！！！！！！！！！！」

「?????」

ムーンライトの助太刀にとブロッサム達が3人のパンチがダークプリキュアに放たれるのだがダークプリキュアはそれを片腕で受け止めると片目から発せられる衝撃派ソニックブームを放つて3人を吹っ飛ばす。

ダークプリキュア「・・・こうなればまずは貴様らを先にこの手で倒す！！」

このままでは邪魔が入って思う様に戦えないとまずは邪魔な3人を片づけようとターゲットを変更しまずは近くに倒れてるブロッサムにタゲットを絞った

ブロッサム「くうう・・・」

ダークプリキュア「まずはキュアブロッサム・・・貴様からだ」

マリン「ぶ、ブロッサム！！！！」

サンシャイン「に、逃げてえ！！！！」

マリンとサンシャインが必死な叫び声をあげる。此処からではフルスピードで飛んでいっても間に合わない・・・ダークプリキュアの手刀から黒光りする光の剣が召還されるとブロッサムの喉元につきつけられる。

ブロッサム「あああ・・・(皆・・・ごめんなさい)」

ブロッサムにダークプリキュアの刀が振り下ろされた。その瞬間に全員の叫び声が響くのだが・・・

何かがぶつかり合う音「ガギイイイン！！！！」

何かダークプリキュアの剣を受け止めるそれと同時に別の何かブロッサムを捕まえる。ブロッサムは気がつくど誰かに抱きかかえられていた。

「????」何諦めてるんだ？ブロッサム」

ブロッサム「!?!?.....ああ!!!.....カブト!!!」

????「そうだけ皆.....諦めるなんてお前たちらしくないだろ?」  
サンシャイン「ダークカブト!!!」

????「まったくヒヤヒヤさせやがって.....ほいつと!!!.....  
まだまだ俺のカリバーさばきの腕は劣っちゃねーみたいだな。」

マリン「ガタツク!!!」

????「アタシ達の事忘れてもらっちゃ困るんだけど?よくもアタシ達の仲間を.....タツプリお礼はさせてもらわないとね?」

ムーンライト「フェアリー!!!」

その正体はカブト達ライダーであった。簡単に今起きた事の成り行きを説明するとブロッサムに剣が振り下ろされる前にガタツクのガタツクダブルカリバーでダークプリキュアの剣を弾き飛ばした瞬間にクロツクアップでカブトがブロッサムを救出したのである。

クレイズ「来たわね.....惑星ワームの産物.....マスクドライダー!!!」

カブト「貴様が事の黒幕だな.....何者だ!?!」

クレイズ「私はドクタークレイズ。サロメ星の科学者よ.....覚えておきなさい」

ガタツク「要するにマッドサイエンティストってか.....テメーでは戦わずダークプリキュアを利用する卑怯者じゃねーか」

ガタツクはカリバーを構えながらクレイズに吠える。

クレイズ「あら貴方達が使っているライダーシステムも科学の産物じゃない〜その力を使って戦ったいる貴方達に私を避難する権利があるかしら?」

カブト「ふざけるな!!!お前のように命を弄もてあぶような奴を俺は絶対に許さない」

カブトはクナイガンを構えながらクレイズに突進するのだがダークプリキュアがその前に立ちふさがる。

カブト「.....ダークプリキュア.....お前はあの時のままなのか?まだムーンライトを倒す事にこだわっているのか?」

ダークプリキュア「愚問だな仮面ライダーカブト・・・太陽の神」  
ダークタクトとクナイガンがぶつかり合いながら火花を散らし一度  
離れる。

カブト「（おかしい・・・確かにあいつは3年前のダークプリキュ  
アと差異は全くないが・・・どこかが違う・・・）」

何処かがおかしいのだがそれが何か分からない・・・カブトは記  
憶を呼び戻しながら必死に何が違うかを考える・・・

クレイズ「ふふ・・・今日の所は挨拶代わりよ・・・行くわよダ  
ークプリキュア」

ダークプリキュア「はっ！！！」

クレイズの指示にダークプリキュアは素直に従い闇の扉を潜って姿  
を消す。

大人「ふう〜皆大丈夫かい？」

つぼみ「はい。あの・・・何であのタイミングで私を助けてくれた  
んですか？」

大人「何でって・・・偶々っていうか」

琢磨「嘘つけよ『いやな予感がする』って言って俺らを呼び出して  
猛ダッシュで植物園にいった癖に〜」

大人「そ、それは（汗）」

傑「しかもかなり焦ってたし〜」

大人「いや、だからそれは（汗）」

タ「大人は分かりやすいからねえ〜（ニヤニヤ）」

大人「ううう〜」

実はと言うと大人はいやな予感がするとつぼみ達を探していたのだ  
った。その時にダークプリキュアと闘っている場面を見かけて大急  
ぎで変身して援護に駆け付けたのだった。琢磨達のその時の事をか  
らかわれると大人は顔を赤くして言葉を失う。

つぼみ「・・・（嬉しかったですよ・・・本当にカッコよかったです）」

えりか「あれ〜つぼみ顔赤くない？」

つぼみ「そ、そんなことないですって！！べ、別に赤くなんか  
いつき「何焦ってるんだい？もしかして・・・」

つぼみ「は、はい！？な、何を考えているんですか？いつき・・・

「  
ついでにつぼみもからかわれる事になってしまいいりかといつきに  
タップリと弄られてしまう。

ゆり「・・・（どうしてダークプリキュアが・・・今でも私を  
狙っているの？・・・私の妹・・・）」

ゆりは一人悲しげな顔をしながら空を眺めていた。あの時はただ自  
分の影と思っていた彼女は自分の妹で同じ血が流れている・・・  
その事実を知った時はすでに手遅れで彼女とは分かり合えずに消滅  
してしまった・・・何度か彼女がよみがえればと思つた事もあつた  
のだがまさか本当に現実になるとは思つてもいなかった。もしかし  
たらこれはチャンスなのかもしれない・・・もう一度彼女と正面か  
らぶつかりもう一度彼女と話が出来る・・・

夕「ゆり・・・大丈夫？」

ゆり「え？・・・ええ大丈夫よ」

夕に呼びかけられて物思いに更けていた態度から目を覚めさせられ  
るゆり。とにかく今日は帰ろうそう思つたその時人影が見えた。

アンナ「み、皆さん・・・」

大人「あ、アンナちゃん！！！！」

えりか「大丈夫！！？」

アンナ「うう・・・ああ・・・」

ゆり「アンナ！！！！しっかりしなさい・・・アンナあ！！！！」

なんとその正体はボロボロになっているアンナだった。全員が駆け  
寄る前にアンナは力尽きて倒れてしまう。ゆりは彼女を抱き抱えて  
普段は見せないような顔でアンナにを呼び掛ける。

クレイズ「ふふ。ものすごいパワーね月の影はヘロディア例の究極



ゆり「……とにかく無事でよかったわ。ホントに……心配したんだから」

アンナ「ゆりさん……ありがとう」

ゆりはアンナを抱き抱えるとそう言っただけで安心した顔でそう言う。一番心配していたのはゆりだから無理もないだろう。

大人「とにかく今日は家に帰って休んだらう方がいい。家まで俺達がついていくよ。」

琢磨「ああ。その変な奴にまた襲われてもしたらシャレになんないからな」

傑「まあ待て。いつそ今日は此処で休むのがいいかもしれないぞ？アンナの身体のダメージも相当なものだし下手に動くとも身体に響く」

つぼみ「そうですね。私、家から何か持ってきてきます」

大人「じゃあ俺はスーパーか何処かで適当に食事の材料を……残りは此処にいてくれ」

琢磨「了解。」

今日の所は植物園で一夜を過ごす事になったアンナとつぼみ達。つぼみと大人は適当に必要なものを持ってくることとなった。しばらくして

大人「よし、これでだけあれば量は足りるだろう」

大人はとりあえずスーパーで適当な肉、野菜などを買って植物園に戻る。そしてしばし時間がたち

大人「よおしく出来たよ」

全員「おおしく！！！」

相変わらずというかかなり上達している大人特性の料理で全員は生気を養う。

アンナ「ふう〜ご馳走様でした」

つぼみ「美味しかったです」

大人「それは良かった。さてとじゃあ今日は遅いし俺はそろそろおいとまさせてもらおうよ」



琢磨「そうだな。明日は俺もバイトで早いし」  
傑「俺も今日の所は帰るとするか」

つぼみ「私達も明日学校でした!!（汗）」  
えりか「そうだった。でもどうしよう? アンナさんを一人にするわけにはいかないし」

ゆり「心配いらないわ。今日は私が此処に泊るから」

アンナ「そんな悪いですよ・・・私なら一人でも大丈夫ですって!!」

ゆり「・・・お願い・・・今日は一緒にいさせて・・・心配でたまらないのよ」

アンナ「ゆりさん・・・」

そう言うわけでゆりを残して他のメンバーは帰宅することとなった。ゆりは一度言い出したら結構頑固である為説得などしても無駄である事は分かったいた為である。

アンナ「ゆりさん・・・今日は・・・その心配かけてごめんなさい」

ゆり「いいのよ。貴女が無事ならそれで」

アンナ「・・・はい。今日も月がきれいですね」

ゆり「そうね。」

ゆりは床に布団を敷いてアンナの近くで横になっていた。今日は月明かりが眩しくて月がきれいに見える。アンナは月を見ながら徐に夢の事を思い出した。

アンナ「ゆりさん・・・私、最近変な夢を見るんです」

ゆり「変な夢?」

アンナ「夢の中で私は暗くて冷たい場所にただ一人彷徨っていて・・・まるで何かを探しているかのようで怖くて・・・それでしばらくすると」

ゆり「・・・それで?」

アンナ「それで・・・もう一人の私が出てくるんです・・・思い出せ・・・って語りかけてくるんですよ」

ゆり「思い出せ？」

アンナは今までに見ていた夢の事をゆりに語る。もう一人の自分が出て来て自分に記憶を取り戻せと語りかけてくるあの夢の事を・・・アンナ「はい。・・・まるで失った記憶を早く取り戻せって言っているかのように・・・そこで突然暗くなって目が覚めるんです」

ゆり「・・・そう」

アンナ「私怖いんです・・・記憶を取り戻すのが・・・記憶を取り戻したら今の私が私じゃなくなる気がして・・・」

ゆり「・・・大丈夫よ。例え記憶を取り戻しても貴女は貴女。他の誰でもないわ・・・絶対に」

アンナ「ゆりさん！！・・・ありがとう」

ゆりはアンナの不安を取り除く様に優しくそう語りかける。アンナの不安は分かる気がするからだ。もしかしたらダークプリキュアも同じ理由で自分を付け狙っていたのかもしれない。今のアンナも彼女と同じなのだ。

アンナ「・・・お休みなさい。ゆりさん」

ゆり「お休み。」

アンナはゆりの言葉を聞くと安心したのかしばらくすると眠りに落ちた。その寝顔は無垢な子供のようだった。

翌日久々に出かける事にしたゆりとアンナは適当に町をぶらついていたのであった。

アンナ「最近は何獣災害のせいで街の人々もピリピリしてますね」

ゆり「ええ。3年前は砂漠の使徒の侵略を思い出すかのようね」

アンナ「砂漠の使徒・・・」

ゆり「どうしたの？」

アンナ「いえ・・・聞いたことあるかもしれないと思って」

砂漠の使徒・・・聞き覚えのある名前だけど思い出せない・・・やっぱり記憶違いかもしれないとアンナは納得した顔をする。

適当にぶらついていたら2人だったが突如地震のような地響きがある。

ゆり「な、何!？」

アンナ「ゆ、ゆりさん!!アレを……」

ゆり「あ、アレは……ティガ!？」

その発生源はウルトラマンティガであった。だが怪獣も出ていないのにどうしてティガが……2人がそう思った瞬間にティガはハンドスラッシュをビルに向かって放っていく。

ゆり「どうしたのティガ!?!……どうして貴方が街の破壊を？」

アンナ「あ、アレはティガなんかじゃない……真っ赤な偽物です!……!」

ゆり「え?」

アンナの言う通りだった。その正体はサロメの科学によって作られたロボット兵器ニセウルトラマンティガであったのだ。見た目で違うと言えば身体の関節部分や腰などについているプロテクターぐらいであるから遠くから見たら本物と間違えても無理はないだろう。

アンナ「このままじゃ街が……ゆりさん私達だけでも戦いましょう!……!」

ゆり「ええ。」

ゆりとアンナはココロポットとイリュージョンを取り出してニセティガに向かって走っていく。これがクレイズの作戦の一部であると知らずに……

第17話月の影計画編？「究極兵器」（後書き）

最近は寒暖差が激しいですが皆さんは風とか引いてませんか？  
もうすぐ春ですが体調管理には十分注意しましょう（汗）

さて今回はダークネスリングの本質について語ろうと思います。  
次回もお楽しみに

第18話月の影計画編？「影の覚醒」(前書き)

前回までのあらすじ

サロメの科学によって蘇ったダークプリキュア、更に同時に現れたニセウルトラマンティガ。クレイズの月の影計画に拍車がかかる。

## 第18話月の影計画編？「影の覚醒」

クレイズ「ふふふっこれが最強にして究極兵器。はたして勝てるかしらね？・・・ダーク」

モニター越しに様子を見ていたクレイズはニヤリと笑みを浮かべる。これから行われる実践テストでダークプリキュアの完全覚醒そして願わくばキュアムーンライトを葬り去る事が出来れば一石二鳥。どのようになってもこちらに不利益な事はない。こんなに面白い事はないのだ

ゆり「プリキュア・オープンマイハート!!!」

アンナ「プリキュア・ナイトイリユージョン!!!!」

ゆりとアンナはそれぞれのプリキュアの種を取り出し私服から光の衣装に変わるとそのまま藍色と黒の光に包まれてプリキュアの衣装へと変化する。プリキュアの姿となり名乗り上げる。

ムーンライト「月光に冴える一輪の花キュアムーンライト!!!!」

ナイト「漆黒の闇から生まれた戦いの戦士キュアナイト!!!!」

二人はマントを身に纏い飛び上がる。

ニセティガ「・・・」

サロメ星人が開発したウルトラマンティガをベースにしたロボット兵器「ニセウルトラマンティガ」とも呼べるべきそれはムーンライトとナイトの存在に気づくなりジロリと睨みつける。前回現れたUキラーなどとは違い完全にウルトラマンティガがベースとなった兵器であるため恐らく強力である事は間違いない。

ムーンライト「(ティガのニセモノなんて一体誰が・・・前の3体のUキラーでさえアレほど苦戦したのに・・・)」

ナイト「・・・」

以前に現れた3体のロボット兵器「Uキラートリニティ」、<sup>ウルトラ</sup>「Aキラートリニティ」、<sup>デュナミス</sup>「Dキラートリニティ」とは違い完全にティガのコピー体。恐らく以前よりも改良などが加えられていると考えるの

が自然であるのなら以前よりも当然だが強力であるのは間違いない。

二セティガMマルチタイプ「・・・デヤア!!」

二セティガMマルチタイプはゆっくりと近づきながら二人の出方を伺う・・・と言うよりはかなり隙だらけで余裕の仕草にも見え挑発しているかのようだ。ただそれだけで二人を威圧するかのようである。

ナイト「二セモノのくせにバカにして・・・イリユージョンソード  
!!!!」

ムーンライト「ナイト!!!」

その挑発に耐えきれなかったナイトはイリユージョンロッドからイリユージョンソードを発動させて光速で二セティガMマルチタイプに突撃していき二セティガMマルチタイプのプロテクターに刃を立てるが・・・

二セティガMマルチタイプ「・・・」  
ナイト「そ、そんな・・・ウキラの頭部を切り裂いたこの剣が・・・

効かない!？」

火花は散ったがプロテクターは全く傷一つ付いておらず無傷。ナイト自身は全力で斬りつけたはずなのに・・・信じられないと呆然の表情で固まるナイト。その彼女に向かって二セティガMマルチタイプ（マルチタイプの巨大な手が迫りナイトを掴む

ナイト「!!!・・・し、しまった・・・がああ!!!？」

二セティガMマルチタイプ「・・・」

そしてそのまま街に向かって投げ飛ばす。なんとか街に直撃する前にムーンライトがナイトの身体を受け止める。

ムーンライト「大丈夫!？」

ナイト「は、はい・・・何とか・・・」

ムーンライト「よくも・・・よくもナイトを!!!!」

ムーンライトは怒りにまかせて飛びあげると銀色の光線を乱れ打ちしながら二セティガMマルチタイプに向かう。

二セティガMマルチタイプ「ハッ!!!!」

二セティガMマルチタイプはウルトラシールドを発してムーンライトの光線を全て防御する。爆炎が辺りを散らすなか辺りを見回すがムーンライト







アース「(了解だ。いくぞロボット野郎!!!)  
デユナミスの作戦にてそれぞれ散り散りになる。だがそれもクレイズの予想通りである。

クレイズ「キュアムーンライト、キュアナイト・・・アンタ達の相手は私がしてあげる。プリキュアのデータをたっぷりと採取させなさい(本当の目的は別にあるけどね・・・私の狙いはただ一人・・・キュアナイト!!!)」

円盤から飛び降りてムーンライトとナイトの前に姿を現すとバトルスーツのような装甲を身に纏う。どうやらクレイズ自らが戦うようである。

ナイト「そう易々とデータ採取なんてさせるわけがないじゃない。

ムーンライト行きますよ!!!」

ムーンライト「ええ。(おかしい・・・何かおかしい・・・まさかワナ?)」

クレイズの企みに気づいたのかムーンライトは警戒を強める。自分が戦えるのならロボットに頼る必要などまったくもってないはず・・・ニセティガ達に注意をひきつける為か? いや・・・それ以外に何かある気がするが見当がつかない。

クレイズ「さあ〜て行くわよ? でりゃああ!!!」

ナイト「イリユージョンソード!!!」

ムーンライト「はああああーっ!!!」

クレイズは左手からビームソードを発生させて二人に向かって振り下ろす。ナイトのイリユージョンソードとぶつかり火花が散りその隙にムーンライトがパンチを放つがそれを右手に発生させた盾で受け止める。

クレイズ「凄い・・・ホントに凄いわねプリキュアの力・・・これを兵器に応用できればサロメは最強になれる」

ムーンライト「どうして軍事兵器に応用することしか考えられないのよ!!! 科学はそんな事に使う為に有るんじゃない!!!」

ナイト「そうです。貴女達の力はもつと友好に使えるはずです・・・

どうして人間達と……この星の人々と肩を並べようとしないうで  
すか!?」

二人はクレイズにそう訴えかける。サロメ星の科学力は人類など比  
ではない事は紛れもない事実であり純粋な目で見れば素晴らしいも  
のである。だが科学は他者を傷つける為に、他者を悲しい思いに  
させるものなどではない。もしも自分達と肩を並べる事が出来れば  
人類にとっても有益であるはずなのに……何故こんな無益な争いを  
!?二人には理解が出来ないのだった

クレイズ「……どうしてか教えてあげましょうか?……はあ  
あああ!!!!」

ナイト「ぐう!!?」

ムーンライト「うわああ!!!!??」

クレイズ「我々サロメのはね科学で全宇宙の頂点に立つ事がサロメ  
の同一の目標なのよ。それなのにこの星の人間は何?詰らない事で  
争い、同族を殺し、憎み、妬む……そんな下等なことしか出来な  
い人間と肩を並べるなんてあり得ないわ!!!。私達は地球を長年  
観察してきたけど……同族同士で下らない事で戦争を繰り返して種  
族なんて今まで見た事なかったわ」

クレイズは二人をまるで汚れた汚物でも見るような嫌悪感をむき出  
しにしながらそう言う。やはり地球人とサロメでは価値観が違うの  
かもしれない。サロメはただ純粋に科学が好きただけであり人間の  
ように余分な感情が全くないのだろう。だからこそ人を見下し自分  
達こそ宇宙の頂点に立つことしか考えていないのだ。

ムーンライト「確かに人間は過ちを犯すてしまう……でもそれだ  
けじゃないわ……人間は過ちを正そうと言う心がある……それ  
は無限の力になるのよ」

ナイト「……(私には分からない……どうして?……も  
しかしたら私は人間じゃないのかな?)」

ムーンライトとは対照的にナイトは複雑な顔をしていた。自分には  
ムーンライトのように人間の良さや素晴らしさを堂々と言う事が出



して突然背中から漆黒の背中が生えていきイリユージョンロッドが汚れた漆黒の光を放ちアンナの身体を包んでいく

ブロッサム「ムーンライト!!……こ、これは!?!」

マリ「な、何あれ!?!」

サンシャイン「ま、まるでブラックホールみたい……」

フェアリー「ものすごいエネルギー……アレは一体……ムーンライト?」

遅れて現れたのはブロッサム、マリ、サンシャインの3人のプリキュアとフェアリーだった。その場に呆然となっているムーンライトに4人は問いたただすのだがムーンライトは固まっけていて反応がない。

ブロッサム「ムーンライト!!しっかりしてください」

ムーンライト「アレは……ナイトよ」

マリ「え!?!」

サンシャイン「そ、そんなバカな事」

ムーンライト「本当なのよ……クレイズが突然ナイトに腕輪をはめたと思ったらあなつて……」

フェアリー「どういう事!?!」

5人は何が何だか分からない。その様子を笑いながらクレイズが前が出る。

クレイズ「ふふふ……貴女達に懐かしい顔がご対面よ……」

ムーンライト「懐かしい顔!?!」

クレイズ「出でよ月の影……ダークプリキュア!?!」

ブロッサム・マリ・サンシャイン・ムーンライト・フェアリー「

!?!?!」

次の瞬間包まれていた黒い光が止む。そこから現れたのは漆黒の翼と漆黒コスチュームを身に纏った月影の名を持つ戦士でかつてのムーンライトの宿敵ダークプリキュアが現れた。

ムーンライト「そ、そんな……ナイトが……アンナがダークプ

リキュアだというの？」

ムーンライトはその場に膝をついてしまい変身が解けてゆりの姿に戻る。他の面々も動揺が隠せない。あのアンナがダークプリキュアだって・・・そんなこと誰が信じられると言うのだ？・・・特にゆりはショックが大きく放心状態になり何も言う事が出来ない。

ゆり「うそよね・・・アンナ・・・嘘だって言っつてよ」

ダークプリキュア（？）「・・・」

クレイズ「残念ねえ！今日の前にいるのはアンナなんかじゃないわ。真正正銘の貴女の影で妹のダークプリキュア・・・教えてあげましょうか？キュアナイト・・・アンナの正体を」

ゆりは本当に信じられなかった。果たしてクレイズが握るキュアナイト・・・アンナの正体とは・・・

第18話月の影計画編? 「影の覚醒」 (後書き)

更新遅れてすみません。ネタはあるのですが時間がなくて(泣)この時期は本当に忙しいですよバイトが^^;

さて今回はとうとう明かされるアンナとキュアナイトの秘密。

次回もお楽しみに

第19話月の影計画編? 「アンナの正体と救世の光」 (前書き)

前回までのあらすじ

援軍として現れた2体のニセウルトラマンティガ、バトルスーツを身に纏うクレイズ、そして明かされるアンナの秘密・・・ムーンライトの・・・ゆりの過去の記憶が複雑に絡み合う。果たしてクレイズが知るアンナの正体とは!?

Special Thanks 桔梗さん

とつとつ使う時が来ました。ありがとつとつございます。



## 第19話月の影計画編？「アンナの正体と救世の光」

クレイズ「アンナ・・・キュアナイトの正体とはダークプリキュアの残留思念の集合体よ。」

ブロッサム・マリン・サンシャイン・フェアリー・ゆり『!?!?!?』  
クレイズの一言に全員が硬直する。とくにゆりは信じられないと言  
う表情で瞳孔が開いたままクレイズのほうを見つめていた。

ゆり「ダークプリキュアの残留思念!?!?!?・・・じゃあアンナがダ  
ークプリキュアに似ていたのんじゃないかってダークプリキュアそのも  
のだったて言うの?」

クレイズ「ええ。だから3年前以前の記憶がないのも当然よ。だっ  
て記憶喪失じゃなくて初めから記憶がないんだから。でもキュアナ  
イトの力を心の大樹が与えていたのは誤算だったわ。そのせいです  
ぐにはこの娘の元にたどり着けなかった」

ブロッサム「ナイトの力は心の大樹が与えたものだったんですか!  
?」

マリン「だからアタシ達の力と似ていたのね」

これですべての謎が繋がった。つまりはアンナはダークプリキュア  
の転生した姿でキュアナイトの力とは心の大樹が転生した彼女に与  
えたものだったのだ。

ゆり「そんな・・・じゃあ本当にアンナはダークプリキュアの生ま  
れ変わり・・・そして私の妹・・・そんな・・・」

ゆりはアンナと過ごした日々を思い起こした。初めて会ったときか  
ら彼女がダークプリキュアとかつて自分が倒した妹の面影があつた  
のは似ていたのではなくダークプリキュアそのものだったからのだ。  
ゆりは言葉を失い涙で頬が濡れる。

フェアリー「ゆり・・・アンタはそれを分かってアンナちゃん  
をダークプリキュアに戻したっていうの!?!?!?・・・ゆりが傷つく  
と分かっただけでこんなふざけた真似をしたと言うの!?!?」



クレイズの笑い声を断ち切るかのようにブロッサムが大声をあげて吠える。続いてマリンとサンシャイン、フェアリーが同じく大声で反論する。クレイズはウザったような態度でブロッサム達を睨む返す。

ブロッサム「二人の絆を断ち切った挙句アンナさんを利用してゆりさんの命を奪おうとするなんて・・・私堪忍袋の緒が切れましてあ!!!!!!!!!!」

マリン「海より広いアタシの心も此処らが我慢の限界よ!!!!」  
サンシャイン「その心の闇・・・私の光で照らしてみせる!!!!」  
フェアリー「私のこの翼がアンタの野望を消滅させる」

全員は決め台詞を言う。ゆりはその姿を見て過去の闘いが無意識に思い出していた。かつては頼りなく未熟であったのに今はブロッサム、マリン、サンシャインの背中が大きく見える。ゆりは涙を手でぬぐうと立ち上がる。

ゆり「キュアブロッサム、キュアマリン、キュアサンシャイン、仮面ライダーフェアリー・・・貴女達の言葉で戦う勇気を取り戻せた・・・ありがとう皆。クレイズ!!!!!!・・・私の妹を利用した事を必ず後悔させるわ!!!!!!」

クレイズ「後悔?・・・一度心が折れた癖に・・・ダークプリキュア!!!!!!貴女の実の姉を殺しなさい!!貴女が本物のムーンライトとなる為にね!!!!!!」

ダークプリキュア「本物のムーンライト・・・」  
サバ　クが父と分かったあの時も自分はブロッサムの言葉に救われ戦う勇気を取り戻せた。今回はブロッサムだけじゃないマリンやサンシャイン、フェアリーの勇気がゆりに戦う力を取り戻させた。

私は結局また仲間に助けられたのね。あの時変わろうと決めたのに・・・まだまだ私も未熟だと言うことね。

ゆり「（お父さん私にアンナを救う力を下さい!!!!!!あの娘にまた笑顔になってほしいから。今度こそ妹として一緒に暮らしたいから・・・私に力を!!!!!!）」

クレイズ「神頼みかしら！？人間とは愚かしいいきものね」

ゆりはプリキュアの為を一度見つめると今は亡き父の事を思っていた。例え二度と会えなくても自分と妹を見守<sup>アンナ</sup>ってくれてるはず・・・だから私にもう一度力を！！

ゆり「プリキュア・オーブンマイハート！！」

ゆりは決意を新たに藍色のプリキュアの種をココロポットに装填。

光が発せられるとともにゆりの身体は銀色の光に包まれて私服から光の衣装へそしてそのままキュアムーンライトのコスチュームへとチェンジする。

ムーンライト「月光に冴える一輪の花キュアムーンライト！！」

ダークプリキュア「・・・行くぞムーンライト・・・」

ムーンライト「ダークプリキュア・・・いいえアンナ！！私は必ず貴女を取り戻す！！！」

黒と銀の光がぶつかり合い再び月と影の闘いが始まる。だが今度は殺し合いではない。ムーンライトは妹を散り返す為に戦うのだ。今度はこの手で必ず救ってみせる決意を胸に

クレイズ「さてと・・・じゃあ私も加勢に・・・」

ブロッサム「はあああ！！！！」

クレイズ「！？・・・貴様・・・」

クレイズもムーンライトのデータ採取兼ダークプリキュアの性能を確かめるべく加勢しよう飛び立つがそうはさせまいとブロッサムが飛びかかる。

マリ「アンタの相手はアタシ達よ！！」

サンシャイン「ムーンライトの邪魔はさせない！！」

クレイズ「ふん・・・ちょうどいいわ貴女達のデータも採取させてもらおうじゃない！！」

フェアリー「世の中全てがデータどおりに行くとおもうないでよね！！」

クレイズに対峙するのはブロッサム、マリ、サンシャイン、フェアリーの女性チームであった。ムーンライトだけではない。自分達

も仲間のアンナを取り戻す為に精一杯今できる事をするつもりである。

ダークプリキュア「今こそ決着だ・・・キュアムーンライト!!!」  
ムーンライト「アンナ・・・」

ダークプリキュア「私はアンナではない!!! 私は貴様の影。貴様を消さなければ私は私にならない。今度こそ私が貴様を倒す!!!」  
先陣を切って飛び出したのはダークプリキュアはムーンライトに向かつてキュアナイトの技であるはずのナイトソードらしき光の剣を発してムーンライトに斬りかかるがムーンライトはムーンライトリフレクションで跳ね返す。

ムーンライト「いいえ。貴女は私の妹」  
ダークプリキュア「だ、黙れ・・・」

ムーンライト「貴女の中には眠っているはずよ・・・私と過ごした日々が・・・あの笑顔が!!!」  
ダークプリキュア「黙れ・・・」

ムーンライト「・・・今度は絶対に消させはしない!!! 私は貴女を・・・大切な妹を救ってみせる!!!!」  
ダークプリキュア「黙れえええ!!!!!!」

ダークプリキュアは光の剣でなぎ払うとムーンライトを吹っ飛ばす。だがムーンライトは可憐な体サバキで受け身を取る。そして攻撃はせずに必死に訴えかけた。

ムーンライト「あの時貴女はサバクに、いい私のお父さんに娘と認められて安らかに消滅していったわ。そして貴女はアンナとして転生してこの町に来た・・・その記憶が貴女の中にある筈よ!!! 私やつぼみ、えりか、いつき、大人、琢磨、傑、夕・・・沢山の仲間と過ごした日々の記憶が!!!!」

ダークプリキュア「うるさい!!! 私は貴様の影として造られた存在・・・その私が貴様と共存など出来るわけが!!!!!! 私はず...  
クプリキュアなんだ!!!!」

ムーンライト「貴女は私の影なんかじゃない。貴女は貴女なのよ。私と同じ血が流れてるただ一人の存在なのよ!!!」

ダークプリキュアの中にはまだ自分と過ごした日々の記憶が絶対に残っているはずだとムーンライトは確信していた。そんなムーンライトにダークプリキュアは迷いが無意識に出ているのか本気で攻める事が出来ない・・・

ムーンライト「思い出してアンナ!!!皆と過ごしたあの日々を。貴女の心からの笑顔を!!!」

初めて会った時私は彼女が生まれ変わったのだと思った。他人の空似なんかじゃない・・・本当にそっくりで怖かった。でも今は違う。大切な家族を取り戻す為なら私は戦う!!!

ダークプリキュア「違う・・・私は・・・アンナなんかじゃ・・・」  
ダークプリキュアは徐々に戦意がなくなっていくかのように動きが鈍くなるとその場に立ち止まってしまふ。

ダークプリキュア「私は・・・ダーク・・・アンナ・・・」  
この胸が引き裂かれそうな悲しみは一体何なんだ!?・・・私は月の影・・・ムーンライトの分身・・・のはず・・・違う・・・私は・・・お姉ちゃん・・・

ムーンライト「また一緒に暮らそう!!!私の仲間を改めて紹介するわ。皆は貴女の事を一人の人間として認めてくれる。きっと好きになる。今までと変わらず貴女を仲間としてみてくれる・・・きつと・・・きつと!!!」

ムーンライトの言葉にダークプリキュアは涙を浮かべて彼女を見つめる。不思議だ・・・今までこんな感情になった事はないのに・・・この暖かくなる気持ちは何なんだろう?・・・まるで重荷が一気に下ろされたかのような解放感・・・もしかしたら今度はやり直せるかもしれない・・・ダークはムーンライトの差しのべられた手を握ろうとしたが・・・

ブロッサム「アンナさん!!!洗脳が解けかかっているんですね」  
マリリン「やった!!!」

サンシャイン「うん!!」

フェアリー「安心するのはまだだよ。クレイズ!!残るはアンタと  
巨大なブリキロボだけよ!!」

クレイズとの戦闘に苦戦していたブロッサム達は喜びの声を上げる。  
残るはクレイズとニセティガ達だけだ。

クレイズ「ちっ!!つまらない物を見せてくれるじゃないの・・・  
こうなったらダークネスリング・オーバードライブ!!!」

だがその安心もすぐに壊されることとなった。クレイズはダークネ  
スリングのコントローラーを取り出すとダークネスパワーの出力を  
最大限に上げた。

ダークプリキュア「!?!?...あああああうう!!!!  
!!!!...ぐうううううううああああああああああ!!  
!!!!...!!!!...!!!!」

ムーンライト「!?!?...どうしたのアンナ!!!!...アンナ!  
!!!!」

両腕のダークネスリングがもう一度彼女を操ろうと黒い稲妻でダメ  
ージを与えていく。ムーンライトは急いで近づくと稲妻に飛ばされ  
てしまう。

ダークプリキュア「お、お姉ちゃん・・・に、逃げて・・・  
逃げ・・・」

ムーンライト「アンナ!!!!アンナ、アンナああ!!!!」

ダークプリキュア「...いやアンナに戻った彼女は眼から生気を  
感じさせる光がなくなり目が赤光する。今度はクレイズの忠実なる  
機械人形マリオネットと化してしまう。

クレイズ「今度は何をしようと戻せないわ・・・ダークプリキュ  
ア!!邪魔者を全て吹き飛ばしなさい!!!!」

ダークプリキュア（オートマントモード）「・・・」

ムーンライト「そ、そんな・・・アンナ!!!!」

ブロッサム「ムーンライト危ない!!!!」

クレイズ「貴女達の相手は私でしょ?」

マリ「邪魔よ!!!どきなさい!!!」

サンシャイン「ムーンライト!!!」

フェアリー「ダメ間に合わない!!!!」

ダークプリキュアはナイトソードを発動させると今まで以上に早い動きでムーンライトに本気で斬りかかる。この距離では流石のムーンライトもよけきれない。ブロッサム達は何とかしようとするのだがクレイズの妨害で動きが全く取れない。

ぶつかり合う金属音『ガキイイイイイイン!!!!!!』

ナイトソードがムーンライトにぶつかる前に二つの何かが受け止める。ブロッサム達、そしてムーンライトが目を見開いたその目線の先には手には白銀に煌く剣を左手には黄金に輝く剣を持った戦士がダークプリキュアの剣を受け止めていたのだ。

???「光に導かれて来てみれば……どうやらこの世界は私の知っている世界じゃないみたいね」

少女はダークプリキュアをなぎ払うと双剣を振う。ブロッサムは……いいやマリ、サンシャイン、ムーンライトは驚きの目が隠せなかった。この世界には自分たち以外のプリキュアがいるのは知っているが彼女は見た事がない顔だから無理もないだろう。

つぼみ「貴女は……誰なんですか!？」

???「私は……セイバー……救世主の名を持つプリキュアよ。つぼみ」

ブロッサム「どうして私の名前を!?!?!」

???「説明は後回し。今は戦うのが先よ!!」

謎の少女戦士はブロッサムに優しい笑みを見せる。クレイズは想定外のハプニングに動揺が隠せないようだったが彼女の事を知っているかのようだった。

クレイズ「き、貴様!!!まさか……」

???「その通りよ。私の名は全てを希望へ導くの救世の光キュアセイバー!!!」

名乗りを上げるキュアセイバーに驚きが隠せない一同。周りに聖な



る光が放たれダークプリキュアを照らす。その光はムーンライトと  
はまた違いセイバーの名の通り救世の光であった。

第19話月の影計画編? 「アンナの正体と救世の光」 (後書き)

映画のオールスターズDX3を見ってきました。集大成というだけのすばらしい作品でした^^。サンシャインとムーンライトのペアが可愛かった!!。まあハートキャッチ組に限らずプリキュアは全員最高です!!!

皆さんもぜひ見てください!!!

さて次回はキュアセイバ の活躍と大人達にクレイズの魔の手が・

・  
・  
・

次回のお楽しみに

## 第20話月の影計画編？「囚われた3人」（前書き）

前回までのあらずし〜

明かされたアンナの正体に勇気を奪われたゆり。クレイズの計画とはゆりとアンナの月影姉妹の殺し合いを再び行わせることだったのだ。プロツサム達の仲間の言葉に再び戦意を取り戻すゆりはムーンライトとなりアンナを取り戻す為に戦う事を決し一度はアンナの記憶を取り戻しかけたのだがダークネスリングは非常にアンナを縛り付けクレイズの機械人形へと変容させてしまう。絶体絶命の時現れたのは別次元のプリキュアである救世の光の戦士「キュアセイバ」だった

## 第20話月の影計画編? 「囚われた3人」

クレイズ「キュアセイバーだと!?・・・き、貴様が何故この世界に? (ば、バカな奴は別次元の世界の戦士のはず・・・その奴が何故この世界に!?)」

セイバー「さあね? どうしてだけは私にも分からない・・・でも呼ばれたからには役割を全うするだけ・・・行くわよ!!!」

クレイズはセイバーの存在は他の多次元宇宙で話だけは聞いてはいた。だが何故別次元の戦士であるはずのセイバーがどうしてこの世界に?・・・まさかこれも我が主人ダーク様が恐れていたプリキュアの力か? 今は迷っている暇はない。

クレイズ「ダークプリキュア! 邪魔者を全て殺つてしまいなさい! ! ! !」

ダークプリキュア「・・・」

クレイズの命令に忠実に従うダークプリキュア。ムーンライトとセイバーの二人をまとめて相手をするつもりだろう。

セイバー「はあああつ!!!!」

だがムーンライトよりも先にセイバーが先に前に出る。ダークプリキュアの剣とセイバーの双剣が金属音を鳴らしながら火花を散らす。二人とも迷いがなく本気のぶつかり合いが繰り広げられる。パワーでは互角とでも言う所であろう。なぎ払いで飛ばされたダークプリキュアはアクロバットな動きで宙に舞うと着地する。

セイバー「はああ!!! たあああ!!!」

しかしパワーでは互角でも技術では僅かにセイバーが上回るらしく徐々にダークプリキュアを圧倒していこうとしていく。その動きは実に優雅でまるで踊っているかのような剣さばきでダークプリキュアの斬撃を的確に受け流し形勢を自分の有利な方向に流している

ムーンライト「凄い」

ブロッサム「可憐な動きです・・・」

マリン「か、カツコイイ!!」

サンシャイン「彼女自身も凄いけどあの剣のパワーもただものじゃないよ」

フェアリー「プリキュア独自のパワーとアタシ達ライダーのスピード兼ね備えたオールマイティーの戦士って感じね」

5人はセイバーの戦いに言葉が出なかつた。かつて自分達が束になつても苦戦を強いられたダークプリキュアに対してたった1人で圧倒しているとなれば当然と言えば当然だ。日の光を浴びて金色と銀色の二つの光を放つ剣が輝きを放つ。

クレイズ「ちっ!!!ヘロディア!!タイプMをもう一機出撃させてちょうだい」

ヘロディア「了解」

ダークプリキュアの攻撃と互角であるならば援軍を呼ぶまでだと通信でヘロディアにニセウルトラマンティガのマルチタイプ二号機を出撃させ青い光とともに転送される。

ニセティガM2「デヤアア!!」

セイバー「アレは?」

ブロッサム「アレはクレイズが造つたウルトラマンティガのニセモノです」

セイバー「ウルトラマンティガ?」

マリン「あそこで戦つてる巨人!!そこに赤と紫色の!!!」

セイバー「巨人!?!?!?!まあとにかく敵つてことね?!?!?!だつたら容赦しないわよ!!!」

ブロッサムとマリンの大雑把な説明に困惑するセイバーだが敵であるなら容赦はしないとセイバーは一度剣をしまう。

セイバー「鳴らせ、福音の奏をリリイフシンバル!」

セイバーはもう一つの専用武器リリイフシンバルを召還して手に取る。ニセティガMはその隙にハンドスラッシュを連発していくと地面にそれがセイバーに直撃した。。。かに見えたのだがセイバーは自身の天使を思わせる翹を広げて超高速低空飛行で紙一重でハンド

スラッシュを避けるとそのまま二セティガを惑わせる。いくらパワーが上であったとしてもその攻撃が相手に直撃しなければ全く持つて無意味。スピードで勝るセイバーは二セティガを惑わせながら高速のパンチとキックを二セティガに見舞わせる。

ティガ「（彼女なんてパワーだ・・・俺達があれだけ苦戦していると言っのにも簡単に・・・俺達も負けてられないな）・・・ハアアアアア！！！！」

互角の戦いを繰り広げていたティガ達もセイバーの戦闘力の高さに驚きを隠せないでいた。自分達もいつまでも苦戦してはられないとティガ達も反撃の狼煙のろしを上げる。

クレイズ「ちっ！！！！なんて強さ・・・己え！！！！」

セイバーの登場により戦いの流れは一気にプリキュア達の方に傾き始めた。このままではマズイと必死に考えるクレイズだがその間にも二セティガはセイバーの攻撃でダメージが蓄積していく。

セイバー「これでドドメよ！！！！プリキュア！スターライトチャージ！！！！」

チャージを完了し一瞬間において二セティガを睨む。

セイバー「クラアアアツッシュ！！！！」

セイバーは止めの一撃を発動するべく一度動きを止めるとシンバルを天に投げる。シンバルはそのまま上空を舞うと一度輝くと意思をもったように金属音を鳴らしあいながら弧を描いていくとセイバーの元に戻る。そしてシンバルはセイバーの目前で垂直に空中で停止するとを描くように高速で回転し始める。高速回転と同時に銀の環が発生し始め光の粒子が集まり始める。大量の光の粒子がシンバルが生んだ銀の環に集まっていくとその環の中心部にセイバーは両腕を勢いよく伸ばした瞬間に銀色の光線が二セティガに向かって放たれる。

二セティガ「ハアアアアツ！！！！」

目には目をと二セティガは二セゼペリオン光線を放って対抗する。



にものすごいパワーの持ち主である事は先ほどの闘いで証明済みだ。いつき「あの・・聞いてもいいですか？貴女は一体？」

????「私は兩牙真夜。貴女達と同じプリキュアよ・・・と言ってもこの世界のプリキュアではないんだけどね。で、この子は私の相棒のロコモ」

ロコモ「宜しくロコモ!!!」

シプレ「ああ!!!ロコモ久しぶりですう!!!」

ロコモ「久しぶりロコモ!!!元気にしてたロコモ？」

どうやら妖精同士は知り合いらしくシプレとコフレとポプリは真夜の妖精のロコモとじゃれあ始めるのだった。一方つぼみ達はと言うと「いまだに状況がイマイチ飲み込めないでいるのだった。」

ゆり「この世界のプリキュアじゃない・・・ってどういう事なの？」

真夜「そうね・・・とりあえず私の世界の話をするよ・・・」

真夜は自分がいた世界の事をそしてこの世界以外にもプリキュアがいる事を説明する。自分がいた世界でのプリキュアの仲間達の事、自分が今まで戦ってきたことなどを。

タ「ほ、ホントにパラレルワールドなんてのがあったなんてね」

真夜「私の信じられなかったんだけどね。まあ現にこうやって貴女達の世界に呼ばれちゃったんだし」

真夜本人も信じられないとでもいう顔ではあるのだがプリキュアやライダー更にはウルトラマンとぶっ飛んだ力が実在しているだけでも信じ難いが現に自分達が使っている力である彼女たちだからこそ事の事態を飲み込む事が出来るのである。

その頃の大人達はと言うとウルトラマンの変身を解除した後つぼみ達にどういう言い訳をしようか考えながらもクレイズが造り出したニセウルトラマンティガの事やアナヤダークプリキュアであった事更にキュアセイバの事について大人の家で話し合っていた。

大人「まさかティガのニセモノまで作りあげるなんて・・・」

琢磨「正に化け物だな・・・サロメの科学とかいうやつは」



傑「ああ。それにロボットであつたとしてもあれだけ苦戦させられる相手だ。もしもあんなのが大量に生産でもされてみる・・・そこぞ地球は終わる。」

3人は考えただけでも恐ろしかった。もしもあんなモノが大量に生産されて総攻撃でも受けたら地球は壊滅的な大ダメージを受けてしまふ。もしもそうなたらと考えると考えたくないが考えてしまふのが人情と言つものである。

大人「・・・アンナちゃんがまさかダークプリキュアの生まれ変わりだつたなんて」

琢磨「ああ。最近ゆりがずっと笑顔だつたのもアンナがいたからなんだろうな・・・それをアイツはまるで人形のように利用しがつて！！！！」

傑「奴はダークネスリングでアンナちゃんを無理やり操つていた・・・もしもダークネスリングを破壊出来たら彼女の意識が解放されるかもしれないが」

大人「ああ。今度は絶対に助けよう。ゆりの為にそしてアンナちゃんの為に！！」

琢磨&傑「おう！！！！」

次の議題はダークプリキュアにされたアンナについてであつた。クレイズが語つた彼女の秘密に3人は信じ難かつたがゆりの笑顔を思い出すと納得が自然と出来た。ゆりとアンナは本当の姉妹のように今まで仲良く過ごしていた事を3人も分かつていた。だからこそそれをいとも簡単にぶち壊した揚句アンナとゆりの殺し合いを楽しむクレイズに怒りが炎のように燃え出てきたのは3人も同じだったのだ。ゆりとアンナの為に今度は必ず助けると誓い合う3人。絶対に助けるという思いを胸に。

大人「そして最後に気になるのはキュアセイバー」

琢磨「強かつたよな。ニセティガをいとも簡単にお釈迦にしちまう

んだから」

傑「ああ。けどつぼみ達とは知り合いではないようだった感じだったな」

大人「それも気になっていたんだ。てつきりつぼみ達の仲間だと思っていたのに」

琢磨「・・・こればかりはつぼみ達に聞いたほうが早いかな」

傑「だけど・・・どうやった顔向けするんだ？俺達がウルトラマンだって言うわけいもないし」

大人「ああ。俺達つてつぼみ達のピンチには必ず駆け付けてたからな。どうやって言い訳しようか・・・」

琢磨&傑「うゝん（大汗）」

最後の議題はキュアセイバ についてである。彼女の戦闘能力は本当に驚かせられてたのだがつぼみ達とは面識がない事に疑問を感じていた3人。つぼみ達に聞くのが早いのだがどうにも聞きづらい・・・どうしようかと悩んでいた3人だったが・・・

カプトゼクター「！！！！！！（お、おゝい！！！！大変だあ！！！！）」  
考え込んでいた3人にカプトゼクターが飛んできた。何やら慌てている様子だった。

大人「どうした相棒？」

琢磨「まさか・・・ダークプリキュアが・・・アンナが現れたのか？」

カプトゼクター「！！！！！！（そ、そうなんだよお！！！！は、早くう！！！！）」

琢磨の言葉にカプトゼクターは反応し勢いよく窓から飛び出る。どうやら琢磨の感が当たったらしい。

大人「もしかしたらワナかもしれないが・・・仕方ない二人とも行こう！！！！」

琢磨「異議なし。」

傑「左に同じ！！！！」

ダークプリキュアの出現だとしたらなぜ町が破壊されないのかは疑問だが今は行くしかないと3人はカブトゼクターが飛んで行った方向にバイクで追うのだった。そしてついたのは近くにある希望ヶ丘公園広場の丘であった。

大人「あ、あれは・・・アンナちゃん!!!」

琢磨「・・・」

傑「君が・・・俺達をカブトゼクターに呼ばせたのか!？」

ダークプリキュア「・・・」

丘の頂上にいたのはダークプリキュアであった。見す見す自分達を待っていたのは何故だ?・・・そんな疑問があった3人だがすぐにライダーベルトを腰につけるとゼクター達を呼び寄せる。

琢磨「アンナすぐに元に戻してやる」

傑「君には罪はない・・・だから絶対に助ける!!!」

大人「そしてもう一度・・・ゆりと一緒に笑ってくれ。変身!!!」

大人達は一齐にライダーベルトにゼクターを装填するが・・・反応がない。

大人「なっ!?!?・・・な、何でだ?・・・ぐうっ!?!」

琢磨「か、身体が・・・し、痺れる」

傑「こ、これは毒か!?!?・・・い、一体・・・誰がこんな姑息な真似を」

突然大人達の身体に毒針付きの矢のようなものが放たれて身体に突き刺さると身体が痺れて動きを封じられてしまう。一体誰がこんなものを?その答えを示す相手はすぐにあらわれた

クレイズ「ふふふ・・・まんまと引っ掛かったわね!!!おバカさん」

大人「お、お前はクレイズ!?!?・・・お前の仕業か!?!」

クレイズ「当然よ?月影ゆりでなかったのは残念だけど・・・それ以上の収穫だったわ」

琢磨「ど、どういう意味だ!？」

クレイズ「知らないとしても思ったの?・・・アンタ達3人が持っている特別な力について」

傑「な、何!?!?・・・何の事だ!?!」

まさか自分達がウルトラマンであるとばれたのではないかと焦る3人。だがクレイズは3人に近づき見え見えだとも言うような顔で3人を嘲笑う。

クレイズ「隠す必要ないじゃないの?・・・アンタ達がウルトラマンだってことはバレバレなんだから。」

大人「・・・どうしてそれを!?!」

クレイズ「元々ティガのピラミッドを最初に見つけたのは私達サロメだった。破壊できれば全ては終わっていたのだけど巨人は蘇った・・・原因はないかと我々サロメは密かに調査をしていたのよ・・・そして見つけたのがアンタ達3人ってわけ。」

琢磨「な、何だと!?!?・・・」

完全に自分達のミスであった。アンナを助けた気持が強すぎたことで敵の策にまんまとハマってしまったのだった。

大人「じゃあライダーに変身できなかったのもお前の仕業か!?!」

クレイズ「その通り」 アンタ達が変身するタイミングに合わせてライダーベルトに向かって妨害電波を流したのよ。その隙に身体に向けて動きを麻痺させる惑星サウリアから採取したシビレ草のエキスを塗った毒矢をアンタ達に放ったの・・・どう身体が痺れて動かないでしょ?さあ、ダークプリキアしばしこの3人にお仕置きをして上げて」

大人「や、止めるんだアンナちゃん!!」

琢磨「クツソ・・・汚ねえぞクレイズ!?!」

傑「貴様!?!」

3人の説得の言葉もむなしくはウルトラマンに変身も出来ないままダークプリキアに生身で甚振られる。だが例え変身できたとしても3人はダークプリキア相手には戦えなかつたかもしれない・・・

そのころのつぼみ達はというと。

つぼみ「大人さん携帯にも出ませんね。」

えりか「琢磨さんも傑さんも出ないなんておかしいね」

いつき「3人ともどうしたのかな？・・・さっきの闘いの時も姿を見せなかったし」

真夜「その3人も仮面ライダーっていう戦士に変身できるの？」

つぼみ「はい。3人ともすごく強いんです！！！」

えりか「まあ、アタシ達ほどではないけどね」

ロモモ「何よ言うロモ！！真夜ちゃんも凄く強いロモ！！」

いつき「こらこら、えりかつたら」

真夜「ロモモも止めなさいって」

自慢げな顔を見せるえりかの隣で苦笑いするいつきと真夜とロモモの二人に大人達の持つライダーの事を説明するつぼみ。真夜とロモモが新しい仲間に加わったので大人達にも紹介しようと思ったまでは良かったのだが大人達と連絡が取れなくなったのだ。心配になったつぼみ達は彼らを探しに辺りを手分けして探していた。だが既に1時間が経過していて全く姿が見えない事に不安が募る。

ゆり「皆、大人達は見つかった？」

つぼみ「いいえ。ゆりさんのほうもダメでしたか？」

ゆり「ええ。家にも言ったんだけど3人とも留守みたいで」

タ「アタシも収穫ゼロ。つたくアイツ等何処行ったのよ」

ばらばらになつていた全員は一度植物園に集まり状況を報告する。

どうやら全員収穫ゼロであるらしい。すると猛スピードで何処からかタの相棒であるバタフライゼクターが飛んできた。

タ「どうしたのバタフライゼクター！？」

真夜「この子は？」

つぼみ「バタフライゼクターです。タさんがフェアリーに変身するときに使う変身アイテムです。大人さん達の変身アイテムも同じように心を持っているんですよ」

真夜「へえ〜不思議。ねえロモモの世界にもこういうのはいるのかな？」

ロモモ「全くみた事ないロモ。」

真夜とロモモにバタフライゼクターの説明をしている間にバタフライゼクターは何やら慌てた様子で夕達に何かを伝えたい様子である。夕「大人達の事何か知ってるの!？」

バタフライゼクター「!!!!!!」

ゆり「そうみたいね。行きましょう!」

全員はバタフライゼクターの案内で希望ヶ丘公園広場の丘にまで連れてこられたのだった。そこには大人達が使ってるはずのライダーベルトが落ちていた。

つぼみ「こ、これは大人さん達のライダーベルト!? な、何でこんなところに」

つぼみ達は3つのライダーベルトを拾い辺りを見回す。すると先ほどまで誰かが此処で争ったような形跡が見られてある場所には血の跡があった。

えりか「これって・・・血じゃない!？」

いつき「まさか・・・3人に何かがあつたんじゃ」

????「その通りだ!!!!」

突然声が響く。全員の視線がそこに集まると其処にいたのはダークプリキュアだった。手には何かを持っている。

ゆり「アンナ!」

ダークプリキュア「・・・プリキュア達よこれを見るがいい。」

ダークプリキュアは手に持っているリモコンのようなものを稼働させる。つぼみ達の前に映像が映し出されたその映像とは・・・

つぼみ・えりか・いつき・夕・真夜「!!!!!!」

その映像に映し出されたものはなんとボロボロにされて十字架に磔にされていた大人、琢磨、傑の3人だった。そしてその映像見せた後にダークプリキュアはつぼみ達にカブト、ガタツク、ダークカブトのゼクターを投げ捨ててやる。どうやら3匹は命辛々逃げようとし

て捕まり重傷を負わされたのだ。

ダークプリキュア「明日の満月の夜にこの3人を処刑する。阻止したくばサロメの全戦基地があるB-3地区にある廃工場に来るのだな」

ダークプリキュアはそれだけ言うと闇の扉を潜りそんな場から姿を消すのだった。その間にも痛々しい3人の姿は映し出されていてつばみ達は言葉が出ないのだった。

第20話月の影計画編？「囚われた3人」（後書き）

セイバーの戦闘力だとこれ位は軽く行きそうだ（汗）もうすぐ新学期などが始まり新生活が始まりますが皆様はいかがでしょう？

私は・・・新学期は大学の授業がいつも憂鬱です！！ああ～学生はこれだから辛いぜ（泣）

さて次回はいよいよ決戦のが始まります。クレイズに囚われた大人、琢磨、傑そして操られたアンナの運命はいかに！！

次回もお楽しみに



## 第21話月の影計画編？「救出作戦開始」(前書き)

前回までのあらすじ

キュアセイバーはニセウルトラマンティガを軽く木っ端みじんにするほどのものすごいパワーであった。一方大人達はクレイズの罠にはまってしまい人質とされてしまう。明日の満月の夜に3人は処刑されてしまうと宣言するダークプリキュア。果たして3人の命はそして操られたアンナの運命は!?

## 第21話月の影計画編？「救出作戦開始」

大人達3人がつかまり処刑されると宣言された事に動揺が隠せないつぼみ達一行は植物園に戻っていた。妖精たちもいつも以上に危機感を募らせているらしく普段の元気など全くない。

つぼみ「どうしたらいいんですか……」

えりか「迷ってる場合じゃないよ!!今すぐ助けに行こうよ!!」

いつき「待ってえりか。クレイズがなんの策もなしにこんな挑発をするとは思えないよ……それに上手くいったとしてもクレイズは最終手段として3人を僕達の目の前で……」

ゆり「あり得るわね。」

えりかは力強くそう言うがすぐにいつきがえりかを宥める。例え助けに行つたとしても下手をすればクレイズは大人達を見せしめに自分達の目の前で殺す事もあり得るし狡猾なクレイズの事だから二重にも三重にもワナを仕掛けているかもしれないのだ。そう考えると自分達も作戦なしには迂闊な事は出来ない。

えりか「だけどこのままじゃ明日の夜に3人と……」

つぼみ「分かつてます……でも大人さんの……3人の命がかかっているんですよ？下手なまねは出来ません!!!!……ごめんなさい。」

えりか「うんうん。アタシこそ……ごめん。」

夕「……」

えりかの言葉をさえぎるようにつぼみは大声を上げるがすぐに座り込んで謝る。えりかもすぐに謝り再び沈黙が包んでいく。

真夜「皆……助けに行こう!!貴女達の……いいえ私達の大切な仲間を取り返しに。新参者の私が言うのもおかしいけれどもでもこうしていても前には進めない。きっと私達が助けに来るのを待っている筈よ!!!。」

その沈黙を一番最初に破つたのは真夜だった。こうやっていつまで

も悩んでいるだけで時間が過ぎてしまったらそれこそ取り返しがつかなくなる。例えワナがあるうとも自分達の力を信じればどんな困難だって乗り越えられる。それがプリキュアだった全員に諭すように。

つぼみ「真夜さん……」

ロモモ「真夜ちゃんの言うとおりロモ！！。あの3人だつて絶対にロモモ達が助けに来るのを信じてるロモ！！例え敵がどんなに卑怯な手を使ってもロモモ達が力を合わせれば誰にも負けないロモ！！」

つぼみ達は真夜方に視線を向ける。続いてロモモがそう言う。自分達がこうしている間にも大人達はクレイズに甚振られて苦しんでいる。だがどんなに苦しんでいようとつぼみ達が助けに来ると信じている筈。そんな彼らを裏切ることなどするわけにはいかない。

えりか「……そうだね。うっしや！！ちよつくらおドジな3人を助けに行つてこようよ。アタシ達の大切な仲間をさ」

真夜とロモモの言葉に対して最初に口を開いたはえりかだった。いつもの調子で身体を捻りながらつぼみ、いつき、ゆり、夕の4人に語りかける。自分達の仲間を助けられるのは自分達しかいないと。

いつき「……うん。必ず助け出して二度とこんな事がないように鍛え直さないかね」

夕「だね。そして操られたアンナちゃんも絶対に助けよう。」

つぼみ「はい！！絶対！4人を助けましょう！！」

ゆり「そうね。でも作戦なしに行くのはあまりにも危険すぎるわ。明日の夜までまだまだ時間はあるしちゃんと作戦を考えましょう。

アンナや大人達を助けるために」

シプレ「シプレ達も何か考えるですう！！」

コフレ「大人さん達を助ける方法を皆で考えるですつ！！」

ポプリ「でしゅ！！！！」

バタフライゼクター「！！！！！！！！」

全員の戦意の灯が蘇る。大切な仲間達を救えるのは自分達だけなの

だ。だがその為には全員の知恵を絞って作戦を考えなければならぬ。植物園のテラスの片隅で全員は時間が許す限り出せるだけのアイディアで作戦を練っていくのだった。

その頃サロメ星人全戦基地として使われている廃工場では……大人「……うう……二人とも……大丈夫か？」

琢磨「ゲホ、ゲホ……何とかな……だけど腹減ったかも」

傑「ギリギリ生きてるさ……俺は水が飲みたい……」

大人「頑張れ2人とも……必ずチャンスはある。カプトゼクター達が……ベルトを取ってくるまでの辛抱だ。」

前線基地の収容所のような場所に3人は鎖で繋がられながらも何とか生きていた。身体はボロボロで立っているのもやっとかもしれないほど3人は消耗していた。全身をダークプリキュアに殴られた激痛や空腹感、水に対する飢えが襲いにかかるがどうしようも出来ず我慢するしかなかった。しばらくするとサロメの一兵士がやってきて3人を収容所から出す。

サロメ兵士1「出る。」

サロメ兵士に無理やり連れて来られたその先は丸型のカプセル様なハッチがある変わった形の壁の部屋に連れてこられた。その中央のコントロールルームらしき部屋からクレイズとヘロディアそしてダークプリキュアいて上から見下ろしている。

クレイズ「来たわね？光の戦士たち」

大人「クレイズ……」

琢磨「一体何の用だ？」

クレイズ「面白い物を見せてあげようと思ってね」ハッチオープン！！」

大人・琢磨・傑「！！！！！！」

クレイズの号令に合わせて丸型のハッチが一斉に開く。なんとそこから出てきたのは大量のニセウルトラマンティガだった。3タイプそれぞれざつと数えても数千体は超えているだろうか？

傑「これは……」

大人「なんていう数だ……こんなものがもしも一斉に起動したら……」

クレイズ「ふっふっふ　どうかしら？アタシが造ったニセウルトラマンティガは？」

琢磨「何いい気になってんだ！！所詮はニセモノ……そんなもん俺達が必ず叩き潰す！！！」

クレイズ「叩き潰す？何言ってるのかしら？スパークレンスもライダーベルトもない　ただの人間　でしかない貴方達が」

大人「くっ！！！」

クレイズは3人のスパークレンスを見せつけて満面の笑みで嘲笑う。今の大人達にはスパークレンスもライダーベルトもなく完全に抵抗する力を失っている。せめてどちらかさえあればそう思う3人の意思も空しくクレイズはそれぞれタイプM、P、Sの個体を出現させる。

クレイズ「平和を守るウルトラマンティガが地球と全宇宙を制圧する！！その能力はオリジナルをはるかに凌駕する……これこそサロメ星の最強ロボット兵器……これを量産すればサロメが最強となるのよおおおお！！！！！！」

大人「（くっそお……どうすればいいんだ……どうすればあ！！！！）」

3人は悔しさに唇をかみしめながら下を向く。今の俺達には何もする力はない。せめてスパークレンスかライダーベルトのどちらかさえ戻ってくればこの状況を打破できるすべはあるのだが……数分間考え込んでいると手下の一人がクレイズ達の元に走ってきた。何かの報告を受けるとクレイズは一度鼻で笑うと大人達のほうを向く。クレイズ「喜びなさい貴方達の仲間が助けに来るってよお～まあ貴方達のボロボロな姿を見せられたら当然と言えば当然よね～」

傑「俺達を餌につばみ達を……もう一度ゆりとアンナの殺し合いをさせるつもりか！？」

クレイズ「そのとおり 今度は絶対に邪魔させないわ。アンタ達は月影ゆりとダークプリキュアの殺し合いを見ることね」

大人「貴様あ!!! 何処まで腐ってるだ……。クレイズ!!!!!!」  
琢磨「ゆりの心をまた傷つけるつもりかあ!?!?。そんな事俺達がさせない絶対に!!!!!!」

クレイズ「うるさいわね……。こいつ等を早く牢屋に閉じ込めちやいなさい!!!!!!」

サロメ兵士2「ハッ!!!!!!」

自分達を餌につぼみ達をおびき寄せるつもりだ……。そうなれば奴の思うツボだ……。不甲斐なさに大人達は思わず叫んでしまう。このままじゃつぼみ達も自分達の二の舞になってしまう。だが今の自分達には何も出来ない。そして大人達はまた収容所に戻されることとなった。

そして時間は流れ翌日B・3地区の廃工場へとつぼみ達は足を運んでいた。

つぼみ「ココがサロメの全戦基地の廃工場……」

えりか「時間は後14時間とちょっとね。助け出すには十分ね」

いつき「ああ。絶対に助け出そう!!! 僕達の大切な仲間を」

タ「とーぜん 終わったらあの3人に食事でもおごってもらわないと」

ゆり「そうね。3人はむくれるかもしれないけど助けられた報酬でことなら問題ないでしょう。待っててアンナ……。必ず貴女を助け出すから。」

真夜「気合いは十分ね。じゃあそろそろ本気で行きましょうか!!!」

つぼみ「えりか・いつき『はい!!!!!!』」

ゆり・タ『うん!!!!!!』

シプレ&コフレ&ポプリ『ですう!!!!!!』

口モモ「行く口モ!!!!!!」

シプレ・コフレ・ポプリ『プリキュアの種いくですう!!!』

先ずはつぼみ達が私服から光のワンピースのような服に変化してつぼみとゆりは眼鏡がなくなる。つぼみ、えりか、いつきは妖精たちから発せられた心の種をゆりは自分でペンダント代わりに持っている心の種をココロパヒュームとココロポットに装填する。

つぼみ・えりか・いつき・ゆり『プリキュア・オープンマイハート!!!』

つぼみ、えりか、いつきの3人は光の香水を身体に噴きかけていくとピンク、青、黄色の光に包まれて衣装がだんだんとそれぞれの色を強調したコスチュームに変化していく。ゆりは藍色の光に包まれながら銀色と藤色を強調した衣装に変化し4人の髪の色もピンク、水色、黄色、藤色とそれぞれのイメージカラーに変化する。

ブロッサム「大地に咲く一輪の花キュアブロッサム!!!」

マリン「海風に揺れる一輪の花キュアマリン!!!」

サンシャイン「日の光浴びる一輪の花キュアサンシャイン!!!」

ムーンライト「月光に冴える一輪の花キュアムーンライト!!!」

4人『ハートキャッチプリキュア!!!』

夕「来てバタフライゼクター!!!」

バタフライゼクター「!!!!!!!」

夕「変身!!!」

電子音「HENSIN」

夕の声に反応し時空を超えてバタフライゼクターが夕の手に留まる。そして夕は首に付けている変身ブローチのライダーブローチにバタフライゼクターをライダーブローチに装填していくと首から全身を包んでいき白銀を強調した蝶のサナギをモチーフにした仮面ライダーフェアリーマスケットモードへと変身する。

フェアリー「キャストオフ!!!」

電子音「CAST OFF CHANGE BUTTERFLY!

「！！」  
フェアリー「聖なる翼を持せし白銀の神・・・仮面ライダーフェアリー！！！！」  
フェアリーは次にバタフライゼクターの翅を畳むと右にゼクターの本体を数センチ動かす。すると重厚な鎧が広がっていく。次にそのままバタフライゼクターを180度回転させると中心にエネルギーが集まりマスクドホームのゴツく重たい鎧が一気に弾け飛んでいきスマートな女性らしいシルエットになり顔はコバルトブルーの複眼と蝶の翼をイメージした仮面ライダーフェアリーライダーフォームにチェンジする。

真夜「ロモモ、私達も行くよ！！！！」

ロモモ「オーケーロモ！！！！」

ロモモは煙を発してペンダント形のアイテムへと変化する。真夜は右手で持ち左手の人差し指で弾いた。チリーンと美しい金属音が辺りに発せられるそして次の瞬間真夜は叫んだ。

真夜「プリキュア・セイントリバーズ！！！！」

ペンダントが白く光り出し光が彼女の身体を包むと身体を上昇させた。身体を上昇させていくうちに真夜の背中に妖精のようなシャープで透明な6枚の翅が施される。そして真夜は光のりた真夜は微笑みを浮かべながら舞い踊るようにスキップし始めた。スキップするごとに彼女の身体に大量の白い羽毛が集まると衣装へ変わっていく。二の腕までの袖の純白の服に天女のような肩飾り、花が開くような形に裾が広がったスカート、両腕には天使の翼のような形状をしたリストレット両足にはショートブーツとオーバーニーソックス胸には丈の長いリボンが施され、中央には白いバラがあしらわれた。そして黒い長髪が銀に染まっついていき、水色のカチューシャが装着され、さらにその上に短くて薄い透明なベールが覆われた。最後に変身アイテムのペンダントを首に掛けそのまま翅をつかって光のガーデンから舞い降りた。そしてゆっくりと地上に降りていくと翅を閉



じて堂々の仁王立ちをする。

セイバー「全てを希望へ導く救世の光！キュアセイバー！！」  
名乗りを上げると彼女の背後が聖なる光で輝いた。

クレイズ「意外に早かったじゃない・・・さあアンタ達のお仲間を助ける事が出来るかしらね？」

クレイズは監視カメラから自室のモニターで彼女達の変身の様子を見ていた。まさにこれこそ最高のシチュエーションでの最高のシヨ一の始まりだと興奮のあまり身体を身震いさせる。今度は絶対にその邪魔をさせない。ムーンライトをダークプリキュアに倒させ二セウルトラマンティガで今度こそプリキュアとフェアリーを倒し地球を制圧すると言う野望を叶えるために。

ブロッサム「待っていてください大人さん、琢磨さん、傑さん・・・そしてアンナさん！！必ず私達が皆さんをお助けします！！！」  
マリ「だから・・・死なないでよ。アタシ達が来るまで絶対にね」  
サンシャイン「そしてアンナちゃん・・・今度こそ貴女を呪縛から解き放つ。」

ムーンライト「私達プリキュアが影ではなく一人の人間として必ず迎えに行く。だから待ってて！！！」

セイバー「皆・・・準備はいいわね？行くわよ！！！」  
全員「おうー！！！！！」

ブロッサム、マリ、サンシャインはシプレ達と合体してマントを纏いムーンライトはバラからマントを生みだして纏う。捕らえられた大人、琢磨、傑の3人そしてクレイズに操られているアンナを助け出す為に。全員はフルスピードで廃工場に向かって突進する。必ず失いかけているものを取り戻す為に！！

果たして大人達の運命は？アンナはクレイズの呪縛から解放されるのか？そしてクレイズの二セウルトラマンティガによる地球総攻撃計画を阻止する事は出来るのか！？

## 第21話月の影計画編？「救出作戦開始」(後書き)

書き出したら止まらなくなってしまった(汗)。本当はもう少し書きたかったけど量が多くなりそうなので此処で区切ります^^;

今日はエイプリルフルですね！！ですが円谷プロさんでのイベントは今回はお休みですね。仕方ありませんね。皆さんも出来る限り節電や買いだめなどは自粛しましょう。

しかし今は辛いかもしれませんが辛い事、悲しい事のあとは必ずいい事、楽しい事が待っていると私は信じています。

さて次回はサロメ全戦基地を舞台とした決戦が始まります。

次回もお楽しみに

## 第22話月の影計画編？「苦渋の決断」（前書き）

前回までのあらすじ

サロメの前線基地内では既に大量のニセウルトラマンティガが大量に量産されていた。コレが一斉に起動すれば地球は壊滅的な大ダメージを負ってしまう事になる。スパークレンスもライダーベルトもない大人達にはどうしようもできず収容所に幽閉される。

大人達3人の処刑の時間まであと14時間・・・つぼみ、えりか、いつき、ゆり、夕、そしてキュアセイバーこと真夜の女性戦士軍団は大人達及びダークプリキュアにされたアンナを助け出すべくサロメの前線基地に突入する

## 第22話月の影計画編？「苦渋の決断」

ブロッサム達は迎え来るサロメの兵士達を蹴散らしながら大人達が閉じ込められている場所を探す。見た目ではありえないほどの入り組んだ構造にブロッサム達は戸惑っていた。

ブロッサム「外で見た感じではこんなに広い筈はないのですが・・・

「マリン「一体どう言う事よ!!」

いくらでもわいてくるサロメ兵士を蹴散らしながらブロッサムとマリンは思わずそう呟く。キリがなく夜まで無駄な時間はない為焦ってしまう。

ムーンライト「恐らく表の廃工場の姿は仮の姿で本来はかなりの広さなのよ。こう入り組んでると探すのに骨が折れそうね」

サンシャイン「どうしよう?このままじゃ3人の処刑の時間に間に合わないよ」

フェアリー「そうね。夜まで後12時間・・・いつまでも手こずってはられないわ」

こう広いと大人達がいるはずであろう収容所まで辿り着く前に処刑時間になってしまう可能性も否定できないのだ。既に2時間が経過しているのだがまだまだ奥へと続いていてこのままのペースだと間に合うかは分からない。しばらく進むと二つの別れ道となっていた。この二つの道のうちどちらかに大人達3人そして片方はクレイズがいる指令室に繋がっていると思われる。

セイバー「ここから先は2手に別れましょう!!ブロッサム、マリン、サンシャインは右の道を私とムーンライトとフェアリーは左に行くわ」

ブロッサム「分かりました。皆さん気をつけてくださいね」

マリン「絶対に全員で・・・大人さん達やアンナちゃんを助けて全員で打ち上げやるんだからね」

マリンは笑みを見せるとビシッとグーサインを見せてムーンライト達に声援を送る。必ず全員でここから生還すると約束する。

ムーンライト「勿論よ。そっちも気をつけてね」

代表してムーンライトがブロッサム達に声援を返しそれぞれ道を進んでいく。真つ直ぐの一本道でどこまで進んでも薄暗い。

クレイズ「ふふ ブロッサム、マリン、サンシャインのグループとムーンライトフェアリー、セイバーのグループに分かれてまさかそれぞれ大切な相手の元にたどり着く道を選ぶとは・・・コレは運命かしら？」

監視カメラのモニターを指令室から監視していたクレイズはブロッサム達が選んだ道について驚いていた。まさかそれぞれの目的のモノがある場所に自ら向うなんて・・・こんなに面白い事はないと兵士を送り込みながら高みの見物のごとくモニターを指令室で眺めるのだった。

大人「な、何の騒ぎだ？」

琢磨「まさかつぼみ達が此処に？」

傑「恐らく来たんだろうな。・・・」

大人「くっ！！！！・・・ベルトかスパークレンスがあればこんな鎖なんて・・・」

収容所にもブロッサム達の襲撃の情報が流れていた。大人達は集場所の牢屋に監獄されていて此処からではどうしようもできない・・・  
・なんとか逃げ出そうにも鎖のせいで動けずに力が入らない。

大人「つぼみ・・・すまない」

大人は思わず下を向いて哀しげにそう呟いてしまう。自分達が罠にはまったばかりにつぼみ達を危険な目に合わせることとなってしまった。情けなくて悔しくて仕方ない。そんな空気を察した琢磨と傑は悪ふざけをする態度でため息をつく・・・

琢磨「はああくあ。ったく情けねえ！！！！ベルトとスパークレンス

取られたらホントに足手まといじゃねえか!!!……えりかに  
また世話を掛けちまうな。えりかがこの状況を見たら『男の子なの  
に情けないなあ』とかいつて弄られそうだ」

傑「えりかならそうだろうな。いつきだったら『もう二度とこんな  
事がない様に明堂院流の武術で鍛え直します!!!』って言って助  
け出された後いつきの家の武道館に強制連行されそうだな。」

琢磨「そうならしばらくは筋肉痛地獄だな」

大人「ふっ……はははは!!!」

大人は二人の悪ふざけに思わず笑みをこぼして笑ってしまう。その  
大人を見て琢磨と傑も一緒に笑い一気に場の空気が明るくなった。

傑「……やつと元気になったか。いつもの大人に戻ったな」

琢磨「つぼみ達を信じよう。絶対に此処まで来てくれるさ!!!」

大人「ああ。ありがとうな……二人とも」

大人は元氣を取り戻したかのようにそう言う。たしかに罫にはまっ  
たのは大きな失態だがいつまでもよくよくよしても何も変わらな  
い……ならば今は信じようではないか……仲間が助けに来る事  
を。

ブロッサム「やあああ!!!はあああ!!!」

マリン「だああ!!!うりやああ!!!」

サンシャイン「たああああつ!!!やあああ!!!」

ブロッサム達は迫りくる敵を薙ぎ払い投げ飛ばし気絶させてどんど  
ん前に進んでいく。だんだん壁の様相が変化していき何処かに繋が  
っているのが分かる。

ブロッサム「一体どこまで続いているんでしょうか?」

マリン「分かんないよ!!!でも絶対にこの先には何かあるよ!!!」

サンシャイン「それにしてもいくら倒してもキリがないわ!!!」

敵が現れて3人の技で飛ばされたり気絶したりの繰り返しだが雑魚  
とは言えいつまでも相手をしている時間はない。急ぎながらもブロ  
ッサム達3人は邪魔な敵を排除しながらも着実に進んでいく。

ムーンライト「ふん!!はああ!!」

フェアリー「うりやりやりや!!!!たああああ!!!!!!」

セイバー「やあああ!!!」

一方ムーンライト、フェアリー、セイバーの3人も着実に進んでおり奥へ奥へと突き進んでいく。そして出口らしき光が見えてきた。

全員が出た先は円いシエルターの様な壁がる独特の部屋だった。そうこの部屋はニセウルトラマンティガの格納庫だ。

ムーンライト「この部屋は一体なんなのかしら?」

セイバー「コレは何かを格納するシエルターかしら?」

セイバーは一面を見渡してそう言う。確かに言うとおりであるが3人は見当がつかないのである。

???「そのとおり!!!」

ムーンライト・フェアリー・セイバー「!!!??」

声のする方を見てみるとそこにはドクタークレイズ率いるサロメ兵士軍団とダークプリキュアが指令室から見下ろしている姿があった。ムーンライト「クレイズ!!!」

フェアリー「大人達は何処にいるのよ!?!」

クレイズ「大人?・・・あああ〜仮面ライダーカブト達のことね。

安心しなさい牢獄に閉じ込めてあるから。今頃はアンタ達の仲間が助け出してる頃じゃない?」

セイバー「じゃあブロッサム達が行った道が彼らが」

フェアリー「あの3人だったら大丈夫ね。降りてきなさいよクレイズ!!アンタ達の大切な仲間のアンナちゃんを返してもらおうんだから!!!」

大人達はまだ無事であると分かった以上はもう遠慮はいらないとフェアリーはフェアリーレイピアを構えるとそう言う。自分達のする事はアンナを救出する事だと。

クレイズ「慌てないでよ。その前にアンタ達に素晴らしいモノを見せてあげるから」

クレイズが指を鳴らすと部屋の壁が一斉に動き出す。現れたのは大人達にも見せた大量に生産されたニセウルトラマンティガである。

ムーンライト達は数えきれない数に思わず言葉を失ってしまう。

クレイズ「驚いて声も出ないみたいね？。さてでは今からショーの始まりよ！！！！」

フェアリー・セイバー「！！！？？」

クレイズがもう一度指を鳴らすと突如セイバーとフェアリーの上にカプセルが落とされて二人は身動きを封じられてしまう。

セイバー「コレは！？」

フェアリー「ど、どういうつもりよ！？」

クレイズ「ショーの観客席よ？無粋な邪魔をされないためにね」

ムーンライト「ショー？・・・まさか貴女！！」

クレイズ「賢いわね？ムーンライト。さあ行きなさい！！！ダークプリキュア！！！！」

ムーンライトは嫌な予感がした。その予感が当たる事になりクレイズの合図と共にクレイズはダークプリキュアを指令室の窓から降りさせる。

ムーンライト「アンナ・・・」

ダークプリキュア「・・・チャン・・・シテ」

ムーンライト「！？・・・アンナ？」

ダークプリキュア「オネエチャン・・・ワタシヲオシテ・・・

ハヤク・・・ワタシヲ」

ダークプリキュアの目からは涙が流れていた。操られながらもアナの意識はまだ完全には消えていなかったのだ。必死に伝えたい事を姉であるムーンライトに・・・ゆりに伝えて自分を終わらせてもらう為に・・・ムーンライトは一度目を閉じると静かに首を横に振った。

ムーンライト「いいえ私は貴女を倒さないわ。渡した決めたのよ・・・必ずもう一度皆で笑い合うつて・・・だから必ず貴女を・・・私の大切な妹を取り戻してみせる！！！！」





サンシャイン「思った以上に中が入り組んでて此処まで来るのに手間取ってしまつて」

傑「そうだったか・・・必ず来るって信じてたぜ」

ブロッサム「ホントに無事でよかつたですよ!!!」

大人「ちよ、ブロッサム・・・痛いって」

サロメ兵士から奪い取つた鍵で鎖を外すとブロッサムは大人に抱きついていく。大人は痛みには耐えながらもブロッサムの頭をなでて落ちつかせる。

マリ「よし3人は助け出したしムーンライト達と合流しよう!!!」

大人「そうだ・・・早くしないとアンナちゃんとムーンライトの戦いが始まつちまう!!!」

ブロッサム「なんですって!?・・・早く止めないと!!!」

琢磨「ああ。絶対に止めるぞ!!!・・・いつつ」

サンシャイン「大丈夫?無理しない方が」

傑「俺達の事は気にするな・・・大切な仲間を助けるためならこんな何ともない!!!」

大人「傑の言うとりだ!!!皆・・・行くぞ!!!」

全員「おう!!!!!!!」

ブロッサム達は大人達の救出に成功しムーンライト達の戦いを止めるべく来た道を全速力で戻りムーンライト達を通つた道に走る。

ムーンライト「はあああああ!!!!!!!」

ダークプリキュア「たああああ!!!!!!!」

二人は拳と拳をぶつけ凄まじい激闘を繰り広げていた。形勢は未だに互角で両者とも譲らないのだがムーンライトは極力アンナにダメージを与えないようにしながらどうやって彼女を正気に戻せるかを考える。

ムーンライト「アンナ・・・自分を取り戻して!!!貴女は私の影なんかじゃない貴女は貴女ただ一人の人間なの。他の誰でもないただ

一人の人間なのよ!!!!」

必死に語りかけるムーンライトの声はアンナに届いているのかは分からない・・・だが僅かにある可能性にかけて必死に語りかける。

ダークプリキュア「・・・」

クレイズ「無駄よ!!! 声はもう届かない・・・何故なら彼女はもう完全に心が飲み込まれているんだから」

ムーンライト「そんな事ない!!! アンナはまだ完全に心が飲み込まれていないわ」

クレイズ「随分な自信じゃないの？果たして本当にそうかしら？ダークプリキュアよダークパワーフォルテツシモをムーンライトにぶつけなさい!!!!!!!」

全員が息をのむ中クレイズはダークプリキュアに命令する。ダークプリキュアはダークタクトをとりだすのだが・・・

ダークプリキュア「・・・て・・・げて・・・ねちゃん・・・  
・お姉ちゃん・・・逃げて」

今度ははつきりと聞こえた。ダークプリキュアの・・・いやアンナの本音が。必死になって姉のムーンライトを守ろうとする叫びがあった。だが非情にも身体は言う事を聞かずにその間にもタクトはムーンライトに向けられる。

アンナの思いとダークネスリングのパワーが戦い合っているのだ。

ムーンライト「負けないでアンナ!!!!!!・・・貴女の心は絶対にクレイズなんかには負けない・・・だから自分を取り戻して!!!!!!」

ダークプリキュア「あああうううう!?!?!?!?!?!!!!ううううわ、私はダークプリキュアなんかじゃない!!!!!! 私はムーンライトの・・・たった一人の妹だああ!!!!!!・・・うおおおおおおおお!!!!!!!」

必死に訴えかけるムーンライト。姉の訴えを聞きながら必死に戦うアンナ。クレイズの命令に無理やり従わせようとダークネスリングが彼女の身体に稲妻を走らせて強制的にダークフォルテウェイブを発射させようとする。だがアンナの残留意識はムーンライトの意思

に答える様にダークネスリングの強制命令に食らいつく。しばらくするとダークプリキュアはダークタクトを投げ捨てて腕を胸の前に組んでいき力強く振り下ろす。すると大爆発が起こりダークプリキュアの姿からアンナの姿に戻る

ムーンライト「アンナ!!!」

アンナ「お姉ちゃん……あああ……」

フェアリー「ムーンライトのアンナちゃんの思いがダークネスリングのパワーに打ち勝ったんだ!!!」

セイバー「やった!!!」

アンナは力を使い果たしたらしくその場に力なく倒れそうになるのをムーンライトが受けとめる。

クレイズ「えええい!!! 所詮は出来損ないのコピーなのね……ダークネスリングオーバードライブ!!! こうなればアンナの精神を完全に破壊してあげるわ!!!」

こんな結末は面白くないとクレイズはダークネスリングのパワーを最大限にまで解放していく。稲妻が彼女の身体に駆け巡りアンナの意識を今度こそ完全に消し去る気だ。

アンナ「あああああああ!?!!???. . . . .ぐ、お姉ちゃん……わ、私にフォルテツシモを!!!」

ムーンライト「アンナ!!! . . . でもそんな事したら貴女が……貴女のカラダが持つかどうか」

アンナ「お願い……これ以上奴の操り人形になるぐらいならお姉ちゃんの手で……だから私ごとダークネスリングを!!!」

ムーンライト「(例えダークネスリングを破壊出来てアンナをクレイズの呪縛から解放できたとしても今のアンナの体力がフォルテツシモの衝撃に耐えきれるとは限らない……もしも耐えきれなからアンナは……) 私には……出来ないわ!!! また妹の命を危険にさらすことなんて」

例えクレイズがダークネスリングを消し去れたとしてもアンナの今の体力がムーンライトの必殺技のフォルテツシモに耐えきれるかど

うかは分からない・・・もしも耐えきれなかったらアンナはもう二度と・・・ムーンライトは躊躇ためらいを捨てきれないその間にもダークネスリングが彼女のカラダを蝕んでいく。

アンナ「は、早く・・・お姉ちゃん・・・あああああああ！！！！！！私は・・・大丈夫・・・絶対に・・・だから・・・早くフォルテツシモを！！」

アンナは苦しみながらも笑みを見せてムーンライトはコレしか方法がないのなら・・・やるしかないとアンナの顔を見る。その目は覚悟を決めた視線と涙があつた。

ムーンライト「アンナ・・・くっ！！・・・集まれ花のパワー！！。ムーンタクト！！・・・プリキュア・フローラルパワーフォルテツシモ！！！！」

ムーンタクトを召喚するとムーンライトは花のパワーを集めてそのパワーを身体に光を移し替える。そしてフォルテツシモ記号をした明るい赤紫色のエネルギーを見に纏いそのままアンナに向かって突進していく。周囲には大爆発が起こり爆風が辺りを包みこんでいった。

## 第22話月の影計画編？「苦渋の決断」（後書き）

また長くなってしまった（汗）。

ムーンライトとダークプリキュアの戦いを書いていると止まらなくなってしまうのだ・・・

さて世間は新学期や新生活が始まっておりますね〜私も大学がもうすぐ始まります。正直不安で堪りませんが頑張っで行こうともいいます〜

さてさて次回はアンナのもう一つの力が開花する！！その名は・・・

・  
次回もお楽しみに

### 第23話月の影計画編？「覚醒！！聖夜の戦士」（前書き）

前回までのあらすじ

大人達を無事に救出したブロッサム、マリリン、サンシャイン。同じころムーンライト、フェアリー、セイバー達はクレイズに大量のニセウルトラマンティガを見せられフェアリーとセイバーはクレイズの罠に落ちてしまう。クレイズはゆりとアンナの戦いを強要し二人は哀しき戦いを繰り広げてしまう。戦いの中ムーンライトの呼びかけに僅かに残っていたアンナの意識がダークネスリングに打ち勝ちアンナは自分を取り戻した。だが再会も束の間でクレイズは今度はアンナの精神を完全に破壊してやろうとダークネスリングを起動させる。

アンナの最後の願いを聞き入れたムーンライトは万感の思いでフォルテウェイブを放つ。

## 第23話月の影計画編？「覚醒！！聖夜の戦士」

ダークネスリングが砕ける音「パリーン！！！」  
辺りに爆風が発生してきたムーンライトとアンナを包み込んでいる。  
ムーンライトのフォルテツシモを受けて両腕についているダークネスリングが砕け散る。それと同時にアンナは力なく後ろに仰向けに倒れてしまう。

ムーンライト「アンナ！！アンナあ！！しつかりしなさい・・・  
死なないで！！！！アンナあ！！！」

ムーンライトはアンナに近づき彼女の身体を抱き起して必死に呼びかける。アンナはつぶっていた目を開くと笑顔をムーンライトに返す。今見せられる最高の笑顔を。

アンナ「お姉ちゃん・・・泣いてるの？」

ムーンライト「アンナ・・・ゴメンなさい！！私がもつと早く貴女の事に気が付いていればこんな事には・・・」

アンナ「何で謝るの？・・・お姉ちゃんは悪くないよ」

アンナはムーンライトの手を握りながら。その手の力は弱い。

ムーンライト「いいえ。結果的に貴女に辛い思いをさせてしまった・・・ゴメンなさい。」

アンナ「いいんだよ・・・私はあの時・・・今度生まれ変わったらお姉ちゃんの妹になりたいと思ってたんだ・・・もしかしたらその思いが届いて私はダークプリキュアから『アンナ』に生まれ変わったのかもしれない・・・」

ムーンライト「アンナ・・・うう・・・」

アンナ「泣かないで・・・お姉ちゃん」

ムーンライトは涙が溢れて来た。一度失った妹が今度は自分の事を『お姉ちゃん』と呼んでくれた。あの時はお互いに敵同士だったが今回は違った。アンナは仲間として自分の元に戻ったきた。一度は奪われたが今こうして取り戻した・・・もう二度と大切な家族



を奪わせたりはしない。ムーンライトは涙の滴ををアンナの手に零す。アンナは力を振り絞ってムーンライトの頬に手を置く。

アンナ「ありがとう・・・お姉ちゃん・・・私・・・幸せだったよ・・・最後にお姉ちゃんに会えてよかった・・・あの時の夢がかなったんだもん・・・でももう私は限界みたい・・・バイバイ」  
ムーンライト「アンナ・・・ダメよ！！死んではダメよ・・・アンナあ！！！！」

アンナ「ありがとう・・・」

ムーンライトの必死にアンナの手を強く握りしめる・・・だがアンナは静かに瞳を閉じて全身の力が抜けていく。それからいくらムーンライトが彼女に呼びかけても彼女の身体を揺さぶってももう二度と彼女には届かなかった。ムーンライトは喪失感のあまりに変身を解いてゆりの姿に戻ってしまう。今度こそは取り戻せると思ったのに・・・その思いから彼女は溢れる涙がボロボロこぼれていく・・・彼女が此処まで涙を流したのはかつての相棒コロンを失った時そして父を失った時だった・・・

ゆり「アンナーーーーー！！！！」

変身を解いたゆりはアンナの顔に涙をこぼして彼女の名前を大声で叫んだ。今度こそは取り戻せると思った家族をまた失った。あの時、必ず取り戻すと誓ったのに・・・なのにこんな非情な結末があつていいのか？という思いが爆発したかのようにゆりは普段なら絶対に見せないほどの涙を流した。セイバーもフェアリーも思わず二人から目をそむけてしまう。自分達は何もできなかった・・・その悔しさと哀しさで手に拳を造って震わせて・・・その間もゆりは必死にアンナの名を呼び続けた。そしてしばらくすると自分達が来た道から足音が聞こえてきた。

大人「あ、あれは・・・ゆり、アンナちゃん・・・」

琢磨「間に合わなかった！！・・・ちくしょう！！！！！！」  
傑「くっ！！！！」

ブロッサム「そ、そんな・・・」

マリ「嘘・・・でしょ!？」

サンシャイン「アンナちゃん」

ブロッサム達が駆けつけて頃にはカプセルに閉じ込められたフェアリィとセイバー、そして横たわったアンナの腕をとり涙を流していたゆりの姿だった。そしてしばらくするとクレイズの高笑いの声が聞こえてきた。全員の敵意の目がその高笑いする狂気の科学者クレイズに向けられた事にすら気がつかないまま。

クレイズ「はははは・・・少しは面白いショーを見せてもらったわよ・・・しかしダメな子ねダークプリキュアは・・・黙って私の操り人形になればよかったものを・・・」

大人「黙れ・・・」

クレイズ「あああ？」

ブロッサム「どうしてこんな真似を・・・どうしてですか？」

クレイズ「・・・何故?その答えは簡単ね!我がサロメの科学力が全宇宙の頂点に立つためよ」

全員「!!!!!!」

クレイズ「我々は下等な地球人とは違って科学には純粋なのよ・・・科学で頂点に立つ事がサロメにとっては何よりも優先される事・・・そして我らは貴様らを倒し地球を手に入れてることでその礎を築く・・・そのためだけのした事よ」

琢磨「その為だけにアンナを利用した・・・拳句・・・こんな下らない事をさせたのか？」

マリ「ムーンライトの・・・ゆりさんの思いすら踏みにじって・・・アンタの勝手な野望の為にどれだけ二人が傷ついたと思ってるのよ!!!!!!」

クレイズ「思い?・・・そんな物のが一体何になると言うのかしら?そんな物を重んじる地球人の思想が私は理解できないわよ?・・・」

傑「そんな勝手な思いあがりの為に・・・アンナが必要だったてい

うのか？」

サンシャイン「認めない・・・そんな思い上がりは決して認めない！！！！」

クレイズ「ふん・・・なんとでも言いなさいよぉ？全ては我々サロメの為・・・ん？」

鼻で笑いながら全員を見下ろすクレイズ。しかしそれと同時にフェアリーとセイバーを閉じ込めていたカプセルが砕け散った。フェアリーの青く光る複眼が赤い光を放ちセイバーは双剣を構えている。クレイズ「・・・あのカプセルを壊すなんて・・・大した力ね？マスコドライライダーとプリキュアの力というのは」

まさかあのカプセルを砕くなんて・・・もつとデータが欲しいとクレイズは笑みを見せながら9人を見下ろすのだった。

ゆり「クレイズ！！！！」

フェアリー「アンタだけは・・・絶対に許さない！！！！」

セイバー「・・・本気で貴女を倒す・・・アンナさんの思いを無にしないために！！！！」

全員がクレイズを睨む。全員全身が震えていてクレイズを今この基地ごと奴を葬り去りたいと思っっている衝動が心を呑みこもうとしていたのだ。普段では決してみる事の出来ない戦士達の怒りの形相が・・・このまま復讐鬼と化してしまうのかと思われたその時・・・

クレイズ「ぐう！？・・・な、何？この光は・・・こ、これはあの3人の・・・何故こんな光が！？・・・ああ！！！！待て！！！！」

大人「！？（スパークレンスから光が！？）」

全員が驚いたクレイズの身体から白、赤、青の光が放たれたのだ慌てたクレイズは身体を見てみるとその光の正体に驚いた。その正体は大人、琢磨。傑から奪い取ったスパークスだった。スパークスは更にまばゆい光を放ちクレイズものとかから離れていく。

ブロッサム「あ、あれは一体？・・・え！？へ、変身が解除された！？」

えりか「な、何で？・・・ああ！！ココロパヒュームの中のプリキュ

アの種が!!」

ゆり「!?!?・・・ムーンライトの種まで・・・どうして?」

傑「(ゆりとアンナの思いに共鳴しているのか?)」

ブロッサム達が3本のスパークレンスに気を取られているとブロッサム達の変身が解除される。そしてココロパヒュームとココロポットからブロッサム、マリィン、サンシャイン、ムーンライトの種がスパークレンスと共鳴したかのように宙に浮かぶと静かにアンナの方へと向かう。

つぼみ「プリキュアの種からエネルギーが!?!」

えりか「いったい何が起るっていうの!?!」

アンナ身体の上に集まったスパークレンスとプリキュアの種は光を更に強める。そして白、赤、青、ピンク、水色、金色、銀色の光の柱が発生するとそれがアンナの身体を優しく包んでいくかのように降り注がれる。やがて彼女の身体は光の球体に包まれる。

ゆり「沢山の光がアンナの身体の中に・・・光がアンナを包んでいく」

いつき「綺麗・・・まるで聖夜の光」

光の中にアンナは取り込まれていく。全員が固唾をのむように見守る。

アンナ「此処は・・・天国?・・・そうかまた私は消えるんだね・・・闇の存在だった私が消えるのは運命か・・・でもいいかな・・・お姉ちゃんにも会えたし・・・もう思い残すことなんて何も・・・ない・・・」

アンナはまばゆい光の中で目が覚めた。見渡すと何も無い白い空間でありすぐに連想したのは天国であった。かつての記憶がよみがえってきた。自分はダークプリキュアとして人々の幸せを壊し姉のムーンライトを殺すこと<sup>サパーク</sup>で父に認めてもらおうとしていたのだ。だが結局は戦いに敗れた。しかし最後の最後では父に娘として<sup>サパーク</sup>認めてもらった。そして消える寸前に自分が願った事・・・それは姉<sup>ゆり</sup>と家族

になる事だ。本当に短い間だったが自分は姉と家族になれた・・・もう未練は何もない。このまま全てが終わるのならそれでもう十分だ。アンナはもう一度目を閉じようとした。

「消えませんか？」

アンナ「え？」

突然声が聞こえてきた。アンナは立ち上がり。その声は優しくまるで実の子供を励ます親の様な感じだった。アンナは辺りを見回すが何もない。もしかしたら天使の声か？そんな事を思いながらも一度周りを見回す。すると白い光が自分の上にありそこから声がしたのだ。

「貴女は消えない・・・貴女はかつては闇の戦士だったでも今の貴女は闇ではありません・・・貴女は自分で光を掴み今まで戦ってきたはずです。思い出してください今までの日々を・・・大切な人と過ごした時間を」

声はそうアンナに言った。アンナは思った。確かに自分は一度は闇の存在として生まれた。だが今の自分は違う。記憶を求めて今まで数多くの場所を旅してきた。そのたびに一番つらかったのは独りだった事だ。だが希望ヶ丘に来てゆり、つぼみ、えりか、いつき、大人、タクマ、傑、夕という大切な仲間に出会えた。その日々を思い出すと涙がこぼれてきた。

アンナ「じゃあ私は何処に行くの？・・・それとも・・・お姉ちゃんに・・・大切な仲間にもう一度・・・会えるの？」

「貴女の死を望まぬ者が沢山いる限りは」

仲間達の事を思うと急に死ぬのが怖くなってきた。このまま死んでしまいたくない・・・せめてもう一度だけでもいいから会いたい。

アンナのその心中をさっした声の主は優しい声で彼女を励ます

アンナ「私の死を・・・望まない・・・沢山の人？」

アンナは心当たりがあった。自分には沢山の仲間がいる。旅では一人だったがそんな自分にも仲間が出来たんだ・・・。

お花が好きでいつも自分の事を気にかけていた優しいつぼみ、ムー

ドメーカーでつぼみの大親友にしてファクションセンスは抜群のえりか、武道の達人にして太陽の様な笑顔を持つにつき、料理で皆を喜ばせてくれた大人、無愛想のだけど些細な事に気がついて皆の縁の下の力持ちの琢磨、自分にいるんな知識を教えてくれた傑、姉のゆりの友達で自分を本当の妹の様に可愛がつてくれた夕。そして自分の事を取り戻そうとボロボロになりながらも戦ってくれたただ一人の姉のゆり。

「???」貴女が望めば・・・もう一度だけ力を取り戻す事が可能ですが・・・どうしますか？」

アンナ「私は・・・もう一度戦いたい・・・もう一度皆でこの世界を守りたい!!!だからお願い、私にもう一度戦う力を私にください」

「???」分かりました。アンナ・・・キュアナイトの種を私の光に向けなさい。もう一度戦いという強い思いを込めて」

アンナ「はい!!!（お願い・・・もう一度私に力を!!!・・・もう一度お姉ちゃんと・・・皆と闘える力を!!!!!!）」

アンナは必死に祈りながらキュアナイトに変身する時に使うプリキュアの種を光に掲げた。すると光が集まり心の種に注がれるとアンナの服装も白い光のワンピース調の姿になった。プリキュアの種を見ていると黒い種は白に変わった。

アンナ「これは・・・つぼみ達と同じ。」

「???」それが貴女の新しい力・・・聖夜の力です。さあ行きなさい・・・新しい戦士よ!!!」

声の主はそう言うのと辺りを物凄く強い光で包んでいった。アンナの意識はだんだん薄れていった。

アンナを包んで光の球体は勢いよく砕き散った。そこから姿を現したのはつぼみ達がプリキュアに変身する段階のワンピース調のものと全く同じであった。

ゆり「アンナ!!!」

アンナ「皆の心が私にもう一度だけ戦士として戦うチャンスを与えた。……ありがとう」

アンナは笑顔を見せた。その笑顔にゆりだけでなくつぼみ達の心から復讐心が完全に消え去ったのだ。その後プリキュアの種がつぼみえりか、いつき、ゆりの4人の手に戻り3本のスパークレンスは光を放ってその場から消える。大人達は上着の胸の方に手を置いてみると胸ポケットにスパークレンスが入っていた。

クレイズ「き、貴様……何故生きている!?!」

クレイズは驚きが隠せなかった。死んだはずの者が生き返ったとなれば当然だ。そんなクレイズ一度睨みつけると

アンナ「私は簡単に死ねないのよ……私がかつて闇の存在だった……その過去は消しても消えるものではない……でも今の私は違う……心を持つものなら誰でも自分自身で光になれる……そう仲間が教えてくれた……だから私はもう絶対に影にはならない!!!」

アンナの手に白い光が発生するとそこからつぼみ達とはまた違うエンプレムが入った白いココロパヒュームが誕生する。

つぼみ「アレはココロパヒューム!?!」

大人「ああ。もうアンナは影なんかじゃないんだ……俺達の思いが届いたんだよ……だから……(ウルトラマンとプリキュアの力が最高の奇跡を生み出したんだ!!!)」

アンナ「クレイズ……今から私がそれを証明する。皆が私にくれた心の光の為に!!!」

アンナは新しい心の種をクレイズに見せつけてそう言う。もう二度と人形などにはならない。大切な仲間と共に戦うという決意を胸にアンナ「プリキュア・オーブンマイハート!!!」

眩く辺りを照らす白い光を放ちながらアンナは白いプリキュアの種を自分の専用アイテム「ホーリーパヒューム」にセットする。つぼみ達と同じくホーリーパヒュームから白く光る香水を先ずは腕に噴きかける。するとムーンスライトを思わせる様に左手に白のロング手

袋、右手にはフリル調のリストバンドが出現する。そしてその後今度は上半身に香水を噴きかける。するとブロッサムとマリンのデザインが元のホワイトカラーのミニスカートワンピースが身に纏われる。胸にはブロッサム、マリン、サンシャインと共通のプリキュアのクリスタルが輝きを放つ。次に髪をなびかせて色は黒髪で大和撫子を思わせるロングヘアーにへと髪型が変わる。次に耳に香水を噴きかけて金色と白でハートのエンブレムがデザインされたイヤリングを両耳に装備し最後に両脚に香水を噴きかけると足首までの長さのショートブーツで脚が包まれる。ホーリーパヒュームをタッチしてココロパフュームキャリアにしまう。

???「・・・これが私の新しい力・・・」

クレイズ「キュアナイトではない・・・貴様、何者だあ!？」

???「私はもう月の影ではない・・・そう私の名は・・・聖なる夜に輝く一輪の花!!!」

アンナが変身したその戦士はスーパーシルエットを思わせる様に全身が白一色。ナイトのカラーリングとは対象的であった。

???「キュアホーリーナイト!!!!」

ポーズをとりながら新戦士キュアホーリーナイトは純白の光を放ちながら名乗りを上げる。

今ここにウルトラマンとプリキュアの力が融合した新しい光の戦士であるキュアホーリーナイトが誕生したのだ!!!  
プリキュア



**第23話月の影計画編？「覚醒！！聖夜の戦士」**（後書き）

とうとう新戦士の誕生です。後日に設定などを発表したいと思います。いやあ〜コスチュームを考えるのが大変だった（汗）。

さて次回は新戦士が大暴れ！！（爆笑）

次回もお楽しみに

## 第24話月の影計画編？「聖夜の力」（前書き）

前回までのあらすじ

力尽きたアンナに奇跡は起きた。ティガ、アース、デュナミスの3本のスパークレンスとブロッサム、マリリン、サンシャイン、ムーンライトのプリキュアの種の力が融合し奇跡が生まれたのだった。超人とプリキュアの力が融合しアンナを闇の戦士から光の戦士へと移し替えたのだ。そしてアンナは新しい力を解放し聖夜の戦士キュアホーリーナイトへと進化する。

## 第24話月の影計画編? 「聖夜の力」

眩く照らす光に全員は目を閉じていた。光が少しずつ小さくなっていくとアンナが変身した姿もだんだんとハッキリ見えるようになってくる。キュアナイトが夜の戦士なら彼女は夜の中でも光を失わないう聖夜の戦士とも言うべきだろう。白い天使を思わせる彼女のあまりの美しい姿に全員が言葉が出ない。

ポプリ「す、凄いでしゅ・・・アレがアンナしゃんの新しい力・・・

」

コフレ「ホントですっ・・・でも心の大樹が生み出したものとは違うものかもしれないですっ!!」

つぼみ「それはどういう事なんですか?」

ゆり「私達のプリキュアの力は心の大樹によって生み出される・・・でもアンナが変身したあの姿は・・・プリキュアともう一つの何かが融合したプリキュア・・・ということ?」

シプレ「そうです。物凄いパワーを感じるですう!!!」

大人「(その力の正体がティガなんて言えるわけないか)」

いつき「その力の正体ってもしかしたら・・・あの変な神器みたいなものなのかな?」

傑「(いつき鋭いな)」

セイバー「いずれにしても・・・物凄い力を感じるわ・・・まるで邪悪なるものを一気に溶かしてしまうかのように・・・」

シプレ達は本能的に感じていた。本来は心の大樹に選ばれた人間しか変身できないしパートナーである妖精も誕生するはずだがアンナは妖精などいなかった。つまりは何か別の力がプリキュアと合体して彼女に新しい力を与えたと考えられるのだ。因みにその力の正体に気が付いているのは大人達3人だけである。

クレイズ「キュアホーリーナイト!?・・・ば、バカな・・・こん

な事があるわけが」

クレイズの声が指令室からホールに響き渡った。信じられなかった。一度は影として自分の手駒として利用するだけ利用しゴミの様に捨て去った存在が自分の目の前で生き返った上に影の力ではなくキュアホーリーナイトという光の戦士に生まれ変わった。こんな奇跡など自分の計画にはないと怒りに狂った目を見せる。

ホーリーナイト「皆、今度こそ一緒に戦おう。アイツに私達の絆の強さを見せるために!!!」

ゆり「アンナ・・・いいえ。キュアホーリーナイト!!!」

ゆりは夢ではないかと思つた。助けられなかつた筈の妹が今目の前に生き返つた。今度は敵でも他人でもなく姉妹として一緒に戦える。感激のあまりゆりは頬で涙を濡らす。すぐにそれを拭くとゆりはいつもの目に戻る。

クレイズ「一人増えたくらいで私の計画に支障などありはしない!!!・・・行けえ!!!グランドランザー、ニセウルトラマンティガタイプP、タイプS」

クレイズはホーリーナイトの誕生という希望を今すぐに破壊してやるとグランドランザーとニセウルトラマンティガのパワータイプとスカイタイプを召喚する。ホーリーナイトはやれやれと言うかのように目を細めた。

ゆり「来たわね・・・皆、いくわよ!!!」

つぼみ・えりか・いつき・セイバー『はい!!!』

フェアリー「ガッテン承知!!!」

ニセティガ2体と5体のグランドランザーの出現にゆり達は前に出る。それに合わせ大人達も前に出るのだが・・・

大人「俺達も・・・うう!!!」

身体に走る激痛のために思うように動けない。倒れそうになった所をつぼみ達に支えられる。思つた以上に傷は深く今すぐに戦う事は出来ないだろう。

フェアリー「アンタ達3人は無理しないで休んで。その傷じゃ戦

えないっしょ？」

傑「しかし・・・そうだカブトゼクター達は？」

つぼみ「・・・あの子達は重傷を負っていて此処には来られません。だから大人さん達は無理しないで安全な場所に・・・此処は私達が引き受けます！！！」

琢磨「何だつて？・・・情けねえ・・・俺達が不甲斐ないばかりにアイツらにも迷惑かけちゃったか・・・」

セイバー「そんな事ありませんよ。だから今は精一杯休んでください」

大人「すまん・・・」

ゼクター達にも重傷を負わせる事になるとは・・・3人はそうなれば今の自分達にはウルトラの力を使う以外に戦う手段はないと言う事になる。だが仕方がない。

折角スパークレンスは戻ったと言うのに・・・そう思う3人だが美味い所を取るもの野暮だと思い素直につぼみ達の言う事を聞くと大人は立ち上がる。

大人「分かった・・・必ず勝つんだぞ！！！！此処は・・・お前達に任せる！！！」

スパークレンスは戻ったがつぼみ達の前でウルトラマンに変身するわけにため大人達は大人しくその場から離れた。だが当然逃げるわけではなかった。

クレイズ「ふん・・・プリキュアとライダーだけで我々の兵器に勝てるつもりかしら？だとしたら舐めれたもんねえ！！！」

クレイズは指令室からそう嘲笑うがつぼみ達は逆にクレイズに笑みを見せる。その笑みには余裕があった。

セイバー「勝てるつもりよ？私が一度倒したロボットをわざわざ出してるんだから」

フェアリー「サロメの科学というのはワンパワーなの？」

クレイズ「何をあ！？」

えりか「アタシ達の本気を見せてあげるんだから覚悟しなさい！！」

！」

いつき「今の僕達が機械なんかで倒せるなんて思わない事だね」

つぼみ「その通りです……！」

ゆり「クレイズ……貴女の計画は私達が打ち砕く……！この世界を汚させたりはしない……！」

つぼみ達4人はそれぞれココロパヒューム、シャイニーパヒューム、ココロポットを取り出すと辺りがピンク、水色、金色、藍色の光に包まれる。

シプレ・コフレ・ポプリ『プリキュアの種いくですっ……！！！！』

つぼみ・えりか・いつき・ゆり『プリキュア・オープンマイハート……！！！！』

それぞれ赤、青、黄色、藤色の4つの種をココロパヒューム、シャイニーパヒューム、ココロポットに装填していき4色の光に包まれる。

つぼみ、えりか、いつきの3人はパヒュームで光の香水を浴びてワンピースからプリキュアのコスチュームにチェンジしていきゆりはココロポットの光に包まれると瞬時にコスチュームが変化する。光がやむ頃には4人は戦士の姿へと戻っていた。

ブロッサム「大地に咲く一輪の花キュアブロッサム……！！！」

マリン「海風に揺れる一輪の花キュアマリン……！！！」

サンシャイン「陽の光浴びる一輪の花キュアサンシャイン……！！！」

ムーンライト「月光に冴える一輪の花キュアムーンライト……！！！」

4人「ハートキャッチプリキュア……！！！」

4人の変身が完了し7人の戦士がそろつ。

シプレ「シプレ達もいくですう……！！！」

コフレ「合体ですっ……！！！！！」

ポプリ「行くでしゅう……！！！！！」

クレイズ「ふん……！！ワンパターンなのは貴様らだろつがあゝ行け！

！我が僕達よ……！！！」

クレイズの号令に合わせてグランドランザーとニセティガは一斉に

稼働を始める。シプレ達はそれぞれの相棒達に合体してマントとなる。ムーンライト、ホーリーナイトはエンブレムをタッチしてそれぞれのマントを身に纏う。そして7人の戦士達は一齐に散りニセテイガとグランドランザーを惑わす

グランドランザー1・2「ゴオオオオン！！！！」

ブロッサム「貴方達の相手は私達です！！！！」

マリリン「ちよちよいのちよいで片付けてあげるんだからあ！！！！」

グランドランザー1号機、2号機はブロッサムとマリリンが引き受ける。巨体な身体でパワーではブロッサム達は不利だが一度戦った相手に負けるわけがない。

グランドランザー1・2「ゴオオオオオオン！！！！！！」

グランドランザー1号機2号機はは先手必勝とブロッサムとマリリンに両腕から発射されるサロメ正特製のギガランチャーミサイルを発射する。だがブロッサムとマリリンは巧みな飛びでミサイルを避ける。ブロッサム「ブロッサム・シャワー！！！！」

マリリン「マリリン・シュート！！！！！！」

避けきれないミサイルをそれぞれの遠距離型攻撃で破壊していくと辺りが爆風で視界が悪くなる。グランドランザー達はレーザーで必死に二人を探すが何処にもいない。

ブロッサム・マリリン「プリキュア・ダブルインパクト！！！！！！」

二人は二機の背後からブロッサムインパクトとマリリンインパクトを合体させたプリキュア・ダブルインパクトで1号機は右腕を2号機は左腕を破壊されてしまう。流石に一度戦った相手に負けるほど2人のコンビネーションは甘くはなかった。

グランドランザー3・4・5「ギジャオオオオオン！！！！！！」

サンシャイン「貴方達の相手は私達だ！！！！」

フェアリー「一度倒した相手なんか絶対に負けないわよ！！！！！！」

セイバー「ロボット機械人形なんか私達には通用しない！！！！！！」

グランドランザー3号機、4号機、5号機はサンシャイン、フェアリー、セイバーが引き受けた。既にグランドランザーの攻撃は完全に把握している彼女達にとつては赤子の手を捻る様なもの全くもつて余裕を崩すことなどないのだった。グランドランザー3号機と4号機は先行して3人に向かつてギガキャノンを放つ。コレをまともに食らえばプリキュアとは言えひとたまりもないはずなのだが3人は避けることはなかった。グランドランザーは事後処理を確認するべく近づいてくのだが……

サンシャイン「この程度なんて朝飯前だよ」

グランドランザー3・4「!!!!!!」

爆風ががやむとそこにいたのはサンフレーザーで守りを固めていたサンシャインの姿だった。だが残りのフェアリーとセイバーの姿が見当たらない……もしやと思い後ろを振り返ったその瞬間……

フェアリー「いつもいつも計算通りに事が進むと思うなよおお!!!!!!!!」

セイバー「機械的処理……それは時に思わぬ落とし穴があるもよお!!!!!!」

グランドランザー3・4・5「!!!!!!????」

セイバーの双剣とフェアリーのレーザーピアでグランドランザーのランチャー部分とリーダー部分を破壊してしまったのだ。火花を散らしながらも3人を探すがリーダーが機能しないとまともな動きが取れないのはロボットの宿命でもあるため動きがぎこちなくなってしまう。それに合わせてサンシャインが飛びあがり得意の武術の技をグランドランザー達の装甲に叩き込んでいきダメージを蓄積させる。

二セティガP「ハアアッ!!!!!!」

二セティガS「チャアアッ!!!!!!」

ムーンライト「ティガの偽物……正直手強いわよ」



ホーリーナイト「大丈夫だよ。どれだけコピーしてもティガの偽物でしかないんだから・・・行くよ!!お姉ちゃん!!!」

ムーンライト「この姿ではムーンライトと呼びなさい!!!アンナ」  
ホーリーナイト「お姉ちゃんも今の私はホーリーナイトだよ?」

ムーンライト「そうだったわね」

ニセウルトラマンティガを相手にするをはムーンライトとホーリーナイトの二人だった。最初にニセティガを相手にした時は手も足も出なかったが今はあの時とは違い勇気100倍だ。だからこそ絶対に負けるわけがないと自信にあふれていた。対するニセティガ達も負けるつもりなど全くないと余裕を見せる。先行してスカイタイプがニセティガフリーザーで二人を固めて一気に勝負を決めようとする・・・のだが。

ホーリーナイト「そんな物は私達には効かないよ!!!ホーリー・デイスエイブルメント!!!」

ホーリーナイトがニセティガは放ったニセティガフリーザーに向かって相手の技を無力化する「ホーリーデイスエイブルメント」を放ってティガフリーザーを不発に終わらせたのだ。

ムーンライト「流石ね!!!」

ホーリーナイト「まだまだ　こんなもんじゃないよ」

二人は共に飛びあがりムーンライトとホーリーナイトの拳がニセティガ達の胸に叩き込まれ重厚なボディに傷を負わせる。

クレイズ「ば、バカなあ・・・私の作り上げた最強兵器が・・・こんな簡単に・・・何故だあ!?!」

最初の時とは比べ物にならないほど強くなっている。これほどまでのデータなど今までに見たことなかった・・・一体アイツらを此処まで強くしたのは何なんだ?・・・此処まで自分の計画を邪魔するバグは見た事がない・・・このままでは主人のダークに何を言われるか・・・下手をすれば極刑もあり得る。

????「教えてやるのか?・・・それはアイツらの心が・・・仲





3体のグランドランザーを相手していたサンシャイン、フェアリー、セイバーの3人は有利に戦いを進めていた。装甲に火花を散らせて既にグランドランザーは满身創痕の状態であり完全に流れを掴んでいたのだ。そろそろ戦いを終わらせるとサンシャインはシャイニータンバリンを召喚すると。

サンシャイン「集まれ花のパワー、シャイニータンバリン!!!」  
タンバリンを構えるとサークルをまわしてタンバリンにエネルギーを溜める。するとシャイニータンバリンの中央にヒマワリ模様が光それに合わせてクリスタルにも光がともる。エネルギーがそれに合わせて充填されタンバリンをリズムカル叩いて鳴らしていくと沢山のヒマワリが出現する。

サンシャイン「花よ舞い踊れ!!!プリキュア・ゴールドフォルテバースト!!!!!!」

沢山のヒマワリのエネルギー弾が3体のグランドランザーに放たれて身体にまとわりついて動きを封じられた。

サンシャイン「フェアリー、セイバー後は任せたよ!!!!!!」

フェアリー「サンキュ!!!サンシャイン」

セイバー「全力で行くわよ!!!!!!鳴らせ、福音の奏をリリイフシンバル!!」

バトンを渡されたフェアリーとセイバーはそれぞれの必殺技の準備を開始する。フェアリーはフェアリーレイピアをガンモードに変形させてライダーブローチを合体させ、セイバーは双剣をしまいもう一つの専用武器であるリリイフシンバルを取り出す。グランドランザー達は何とかがしてゴールドフォルテバーストの拘束を解こうとしたのだが解けるわけがない。

フェアリー「ライダーバースト!!!!!!」

電子音「RIDER BURST」

セイバー「プリキュア!スターライトチャージ・クラアアアッッシュ!!!!!!」

フェアリーの最強破壊光線のライダーバーストとセイバーの必殺技

のスターライトチャージクラッシュが合わさり3体のグランドランザーに降り注がれると爆発もせずに跡形もなく蒸発するかのよう完全に消滅したのだった。

残るはニセウルトラマンティガ2体だけとなった。

ムーンライト「はああああああつ！！！！！」

ホーリーナイト「たあああああつ！！！！！」

ティガの力をコピーしたニセティガの能力をムーンライトのムーンライトリフレクションとホーリーナイトのホーリーディスエイブルメントを活用してニセティガの強大なパワーをやり過ごし近距離での格闘技で装甲にダメージを与えていく。

ニセティガP「グウウウ！！！」

ニセティガS「ハアアア！！！」

的が小さく中々攻撃が当たらない為にエネルギーが消耗していく2体のニセティガ。データにはない力に適確な反撃方法が思いつかない。2体は自爆覚悟でそれぞれの必殺技の準備を開始する。

ムーンライト「向こうは全力で来るみたいね・・・ホーリーナイト！！！」

ホーリーナイト「うん。私達も本気で迎え撃つのみ！！！」

二人は笑顔を見せあいながら頷くとニセティガ達の方を向く。

ムーンライト「集まれ花のパワー、ムーンタクト！！！！！」

ホーリーナイト「集まれ花のパワー、ホーリーロッド！！！！！」

二人はそれぞれの専用武器を取り出す。ホーリーナイトの専用武器ホーリーロッドとは形状こそブロッサム、マリリン、ムーンライトのフラワータクトと差異はほとんど見られないのだが一番の違いはクリスタルドームがない事である。

ムーンライト「花よ輝け！！プリキュア・シルバーフォルテウェイブ！！！！！」

ムーンライトの単独での必殺技である銀色の花の形をした光弾のフォルテウェイブを発射する。

ホーリーナイト「花よ轟<sup>トウゴウ</sup>け！！プリキュア・ホーリーフォルテストー  
ム！！！！」

次にホーリーナイトのホーリーロッドに白い光のエネルギーを溜めると先端のクリスタルが輝くを強めるそして勢いよくニセティガ達にホーリーロッドを向けると白い光の衝撃波が放たれる。

ニセティガP・S「ウオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

2体のニセティガ達にフォルテウェイブとフォルテストームが直撃すると光を放って粒子状に変化して消滅していった。

クレイズ「ば、バカなあ！！！！」

ティガ「フン！！！！（さあクレイズ年貢の納め時だ！！！！）」

アース「ハアア！！！！（覚悟しろ！！！！）」

デュナミス「シャア！！！！（貴様の悪事も此処までだ・・・諦めて降伏しろ！！！！）」

3人のウルトラマンと格闘戦を繰り広げていたクレイズ。モニターをしてみるをグランドランザーとニセティガを攻略された事に戸惑いを隠せなかった。

クレイズ「くっ！！！！・・・こうなれば私が自ら！！！！」

ティガ「（待てえ！！！！）」

アース「（逃がさねえぞ）」

クレイズは隙を見てティガ達から逃亡する。ティガ達はすぐにクレイズの後を追う。そして追う事数分。

ティガ「（此処は・・・何かの格納施設か？）」

アース「（つたく・・・この工場はどれだけ広いんだか・・・物理の法則無視してないか？）」

デュナミス「（ああ・・・！！！！・・・おい！！！！アレは）」

ティガ・アース「！！！！！！！！！！」

ティガ達が見たのは体長50メートル以上はあると思われる巨大な戦闘ロボだった。

クレイズ「こうなればこの戦闘兵器クイーンエメラルダスで地球を

無差別に破壊してくれるわあ！！！指導せよ！！！！クイーンエメラルダス！！！！」

ティガ「（コイツまだこんな隠し玉を）」

アース「（ヤバイ・・・崩れるぞ！！！！）」

デュナミス「（・・・全員脱出だあ！！！！）」

クレイズはとんでもない隠し玉を隠していたのだった。クレイズが乗り込んだロボが起動するとサロメ前線基地が崩壊を始める。

遂に始まるクレイズとプリキュア、ウルトラマン、ライダーとの最終決戦。果たして勝利の女神が見方をするのは・・・・勝つのは正義か？悪か？野望か？希望か？

第24話月の影計画編？「聖夜の力」（後書き）

長くなつたなあ〜^^；明日から私も大学の授業が始まります。なので更新は遅くなるかもしれませんが。

さて次回は月の影編も終盤です！！！！

次回もお楽しみに



## 第25話月の影計画編？「奇跡の光」（前書き）

前回までの洗う字

ブロッサム達ハートキャッチメンバー、救世の戦士キュアセイバー、白銀の仮面戦士フェアリーの前にグランドランザーとニセティガは敗れ去り追いつめられたクレイズは自らが出撃するとティガ達から逃亡。

その後彼女はサロメの最終兵器の「クイーンエメラルダス」を始動させて自らがパイロットとなり乗り込んだ。

崩れ去るサロメ前線基地を一行は脱出するのだった。

## 第25話月の影計画編? 「奇跡の光」

ブロッサム「な、何ですか!??ものすごい揺れです!!!!!!」

マリン「じ、地震!?!」

ブロッサム「えええ!?!」

サンシャイン「いえコレは地震じゃない・・・この建物が崩れ始めてるんだよ!!!!!!」

辺りは急に揺れ始めると基地の壁にも亀裂が走る。マリンの言葉にブロッサムはかなり驚いた表情になっているが他の面々はこの揺れが地震にしては不自然な揺れ方である事に気が付きサンシャインが二人を落ちつかせる。

ムーンライト「とにかくここを出しましょう。早くしないと私たち自身も危ないわ!!!!!!」

フェアリー「ムーンライトに異議なし!!!!!!。早くここと出よう!!!!!!」

全員は崩れ去る前線基地を命辛々脱出を開始する。そして数分後にはブロッサム達一行はサロメの前線基地の外にへと出る。時刻は夕がたになっていて夕日が空を赤く染めていた。

ブロッサム「大人さん達は・・・無事に脱出できたでしょうか・・・」

マリン「・・・大丈夫だよ。あの3人は先に逃げてるよ・・・絶対」

ブロッサムは崩れ去るサロメ基地を眺めながら先に脱出したと思われる大人達の事が気がかりだった。

負傷してなお且つ丸腰の彼らは無事に脱出出来ているのかが不安なのは無理がない。マリンはブロッサムの心中を察して彼女を励ます。そしてしばらくするとサロメ基地は完全に崩れ去り廃工場の身形だったそれは原形をとどめてはいなかった・・・

ホーリーナイト「・・・クレイズ。お前の野望はコレで無となっ



クレイズ「はん・・・所詮はこの程度だったか・・・まったく計画の練り直しじゃないの・・・早く成果を出さなければダーク様に・・・ん？」

さんざん手こずらせてくれたなとクレイズはため息をもらしながらも次の作戦<sup>プラン</sup>を考えなければならぬと考え始めていたのだが何か様子がおかしかった・・・爆風がやむと何か大きな影が何かの前に覆いかぶさっていた。

クレイズ「な、何い!？」

その正体は巨大化したティガ、アース、デユナミスであった。3人はブロッサム達に光弾が当たる前にギリギリ自分達の身体を盾にして彼女達を守ったのだ。ブロッサム達プリキュアは飛びあがりクレイズに自分達は無傷であるという事を見せつけるかのように堂々としていた。

ブロッサム「3人ともありがとうございます。残念でしたねクレイズ。私達はこの通りピンピンしてますよ!!!」

ホーリーナイト「誰の力がこの程度だった？」

クレイズ「おのれえ!!!!!!・・・貴様ら全員叩き潰してくれるわああ!!!!!!」

なぜ此処までコイツらは自分達の障害となるのかが分からない。何がコイツらに此処までの力を与えるのだ？自分の計画は完璧だったはずだ・・・だがキュアホーリーナイトの誕生によって全ては水泡のごとく崩れ去って行った。こんな事今までなかった・・・こうなればバグすべて排除するとクレイズはリミッターが外れて吹っ切れたかのようにそう言うのと全力で叩き潰すとブロッサム達に向かう。

ホーリーナイト「今度こそお前と決着をつける。皆行くよ!!!!!!」

ブロッサム・マリリン・サンシャインムーンライト・セイバー「うん!!!!!!」

フェアリー「オツケー!!!!!!」

ティガ・アース・デユナミス「ハアアッ!!!!!!!!!!!!」

対するブロッサム達飛び上がる。今度こそ狂科学者クレイブとの因縁と決着をつけるために。

ブロッサム「行きます!!!ブロッサムインパクト!!!!!!」

マリリン「続いてマリリンダイブ!!!!!!」

一番最初に攻撃を始めたのはブロッサム・マリリンのペアであった。

クイーンエメラルダスの同体部分にブロッサムインパクト更に追撃にマリリンが飛びあがるとそのまま急降下して頭に向かって強烈な飛び蹴りを放つ。

クレイブ「ぐう!?!?.....この程度など全然効かんぞ!!!!!!喰らええええ!!!」

だがこの程度では硬い装甲には傷一つ付かずクレイブは反撃のレーザーショットを胸から放っていく。近くにマリリンがその餌食となりそうだったが.....。

アース「ハアアアっ!!!!!!」

当たる直前にアースが炎の腕でレーザーを受け止めて相殺させる。

クレイブ「ちっ!!!!!!」

マリリン「サンキュ、アース!!!」

マリリンはアースに礼を言いそのまま舞い上がりクレイブを翻弄するように飛び上がる。プリキュアとウルトラマンのコンビネーションはクレイブのデータを完全に上回っている。

サンシャイン「やああああ!!!!!!はあああっ!!!!!!」

フェアリー「ライダーストライク!!!!!!」

電子音「RIDER STRIKE」

続いてサンシャインの格闘技がクイーンエメラルダスに放たれるとバランスを崩して倒される。その隙にフェアリーの必殺技のライダーストライクがクイーンエメラルダスの腕に放たれる。

クレイブ「いつまでも調子に乗るんじゃねえ~~~~~!!!!!!」

クレイズはすぐに立ち上がるとフェアリーとサンシャインを掴みあげる。

サンシャイン「し、しまつたあ!!!!!!」

フェアリー「は、離しなさいよ!!!!!!」

クレイズ「このまま握り潰してくれるわああ!!!!!!」

腕力を込める腕。このままでは二人は潰されてしまう・・・だが

ティガ「ハアアア!!!!!!」

デュナミス「デヤアアアア!!!!!!」

その前にティガのティガスライサーとデュナミスのデュナミスセイバーがクイーンエメラルダスの腕を切り裂いて二人を脱出させる。

クレイズ「またしてもお!!!!!!」

サンシャイン「ありがとうティガ、デュナミス!!!!!!」

フェアリー「感謝するよ」

解放された2人は二人にそう言つて飛び上がる。

ホーリーナイト「たあああああ!!!!!!」

ムーンライト「はあああああ!!!!!!」

続いてムーンライトとホーリーナイトの姉妹ペアがクイーンエメラルダスの同体に同時に強烈なキックを叩きこんでやるとモニターに向かつて勝ち誇つた笑みを見せつけながらそのまま回し蹴りを叩きこんでやる。

セイバー「やあああああ!!!!!!」

最後にセイバーが双剣でクイーンエメラルダスの身体をメッタ斬りにしてやる。何度も何度も斬りつけられて次第に火花を散らしながらその場に倒れる。

クレイズ「な、何故なんだ!? 何故勝てない・・・どうして・・・こんな事など計画にはなかったはず・・・」

もう戦う力などは完全に残っていないクレイズが操るクイーンエメラルダス。もう立ち上がるのも困難でありもう少して爆散してしまつかもしれない。データは完全に抑えた筈なのに・・・どうして

?・・・そんな彼女の心中を察したブロッサムが口を開く。

ブロッサム「分かりませんか?・・・貴女がどうして私達に勝てないか。今の貴女には私達とは決定的な差があります。それが貴女の敗因です」

クレイズ「何だと?・・・この私に足りないものだと?」

この自分に足りないものがあるだと?そんな事信じられなかった。自分には科学という万能なツールがある。今までの作戦だってコレで全て自分の思い通りになってきたと言うのに・・・こんな事信じられるものか・・・

ホーリーナイト「信じられないようね?・・・でもあるのよ・・・私達と貴女の決定的な違いが・・・それは・・・信じ合える仲間がいる事」

クレイズ「仲間?」

ホーリーナイト「クレイズ。私は一度貴女に操られダークプリキュアとして・・・ムーンライトと・・・お姉ちゃんやつぼみ達という大切な仲間と敵になった・・・あの時私は貴女に無理やり戦う事を強いられた。私はもうダメだと思った。記憶が戻って折角・・・お姉ちゃんの事を思い出せたのについて思った・・・」

彼女はダークネスリングによって操られた時の事を語る。あの時自分の意識は何処かに眠っていた。暗く冷たい世界を彷徨った。そして微かに見えたのはムーンライト達と戦う自分の姿だったのだ。もうダメだと思った。全てが取り返しつかないものだと思っていた・・・

ホーリーナイト「でも・・・お姉ちゃんの声が私を導いてくれた。

そして光に包まれたあの時・・・私は知ったのよ。元々はムーンライトを殺すために生まれてき私だけど今は大切な仲間がいる。その仲間が私を助けてくれる・・・その仲間がいる限りどんな絶望の中でも絆という光を消し去ることなんて誰にも消し去れないという事を私は知ったんだ。・・・クレイズ、だから私達は貴女には絶対に負けない!!!。私達プリキュア、大人さんや琢磨さん、傑さ





はそうであると言つ様に静かにうなずいた。

セイバー「でもどうすれば・・・」

ホーリーナイト「皆の必殺技を合体させればギリギリ何とかかなりかもしれない。迷っていてもしょうがないよ。こうなったら私達の力に全てをかけよう！！！！」

ブロッサム「やりましょう！！！私達の力の凄さを見せるときです！！！！」

セイバーの言葉にホーリーナイトがそう提案した。全員の必殺技をフルパワーでぶつければクレイズの技を退ける事が出来るかもしれない。でも失敗すれば・・・1度しか無いこの方法に全てを託す。その提案に最初に賛同したのはブロッサムだった。ブロッサムは手を伸ばす。

マリン「しょーがないね・・・クレイズに見せてやるうじやん・・・

・アタシ達の本気を！！！！」

サンシャイン「皆の笑顔を・・・守るために！！！！」

セイバー「此処まで来たらもう引けないよね！！！！」

フェアリー「こうなったら全力でぶつかるしかないっしょ！！！！」

続いてマリン、サンシャイン、セイバー、フェアリーがそう言つてブロッサムの手に自分の手を重ねた。そして最後にため息をついてムーンライトが手を出した。

ムーンライト「失敗は許されないわ・・・皆、絶対に1秒たりとも手を抜いちゃだめよ？」

ホーリーナイト「勿論！！！！」

そのすぐ後に全員の手の一番上にホーリーナイトが手をのせた。全員の顔は笑顔であり不思議と緊張感や恐怖はなかったのだった。

ティガ・アース・デュナミス「ハアアア！！！！」

そして最後にブロッサム達に向かってティガ、アース、デュナミスの3人が拳を向けた。全員の意思は一つになりそれぞれ離れるとクレーイズ「あああ？死ぬ覚悟でも出来たのか？」

クレイズ「あああ？死ぬ覚悟でも出来たのか？」

ホーリーナイト「違う・・・私達は・・・貴女を止める!!!」  
クレイズ「何だと?」

ホーリーナイトの言葉を合図に全員が必殺技の準備に入った。

ティガ「ハッ!!!!!!」

アース「シヤア!!!!!!」

デュナミス「フッ!!!!!!」

ブロッサム・マリリン・サンシャイン・ムーンライト・ホーリーナイ

ト「集まれ花のパワー!!!!!!」

ブロッサム「ブロッサムタクト!!!!!!」

マリリン「マリントクト!!!!!!」

サンシャイン「シャイニータンバリン!!!!!!」

ムーンライト「ムーンタクト!!!!!!」

ホーリーナイト「ホーリーロッド!!!!!!」

フェアリー「フェアリーレイピア・ファイナルモード!!!!!!」

セイバー「鳴らせ、福音の奏をリリイフシンバル!!!!!!」

ティガ、アース、デュナミスの3人は光を集めて必殺光線の準備体制をブロッサム、マリリン、サンシャイン、ムーンライト、ホーリーナイト、フェアリーセイバーの7人はそれぞれの専用アイテムを取り出す。タクト、タンバリン、ロッド、レイピア、シンバルのそれぞれに光が集まりフルパワーのエネルギーがチャージされる。これを同時に放って融合されればクレイズのハイパーデストロイヤーを超えれると信じて

クレイズ「今更、足掻いても無駄だああ!!!!!!」  
「デストロイヤああ!!!!!!」

クレイズの砲身から大規模なエネルギー波が発射された。その威力はクレイズが言う通りティガのゼペリオン光線をはるかに凌ぐ強大な破壊力であろうと推測されるほどの超エネルギー波であった。これをまともに受けたら一たまりもない。

ティガ「ハアアアアアッ!!!!!!」

アース「デヤアアアアアアッ！！！！！」

デユナミス「タアアアアアア！！！！！！！」

ブロッサム「花よ輝けプリキュア・ピンクフォルテウェイブ！！！！！」

マリン「花よ煌けプリキュア・ブルーフォルテウェイブ！！！！！」

サンシャイン「花よ舞い踊れプリキュア・ゴールドフェルテバースト！！！！！」

ムーンライト「花よ輝けプリキュア・シルバーフェルテウェイブ！！！！！」

ホーリーナイト「花よ轟けプリキュアホーリー・フォルテストーム！！！！！」

フェアリー「ライダーバースト！！！！！」

電子音「RIDER BURST」

セイバー「プリキュア・スターライトチャージ・クラッシュ！！！！！！！！！」

それを迎え撃つべくティガのゼペリオン光線、アースのボルテックストーム、デユナミスのインブレイスバースト、ブロッサム達のフェルテウェイブ、フェアリーのライダーバース、セイバーのスターライトチャージクラッシュが合体した黄金の光線がクレイズのハイパーデストリヤーとぶつかり合い押し合う。威力は全くの互角でありどちらかが油断すれば勝負は決してしまうだろう。

ブロッサム「皆の夢を、希望を壊させたりしません！！！！！」

マリン「今までどんな困難もアタシ達は力を合わせて乗り越えてきた・・・だから今だって！！！！！」

サンシャイン「絶対にあきらめない・・・私達には譲れない大切なものがあるから！！！！！」

ムーンライト「その大切なものを守るためなら私達はどんな事でも出来る！！！！！！！」

フェアリー「大切な誰かの為に大切なモノのために頑張れる・・・それが無限の力を生み出す！！！！！！！」



除される。自分の限界を超えた疲労感は凄まじいものでありしばかりは動けなそうにない。

ティガ・アース・デュナミス『シユワアアア!!!!!!』

ティガ達もカラータイマーの点滅が激しくなっていた。プロッサム達と同じく彼らも限界を超えたのだ。最後にグーサインを送り空を見上げるとその場から飛び上がり夕暮れの空に消えていった。

つぼみ「ありがとう・・・ティガ、アース、デュナミス。助かりました」

えりか「はあ〜今回は物凄い大バトルだったよね。そしてなによりホーリーナイトの誕生!!!!!!いろんな事があった」

いつき「だね。・・・でもアンナさんのことを助ける事が出来て良かった」

つぼみ達は地面に寝っ転がり星が見える空を見上げていた。今回の戦いは物凄いものだった。だが一番のニュースはアンナがホーリーナイトとして蘇った事だろう。

アンナ「皆・・・本当にありがとう。皆のお陰で私は記憶を・・・うんうん・・・改めて皆の仲間になる事が出来たんだもん。こんなに幸せな事はないよ」

アンナは本当に感謝でいっぱいだった。自分がダークプリキュアであったとしてもつぼみ達は彼女を受け入れてくれた。今の彼女にとってそれほどの幸せはないだろう。

大人「お〜い!!!!!!」

つぼみ達が空を見上げている時に大人達の声が聞こえた来た。彼らもつぼみ達と同じくらいボロボロだ。

つぼみ「大人さん・・・無事に逃げれたんですね」

琢磨「当り前だよ。まだまだ死ぬわけにはいかんよ」

えりか「ホントだよ。アタシとの約束を守る前に死んでもらったら困ります!!!!!!」

琢磨「・・・えりか。ああ当然だ」

えりかの言葉に琢磨は顔が赤くなりながらそう言う。その様にその場にいた全員はニヤリとなると・・・

つぼみ「えりかく約束って何なんですか？」

えりか「え？・・・いやぁ・・・それはあゝ」

大人「もしかしてお前達・・・」

琢磨「な、何言ってるんだよ!？」

傑「(この二人・・・バレバレだな)」

普段弄られている分を返すようにつぼみがえりかを大人が琢磨を弄るようにからかう。そんなやり取りが続く事20分後。

大人「さてと・・・丁度いい時間だし俺の家で飯でも食ってくか？」

全員『賛成!!!!!!!!!!』

大人達は満身創痍の身体に鞭を打ちながらも戦いの打ち上げをしようとサロメ前線基地跡地を後にするのだった。今回の戦いは様々な事があった。しかし一つだけ言える事がある。姉の思いと仲間の絆は時に想わぬ奇跡を生みそれは闇の存在を光に変える事が出来るほど強大なモノになると言う事を・・・アンナが聖夜の光を手に入れた様に。

## 第25話月の影計画編? 「奇跡の光」 (後書き)

さて月の影計画編はコレにて終了です!!! 長らく見ていただいた方がありがとうございます。次回からは暫しネタ考案と「カブト×ハトプリ」を優先させようと思うので更新がしばらく遅れてしまうかもしれませんがご了承ください。

## 第26話「それぞれの休日」(前書き)

今回は気分転換にほのぼのデート&日常回です。

先に言っておきます。今回はキャラ崩壊が凄まじくなっています

.....ごめんなさい!!!!!!

ていつかすみません



## 第26話「それぞれの休日」

クレイズの激しい激闘を終わらせてから一カ月が経とうとしていた。あの激闘の後からは怪物も宇宙人も現れず大人達は久々の平和をのびのびと過ごしていた。

大人「今日は久々につぼみとデート・・・結局アレ以来まともに時間がなかったからデートどころじゃなかったんだよな・・・その分、今日はタツプリ楽しむぞ!!!」

日曜日の朝・・・大人は自宅の自室で私服に着替えていた。今日の私服はベージュ色で両サイドにポケットがついたコットンパンツ、フードがついたタートルネックパーカーの上にブラウンのジャケットというかなりラフなスタイルである。実は今日は久々につぼみとデートすることとなったのだ。

大人「さてとそろそろ時間だな。忘れ物は無し・・・おっとそうだ・・・万が一の時の為にコインも持っていくか」

大人は自室の戸締りを確認し財布、携帯電話、カブトエクステンダーの鍵をバックに入れる。そして一番忘れてはならないスパークレスをジャケットの胸ポケットにしまおうと自宅を後にしてカブトエクステンダーでつぼみとの待ち合わせの場所に向かう。

琢磨「こんなもんか?・・・うゝんデートなんぞした事ないからどういふ服装にすればいいかわからんな(汗)・・・まあいつもどうりでもいいか?・・・ていうかデートと言っのかな?今からの行動は・・・どっちかていうと荷物持ちの予感がするんだけど」

全く同じところに琢磨は自分の服で悩んでいた。というのもえりかにファッション部で使う服の材料やアクセの材料、リボンなどを一緒に買いに行かないかと誘われたのだ。琢磨はどうせ日曜は特にする事もないので軽く誘いを受けたのだがいざ考えてみると二人つきりという事はデートの誘いなのではという事に2日前に気がついたの

だ。

琢磨「店の人に勧められた物を買ってみたんだけどこう言うのってどうなんだろうな？・・・よし今日えりかに聞いてみるか。よし早く行かないと」

急いでいつもとは違う服を買ったりしたのだが正直なところ琢磨は彼女が欲しいという願望はあるが肝心なその為の経験は今まで皆無に等しいのだった。まあ今日は恐らく荷物持ちかもしれないからそんなに気張る必要もないと自分に言い聞かせて琢磨は荷支度を済ませて家を出る。

傑「何で毎週の日曜に俺はいつきと武術稽古せにやならんだの！？・・・コレで一カ月だぞ・・・ったくよあゝ(汗)」

傑は自室で独り言をぼやいていた。クレイズに捕まってから自分を鍛え直すと言う名目で傑は毎週日曜日はいつきと二人でトレーニングする羽目になっていくのだ。傑は武道系の運動は苦手な方であり普段の戦いはダークカブトのスペックで切り抜けている部分があるので生身の肉弾戦はかなり弱いのだ。そんな傑を見かねたいつきは傑を強制的に鍛えると言い出したのだ。

傑「サボったら・・・ゴールドフォルテが飛んできそうだからサボれん(滝汗)・・・はあゝ愚痴ってもしょうがない・・・此処で逃げたら男が廃るってもんだし気合入れるか」

傑はそう言っただけで立ち上がると私服に着替えて特訓に必要な物をそろえる。

傑「ライダーベルト、スポーツドリンク、タオル、着替え、財布、携帯、あとは・・・一応コインも」

高校時代に使っていたスポーツバックにライダーベルトやスパークレンスなどの特訓に必要なものをそろえて鞆に詰める。その数分後に家を出る。

大人「ちよつと早すぎたかな？・・・まあいいか」

バイクを駐車場に止めて大人はつぼみとの待ち合わせ場所の希望ヶ丘駅にいた。その3分後……。

つぼみ「すみませ〜ん!!!お待たせしました」

つぼみが現れた。服装は赤いワンピースにピンク色のジャケットといういまどきの高校生らしい可愛らしい格好だ。

大人「そんなに待つてないよ。じゃあ行こうか？」

つぼみ「はい!!!」

大人とつぼみは手をつないで歩き始める。いつの間にか自然に二人はこの動作が出来るようになっていたのだ。

大人「今日は何処行く？」

つぼみ「そうですね〜ショッピングセンターなんかどうですか？」

大人「おお〜いいね」

大人はつぼみと楽しく会話しながらもある事を思っていた。3年前は中学生だったのにたった3年という月日で彼女は一人の女性に成長している。今からも彼女はどんどん成長して外見も心もどんどん成長していく。だから今のこの時間を一番大切にすべきなのかもしれない。

えりか「遅いなあ〜……何してんだか」

グリーのショートデニムに水色の薄手のシャツの格好のえりかは琢磨との待ち合わせの場所である商店街にいた。待ち合わせの時間から既に10分は経っている。まさか忘れてるのか?なんて事を思いながらもただひたすら待つている。そしてその数十秒後に聞き覚えのある声が聞こえてきた。

琢磨「あ、いたいた。お〜〜いつ!!!」

えりか「ああ!!!遅いよもう〜何してたのさ？」

えりかはそう言って膨れた顔を見せる。琢磨はその彼女に必死に謝る。よくある彼女に頭が上がりないといった関係を見ているようである。

琢磨「悪い……渋滞で混んでてさ〜エクステンダーでも中々進め

なくて(汗)」

えりか「だつたらもつと早めに出てきてよあ。ったく」

琢磨「はい(汗)」

えりか「なんてね 実はアタシも5分くらい遅れてましたから」

だがえりかは琢磨の頬を指で付くと笑顔を見せて自分も遅れた事を告げる。それを見るなり琢磨は目が点になり固まる。

琢磨「はい!？」

えりか「えへへへ」

琢磨「人を責めておきながら己はあゝ……ふっ……まあいいか。じゃあ行くか?買い出しに」

今度は琢磨が拗ねたようにそう言うがすぐに笑顔を見せて二人は笑い合う。お互いに似た者同士でお似合いのカップルとでも言うべきであろう。

えりか「勿論 今日には久々にデザインした服も作っちゃうんだから  
琢磨さんも手伝つて。」

琢磨「ああ。いいよ!!俺もそう言うの興味あるからさ」

二人は商店街にある服の材料を買いに歩き始める。だがこの後琢磨はえりかの人使いの荒さに苦労させられるという事はまだこの段階では分からなかったのである……。

傑「お、いつきはもう来てるみたいだな。おはよ」

いつき「おはようございます傑さん!!」

傑は河原に来ていた。特訓にはこの場所が最適である事や休日にはこの場所には人があまり来ないので変身して特訓するにはもってこいな場所なのだ。因みに二人とも服装はスポーツウエアである。

傑「今日も宜しく……じゃウオームアップも兼ねて組手する?」

いつき「珍しいですね、傑さんから組手したいって言うなんて」

傑「なあゝに……此処一カ月はいつきにたいぶ鍛えられたからさ  
その成果を見せようと思つてね」

いつき「ふふ……たつた一カ月じゃボクには及びませんよ?」

傑「……どうかな？（確かにそうだけど俺だってやるときはやるってのを見せてやる）」

傑はいつきに習った武術の構えを取る。いつきも同じように構えを取るとその場に緊張した空気が流れていき春の風が吹く……。

傑「行くぞお！！！！」

先に出たのは傑だった。バスケットで鍛えたダッシュ力でいつきとの距離をいつきに縮めていくのだったが……

いつき「はああああっ！！！！」

傑「なっ！？……ぐげえっ！？」

いきなり腕を掴まれてしまつとそのまま傑は綺麗に宙を舞い投げ飛ばされてしまうのだった。やはりたつた一カ月鍛えただけでは実力はいつきに遠く及ばないのだった。

傑「い、いてててえ……」

いつき「まだまだですね。」

傑「くっそお……よしもう一本！！！」

いつき「いいですよ。どんどん来てください！！！！」

傑「おう！！！」

傑は立ち上がるともう一度いつきに向かっていく。本当ならば立場が逆かもしれないのだが傑はあの時の失態で自分がいかに弱いかを思い知らされた……だからこそ今度は絶対に脚を引っ張らない為に自分が強くならなければと思つたのだ。今日はいつても以上に自分を鍛えてもらつと傑はいつきと共に特訓に励む。

ゆり「平和ね〜」

アンナ「そうだね〜」

ゆりとアンナは自宅で優雅なティータイムを過ごしていた。此処一カ月は敵の存在を忘れてしまつたかのように平和続きであるため時間をもてあます事が多かった。

ゆり「いつまでもこの平和が続いてくれたらいいな」

ゆりは不意に本音を口走つた。メンバーの中では彼女が一番苦勞人

であるため当然と言えば当然だろう。

アンナ「そろそろお昼だね。何か買い出しに行こうか？」

ゆり「そうね。一緒に行きましょう」

アンナ「うん!!!」

ゆりとアンナは昼食の買い出しに出かけるのだった。二人の距離はクレイズ事件以来で壁がなくなり姉妹として仲良く暮らしていたのだった。あの時の哀しい別れが嘘であるかのように今の二人は幸せで一杯だったのだった。

夕「暇だなあ〜最近平和すぎて身体がなまっちゃいそうだよ……まあいい事ではあるんだけど」

夕はある公園にいた。今は独り身の彼女は日曜はする事がないとよくエクステンダーで走るのだ。綺麗な景色を眺めて心がいやされる……それが彼女のささやかな楽しみであった。

夕「……なんか怖いくらいだな……って考え過ぎか。ふう〜」  
此処一カ月は本当に平和で正直怖いくらいだった。もしかしたら密かに敵が牙をといているかもしれないという考えがよぎってしまうからだ……だが考えていても仕方ないと彼女は今は時間が許す限り色々な場所に行つて自分にはないモノを吸収したい。そう思った彼女はヘルメットを被るとエクステンダーに乗り込んでまた走り出した。

それぞれの全員は平和な時を楽しんでいた。まだこの段階ではその平和が敵の新しい作戦の準備期間だとは知らずに……。

第27話「不穏な影」(前書き)

大人達が休日を楽しんでいた頃にはダークは一ある人物とコンタクトを取りその人物の忠実なる部下が二人の男女の運命を動かす原動力となっていた・・・それはこれから起こる戦いの序章である事はまだ誰も気がつかなかった・・・

今回は次の長編に向けての準備を始めます。次回の長編は夢原さんとGASHさんのコラボです。どうかお楽しみに

## 第27話「不穏な影」

ダーク「クレイズは死んだか・・・キュアセイバーの登場のみならずダークプリキュアがまさか新しいプリキュアに覚醒するとは・・・やはりプリキュアとウルトラマンのどちらも油断ならん」とある海底の遺跡でダークはクレイズを失った事に動揺が隠せないでいた。また新しい仲間のキュアセイバーのみならずダークプリキュアがキュアホーリーナイトとして生まれ変わった事に焦りが生まれ始めていたのだ。

ダーク「このままでは邪神復活の前に奴らが私の存在に気づくのも時間の問題だな・・・仕方ない・・・本来はプライドが許さんのだが・・・奴にコンタクトを取るか」

ダークはマントを靡かせながらある場所に向かった。その場所とは全パラレルワールドの悪の組織と連絡を取る事が出来る通信室だった。

ダーク「今のところ・・・使えるのは奴の力しかないから・・・プライドが許さんが仕方あるまい」

ダークは通信を操作してあるものと連絡を取った。そして数分後にその相手と連絡が取れた。

「???」「ダーク?・・・ダークか?貴様がわざわざ私に連絡を取るとはどういう風の吹きまわしだ?」

ダーク「・・・デスリード・・・貴様に相談があつてな」

デスリード「この私にか?・・・いいだろう聞こうじゃないか」

ダークはデスリードに全てを話した。キュアセイバーの登場、ダークプリキュアがキュアホーリーナイトとして覚醒した事を。

デスリード「成程・・・つまりは傭兵が欲しいという事か?」

ダーク「そうだ・・・。キリエルとバルタン一族は邪神復活の為に今不在でな・・・今すぐに呼び戻すわけにもいかんだ。そこで・・・貴様はあらゆるパラレルワールドを行き来できるガイアメモリの



パラレルメモリがあるだろう？それを使って手頃な用兵を数名ほど此方にしばらく貸してくれると助かるのだがな・・・」

デスリード「いいだろう・・・ただし私の部下が此方のブラックリストであるウルトラマンティガの上原大人、キュアセイバーの雨牙真夜を抹殺した暁には貴様は私の手の下で働いてもらおうか？」

ダーク「ふん・・・いいだろう。ただし上手くいけば・・・の話だがな」

デスリード「大丈夫だ。貴様の期待以上の者を遣そう。」

ダーク「期待しているぞ・・・デスリード」

通信を切るとダークは玉座の間に戻るのだった。本音を言えばかなりの屈辱なのだが今は邪神復活の為に手段を選んでいる場合ではない。それに邪神さえ復活すればデスリードも含めたすべてのパラレルワールドは闇に堕ちる・・・そうなってしまえば自分だけの樂園が作れると確信している彼は玉座のまで一人高笑いをするのだった・・・。

???1「父さん、母さん・・・どうして死んでしまったんだ？

・・・なんでこんな下らなくて腐りきった世界の為に・・・どうして・・・」

???2「・・・さん」

???1「・・・。もう俺にはお前しかいない。俺は全てを失ったんだ。大切な人、自分が帰る場所も・・・今の俺にはお前しかいないんだよ」

???2「・・・さん。私も同じです。私は貴方のお父さんに生きる意味を教えてもらいました・・・だから私はあの時決めたんです。貴方の右腕になると・・・だから共にこの世界を・・・」

???1「ありがとう。なら共にこの世界を変えよう。腐りきったこの世界をぶち壊そう。腐りきった人間は殺して腐りきったこの世界を浄化しよう」

???2「・・・さん。私はずっと貴方についていきます。」

とある場所で男と女がいた。彼らは普通の人間・・・だったのだ

がある事で人間に絶望してしまつたのだ。男は全てを失つた。愛する家族も帰る家も。女はその男の父親に一度命を救われていた。その日から彼女は男の右腕として自分の人生を捧げると決めた。そんな二人はあてもなく夜のネオン街を彷徨っている……。

「……力がほしいか? ……世界を変える強大な力が」

「……? 1 「……! ? ……誰だ?」

「……? 3 「私の問いに答える。力が欲しいのかと聞いているんだ」

「……? 1 「ああ欲しいね!!! こんな腐りきつた世界をぶち壊せるほどの強大な力がな!!!」

「……? 3 「ならその望みを叶えてやろう」

声の主は薄暗い影から姿を見せた。外見は中学生くらいの少女ではあるが雰囲気はタダ者ではないと言っているかのように禍々しい才一ラを放っていた。

「……? 2 「あ、貴女は一体」

「……? 3 「私はジュニス。貴様らを同じ世界に絶望した者だ」

ジュニスと名乗つたその少女は二人に近づきながら不気味な笑みを見せてそう言った。

「……? 1 「……お前も俺達と同じ? ……どんな闇を見たつて言うんだよ?」

男はジュニスにそう問うた。自分と同じ闇を見たという彼女を睨んだが目を見て彼は理解した。この子供は想像以上に自分達が知らない何かがあると。

ジュニス「言つただろ? 世界に絶望した者つて……お前達と同じさ。話を戻すぞ。力が欲しいのならコレをやるよ」

ジュニスは4枚の携帯電話ぐらいの大きさの板の様なものを取り出した。それには蟹、蛇、サイ、エイのエンブレムがあつて色も黒、青紫、メタルブラック、紅色とカラフルなものであつた。

「……? 1 「……コレは……何だ?」

ジュニス「仮面ライダーつてのは知ってるだろ?」

「……? 1 「ああ。砂漠の使徒をプリキュアと共に壊滅させという伝

説の戦士」

ジュニス「その仮面ライダーになるためにキーアイテムだ。」

????2「コレが!?!」

????1「仮面ライダーの変身アイテム……」

ジュニス「それを一度手にしたらお前達はいつも死と隣り合わせになる……その覚悟があるのな私はお前達にコレを渡すが……どうする?」

男と女は少し考えた。だが自分達にはもう何も無いという事を知っている男はすぐに蟹のエンブレムがついた黒い板を手にとった。男は光に包まれていくと左手に鍔を持った蟹をモチーフにした金色の仮面戦士へと姿が変わった。

????1「コレが……ライダー?」

ジュニス「おめでとう。お前は仮面ライダーシザースに選ばれたよ。うだな。正直オリジナルのシザースは外れデッキだがちゃんと強化はしてあるから安心しろ」

????1 シザース「仮面ライダー……シザース……それが俺の力か?」

????2「私にも……その力を……ライダーの力を頂戴!!」  
女は青紫で蛇のエンブレムがついた板をジュニスから取る。すると女も光に進まるとエンブレムと同じ蛇をモチーフにした群青の仮面戦士へと姿が変わる。

ジュニス「へえ〜女のお前がそれに選ばれるとは……おめでとう仮面ライダー王蛇の誕生だ。」

????2 王蛇「……王蛇」

ジュニス「さて……じゃあ付いてきてもらおうか?お前達に更なる力を与えるある方の所に」

シザース「……ああ。いくぞ王蛇!!!」

王蛇「はいシザースさん!!!」

二人はジュニスが開いた闇の扉を潜る。長い道の中20分後にようやく目的地に着いたらしい。

シザース「此処は？」

ソコは一言で言うなら無限の闇。何処までも続く暗い部屋でいるのが苦しい。まるで自分達の世界とは別次元の空間であるみたいだ。ジュニス「ダーク！私だ。デスリード様から聞いているだろう？」ジュニスはそう叫ぶ。すると空間が割れたかのように亀裂が入るとそこから黒いマントを羽織りジュニス以上に禍々しい空気を放った者が出てきた。

ダーク「ようこそ。ジュニス君・・・そして私の新しい同士達よ」シザース「！？・・・貴様は？」

ダーク「私はダーク。かつてプリキュアとウルトラマンに封印された闇の戦士だ」

シザース「闇の戦士だって」

ダーク「左様。では付かぬ事を聞くようで申し訳ないが・・・君達は世界を本当に滅ぼしたいのか？」

シザース「・・・言うまでもないな。俺達はあの腐りきった世界などいらなんだよ。だからこうやってライダーの力も手にしたんだ！！下らない能書は止めてさっさと取引を始めようじゃないか」シザースはそう言ってダークに食ってかかった。もうつまらない能書は沢山だしこれ以上あの世界をそのままにしておきたくないし心から願っているからこそその発言だった。

ダーク「ふふ・・・結構だな事だ。では本題に入ろう。君達には今から闇の力を自分のモノにしてもらおうか」

ダークは笑う本題に入るべく声のトーンが低くなりながらそう言う。シザース「闇の力？」

ダーク「ライダーの力を手に入れたとはいえ所詮今の君達はただの人間だ。超人のウルトラマンやそれと大差ない力を持つプリキュアには遠く及ばん。だから君達には闇の力をマスターしてもらおう」

ダークは指を鳴らすと別の扉がシザースと王蛇の前に現れた。中は雷に似た雷音が鳴っていた。

ダーク「ただし人間が闇の力を得るのは至難の技・・・失敗すれば

命はないが・・・やるかね？」

シザース「・・・上等だよ。そこまでしなきゃ世界をぶち壊せない・  
・ならばこの命をかけてやる」

王蛇「シザースさん・・・私も共に」

王蛇は彼に近づこうとしたがそれをジュニスが止めた。

ダーク「残念だが闇の力を得る事が出来るのは一人だけだ・・・君  
には別のプログラムが用意してある」

ダークはもう一度指を鳴らすと別の扉が出てきた。どうやらこの部  
屋は一人一つであるらしい。

王蛇「そんな・・・」

シザース「心配するな。俺は必ず帰ってくる。お前と共に俺とお前  
をゴミのように捨てたあの世界に復讐する為に・・・だからお前も  
頑張れ」

王蛇「・・・はい」

二人はそれだけ言うと同時に扉を潜った。

これは大人達の平和の影で行われたいたダークの新しい計画のスタ  
ートであったとは誰も知らない。シザースと王蛇の他に新しく戦士  
が加わるのもこのすぐ後のこととなる。

第27話「不穏な影」(後書き)

新しい長編のプロローグは既に始まっています。それは近日公開されると思います。

さて次回の予定は未定です。もしかしたらいきなり長編が始まるかもしれません。

次回のお楽しみに

## 第28話「超進化細胞」

「????」コレがエボリユウ細胞・・・コレがあればボクは人間の頂点に立てる・・・ナンバー1になる事がボクの生きる価値なんだ」

ある研究所で一人の研究員が自分の身体にあるものを移植した。その学名は《エボリユウ細胞》と呼ばれている。

「????」うつ!!・・・ぐう・・・す、スゴイ力だ・・・これならば《不死》という人間が求めていたモノが手に入るかもしれない・・・そうなればボクは!!!」

男は突然変異を起こすかのように光に包まれた。それは不死などではなく変異とも呼べるものに近いものかもしれない。

大人「《警視総監行方不明》か」最近多いよな行方不明事件。一週間前はは刑務所から30人近くの囚人が一気に消えたってニュースもあつたし」

大人達は相変わらず続いている日常を過ごしていた。月の影計画事件から既に2カ月近く立つのだがアレ以来怪獣の一匹すら出てこない。静かすぎる日常に嫌な予感が隠せなかったのだが騒いでいても仕方ないため過ごせるうちに普通の生活を楽しんでいるのだった。今の彼は久々に琢磨、傑、夕を誘ってツーリングを楽しんでいて休憩所で新聞の一面記事を読んでいるのだった。最近は何獣などは出ないのだが行方不明事件が多発している。しかし自分達は刑事ではないため同行できる問題ではないため何もできない。だが自然と大人は胸騒ぎがしていた。

琢磨「その話はかなり大題的なニュースになったよな。《集団脱走か!?》って話題になった記憶があるよ」

傑「たしかどうやって脱走したか未だに謎で解明されてなかったよな?」

夕「そういえば行方不明者関連でこんな都市伝説を聞いた事あるよ」

大人・琢磨・傑『都市伝説？』

夕に3人の視線が集まる。夕はちよつと得意げの顔をしてその都市伝説について語り始めるのだった。

夕「うん。鏡に映る金色の蟹の怪人と群青の大蛇の話んだけどね。噂だで行方不明者はその蟹の名怪人と群青の蛇に鏡の世界に引き込まれて《その2匹の餌になっている》って内容んだけど実際に行方不明者が最後に言った所には必ず鏡があつて一部の鏡には血が付いていたらしいよ」

都市伝説の内容を聞いて3人は絶句してしまふ。だが大人はすぐに鼻で笑う。それを見た夕は大人にツッコミチョップを食らわす。

大人「そんなバカな。ワームの噂ならともかくそんな非科学的な都市伝説なんてデマだよデマ。大体人を食うなんてあり得ないでしょ？」

傑「俺らが《非科学的》って言うのは不自然な気がするけどな」

琢磨「違くない」

大人のセリフに琢磨と傑はそう呟く。自分達は仮面ライダーでなお且つ知り合いはプリキュアである。そんな自分達が《非科学的》という言葉を使つていいのかはかなり疑わしいのだった。

夕「確かに・・・アタシ達は言う資格ないかもね」

夕もそれに同意したようにそう言った。

大人「・・・まあいいじゃないの。それはそれでさ。よぉ〜しそろそろ休憩もこの辺で良いか？」

琢磨・傑・夕・『異議なし!!!』

休憩もそろそろいいだろうと大人は新聞をゴミ箱に捨てる。

同じころつばみ達は学校が終わり下校中の帰路を歩いていた。

えりか「最近ホントに有名だよね鏡の金色の蟹と群青の蛇の噂」

いつき「ホントだね。確か行方不明者はその蟹の怪人と蛇に食べら



れてるってやつでしょ？」

つぼみ「え、えりか、止めてくださいよ！！その話は」

明堂高等学校でもその噂はかなり有名になっていった。高校生生活を送っているつぼみたちも最近はその話題で持ちきりであった。だがつぼみは怪談話はかなり苦手でありその話を聞くたびに顔が青くなるのだった。

えりか「つぼみ、やっぱり怖いんですよ？」

つぼみの反応を見てえりかの《つぼみ弄り》が始まる。もうすでにこれは二人の日々の日課と言っていいほどお馴染みの光景になっている。

つぼみ「だ、だからそんな事ありませんってば！！！！」

いつきも次第につぼみの反応を見ていると悪戯心が出てくる。ちょっとからかってやるうと笑みを浮かべると

いつき「ああ、金色の蟹！！！」

といつきはつぼみに聞こえる様に叫ぶ。するとつぼみは顔が真っ青になって辺りを見回してしまふ。

つぼみ「えええっ！？・・・ど、何処！？・・・何処ですかいつきい！？？」

いつき「なあ、なんてね」

そう言っつていつきはつぼみのほっぺに指をむにゅと押しつけて冗談だと教えてやる。

つぼみ「うう、・・・もうお！！！！いつきまで私を弄るんですかあ！？？」

するとつぼみは怒ったようでありかに向かつてツッコミパンチをポカポカと叩き込んでいく

いつき「ごめんて・・・だから泣かないですよ」

つぼみ「謝るぐらいなら初めからしないでくださいよ！！！！」

えりか「やっぱり怖いんじゃないの」

つぼみの言い草にそうツッコムえりか。



革は実現される！！！！」

一人の男はそう言つてその場を後にした。そこには血まみれになつた衣服の様なものと血がついた鏡の破片が散らばっていたのだった。

その日の夜に希望ヶ丘で大規模な停電事故が発生していた。知らせを受けたGUTSのホリイと矢車が調査に出ていた。

矢車「職員の話では怪物が電気を吸い上げているのが目撃されたそうです」

ホリイ「んなアホな・・・電気を食う怪物なんてこのご時世に」  
調査したところ停電の原因は怪物が電気を喰らつた事によるものらしい。だがそんな事はあるとは思えないとホリイはすぐに懐疑的な態度を取る。

矢車「取り合えず他に情報もないようですし今日の所は一度引きあげましょう」

ホリイ「そやな。・・・あつ・・・すまんちよつとええか？」

矢車「はっ!?!?・・・ホリイさん!?!?」

ホリイは矢車にそれだけ言つと一人で何処かに言つてしまふのだつた。

ホリイ「リヨウスケ?リヨウスケやないか!?!?」

????「・・・ホリイ!!久しぶりだな」

ホリイが矢車から離れた理由はこう言う事だった。久々に見かけた大学時代の友達に挨拶がしたかつたのだ。声をかけられた男の名前はサナダ・リヨウスケ。ホリイとは大学時代の友人で現在は宇宙開発センターで研究員として働いている。

リヨウスケ「こんなところで何してるんだよ?・・・あ、もしかして先日の停電の調査かい?」

ホリイ「まあそんなとこや。お前こそ宇宙開発センターで頑張つてるとちやうんか?」

リヨウスケ「今日は休みだよ。研究職も大変でね中々休みが取れなくてな」

ホリイ「そうか。お互いぼちぼちつてとこやな。そやこんなとこで立ち話もなんやからその辺で飯でも食い行くか？」

リヨウスケ「そうだな。久々に積もる話もあるしな」

二人は近くの喫茶店で仕事の愚痴や学生時代の思い出など様々な事を語り合った。

ホリイ「しかしホンマに人生つて分からんわな・・・俺みたいなアホがGUTSに入れてお前は宇宙開発センターの一般職員・・・ホンマやったら逆やで」

リヨウスケ「何を言ってるんだよそれはお前の実力だよ。ボクの力がたまたまGUTSの求める力に追い付かなかっただけさ」

ホリイ「いやいや・・・んな事は」

ホリイは今でも信じられなかった。何故ならばリヨウスケはエリート中のエリートで自分なんかよりも実力は数倍も高い。故にGUTSには自分よりもリヨウスケの方が相応しいのではないかと考えていたからだった。

リヨウスケ「だけどボクは今の人生に凄く満足してるんだ。お陰で様々な研究が出来るんだからな」

ホリイ「ほう？・・・今はどんな研究をしてるんや？」

リヨウスケ「・・・誰にも言つなよ？・・・今ボクのチームは不死をテーマに研究してる」

ホリイ「はあ!？」

ホリイは思わずコーヒーを嘔きだしてしまった。まさかこのご時世で《不死》を本気で研究する輩がいてもそれが自分の友人となればそうなるのは当たり前であろう。

リヨウスケ「《不死》・・・それは人間の憧れだ。ボクは必ずそれを実現させて見せる」

ホリイ「科学もとうとうそこまで来とるんかい？・・・まあホンマに不死になれる人がおるなら押んでみたい気もするけどな」

リヨウスケ「すぐに・・・押めるさ。楽しみにしているよ」

リヨウスケは自信満々な表情でそう言った。まるで既にその研究成



## 第28話「超進化細胞」(後書き)

今回はちょっと伏線が多いです。後の長編に関連してきますので覚えていてくれると助かります。  
ではでは次回のお楽しみに

## 第29話「異形な進化」(前書き)

前回までのあらすじ

月の影計画事件から既に2カ月が経過しようとしているのだが敵の動きは全く見られない事に大人は不信感を抱いていた。そんな中で都市伝説となっている金色の蟹と群青の蛇が人を食うという噂と暗躍する謎の男の存在、  
そして現れる電気を喰らう怪物、電気を喰らう怪獣の正体は自らの身体を使って進化の実験をしてみた科学者リヨウスケが異形進化怪獣工ボリユウに変身した姿だった。

## 第29話「異形な進化」

大人「久々の怪獣か!？」

琢磨「まったく平和だと思つてたらコレかよ!!!」

傑「ブツクサ言うな。行くぞ!!!」

大人・琢磨「おう!!!」

大人「ティガあああつ!!!」

琢磨「アースううう!!!」

傑「デュナミスうう!!!」

怪獣が現れた事に気がついた3人は大急ぎで現場に向かう。現れた怪獣は電気を吸い上げながら街を破壊している。大人達はスパークレンスと取り出し空に掲げて起動させてまばゆい光に包まれながら巨人の姿に変身する。

ティガ「ハッ!!!」

アース「ジユワア!!!」

デュナミス「ヂユワ!!!」

3人は構えを見せながら怪獣を止めに向かう。

エボリユウ「ギシャアアアツ!!!」

ティガ「（コイツ今までに見たことないタイプだな・・・敵の尖兵ではないのか?）」

3人の姿を発見した電気を喰らう異形進化怪獣エボリユウはゆつくりと3人に近づく。ティガは今まで見た事のないタイプの怪獣に疑問を抱きながらも先行し取っ組みあう。力ではマルチタイプと互角で双方譲らない。

エボリユウ「グルルル!!!」

ティガ「ゲアアアアツ!？」

突然エボリユウのカラダが稲妻を帯びた様に光り出すとティガの身体に雷撃が走る。吸収した電力で相手を攻撃する事が出来るらしい。エボリユウ「キシヤアアアツ!!!」



ティガが怯んだすきに鋭い爪でティガの身体を引掻きその後パンチを食らわせてティガをふっ飛ばす。

ティガ「グウウツ（くっ・・・迂闊に近づけない）」

アース「ハッ！！（ティガは休んでろ。今度は俺達が行く。行くぞデュナミス！！）」

デュナミス「シャツ！！！（おう！！）」

傷ついたティガを休ませて続いてアースとデュナミスが向う。奴が電気を食らいソレを武器にするのならば恐らく近距離は不利。そう考えた二人はバーニングシユートとスプラッシュシユトルネードを発射して遠距離戦法に徹する・・・のだがエボリユウは吸収した電撃で空間を歪めることでバリアの様なものを発生させて二人の攻撃を防いでしまう。

デュナミス「（何っ！？）」

アース「（アイツには光線技が効かない・・・近距離では電撃を直に与え遠距離ではバリアで完璧な守り・・・コレでは手が出さない）」

「

近距離では威力の高い電撃攻撃、遠距離ではバリアで攻撃を退ける。正に攻守のバランスが取れたオールラウンドのスタイルに手を焼く3人。この圧倒的不利な状況をどう打破するのか！？

エボリユウ「ギシユウウウウウ・・・ギシユウウアウアアアアッ」

3人が作戦を考えている最中エボリユウは突然苦しみ出すと光を放つてその場から姿が消える。

ティガ「（消えた・・・）」

3人は急いで消えたエボリユウを探すため辺りを見回すが姿はどこにもなかった。やむを得ず3人は空に飛びあがり姿を消すのだった。

大人「一体何だったんだ！？今の怪獣は」

傑「分らん。」

琢磨「戦ってみて分かった事と言えば今までに出てきた怪獣とは違

う気がするんだよな。何と云うか苦しんでいるって云うか」

大人「苦しんでる？」

琢磨「ああ。なんていうか何かに苦しんでいてそれで暴れてるって云うか・・・そんな感じがしたんだけどな」

傑「何れにしても突然消えたという事はまた出現する可能性もある。だから奴を倒すまでは気を引き締めていこう」

琢磨「ああ。」

変身を解いた3人は集まりエボリユウの事について作戦会議をしていた。奴が消えたという事は今後にも出現するかの性は高い今後の方針を固めた。だがその日はエボリユウが再び出現する事はなかったのだった。

その日の夜とある町の裏通りではいつもでは不良が溜まり場となり騒ぎを起こしているはずなのだが今日は全く姿がみられない。だがしばらくすると2人の人影が見えてきた。二人の男の様な蔭であった。

???1「やつぱりあの人の・・・さんの言うとおりでな。世界は落ちると個まで落ちた」

???2「全くだな・・・君」

???1「君をつけるな!!」

一人はショートヘア、もう一人は肩までの長さのロングヘアでショートの方は君付けしてきたロングの男にそう言う。どうやら君付けされるのが嫌いらしい。

???2「そうだったね。今日でもう20人も喰わせた。そろそろボク達のモンスターもプリキュアやウルトラマンに追い付いたんじゃないかな？」

???1「そうだな・・・さんも闇の力を手に入れて今は自分のモンスターの強化に徹している。あとは彼の力であるシザースの強化が終わればもうすぐ革命が起きる。あの人を捨てた世界に復讐が出来る」

???2「あと少しでボク達の理想郷が出来るんだね」

???1「そうさ。俺達の望む争いのなく人々が平等な幸せを手に入れられる世界が!!!!」

彼らは歩きながら自分達の野望について語り合った。後ろの鏡には銀色のサイと深紅のエイが映っていた。また近くには血まみれになった何かの残骸が散らばっていたのだった

大人「《行方不明者続出・・・不良グループ関係者一斉に失踪! ?》・・・この事件まだ続いているのか・・・」

翌朝大人は大学で新聞を読んでいた。新聞の一面記事は頻繁に続いている行方不明事件関連の事であった。また最近は金色の蟹、群青の蛇の他に銀色のサイと深紅のエイが目的されたという噂も流れている。

大人「蟹と蛇の次はサイにエイって・・・もしかしたら本当にワーム以外に怪物がいてそつらが人間を・・・流石にコレだけ頻繁に行方不明事件が続いていると噂が本当って思えて怖いよな・・・考え過ぎか?・・・いや現にワームがいたし・・・くっ!!!!」

大人は頭の中で考えを纏めていた。もしも本当に夕から来た都市伝説が本当だとしたら?一連の行方不明事件者の近くには鏡があった。本当に化け物がいるとしら・・・考えただけでもぞつとした。

大人「(昨日の昼からあの怪獣は出てきていない。あの怪獣と行方不明事件は関連があるのか?・・・だがあの怪獣が人を食うとは考えにくい・・・ああ分かん!!!!)」

新聞を読みながらも彼は必死に行方不明事件と例の怪獣の関連性を考えた。だが繋がる材料など見当たらない。判断材料がなければいくらなんでも憶測にしかならずイライラが募る。

エボリユウ「ギシャウウウウウウウウツ!!!!」

大人「噂をすれば影か・・・今度は逃がさないぞ!!!!」

色々考えているところに噂をすればとも言うべきかエボリユウが姿を現した。大人は一人でも戦うとスパークレンズを取り出して起

動させてティガに変身する。

ティガ「ハッ！！！」

そのすぐ後にガッツウィング1号、2号が現れてティガのサポートに現れる。

ムナカタ「ウルトラマンティガを援護する。ホリイ、今度逃げられていいように例の発信機の準備は出来ているんだろっな？」

ホリイ「もちろんです。任せておいてください！！！」

GUTS隊も怪獣の出現に備えて準備は行ってきたのだ。そのひとつが新兵器の「モンスターキャッチャー」だ。これは怪獣に打ち込むことで例え地球の裏側に逃げようとも追跡できると言うホリイ開発の優れものである。ホリイはそれをエボリュウの身体に打ち込んで逃げられても追跡できるようにと自分は地上で待機しモンスターキャッチャーの発射準備を整えているのだった。

ティガ「ハッ！！！」

ティガは今度は逃がさないとパワータイプにチェンジしてパワーあふれる格闘線で一気に勝負を決めようとしていく。

エボリュウ「ギシャアアアアアッ！！！！！」

エボリュウは昨日の闘いと同じように電撃を放つがパワータイプの頑固なボディに傷は付けられずそのままティガのパワーパンチとブレンバスターを受ける。更にGUTS隊の総攻撃とのコンボでホリイ「ティガ・・・そのまま動きを止めておいてくれよ」。発射！！！！！」

ティガが動きを止めている隙にホリイはモンスターキャッチャーを発射した。弾丸は見事にエボリュウの身体に組み込まれいく。

ホリイ「おっしゃ！！！！！」

これで逃げられても追跡は可能になった。例え逃げられても自分達の監視からは絶対に逃れられない。

ティガ「ハアアアアアアッ！！！！！！！」

ティガはジャイアントスウィングを決めてエボリュウを弱らせる。

このまま勢いに乗りデラシウム交流を放てればこちらの勝ちだとテ

イガは勇ましい構えを見せつける。

エボリュウ「キシヤアアアアアアツ！！！！！！」

エボリュウはこのままでは不利だと察したのか雷光のような光を放つていくとそのまま姿を消した。

ティガ「クツ！！！！！！」

姿が消える前にトドメを刺そうとティガはデラシウム交流を放とうとするのだが準備が整う前に逃げられてしまう。やむを得ずティガは空に飛び上がる。

その翌日からホリイはモンスターキャッチャーでエボリュウの居場所を割り出した……。のだがその場所は何と希望ヶ丘のリゾートホテルであったのだ。

ホリイ「まさかこんな場所に怪獣なんぞ……。はあくええよなお気楽気分……。というかこんな場所に奴がおるんかあ？」

ホリイは思わずそんな愚痴をこぼしながらもモンスターキャッチャーの反応を確かめると反応が強くなっている。というよりは向こうから近づいてきている。

ホリイ「ええ！？……。向こうから来とる……。まさかこの下か！？」

ホリイは地下に奴が潜んでいるのではないかと思いつつも反応がある方向に向かっていく。どんどん反応は強くなる。どうやら此処にいる事は間違いがないらしい。

????「わっ！？」

ホリイ「あ、スンマヘン……。ってリヨウスケ！？」

リヨウスケ「何だホリイかくどうしたんだい？君も休暇……。ではないよただけど」

ホリイ「あ？……。ああくほら、例の怪獣の調査中や（な、なんでや？なんでリヨウスケから反応が出とんねん……。調子が悪いんか）

リヨウスケ「お前も大変だね。あちこち飛び回るなんて」

ホリイ「あ、ああまあな。そう言うお前は休暇か？」

リヨウスケ「・・・そう言うわけではないんだけどちょっとね・・・悪いんだけど今用事があるんだ・・・だからまたあとでな」

ホリイ「あ、ああ」

ホリイは顔がモンスターキャッチャーの故障かと機械を弄つてみたが反応は変わらない。リヨウスケの姿を見送っていると其処に見覚えのある女性が現れた。

???「リヨウスケ!!!・・・此処にいたのね。研究室に姿を見せないからどうしたのかと思ったわ。・・・ねえやっぱり病院に行こうよ。体調が悪いなら見てもらったほうが・・・」

リヨウスケ「うるさいな・・・僕の事は構わないでくれ!!!」

リヨウスケはその女性にそれだけ言うところかつかつかとホテルの中に行ってしまう。女性はため息をつきながらもその場を後にしようとしたがホリイの姿を見て驚いた顔を見るとホリイに近づく。

???「ホリイ君？ホリイ組んだよね？」

ホリイ「・・・ああっ!!!・・・サヤカ？サヤカやないか」

ホリイは思い出したようにそうだった。彼女の名前はイジユウイン・サヤカ。ホリイとリヨウスケとは大学時代からの友人でホリイとリヨウスケの思い人でもあった。

ホリイ「どうしたんや？お前までこんなところに」

サヤカ「・・・実はリヨウスケを追ってきたの」

ホリイ「はあ!？」

ホリイはわけが分からなかった。リヨウスケの話では彼は今休暇中でこの希望ヶ丘に来ている筈なのに・・・とにかく話を聞く為にホテルのレストランに二人は入った。

サヤカ「一か月前に隕石が落ちてきた事知ってるでしょ？」

ホリイ「ああ。確かその中に未知の細胞が発見されたってこつちでも話題になっただけ」

サヤカ「リヨウスケはその隕石の分析チームのチーフをしていたんだけどココ最近無断で研究室を休むようになって・・・本人は大丈夫

だつて言ってるんだけど……私、心配で……色々調べてリョウスケがココにいるって分かって……それで……」

ホリイ「……俺に会った時はそんな事一言も言っていなかったけどな」

サヤカ「最近は何んだか何かに怯えてるみたいなのよ」

ホリイ「……（アイツから反応が出たのもそれが理由か？）分かったこつちでも調べて見るわ。分かったら連絡するからもう少し此処にいてもらえるか？」

サヤカ「……分かった」

ホリイはサヤカにそう告げて本部に状況報告をするべくPD？で矢車と影山を現地に呼び寄せた。そして1時間後ウィング1号に乗ってきた矢車と影山が合流する。

矢車「どうしたんですか？わざわざ呼び寄せて」

ホリイ「……二人とも落ち着いてきてくれ。モンスターキャッチャーの反応が……サナダリョウスケっていう男からでたんやけど……」

ホリイは慎重に報告に移った。リョウスケからモンスターキャッチャーの反応が出た事を。

影山「じゃあ至急本部に連絡を」

ホリイ「あああ……待ちや！！実はそのサナダ・リョウスケは俺の大学時代からの親友なんや……だからこの事は白黒はつきりするまで本部には黙っておいてほしいんや」

影山「分かりました。では俺達を呼び寄せたのは何ですか？」

ホリイ「1か月前に落ちた隕石の研究班にリョウスケが参加してるんや……リョウスケがかかわった研究の事について2人で調べてほしいんや……頼む！！！」

矢車「分かりました。すぐに調べましょう」

そう言うことならと矢車と影山は快く引き受けた。そして2時間後2人からリョウスケが行っていた研究の内容を聞かされてホリイは驚愕した。





## 第29話「異形な進化」(後書き)

ティガは感動できる話が多いですね。エボリュウやオビゴ、うたかたのやガゾートなど今見ればかなり考えさせられるものばかりだと思います。

さて今回はナンバー1にこだわった彼の運命は……

次回のお楽しみに

### 第30話「友の最期」(前書き)

前回までのあらすじ

リヨウスケが行っていた不死をテーマにしていた研究それはエボリユウ細胞を使った恐ろしい内容であった。

エボリユウ細胞は摂取した者の能力を飛躍的に向上させるのだが致命的な欠点があり大量の電気エネルギーがなければ生命を維持できない危険極まりない代物である。

ホリイはリヨウスケが自分の身体にエボリユウ細胞を移植したのではないかと言う疑惑を強めていくのだが……

### 第30話「友の最期」

その次の日サヤカは一人でホテルの受付近くのソファで人を待っていた。しばらくするとその相手が彼女に近づいてきた。

リヨウスケ「食事の前に二人きりっで話でもしないか？」

サヤカ「・・・うん」

サヤカが待つていた相手はリヨウスケだった。リヨウスケは彼女を誘ってホテルの外に出る。二人はホテルの外に出て二人は昔の事を語り合った。

リヨウスケ「大学に入るまでの僕の人生は順調だった・・・でも僕はその後2つの挫折を味わった。1つはGUTSに入れなかった事、もう1つは・・・君に振られた事だ！！！！」

リヨウスケは突然今まで自分の中に溜めていたものをサヤカにぶつけてきた。彼の中でGUTSに入れなかったこととサヤカに振られた事は相当ショックであつたらしい。

サヤカ「リヨウスケ、それは違う！！！」

サヤカは弁解しようと声を上げた。自分はリヨウスケを振ったのではない・・・本当はサヤカもリヨウスケの事が・・・。

ホリイ「リヨウスケえ！！！！」

突然ホリイが二人のもとに走ってきた。顔は汗が噴き出ているかなり慌てた様子である。彼はリヨウスケの腕を掴む。

ホリイ「お前TPCの医療班に身体を調べてもらえ！！！」

リヨウスケ「な、何をするんだあ！？」

リヨウスケはホリイの腕を振り払うと彼から離れる。ホリイはリヨウスケを悲しさと怒りが混じったような複雑な表情で見ながらも自分の推測を彼に問う。

ホリイ「お前・・・自分の身体にエボリユウ細胞を移植したんよちやうか？・・・そのままやったら死んでしまう！！！！」

こうなつたら力づくでもリヨウスケを連れて行こうとホリイは強引

にリヨウスケに詰め寄るが彼はホリイを凄まじい怪力で投げ飛ばした。

リヨウスケ「ボクはボクは常にナンバー1でなければならなかったんだあ！！！！．．．なのにボクは．．．ボクはあ．．．」

リヨウスケは今まで自分は常に頂点に立たなければならぬというプレッシャーに押しつぶされていたのだ。勉強もスポーツも全てにおいてナンバー1になる事が彼でいられる方法だったのだ。だがそれは大学までしか通用しなかった。2つの挫折を味わった彼は悩み苦しみながらもそれから解放されようと試行錯誤してきた．．．その結果が人間を超えることこそがその道だと思いこみ自分の身体にエボリユウ細胞を移植したのだ。

リヨウスケ「うううっ．．．ナンバー1じゃないボクなんて．．．誰も誰も愛してくれない！！！！」

身体に稲妻が走りながらも苦しみ思いを吐き出すリヨウスケ。彼の中のエボリユウ細胞が暴走を始めて彼でもコントロールが出来ない状態にまで突然変異を起こし始めたのだ。

サヤカ「リヨウスケ．．．それは違うわ！！！！。ホリイ君は脚も短いし太ってるし詰まらないギャグ言うし．．．欠点だらけの人間よ．．．でも欠点だらけでも皆に愛されてる！！！！」

ホリイ「．．．．．」

サヤカは彼を説得しようとホリイを例に欠点だらけでも人は愛されると言った。ホリイは後ろで自分の悪口を言われた事に複雑な心境であった。だがその説得ももう彼には届かないのかりヨウスケは2人を睨む。

リヨウスケ「お前達に．．．ボクの気持ち分かるかあ！？」

ホリイ「分かるよ！！俺ら友達やないか！！！！」

ホリイは当然だと頷いてそう言う。だがリヨウスケは信じられないと言う目で再度2人を睨む。

リヨウスケ「．．．嘘だ．．．お前達なんかボクの気持ちが分かっただまるかあっ！！！！」

リヨウスケは走り出して2人から離れる。二人は彼を追いかけるがエボリユウ細胞で強化された彼に2人は追いつけなかった。リヨウスケを見失って数秒後にリヨウスケはエボリユウに変異し希望ヶ丘の町で暴れ始める。

ホリイ「止めるおリヨウスケ!!!」

ホリイはエボリユウとなったりリヨウスケに呼びかけるが彼はそれも聞き入れずに町を破壊し大暴れする。そしてしばらくするとガッツウイング1号が2機そして怪獣のほうに向かっていたつぼみ達も姿を見せた。

つぼみ「ホリイさん!?!?!」

ホリイ「つぼみちゃん……皆」

大人「どうしてこんなところでボツとしてるんです?早く奴を止めないと」

大人はホリイにそう食ってかかった。ホリイは何も言わなかった。いや言えなかったのだ。あの怪獣の正体は自分の親友であるとは口が裂けても。何も知らないGUTSはエボリユウに攻撃を開始する。

サヤカ「あの怪獣は……」

ホリイの代わりにサヤカが怪獣の事を離そうとしたがそれをホリイが止めると無線でウイングに乗っている他の隊員達に事の説明をした。

ホリイ「皆……聞いてくれ。アレは怪獣ちゃう。人間や……」

人間や!!!」

全員「!!!?????」

ホリイはかすれた声でそう言った。ホリイの報告を受けた面々は攻撃を躊躇する。その間にもエボリユウは町から電気を吸い取り家屋を破壊する。逃げる人々の悲痛な叫びが木霊する。

大人「……」

琢磨「大人!?!?!おい!!!」

つぼみ「待つてください．．．相手は人間なんですよ！？．．．大人さん！！！！」  
そんな面々の中で一番最初に行動を始めたのが大人だった。彼は無言のままバイクに乗りエボリリュウが暴れている方面に向かう。つぼみ達の制止を無視して彼は一人でも戦うつもりなのだ。例え相手が人間だったとしても．．．。

大人「止める！！お前に人の心が残っているのなら．．．これ以上街を壊すな．．．じゃなければ俺は．．．」

大人はエボリリュウに向かってそう叫んだ。だがエボリリュウは大人を睨むと彼に向かって電撃攻撃を放つ。

大人「．．．ダメなのか．．．ならば仕方がない！！！！」

大人はスパークレンスを取り出して天に掲げて起動させる。辺りに眩い光で包まれて彼はティガに変身する。

ティガ「ジユワア！！！！」

ティガは構えを見せながらも迷いが隠せない様子であった。相手が人間となれば当然だがこれ以上は被害は出せない。ティガは思い切つてエボリリュウを止めに入る。

エボリリュウ「ギシャアアアウウウウつ！！！！！！」

ティガ「！？」

エボリリュウは自分に向かってきたティガに電撃を浴びせながら怯ませると彼を投げ飛ばす。

ティガ「グウウつ！？．．．ハアツ！！！！」

ティガは町に被害が出ない場所に移動させようと暴れるエボリリュウを無理やり押さえつけるも力負けして身体が宙を舞うほど飛ばされる。やはり相手が人間であると理解しているが故に普段と違い思いつ切つて戦う事が出来ないティガ．．．かなりの苦戦を強いられる。

つぼみ「このままじゃティガが」

えりか「くつ．．．アタシ達にも何か出来る事があれば」



が光り始めると粒子状になって消滅をした。

ティガ「ハア、ハア、ハア、ハア、ハア………ジュワア!!!」

ティガはその場に膝をついて肩で息をする仕草を見せる。そして彼は天を見上げてそのまま空に飛び上がった。

ホリイ達はエボリュウが消滅した場所に向かうとそこには既に力尽きたリヨウスケがいた。ホリイはヘルメットをその場に落としても二度と起き上がらない彼にの近くに寄った。

ホリイ「リヨウスケ……誰にでも心の闇はあるわな。お前はその心の闇を開いてしまっただけの人間や。ゆっくり眠れよ……もう、誰とも競争せんでええんやど!!!」

ホリイは涙にかすれた声で彼に呼びながら涙で顔を濡らした。親友であるはずの自分が彼の心の闇に気が付けていればこんなことにはならなかったかもしえない。こんな辛い結果にはならなかったはずだと……ホリイは普段のひょうきんでムードメーカーであるその姿からは想像が出来ないほど泣いた。親友を助ける事が出来なかった自分への後悔と怒りがあるのかも知れない。



第30話「友の最期」（後書き）

闇へのレクイエムはその後メタモルガ編、エボリユウ細胞は自作のウルトラマンダイナへと続きます。見ていた当時は子供心ながら悲しかった印象があります。

さて今回は長編突入です!!!

ゲストは豊富ですが既に出てくる人物は決まっておりますのでそれ以外の出演はお琴驚させていただきます申し訳ありません。  
ではでは次回のお楽しみに

長編予告『地球解放軍』

シザース「パワーアップは終わったな……いくぞ我が同志たちよ」

ザビー「貴様は一体？」

シザース「俺達は地球解放軍……腐りきった世界を壊し新しい世界を作るもの」

ガイ「ボク達が新しい法律を作るんだ」

ライア「全ての人が平等な幸せを造るんだ……シザースさんが人の頂点に立つ事で」

王蛇「誰にも邪魔させないわ……私達を捨てた世界を必ず壊す……!!」

カプト「クロックアップが出来ない!？」

シザース「終わりだああつ……!!」

電子音「ファイナルベント」

カプト「うわああああああああつ……!!????」

ブロッサム「カプトおおお!!」

?????「それ以上は手出しはさせない……!!」

シザース「貴様ら・・・何者だ!？」

????2「私達は通りすがりのプリキュアよ」

????1「大いなる希望の力キュアドリーム!!!!!!」

????3「情熱の赤い炎キュアルージュ!!!!!!」

????4「青いバラは秘密のしるしミルキーローズ!!!!!!」

????5「救済と新生を司りし閃光キュアエルス!!!!!!」

????6「ピンクのハートは愛あるしるしもぎたてフレッシュ、キュアピーチ!!!!!!」

????2「平和を守護する星の輝きキュアコスミック!!!!!!」

ダーク「おのれ、後少しの所で、新手のプリキュアに邪魔された。何なんだあいつは」

ジェニス「奴の名は星川勇奈、プリキュアとしての名はキュアコスミック。デスリード様に刃向かい、さらにヤイバの世界では武藤蒼牙を助け、メデューサを倒し、世界の支配者と自称するコンカラードを倒したダークエンジェルスにとってはもつとも邪魔な存在であり、別の所で会ったキュアエルの仲間だ!そして、奴は天道総司にも面識がある」

織田「シザースの変身者の過去・・・それが今回の事件の根源だ」



デユナミス「(皆の勝利を俺達は信じてるぞ……)」

シザース「何っ!?!?……これがダークの恐れていた力か!?!」

ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト・ホリーナイト  
「シザース!……!」

ホリーナイト「憎しみに染まった」

ムーンライト「その心を」

サンシャイン「私達が」

マリン「キャッチする」

ブロッサム「私達のこの姿はティガ達の力が融合した姿。その名は  
世界に咲く奇跡の花……ハートキャッチプリキュア・ウルトラシ  
ルエット!……!」

第31話地球解放軍編「復讐の始まり 前篇」(前書き)

平和の影で行われていた闇の契約。続く行方不明事件と都市伝説と  
なっている金利の蟹の怪人、群青の蛇、銀色のサイ、深紅のエイの  
正体とは!?

世界を憎み4人の戦士の影……それを追う異世界の戦士。  
これは世界に絶望した4人の若者の悲しい復讐劇である

### 第31話地球解放軍編「復讐の始まり 前篇」

海底の玉座の間に準備を終わらせた4人の人影とダーク、そしてジエニスがいた。4人のうち2人はシザースと王蛇でありもう2人は銀色の分厚い装甲を持つサイのような戦士、もう一人は深紅色が中心で左手に英をモチーフにした盾を持つエイのような戦士であった。

ダーク「遂にこの時は来た。シザース君・・・よく闇の力を自らの物にしたな？」

シザース「あれぐらい物に出来なければ世界を変えることなど出来んさ・・・では俺達の邪魔をする敵の事を教えてもらおうか？」  
王蛇「私達の邪魔をするプリキュアと仮面ライダー・・・そしてウルトラマンの事をね」

ダーク「はっはっは・・・勇ましいなあ〜君達は」

????1「シザースさん落ち着いてください。パワーアップを果たして急ぐ気持ちは分かりますけど今は冷静になりましょう。敵にはプリキュアの中でも要注意人物のキュアセイバーもいるのですからシザース・・・そうだったなガイ」

シザースをそう諭すように話しかけたのは銀色のサイの戦士である仮面ライダーガイであった。

????2「ホントお前はいつもクールだね〜ガイ。まあお前らしいけどな」

ガイ「おほめの言葉、光栄だよライア君」

????2「だから君を付けるな!!!」

ライアと呼ばれた戦士はガイにそう怒鳴る。ダークはその姿を見て更に笑い声を上げる

ダーク「はははっ!!!・・・さてそろそろ本題に入るうか。われらの敵についてを・・・」

ダークは映像を見せて説明を始めた。敵であるブラックリストのウ

ルトラマンティガ、ウルトラマンアース、ウルトラマンデユナミス、キュアセイバー、そして砂漠の使徒緒を壊滅させたハートキャッチプリキュアの面々の説明を始めシザース達は対策を練り作戦を明朝に開始する事になった。その作戦にはジェニスも加わる事になった。シザース「パワーアップは終わったな・・・いくぞ我が同志たちよ」  
王蛇「私達は貴方についてきます」  
ガイ「全ては世界の為に」  
ライア「全ては安らぎの世界を造る為に」

織田「いいか？万引きは小さくても立派な犯罪だ。分かったら二度とするなよ！！！」

少年「ごめんなさい。」

須藤「分かればいいんだ。これは俺達が店に返しておくから君はこのまままっすぐ家に帰るんだ」

少年「はい。本当にゴメンなさい！！！」

希望ヶ丘で警察に努めている織田と須藤は万引きをした少年に叱責をしていたところだった。ゼクトが壊滅した後2人は無事警察へと再就職をしたのだった。今は違う形で自分達に出来る事を必死にしているのだ。過去に自分達が犯した罪を少しでも償う為に。

織田「つたく最近のガキはゲーム感覚でああいう事するからキリがないな」

須藤「ですね。俺達の今できる仕事はこういことなんですから頑張りましょうよ」

織田「相変わらずだね。お前は。さてとそろそろ俺達も署に戻って報告書をまとめるか？」

須藤「はい」

二人は署に戻り事務仕事を片付けようと思いき始めるのだが・・・  
少年「うわあああつ！？・・・な、何だ！？」

須藤「あの声は・・・さっきの」

織田「何かあったのかもしれない。行くぞ須藤！！！」







ーで近距離ではライダーとはいえ苦戦を強いられることになった。  
ヘラクス「ならコイツで攻めるまで。クロックアップ!!!」

電子音「CLOCK UP」

ヘラクスもザビーと同じようにベルトの右の部分をスライドさせるとザビーと同じく光速移動状態となりサイの怪人を惑わせる。

???2「グウウウウツ!!!??」

サイの怪人は得意の突進攻撃を放つのだがその前にヘラクスの姿が消える。戸惑うところにヘラクスのゼクトクナイガン・アックスモードの刃で斬りつける。

ヘラクス「おらどうしたあ!?!」

ヘラクスのアックスがサイの怪人を斬りつける。蟹の怪人とは違い防御力は低く長い攻撃には耐えられずあつという間にダウンしてしまふ。

ザビー「行くぞライダーステイング!!!」

電子音「RIDER STING」

ザビーはザビーゼクターのフルスロットルボタンを入力してゼクターニードルにエネルギーを溜める。次の瞬間飛び上がった蜂の鋭い毒針を怪人の懐に叩きこもつたのだが何者かの拳がザビーに叩きこまれて建物の壁に身体を叩きつけられてしまふ

???3「全く帰りが遅いから様子を見に来てみれば・・・パワー

ーアップをしたからと言って油断するなど言っておいたはずだが？

・・・大体なぜミラーワールドに敵引き込まない?・・・つたく」

???4「危なかった・・・」

ザビーに拳と叩きこんだ者の一人は金色の身体に左手に鉄を持った仮面戦士、もう一人は銀色の分厚いお装甲を纏った仮面戦士・・・そう仮面ライダーシザースと仮面ライダーガイだった。彼らがかばった蟹の怪人の名はボルキャンサーといいシザースの契約モンスターであったのだ。

ザビー「ぐう・・・か、仮面ライダー?」

シザース「アンタは仮面ライダーザビーだな？・・・俺のモンスターが世話になつたようだな」

ザビー「貴様は一体？」

シザース「俺の名はシザース・・・仮面ライダーシザースだ。さて早速で悪いがアンタには死んでもらおうか」

電子音「ストライクベント」

シザースはベルトの蟹の紋章がほられたカードデッキからカードを一枚抜きとるとそれを左手に装備されている甲召<sup>じゅうめい</sup>シザースバイザーに装填するとボルキャンサーの腕の缺と全く同じ武器のシザースピンチがシザースの右手に装備された。

シザース「はあああああつ！！！！！！」

シザースはそのままとび上がりザビーの黄色いボディにシザースピンチを振り下ろす。

ザビー「ま、待て・・・何故こんな真似を！？・・・ぐわああつ！！！！」

ザビーは戸惑いが隠せないままシザースピンチがボディに叩きこまれる火花を散らして大きく身体が宙に舞う。

ザビー「くっ・・・戦うしかないか。クロックアップ！！！」

シザース「そうはさせない」

電子音「スローベント」

ザビーがクロックアップを起動させる前にシザースはカードを一枚引き抜いてシザースバイザーに装填する。何も起こらないと思われたが・・・

ザビー「・・・っ！？・・・クロックアップが出来ない!？」

クロックアップが封じられてしまったのだ。シザースはすぐにもう一枚のストライクベントでもう一度シザースピンチを装備してザビーに斬りかかる。ボルキャンサーと違いシザースは戦いになれている節があり自分と互角かそれ以上の格闘センスであった。

ヘラクス「須藤！！！！」

ガイ「おつと・・・貴方の相手はボクがしよう」

電子音「ストライクベント」

ヘラクスの前に立ちふさがったガイとサイの怪人。サイの回診はメタルガラスと言うガイの契約モンスターである。ガイははカードをデッキから引き抜いて肩に装備されている突召機鎧とつちよつきがいメタルバイザーに装填すると自身の契約モンスターであるメタルガラスの頭を模したメタルホーンが装備される。

ヘラクス「きつ・・・貴様らどうしてこんな真似を!?!」

ガイ「貴方達には関係ない事です・・・なぜなら今この場で死ぬのですから!!!!」

ガイはメタルホーンの角の部分でヘラクスのボディを思いつきり突き上げる。ヘラクスが持つアックスとは相性が悪くヘラクスは一方的に責められる。接近戦では不利だと思いガンモードではガンモードでガイを狙い撃つがメタルガラスが壁になりそれも無意味に終わった

ヘラクス「ぐつ・・・なんてパワーだ・・・しかしこんなものはマスクドライダーシステムにはないはず・・・」

ガイ「当然ですよ。これはマスクドライダーシステムではないのですから・・・さあ最後です」

電子音「ファイナルベント」

ガイはヘラクスにトドメだと自分のカードデッキの紋章が描かれたカードを取り出してそれを装填する。とメタルガラスが後ろに移動してガイにもう一度メタルホーンが装備される。そしてメタルガラスの肩に足を乗せてメタルガラスに跨る様な形になるとそのままメタルホーンを構えた態勢でガイとメタルガラスはヘラクスに向かつて突進する。これぞガイの必殺技ヘビープレッシャー

ヘラクス「!?!?・・・うわあああああああああああああああああつ!!!!!!!!!!!!」

ヘラクスはヘビープレッシャーを受ける爆発に包まれる。爆炎が止むと変身が解除された織田の姿が現れて織田はその場に崩れ落ちた。

ザビー「織田さん！！！！ぐああああああああつ！！！！！！！！」

シザース「次はお前だ・・・消えろ」

電子音「ファイナルベント」

シザースはザビー虐めに飽きたとカードを一枚引き抜く。描かれていた絵柄はカードデッキの紋章と同じ蟹の絵柄であった。そのままそれを装填するとザビーの前にいたボルキヤンサーがシザースの後ろに出現する。

シザース「はああつ！！！！！！」

シザースは小さく飛び上がるとボルキヤンサーが両腕で彼を上空に飛び上がらせるとそのまま身体を丸めて超高速前転をしてザビーに体当たりを仕掛ける。これがシザースの必殺技のシザースアタックである。

ザビー「ぐう！？・・・プットオン」

電子音「PUT ON」

シザース「無駄だ・・・ はあああああああああつ！！！！！！

！！！！！！」

ザビー「うっ・・・ぐう・・・ぐああああああああああああああああつ！！！！！！」

ザビーは少しでもダメージを軽減しようと装甲が厚いマスクドフォームにプットオンする。だがこの程度ではそんなには軽減できずに爆発を起こしてしまう。爆炎、爆風が止むと変身が解除されてボロボロの姿となつた須藤の姿が現れる。

シザース「ふん・・・齒ごたえのない奴め」

ガイ「ですね。この二人を此処まで簡単に倒せるのならカプトとプリキュアも余裕でしょう」

ガイとシザースは恐らく気絶した二人を余所に自分達の力を改めて認識する。此処まで強くなれば太陽の神カプトや救世の戦士キュアセイバ も恐れるに足らないと確信したかのようにシザースは高笑

いをする。シザースとガイは変身を解除して人間の姿に戻る。ボルキアンサーとメタルゲラスは鏡の中に姿を消して鏡の世界のミラーワールドから彼らを見つめるのだった。

「????5「いよいよですね・・・太陽さん」

太陽「ああ。既に夏実と神崎・・・王蛇とライアもサソードでテストを開始している。結果報告が楽しみだな」

「????5「そうですか・・・神崎君が」

太陽「君をつけるとまた奴に怒られるぞ? 勇治」

勇治「そうでした。では我々は先に戻りましょう」

太陽「ああ。」

シザースに変身していた男の名は白夜太陽ひやくやたいようガイに変身していた男は冴島勇治さえじま ゆうじと言う名前らしい。何故彼らが此処まで世界を憎むようになったか・・・それが今回の事件のカギとなるのか?二人は闇の扉を発動させていた場所から姿を消すのだった。

第31話地球解放軍編「復讐の始まり 前篇」(後書き)

シザースとガイ強すぎたか!?!?!?!?! まあそれはボス補正と言う  
事で(汗)

さて次回は久々のサソード登場です!!!  
では次回もお楽しみに



第32話地球解放軍編？「復讐の始まり 後編」(前書き)

前回までのあらすじ

少年を助けようとした須藤と織田は都市伝説となっている金色の蟹と銀色の際に遭遇する。そしてその主であるシザースとガイに二人は敗れ去ってしまった。その頃解き同じくして群青の蛇と深紅の工イが活動を始める……



女性「は、はい!!!」

剣は女性を逃がし彼女の姿が見えなくなるのを確認すると蛇とエィを睨みつけた。

剣「貴様らが噂の蛇とエィの怪物か・・・その首を打ち取ってくれる。何故ならば俺は怪物退治においても頂点に立つ男だからな!!!」

電子音「STANDBY」

剣「変身!!!」

電子音「HENSIN」

剣の足元からサソリ型のメカのサソードゼクターが彼の手に留まる。そして彼は右手に取り出した変身アイテムサソードワイバーにサソードゼクターに装填するとヒイロカネの鎧に身体が包まれていき剣は毒牙を操る戦士仮面ライダーサソードに変身する。

サソード「行くぞ!!!」

サソードはサソードワイバーで蛇とエィの身体を斬りつけるが二匹とも皮膚はかなり固く簡単には傷をつける事が出来ない。

サソード「このまま斬りつけても埒が明かな・・・ならばキヤストオフ!!!」

電子音「CAST OFF」

サソードはサソードゼクターのサソリのしっぽの部分を持ち上げて鎧を広げさせる次に尻尾を元に戻すとサソードワイバーからエネルギーが拡散して鎧に届くと鎧も勢いと区拡散していく。

電子音「Change Scorpion」

ゴツイシルエットからシャープなシルエットにチェンジしたサソード。次にベルトの右側に手を伸ばすと・・・。

サソード「クロックアップ!!!」

電子音「CLOCK UP」

サソードは一気に決着をつけるとクロックアップで光速移動状態になると蛇とエィに無双のごと超光速剣技で斬りつける。蛇とエィはサソードを見失ったと辺りをきよろきよろと見回すのだが光速移動

状態の彼を捕捉することなど出来るわけがなく光速切りに体力を奪われて遂には倒れてしまう。

サソード「呆気なかったな？そろそろ止めだ！！！！」

電子音「RIDER SLASH」

サソードはサソードゼクターをキャストオフと同じように操作してサソードヤイバーにサソリの毒のように相手を蝕むポイズンブラッドを染み込ませた刃だからアどお切り刻んでやろうと二匹に向かって行くが二匹にサソードヤイバーを振り下ろされる前に突然蛇と同じ色をした仮面戦士がサソードヤイバーを受け止めてしまった。

サソード「き、貴様・・・何故邪魔をする！？」

????1「それは私のセリフ・・・この子に乱暴はしないでくれるかしら？」

その正体は仮面ライダー王蛇だった。王蛇はサソードヤイバを受けとまたままキックで蹴り飛ばしてしまう。

サソード「貴様・・・何者だ！？」

????2「俺達はアンタと同じ仮面ライダーだ・・・仮面ライダー

サソードこと神代剣さん」

サソード「！？・・・もう1人？・・・貴様ら何故俺の事を？」

後ろから現れたには仮面ライダーライアだった。まるで自分の事を狙っていたかのような言いくさに動揺するサソード。

王蛇「簡単な事・・・貴方で私達の能力をテストするだけよ？私達のパワーアップが成功したかどうかをね！！！」

ライア「そう言う事だ・・・だからアンタには悪いがココで痛い目を見てもらう！！！！」

サソード「貴様ら・・・俺を舐めるなあっ！！！！」

ブライドが高いサソードは王蛇とライアに向かって剣を振り下ろすが二人の身体にかすりもしない。ならばクロックアップで決めるとベルトに手を伸ばす。それを見た王蛇はカードデッキからカードを引き抜く。



ライア「流石ジエニスがくれたライダーシステムはものすごい力だ・  
・これさえあれば俺達は・・・」

王蛇「ライア。行くわよ」

ライア「おい、コイツはどうすんだよ？まだ生きてるぞ？」

王蛇「いいのよそれで。これはあくまでも私達の力の最終テストな  
んだから」

王蛇は変身を解くと黒髪のロングヘアの容姿端麗の美女の姿が現  
れた。

ライア「ったく・・相変わらずだな」夏実なつみさんは

夏実「そう言う貴方もね耕輔こうすけ？」

女の名前は山梨夏実やまなし なつみ、男は神崎耕輔かみさき こうすけと言う名前らしい。変身を解除  
した後ベノスネーカーとライアの契約モンスターであるエビルダイ  
バーは鏡の中に消える。そのすぐ後に2人も闇の扉を発動させると  
姿が消えるのだった。

その翌日・・・

大人「須藤さん、織田さん、それに剣が襲われた!？」

矢車「ああ。3人とも重傷だ」

つぼみ「そんな・・どうして？」

病院に大人、つぼみ、矢車が来ていた。3人ともかなりの重傷で予  
断を許さない状態であるそうである。

大人「あの3人をいとも簡単にあそこまで追い詰めるなんて・・・  
・一体誰があんな真似を!？」

矢車「見つかった時に3人は呟いていた事があるそうだ。須藤と織  
田は金色の蟹と銀色のサイ・・神代は群青の蛇と深紅のエイ・・  
と」

大人「それって・・都市伝説の行方不明事件の元凶だって言わ  
れてる」

つぼみ「それは空想の産物じゃ!？」

矢車「強ちそうでもないらしい。GUTSでも行方不明事件は調査していたんだが一部のカメラに……映っていたんだよ鏡に映る金色の蟹の怪人が」

大人「なっ!?!?……じゃあ都市伝説は……本当で人を食う怪人が……いるってことですか?」

矢車「そこまでは何とも言えない。だがその可能性も否定できん。二人とも今後は注意してくれ。この事は俺と影山、そしてお前達ライダーとプリキュアしか知りえない情報だ。もしも何か見たら俺と影山に報告してくれ。」

大人「分かりました。……つぼみ今日の所は帰ろう」  
つぼみ「はい」

矢車「気を付けてな。まあお前たちなら心配はいらんかもしれないが……念には念を入れておけ」

矢車を残して大人とつぼみは状況報告をえりか達にしようと植物園に向かうのだった。だがこの時すでに復讐鬼となった4人の牙が2人に向けられていると言う事はまだ気がつかなかったのだった。

シザース「テストは終わりだ……プリキュアとライダー、そして最大の敵ウルトラマン狩りの始まりだあっ!!!!!!」

シザース、王蛇、ガイ、ライアの4人はミラーワールドで先ずはつぼみ、大人にターゲットを絞り狙いを定めるのだった。だが彼らも1つ見落としている事があった。ジェニスを追ってきた者の影が既にこの世界にいますと言う事を。

第32話地球解放軍編？「復讐の始まり 後編」(後書き)

言っておきますが私はサソードは好きです^^；。酷い事してしま  
ってゴメンぼっちゃま!!!!!!

さて次回はいよいよ彼女達の登場と闘いが始まる  
次回のお楽しみに



### 第33話地球解放軍編？「脅威の鉄と新しい戦士」（前書き）

前回までのあらすじ

何者かに襲われた須藤達は重傷をあい病院に搬送された。様子を見に来た大人、つぼみは矢車から都市伝説はただの噂ではないかもしれないと言う推測を聞く。

病院の帰り道に自分達の能力をテストが終わりいよいよ本番だとシザース達の牙が大人、つぼみの2人に向けられた……。

### 第33話地球解放軍編？「脅威の鉄と新しい戦士」

病院の帰り道を大人とつぼみは警戒しながら歩いていた。まさか都市伝説が本当であつて蟹の怪人が実在していたなんて考えがつかないから当然と言えば当然だ

大人「まさか本当にワーム以外の怪人がいたなんて・・・くっそ！これは絶対に陰で暗躍する何かがいるとしか思えない・・・俺達が平和ボケしてる間にも人が襲われていたと言う事になる・・・くっ！！！！」

つぼみ「信じたくはありませんけど・・・そうなりますね」

クレイズ事件以来不気味なぐらい平和が続いていたがそれも全ては新しい敵の準備の時間であつて決して本当の意味での平和ではなかったのだ。つまり自分達は偽りの平和という甘い汁を吸わされたことで裏で起きていた怪奇事件をカモフラージュされたのだ・・・大人とつぼみは悔しくて表情が暗かった。

「???」暗い表情だな？仮面ライダーカブト・・・上原大人。キユアプロツサム・・・花咲つぼみ」

植物園に戻ろうとしていた彼らに4人の影が近づいてきた・・・その正体は太陽率いる地球解放軍だった。

大人「!?!?!?」何だお前達!?!?」

夏実「ふふ・・・知ってるかしら？最近人が消えるっていう都市伝説を」

夏実が笑いながらそう言うにつぼみと大人はハツとした顔になった。今の子場で都市伝説の事を離されたら思いつく事は一つしかない。須藤達を襲った輩は今自分達の目の前にいる彼らしかない。

つぼみ「!!!」まさか貴方達が須藤さん達を?」

勇治「須藤?・・・ああ、仮面ライダーザビー達のことね・・・そうだ。やったのはボク達だ」

勇治は思い出したようにそう言った。何分テストで彼らを襲撃した

だけであり一々意識しないから当然かもしれないがその態度に大人は怒りを見せた。

大人「お前達がああ3人にあんな事を・・・何でだよ？ああ3人が何をしたって言うんだ!？」

太陽「ふん・・・邪魔者を消そうとして何が悪い?・・・奴らは俺達の力の実験台に過ぎん。そしてテストは終わった。次のターゲットはカブトの力を持つ上原大人・・・ハートキャッチプリキュアの一人である花咲つぼみ・・・貴様らと言う事だ!!!!!!」

太陽達はポケットからカードデッキと手鏡を取り出だして手鏡にカードデッキを向ける。すると4人の腰に銀色のベルトが巻かれる。

大人達が使うライダーベルトとは形が違う。

太陽・夏実・勇治・耕輔「変身!!!!!!」

4人はそれぞれ変身ポーズをとるとカードデッキをベルトに装填すると人間の姿から仮面戦士へと姿が変わる。

大人「仮面ライダー!？」

シザース「驚いたか?貴様らが変身するマスクドライダーシステムとは別のライダーだ。」

つぼみ「マスクドライダーシステムじゃないんですか!？」

つぼみと大人は驚いた。この世界ではZECTで造られたマスクドライダーシステムによって変身するのが仮面ライダーと呼ばれている。だがシザース達が変身したライダーはマスクドライダーシステムとは全く違うものであるらしい。

大人「くっ!!!!!!・・・つぼみ応戦するぞ!!!!!!」

つぼみ「はい!!。シプレ!!!!!!」

シプレ「はいですっ!!!!!!」

シザース達に応戦するべく大人はカブトゼクターを呼び寄せる。つぼみはココロパヒュームを取り出してシプレを呼び出す。

その次の瞬間つぼみはピンク色の光に包まれて私服からプリキュアのコスチュームに変わる前のワンピース調の光の衣装に変わる。

シプレ「プリキュアの種いくですっ!!!!!!!!!!!!」

つぼみ「プリキュア・オープンマイハート!!!!」

つぼみはシプレから召還された赤いプリキュアの種を受け取るとコロパヒュームにそれを装填して自分の身体に光の香水を噴きかけると上から順番に衣装が変わり最後に髪の色が赤から明るいピンク色になりそれをリボンで止めてポニーテールとなり変身が完了する。ブロッサム「大地に咲く一輪の花キュアブロッサム!!!!」

大人「変身!!!!」

続いて大人がカブトゼクターをライダーベルトに装填してヒイロカネの鎧に包まれる。その後彼はカブトゼクターの角を倒す。

カブト「キャストオフ!!!!」

電子音「CAST OFF CHANGE BEETLE」

カブト「光を支配せし太陽の神、仮面ライダーカブト!!!!」

シザース「出るボルキャンサー!!!!」

シザースはアドベントのカードを一枚引き抜くと近くにあった鏡から契約モンスターのボルキャンサーを呼び寄せる。

カブト「こ、コイツが金色の蟹の怪人か？」

現れたボルキャンサーの姿を見てカブトとブロッサムはすぐに理解が出来たこの怪人が都市伝説で噂された蟹の怪人であると。

シザース「ふふふつ。ボルキャンサーを見て驚いているようだな？ 貴様らが知っている都市伝説は実在する。今まで行方不明となった人間は俺達の契約モンスターの血となり肉となったのだよ。こいつ等の餌として捕食させることだな!!!!」

ブロッサム「どうしてそんな真似を!? 人を餌にするなんて……」

シザースは淡々とした口調で真相を語った。ボルキャンサーの金の鍔が光を見せつけながら唸り声を上げる中カブトとブロッサムは信じられないと言う表情になった。

王蛇「そんなに驚く事ないじゃないの? …私達は腐りきった人間を餌にしただけ」

ライア「その通りさ……今この世界は堕ちるとこまで堕ちた。それは人も同じ!!!」

シザースに続いて王蛇とライアが続いて語る。自分達が行った事をまるで正義の裁きだとも言うかのように。

ガイ「怒っているようだね?……でもボク達は全く悪気はない。いらぬ人間を殺して何が悪いんだい?現に犯罪者や非行に走る人間がどんどん減っているのもボク達のおかげなんだよ?」

カブトは拳を震わせながら怒りで震えているその様子を見たガイは挑発がましくそう言った。そのセリフにカブトは完全に怒りが爆発した。

カブト「ふざけるなああつ!!!!!!人を怪物の餌にした揚句、須藤さん達にあんなけがをさせやがって……絶対に許さん!!!」

カブトはクナイガンを構えるとシザースと王邪にターゲツトを絞り突進するがシザースと王蛇はカブトのクナイガンを紙一重でかわして余裕を見せつける

カブト「くつ!!!……」

アックスではダメだとカブトはクナイガンの鞘を抜いてカブトはクナイモードに変形させてカブトはシザースと王邪に斬りかかる。がシザースはシザースバイザーでそれを受け止めてしまった。

シザース「ふん……許せないか。それは俺達も言える事だ!!!」  
カブト「何!?!……うわっ!?!」

王蛇「はあああつ!!!!……私達だつて望んではなかった……でも世界を元に戻すにはこうするしかない!!!!」

カブト「ぐはあつ!?!……くつ!!!」

シザースの言葉に一瞬動きが止まるカブト。そのすきにシザースはシザースバイサーでカブトのクナイガンを受け止めその体制でキックでカブトを蹴り飛ばすを。そして次に王蛇がカブトを立たせてカブトの赤いボディにパンチを見舞わせる。

ブロッサム「カブト!!!!!!」

ライア「お〜つと行かせないぜ？・・・お前の相手は俺達だ」

電子音「スウィングベント」

ガイ「君達は全員揃うと脅威だがバラバラにしてしまえばそれも他愛のない。だからココで消えてもらおうか」

電子音「ストライクベント」

ブロッサム「そんなことさせません！！！」

ライア「ほざいてな！！！！。おらあああつ！！！！！」

ガイ「ふんっ！！！」

ライアはエビルウィップ、ガイはメタルホーンを装備してブロッサムに見に襲いかかる。

ブロッサム「ふっ・・・たあああつ！！！！！」

ブロッサムはライアのエビルウィップを身軽な動きで避ける。続いてきたメタルホーンの上に乗る様にして攻撃を受け流すとガイとライアの後ろを取る。

ブロッサム「ブロッサムシャワー！！！！！」

後ろから遠距離攻撃のブロッサムシャワーをライアとガイに浴びせる。流石の2人もスピードではブロッサムを下回り彼女の動きに翻弄しようとするが。

ガイ「させないよ」

電子音「コンファインベント」

ガイはさせるものかとカードを素早く一枚引き抜いてメタルバイザーにベントインするとブロッサムのブロッサムシャワーはガイ達に当たる前に跡形もなく消滅してしまった。

ブロッサム「そ、そんな！！！」

ガイ「ボク達にはこういう能力もあるんだよ・・・だから君達はボク達に決して勝てない」

ガイは勝ち誇ったような声を上げるとブロッサムとの距離をあつという間に縮めてメタルホーンで殴りつけた。

ブロッサム「きゃああつ！！？」

ライア「大人しく俺達にやられれば楽だぜ？はあああつ！！！！！」

ブロッサム「あああああつ！！！！」  
続いてライアのエビルウィップがブロッサムの叩きつけられるとブロッサムは飛ばされてしまう。ブロッサムは受け身と取って体勢を立て直そうと距離を取る為に離れる。

カプト「がはっ！？」

シザース「弱い・・・弱すぎるぞ！！！太陽の神と言うのもこの程度の實力か？」

カプトはシザースと王蛇と激闘を繰り広げていた。しかし形勢はカプトではなくシザース達に傾いている。二人は戦いになれているらしくカプトの攻撃を着実に受け流し彼にのみダメージが残るように考えた戦いをするためでもあるがそれ以前にカプトは敵が人間であることに戸惑いを隠せずに本気の闘いが出来ない事が大きな原因であった

カプト「黙れ・・・人を餌にした力なんかには俺は負けない！！。  
クロックアップ」

電子音「CLOCK UP」

シザース「やっと本気になったか？」

カプトはクロックアップで一気に決めようと光速移動状態になりクナイガンでシザースと王蛇を斬りつける。だがシザースはカプトのクナイガンの斬撃を受け流すどころかそれを受け続ける。何度も着られるが彼はよろける素振りの一つすら見せないのだ。

電子音「CLOCK OVER」

カプト「はあ、はあ、はあ、・・・ば、バカな！？クナイガンの斬撃が効かないのか！？」

シザース「残念だったな？俺の・・・いやシザースの力は契約モンスターであるボルキャンサーの防御力を受け継いでいる・・・故に物理的な攻撃では100人近くの餌を喰らって強化されたこのシザースの鎧に傷を負わせることなど出来んと言う事だ。はああああつ！！！！！！」

元々シザースはボルキャンサーの特性を受け継いだライダーであり元の防御力はかなり高いのだがこのシザースが操るボルキャンサーは人を何十人も食わせている為ポテンシャルは元々の数値の数倍にも跳ね上がっている。つまり今のシザースの防御力は鉄壁に等しいのだ。シザースはカブトのクナイガンでシザースピンチで受け止めるともうひとつの銃であるシザースバイザーで斬りつけて怯ませる首をシザースピンチで挟む

シザース「終わりだな？仮面ライダーカブト」

王蛇「これで・・・一人減りましたね」

カブト「くっ・・・」

カブトは完全に動きを封じられてしまい最早此処までかと思っただその時。

電子音「RIDER BURST」

シザース「!?!?!ちっ!!!」

シザースに見覚えのあるビーム砲撃が直撃するとシザースは怯みカブトを解放してしまう。その隙にカブトはガタツクに救出された。

カブト「ガタツク!?!?!そして今の破壊力の攻撃ははライダーバースト?」

フェアリー「危なかったね〜大丈夫?」

ガタツク「帰りが遅いから心配になってきてみて正解だったな」

ダークカブト「間に合っってよかった」

カブトを助けたガタツクに続きフェアリー、ダークカブトが姿を見せた。どうやら大人達の帰りが遅く様子を見に来たらしい。

シザース「わざわざそちらから顔を出すとは効率がいい」

王蛇「そうですね。ただ楽しみがなくなると考えると少し残念ですがね」

シザースと王蛇は探す手間が省けたと助太刀に来たガタツク達を睨む。ガタツク達はその視線に気がつきなりそれぞれの専用武器を取り出して構える。

ガタツク「お前達がどんな理由があるかは知らないが俺達の仲間を



傷つけたツケはでけえぞ？覚悟しろ！！！！」

シザース「ふん・・・覚悟するの貴様らだ」

ガタツクが唸るとそれを合図に4人は散りシザース達に向かう。

ブロッサム「くっ・・・はあ、はあ、はあ」

ガイ「もう息切れかい？他愛もない」

ライア「はははっ！！！！」

ライアとガイを相手にしていたブロッサムも絶体絶命のピンチに陥っていた。ガイの所持するコンファインメントで自分の特殊攻撃は封じられたと思っただけで彼女は打撃のみで戦っていたが武器を持っていない2人には丸腰の彼女は不利であり思う様に戦えなかったのだから当然だ。ガイのメタルホーンが膝をつく彼女の頭に突きつけられる。これで自分は終わるのかとブロッサムは覚悟を決めたように目を閉じた。

ガイ「さようならキュアブロッサム」

ガイは止めとばかりにブロッサムにメタルホーンを突きつけた・・・

が彼女を守るように銀色の光を放つ光の壁が現れた。

ライア「な、何っ!?!」

ガイ「この技・・・」

ブロッサム「ムーンライトリフレクション・・・！！！！・・・皆

あっ！！！！」

ブロッサムがみた方向には仲間であるマリン、サンシャイン、ムーンライト、ナイト、セイバーが並んで立っていた。ギリギリのところで間に合ったと全員ホッとした様子だった。

マリン「お待たせ ブロッサム」

サンシャイン「ギリギリ間に合ったね」

ブロッサム「皆さん遅いですよお！！！！」

ムーンライト「これでも急いできたのよ。見るからに敵なのは明白ね・・・ブロッサム、話は後で聞かせなさい！！！！」

ブロッサム「はい！！！！！！」

今は時間がないと全員が散りガイとライアに向かう。

ガイ「流石にこの人数だと面倒だね」

ライア「ああ。だがそれもこれで解決だ」

電子音『アドベント』

ライアとガイは流石に6人を2人で相手をするのは分が悪いと思いついてアドベントカードをベントインしてメタルグラスとエビルダイバーを呼び寄せた。

シザース「4人集まったところで俺達には通用せん」

王蛇「まとめて私達のモンスターの餌食となるがいいわ」

電子音『アドベント』

シザース、王蛇は数合わせだとアドベントでボルキヤンサー、ベノスネーカーを呼び寄せてダークカブト、ガタツクに差し向ける。そして残ったカブト、フェアリーはシザースと王蛇が狙いを定めた

カブト「それはどうかな?・・・一気に終わらせてやる!!!!!!」  
カブトの合図に全員がクロックアップをしようとベルトに手を伸ばすがそれに合わせるかのようにシザースと王蛇がカードを一枚引き抜いた。

シザース「そうはさせると思ってるのか?」

電子音「スローベント」

カブト・ガタツク・ダークカブト・フェアリー『!!!!!!?????』

カブト「クロックアップが出来ない!?!」

ガタツク「ば、バカな!?!」

カブト達のクロックアップを封じる特殊カードのスローベントでクロックアップを封じられてしまう。その隙にガタツクはボルキヤンサー、ダークカブトはベノスネーカーに苦戦を強いられることとなる。

カブト「なんてやつだスピード、防御、攻撃力のどれをとっても奴らが上だ・・・弱点が見つからない」

フェアリー「そんな・・・」

既にヒイロカネの鎧はシザースのシザースピンチと王蛇の攻撃でロボロにされて今にも変身は解除されてしまいかもしれないほど追い詰められている。このまま負けてしまうのかとシザース達の力の強さに恐怖を抱いてしまうカブトとフェアリー。

シザース「そろそろ遊びは終わりだ」

王蛇「消えなさい」

電子音「ファイナルベント」

シザースと王蛇はカードを一枚引き抜き見せつけた。自分達の最強必殺技を発動させるつもりだ。カブトとフェアリーは対抗策は必殺技しかないとフルスロットルのボタンを押してエネルギーをチャージするが……。

カブト「くっ!!!」

電子音「ONE TWO THREE」

カブト・フェアリー「ライダーキック!!!」

電子音「RIDER KICK」

シザース・王蛇「はあああ!!!」

カブト「うわあああああ!!!?????」

フェアリー「きゃあああああ!!!?????」

シザース、王蛇のシザースアタックとベノクラッシュ、カブト、フェアリーのライダーキックがぶつかり合い爆発を起こす。競い勝つたのは……

シザース「ふん……」

王蛇「……」

シザースと王蛇だったのだ。カブトとフェアリーは変身が解除されて大人と夕の姿になってしまっている。シザースは大人にシザースバイザーを突きつけていた。

ブロッサム「カブトおっ!!!」

マリリン「フェアリー!!!」

ガイとライアを相手にしていたブロッサム達はカブト達に向かおうとするのだがガイとライアがそれを阻む……このままでは大人が

「！！！ブロッサムは何としても彼を助けようとするがガイとライアがそうはさせないと隙を見せない。」

王蛇「此処までね仮面ライダーカブト、仮面ライダーフェアリー」

シザース「終わりだあつ！！！！」

シザースはシザースバイザーを王蛇はベノバイザーで二人の身体を突き通そうと振り上げた・・・その時だった。

「????1「待ちなさい！！！！」

全員「！！！！」

一人の少女の声が響き渡ると全員動きが止まった。全員がみた方向には6人の少女の姿があった。その少女達に見覚えがあるブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライトは驚いた顔だった。シザースと王蛇は一度大人と夕を放り投げて解放する。

大人「・・・くつ・・・き、君達・・・に、逃げる・・・け、ケガだけじゃ済まないぞ！！！」

「????「大丈夫です。私達は貴方達を助けに来たんですから」

夕「私達を助けに？」

「????3「はい。だから休んでください」

投げられた大人を短いポニーテイルの女の事ベリーショートヘアーの女の子が駆け寄り二人を抱きかけて立たせるとそのまま安全な場所に移動させた。

シザース「貴様ら・・・何者だ!？」

シザースは突然現れた謎の少女達にそう問う。すると6人の少女達はシザースと王蛇を睨みつける。その姿を見たブロッサム達はその中の4人に見覚えがあった

ブロッサム「の、のぞみさん!？」

マリン「あの子はりん!？」

サンシャイン「アレはくるみ!？」

ムーンライト「ラブ!??・・・何で昔の姿なんか!？」

そうその4人とは自分達と同じプリキュア仲間であるのぞみ達だっ

ただ。だがあの身形は中学生の姿である・・・だがそれは明らかにおかしかった・・・自分達と同じく年をとっている筈なのにと・・・そしてのぞみと呼ばれた少女はブロッサム達に笑顔を見せた。???2「私達は通りすがりのプリキュアよ」

王蛇「何っ!?!」

ゆりと同じぐらいの女性がシザース達にそう言った。この世界にはプリキュアは数多くいるとは聞いてはいたが・・・まさかそれが援軍に駆け付けてくるとは思ってもいなかった為に戸惑いが隠せない。

???1「まずは私達が変身するね。2人とも行くよ!!!」

???3「???4『イエス!!!』」

まずはのぞみ、りん、くるみと呼ばれた少女が携帯電話のようなアイテムとパレットのようなものを取り出した。

???1・???3「プリキュア・メタモルフォーゼ!!!」

携帯電話のようなものを取り出した少女2人はピンクと赤い光に包まれる。そのまま光につつまれた彼女達はブロッサム達と同じように短いスカートやロングブーツと言ったプリキュア独自のコスチュームに変化する。赤い光が集まった少女からは炎が周りに溢れ熱い鼓動が伝わってきた。

???4「スカイローズ・トランスレイト!!!」

続いてパレット型のアイテムを持った少女がペンのようなもので3つのボタンを押すと青い薔薇と青い光が集まった。バラの花びらが辺りに散りながら次の瞬間に少女だった彼女も戦士の姿に変わる

???5「チェンジ・プリキュア・ビートアップ!!!」

更に続き金色のロングのツインテールの少女は手鏡のような変身アイテム「リンクルン」を取り出すと鍵を使って開く。次に中のボタンを押すと彼女の身体はピンク色の光に包まれてワンピーススカ

トのコスチュームに変わり短かった髪の毛もロングのツインテールの髪となった。

???6「プリキュア・ライトニング・トランス!!!」

次にロングヘアの少女は小型の景帝電話のようなもの変身アイテムの「ライトニング・コミュニケーション」を取り出して起動させると少女の身体を光で包んだ。その後キュアムーンライトを思わせるようなルックスの戦士へと姿が変わった。

???2「プリキュア・コズミック・チャージ!!!」

最後にメンバーの中で最年長と思われる女性はペンダント型の変身アイテム「コスモタリスマン」を起動させて藍と金を強調した戦士へと姿が変わった。

全員が変身が終わると6人は並びポーズをとりながら名乗り上げる。

???1「大いなる希望の力キュアドリーム!!!」

???3「情熱の赤い炎キュアルージュ!!!」

???4「青いバラは秘密のしるしミルクィローズ!!!」

???5「ピンクのハートは愛あるしるしもぎたてフレッシュ、キュアピーチ!!!」

???6「救済と新生を司りし閃光キュアエルス!!!」

???2「平和を守護する星の輝きキュアコズミック!!!」

6人が名乗り上げが終わるとポーズをとりなおし中央で眩い光が走った。シザース達はもちろんの事だが大人達やプロツサム達も言葉が出なかった。

ジェニス「キュアコズミック!?・・・それにピーチや他の面々まで何故この世界に!?・・・くっ!!!こうなったからにはシザース達だけでは不利だ!!!」

その様子をダークが支配する全戦基地で見ていたジェニスはシザース

ス達の加勢に向かう為闇の扉を潜った。その目的はただ単にシザース達の加勢だけではなく自分の因縁を片づける為でもあったのだが……。

シザース「プリキュアが他にもいるとは聞いた事があったがまさかこれだけいたとはなあ？くくく……いいだろっ！貴様らもボルキヤンサーの餌にしてくれるわあっ！……！」

王蛇「何人増えようと私達には勝てないわ……そうよね？ガイ、ライア」

ガイ「当然です。」

ライア「面白くなってきたじゃねえーか……そうでないとなざわざモンスターを強化した意味がないというものだ……！」

シザース達は新しく表れたドリーム達を見て恐れるどころか逆に興奮が止まらなくなった……自分達の力を試す相手が増えた事は彼らが背負っている復讐を晴らす対象が増えたと言う事だからそう思うのも無理はないかもしれない。

ローズ「あら？アタシ達の実力を舐めてると痛い目見るわよ！？」

コズミック「貴様らの為に犠牲になった命の償い……それは必ず受けてもらう……！」

シザース「ほざけ……元々は死ぬべきものを餌にしたのみだ……

・貴様らなどに俺達の計画は邪魔させん……！」

シザース達とキュアドリーム達は睨み合っていた……周りに風が吹く中風が止むとシザース、王蛇はそれを合図にしたようにドリーム達に突進していった。それに応戦するようにドリーム達も高速ダッシュをしてぶつかり合うのだった

第33話地球解放軍編? 「脅威の鉄と新しい戦士」 (後書き)

今回は中途半端ですが此処までで〜これ以上書くと区切りが分からなくなってしまうので(笑)

さて今回はドリームチームVSシザース&王蛇の予定です!!!果たして此処まで強いシザースを倒せるのか!?!  
次回もお楽しみに



## オリジナルプリキュア設定〜ホーリーナイト編〜

キュアホーリーナイト

一度は命を落としたアンナがつぼみ達のプリキュアの種とスパークレンズの力が融合して誕生した戦士。ブロッサム、マリン、サンシヤイン、ムーンライトの特性とティガ、アース、デユナミスのパワーを持つウルトラマンとプリキュアの力を併せ持つ光の戦士。この形態はいわばパワーアップ形態であるがナイトの変身を無視して直接ホーリーナイトに変身する事が可能。ただし消費のエネルギーが凄まじく1日に1度しかホーリーナイトには変身できないという弱点があり一度ホーリーナイトの力を使うとアンナは3時間はプリキュアに変身する事は出来なくなってしまう。

変身アイテム&専用武器

ホーリーパヒューム

ホーリーナイトへと変身するために専用アイテム。ナイトに変身している状態でも使用は可能でありナイトからまたはホーリーナイトに二段階変身や直接ホーリーナイトに変身する事が出来る。

ホーリーロッド

ホーリーナイト専用武器。ブロッサム、マリン、ムーンライトのフラワータクトと類似しているがクリスタルドームがない事は最大の特徴。

必殺技

プリキュア・ホーリーフェルテストーム

ホーリーナイト単独の最強必殺技。白い浄化光線で心を持つ敵には憎しみ、怒り、悲しみなどの負の感情を浄化させることで身体を傷つ

けることなく戦意を喪失させる。またブロッサム達には通用しない人工的に造られたロボットなどは存在そのものを消滅させる事が出来る。ただし消費するエネルギーの量は凄まじくホーリーナイト自身の残りのエネルギーによっては不発に終わる可能性が極めて高く最後の切り札として使われる。

#### ホーリー・デイスエイブルメント

敵の光線系の攻撃をを無力化する防御光線。この攻撃の前にはプリキュアの特攻、ウルトラマンの必殺光線でさえも無力化されてしまう。ただし物理的な攻撃には無意味であるため光線による攻撃を防ぐのみに使用は制限されてしまう。

#### ホーリーシールド

サンシャインのサンフラワーイージスと同系統の技。敵の攻撃を跳ね返す事が可能であるがエネルギー消費が激しいため長くは維持できない。

#### ホーリーシュート

手裏剣のような白色光線。ティガ達のハンドスラッシュ系統の技。威力は低いが連射が可能で手数と素早さに優れる。

### 第34話地球解放軍編？「攻防と休戦」（前書き）

前回までのあらすじ

シザース達の脅威の力に手も足も出ないカプトとプロツサム。ピンチにマリン達がかかるけるがそれでも形勢は変わらずにカプトとフエアリーがシザースと王蛇に追いつめられてしまった……。絶体絶命の大ピンチを迎えた大人と夕を救ったのは新しいプリキュア達であった。

### 第34話地球解放軍編？「攻防と休戦」

突進してシザースと王蛇の拳とキュアドリーム率いる新プリキュア軍団の拳がぶつかると爆発が起きて辺りは爆風に包まれていく。双方ダメージは皆無で一度離れると再び睨み合い静寂が始まる。

シザース「ふうん・・・何人増えようが俺達の計画の邪魔はさせん。」

電子音「ストライクベント」

シザースはもう一枚持つストライクベントのカードをベントインして右腕にシザースピンチを装備する。

王蛇「私達の行く手を阻むのなら例えどんな相手であろうとも粉砕するのみ！！！」

電子音「ソードベント」

続いて王蛇がデッキから唯一の武器であるソードベントのカードをベのバイザーに装填しベノスニーカーの鋭い尾を模した剣ベノサーベルを召喚し装備する。

コズミック「エルス・・・彼からシザース達のデータを受け取ったのわね？そのデータから貴女なりの数値の様相は出来るかしら？」

エルス「はい。恐らくボルキャンサーとベノスニーカーのAPが6000以上であると推定されます。そこから考えるとかなりの人間を餌にした可能性が高いでしょう」

エルスは自分達の協力者であるとある男から貰ったシザース達の基礎データからボルキャンサーとベノスニーカーのAPを割り出した結果ボルキャンサーは通常の3000から倍以上の6000にまで強化されたのではないかと推測する。コレだけ強化されているという事はいくら自分達でも彼らを止める事は難しいかもしれない。

シザース「ふん・・・作戦タイムか？だがそれも無駄な事だ！！！」

シザースと王蛇は武器を片手にもう一度突進をするが彼ら2人の前に闇の扉が現れ一人の人影の姿が出てきたのだった。その姿を見た



メタルゲラス「グルルルルルル！！！！」

マリン「！？・・・しまっ・・・うわあああああっ！！！！」

ガイのメタルホーンにブロッサムがメタルゲラスの突進にマリンが飛ばされてしまいコンクリートの地面に身体を叩きつけられてしまふ。

セイバー「ブロッサム！！、マリンっ！！・・・よくも二人をお！！」

セイバーはガイを睨みつけると銀色の剣と金色の剣を手に取りガイを斬りつけるがガイはメタルホーンでそれを受け止める。

ガイ「流石はキュアセイバー・・・聞いたと通りだね？だけどボク達がなんのために犯罪者を捕食させてモンスターと自分を強化したか知っているかい？それはプリキュアの中でも危険人物である君を倒す力を得るためさ」

セイバー「！！。。。。そのために貴方達は沢山の人々の命を利用したというの？」

ガイ「そうさ。でも勘違いはしないでほしいな。ボク達はいくまで犯罪者のみを餌にしただけの事さ・・・その事に何か問題あるのかな？」

セイバー「・・・犯罪者のみね・・・その目的は悪人が許せないから？」

ガイはメタルホーンをのツノを光らせながらセイバーの問いに優しい口調でそう答えた。セイバーは彼の答えに哀しい目をしながらそう聞き返す。

ガイ「そんな単純な問題じゃないさ・・・ボク達の本当の目的をこの場で聞けばボク達の気持ちを君なら理解できると思ってるけど？」

ブロッサム「！？（セイバーに彼らの気持ちが分かる？・・・どういう事なの！？）」

セイバー「・・・確かに貴方達は純粋な悪人とは違う何かを感じてる。でもそれが何であれ私はプリキュア・・・その役目は人々を

守る事！！！！・・・今の私は過去の私とは違う・・・私は大切な人の誓いを絶対に忘れるわけにはいかない！！！！」

ガイ「そうかい・・・残念だよ。本当に残念だ・・・仲間にできると思っただけだ」

セイバーは双剣を見下ろしながら静かな口調でそう言った。セイバーの秘密を知っているガイはメタルホーンをセイバーに突き付けるがセイバーは双剣を盾にしてそれを受け止める。今まで彼と戦った中で感じ取った力加減で防ぎきれると思っただが・・・。

セイバー「はっ！！！！・・・ぐっ！？？・・・な、なんてパワーなの！？？」

ガイ「まさか今までののが本気だと思っていたのかい？・・・序盤は手の内の探り合いをするのが戦略の基本だよ・・・さあ〜果たして君一人の力でこのガイの力に耐えきれるかな？」

セイバー「ぐううつ！？？？」

セイバーの喉元に徐々にメタルホーンの鋭利な刃が突き付けられようとしている。双剣で受け止めながらも力ではガイの方が上であるため腕がしびれて手が震え始めて手の自由がだんだん利かなくなってきた。

ブロッサム「やああああああつ！！！！！」

ガイ「ぐああつ！？？・・・今度は君か？へえ〜まだそんな体力が残っていたのかい？メタルガラス！！キュアブロッサムにターゲットを絞って攻撃しろ」

後少しの所でブロッサムの飛び蹴りがガイの背中に炸裂してセイバーに逃げられてしまった。ガイはこうなれば完全に分断してくれるとメタルガラスにブロッサムを集中攻撃させるのだがそのメタルガラスに水が放たれてメタルガラスはミラーワールドに戻ってしまう。マリリン「アタシがいる事忘れないでよね！！！」

ガイ「ふっ・・・やはり君達は面子がそろつと厄介だ・・・はああああつ！！！！！！！」

ガイはメタルホーンで3人に襲いかかるが徐々にガイに有利だった

流れはブロッサム達にも傾き始める。一人ならば他愛もないが面子がそろつと想像以上の力を発揮するのがプリキュアであるとか、そこから聞かされていたが此処までも計算を狂わされるとは……ガイは何としても此処でブロッサム、マリリン、セイバーのうちで1人でもいいから倒そうと全力で襲いかかる。

ライア「はああああつ!!!!!!!!!!」

サンシャイン「うわあああつ!?!」

ライアのエビルウィップで向つてきたサンシャインを叩き飛ばす。

サンシャインは受け身を取ると体勢を立て直す。

ムーンライト「サンシャイン大丈夫!?!」

サンシャイン「はい。あの鞭がある限り近づく事が出来ない……何とかしないと。」

ナイト「それなら私が囷になる。だから2人は隙を見て彼に攻撃を」

サンシャイン「でもそれじゃナイトに危険が」

ナイト「私は大丈夫。だから気にしないで二人は思いっきり戦つて!!!!!!」

ムーンライト「分かったわ。ナイト頼んだわよ!!!!!!」

ナイト「はい!!!!!!」

ナイトはイリユージョンソードを発生させてライアに突進する。ライアはイリユージョンソードを盾の役割も果たせるエビルバイザーで受け止める。

ライア「そんな武器も出せるのか?……ならそれを使わせてもらおうか!!!!!!」

電子音「コピーベント」

ライアはナイトを飛ばすと一枚のカードをベントインする。すると彼の手にもう一本のイリユージョンソードが現れてイリユージョンソードが彼に装備された。

ナイト「なつ!?!?……私の武器をコピーした?」

ライア「驚いたか?……ははあ!!!!!!……まだまだこんなもんじ



やないんだぜ？」

ナイト「くっ!?!」

ナイトは力負けして膝をついてライアのイリユージョンソードを自分のイリユージョンソードで受け止める。ガチガチという金属音が響く。力で勝るライアの黒い剣がナイトの身体に近づいて来る。

ナイト「・・・ふっ」

ライア「!?!?・・・何が可笑しい？」

ナイト「別に・・・此処まで貴方が単純だと思ったら・・・ちよつとね？」

ライア「!?!?・・・」

あと少しで切り刻まれるというこの状況でナイトは笑みをライアに見せてきた。ライアはその事を疑問に思い左を見る。

サンシャイン「サンフラワージェス・インパクト!!!!!!」

ライア「!?!?・・・何っ!?!?ぐおおおおっ!!!!!!?!!?」

なんとそこにはサンシャインがいて自分の目に前に特大サイズのサンフラワージェスを発生させている所だったのだ。そしてそのままサンフラワージェスの掌底をライアに叩きつけた。

ムーンライト「ムーンライト・シルバインパクト!!!!!!」

ライア「!?!?・・・ぐあああああっ!?!」

飛ばされた方向にはムーンライトがいて拳に銀色のエネルギーを溜めていて自分の所に飛ばされたライアに向けて掌底を叩きつけてライアをふっ飛ばした。

ライア「ぐっ!?!?・・・ナイトは困だったのか・・・くっ!!!!!!」

ライアは飛ばされた状態から受け身を取るもダメージはかなりのものであった。逆転したとムーンライト達はライアに向かう。

シザース「はああああっ!!!!!!」

ドリーム「うっ!?!?・・・きゃああっ!!!!!!」

シザースピンチとクリスタルフルーレがぶつかり合う。だがシザースは缺である事を活かしてフルーレを挟んでドリームを投げ飛ばす



シザース「そうか。ならばお前らはある日を境に権力者に自分の大切な人や大切なものを全て奪われたとしてもそのセリフが言えるというのだな？」

シザースは突然3人に意味有り気な問いをしてきた。ドリーム達はさつきまで戦っていた様子とは全く違うシザースに困惑する。

ドリーム・エルス・コズミック「!?」

シザース「答える!!言えるのか？」

エルス「それは……」

シザース「ふうん……何も言い返せんか。なら俺の出した答えを教えてやろう……答えはNOだ。何故ならお前たちがやっている事は自分達の自己満足に過ぎんからな」

ドリーム「そんな事ない自己満足なんかじゃない!!!」

シザース「違うな。お前達が戦う本当の理由……それは自分達が正義の味方だと他者から称賛される自分に酔っているだけだ……お前達は言葉では否定しても心の奥底では無意識にはそうなる事を望んでいる」

何も言い返せないドリーム達を鼻で笑うとシザースは自分の理論を彼女達にぶつけて心を揺さぶる様にそう言うがすぐにドリームが反論してシザースを黙らせる。その態度を見てシザースは確信をついたようにドリーム達の戦う理由を自己満足だと言って嘲笑う。

コズミック「シザース……貴様あつ!!!」

シザース「……俺達はある日気がついたんだよ……自分の身を犠牲にしても人は自分が肥え太るために平気で他者を裏切り傷つける……そんなが簡単に出来るようになるほど人は落ちる所まで落ちた。どんなに他者の為に頑張ろうとも目障りと思う力を持つ権力者に潰される……それを正すには全てを破壊するしかない……  
・だからこそこの世界の全てをリセットし0からスタートする事こそが今俺達がする事だとな!!!」

コズミックはシザースを睨みつけながらも低い声で唸った。だがそれに続きシザースは自分達がするべきであると信じた事を口にした。

彼らが此処までして世界をリセットする理由が分からない3人は戸惑いが隠せない

ローズ「ミツク」どうしてそこまでして!!!!!!」

シザース「話した所で貴様らには永遠に理解出来ん。……俺達の過去など話す価値もない!!!!!!」

シザースはシザースピンチを光らせながらドリーム達に襲いかかる。ドリーム達は彼の抱える深い負のオーラを感じながらも相手が人間である事を考えて本気で戦う事はしなかった。

王蛇「はあああああつ!!!!!!」

ルージュ「やあああつ!!!!!!」

ローズ「でやあああああつ!!!!!!」

王蛇VSルージュ&ローズの女性同士の戦いは均等を崩していなかった。ベノサーベルの一撃をルージュとローズは時には受けとめ時には避ける事でダメージを最小限に抑える。王蛇は2人の攻撃をベノサーベルやベノスネーカーを利用し受け流す。この様な流れが繰り返され互いに決定的なダメージを与えてはいなかった

王蛇「ちょこまかと……ベノスネーカー!!!!!!」

ベノスネーカー「シャアアアアアアアアアアツ!!!!!!」

このままでは埒が空かないと王蛇はベノスネーカーに毒液をまき散らせる。1浴びでもすればプリキュアともいえども大ダメージは避けられない。ルージュとローズは毒液を避ける為に散る。

王蛇「やああああああつ!!!!!!??」

ルージュ「!?!?……ああああああつ!!!!!!」

毒液は困だった。本当の狙いはバラバラにして1人ずつにダメージを与える事だったのだ。

ローズ「ルージュ!!!!!!」

王蛇「人の心配してる場合?はあああつ!!!!!!」

ローズ「きゃあああああつ!!!!!!??」

王蛇「ふん……攻撃は強くても防御が疎かでは敵に勝つ事など

出来ない・・・それを思い知りなさい!!!」

ルージユ「つ、強い・・・流石に元々のポテンシャルが高い王蛇の力・・・こうなったら一気に決めないとヤバいね」

ローズ「ええ。幸い今の王蛇はファイナルベントは使えない。なら私達の必殺技を合体させれば」

ルージユ「でもただ出すだけじゃ彼女には通用しない・・・なら此処は一つ頭を使おうじゃん!!!」

ローズ「モチ。行くわよ!!!」

王蛇「まだ来るの？しつこいわね」

王蛇はいい加減に諦めるとも言う様にベノサーベルを光らせながらローズ達に近づく。戦術では王蛇が有利だがローズ達には秘策があるようだ・・・。

ジェニス「今日こそお前には消えてもらおう・・・私が私になるために!!!」

ピーチ「・・・ジェニス」

キュアピーチをジェニスは睨みつけていた。その彼女を見てピーチは複雑な顔だった。ジェニスがどうしてキュアピーチに執着心を抱くのか・・・それには深い闇があった。彼女はとある世界で生み出された人造人間だったのだ。そしてその元になったデータの中にキュアピーチのデータが使われた。それが故に彼女は迫害を受けてきた。

ジェニス「お前達がどうしてウルトラマンティガの世界に来たかは想像が出来る。上原大人の抹殺及び邪神の復活を止めに来たのだから？」

ピーチ「邪神!？」

ジェニス「!？・・・なんだ知らないの?かつてこの世界に存在した超古代文明の世界を闇に閉ざした大邪神が存在した事を・・・その邪神の力は私たちも恐れる力」

ピーチ「ダークエンジェルズでさえ恐れる力・・・それは一体」

ジエニス「さあ〜ね？お話は此処までよ・・・今日こそお前を倒す  
！！！！」

お話は終わりだと二人は光を放ちながらぶつかり合った。力も技術も全て互角であるのだがピーチの表情は暗かった。

王蛇「ほらほらあつ！！！最初の威勢はどこに消えたのよ？」

ローズ「うわああああああつ！！！！」

ルージュ「ローズ！！！ぐっ！？？・・・やああああつ！！！！」  
王蛇「甘い！！！はあああああつ！！！！」

王蛇の攻撃の勢いはどんどん加速していきルージュとローズを追いつめる。ローズはベノサーベルの一撃が直撃して飛ばされてしまう。そしてそのままルージュに刃を突き付けルージュのファイヤーフルーレの刃とぶつかる。受けとめられはしたが王蛇はルージュの足を刈り取り体勢を崩すさせてベノサーベルを彼女の首に突き付けた

王蛇「私の勝ちね？」

王蛇は勝利を確信した声を上げる。だがこれこそが二人の狙いであった。

ルージュ「ローズ今よ！！！！」

ローズ「邪悪な力を包み込む、バラの吹雪を咲かせましょう！！！！ミルキイローズブリザード！！！！」

王蛇「ちっ！！！！・・・バカね〜隙だらけじゃない？」

ルージュ「それはアンタもね」

王蛇「！？？」

ルージュ「プリキュア・ファイヤーストライク！！！！」

王蛇「目的はコレか！？・・・うわああああああつ！！！！」

王蛇はすぐに飛びあがりブリザードを避けるがその後ろにルージュがいて王蛇にファイヤーストライクを放った。

ルージュとローズの作戦。それは1人が囿になり王蛇と零距离に組み合い動きを止めている時にもう一人が必殺技を放ち王蛇にワザと



???6「星川勇奈。大人君・・・君達には1度会った事があるはずだけど？忘れちゃったのかな？」

大人・琢磨・傑・勇「・・・あああっ！！！！！」

琢磨「あ、そう言えば何処かで見た事あると思ったら・・・前に見た事ある不審者！！！」

勇奈「誰が不審者だあっ！！！！！」

自己紹介が終わり名前と顔が頭に入る。そう言えば自分達と年が変わらないこの女性は前に見た事があった事を大人達は思い出した。そして琢磨がボケるがそれにすかさず勇奈のツツコミが入る。

つぼみ「ちょ、ちよつと待ってください。じゃあのぞみさん達は別世界の同一人物ってことなんですか？」

のぞみ「そう言う事だね。なんか変な感じだけど」

えりか「ていう事は・・・そっちの世界にはアタシ達もいるの！？」

ラブ「そう言う事になるね」

いつき「な、なんだかホントに変な気分だね」

ゆり「ええ。でも確かにそれならば説明は出来るわね。私達も知らないプリキュアの真夜や御子の存在を」

大人「それにしても・・・奴らは一体・・・マスクドライバーシテム以外のライダーで尚且つ強大なパワー・・・モンスターに人を食わせていたと言っていたけど・・・」

御子「彼らが言っていた事は本当です。詳しい事は此処で話すのも何ですから何処か場所を移したいんですが・・・」

つぼみ「でしたら植物園はどうでしょう？・・・戦いの疲れもありますし」

大人「そうだな。よし植物園に行こう」

一行はつぼみの提案で植物園に向かうこととなった。そこで離されるシザース達の力の秘密と裏で操る敵の存在を大人達は知ることなるのだった。



第34話地球解放軍編？「攻防と休戦」（後書き）

人が増えると描写も大変になりますね〜（汗）いや疲れた疲れた

次回の構想はまだできていませんがすぐに続きを上げようと思いま  
す〜

では次回のお楽しみに

### 第35話地球解放軍編？「現状」（前書き）

前回までのあらずし〜

シザース達に追いつめられた大人達を救ったのはつぼみ達とも面識のある4人のプリキュアと2人の新プリキュアであった。

シザース達は今回は始まりに過ぎないと言っ言葉だけ残して一時休戦となった。

### 第35話地球解放軍編？「現状」

大人達一行は植物園にいた。と言うのも自分達を助けてくれた夢原のぞみ一行にシザース達の情報を貰う為に集まっていたのだ。

大人「つまり君達は真夜と同じ別世界のプリキユアであり今回の事件を余地して俺達を助けに来たって言うわけだ？」

のぞみ「そういうことです!!!」

今回の事件はどうやら大人達が知りえない何か大きな力が働いている問う事らしい。大人はシザースの強さを思い起こしていた。

大人「地球解放軍・・・仮面ライダーシザース」

つぼみ「彼らはどうしてあそこまで世界を憎んでいるんでしょう？それにマスクドライバーシステムとは別のライダーの力・・・今までの相手とは違い強大すぎます。のぞみさん達はあの力について何か知っているんですか？」

大人はシザースである太陽の言葉を思い出していた。《世界の全てをリセットし0からスタートする事こそが今俺達がする事》・・・

・このセリフが頭から離れなかった。彼らはクレイズの様に純粹な悪者とは思えないのが引つ掛かっていたのだ。つぼみの質問に御子は自分達が知っているシザース達の力の正体について説明を始める。御子「仮面ライダーシザース・・・彼らは大人さん達が変身するマスコッドライダーシステムとは別物です。あれはミラーワールドの力を使ったミラーライダー」

琢磨「ミラーライダー!？」

御子「はい。ミラーライダーとは元々は別の世界である男が自分の妹に新しい命を与えるために造られたものなんです」

御子は語る。ミラーライダー誕生の経緯を。その説明に大人達は食い入る様に聞いている。

傑「妹に新しい命?・・・どうやって?」

御子「オリジナルの世界ではミラーライダーは13人存在しており

まして最期の1人になるまで戦う事を強要させます。そして最期の1人となった者には強大な力が得られるです。つまり殺し合いをさせることで一番強い命を自分の妹に転換させる」

タ「そ、そんな非人道的を本気で!？」

タは思わず大声で聞いた。普通の思考の人間ならば例え妹のためとはいえ他者の命を転換させるなどと言う事は考えもしないから無理もない。御子は冷静に答えを返した。

御子「はい。でも結局は妹に拒まれて失敗に終わりました。・・・

」

大人「つまりは・・・今回の敵はどういう経緯かは分からないがこの世界に存在しないミラーライダーの力を手に入れたわけだ」

大人は話を整理を始める。つまりはシザース達はマスクドライバーシステムではなく自分達が知らない強大な何者かと手を結び力を手に入れたと言う事になる。つまりはあの強大な力をこの世界の人間が作る事が出来ないのは当然だし大人達が苦戦を強いられるのも必然だったと言う事なのだ。

御子「はい。それに私達の協力者であるある方から貰っていたデータから推測した結果を言うと仮面ライダーシザースがカブトに勝つ事は普通ではありえないんです。」

つぼみ「!?!?・・・ちょっと待ってください!!! だったらどうして大人さんやタさんはシザースに負けたんですか? 現に2人は殺されかけたんですよ!？」

タ「そうよ!! 貴女達が来なかったらアタシ達はシザース達に殺<sup>や</sup>られてた」

つぼみとタは信じられないよ言う様な顔をした。現に最初に大人とつぼみは彼らと闘ったがカブトの力をあしらい尚且つその後マリン達が来てもカブトとフェアリーはシザースと王蛇の必殺技に競い負けてしまい危うく命を奪われるとこにまでなったのだから無理もないだろう。つぼみとタをりんとくるみが落ちつかせて話の続きを語る。



にすることで生命を維持し自分の力も強化します……つまりシザース達は人間を大量にモンスターに捕食させることであそこまで強化されたと言う事になります」

いつき「そ、そんな……じゃあ本当に彼らは人間をモンスターの餌に!？」

ゆり「彼らはそこまでして力を得たのはどうして?……まさか私達を倒すためだけに!？」

全員が顔が青白くなっている中でいつきが信じられないと言う声を出した。それにゆりは推測を加えて御子に自分達を倒すたが為にそんな非道な事をしてきたのかと御子に聞いただす。

御子「恐らくはそうだと考えられます……いくらライダーの力があつたとしてもスペックではカブト達には敵いませんからね。故に彼らはモンスターを強化して自分達が動くべき時を影から見計らっていたんでしよう」

大人「成程な……行方不明事件じゃ流石の俺達も嗅ぎまわらないし奴らのモンスターの事が噂になっても現物を見ないといくら俺達でも信じない……盲点をつけていたわけだ……やられたよ……まんまと敵を強大なモノにしていたんだ俺達は」

大人はため息をつきながらそう言った。クレイズ事件から続いているあの平和も実は敵の準備期間であつた言われれば当然の反応かもしれない。あの平和の中で逆に新しい敵の存在を感知しろと言われ出来るわけがない。しかし行方不明事件が表面化している中で何かおかしいと思っていたがそれも”失踪”や”行方不明”となれば警察ではない自分達には専門外であると気にかけないのが普通だ。大人「あと1つ気になった事がある。ジェニスって何者なんだい?もしかして彼女がシザースの地アキラを与えた黒幕?」

御子「ええ。彼女は今回の事件の首謀者であるシザース達やあなたが戦っている相手とは別に、コングレクター事件を影で操っている存在の仲間です。憎しみのタクトを振るう指揮者の」

大人「……そんな奴がいるとは……何者だいそれは」

御子「その組織の名はダークエンジェルス・・・世界への憎悪に囚われ、全パラレルワールドのリセットを企む存在です」

つぼみ「世界のリセット!?!?・・・そんな事が出来るんですか?」

勇奈「出来るのよ。ラグナロクストーンの力があれば」

琢磨「ラグナロクストーン!?!」

勇奈「そう。ラグナロクストーンとは此処とは別世界に存在した石・・・遡る事400年前にドックゾーンの支配者ジャアクキングが全世界に渦巻く負のエネルギーを集集させて創り出したといわれる破壊の魔石。だがその力はあまりに強大な力ゆえにジャアクキングさえも制御しきれず暴走してしまった。そしてそれは初代プリキュアたるキュアアンジュによって封印されたといわれるわ。私もおとぎ話上の伝説の産物って思ってたけど実在したの。悪魔の石がね」

いつき「じゃあダークエンジェルスはそれを使って全パラレルワールドにリセットを?」

のぞみ「うん。でも安心して私達はそれをさせないためにこの世界に来たんだから!?!」

のぞみはカプセルを取り出した。この中にラグナロクストーンのを無力化させる事が出来るキーアイテムが入っている。

勇奈「大人君・・・君はウル・・・」

琢磨「!?!?・・・あああつ!?!?後ろに虫が!?!?!」

勇奈が大人の決して知られていけないである秘密を言う前に琢磨が機転を利かせてえりかが苦手である虫がいると言って一同をワザと驚かせる。

えりか「ええくむ、虫!?!」

勇奈「!?!?・・・虫なんて何処にも・・・」

大人「勇奈さん、ちよつといい?」

勇奈「え!?!」

その隙に勇奈を離れさせるべく大人は彼女と共にその場から姿を消すのだった。

のぞみ「!?!?・・・どうしたんだろ?大人さん達がウ・・・」

大人は勇奈を連れてその場を離れた。その様子に驚いたのぞみ達は勇奈が言いかけた大人達のセリフを口にしかけた所を傑が入る。

傑「おっほん!!!!!! すまないがのぞみちゃん達もちよっといい?」

のぞみ達一同「え!?!」

のぞみ達一同は傑に連れられて大人と勇奈の元に行く。全員一体何なんだと動揺と驚きが隠せない。

琢磨「つ、つぼみ達・・・悪いけど飲み物取ってきてくれる!?!」

琢磨は子の状況を何とかやり過ごそうとつぼみ達に飲み物を取って来るように頼む。そして素早く人露性質の後を追う。

つぼみ「あ、はい・・・じゃあ皆さん手伝ってください!」

えりか「あ、うん」

いつき「!?!」

ゆり「・・・」

アンナ「ど、どうしたんだろ3人とも」

真夜「(勇奈・・・ダメよそれを言っちゃ)」

つぼみ達はわけが分からないが言われるがままに飲み物を取ってこようと園内の事務室に向かうのだった。

大人「・・・頼むからつぼみ達には俺達がウルトラマンである事は黙っていてくれ!!!!!!」

途中で合流した真夜の入れて大人達は植物園の裏庭にいた。大人達のはのぞみ達に詰め寄ると強くそう言った。その勢いにのぞみ達も押されてしまい後ずさりしてしまう。

勇奈「!?!?・・・もしかしてつぼみ達は知らないの?君達がウルトラマンである事を」

琢磨「そんな事口が裂けても言えるわけないだろうが!!!!!!」

傑「絶対にはれるわけにはいかないんだ・・・特につぼみ達には」  
真夜「皆・・・」

普段見せない大人達の態度に真夜は悟ったように声を上げた・・・



それに続き大人が口を開く。

大人「最初はただでさえ信じられなかったんだ……俺達がウルトラマンだって……もしもこの力の事がつぼみ達にバレて俺達から離れていくんじゃないかって考えると怖くて辛い……今の関係が壊れるんじゃないかって考えたくないんだよ……だから絶対に黙っていてくれ!!!」

あの時3人の秘密であると決めた理由はつぼみ達に自分達が怪物であると思われるのが怖かったからである。ライダーの力はまだ理解できたかもしれないがウルトラマンとなれば話は違う。アレほどの強大な力を自分達が持っているとしたらつぼみ達は思うだろうか……快く受け入れてくれるのだろうか？それとも……後者を考えると3人は怖かったのだ。今の関係が崩れてしまったらと思うと怖くて怖くて仕方ないのだ……。

のぞみ「……でもいつまでも黙っているつもりなんですか？……仲間のつぼみちゃん達を騙し続けて自分達だけでウルトラマンの苦しみを背負い続けるですか！？……そんなの哀しすぎますよ!!!……そうやって逃げていても自分が苦しいだけじゃないですか!!!」

のぞみは彼らの思いが間違っていると強く反論した。確かに彼らの力は強大であり普通の人間ならば持つ事さえ躊躇するし力を捨てたいと思うのが人情というものだ。でも彼らは逃げているだけだと……つぼみ、えりか、いつきから逃げているだけだと言っかの目でそう言った。

琢磨「それは……そうだけど……」

りん「間違ってますよ。つぼみ達は貴方達の苦しみを理解できるはずです……だって貴方達は何度もつぼみ達や数多くの人々の危機をその身を犠牲にして救ってきたじゃないですか……もつとつぼみ達を信じてあげてください」

続いてりんが彼らを諭すように優しい口調でそう言った。今までだって大人達は数多くの命をその手で救ってきたはずだしつぼみ達を

助けた事だつて何度もある事を思い出させるように

琢磨・傑『……』

くるみ「絶対に怖がつたりしない……だつて妖精と友達になれるんですよ?……そんな彼女たちがウルトラマンを怖がるはずはありませんよ!!!!」

大人「……」

真夜「私もそう思うな。つぼみ達は絶対に貴方達から離れたりしない……大切な仲間……いいえ大切な人から逃げるはずないよ?」

大人達はスパークレンスを眺めた。今まで戦つた事を思い出しながら……そしてしばらくしてスパークレンスをしまう。

大人「……とにかく俺達がウルトラマンである事をつぼみ達に明かすかどうかは自分で決める。だから今は絶対に言わないでくれ」  
御子「分かりました。そこまで言うなら私達は黙っておきます。……いつか大人さん達自身からその事実を告白できる事を祈つて」

大人「すまない」

大人達一同は裏にはから園内に戻る。

勇奈「さて……では今後の対抗策だけど彼らは話したとおりシザー達は本来ミラーワールドで戦うライダーだから今度出てきた時にミラーワールドに逃げられたらコレを使って。」

つぼみ「これは!?!?……ブレスレット!?!?」

御子「私達の仲間が開発したミラーライダー以外の戦士がミラーワールドに突入できる装置のミラーテレポーターです。これさえあれば彼らがミラーワールドに逃げられてもしばらくの間はミラーワールドで戦う事が出来るはずです」

えりか「凄いな〜そっちの人はこんな物も作れちゃうんだ?」

のぞみ「うん!!凄いなだよホワイトは」

いつき「えつ……コレってほのかさんが作ったの!?!?」

りん「はい……一応は(汗)」

ゆり「す、すごいわね……」

大人「ほのかって誰？」

つぼみ「えつとですねキュアホワイトの変身者なんですけど……」

傑「……あ、そうだ!!! 矢車さん達にもこの事を連絡しておこう」

大人「あ、そうだった(汗)よし矢車さんに電話つと」

大人達は勇奈達から様々な情報を聞き入れた。これで次にシザーズ達の攻撃があつたとしても五分の戦いが出来る筈だ。傑の初点に思ひだした様に大人は携帯で矢車に連絡を取るのがだった。

その頃のとある海底ではダークが新しいプリキュアの事に驚愕していた。別世界からプリキュアが時空を超えて応援に駆け付けたとなれば無理もないだろう。

ダーク「おのれ、後少しの所で、新手のプリキュアに邪魔された……何なんだあいつは？」

ジェニス「奴の名は星川勇奈、プリキュアとしての名はキュアコスミック。デスリード様に刃向かい、さらにヤイバの世界では武藤蒼牙を助け、メデューサを倒し、世界の支配者と自称するコンカラードを倒したダークエンジェルスにとつてはもつとも邪魔な存在であり、別の所で会つたキュアエルの仲間だ!そして、奴は天道総司にも面識がある」

ダーク「天道総司と!?!?!?!?! ならば奴がこの世界に再び来る可能性も否定はできんか？」

ジェニス「恐らくは……」

太陽「何をそんなにビクついているんだ!?!」

ダーク・ジェニス「!!!」

2人の話を中断するように太陽が玉座の間に姿を見せた。

太陽「要するに俺達の敵であるだけであろう?……ならばこの手で粉碎するのみだ」

ジェニス「太陽……キュアコスミックの力を甘く見ない方がいい

ぞ？先程も言ったとおり奴はヤイバの世界で・・・」

太陽「そんな事どうでもいい！！！！」

ジエニス「！？」

太陽「例えどんな存在であろうとも俺は必ず敵を粉砕する。その為に俺はダークから闇の力を貰い受けあのカードを手にする事に成功したんだ・・・俺達は必ず計画を成功させ人間の頂点となり理想郷を造るのだ！！！！」

太陽は堂々とした態度で2人を見ながらも自分のするべく事を語る。今は此処でウダウダ言っていないで敵を粉砕する事こそ成すべきことだと力説するその態度は思わずジエニスとダークを納得させた。ダーク「そうだったな太陽・・・君達にはクロックアップ封じのスローベント以外にもオリジナルのあのカードを渡したから負けるわけがないな？」

ジエニス「確かに・・・そうだったな。お前達にはオリジナルでは3枚しかないあのカードを1枚ずつデッキに入れてあったな・・・だが油断はするな？コズミック以外にもドリーム、ルージュ、ローズやピーチ、エルスの他のメンバーも強力だからな」

太陽「ふうん分かってる。だがキュアピーチは貴様の獲物だろ？・・・それは自分で仕留めるよ？」

ジエニス「言われるまでもないな」

太陽「では次も俺達に任せてもらおうか？」

ダーク「いいだろう・・・ではジエニスはサポートを頼んだぞ」  
ジエニス「はっ！！！」

太陽とジエニスは玉座の間を後した。太陽は暗い廊下を進んでいくと夏実の部屋の前に立っている勇治と耕輔を見つけて声をかけた。

太陽「夏実の様子はどうか？」

勇治「はい。王蛇のパワーのお陰でかすり傷程度で済みました。傷も完治して今は寝てます」

太陽「そうか・・・次の作戦は俺と夏実がティガとセイバーをおびき寄せる。その間に残りの面々をお前達とジエニスがおびき寄せて

おけ」

耕輔「成程・・・先ずは敵のエースを一気に潰すんですね？・・・分かりました。適当に残りは相手をおきます」

太陽「よし。作戦開始は明日の正午だ。それまで各人はコンディションを整えておけ」

勇治・耕輔『はい！！！！』

3人はそれぞれの私室に戻った。明日はティガとセイバーを一気に潰すための作戦を展開し自分達の計画を確実なモノにする為に着々と行動するのだった。

矢車「何！？・・・そうか、分かった。詳しい話を後で聞かせてくれ」

影山「大人からですか？」

矢車「ああ。どうやら事の真相が分かったらしい。とにかく仕事片付けたら植物園に行くぞ」

影山「はい！！」

GUTS本部にいる矢車達は大人から報告を聞いて詳しい事を今夜聞くこととなった。その数分後須藤達がいる病院から連絡があり須藤と織田が意識を取り戻したらしい。2人は急いで病院に向かった。須藤「すみません・・・こんなザマで」

矢車「いや・・・命があっただけ設けモノだ・・・一体何があったんだ！？」

須藤「はい。万引きを補導した子が蟹の怪人に恐れていたんです。

俺達はその怪人を倒そうとライダーに変身して戦ったんです」

影山「それで！？」

織田「怪物は追いつめたんだが突然ライダーの様な奴らが現れてクロックアップを封じられた上でやられちゃった・・・かなり強かったぜ」

矢車「ライダー・・・マスクドライバーではなかったんだな？」

須藤「はい」

2人はあの時の思い出せる事を全て話した。今でも身体が覚えているあの圧倒的な力と身体が感じた痛み……。今考えたら生きているのが不思議だと思えるほどであった。

矢車「そうか……。大人から聞いた通りだな……。分かった。とにかくお前達はしばらく休んでるよ?」

矢車は納得したようにそう言った。先程大人から聞いた情報と一致する。どうやら今回の事件は駄々ならぬものらしい。

須藤「待ってください」

矢車「何だ!？」

織田「動けない俺達の代わりに調べてほしい事があるだ……。お前達しかできない事だ」

影山「俺達にしかできない事!？」

須藤「極秘でお願いしたい事があるんです。お願いします!!!」

矢車・影山「!？」

矢車達を呼びとめた須藤はカバンからある資料を彼らに渡した。矢車と影山は何だこれと言う様な顔になっていたが須藤と織田の目付きは真剣でありただならぬ空気である事は理解できた。そしてこの資料に記されているものこそが太陽達が人間に絶望することの発端となった事はまだこの段階では気が付かなかったのだった。

第35話地球解放軍編？「現状」（後書き）

いかん最近はこちらにのめり込んでいる・・・早くハトプリ劇場  
版も書かないと（汗）

さて次回は太陽達の次の作戦が動き出します。  
では次回のお楽しみに

### 第36話地球解放軍編？「太陽の過去」（前書き）

前回までのあらすじ

シザーズ達が操るミラーモンスターが行方不明事件を起こしていたと御子から聞く大人達。太陽達は大人達を倒すために犯罪者をモンスターの餌にしていたのだった。

その頃矢車と影山は須藤と織田に極秘にある事件の調査を依頼されることとなった。



### 第36話地球解放軍編？「太陽の過去」

大人「《いつまでも逃げているんですか？》か……のぞみちゃんに言われてそう言われても仕方ないよな。いつかはこの力の話をつぼみ達にしないとければならないんだよな……つぼみ達を信じているつもりでも……俺は……」

もう時刻は深夜で月明かりが街を照らす。大人は自分の家で電気もつけずに窓で景色を見ながら1人で考えていた。のぞみ達に言われた事が身に染みていたのだ。自分達はこのままで本当にいいのか？ そのジ自問自答を繰り返していたのだ。大人は分かっていたのだ。つぼみは誰よりも優しく決して人を差別するような人間ではない事ぐらい……でも本当にいまの自分の秘密を知っても《今まで通り受け入れてくれるのか？》《本当に自分達を恐れないでいてくれるのか？》《そんな事を考えると怖くて自分からは言い出せない。

大人「……（考えてみたら俺達が仲間になる前のつぼみも同じ気持ちだったんだろうな……仲間内で自分達がプリキュアだってバレないように必死になつて自分の時間を割いて他人ひとの為に戦っていた……男の俺でさえこんなに苦しかったのに……立派だよなアイツらは）」

大人はもしかしたらつぼみ達もこんな風に悩んだ事があるのかもしれないと思いついた。自分が仲間になる前はえりか、いつき、ゆりを入れてもたった4人だけ。プリキュアとして傷ついた事も多くあったはずだ……。なのに彼女達は力を投げ捨てることなくどんなに傷ついても戦ってきたし今だって自分達と共に自分を犠牲にして戦っている……。遠い過去につぼみを実の妹の様に可愛がりながらも過ごした記憶からは考えもつかない彼女のたくましさに大人は吹っ切れたような思いになった。

大人「……（例えウルトラマンの事がバレたとしてもつぼみ達ならきつと……でも今ではない……その時が来るまで言うわ

けには……)

だが今はその時ではない。今はその前に伝えなければならぬ事があった。ウルトラマンであると言う事実よりもっと大切な自分の気持ちをいつか彼女つほみに伝えるその時までには

琢磨「(信じるか……そうだよな……仲間だから受け入れてくれる事を信じてもいいんだよな?……えりか……)」

琢磨は夜の街を1人バイクで走っていた。考え事があるとき彼は1人でひたすら走る事で答えを探すのだ。道を走りながら自分達が明かすべき秘密の答えを探していた。琢磨にとつて今の仲間は本当に大切なものだった。ガタツクとして覚醒した時は戸惑い事が多かったけどそれをえりかや大人達が支えてくれた。そして今アースとして戦っている時も仲間たちがいたからどんな苦痛にも耐えられた・

・どんな事があつてもそれは変わる事はないと信じたかった。でも心のどこかでは今の絆が壊れるという懸念があつたのだ。それは琢磨だけではなく大人や傑も同じだ。だからそうならない為にも自分達だけが苦しめばいいと思っていた……でもぞみ達の言葉を聞いて気づ化させられた事があつた。今自分達がしてる事は結局は仲間から逃げている事なのではないかと……それは自分の弱さからも逃げている事にもなる。琢磨は走りながらも気持ちを整理する。今のままでいる事が本当の意味で仲間の為になるのかと言う事を考えながら……。もしもえりかならこういつ時どう言ってくれるだろうか

……琢磨はそれを考えながらバイクで夜の街を走り続ける。仲間の感情とは違う思いを抱く彼女えりかを思いながら

傑「つぼみ達は俺達から離れないか……この力の凄まじさを知っても本当にそうなのか!?……いつき……俺は本当に彼女を信じていいのだろうか?……」

傑は一人で希望ヶ丘にあるとある小山の丘で星を見ていた。ぞみ

や真夜に言われた言葉を思い起こしながら青い光を放つデユナミスパークレンスを見ながら本当にこのままでいいのかと考えていた。いつきならこう言う時あの太陽な笑顔を見せてくれるかもしれない。でももしも違ったら・・・考えたくはないが考えてしまうのが人と言うものだ。だからこそ今まではバレない様に必死に努力してきた。でもそれは間違いだと言われた・・・本当は自分のことしか考えていないのかもしれない・・・僕は星を見ながら考えを纏める。今の気持ちを何れ大切だと思っっている彼女いづきに伝えられるように。

矢車「・・・組織ぐるみでこんな事を・・・しかもこんな片付け方を」

影山「被疑者の妻は自殺し息子と娘は親戚に引き取られるもたらい回しにされてみたいですよ」

矢車と影山は須藤から依頼を受けたある事件について調べていた。すると驚くべき真実が明らかとなり今回の行方不明事件の真相と思われる推測も出来上がった。

矢車「連続行方不明事件の被害者のリストには須藤からもらった疑惑の首謀者と思われる人物の名があった。今回の敵の目的は復讐だ・・・そして復讐は終わったのだが怒りは鎮まることなくその復讐のターゲットが全人類とすり替わった・・・。なんて皮肉な」

影山「どうします？この事は大人達にも知らせますか？」

矢車「そうだな・・・今回の敵が人間である以上は彼らも知っておいた方がいいだろう。明日会いに行くぞ」

影山「はい」

まだ断定はできないが一刻も早く大人達にも伝えなくてはならないと矢車達は整理した資料を纏める。早く伝えなくては・・・そしてこの悲しい復讐劇を止めさせなければ。

翌日の正午に太陽達は動き出した。先ずは敵のパーティーを絞るた

めに太陽と夏実のグループと耕輔、勇治、ジエニスのグループに分かれたのだった。

太陽「では作戦は予定どおり・・・お前達は協力して残りのメンバーを足止め手しておいてくれ」

夏実「その間に私達がセイバーとティガを仕留めてくるから」

耕輔「分かってますよ。俺達は出来るだけ時間を稼ぎます」

勇治「万が一失敗したら連絡しまするのでその時は勇気ある撤退を」

太陽「ああ。分かっている」

ジエニス「では行くわよ!!!オペレーションウルティメイトブレイクの第2段階始動!!!!!!」

シザース達は止むの扉を潜り打ち合わせ通りに各人標的の元に向かう。

大人「・・・俺の思い・・・つぼみに伝えたい・・・今回の事件が終わったら必ず」

大人は昨日のぞみ達に言われた事を考えながら1日を過ごしていた。伝えるべき秘密と自分の気持ち・・・いつかは絶対に伝えなくちゃいけない。でもそのタイミングはいつなのだろうか?そんな事を考えていると・・・

女性の悲鳴「きゃあああああああああつ!!!!!!」

大人「!?!?!、ま、まさかミラーモンスターが!?!」

大人は急いで悲鳴のあった方向に向かうとボルキヤンサーが女性に迫り襲いかかるうとしていた所だった。大人はボルキヤンサーに飛び蹴りして怯ませて女性を逃がす。

大人「大丈夫か?・・・早く逃げる!!!!」

女性が逃げた事を確認してボルキヤンサーがいた方を見るとボルキヤンサーは既にミラーワールドに逃げていた。そして後ろから足音が響いてきた。

大人「!?!?!貴様!!!!!!」

太陽「ふうん・・・やはり来たか?バカな奴め・・・お前には悪いが今日この場で消えてもらおうか!!!!!!」

後ろから上下黒の衣服を着た太陽が姿を見せた。あの女性を囮に大人をおびき寄せたのだ。

大人「黙れ。お前が何を考えているかは知らないがこれ以上は誰も犠牲にさせない!!!」

太陽「出来るかな？今の貴様に」

太陽はシザースのカードデッキを取り出して鏡に掲げて変身ベルトVバックルを装備する。それに合わせて大人もライダーベルトを着しカプトゼクターを呼び寄せる。

大人・太陽「変身!!!」

電子音「HENSIN」

同時に仮面戦士の鎧を身に纏い睨み合う。風が吹く中も静寂が続く。。。

シザース「貴様はミラーワールドに入る装置を手に入れたそうだな？・・・なれば我々に相応しい戦いの場に招待してやろう・・・来い」

カプト「望むとこだ・・・ミラーテレポーター起動!!!」

シザースは先に行って待っていると鏡の中に姿を消した。カプトは御子から受け取ったミラーテレポーターを装備して起動させて同じ要領でミラーワールド内に突入する。

カプト「っ!!!・・・ここがミラーワールドか？・・・誰もいない」

先にカプトが鏡の世界ミラーワールドに到着した。見た目は自分達の世界と大差はないが鏡の世界と言う名の通り看板などは左右反転であり人間の姿は見られなかった。そしてしばらくすると銀色のスクーターの様な乗り物がカプトの目の前に現れると底からシザースが堂々とした態度で姿を見せた。

シザース「クロックアップが使えない貴様では俺には勝てん・・・今日この場で貴様を倒し俺達の計画を確実なものにする」

カプト「例えクロックアップが使えなくても俺は負けるわけにはいかない・・・行くぞ!!!」

シザース「来い!!!」

カブトはクナイガンを構えシザースに向かう。対するシザースもシザースバイザーを構えながら応戦する。

つぼみ「シザース達の事が気になって授業どころじゃないですね」  
えりか「言ってる。・・・こうしてる間にも敵は次の手を考えてるかもしれないもんね」

いつき「彼らがあそこまで人を憎み理由は何なんだろう?・・・人を餌にしてまで力を欲するのだからそれ相応の理由があると思うんだけど」

その頃つぼみ達は学校で授業を受けていた。彼女達は高校生である以上は平日は学校に行かなくてはならないのだが心情はそれどころではなかった。敵の次の手を考えると勉強よりもシザース達を探し出して一刻も早く暴走を止めたい・・・その思いが彼女達の心を焦らす。

つぼみ「とにかく今日からしばらくは学校が終わったら私たちもシザース達が何処にいるかを探しましょう。少しでも早くこの事件を解決するために」

えりか「そうだね。これ以上被害を増やさない為にも」  
いつき「うん」

とにかく今は自分達が出来る事をするしかない。つぼみ達は焦る気持ちを抑えつつ学校の授業を受ける。

真夜「君ならボク達の気持ちを理解できる・・・か。彼らがあそこまで人を憎むのはどうして!？」

口モモ「もしかしたらシザース達は昔の真夜ちゃんのように大切な人を奪われたのかもしれない口モ。だからあんな事を・・・」

真夜「・・・そうかもしれないね。私もかつてはアルティメットの誘いに乗って世界を破壊しようとして暗躍しその結果もう1人の私を生み出して悲しみを背負わせた」

口モモ「真夜ちゃん・・・」

真夜「でも私はあの時から決めたの。もう2度と私が受けた悲しみを生み出さないって・・・私の世界のつぼみや真夜との約束だから」  
真夜はシザース達の手掛かりを探すために行方不明事件の被害者の詳細を調べていたが昨日の戦いでガイの言った言葉が離れなかった。そうかつては真夜もシザースと同じく世界に絶望して自分の世界を滅ぼそうとした。1度目は自分の世界にいたつぼみに救われ光を取り戻したがその戦いの為にもう1人の自分を生み出してしまったのだ。そしてそのもう1人の真夜に哀しみを背負わせて自分の代わりに世界を滅ぼそうとしたのだ。真夜は2度の戦いの後に誓ったのだ。自分と同じような悲しみを生み出させず打ち消せるような存在になると・・・。それが親友ともう1人の自分と交わした約束であるから。今回のシザース達が自分と同じような悲しみを背負っているならその悲しみを打ち消してみせると真夜は決めていたのだった。

「???」一人でお散歩かしら? キュアセイバー・・・雨牙真夜!!!」

何処からか女の声がしてきた。声の方向を見てみると闇の扉から出てきた夏実がいた。上下黒い革の衣服を身に纏った彼女は真夜に笑みを見せながらも近づく。

真夜「!!!!・・・貴女は王蛇の」

夏実「自己紹介がまだだったわね?・・・私は山梨夏実。まあ今から消える貴女に名を名乗っても意味ないかしら?」

真夜「それはどうかしら?・・・私は消されない。そして貴女達を止めてみせる!!!!」

夏実「言うじゃないの?・・・でもすぐに黙らせてあげるわ!!!!」

夏実はカードデッキを取り出して? バツクルを出現させて装備する。真夜も変身しようと口モモがペンダント状のアイテムに姿を変化させるとそれを手に取る。

夏実「変身!!!!」

真夜「プリキュア・セントリバーズ!!!!」

辺りが白い光に包まれると真夜と夏実の姿も見えなくなる。光がやむとそこには王蛇とセイバーの姿があり両者仁王立ちといった体勢であった。

王蛇「・・・此処じゃうるさいギャラリーがいるからとっておきの場所で戦<sup>や</sup>ろうじゃない?・・・入れるんでしょう?ミラーワールドに」  
セイバー「・・・ええ」

王蛇「ふふ・・・話が早いわねじゃあ来なさい!!!!」  
王蛇とセイバーは同時にミラーワールドに突入し姿を消した。

カブト「たあああああつ!!!!!!」

シザース「ふんっ!!!!!!・・・はあああああつ!!!!!!」

アックスをバイザーで受け止めるとカブトのボディにパンチを入れ怯ませる。カブトはアックスで反撃しようするが身体は思う様に動かない。

カブト「ぐっ!?」

シザース「らあああつ!!!!!!」

その隙にシザースはバイザーでカブトのボディを斬りつけて火花を散らせる。

カブト「ぐわあああああつ!!!!!!」

カブトはダメージに耐えきれずにその場に膝をついてしまう。やはり強化されたシザースはかなりの強さでありクロックアップが使えないカブトにとっては手に負えない強力な相手と化している。

シザース「ふうん・・・やはりカブトでは相手にはならんか?」

カブト「くっ・・・シザースどうしてお前はそこまで人間を憎むんだ!?!・・・お前も同じ人じゃないか・・・なのはどうして?」

シザース「・・・冥土の土産だ教えてやろう。腐りきった人間の権力に己の夢と大切なものを潰された愚かなる男の話をな」

カブト「なんだと?」

シザースは構えていたバイザーを下ろすと突然話をし始めた。自分



が人間を憎むようになった理由のを……。

またその頃矢車と影山は植物園にゆり達を呼び出していたのだった。理由は須藤と織田に依頼された調査から今回の行方不明事件との関連疑惑が出てきた事を報告するためだった。

矢車「……ゆり、アンナ。他のメンバーは？」

ゆり「つぼみ達は学校が終わったのですぐに来るそうです。琢磨とタモすぐに来るでしょう大人と真夜は連絡が取れません」

矢車「そうか……。まああの2人なら心配いらんだろう」

影山「君達が大人の話にあったプリキュアだね？宜しく！！」  
のぞみ「宜しくお願いします！！！」

影山はのぞみ達に挨拶をし明るく振る舞う。のぞみ達も彼の態度に好印象を受けたのか握手を返した。そしてしばらくするとタ、傑、琢磨の残りの面々が集まった。

アンナ「で、話と言うのは？」

矢車「コレを見てくれ警視庁裏金汚職事件。覚えているか？」

ゆり「はい。確か首謀者として逮捕されたのは白夜総一郎でしたね？……これがシザーズ達に何の関係が？」

影山「実は当時犯人だとされた白夜総一郎は本当の黒幕のスケープゴートだったという事実が浮上してきたんだ。本当の犯人は現在の警視總監である矢田剛三郎だった」

ゆり一同「！！？」

矢車「当時の白夜氏は警視庁の参事官……立場を利用すれば裏金作ることなど容易だった。ただ彼を知る者達は彼がそんな事をする人間とは思えないと言う意見一色だったし密かに単独で裏金の事を調べていたのも彼だったらしい。また当時の裏金事件の捜査は何故か警察内部でも特殊な部署の特捜部が主導権を握り外部は勿論のこと警察内部にさえ一切の捜査内容を公開しなかったそうだ」

琢磨「そう言えば確かにそうだったな。マスコミも情報の公開が一切なく騒いでた印象があった」

傑「!?!?・・・ちょっと待ってください・・・じゃあ警察が組織ぐるみで自分達身内の膿を嗅ぎまわっていた彼を潰したって言う事ですか?」

影山「ああ。そして逮捕された白夜氏には息子と娘がいた・・・息子の名は白夜太陽。娘は白夜白湯。彼の一家は父親の総一郎氏が逮捕された後に母親は自殺し一家は崩壊・・・当時中学生だった彼と妹は親戚にたらい回しにされたそうだ。」

アンナ「矢車さん達はもしかしてその太陽って人がシザースだと?」  
矢車「・・・ああ。行方不明者に警察幹部がいた事に不審に思った須藤と織田達が調べた結果・・・本当の黒幕であったとされる当時の白夜氏の上司であり現在は警視総監となった矢田もその1人だった・・・そして須藤達が逮捕状を取り身柄を拘束する前に行方をくらましたそうだ。」

琢磨「じゃあ・・・今回の事件は自分の父親の冤罪の復讐!?!」  
タ「ちよつと待ってよ・・・それなら何で他の犯罪者まで餌にしていたのよ!?!?・・・復讐の相手を手にかけたのならそれで終わりの筈じゃ!?!?!」

勇奈「恐らくジェニスが彼をそそのかしたのよ・・・自分達のような人間を増やさないようにするためには《自分達が世界を支配すればいい》とでもね」

傑「じゃあまんまとその言葉に乗ってシザースは俺達を倒すためにモンスターの強化を!?!」

ゆり「その可能性はあるわね・・・」

最悪の推測は疑惑に変わった復讐心に支配された人間は何をするかわからない・・・只でさえ強化されて手に負えないほどの強力な相手と化しているシザース達を止める手段はあるのか!?!?

シザース「俺はそいつ等に全てを奪われたんだよ・・・薄汚い大人おとな共に大切な家族も夢も全てな・・・そして俺はその日を境に悟ったんだよ。人間なんて所詮は自分の欲望の為に他者を犠牲にし自分が

甘い汁を吸い続ける為に本当の正義すら権力とう力で踏み潰す・・・  
・人はそうやって悪魔になれるほど腐りきってしまったんだ。それを  
正しこれ以上《本当の正義》を踏みつぶされないためには・・・こ  
の俺が人の頂点に立ち全てをコントロールする事だとな！！！！！！

！！

カブト「・・・・・・・・」

シザース「そしてそれを実行する為には今の腐りきった人類に味方  
ウルトラマンとプリキュアを潰さなくてはならない・・・その1人  
ウルトラマンティガである貴様をなああっ！！！！！！！！！！！！！！！！

カブト「お前、俺がティガである事を承知で・・・（コイツにそ  
んな過去があつたとは・・・コイツの他の仲間にも同じような過去  
が・・・・・・・・）」

シザース「死ねええカブト！！！！！！。貴様の持つティガの力と共  
にこのミラーワールドに消えるがいい！！！！！！」

カブト「！？・・・ぐわああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！

シザースは某キャンサーを呼び出し更にシザースピンチを装備しカ  
ブトに斬りかかる。カブトは反応が遅れてシザースの攻撃を避ける  
事が出来なかった。カブトはクロックアップを発動させようとする  
のだがシザースはそれをも見逃さない。

シザース「させるかあああ！！！！！！スローベント発動！！！！！！

！！

カブト「！？・・・・・・・・ぐあああああああああ！！！！！！！！」  
スローベントの効果でクロックアップは封じられてしまったその隙  
にボルキャンサーに後ろを取られしまい動きを封じられるとシザ  
ースは容赦なくシザースピンチでカブトのボディを切り裂いた。衝撃  
に耐えきれず変身は解除されてしまいカブトは大人の姿に戻る。

大人「ぐうっ！？・・・あああ」

シザース「ふうん・・・終わりだな？上原大人・・・仮面ライダ  
ーカブト！！！！！！」

大人「（ここまでか・・・つぼみ、ごめん）」

今度こそコレで終わりだと大人の首にシザースピンチを押しつけられるシザース。最早此処までなのか!? 今残されてる手はウルトラの力しかないがシザースはそれを使わせる隙を見せない・・・。

セイバー「シザースにそんな過去が・・・でもどうして貴女も彼の野望に手を貸すのよ?」

王蛇「・・・私は彼のお父さんに救われたのよ・・・命をね」  
セイバー「!?」

王蛇「彼のお父さんは本物の人格者だった。ネグレクトを受けて親に捨てられた私を預かり実の娘の様に可愛がってくれた。私は太陽さんのんお父さんに生きる意味を教えられたのよ・・・でも彼は正義を貫こうとして陥れられたの?・・・その結果太陽さんは全てを失った・・・自分が肥え太る為に邪魔者をゴミの様に潰す警察・・・そして遊び感覚で犯罪を犯す犯罪者・・・実の子供をゴミのように捨てる親・・・世界は本当に腐りきってしまったのよ・・・人は自分の利益の為に平気で他人を落としたり入れて夢や愛する者を奪い取る・・・。こんな社会をいつまでも許すわけにはいかないのよ!!!!!!!!!だから全てを破壊し0に戻す事で・・・私達の樂園を造るのよ!!!!!!」

セイバー「・・・ふざけないで」  
王蛇「!?」

セイバー「例えどんなに絶望の谷底に叩き落とされた落としても・・・貴女達が人を傷つけている事に変わりはないわ・・・そんな事をして生み出された樂園なんて本当の樂園じゃない・・・そこにあるのは終わりなき怒りと憎しみの連鎖」

王蛇「黙りなさい!!!!・・・綺麗事ばかりじゃ世界は変わらない!!!!!!それは貴女も知っているはずよ!!!!!!」

セイバー「ええ。痛いほど分かる・・・でも私は貴女達を止める!!!!!!」



シザース「天道総司！！！！」

大人を助けたのもう1人のカブトの正体は3年前に大人を鍛え上げた伝説の戦士の天道総司だったのだ。キュアコズミックと同じく時空を超えて大人を助けに駆けつけたのだ。

第36話地球解放軍編？「太陽の過去」(後書き)

書きだしたら止まらなくなってしまうた(汗)やっぱり人数が多いと描写が大変だ

ではでは次回もお楽しみに

### 第37話地球解放軍編？「憎しみの力」（前書き）

前回までのあらすじ

明かされる仮面ライダーシザースの変身者である白夜太陽の過去。彼の目的は冤罪をきせられた事で奪われた家族の復讐だったのだ。そしてその復讐のターゲットは全人類へと切り替わり地球解放軍による総攻撃を行うにまで至ったのだ。

大人は彼の過去を知り戦う事を躊躇してしまい追いつめられることとなった。

追いつめられた大人を助けたのは彼の師匠である天の道を行き総てを司る男の彼であった・・・。



### 第37話地球解放軍編？「憎しみの力」

ダメージを受けた大人を総司は支えながらもシザースを睨んでいた。折角久しぶりに師匠と再会したと言うのにこんなザマでは正直かなり恥ずかしかつたのだった。

大人「天道さん・・・どうしてこの世界に？」

カプト（総司）「久々に弟子の様子を見に来た・・・とても言うておこうか」

シザース「弟子？・・・成程、上原大人はお前の弟子だったようだな？・・・しかし同じ太陽の神の力を使う弟子がこの程度ではカプトの名が泣くな」

シザースは2人の会話で2人が師弟関係であると察し付くと大人の事をバカにするようにそう言う。大人は返す言葉がなく悔しさに拳を震わせる。

カプト（総司）「まあ仕方あるまいコイツは俺の様に完璧ではないからな。だが1つ言える事はあるな・・・今のお前に大人をバカにする資格はない！！！」

シザース「何！？」

カプト（総司）「お前の過去を聞かせてもらった。だがお前のしている事はお前から大切なものを奪った奴等と大差はない・・・違うか？」

シザース「・・・」

カプト（総司）「今のお前はただタダを捏ねている幼い子供に過ぎん」

シザース「！！！！・・・貴様・・・貴様に俺の・・・俺達の闇が分かってたまるかあ！！！」

シザースは総司の言葉に冷静さを削がれシザースピンチを構えながらカプトに突進する。シザースの攻撃が当たる前にクナイガンで受け止める。



ベノスネーカーを囿にした王蛇はセイバーの懐に入り込み先程のお返しだとセイバーの胸をベノサーベルで切り裂いたのだ。王蛇は切り裂いた後姿をくらましてセイバーを翻弄させる。

セイバー「くっ！！！！（今の状態じゃベノスネーカーの毒液を避けるので精一杯で王蛇のスピードについていけない・・・でも王蛇を探さない・・・）」

白い彼女のコスチュームが血で赤く染まるがギリギリの所で後ろに下がったので致命傷にまではならなかったが傷の深さはそれなりでこのまま持久戦になれば体力的に持たない。血が滲んだ胸を件を握った手で押さえながらも消えた王蛇を探すがその間にもベノスネーカーの毒液の雨が彼女のカラダを溶かそうと降り注ぐ。傷を負った今のセイバーでは毒液を避ける事で精一杯で王蛇の姿を探す事にまで手が回らない。その間にも王蛇の毒牙はセイバーを追いつめるごとく静かに近付いていた。

王蛇「はああああっ！！！！今度は後ろがガラ空きよ？」

セイバー「があああつ！？・・・い、いつの間にも後ろに」

後ろからの斬撃と強烈なキックで飛ばされるセイバー。そしてその後王蛇の猛攻は続きセイバーは身体をプリキュアのコスチュームがズタズタにされるまで切り刻まれてしまう。そして最期の追撃のキックで地面に叩きつけられた身体はボロボロだった。しかし怯むこと鳴くセイバーはゴールドとシルバーのソードを王蛇に向かって振り回すが胸に受けた傷のせいで全力が出せずに避けられてしまう。

王蛇「どうしたの？・・・さっきの勢いはもうお終い？」

セイバー「はあ、はあ、はあ・・・まだまだあつ！！！！・・・私は負けない！！！！」

つぼみ「シザースの変身者にそんな過去があつたなんて」

矢車「織田は言っていたよ。今回の行方不明事件はただの失踪なんかじゃないってな・・・だがこんな事実が隠されていようとは俺達も想像できなかったよ」

えりか「でも間違ってるよ!!!警察に裏切られ家族を失っからって人を犠牲にした得た力で復讐なんて・・・悲し過ぎるじゃん」  
琢磨「えりか・・・」

いつき「シザースに慕っている残りのメンバーの詳細も分かったんですか？」

影山「ああ。須藤達の証言ですぐに正体を割り出せたよ。シザースの白夜太陽、王蛇の山梨夏実、ライアの神崎耕輔、ガイの冴島勇治この4人はごく普通の高校生であつたから特に問題視はしてなかつただけど調べてみると最初の行方不明事件が発生した3か月前から行方をくらませていた。」

矢車「山梨は幼いころに両親にネグレクトを受けてゴミの様に捨てられた所を白夜氏の養女として引き取られた事が分かつた。シザースである太陽を慕うのは恩義を感じているからだろう。だが残りの2人は普通の高校生であると言ふ事以外は何も掴めていない」  
いつき「ごく普通つて・・・本当に何もなかつたんですか？」

矢車「ああ家庭環境も特に問題はなかつた。だから不思議なんだとうして白夜と行動を共にしているのかがな」

つぼみ「その2人にも何か複雑な事情があるのでしょうか？」  
????「流石のGUTSだね?・・・まさかもう此処まで調べているとは」

全員「!!!??」

何処からともなく声が響いてきた。全員は思わずきよきよと辺りを見回すと植物園のミラーにガイとライアの姿があつた。

つぼみ「ガイ、ライア・・・」

ライア「よく俺達の事を調べたな?TPCも伊達ではないと言ふ事か」

ガイとライアはミラーワールドからつぼみ達を挑発するようにポーズをとりながら見下した態度でそう言う。

矢車「冴島と神崎・・・今からでも遅くはない大人しく投降しろ」

ガイ「そんな事すると本気で思っているんですか?世界の復讐鬼と

化したボク達が・・・ね？」

ガイは矢車のセリフにそう返す。初めっから彼らの言う事など聞くつもりなど毛頭ない。彼らの態度につぼみは思わず声を上げた。

つぼみ「どうしてなんですか！！！！・・・どうしてそこまでして世界を憎むんですか！？貴方達は今までの生活に何が不満だと言うんですか？」

ガイ「・・・どうして世界を憎みのか教えてあげようか？・・・それはねボクと耕輔は太陽さんと夏実さん以外の人間を信じられなくなっただよ」

全員「！？」

ライア「俺達・・・昔は華奢でシャイだったんだよ。そのせいで何かあるとイジメられてた。小学校までは助けてくれる奴もいたさ。ところが中学になると小学校まで味方だと思ってたやつらは知らんぷりだ・・・それどころか冷やかな目で俺達を見やがった・・・その時に俺達は悟った。人は自分に不利益な事は絶対にしないと・・・小学校の仲間は偽善者だったとな。殴られたり度が過ぎたイジメを受けていた俺達を中学の先公も助けようとしなかった。俺達がどんなに悲鳴上げてもどんなに助けてと叫んでも何もせず無視しやがった・・・。太陽さんだけだったんだよ・・・俺達を助けてくれたのは・・・あの人がいなければ俺達は自分で自分を殺していたんだよ・・・。」

ライアとガイは語り始めた自分達が世界を憎んだ理由を。それはつぼみ達には想像も出来ない彼らが受けた深い心の傷だった。彼らは昔のつぼみと同じシャイであった。そしてそれが原因でイジメを受けて身体だけではなく心に傷を負っていたのだ。イジメはそれを受けた人間にしかその苦しみや痛みは理解できない。弄られるとは違う。いや寧ろそれとイジメは紙一重で変わらないのかもしれない。しかし加害者は《弄り》のつもりでも実際に受けている人間からかすれば《弄り》ではなく《イジメ》と感じてしまうのだ・・・。そんな彼らを助けてくれた太陽の仕打ちを聞けば人を絶望して世界

を憎むには十分すぎるほどの理由だったのだ。

ガイ「ボク達はその後太陽さんが受けた仕打ちを聞いて絶望したよ。人なんて所詮は他者の力になって本音ではなるつもりなんてない。目先の利益の為に弱い者を犠牲にする。君達のような偽善者は自分に酔う為に弱者を助ける素振りを見せる。世の中腐っていたのは教師だけじゃない正義を司る筈の警察までもが腐りきったんだ!!!。それなのに人を信じるだって?・・・出来るわけないよ。・・・ボク達は誓ったんだ。絶対に世界に復讐すると!!!」

そして慕っていた太陽の家族の悲劇を聞いた彼らはかつての恩義を受け太陽と共に世界を破壊する事で自分達の苦しみを無くそうという単純な理由だったのだ。他者からすれば彼らが太陽の世界破壊計画に賛同した理由は小さいものかもしれない。しかし彼らにとっては十分すぎる理由なのだ。《イジメ》と言う法律では裁けず永久に無くなる事のない行為の被害者の彼らにとっては。

ライア「そして俺達は全ての人が平等な幸せを造るんだ・・・シザースである太陽さんが人の頂点に立つ事でな!!!・・・誰も苦しめない夢の様な楽園を・・・」

つぼみ「そんなの楽園じゃない!!!」

ガイ・ライア「!?」

ライアは興奮した口調でそう語った。自分達が受けて苦痛を他者に受けさせたくないという純粋な気持ち。しかしつぼみは震えが混じった大声を上げた。その反応にガイとライアは驚いた。

えりか「アンタ達が・・・過去にどんなイジメを受けたかは分からない・・・でもだからってこんな事しちゃいけないだよ!!!・・・どんな理由があってもアンタ達がイジメをした奴らと同じことしてどうすんの!!!」

いつき「自分達が憎い人間や憎いモノをひとつ残らず消し去って・・・一体何が残るんだい?・・・最後は一人ぼっちになるにきまつてるよ!!!そんな事しても君達の苦しみは癒せない・・・永久に太陽のない暗闇を彷徨い続けるだけだよ!!!」

ゆり「人は苦難を乗り越える事が出来る。貴方達は自分達の苦しみから逃げただけよ!!。そんな貴方達に世界を変えることなんて絶対にできないわ!!!」

アンナ「理性のない力からは何も生まれない。本当は分かっているんじゃないの?・・・こんな事無意味だつて」

ライア「黙れ!!!お前達のような温室育ちのお嬢さま、お坊ちゃんに俺達の傷の深さと痛みなど分かるわけがない・・・俺達が強いられた苦しみなどな!!!!」

ガイ「そうだ。ボク達が信じられる人は仲間の太陽さんと夏実さんだけだ。それ以外の人間など絶対に信じない」

つぼみ「なら私たちが貴方達のその心をチェンジします。貴方達の闇を光で照らす為に!!!!」

御子「その為に私たちも時空を超えてきたんです。絶対に貴方達の計画を止めて見せます!!!!」

ガイ「なら止めてみなよ?・・・ボク達をね!!!!」

ガイは指をクイクイツと動かしてこっちに来いと挑発をする。つぼみ達はミラーテレポーターを装着しながら変身アイテムを取り出す。

矢車「お前達はどんな闇を見てきたかは分からない・・・だが闇に堕ちるのならそれ相応の覚悟をしるよ?」

影山「本当の絶望なのか教えてやる」

矢車と影山の2人も久々に地獄スイッチが入ったのかホッパーゼクターを呼び寄せるとライダーベルトを装着する。

のぞみ「うわっ・・・コレが地獄兄弟?」

りん「余分な事言わない」

御子「お二人もコレをどうぞ。これでガイとライアがいる場所に突入できます」

矢車「分かった。相棒、久々に行くぞ!!!!」

影山「おう!!」

つぼみ「皆行きます。ミラーテレポーター起動!!!!」

つぼみ達はミラーテレポーターを一斉に起動させる。そしてつぼみ、

えりか、いつきはパヒュームをゆりはココロポットにプリキュアの種を装填し琢磨達ライダーはライダーベルトにゼクターを装填して変身を開始する。変身と同時にブロッサム達はガイとライアがいるミラーワールドの植物園のガラスに突入する。全員ミラーワールドに突入すると同時に異様な空気に重苦しさを感ずる一同にガイとライアが姿を現した。

ガイ「ふふふ・・今度は逃がさないよ？」

ライア「一人残らず消し去ってやる!!!」

ライアとガイはメタルホーン、エビルウィップを召喚して仮面の目を光らせながら睨みつける。必ず自分達の計画を成し遂げる為に。

セイバー「はあ、はあ・・あの毒液さえなんとかできれば・・・

出血した事も重なり動きは鈍い。白いセイバーのドレスは血で滲み所々紅いシミが出来てしまっている。このままではまずい。こうなれば使いたくはないが彼女を止める為にスターライトチャージクラッシュを撃つしかないと双剣をしまいリライフシンバルを取り出す王蛇「ふん、今更スターライトジャージクラッシュを放つ気?その身体で出来るか見物ね?じゃあこっちも必殺技を行くわよ!!!!」  
電子音「ファイナルベント」

王蛇は勝利を確信したかのように彼女の血が好いたベノサーベルを投げ捨ててベノサーベルと取り出しファイナルベントのカードをベントインする。今の状態で負けることなど万に一つあり得んという自信故の余裕だった。ベノスネーカーと共に王蛇は助走つけて走った。

王蛇「はあああああつ!!!!!!」

セイバー「くっ!!!プリキュア・スターライトチャージ!!!」

シンバルにエネルギーを溜め始めるセイバー。このままでは負けるのはいい自分。ならば相打ち覚悟だった。光が集約しエネルギーの充





カブト（総司）「はあっ！！！！」

クナイガンとシザースピンチがぶつかり合い火花を散らす中総司と太陽が変身するシザースの攻防は続いていた。総司の実力とシザースの力互角であるらしい。

シザース「ちっ・・・」

カブト（総司）「そろそろ本気で行くぞ」

電子音「CLOCK UP」

総司は一気に決めるとクロックアップでシザースを滅多斬りにするがシザースの強化された装甲にはクナイガン程度の斬れ味では効果は薄かった。蟹特有の頑丈な甲殻の前には総司といえども苦戦を強いられてしまうのだろうか？

電子音「CLOCK OVER」

シザース「ふん。その程度ではシザースの鎧は敗れんぞ」

カブト（総司）「やるな・・・ならば此処は一気に決める」

電子音「ONE TWO THREE」

シザース「ふうん・・・」

電子音「ファイナルベント」

こうなってしまうえば一気に決めるしか手はあるまいとカブトはクナイガンを投げ捨ててゼクターのフルスロットルに手を伸ばす。それを見たシザースはデッキからカードを引き抜きファイナルベントのカードをシザースバイザーにベントインする。

シザース「はあああっ！！！！」

シザースの後ろにボルキャンサーが出現し飛び上がったシザースをアシストし身体を高速回転させて上空に飛びあがる。その後上空から急降下して総司の元に向かう。対する総司はゼクターから造り出したエネルギーを右足に溜めていきフルパワーのライダーキックを向ってくるシザースに放つ。光が起こったかと思うえばその直後に爆発と爆風に辺りを包んでいく。両者とも衝撃に飛ばされたらしく膝をついた城田であった。

シザース「ちっ・・・やるな？上原大人とは格が違ったか・・・」

!!・・・時間切れか。・・・覚えておけ我々の邪魔をするというのなら全員この手で倒す。必ずな」

カブト（総司）「出来るのならやってみるのだな」

シザース「上原大人・・・ウルトラマンティガよ・・・本当にお前は这个世界を守るために戦う価値があると思ってるのか？」

大人「そ、それは・・・」

シザース「ふうん・・・ままいい。俺達の戦う理由を知った貴様らがどう出るか・・・期待させてもらおうか」

シザースはふと腕を見ると自分のカラダが粒子化し始めている事に気がついた。どうやら今回は時間が来てしまったらしい。最後にシザースは大人にそれだけ言つと闇の扉の中に姿を消した。

大人「・・・」

カブト（総司）「・・・何をしている。早くここから出るぞ」

尻餅をついたままの大人を起こすと総司は彼を連れてミラーワールドから脱出するのだった。大人もギリギリのところまで師である総司に助けられた。しかし大人の心は複雑であった。シザース達が世界を憎んだ理由・・・もしも自分だったら同じ事をしたかもしれないと思いつながら・・・彼の心は揺らぎ始めていたのだった。

### 第37話地球解放軍編？「憎しみの力」（後書き）

強化されたシザースの前には天道でさえも互角であった。果たして次の彼らの作戦とは……

次回も楽しみに

### 第38話地球解放軍編？「真夜と御子の過去」(前書き)

前回までのあらすじ

総司の助けによって救い出された大人。ちょうどその頃つぼみ達の前にガイの勇治とライアの耕輔が現れつぼみ達を倒そうと勝負を挑む。そしてまた同じころ王蛇とセイバーの戦いも決着がつこうとしていた。

### 第38話地球解放軍編？「真夜と御子の過去」

そして明かされた地球解放軍達の過去と抱える闇……大人は太陽の言葉に戦う事に迷いが生まれ始めるのだった。

大人「ありがとうございます助けてくれて」

総司「言っただろ？師弟の関係は断ち切れんと」

大人「そうでしたね」

シザースとの戦いを終えた総司と大人は最初に大人と太陽がミラーワールドに突入した裏路地にいたというのも大人の体力の消耗が激しくしばらく動けそうにないので休んでいたのだ。

総司「しかし、今度はお前と琢磨。傑がウルトラマンに選ばれとは思ってもいなかったぞ」

大人「……俺もですよ……まさか先祖の血筋からこんな物を受け継いでしまったなんて最初は信じられませんでしたよ」

久々に会った師に苦笑いしながらもそう言う大人。今まで押し隠していた力に対する迷いの気持ちをゆっくりと打ち明けるかのように総司「……その事はつぼみ達には？」

大人「……まだ言ってますよ。いつかは言わないといけないんですけどね……でも……今はまだその時じゃないと思うんです」

総司「そんな事を言っているが本当は怖いのか？今の関係が崩れるんじゃないかと思うと……」

大人「……そうですね。それもありますけど……」

総司「そうか。明かすか明かさないかはお前達が決める」

大人「はい。だからこの事は……」

総司「分かっている。野暮な事はしない……お前の口からつぼみ達に伝えるんだ」

総司の言うとおりであった。やはり彼には隠し事は出来ない。大人は静かにそう言った。そしていつかこの事は自分の口から伝えなけ

ればならないという事も分かっていた。総司は大人を起こすと植物園に向かおうと歩き始めるのだった。

ロモモ「真夜ちゃん大丈夫ロモ？」

真夜「ええ、なんとかね。でも後少して殺<sup>や</sup>られてたわ・・・いつつう・・・久々に斬られると痛いわね」

ロモモ「何を言ってるロモ!!!早く手当てしないとマズイロモ。とにかくつばみ達がいる植物園に行くロモ!!!」

真夜「そうね・・・携帯にも着信あったし何かあったのかも(王蛇の変身者、山梨夏実。彼女から感じ取った凄まじい憎しみと怒り・・・最初に会った時から感じてた威圧感の正体はコレだったのね)」  
同じころ真夜も傷の応急処理を済ませ消耗した体力を回復させるために休んでいるのだった。今回の戦いは本当にギリギリだった。自分に軽傷とは言え傷を負わせただけでなく真夜が変身するセイバーの渾身のスターライトチャージクラッシュさえも通用しなかったのだ。とにかくいつまでも此処にいても仕方がないと真夜は痛む傷を手で押さえながら立ち上がると状況方向と傷の手当てをする為にゆっくりながらも植物園に向かうのだった。

ブロッサム・マリリン・サンシャイン「プリキュア・トリプルインパクト!!!」

ガイ「よつと。隙が大きすぎるよ!!!」

ブロッサム・マリリン・サンシャイン「きゃあああつ!!!?」

ブロッサム、マリリン、サンシャインの合体エネルギー光波を軽々と避けるとメタルホーンで3人をそれぞれ突きあげてダメージを与える。3人は飛ばされた後受け身を取り体勢を立て直す。

ガイ「おやおや、もうおしまいかい?張り合いがないねえ」

ナイト「3人とも大丈夫?」

ムーンライト「バカにして・・・ナイト次は私たちの番よ!!!」

ナイト「オーケー!!!」

それに続くようにムーンライトとナイトがタクトとロッドを構えながらガイに突進する。ガイは2人のラッシュを避けれるものは避け避けきれない者はメタルホーンでガードをする。2人相手というハルデを背負いながらも2人の攻撃をものもしない。そして2人のタクトとメタルホーンがぶつかつた瞬間・・・

ガイ「所詮この程度か・・・はあああああああつ！！！！！」

ガイはムーンライト、ナイトの武器を受け止めてガチガチと金属音をさせながらガツカリしたかのようにそう言うと今まで抑えていた力を解放する様にメタルホーンを振り上げて凄まじい力でムーンライトとナイトをふっ飛ばして凄まじいスピードで間合いを詰めると2人のお腹に向けて追撃のパンチを放つ。

ムーンライト「がああつ！！？」

ナイト「ぐうっつ！！？」

2人は飛ばされた勢いにパンチされた事で加わつた力で更に増したスピードで飛ばされるとミラーワールド内の植物園のガラスを突き破って身体はガラスを貫通して植物園内部まで飛ばされしまう。流石のあの2人も大ダメージは避けられずすぐに反撃に転じる事は出来なかつた

ガイ「弱い・・・弱すぎる」

ダークカブト「2人とも大丈夫か！！？」

ガタツク「今度は俺達の番だ！！！」

フェアリー「いつまでも調子に乗つてるとものすごく痛い目見るよ！？」

ガイ「そうかな？」

ダークカブト、プロツサム、マリソ、サンシャインがムーンライトとナイトを介抱している間に続いてガタツクとフェアリーがガイに向ってきたがその攻撃もメタルホーンで受け流すように迎え撃つ。

ガタツク「くっ！！！！！」

フェアリー「強い！！！！！」



ガイ「言った筈だよ？・・・ボク達は君達を倒す為にモンスターを強化したと。ボクは君たちの様な偽善者は大嫌いだ！！君達はボク達と闘って何のメリットがあると言うんだい？・・・そんなに英雄と称賛される自分に酔いたいのかい？」

ブロッサム「違います！！・・・確かに貴方の言うとおり他者から見ればプリキュアとして戦っている私達は偽善者かもしれません・・・でも私達は誰かが傷つくのが見たくないんです！！・・・悲しみの連鎖は誰かが断ち切らないといけない・・・だから私達は戦うんです！！！」

ガイ「・・・（君達の様な人間に会っていたらボク達もこんな事しなかったかもしれない・・・でも、もう手遅れだ）・・・もうすぐボク達の計画は最終段階に入る・・・全旧人類に対する総攻撃の力ウントダウンは既に始まっているだ。それは例え君達でも止める事は出来ない・・・」

ガイの問いにブロッサムは力強くそう答えた。ガイはその言葉を聞いて一度その足をとめてそう言った。あの時、自分にもブロッサムのような人物がいてくれれば・・・そう考えると戦いに虚しさを感じてしまうのだがそれを振り払う様に首を横に振った。今のこの計画は自分の為だけではない。自分と耕輔を助けてくれた太陽の為にもあるのだ。ガイは迷いを断ち切った様にメタルホーンを振りもつすぐ自分達の計画は最終段階に入ると言う事を告げた。

ガタツクだ「だったらお前達を倒してそれを無理矢理にでも止めさせてやる！！。行くぞ！！！」

ガイはメタルホーンを光らせなが再度動き始めた。ガタツク達も武器を再度構えガイに突進する。

ライア「エビルダイバー、ライダーを攻撃しろ！！！」

ライアVSコスミックチーム&キック&パンチホッパーの戦いも激しさを増していた。エビルダイバーを戦うキックホッパーとパンチホッパーはクロックアップが使えない事で苦戦を強いられるがそれ

でも勝機を見いだす為に立ち向かう。

ドリーム「はああああああああつ！！！！！」

コズミック「でやあああああああつ！！！！！」

ルージユ・ローズ「やあああああああつ！！！！！」

ライア「甘い！！！！」

ドリーム、コズミック、ルージユ、ローズの攻撃を得意のムチ乱舞で防ぐようにして攻撃してきた彼女達を飛ばす。そしてそのまま彼女達。

エルス「皆！！！！」

ピーチ「よくも皆を！！！！」

ピーチは怒りに任せてライアに突進するがライアと彼女の間には衝撃が走るとピーチは飛ばされてしまう。

エルス「ピーチ！！！！」

ジェニス「貴女の相手は私よ・・・キュアピーチ！！！！」

ピーチ「ジェニス！！！！」

そう乱入してきたのはジェニスだったのだ。自分のオリジナルである彼女を倒す事がジェニスの最大のもうく敵である為にピーチがライアに傷つけられることすら嫌うのだ。

ライア「そう言えばそうだったな・・・ジェニスそいつはお前に任せろ！！！！」

ジェニス「分かっているわよ。アンタは残りの面々を片付けなさい」

ライア「言われるまでもねえな」

エルス「どうしてそこまでして人を憎めるのよ！！！！・・・どうして人を傷つけられるのよ・・・」

ライア「お前の過去も俺達は知っている。不思議だよ・・・俺達と同じような絶望を見ながらも人間を守る側になれるお前がな・・・まあ所詮今の俺達とお前達は違う・・・俺達の計画を邪魔する者は何があつてもぶつ潰す！！！！」

エルス「憎しみは憎しみしか生まない・・・だから私達は貴方達を救う・・・1人の人間として！！！！」

ライア「ほざいてな!!!!!!」

エルスとライアがぶつかり合い衝撃が走る。エルスの雷光のパワーとライアのライダーパワーがぶつかり合い反発しあっているのだ。

ガイ「……（そろそろ太陽さん達は上原大人と雨牙真夜を倒したかな?……）」

ガイはこの作戦の目的はあくまでも時間稼ぎであることを思い出し、戦いながらも願わくばブロッサム達を倒して邪魔ものを消し去る事が出来るのが理想ではあったのだが……。

太陽「勇治、聞こえるか!？」

ガイ「太陽さん?……此方は今のところ大丈夫ですがそちらはどうですか?」

太陽「予定が狂った。天道の奴が現れてな……とにかく作戦は中止だ帰還しろ」

ガイ「分かりました。皆、今日のお楽しみは此処までだ。帰還するぞ!!!!!!」

ライア「ちっ……もう少しのところで」

ジェニス「キュアピーチ……その命は今しばらく預けるわ」

ブロッサム「待ちなさい!!!!!!」

ガイ「ちっ……今日は終わりだと言った筈だよ?」

電子音「フラッシュイベント」

太陽からの無線が入り全員に作戦中止の指令が入る。やむを得ず全員は一枚のカードを発動して眩い光を放って姿を消すのだった。

マリリン「逃げられた……」

コズミック「仕方ないわね……私たちも此処から出ましょう!!!!!!」

こうなったら長居は無用だとブロッサム達一行はミラーワールドから脱出する。戻った先には怪我をした大人と真夜の姿があった。そしてなんと懐かしの顔もあった。

総司「よう。遅かったな?」

つぼみ・えりか・いつき・ゆり『天道さん!!!!!!』

そうそれは総司だったのだ。久しぶりの戦友につぼみ達のテンションも上がっていくのだった。

勇奈「天道君?・・・君もこの世界に?」

総司「久しぶりだな星川。まあそんなとこだ」

つぼみ「天道さんと勇奈さんはお知合いなんですか?」

勇奈「まあね」

御子「勇奈さんは色々な世界を旅しているんですよ。だから他の世界の英雄たちとも面識がありますよ」

えりか「なんか凄いね(汗)」

勇奈の顔の広さに一同は驚きが隠せないでいた。まあたださえ今の状況がぶっ飛んでいるから今更驚く事でもないが。

アンナ「お姉ちゃんあの人は?」

ゆり「あ、そうかアンナは知らないわね。彼は天道総司よ。別の世界の仮面ライダーなの」

アンナ「そうなんだあゝ・・・あ、私は月影アンナです。宜しくお願ひします」

総司「よろしくな・・・」

自己紹介が住んでいなかったアンナは総司に改めて自己紹介をするのだった。

大人「それよりも皆聞いてくれシザースの目的は」

つぼみ「復讐・・・ですよね?」

大人「!?!?・・・どうしてそれを?」

矢車「大人実はな・・・」

大人は矢車達からシザース達の事を聞いた。といってもシザースが言っていたことと夜矢車が調べていた事は全てが一致していたのだった。大人は信じられないと言う顔になっていて顔色も真っ青であった。

大人「そんな・・・本当に警察がそんな真似を組織単位で」

矢車「残念だが・・・そう言う事になる」

つぼみ「大人さん……」

大人は放心状態に近い状態になっていた。普通でいると言われて無理があるだろう。そんな彼が心配になりつぼみが彼の手を握る。そして大人は震えている身体から口を開いた。

大人「俺さ……はじめて戦いに迷いが生まれてるんだよね……。今までの敵は人間じゃなかったから《人を守るために戦う》って自分に言い聞かせてた。でも今回の敵は人間だ……。俺は人を傷つける為にこの力を使いたくなんてない……。例えどんな理由でもさ。だから戦う事を躊躇し始めてる」

えりか「でも戦わないとアイツらの計画を止める事が出来ませんよ？……それなのにそんな事……」

大人は自分の今の気持ちを素直に語った。ワームや宇宙人ならば戦う事に迷いは生まれないうが相手が人間となれば話は別になる。それに大人は人間を傷つけない理由があった……。それは3年前のZECTとワームとの戦いであのトラウマだ。

大人「分かっているよそんな事は！！！！でもさアイツらだつて被害者だろ？……欲望に取りつかれた人間のさ！！！！アイツらだつて被害者になる前は俺達と同じように時間を過ごしていた筈だ……。それなのに俺達はアイツらの主張を無視して牙を向けるのか？……そんな事しても根本的な解決にはならないだろ！？……いつき「それは……」

大人が言う事は最もだった。彼の言うとおり力で相手を潰しても解決にはならない……。それは彼の言う通りだ……。でもそれだけで解決できるほど今回の事件は単純なものではない。

つぼみ「大人さん……。気持ちは分かります。でも行くしかないんですよ……。戦うしかないんですよ！！！！。憎しみと悲しみの連鎖を断ち切る為には」

大人「つぼみ……。お前……」

御子「大人さん……。貴方の言う事は最もです。でも何もしなないだけじゃ彼らは救う事は出来ません……。私も彼らの気持ちは痛いほ

ど理解できる・・・」

ゆり「?・・・それはどういう意味?」

御子「・・・私も両親を殺されたんですよ。シザースと同じように正義を力で潰されたんです」

全員『!!!!!!』

御子の衝撃発言に全員その場で固まってしまふ。その間にも御子は自分の過去をゆっくりと語るのだった。

御子「私の両親はとある政府組織の科学者でした・・・その政府組織はこの世界で言う警察やGUTSのようなものです。当時の組織上層部の強引なやり口に私の両親は反発していたんです。そしてお父さんとお母さんは正義感ゆえに知ってはならないものを知ってしまったんです」

琢磨「知ってはならないもの?」

御子「はい。その内容は組織のトップポストの幹部たちが悪の組織の幹部と繋がっていた事でした」

傑「な、どういう事だ!?悪の組織ってまさかダークエンジェルス?」

くるみ「いいえ。ダークエンジェルスが出てくる前の組織・・・名前は《スーパーネガシヨッカー》そして他にも悪のウルトラマンウルトラマンベリアルなんていう性質の悪い連中とね」

タ「じゃあ・・・その幹部たちはそれを闇に葬り去る為に御子ちゃんんの両親を?」

御子「はい・・・最初は憎みましたよハラワタが煮えくりかえるほどに・・・しばらくしてエルスの力を手にしました。・・・でもお父さんが言っていた事を思い出したんです《プリキュアの力は闇に侵されていく世界を変えられるかもしれない》と・・・だから私は誓ったんです。これ以上悲しみを広げない為にこの力のプリキュアの光でみんなを守ると」

大人「・・・」

御子の過去を聞いた大人は更に複雑な気持ちになった。もしもシザ

「ス達にも御子の父親の様な存在がいたとしたら・・・考えると更に辛くなった。そんな彼の心中を察したのか今度は真夜が口を開いた。」

真夜「私も・・・昔はシザースと同じだった」

つぼみ「真夜さん？」

真夜「私はかつて光を捨てて闇のプリキュアだった時期があるのよ」  
つぼみ「えりか・いつき・ゆり・アンナ」  
「えええええっ！??？」  
まさかの爆弾発言につぼみ達はまた驚いてしまった。普段クールであるはずのゆりも大声を上げるほどの衝撃発言であつたから無理もないだろう

真夜「私は昔ボランティア団体に所属してたのよ。いろんな世界を転々として苦しんでる人を助けてたわ・・・でもある日に私はボランティアしてた国ごと全てを失つた・・・そして世界に絶望して闇の戦士キュアリベリオンとなった」

アンナ「・・・ダークプリキュアとはまた違うのね」

真夜「うん。だからシザース達の気持ちは痛いほど理解できるわ・・・でも私の世界のつぼみが私を全力で助け出そうと戦ってくれた・・・。そして私の憎しみは私に闇の力を授けた《アルティメット》に利用されていると知った時は本当に何もかも無くした気持ちになつた。そしてお払い箱となつた私はアルティメットに1度殺されたの・・・」

アンナ「私と同じだったんだね」

真夜「・・・ええ。でも私は口モモのお陰で生き返る事が出来たの・・・そして私を助ける為に戦ってくれたつぼみ達と共にアルティメットを倒した・・・でもそれだけじゃ終わらなかつた」  
大人「まだ続きがあるのかい？」

真夜「・・・私は光を手にしたけど闇の力を手に入れる時に契約を交わした怨念がもう一人の私・・・キュアリベリオンを生み出したのよ」

つぼみ「そんな・・・」

真夜「私は一度光を手にした事で全てを償ったと思ってた……でもそれは違ったのよ……私が犯した罪は消える事はない……でもそれから逃げていても始まらない……だから私は罪の十字架を背負いながら生きていくつもりよ……これからもずっとね」  
大人達は彼女が背負っているものの大きさに圧倒された。つぼみ達は特にそうかもしれない……自分達と同年の女の子がこれ程の覚悟と闇を背負っていたとなれば当然だろう。そして2人の過去を聞いた大人もまた答えが分からなくなってしまう。こんな過酷な過去を持っているのに今の自分はただ迷っているだけ……情けなくて悔しくなってしまう。

御子「大人さん……貴方が迷う気持ちには分かります。でも彼らの心を救う為にも戦いましょう!!!。それが彼らを救う唯一の方法なんですから……私たちの力はその為にあるんです!!!」

大人「シザース達を救う唯一の方法……。俺達の力の意味……。(頭で分かっているにも迷いが消えない……。そんな状態で俺は彼らを救う事が出来るのか?今の俺に……。)」

総司「大人……。ちよつと来い!!!」  
下を向いたまま大人は必死に考える。彼の煮え切らない態度に突然、総司は彼の胸倉を掴んで外に連れ出した。珍しい総司の様子に大人は勿論のこと他の面々も驚いてしまふのだった。

総司「何を迷っている?……。お前は大切な人を守るためにカブトに……。光の戦士の力を手にしたんじゃないのか!？」

大人「天道さん……。俺は……」

総司「お前も分かっているのだろう?闇に落ちたアイツらを救うには戦う事しかないことに……。お前の力はその為にあるのだろう?」  
大人「それは……。そうだけど……。今の俺にシザース達を救う事が出来るんですか?」

総司「らしくない事を……。2人の話を聞いてお前はどう思ったんだ?……。言ってみろ!!!」



大人「・・・分かってるんだよ・・・戦わないといけないことぐら  
い・・・そんな簡単なことぐらい！！・・・でも俺は人を傷つ  
けたくない・・・傷つける為に力を使いたくなんかないんだよ！！  
！」

総司「・・・そう思うようになったのは安西の事があるかだろう？あの  
時のようににしたいくないのだろうか？・・・だったら逃げるんじゃな  
い！！！手遅れになる前に。今のお前はあの時とは違う・・・今度  
は絶対に救って見せる！！！」

大人「・・・はい！！！（ありがとう・・・御子ちゃん、真夜。  
お陰で目が覚めたよ・・・俺はシザーズ達を憎しみの無間地獄から  
助け出して見せる！！！」

大人が迷っていた理由・・・それは3年前の戦いで安西を救えな  
かった事のトラウマだったのだ。彼はアレ以来人を傷つける為に力  
は使わないと決めた。だから今回の敵であるシザーズ達と戦う事に  
躊躇があつたのだ・・・だが総司の言葉で目が覚めた。今の自分が  
人としてできる事を全力でするしかない・・・それがシザーズ達  
を救う事になるのならそれをするだけだと。

太陽「天度総司が出てきたのは誤算だったな・・・だがもうすぐ  
完成する。全世界破壊兵器の《バトルシップ》が・・・そして4  
枚の《サバイブのカード》と《融合カード》のデータも完成も最終  
フェイズに入った・・・もうすぐ幕が上がる・・・本当の戦いが  
始まるのだ！！！！。その時こそこの俺が新人類の頂点に立つのだ  
！！！！。はははははははははははははははははははははははははは  
はははははははははははははははははははははははははははははははは  
はははははははははははははははははははははははははははははははは  
太陽はダークの拠点にある自分の私室にあるパソコンで計画の最終  
調整をしている所だった。地球解放軍は行うオペレーションウルテ  
イメイトブレイクの最終段階に必須な兵器も完成しつつあり今まで  
の戦いで得た敵のデータも十分に採取が出来た。あとはその時を待  
つだけだ。部屋からは太陽は高笑い響いたのだった。

**第38話地球解放軍編？「真夜と御子の過去」(後書き)**

今回も長くなった(汗)。

大人の迷いはどの主人公も悩んだ事ではないでしょうか？

さて次回はいよいよ太陽達の計画の全貌が明らかに！！！！

次回もお楽しみに

### 第39話地球解放軍編？「総攻撃前夜」（前書き）

前回までのあらすじ

相手が人間である事に迷いが生まれ始める大人。真夜と御子に隠された過去を聞き戦う意思を取り戻す。そんな中シザース達は全人類総攻撃計画の最終段階に入りキーアイテムの「サバイブ」「融合力ード」の完成もカウントダウンに入るのだった

### 第39話地球解放軍編？「総攻撃前夜」

太陽は自室でノートパソコンを弄っていた。以前の戦いで採取したハートキャップリキュア、救世の光キュアセイバー、光速を操る仮面ライダーカブト、そして突然現れた来客とでも言うべき存在のきゅあコスミック、キュアドリーム、ルージユ、ミルキイローズ、キュアエルの戦闘データを整理し完璧にまでシュミレートしている最中であった。

太陽「（光の巨人のデータはドクタークレイズがニセティガやキラートリニティを造った際のデータがある。今までのデータから整理し分析すると……ふっ……勝率は98%と言うところか……ふっ……当然と言えば当然だな。ボルキャンサー達には100人近くの生体エネルギーを吸収させただけではなくジェニスから受け取ったラグナロクストーンのパワーを埋め込んであるのだから……」

今の段階での計算は上原大人達の勝率は2%以下ならば大番狂わせがない限りは自分達の計画には師匠はない。そして自分の手元に最強にして完璧な手札が揃う。そうなれば憎き旧人類を跡形もなく消し去る事が出来るのだ。その時こそ全てを束ねる帝王として<sup>ジェネラル</sup>白夜太陽は君臨する……笑みがこぼれてしまう太陽。

太陽「くくく……何かもがこの俺の為に動き味方する。」  
太陽は歪んだ笑顔を造りながら作戦を練っていた。そしてしばらくすると夏実、勇治、耕輔の3人が入ってきた。

夏実「失礼します太陽さん……バトルシップの最終調整が終了し《融合》と《サバイブ》のカードデータも完全修復が完了しました」

太陽「そうかとうとう揃ったな……我等の計画を完全なものにする為の手札が。これで全ては終わる……では明朝にバトルシップで総攻撃を仕掛けるぞ!!!」

夏実・勇治・耕輔『はっ！！！！』

太陽「夏実、勇治、耕輔……よくここまでついてきてくれた……感謝している」

夏実「私には……太陽さんしかいませんから」

勇治「ボク達だって同じです。貴方がいたから今のボクがいる」

耕輔「我々の理想郷を作る為なら地獄だろうとお供しますよ」

太陽「ふっ……では各人明日の準備をしておけ」

太陽はノートパソコンを閉じる。自分が今まで積み上げてきた布石を解き放ち全てを0に戻す事が出来るのだと思えば興奮が隠せないのは無理がないだろう。

太陽「いよいよ始まる……そして全てが終わるのだ」

明日に全て完結する。その時こそ太陽は自分の中に巣食う全ての憎しみに打つ勝つ事が出来ると信じて……。

その頃の大人達はシザース達の今後の対策を議題に話を進めている所だった。

大人「全人類に対する総攻撃だった？」

つぼみ「はい。全人類を総攻撃するカウントダウンは既に始まっていると……」

ガイの口から出た《総攻撃へのカウントダウン》。この言葉はただ単にミラーモンスターで一斉に人間を狩り始めると言う意味なのだろうか？だがそんな単純な話で済む様な気は全くしなかった。

琢磨「総攻撃って……一体何をする気何だ？……まさかミラーモンスターで人間を無差別に襲うとか？」

アンナ「それはないと思うよ。《総攻撃》って言うならクレイズみたいに巨大兵器を使うのが手っ取り早い筈だし……それに全人類をミラーモンスターで襲わせるなんて考えにくいよ。」

ゆり「アンナの言うとおりね。でも彼らは普通の人間である以上は巨大兵器なんて簡単に作れるものかしら？」

真夜「分からない。でも何か凄まじい切り札があると言う事は確か

ね」

御子「ダークエンジェルスのジェニスが絡んでいる事を考えるとゆりさんやアンナさんや真夜さんの言う通りです・・・ミラーライダーの力の他に強大な大物を隠している可能性は十分にあるかと」

傑「ミラーモンスター以外の切り札・・・一体何なんだ」

全員『うん・・・』

全員が考え込むが全く思いつかない。太陽達が憎んでいる犯罪者はボルキャンサー達ミラーモンスターの餌にする事で簡単にすむ話だろう。だが全人類となると全く変わってくる。とにかく太陽達は全人類に対する総攻撃の準備をしている事は間違いない。

総司「・・・想像しても時間の無駄でしかないな・・・よし考えるのはここまでにして飯にするぞ」

全員『はいっ!?!』

総司「おばあちゃんが言っていた。勝負の時には考えるな・・・無駄な雑念は無駄しか生まないってな。とにかく今は飯にしよういい時間だしな」

総司は総司が時計を指さすと全員お腹の虫が一斉に鳴りだした。口では否定的でも身体は素直に反応してしまう。女性陣は顔が赤くなる。

大人「んじゃそうしますか。俺も手伝います」

総司「よし決まりだな。では食材を貝に行くぞ」

かくして一度休憩も兼ねて全員で食事をする事になり大人、琢磨、傑そして総司は食材を買いに行くこととなった。つぼみ一同に総司は久々に自分の手料理をふるまった。夕食を堪能し戦いの疲れを癒し栄喜を養う。そして一同は解散することとなり総司は大人の家に、女性陣はつぼみ達の家それぞれ別れて一夜を過ごすこととなった。

大人「・・・」

総司「大人」

大人「はい?」

総司「お前つぼみの事をどう思っているんだ？」

大人「！！！！な、な、な、な、何言ってるんですか急に？」  
夜になり大人は床に寝袋を敷いて寝ていた。というのも総司とのじやんけんで負けてしまい総司が大人のベットの使う事になってしまったからである。総司に突然つぼみの事を聞かれると大人は顔も赤くしてそう聞き返した。

総司「とぼけるな。お前がつぼみの事を想っていることぐらい既に分かっている。だからお前がティガの力を明かそうか迷っている事もな」

大人「・・・ホントに貴方には隠し事が出来ませんね・・・そのとおり俺は確かにつぼみに対する思いが日に日に変わってきている・・・でも昔の事が断ち切れずに妹の様に思っている俺もいます。」

総司「・・・成程な」

大人「結局は逃げているだけかもしれませんがね」

総司「おばあちゃんが言っていた・・・男がやってはいけない事が二つある。女の子を泣かせる事と食べ物で粗末にする事だっただからつぼみを絶対に泣かすなよ？」

大人「・・・はい」

偉そうにそう言われるが総司の言う事は最もだった。大人はその後しばらく総司と積もる話をする。

その頃つぼみの家には真夜と御子が止まっていた。夜になってもなかなか寝付けないつぼみはベランダで星を眺めている。すると同じく真夜と御子が来た。

真夜「つぼみ・・・眠れないの？」

つぼみ「真夜さん・・・それに御子さんも」

真夜「ねえつぼみってさ好きな人とかいるの？」

つぼみ「ええっ!?!?・・・い、い、いきなり何ですか!?!?・・・そんな藪から棒に」

真夜は突然つぼみにそう言う、つぼみは顔が真っ赤になりながら聞き返すが反応を見る限りでは凶星である事は明白であった。

真夜「いるんだね・・・どういう人なの？」

御子「聞かせてくださいよ」

つぼみ「しょうがないですね・・・その人は小さい時から私の事を守ってくれました。まるで私を本当の妹のように。私もその人を本当のお兄さんのように憧れを抱いています。一緒にいると暖かくて・・・」

つぼみは自分が思っている人の事を丁寧に語り始めた。彼は幼いころに自分を守ってくれた。そして自分もそんな彼に甘えていた・・・  
・今も本当の兄妹であるかのように。

真夜「へえ、今はその人はどうしてるのよ？」

つぼみ「今も近くにいます。私のすぐそばに・・・」

御子「もしかして・・・大人さんですか？」

つぼみ「／／／／／／／／／／」

御子が大人の名を出すとつぼみの顔がまた真っ赤になってしまう。

真夜「あ、凶星だった？（はあ、お互い両思いなのにこつとも進まないのは珍しいわね）」

つぼみ「はい・・・さつきも言ったとおり大人さんは私の兄のような人だったんです。昔は彼に助けてもらってばかりでした・・・でも今の彼は私に何か隠してる・・・そんな気がするんです。知られたくない何かがある。時々つらそうな眼をするんですよ」

真夜「・・・へ、へえ、（的を射てる・・・つぼみってホント時々凄い）」

つぼみは大人に対する思いを打ち明けた。今の彼は何かを自分に隠している。そしてそれを明かされるのを恐れている事も・・・真夜と御子は彼女の思っている事が事実である事をバレない様に接しながらもつぼみの感の良さに驚くのだった。

つぼみ「大人さんの苦しみを少しでも無くしてあげたい・・・でも大人さんは私にそれを明かしてくれない・・・それは私の力が不十



分だからなんでしょう？私が頼りないから大人さんは自分一人で抱え込んで一人で苦しんでいるのだとしたら……」

真夜「それは違う。」

つぼみ「……え？」

つぼみは大人が何かを隠しているのは自分に力がないから……自分が頼りないからだと思っっているのだ。そんなつぼみの意見を真夜は即座に否定した。

真夜「大人君はつぼみを傷つけないから……悲しい思いをさせたくないから黙っているんだと思う。それにつぼみだって大人君を何度も助けてるじゃない……頼りないと思っと思ってないと思うよ？だから大人君自信が秘密を明かすその日まで待つてあげなよ。彼が勇気を手にするその日までさ」

つぼみ「……勇気」

御子「真夜さんの言う通りです。きっと彼もそうしようと努力しているはずです……だからその時が来るまで待つてあげてください」

つぼみ「……はい。（本当に何を隠しているんですか？……大人さん！！！！）」

つぼみは星を見ながらも大人が隠している事が何なのかを知りたいと思う気持ちがあった。彼が自分にも言えない大きな秘密……何れ聞く事になるかもしれない

えりか「はあ」

えりかは眠れずにいた。自分の部屋にはコフレが寝息を立てながら熟睡しているのだが彼女は一向に寝れないようだ。

えりか「（アタシ達は偽善者なんかじゃない……そう思いたいけど……）」

ガイがいった言葉が未だに耳に残って眠れないのだ。えりか達が必死に頑張ってきた事を否定された上に偽善者と言われてしまえばそう思うのが普通だ。

えりか「（こう言う時琢磨さんならなんていうかな？……ちよ

つと電話してみるか)」

えりかは携帯を取り出し琢磨の番号にかける。遅い時間なので寝てるかもしれないがダメもとでもいいとためしにかけてみると・・・。琢磨「もしもし・・・どうしたんだ？こんな時間に？」

えりか「もしもし。いや大したことじゃないんだけど寝れなくて」  
琢磨「珍しいな？寝ることと食べる事ならすぐに実行できそうなのに」

えりか「むっ!?!?・・・何よそれ!!!!(怒)」

琢磨「じよ、冗談だよ本気になるなって(汗)」

えりか「全くもう・・・」

琢磨「で、どうしたんだよ？」

えりか「うん。実は・・・」

えりかは琢磨に自分の考えを言っつて琢磨の考えを聞く。お互いに思っっている事を聞ければ何かヒントになるかもしれないと思っつて。

琢磨「成程な。」

えりか「琢磨さんはどう思う?・・・アタシ達してる事偽善なのかな？」

琢磨「・・・答えはシンプルだな。偽善と正義は紙一重」

えりか「紙一重？」

琢磨「本の受け入りだけだな。正義とは己が正しいと思える行動でありそれは他者から見れば偽善に見える・・・っっていう理論がある。だから正義と偽善は人の考えで変わるんだ」

えりか「人の考えで・・・」

琢磨「だから俺達の正義をシザーズ達に押しつけても解決にはならない・・・でもやつらのやってる事は間違ってる。だから俺達は止める・・・そう言う答えじゃダメかな？」

えりか「・・・そうだね。考えてもしようがないよね・・・自分が信じれる事をすればいい・・・今までみたいに」

琢磨「ああ。それでいいんだよ」

えりか「ありがと琢磨さん」

琢磨「ああ。で、他には何か悩みごとはあるのかい？お姫様」  
えりか「ちよと何ですか？お姫様なんて」  
電話越しにお互いに笑うえりかと琢磨。2人は正にお似合いのカッ  
プルだった。

明堂院家にはのぞみとりんが泊っていた。深夜にいつきは眠れず部  
屋に一人でいた。

いつき「……………」

のぞみ「いつき起きてる？」

いつき「のぞみ？……………うん一応ね。」

すると部屋にのぞみとりんが入ってきた。どうやら彼女達も眠れな  
いらしい。

りん「やっぱり寝れないよね」

いつき「……………」

のぞみ「シザース達の復讐する理由が今だに信じられない？」

いつき「うん。大切な人を奪われた痛みはボクには分からない……………

もしもシザース達のような状況になったらボクも……………って考える  
とね」

シザース達が戦う理由を知った時はいつきも大人ほどではないが迷  
いが生まれていたのだ。自分もし大切な人を失ったらシザース達  
のようになるかもしれない。そうならないと言いきれない自分が情  
けないのだ

のぞみ「いつきの大切な人ってやっぱりお兄さん？」

いつき「うん。そしてもう1人……………大切な人がいる」

りん「もう1人？……………初耳ね」

いつき「うん。その人はボクにとっては大切なかけがえのないさ」

のぞみ「じゃあその人を守る為に頑張るぞ。けってえーい！！！」

りん「まったく緊張感がないんだから」

いつき「ふふつ。のぞみらしいけどね」

どの世界ノ存在であろうともそのぞみは全く変わりが無いといつきは

そう言うすると、のぞみは膨れた顔を見せる。

のぞみ「あ、ひどい」

のぞみはそう言って膨れた顔になる。だがすぐに笑い声が部屋を包んだ。

ゆり「・・・」

アンナ「お姉ちゃんまだ起きてたの？」

くるみ「まあ私たちもだけどね」

ゆりの家にはくるむが泊っていた。珍しく寝つきが悪いゆりはホットミルクを飲みながら時間を過ごしていたのだった。起きてきた2人にホッとミルクを出しゆりとアンナそしてくるみは眠気が来るまで話を始める。

アンナ「ねえ聞いてもいい？お姉ちゃん、わたしは1度死んだ時・・・どんな気持ちだった？」

ゆり「・・・あの時は私はクレイズに対する憎悪に支配されそうになっていたわ。私だけじゃなくて大人やつぼみも・・・」

アンナ「でもお姉ちゃんはシザース達とは違った。憎しみに支配されることなく私を助け出そうと戦ってくれた・・・」

ゆり「ええ。そして貴女を取り戻した・・・シザース達の憎しみと悲しみは私にも理解できるわ・・・でも彼らのやっている事は間違っている。憎しみや悲しみの連鎖は負しか生み出さない・・・彼らは私達に助けてほしいのよ・・・」

アンナ「そうね。憎しみに支配された心を解き放つ事が出来るのは私達だけだもんね」

ゆり「ええ。」

くるみ「シザース達にもちゃんとした理解者がいればあんな事しなかったかもしれないわね」

ゆり「そうね。彼らの心を癒すような存在がいれば」

話をして時間がどんどんたっていく。こうしている間にもシザース達はどうしているのだろうか？3人は考えていた。もしもシザース

達にも彼らの心を正すような存在がいたのならばこんな事にはならなかったかもしれないと思いながら……。

勇奈「……………（この世界にいる黒幕は一体誰だ？もしもティガ伝説がオリジナルとは違うのもだったとしたらあの3地以外にも闇の巨人も存在する事になるが……………ジェニスが言っていた邪神とはやはりあの強大な闇の事なのか？）」

ラブ「勇奈さん？」

勇奈「ああ、ラブまだ起きてたの？」

ラブ「勇奈さんこそ……………どうしてこんな時間まで？」

勇奈「いや……………ジェニスが言っていた言葉の意味を考えていたんだが」

ラブ「邪神の事ですか？」

勇奈「うん。もしも邪神が奴だとしたらこの世界どころか全ての世界は……………」

ラブ「大丈夫ですよ。この世界にはウルトラマンがいるんですよ？」

そんな簡単には……………」

勇奈「それとも限らないのよ……………もしもティガが……………」

ラブ「え？」

勇奈とラブは勇の家に泊っていた。勇奈はジェニスが言った邪神の事を考えたいのだった。邪神とはかつて自分も聞いた事がある伝説の魔獣であるがダークエンジェルスが狙っているとなると伝説は実在するのもかもしれない……………そしてティガ伝説は調べているが大人の世界にいるティガ達は違う点がある。もしも勇奈の考えが正しいければ……………

シザーズ達の総攻撃前夜。復讐心に支配された闇の戦士たちと闇に落ちた戦士達を救おうとする希望の戦士達は自分達が心の中で正しいと思う《正義》を信じて前に進んでいた。それは決して明確な答えがあるものではない。それぞれが信じる信念、プライドが籠った

それを武器に戦う。決戦の火蓋は切って落とされようとしている。  
果たして大人達は白夜太陽が率いる地球解放軍の復讐を止める事は  
出来るのだろうか？

第39話地球解放軍編？「総攻撃前夜」（後書き）

今回は決戦前夜を書いてみました。主役の大人達そしてこの長編の裏の主人公である太陽。2人が歩んだ人生は全く正反対のものであった。

さて次回はいよいよ決戦に突入です!!!

では次回もお楽しみ

第40話地球解放軍編？「決戦！動きだす破壊戦艦！」（前書き）

前回までのあらすじ！

遂に完成したシザース達の計画の要の手札であるバトルシップ、サイバウ、融合の3つの力。復讐鬼の戦士は自らの中に巢食う憎しみに終止符を打つべく戦いの準備を整える。

その頃それを止めるべくつばみ達も戦いに備えるがそれぞれがシザース達の憎しみについて考えていた……。



#### 第40話地球解放軍編？「決戦！動きだす破壊戦艦！」

翌日の夜明けを告げる太陽の光が希望ヶ丘の街を包み込んでいく。清々しい朝日を受けてすべての生物は眠りから覚める。海底の奥底にいるシザース達も地上の朝日を眺める。この朝日が自分の復讐の終止符シリョクドとなる事を信じて白夜太陽はシザースのカードデッキを取り出す。

太陽「これで貴様らの見る最後の朝日の光だ・・・旧人類よ。そして全ての復讐は完結するのだ」

《この俺が受けた屈辱を貴様らを踏み潰して晴らす・・・そしてこの俺が人間の頂点に立つ》彼を縛りつける憎しみと闇はオーラを放っているかのようだ。

シザースはカードデッキをしまいダークとジェニスが待つ玉座の間へと向かう。玉座の前には既に夏実達が待機していて太陽が来ると会釈をして太陽に敬意を払う。

ダーク「遂に始まるようだな？オペレ ションウルティメイトブレイクの最終段階が」

太陽「ああ。俺達の手の中に最強の手札へいしきは揃った。貴様らが恐れるプリキユアなど跡形もなく消し去るほどのな」

ダーク「期待している・・・では行くがよい地球解放軍よ！！！」  
太陽「ふうん」

太陽達4人そしてジェニスは玉座の間から出る。そしてある場所に向かつて暗い通路を歩きだす暫くすると玉座の間と比較すると倍以上の広さがあるう目的の部屋についた。その部屋には全長数百メートルはある超巨大な戦艦があった。これこそ太陽達の第一の手札へいしきである超破壊戦闘母艦のバトルシップである。5人はその前に立つ。太陽「とうとうこの時が来た。全てを破壊し0に戻す時が・・・」  
全てを捨てて此処まで来た彼にとってもう今の世界になど全く未練などない。全てを破壊して無に還す事が最大の目的である。その為

にモンスターをパワーアップさせて来ただけではなく自分達の死を覚悟してきた。

太陽「行くぞ!!!...必ず俺達解放軍が勝利し全てを終わらせる為に!!!」

夏実・勇治・耕輔「はっ!!!」

バトルシップの前に立ち4人はカードデッキを取り出すと同時にVバツクルが出現。各人変身ポーズをとる。

太陽・夏実・勇治・耕輔「変身!!!」

4人同時にカードデッキをベルトに装填してミラーライダーの姿に変わる。その後5人はバトルシップに乗り込んでいく。

ガイ「エネルギータービン起動率120%」

ライア「ビームランチャーシステム、オールグリーン」

王蛇「ウィングスタビリザー出力200%」

バトルシップのコンピューターを操作しバトルシップの各エンジン部位にエネルギーを集めて発進準備を開始する。順調に起動をし始めていき発進準備が整った事を王蛇から聞いたシザースは中央の席に座る。

シザース「バトルシップ発進!!!」

そしてバトルシップ発進の合図を出すバトルシップはエンジンタービンを点火させるとバトルシップは浮き上がる。そして目の前に闇の扉が出現し勢いよくそれを潜る。そしてその数十秒後には地上にバトルシップが姿を全地球人お披露目することとなった。

シザース「ふうん先ずは手始めに首都の東京を壊滅させてやる。レーザー発射準備、プリキュア共に見せつけてやるぞ」

王蛇「はっ!!!」

シザースは先ずは軽く街を甚振つてくれるとレーザー砲で街を無差別に攻撃を始めた。突然襲い掛かる破壊戦艦に人々は悲鳴をあげながら逃げ惑う。

シザース「さああ来いプリキュアあ、ウルトラマン共!!!」

街を破壊し燃え盛る炎が辺りを包み込んでいく。勿論この程度の攻

撃では自分の持つ怒りは収まるものではない。ウルトラマン達を誘き寄せる為の陽動でしかない。

ニースキャスター「全国の皆様ご覧ください!!! 突如空に浮かぶ巨大戦艦が東京を破壊しています。街は巨大戦艦のレーザー砲で焼き尽くされています!!!」

普段やる番組が突然中断となり東京が襲撃を受けている様を全国ネットの中継で放映される。当然すぐに大人達にもその情報が届いた。大人「アレがシザーズ達が言っていた全人類を攻撃するという。アイツらあんな物で世界を跡形もなく消し去るつもりか・・・」  
総司と大人はバトルシップが行う破壊活動の様子を見た後すぐに被害地域の救助に向かうべく荷支度を済ませていた。

総司「此処からじゃエクステンダーを飛ばしても間に合わんな・・・  
こうなれば行く方法は1つしかないな」

大人「ティガの力ですね？俺達だけでも行きましょう!!!」  
大人はスパークレンスを取り出す。こうなれば自分達だけで行かないと被害は増え続ける。つぼみ達には悪いが先に行かせてもらおうと思ったのだが・・・。

つぼみ「大人さん大変です!!! し、シザーズ達が!!!」  
大人「!!!・・・分かってるって!!! とにかく落ちつけ!!!」

大人の自宅の扉を開けて外に出よとするとつぼみ達が既にいて押し寄せていた。すぐに大人はスパークレンスをカバンにしまうと全員は外に出て大人が持つ携帯テレビに釘付になっていた。興奮するつぼみ達を落ちつかせようとそう言っていく大人。こうなれば時間がかかるが全員でバイクを飛ばして現場に行くしかないとヘルメットを片手に部屋を出ようとすると一回だったが携帯テレビのアナウンサーの一言で動きが止まった。

ニースキャスター「た、たった今入って来た情報です。戦艦よる攻撃は中断されたようです。繰り返し、攻撃は中断されたよう

です」

アナウンサーは額に汗を浮かべながらも情報を伝える。大人達は一度大きなため息をついてその場で脱力してしまう。だがそれも束の間だった。突然テレビの画面が真っ黒になる。大人はテレビが請われたのかと思いい角っこを叩いていくが反応はない。そしてその直後にシザースの顔が現れた。

シザース「聞くがいい愚かなる旧人類よ!!!我が名は仮面ライダーシザース。貴様ら腐りきった旧人類を滅ぼし新たな新人類の帝王となる者だ!!!!」

大人「これは!?!」

マントを羽織ったシザースのその何処かの部屋の椅子に座り足を組んだ状態で写されていた。その近くには王蛇、ガイ、ライア、ジェニスの4人の姿もあった。勿論電波ジャックを受けたのは大人のテレビだけではなく全世界の人々が同じ絵いぞを見ている。

王蛇「東京は我々が制圧した。そして今から24時間後にこのバトルシップを全世界の首都に送り込み全世界の一斉攻撃を開始する。

そして貴様ら旧人類は絶滅の時を迎えるのだ」

王蛇の説明に映像を見ていた人々は困惑をしながら怯える。

ガイ「言っておくがこれはイタズラではない。我々の兵器を見れば分かるであろう?」

ライア「何処へ逃げようとも無駄だ!!!!貴様らに逃げ場はない!!!!」

続いてガイとライアの発言に全人類はパニックを起こしてしまう。大人達は様子を見ることしかできなかった。

ジェニス「貴様らには望みはない・・・精々残された時間を後悔のない様に過ごすがいい!!!」

シザース「そして思い知れ・・・貴様らがいかに愚かであったかをな!!!!・・・くくくく・・・あーははははははははははっ!!!!!!!!!!」

最後にジェニスとシザースはそう言ってシザースの高笑いを最後に

映像は消えてなくなった。今の映像を見たテレビキャスターは大慌てでその場から逃げる様に姿を消しその直後にテレビの映像はしばらくお待ちくださいと表示される。

つぼみ「皆さんシザーズ達を止めに行きましょう!!!まだ時間は24時間あるんです・・・今から行けば間に合います!!!」

沈黙を破って第一声を発したのはつぼみであった。それに続くようにえりかが頷きいつもの笑顔を見せる。

えりか「うっしゃー!!!やってやるぞお」

そして片腕を上突き出してやる気十分だとアピールしていく。大人もそれを見ると手を前に出した。

大人「つぼみの言うとおりだ。必ず止めよう」

大人の手は全員の腕が重なる。今こそ自分達が立ち上がる時であると一致団結するように。

大人「皆・・・今俺達が持っているのは戦場への片道切符だ。もう後戻りはできないだろう。だけど俺達は絶対に負けられない。故に全員に守ってもらう事はただ1つだけだ・・・《絶対に何が何でも生きて帰る》これだけだ!!!」

大人の言葉に全員が返事をし掛け声を上げる。

大人・琢磨・傑・夕・総司「変身!!!」

電子音「H E N S I N & C A S T O F F」

ライダーベルト、ライダーブローチにそれぞれのゼクターを装填してヒイロカネの鎧に包まれていく大人達。そしてその後ゼクターを瞬時に操作して重厚な鎧を脱ぎすててシャープな姿のライダーフォームにフォームチェンジする。

つぼみ・えりか・いつき・ゆり「プリキュア・オープンマイハート

!!!」

アンナ「プリキュア・ナイトイリュージョン！！！」

真夜「プリキュア・セントリバーズ！！！！」

のぞみ・りん「プリキュア・メタモルフォーゼ！！！」

くるみ「スカイローズ・トランスレイト！」

ラブ「チェインジ！プリキュア・ビートアアップ！」

御子「プリキュア・ライトニング・トランス！！！」

勇奈「プリキュア・コズミックチャージ！」

それぞれの変身アイテムを取り出して辺り一面に光を放ちながらプリキュアの姿に変わるつばみ達。総勢12人全員が変身終わりライダー達はバイクに乗りこみプリキュア達はプロツサム達と共に飛びあがってバトルシップがある東京へと向かう。シザーズ達との決戦に挑む為に。

**第40話地球解放軍編？「決戦〜動きだす破壊戦艦〜」（後書き）**

次回からバトルシップ内部にて因縁の対決が始まります。対戦カードをどうかご想像ください。

では次回もお楽しみに

キャラクター紹介？敵キャラ編（前書き）

今更ながら敵キャラを紹介しようと思います。



## キャラクター紹介？敵キャラ編

ダークノイメージCV 緑川光

今作の事件の黒幕にして自称「闇の支配者」。400年前に先代のプリキュアのキュアアンジェとウルトラマンティガに敗れてしまい海底に封印されることとなった。3年前の砂漠の使徒との戦いで心の大樹が一度枯らされた事で封印が弱まり復活する。かつてプリキュアの力を甘く見た事を後悔しておりプリキュアの力を危険視している。現在は自身の闇の力の増幅と邪神復活に力を注いでおり各世界に僕を派遣して密かに準備を整えさせている。普段はマントに身が包まれているがそのシルエツトはウルトラマンティガと似ている。。。。。

キリエル人

第3話にて初登場。ダークの側近。ウルトラマンティガに勝負を挑むもプロツサム達の介入により敗れる。現在はダークの闇の力を増幅させて邪神を復活させる為に次元を超え世界を飛び回っている。

バルタン星人

第5話にて初登場。ダークの側近。主に生体改造を専門としておりバルタンの科学で改造した怪獣たちをティガに差し向けるが怒りに燃えるプロツサム達の活躍で怪獣を元の戻された揚句ティガ達に倒された。現在はバルタン一族の同胞が地球に向かっていているらしいが。。。

クレイズ

サロメ星人の科学者。サロメのロボット技術とダークプリキュアをキーとした作戦の『月の影計画』で大人達を倒そうと目論むがそれが皮肉にもキュアホーリーナイトを生み出すきっかけとなってしま

う。最後には最強ロボであるクイーンエメラルダスで心中を計るが覚醒したキュアホーリーナイトとブロッサム、ティガ達によって倒される。彼女の発明品のダークネスリング、ニセウルトラマンティガ、3体のキラートリニティーの性能は絶大なものであったのだが機械に頼った戦術故に咄嗟の支障に弱いのが最大の弱点である事に気が付かなかったのが最大の敗因であった。

## 邪神

かつて超古代文明を滅ぼしたと言われている伝説の存在。ダークは400年前に邪神復活の儀式を行おうと暗躍していたがキュアアンジエと先代ウルトラマンティガの活躍で阻止され海底に封印されることとなった。超古代文明を闇に沈め光の英雄戦士と相打ちになつたと言われるほどの強大な力を秘めているがそれ以外は謎に包まれておりその存在は今現在ダークしか知らない。邪神復活には大量の闇エネルギーが必要とされているらしくダークは闇エネルギーを集める為に暗躍をしている。

## 地球解放軍

白夜太陽 びゃくやたいよう 18歳 / 仮面ライダーシザース イメージCV 津田健

## 次郎

地球解放軍のリーダー的存在の少年。かつては優しい心の持ち主で将来は父と同じく警察官になる事が夢だったが彼が中学の時に父の総一郎が濡れ衣を着去られて逮捕された事で母親は自殺し一家は崩壊してしまう。その後彼は犯罪者の息子というレッテルを張られてしまっただけではなく親戚をたらい回しにされ愛情を受ける事はなかったために人を徐々に信じられなくなってしまう。そして高校生になった時に真実を知った彼は人を《自分の欲望の為に動く存在》と考えるようになってしまう・失意のどん底に落とされた彼はジエ二スの誘いに乗ってしまい仮面ライダーシザースの力を手に入れる。

その後の彼は自身の闇は果てることなく暴走してしまい憎しみの力を募らせてボルキャンサーに父を陥れた警察関係者や犯罪者を餌にしたり仮面ライダーザビーである須藤を奇襲などを行うほど冷酷になってしまった。

山梨夏実 やまなし なつみ 17歳 / 仮面ライダー王蛇 イメージCV皆川純子

地球解放軍のナンバー2で太陽を慕う少女。かつて親にネグレクトや虐待を受けていたのだがそれを太陽の父総一郎に助けられ白夜家の養女となった過去を持つ。しかし現在は白夜家が崩壊した為山梨の性を名乗っている。太陽には絶対的な信頼と忠誠を持ち彼を傷つけるものは誰であろうと許さない。太陽と共に仮面ライダー王蛇の力を手に入れる。元々は繊細で傷つきやすい性格だったのだが親に捨てられた過去があるため太陽や勇治、耕輔といった仲間と認めたい人間以外を信じる事が出来ない。かつて闇の存在だった雨牙真夜を敵視している。

冴島勇治 さえじま ゆうじ 16歳 / 仮面ライダーガイ イメージCV甲斐田ゆき

地球解放軍の作戦参謀役の少年。いじめられっ子の過去を持ちそれが原因で一時期は自殺も考えた事がある。しかし先輩である太陽に助けられた事で生きる勇気を取り戻した。しかしその後太陽の悲劇を知り太陽の計画に賛同する。

神崎耕輔 かみざき こうすけ 16歳 / 仮面ライダーライア イメージCV阪口大輔

地球解放軍のムードメーカー。勇治とは親友であり彼と同じいじめられていた過去を持つ。太陽と主に腐りきった世界を0にして自分の憎しみを晴らす事で全てをリセットしようと考えている様になる。君と呼ばれる事を嫌っていて偶に自分の名を君とつける勇治とはケンカになってしまうがケンカしてる様でじゃれているのにも見える。

第41話地球解放軍編？「決戦！それぞれの対戦者！」（前書き）

前回までのあらすじ

太陽達の第1の兵器とは超破壊戦艦「バトルシップ」の事であった。バトルシップの超火力で日本の首都の東京を壊滅させた太陽達は24時間後に全世界の首都にこのバトルシップで一斉攻撃を開始すると宣言を始めた。

大人達は全世界を守る為にそして太陽達の復讐を止める為に東京のバトルシップへと向かう。

#### 第41話地球解放軍編? 「決戦」それぞれの対戦者」

大人達が東京に着いた時には無残な状態へとなっていた。渋谷や銀座などの東京を象徴する街はバトルシップの攻撃で跡形もなく破壊され今もなお所々に火が舞い上がっていた。今の東京は太陽達の心の中に巣くう憎しみを現わすかのようでもあった。

ブロッサム「・・・ひどい」

ブロッサムは空からその光景を見て目を覆いたくなくなった。そしてこんなにも非道な真似を簡単に行ったシザース達に対する怒りが込み上がってきた。

ナイト「見えてきたよ!!!」

ナイトの声にプリキユア達全員が前を向いた。そこにはバトルシップの禍々しい姿があった。全長数百メートルはあるであろうその巨体からは凄まじいほどの威圧感がありその外装を見ただけでもバトルシップの脅威は伝わってきた。ブロッサム達は空から全体を見回していると大人の声が下から聞こえてきた。

カプト(大人)「ブロッサム、何処か入れそうな場所はないか?」

下にはエクステンダーから降りた大人達が何処か中に入れそうな入口を探しているところだった。

ブロッサム「いいえ。何処にもそんな場所は見当たりません」

ブロッサムは下にいる大人達に聞こえる声でそう言った。大人はそれを聞いて手を振って合図を送ると琢磨達と共に再び入口を探し始めるがその直後にバトルシップが変形を始めた。

フェアリー「な、何っ!?!」

フェアリーは突然の事で驚いてしまう。全員は攻撃かと思いきや構えるがバトルシップの下層部のゲートが開いただけであった。どうやらシザース達は自分達がいる事を知っているらしい。

カプト(総司)「中に入ってきて来い・・・ということか」

マリン「舐められたもんね・・・だったらお望み通り入ってやる

うじゃん。皆、行くよ!!!」

マリンを先頭に全員はゲートの中に入る。するとゲートは閉まり全員船内に閉じ込められてしまった。床などを見るとそこには鏡が敷き詰められていた。

サンシャイン「鏡?.....」

ムーンライト「まさか.....」

ムーンライトの直感は当たった。鏡から突然多数の影が出現してきたのだ。辺り一面にヤゴ型ミラーモンスターのシアゴート、メガゼール、オメガゼール、ギガゼールなどの野良系ミラーモンスターが大量に出現してブロッサム達に襲いかかる。当然大人達ライダー、ブロッサム達プリキュアは武器を片手に応戦を始める。

カブト・ガタツク・ダークカブト・フェアリー「クロックアップ!

!!!」

大人達ライダーははクロックアップと専用武器でシアゴートを攻撃して撃破して敵の数をどんどん減らしていく。カブトとダークカブトのクナイガンの斬撃、ガタツクのライダーカッター、フェアリーのレイピアから発せられるライダーストライク、様々な攻撃がミラーモンスターに炸裂し爆散していく勿論プリキュア達も負けず劣らず敵をを薙ぎ払う。

ブロッサム・マリン・サンシャイン「プリキュア・大爆発!!!!!!」

!!!」

ムーンライト「ムーンライト・シルバーインパクト!!!!!!」

ナイト「イリジジョンソード!!!!!!」

セイバー「セイバー・サウンドウェイブ!!!」

ドリーム「プリキュア・シューティングスター!!!!!!」

ルージュ「プリキュア・ファイヤーストライク!!!!!!」

ローズ「ミルキローズ・ブリザード!!!!!!」

ピーチ「プリキュア・ラブサンシャイン!!!!!!」

エルス「エルス・ライトニングスラッシュ!!!!!!」

コズミック「プリキュア・コスモブレイカー!!!!!!」

シアゴート以外のモンスターもブロッサム、マリリン、サンシャインの合体技の大爆発で四方八方に吹き飛ばされムーンライとのシルバインパクトで壁に叩きつけられナイトのイリュージョンソードで真つ二つに切り裂かれ、セイバーのサウンドウェイブで消滅しドリアムのシューティングスター、ルージユのファイヤーストライク、ローズのブリザードが合体した攻撃が叩き込まれピーチのラブサンシャインで浄化されエルスのライトニングスラッシュで斬りつけられコズミックのコスモブレイカーでの光の拳でシアゴートは次々と倒されていく。だがミラーモンスターは倒されても倒されても代わりが出現してくる。

カブト（大人）「キリがないな・・・仕方ないブロッサム達は先に行け。此処は俺が引き受ける」

ブロッサム「な、何言ってるんですか！！！！一人でこの数を相手にするなんて無謀すぎますよ」

全員ミラーモンスターに囲まれて背中合わせの状態になりながらも大人は時間の無駄だと判断し自分が此処に残り此処にいるモンスター達を引き受けると言い出す。ブロッサムは彼の提案を拒むように反論の声を上げるが大人はブロッサムの手を握ると彼女を諭すように優しい口調で声をかける。

カブト（大人）「大丈夫だこんな雑魚ぐらいじゃ俺はくたばらないよ。それに総攻撃までに時間がない。此処に誰かが残ってコイツらの相手をする以外に今の俺達に手段はない！！！！」

ブロッサムはうつむくように顔を下に下げるが前を向くとキリつとした顔を見せて静かに頷いた。今は迷っている場合ではない・・・多少のリスクは覚悟して先に進むしかない

ガタツク「確かに言ってるな・・・なら俺とダークカブト、天道さんも此処に残ろう。4人もいれば雑魚の相手は十分だ！！！！」

ダークカブト「ああ。俺以外はハイパーフォームになれる。だから先に行け・・・そしてシザース達を止めて来い！！！！」

マリリン「ガタツク・・・ダークカブト」

サンシャイン「分かった。無理はしないでよ」  
カブト（総司）「心配するな。この俺がいるんだから」  
囲まれながらも全員は必ず生きて合流すると誓い合うように頷く。  
それを合図にしたようにブロッサム達プリキュアとフェアリーが飛び上がる。それを見たモンスターたちは彼女達に襲いかかろうとするが大人達ライダーがそれはさせまいとクロックアップでモンスターを蹴散らす。

シザース「やはりそう来るか。だが易々と俺達の所に来れると思わない事だな」

ゲート周辺の様子を指令室のモニター画面から見ているシザース達。最初は歓迎の意味を込めて雑魚のミラーモンスターを大量に投入してみせたがやはり簡単に突破してきた。

ガイ「シザースさん。次はボク達が行きましょう」

シザース「ああ、任せたぞ。ガイ、ライア」

ガイ・ライア『はっ！！！！』

此方に向かってくるプリキュア達の相手はライアとガイは指令室を後にする。

王蛇「念には念を入れて私も待機しておきます」

ガイとライアが指令室をあとにすると王蛇も部屋を出ようと足を動かす。シザースは一度王蛇を呼びとめる。

シザース「・・・無理はするな」

ただ一言だけそう言うシザース。王蛇はそれにこたえる様に振り返ると頷く。

王蛇「・・・大丈夫ですよ。此処に帰ってきますから」

いつもになく明るい声でそう言う王蛇。そしてそのまま回れ右をして指令室を後にした。

シザース「・・・すまない夏実」

王蛇が出たのを確認するとシザースは下を向き力なくそう言った。  
力ない自分の拳を作りながら彼はモニターを見直す。



ブロッサム達はバトルシップ内を走りながら上に上がる。途中にもミラーモンスターはいるがそれをなぎ倒しながらも大人達の思いを無駄にしないために先に進む。暫くすると大きな扉がある場所にたどり着いた。

ムーンライト「ここ以外は行く道がないわね。畏かもしれないけど行くしかなさそうね」

辺りを確認しながらもこの扉以外先に進む道はない。ならば畏かもしれないが行くしかないと扉を開ける。すると中にはメタルホーンを装備したガイとエビルウィップを構えたライアの2人が待ち構えていた。

ガイ「来たね？でもここから先には行かさないよ」

メタルホーンを光らせながらそう言うガイ。恐らくガイは本気でむかってくるだろうし彼の契約モンスターはラグナロクストーンと生体エネルギーで強化されている。人数ではプリキュア達が圧倒しているがガイは力ではそれを凌がれかねない。手強い相手とどう戦うかと考えいる中でローズとルージュが前に出る。

ローズ「皆、先に進んで。」

ナイト「ローズ!？」

ルージュ「ガイは私とローズが引き受けるから」

ブロッサム「そんなんっ!!!何を言って……」

いくらなんでもこの2人相手に無茶し過ぎだとブロッサムが声を上げるがローズは振り返り余裕とでも言うような顔を見せる。

ローズ「大丈夫よ私達で十分。だから先に行つて」

ルージュ「此処でつまずいてたら大人さん達に怒られるよ?」

続いてルージュも笑顔を見せてブロッサム達にそう言う。今の自分達の目的はシザースを止める事にある。だったらリスクはやむを得ない。

マリリン「分かったよ。2人とも頑張つて!!!」

2人の意思を受け継いだとブロッサム達は出口の扉まで全速力で走る。ガイはさせるものかとブロッサム達の元に向かうがルージュと

ローズがガイの前に割り入り動きを止める。

ローズ「アントの相手は私達って言った筈よ？」

ルージュー「ブロッサム達の邪魔はさせない」

メタルホーンを受けとめながらローズとルージューはガイに一発パンチを入れてガイをふっ飛ばす。ガイは舌打ちをするとやれやれと言っようなポーズをする。

ガイ「まあいいや。君達を先に倒させてもらおうよ」

ガイはメタルホーンを振り上げてローズとルージューに向かって走る。その後ブロッサム達はバトルシップ内部でシザースがいるであろう最上階を目指して爆進する。途中に出てくるメガゼールなどの雑魚モンスターを蹴散らしながら階段を上がり上に突き進んでいく。そして暫くすると広い渡り廊下がある場所に出ると渡り廊下の出口の前に第2の戦士仮面ライダーライアが立ちふさがっていた。

ライア「ここから先に進ませない」

エビルダイバーを既に呼び出しているライアは纏めて相手をするつもりらしい。ライアは鞭を振りながら構えるとそれに合わせてエルスが前に出る。

エルス「彼の相手は私が。皆さんは先に進んでください!!!」

ライア「・・・キュアエルス1人だけとは俺も舐められたものだな？」

ライアはエビルウィップを振って床に叩きつけてそう言う。だが誰ひとりとして先に進ませないとライアは前が出るがそれと同時にエルスが飛び出してライアとぶつかる。

エルス「早く!!!」

サンシャイン「エルス・・・ありがとう」

サンシャインはエルスに一言そう言う。そして全員渡り廊下の出口に向かって突き進んでいった。

バトルシップの内部の大部分を突き進んだブロッサム達はシザースを目指す。奥に進めば進むほどミラーモンスターの数は減っていく。まるで自分達を誘き寄せるかのようにだったが此処は敵の本拠地であ

り何があつても自分達には進むしかない。突き進んで最上階の近くの階段を上ったその先には闘技場のような場所に王蛇とジェニスの姿があつた。

王蛇「・・・ふん」

ジェニス「来たわねキュアピーチ」

ピーチ「ジェニス」

ジェニスは宿敵のピーチを睨みつける。ピーチにとつても彼女は因縁の相手であることは間違いない。

王蛇「この先の階段がシザースさんへと続く最後の階段だ。だが貴様らはここから先に行かすわけにはいかない・・・ここで纏めて消えてもらおう」

王蛇はそう言つて一歩前が出る。ここから先へは絶対に進ませないと威圧感を放ちながら・・・だがそれに反するようにドリームとピーチが前に出た。

ドリーム「ブロッサム・・・王蛇の相手は私がする。だから貴女達はシザースを」

ピーチ「皆の思い・・・託したよ」

ブロッサムは静かにうなずきパヒュームでレッドの種の力を使いクロックアップ並みの高速移動で階段へと突き進んだ。そして残されたのはドリームとピーチ、王蛇とジェニスだけとなつた。

王蛇「ちっ・・・お前達を早々に片付けて奴らを」

ドリーム「そんな事させない・・・貴女達を救う為に」

王蛇「・・・っ！！。黙れ」

王蛇はドリームにターゲットを絞り攻撃を始める。ドリームもそれに応戦しながら闘技場に凄まじい走つた。

ジェニス「貴様を倒し・・・私は私になるっ！！！！」

ピーチ「・・・」

ピーチとジェニスの因縁の戦いも始まつた。4人の死力を尽くした戦いは闘技場内に凄まじい衝撃を送りながらも4人の闘志は揺るがない。

ブロッサム達はその頃最後の扉の前にたどり着いた。そこを開けると大きい玉座のような椅子に腰かけてマントを羽織ったシザースの姿があつた。

シザース「ふうん」

ブロッサム「シザース!!!!!!」

ブロッサムの声にシザースは反応したように立ち上がりマントを靡かせる。そして玉座の椅子からゆっくりと離れてブロッサム達に近づく。

シザース「よくここまで来たな?・・・てつきり相手が人間である事に怖気づいたかと思つていたが」

シザースは腕を組んでそう言う。プリキュアやウルトラマンは人を守る為に戦う戦士である。その人間が敵となればどうなるか楽しみだったシザース。その言葉にブロッサムは静かに口を開く。

ブロッサム「貴方達の過去がどれだけ辛かったかは聞きました・・・でも私達はこの世界を守る為にプリキュアになった。だから例え敵が人間であっても逃げるわけにはいかないんです!!!!!!」

ブロッサムの一言にシザースは鼻で笑いながら一度高笑いをする。

プリキュア達は彼の様子に困惑する。高笑いが終わるとシザースは前を向く

シザース「ふざけるな」

ブロッサム達「!!!!!!?」

シザース「この世界を守る?・・・俺達はなこの世界に捨てられた人間なんだよ・・・お前達のような人間の負の感情を知らない餓鬼共が一番腹立たい!!!!!!」

シザースはマントを脱ぎすてて今の自分の思いを全て暴露する。荒々しい彼の口調にブロッサム達は思わず目をそらしてしまう。

シザース「ふうん・・・貴様らを倒しこの俺が新人類と新世界の帝王となるのだ!!!!!!苦しみのない楽園を造る邪魔はさせん!!!!!!」

「!」

シザースはそう叫ぶとブロッサム達にダッシュする。ブロッサム達も応戦するべく専用武器を取り出してシザースに向かう。

第41話地球解放軍編？「決戦〱それぞれの対戦者〱」（後書き）

今回はアンケートの対戦カードを一部採用しております。次回はバトルに突入とシザース達の価値観にプリキュア達が一喝します。

ではでは次回もお楽しみに

第42話地球解放軍編？「決戦！心の闇」(前書き)

前回までのあらすじ

バトルシップ内に潜入した大人達はバラバラになりながらも思いは一つだと誓い合いそれぞれの戦いを挑む。プロツサム、マリィン、サンシャイン、ムーンライト、ナイト、フェアリー、セイバー、コズミックの8人は全員の思いを受け継いで仮面ライダーシザースに立ち向かう!!!

## 第42話地球解放軍編？「決戦！心の闇」

大人達ライダーはミラーモンスターを出来る限り倒していた。だがいくら倒してもまるで砂漠の使徒のスナッキーの様じゃうじやとわいてくるので消耗戦を強いられている。このままでは自分達の体力が尽きるのは時間の問題だ。

ガタツク「コイツら一体何匹いるんだよ？」

ダークカブト「知るかつ！！！！一面に鏡である以上何体でもわいてくるぞ」

ガタツクの愚痴にダークカブトがそう言う。そして2人は同時に走りミラーモンスターを斬りつける。

カブト（大人）「《鏡がある以上は何体もわいてくる》・・・鏡・・・っ！！！！」

ダークカブトの言葉に大人は何かを思いついたかのように鏡に向かってクナイガンを投げつけて鏡を割り始めた。総司はその彼をみて「成程」と称賛するとそのまま彼と同じようにクナイガンで鏡を壊し始める。

ガタツク「おい大人っ！！なんで鏡を？」

カブト（大人）「奴らは鏡から出てくる・・・だったらその出入り口を壊しまえればこれ以上は数は増えない。いいか皆、徹底的に鏡になる様なものは壊すんだ！！！」

ダークカブト「成程な。バカ正直に相手するよりは敵を増やさない策を考えればいいと言う事・・・か！！」

ガタツクとダークカブトは大人の意図を理解するとクロックアップを使い壁や床にある鏡を壊し始めていく。ミラーモンスターは元々鏡の世界のモンスター。此方に入れる時間は限れると御子は言っていた事を思い出した大人の機転を利かせた作戦だ。

ハイパーカブト（総司）「全員後ろに下がれ」

電子音「All Zector Combine！！」



いつの間にかハイパーフォームとなつた総司がパーフェクトゼクターを起動させて全ゼクターを合体させた最強のパーフェクトモードのするとそのままハイパークロックアップで鏡とミラーモンスターを同時に爆散させる。辺りに残つたのは鏡の破片とミラーモンスターであつた残骸であつた。

カブト（大人）「これで片付いた・・・行こう!!!」

かなり後れを取ってしまった。だが今ならまだブロッサム達に追い付くかもしれないと大人達は先に進む。急いでいけばまだ間に合うと。

ルージュ「プリキュア・ファイヤーストライク!!!」

ローズ「ミルキイローズ・ブリザード!!!」

ルージュの炎とローズのバラの衝撃波がガイに向かつて放たれる。

だがガイは一枚カードを引き抜くと余裕そうに「バカだね」とつぶやく。

電子音「コンファインベント」

2人の必殺技はガイに当たる寸前で消滅してしまった。動揺する2人にガイは一気に距離を縮めるとそのままメタルホーンで2人を殴り飛ばすと2人は壁に叩きつけられて身体が減り込んでしまう。2人は咳をしながらも立ち上がりガイの対抗策を考える。

ルージュ「たしかガイはコンファインベントのカードを複数所持してるっていうデータがあつたけ?・・・」

ローズ「ええ。だからコンファインベントがある限り私達の必殺技はガイに届かない・・・あのカードを何とかしないと私達に勝ち目はない」

ガイの持つ特殊カードのあらゆる能力を殺す力があるコンファインベントを封じない限りルージュとローズに勝機はない。通常の場合にはミラーライダーの持つカードは1回の戦闘で1度しか使えないのが基本だが中には同じカードを複数持つライダーもいてガイはその1人に入る。あと何枚コンファインベントを持っているか分からない

いたため迂闊に必殺技を出せば自分達のエネルギーを無駄にするだけだ。

ガイ「・・・君達の必殺技はボクには通用しない。この圧倒的不利な状況の中でも君達は敗北を認めないのかい？」

ローズ「当り前よ！！・・・先に進んだブロッサムや私達を信じてくださいる大人さん達の為にね！！！」

ガイ「何なんだ・・・」

ルージュ・ローズ「!?」

ガイ「何なんだお前達は！？・・・どうしてそこまで他者の為に戦える！？お前達の身体は既にボロボロだろうが！！・・・他人を助ける事に何の意味があるんだ・・・所詮自分が肥え太る為しか動かないクズを助ける事がそんなに楽しいのか!？」

ガイの態度の豹変ぶりに思われる引いてしまうルージュとローズ。そんな2人を無視してガイは吠える様に口を開く。

ガイ「ボクは・・・ただ怖かっただけだ。他人と触れ合うのだ・・・裏切られる事が怖かっただけだ・・・なのに周りの奴らはそれを知らず《弄り》と称してボクを身体だけじゃなく心まで傷つけた。どんなに嫌がっても、止めてくれとどんなに頼んでも耳を傾けようとしなかった・・・ボクは迷わず担任の先生にその事を相談したが奴らは《お前のつまらない事で俺の貴重な時間を割けるか?》なんて言いやがった・・・奴らからすれば詰まらない事かも知れないさ・・・だがな当人にとっては重大な事なんだよ・・・」

ルージュとローズは彼の言い分に言葉が出なかった。自分の知っている人には同じように先生をしてる。同じ先生なのにこんなにも対応が違うなんて考えられなかった。

ガイ「それからだよボクが誰も信じられなくなったのはね。その時ボクの心は死んだ・・・ボクの気持ち達が君達に分かるのか?・・・君達のように生温い友情ごっこをしている君達にね!!!!。そしてボクは太陽さんの計画に喜んで参加させてもらったよ・・・ボクの苦しみを奴らに分からせてくれる機会を貰った・・・これ程、光

栄な事はないよ!!!ボクは必ず復讐をするんだ・・・ボクの心を殺した奴らにねえ!!!!!!」

ライア「行けえエビルダイバー!!!」

エルスに向かつてエビルダイバーを差し向ける。エビルダイバーは巨体に似合わないスピードでエルスに体当たりを仕掛けてエルスの身体を傷つける。

エルス「はあ、はあ、はあ」

息切れになりながらもエルスはなんとかライアに近付く突破口を見つけようとしていた。自分を信じてくれた仲間の為にそして憎しみに配された耕輔を助けのために。

ライア「おらあっ!!休んでいる暇はねえぞ」

ライアは怯むことなくエビルウィップをエルスのカラダに絡ませるとそのまま電撃をエルスの身体に叩き込んでやる

エルス「あああああああああ!!!!!!!!!!」

エビルダイバーの攻撃を避けている事で体力が消費されているのにその上エビルウィップの雷撃攻撃を喰らうと衣装から煙が発せられて身体もボロボロになっていく

エルス「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

肩で大きく息をしながらも立ち上がるエルス。その姿を一度見たライアは攻撃をやめる。

ライア「キュアエルス・・・お前は・・・大切な人を守る為にプリキュアになったのだな?・・・」

エルス「!?!?・・・ええ、そうよ」

突然ライアはエルスに話しかけた来た。エルスは彼の態度の変化に驚いた顔になるが質問の答えを返す。

ライア「・・・俺も勇治を守ってやれなかった」

エルス「・・・!?!?」

ライア「勇治はな俺以上に人見知りが激しかった。俺も不器用で人と接するのが苦手だよ・・・それをネタに勇治と俺を苛めてきた連中のイジメは陰湿なものばかりだった。俺は親友の勇治だけは傷つけまいとした・・・だが俺に力がないばかりに勇治は・・・俺も戦う事が怖くなり一度アイツと死のうとしたよ。」

エルス「ライア・・・貴方・・・」

ライアは拳を振わせながらも過去を語った。自分に力がないから勇治や自分は弱者とみなされえてイジメられていたと思っていた彼は力が欲しかった。過去の自分を消しされる様な強大な力が。だから太陽の誘いに乗りライアの力を手にした。そして今度こそ誰にも大切な友達を傷つけさせはしないと誓ったのだ。

ライア「それを太陽さんが止めてくれた・・・そしてあの人は言ったよ。《腐りきった世界を0に戻す》。俺にはあの人か神に見えるた・・・俺達のような弱者を支えてくれる神・・・それが俺達にとって太陽さんだった・・・そして俺はライアの力を手に入れた時から誓った。もう2度と勇治や俺を傷つけさせない・・・その為には勇治と俺の敵となるものを排除するとなあっ!!!!!!!!!!」

ドリーム「はあああああっ!!!!!!!!!!」

王蛇「ふんっ!!!!!!!!!!」

ドリームのクリスタルフルーレとベノザールがぶつかり合い火花を散らす。だが力では年の差があるのかドリームが押されている。クリスタルフルーレを弾き飛ばすようにして王蛇はドリームを切り刻んでいくとドリームは悲鳴を上げて膝をついてしまう。

王蛇「この程度か?・・・うらあああああっ!!!!!!!!!!」

ドリーム「がああっ!?!?・・・」

膝をついたドリームの腹に回し蹴りを叩き込み怯んだ彼女をベノザールで斬りつけていく。身体はボロボロだ。しかし王蛇は情けをかけることなくドリームの身体を切り刻み殴り飛ばす。

ドリーム「があああっ!?!?・・・きゃあああああっ!!!!!!!!!!」

だがそれでもドリームはフラフラになりながらも立ち上がる。王蛇はそれでも攻撃の手を緩めるつもりなどは全くない。

王蛇「キュアドリーム・・・貴様の持つ希望の力など私の持つ心の闇が呑みこんでやる」

ドリーム「心の・・・闇？」

王蛇「私は・・・人を信じる事が出来ない・・・私にとって太陽さんに会う前の過去なんて朽ち果てた石ころほどの価値もない。私は幼いころから親の愛を受けることなく育てられた。父親は職につきかず酒浸り、母親は家事や押さない私を無視して2人して毎日毎日ギャンブルばかり。私はそんな両親が大嫌いだっただけ・・・周りの同世代の子が羨ましかった・・・沢山の親の愛を受けてる・・・でも私の両親はっ・・・そう言う風に考えるととても辛かった」

ドリーム「それが貴女の抱える闇？」

王蛇「いいえ・・・それだけじゃない。私は1度は太陽さんに助けられやつと飢えていたものを手入れる事が出来たと思っていたのにそれすら力を持つ者に奪われた・・・こんな理不尽な事ある？私はやつと幸せを手に入れられると思っていたのにそれすら簡単に奪われた・・・私の心の闇は人に対する凄まじい憎しみと怒り・・・この闇は全人類を滅ぼさない限り晴れる事は絶対がない・・・」

同じ闘技場ではピーチとジェニスが宿命の戦いをしている所だった。ジェニスは元いた世界ではフェイト・テストロッサのDNAとキュアピーチの戦闘データを併せる事によって誕生した人造人間。つまりはキュアピーチとフェイトのクローンという事になる。故にピーチとの力は互角であり一步も引かない戦いが続く。

ピーチ「やああああああああっ！！！！！！」

ジェニス「でやああああああっ！！！！！！」

二人のパンチがぶつかり合い衝撃波を生みながらも一步も引かない睨み合いを繰り返しながらも2人の宿命の戦いは続いていく。

ジェニス「貴様を倒さない限り私は私の闇を振り払う事は出来ない

んだ……お前がいる限り!!!」

ピーチ「ジェニス……」

ジェニスがなぜ世界を憎むようになったかはピーチ自身も分かっていた。だからこそ無意識に本気が出せないでいる事もある。だがそれでは彼女を助けることなどできはしない……。ピーチは持てる力を駆使してジェニスに挑んでいくそれが彼女の中に巣食う闇を振り払えると信じて。

ジェニス「喰らええッ!!!!!!」

ジェニスはピーチの懐に潜り込むとダークに授けられた闇の力を利用しピーチに闇の波動を叩き込んで闘技場の壁に叩きつけてやる。その後闇の光弾を無数連発してピーチを追い詰めていく。光弾がやむ頃には傷だらけのピーチの姿があった。ジェニスは彼女に近づきながら『この世界』の破壊計画を自分達の破壊の計画の礎とする事を口にする。

ジェニス「この世界だけではない……全パラレルワールドを滅ぼしネバーエンドインパクトを遂行する事で私の中に巣食う闇は終わるのだ。そしてお前との因縁にも決着がつく」

シザースはシザースピンチをブロッサムとマリンに向かって振う。ボルキャンサーが強化された事でその刃は鋭く鋭利なモノになっていてプリキュアと言えどもアレに刺されたらひとたまりもないだろう。ブロッサムとマリンはすかさずそれを避けるとサンシャインが後ろでゴールドフォルテバーストの発射体勢に入る。

シザース「ふうん……小細工は俺には通用せんぞ!!!!」

サンシャイン「!?!?……ぼ、ボルキャンサー!?!?」

シザースはすぐにサンシャインの元にボルキャンサーを呼び出してサンシャインを襲わせる。ボルキャンサーの口が彼女を喰らい尽くそうとした時にムーンライトがボルキャンサーにパンチを見舞わせる。サンシャインから離させる。

ボルキャンサー「……」

ムーンライト「き、効いていない!?!?!」

だがボルキャンサーにはダメージは皆無でありそのままムーンライトはボルキャンサーの太い腕に殴り飛ばされて壁に叩きつけられてしまう。

シプレ・コフレ・ポプリ『ムーンライト!?!!』

妖精達の声が響く。ムーンライトは気絶はしていないようだがダメージは凄まじいようですぐには立てないでいた。

ナイト「貴様あ……よくもお!?!?!」

ナイトは姉のムーンライトを傷つけたボルキャンサーに仇打ちだとイリュージョンソードで斬りつけるがボルキャンサーにソードの刃がぶつかつた瞬間に高い金属音が響き渡つた。

ナイト「い、イリュージョンソードが折れた!?!」

なんとボルキャンサーの剛殻の強度にイリュージョンソードが耐えきれずに真つ二つに折れてしまったのだ。うるたえているナイトにボルキャンサーは体当たりを仕掛けるてそのままナイトを壁に叩きつけた。

ナイト「ああ……ああ……」

セイバー「ナイト!?!!」

シザース「よそ見している場合か?」

セイバー「!?!」

いつの間にかセイバーの懐にいたシザースはセイバーの身体をシザースピンチで数回切りつけたあと彼女をシザースピンチで掴みあげると凄まじい力で締め上げていく。セイバーの悲鳴が部屋中に響き渡るのだが下手をすればシザースはそのままセイバーを絞め殺してしまうかもしれない。動けないでいるブロッサム達にシザースは鼻で笑って勝ち誇つた。

シザース「この程度か?お前達の力とやらわ……。期待外れだな?」

コズミック「貴様あ……。人質を取っておいてよくそんな事を!?!」

その間にもシザースはセイバーを絞め上げながらブロッサム達を嘲笑う。その態度にコズミックは憤怒するが下手な抵抗は出来なかった。シザースはそんな態度を察したのかセイバーを投げ捨てる。セイバーは咳をして苦しみに悶えてしまいがブロッサムに介抱される。シザース「ならば貴様も痛みを味わうがいい」

シザースはクロックアップのような高速移動でコズミックの前に立つと二刀流の剣を使いコズミックを切り裂き蹴り飛ばしてやる。そして追い打ちとばかりに腹を踏み潰す。コズミックの苦しむ声が木霊するのに耐えかねたサンシャインとフェアリーが飛び出した。

サンシャイン「止めなさいっ！！！！！」

フェアリー「コズミックから離れる！！！！！」

コズミックを助けるべくサンシャインが後ろから飛び蹴りをフェアリーが前からレイピアで斬りつけを放つがそれにもとせずシザースはピンチでサンシャインの足を挟むとそのままサンシャインを床に叩きつけてもう一度掴んで投げ飛ばしたあと動きが止まっているフェアリーの装甲にシザースピンチを突き刺して火花を散らせるとフェアリーの変身を強制解除させる。そしてそのまま夕をピンチで掴んでそのまま投げ飛ばす。

ブロッサム・マリ「はあああああああつ！！！！！！！」

こうなれば連携だとシザースのとてっ腹に向かってブロッサムとマリンのダブルパンチが炸裂するがシザースは鼻で笑いそのまま2人にピンチを叩きつける。7人のプリキュアをもってしても生体エネルギーとラグナロクストーンで強化された力には敵わないのか？。

シザースは高笑いしながらブロッサム達を嘲笑う。

シザース「プリキュア、仮面ライダーフェアリー俺は必ず貴様らを倒し大いなるものを手に入れる。だがそれは父の復讐などという単純な粹で収まるものではない」

ブロッサム達一同「!?」

シザース「俺がこの世界を破壊する事に何故ここまで執着したか・復讐をしながらもその答えを探していた・・・そして答えを見出し



ただ」

ブロッサム「こ、答え？」

シザース「そうだ。俺達の戦いは全て警察の汚職事件で幕を開けた。正義を司るはずの警察が犯罪を犯したために俺は犠牲となった。・ ・ ・最初は矢田に対する復讐さえ終われば俺にとつて後はどうでもよかつた。・ ・ ・だがそれだけで終わらせてはならないと俺は気がついたのだ。今の世界を見てみる。腐っているのは警察だけではない。実の子をゴミの様に捨てる親、人を弄りと称して自殺にまで追い込む餓鬼共、イジメに気が付いていながらもそれを放置する教員。・ ・ ・全ての人間は時代と共に進化すべき筈がいつの間にか退化していったんだ。本来は全ての人間に幸せになる権利がある筈なのに」

マリリン「。・ ・ ・幸せになる権利」

シザース「プリキュア、フェアリーよ貴様らは人の笑顔や希望を守るために戦うと言っているが俺はそんな安っぽい偽善的考えとは違うのだ。俺は絶対的な正義こそが人を幸せにすると考える。・ ・ ・不完全である人間をコントロールする。・ ・ ・いわば神にも匹敵する帝王となる人間こそが今求められるのだよ。・ ・ ・そしてそれは俺がお前達を倒し全世界を0に戻る事でその輝かしい未来が訪れる。・ ・ ・全世界破壊計画を成し遂げ俺が帝王となつたその時こそな！！

！」

シザースの言葉を聞いて倒れていたナイトやムーンライトは立ち上がる。シザースが持つ心の闇は父を失つただけが原因ではなかつた。父を失い薄汚い大人が作りだした酷な現実を知つた事で彼の理想と夢が壊されたために全世界に絶望して自分達が望む夢をかなえる為に全てをやり直すつもりなのだ。

そして解放軍の面々は離れているのにも関わらずシンクロしたかのように一斉に声を上げた。

シザース・王蛇・ガイ・ライア・ジエニス「だからこそ全てを破壊するのだ。・ ・ ・そして我々が樂園をつくる為に。・ ・ ・そして全

ての人間が幸せになる理想の世界を築くのだ！！！！」

プリキュア一同&タ「そんなの幸せなんかじゃない！！！！」  
プリキュア達は一斉にそう叫んだ。

ルージュー「確かに貴方達の気持ちは・・・今まで受けてきた痛みや苦しみは私達には理解できないかもしれない・・・でも！！！」  
ローズ「全ての人がアンタ達の言うように人を傷つけて自分の事ばかり考えるてしまう事なんてない・・・この世界には優しい人間だつて沢山いる！！！」

エルス「憎しみは新しい憎しみしか生まない。破壊から生まれる物なんて何もない・・・だからこそ！！！」

ドリーム「その憎しみを断ち切り世界に生きる全ての人に希望を捨てさせないために私達は戦っているの！！！！」

マリリン「例え何度も挫折しようともどんな苦しみやコンプレックスがあつても諦めずに夢を追う事を捨てちゃダメなんだよ！！！」

サンシャイン「この世界に希望を抱いている人がいる限り私達は世界を守る・・・絶対に滅ぼさせたりはしないよ！！！！」

ムーンライト「そして希望を失つた人間にもう一度光を与える為に・・・悲しみの連鎖から解放する為にプリキュア、仮面ライダー、ウルトラマンは存在する！！！」

タ「人間は過ちを正す力がある・・・今の法律があるのだから人が犯した過ちの歴史なんだ・・・それを否定する事は人そのものを否定すること・・・アタシ達は人間を否定するアンタ達から世界を守る！！！！」

ナイト「闇から光にだってなる事は出来る・・・人は悲しみを乗り越えて強くなって自分達の夢へと続く未来へと進めるんだ・・・お前達のような憎しみに支配された奴らにその未来を絶対に壊させはしない！！！！」

セイバー「貴方達が従えるモンスターやこの破壊戦艦は貴方達自身の心の象徴・・・憎しみを重ねて全てを破壊してもそこにあるのは

新しい憎しみを求めて彷徨い続ける地獄しかないわ！！！！」

コズミック「仮に私達を倒す事が出来たとしてもお前達は永遠に自分の心の闇から抜け出す事は出来ない！！！！」

ブロッサム「人は誰だって変わる事が出来るんです・・・だから世界だって絶対に変わる。貴方達は変えようとせずつたにただ自分の憎しみを全世界にぶつけているだけなんです！！それは貴方達の未来を奪った人たちと何も変わらない！！！！」

ボロボロになりながらも全員は立ち上がり目の前に相手にプリキユアとライダーはそう堂々と言い放った

プリキユア全員&タ「だから私達は貴方達の復讐を絶対に止める！

！！！！！！！！」

王蛇「綺麗事ばかり言う奴らなどに邪魔はさせない！！！！」

ガイ「何が・・・人の思いだ！！！！」

ライア「憎しみと怒りが俺達にパワーを与えてきた！！！！・・・」

ジェニス「全てを支配する力をな！！！！」

シザース「お前達に見せてやる・・・俺達の第2の兵器を」

それに対抗するようにシザース達は1枚カードデッキを引き抜いた。絵柄は翼の様なものが描かれている。そしてそれを引きくと同時に辺りには異様な衝撃が発せられると王蛇はメリケンサック、ガイはランス、ライアは弓、そしてシザースは2つの刃がついた剣にバイザーが変形していく。そして変形したバイザーにそのカードを装填すると・・・

電子音『サバイブ』

電子音と共にミラーライダー達の姿は光に包まれる。そこに現れたのは・・・。

**第42話地球解放軍編？「決戦！心の闇」(後書き)**

今回は強化されたシザース達との決戦と第3の切り札が・・・

では次回もお楽しみに

第43話地球解放軍編XIEIEI「決戦〱憎しみを撃て」(前書き)

前回までのあらすじ〱

圧倒的な力を見せつけるシザース達の前にピンチに立たされるプリキュアやフェアリー。しかし彼女達は立ち上がり太陽達の憎しみと怒りを束にした力を否定する。太陽達は更なる力を見せようと第2の力のサバイブを発動させる。

### 第43話地球解放軍編XIEEI「決戦！憎しみを撃て」

光がやむと4人の姿の進化した鎧が露わになる4人とも全体的なシルエットが鋭くなったただけではなく装甲は強化されてカードデッキは、金、銀、マゼンタ、ネイビーへと変化したのだ。

ガイ・サバイブ「コレがボク達の最強の力の1つさ。この力で君達を粉碎する」

槍の様に鋭利となりドリルの機能まで備えたメタルバイザーツバイを構える。

ルージュ「・・・やれるものならやってみなさいよ」

ローズ「力に溺れたアンタのその心・・・必ず私たちが救ってみせる！！！」

まさかミラーライダーのパワーアップカードであるサバイブのカードを隠し持っていたなどよようが出来るはずもない。ただでさえ不利なこの状況・・・ルージュとローズに勝ち目はあるのか？

ガイ「口ばかりなら何とでも言えるさ・・・だが現実には君達の敗北だ！！！！」

ガイは足に力を溜めて力強く地面をけると一気にルージュとローズとの距離を縮める。ローズとルージュも応戦するようにパンチとキックをガイの装甲に放つ。

ルージュ「き、効かない!？」

ローズ「そ、そんなっ!!!」

2人の渾身の一撃もガイの硬い装甲には届かない。動きが止まっている2人にガイはバイザーを振り彼女達に叩きつける。

ルージュ「がはあっ!!!？」

ローズ「ぐうっ!!??」

2人はまたしても部屋の壁に身体を叩きつけられてしまう。土ぼこりが視界を奪う中ガイはゆっくりと近づき始める。

ガイ「君達は言ったな？この世界の人間は優しい人間は沢山いる・・・

・と。それが本当だとしたらボクはこんな事はしなかった……もう何もかもが遅いんだ。ボク達はこの道から後戻りはできない」  
ガイは自分の過去にもしも彼女達の言うような心優しい人間がいたとしたら自分と耕輔はこんな復讐気の道を歩んだりはしなかったかもしれない……。だが今それを考えてももう後の祭り……。自分達が歩んできたを今更になつて後戻りなど出来ない事は分かっている。だからこそ全てを0にすることしか自分達が生き残る道はない……。ガイである勇治は自分にそう言い聞かせながら首を振って足を進める。

ガイ「もう終わりだよ……。キュアルージュ、そしてミルキイローズ」

ガイは2人が倒れているであろう場所で足を止めるとメタルバイザーを突き付けるように向けてそう言うが……。反応がない。

ガイ「サバイブ……。!?」

ガイはまさかと思い急いでバイザーを思いっきり突き刺したのだがそこにはいるはずである2人はいなかった。そしてその瞬間に後ろから気配を感じた。

ルージュー「プリキュア・ファイヤーストライク!!!!!!」

ルージューの炎の玉がガイに向かって放たれるとバイザーが地面に突き刺さった状態で身動きを封じられてしまっているガイに避ける手段はなくそのまま直撃する。流石のガイもノーダメージとはいかなかったがこの程度ではダメージは浅いほうであった。

ガイ「サバイブ」いつの間にボクの後ろに……。!?……。ロースがいない?」

土煙で視界を悪くした事が隙を生んでしまう結果となりまんまと攻め込まれてしまった。そしてガイはロースがいない事に気が付く。

ロース「ミルキイローズ・ブリザード!!!!!!」

ガイ「サバイブ「くっ!」」

電子音「ガードベント」

もう1人の敵であるロースはルージューとは別の方向からブリザード

を叩き込んでいく。咄嗟の事にガイは判断が遅れてしまい急いでガードベントを発動させて鉄壁の盾「メタルガードナー」を左手に装備してブリザードをガードする。

ガイ「サバイブ……一体どこにこんな力が!？」

ルージュ「言った筈よ……私達は貴方達を止めるつてね」

ローズ「そのための力ならいくらだって湧いてくるのよ!!!」

ガイ「ちっ!!!!!」

電子音「ストライクベント」

まさかの反撃に徐々に押され始める。だがこの程で自分は押されるものかとガイは盾を捨て更にもう1つの武器であるストライクベントの「メタルクロー」を装備していくとそのままローズ達めがけてバイザーと共に攻めるがルージュのファイヤーフルーレとローズのミルキイミラーが受けとめてる。

ガイ「サバイブ」何故だ!？この絶望的な状況でも君達は諦めない。この世界は君達には関係のない世界の筈だぞ……それでも何故全力で戦える!？」

ルージュ「……その答えは単純よ。人を守りたいから」

ガイ「何?」

ローズ「苦しんでいる人を放置できないから……それがアタシ達がプリキュアをする理由でもあるのよ!!!」

ルージュ「だから闇の取られている貴方達を助け出すわ……もう1度前に進める様に!!!!!」

ガイ「前に進む……」

《ボクは前に進めているのか?……いつも逃げているばかりで戦う事をしなかった……でもそれはボクに力がなかったからだっただんじやないのか?……いや違う本当は……》

ガイは2人を一度跳ね飛ばすようにバイザーを振いながら迷いを断ち切るように腕を振った。彼女達の言葉を聞くと過去の自分を消せずに入れない……どうしてなんだろう?ガイはその答えが知りたいと思う世になっていた……本来の目的を忘れてしまうまでに



なりながら。

渡り廊下ではマゼンタのエイの戦士とキュアエルスがまじまじと睨み合いながら2人とも更に高まる緊張感の中譲れない信念とプライドをぶつけ合う激戦が再開されようとしていた。

ライア「この姿を見てもまだ今みたいなセリフが吐けるか？」

エルス「・・・ええ。例え貴方の力がどれほど強くなるうとも私は貴方の憎しみに支配された心を闇から救い出す!!!」

ライア・サバイブ「ならばこの姿となった俺にお前がどこまでついて来れるか・・・今この場で試してやる!!!」

ライアは先ずカードを一枚引き抜くとそれをエルスに見せつけると自信にあふれたセリフを言っつてそのままカードを装填する。

電子音「シュートベント」

ライアは弓矢となったバイザーエビルバイザーツバイを使いシュートベントのエビルキャノンを放つていく。紙一重で当たる前にエルスは飛び上がつて光弾を避ける。ライアはそのままエビルキャノンを連発していつて遠距離戦法をとつていく。近づけさせなければエルの得意なライトニングスラッシュやライトニングスラッシュを発動させる事は出来ない。そしてこのままジワリジワリとエルスの体力を削つていき勝利を得るつもりなのだ。

ライア・サバイブ「ほらほらあくどうしてキュアエルス?・・・憎しみの力に打ち勝つんじゃないのか？」

ライアは勝ち誇つた口調でエルスを見下しながら光弾の嵐を浴びせる。やはり口ほどにもないとライアは自分の勝利に揺るぎはないと確信するが。。

エルス「・・・っ・・・はあっ!!!・・・えりやあああっ!!!」

ライアの光弾の嵐を必死によけながらもライアの間を伺うエルス。無数に来る光弾を避け時にはライトニングロッドの光弾で相殺させる。時には空を飛び光線が当たるギリギリの所を避ける。

ライア・サバイブ「ちっ!!!・・・ちよこまかと動きまわりやが

って」

ライアは当たらない事にだんだんと焦り始めていく。実はエルスを追いつめているようでライアはエルスの術中にはまり始めていくのだ。

ライア・サバイブ「(何故だ・・・狙った場所を避けられる)素早い奴がつ・・・逃げてばかりで俺が倒せるとでも思っているのか!?」

徐々に距離を縮められてしまう事にも気がつかないままライアはエルスに狙いを定めるが紙一重で避けられてしまうと苛立ちが徐々にライアの戦い方を削いでいく。

エルス「当然思っていないわよ？」

そしてエルスはライアの懐に潜り込むように距離を縮められていきそしてとうとうライアと顔が向う合うほどにまで距離を縮められてしまう。

ライア・サバイブ「くっ!!!」

エルス「遅い!!!」

エルスは近距離のエビルキャノンが自分に発射される前にライトニンググロッドを剣に変えてライアを切り裂く。だがこの程度の攻撃ではライアの強化された装甲には軽い傷にしかならなかった。

ライア・サバイブ「ぐっ・・・流石にやるな?・・・だがまだまだここからだ!!!」

電子音「ソードベント」

ライアは弓を畳みカードをバイザーに装填させるとエビルウィップが進化したエビルウィップブレードを装備させる。

エルス「いくわよ・・・ライア!!!!」

ライア・サバイブ「来い、キュアエルス!!!」

ムチにもなり蛇刀のようなそれを構えながらエルスのライトニンググロッドとぶつかり合い火花を散らしながらぶつかり合うとガチガチと刃がぶつかり合う金属音を辺りに響かせる。力ではライアはサバイブのカードで強化された自分の力と互角の事に驚愕するがライア

も自分の持っているプライドと魂をかけてキュアエルス挑んでいくがエルスは強化された筈のライアと互角かそれ以上の力で対抗してくるのだ。

ライア・サバイブ「俺はあの時決めたんだ・・・この力で必ず勇治や俺自身を守ると。傷つけてくる奴らから守るためにこの力を使うとな！！そしてその最終的な答えは全世界の破壊となったんだよ」  
エルス「ライア・・・それは《守る》っていう事なんかじゃない」  
ライア・サバイブ「何だと!？」

エルスはライアを哀れむような目で強い口調でそう言った。そして続けて彼に語りかけるように自分の意見を話す。

エルス「貴方がしてるのはイジメられた子への《復讐》でしかないんだよ？貴方は貴方や勇治君をイジメた子と同じ子をしてるの・・・憎しみは新しい憎しみしか生み出さないんだから!!!!!」

ライア・サバイブ「・・・っ!!!!!綺麗事ばかり言いやがって。世の中はなお前が考えている以上に残酷で惨いんだ・・・理想ばかり言っても無駄なんだよ!!!!!」

《俺のしてる事は守っている事じゃない・・・そんなはずはない!!!。あの時だつて力があれば俺達はイジメられることなんてなかったはずだ・・・俺は・・・俺はっ!!!!!》  
ライアはエルスを完全に叩き潰してやると吠える様に叫びながらエルスに猛攻を仕掛ける様になった。その彼の姿はエルスの言葉に迷いが生まれた自分を消し去るかのようにも見えたのだった・・・。

闘技場での王蛇とドリームの戦いも激しさを増し始めていた。王蛇はメリケンサックとなったバイザーともう1つストライクベントのベノナツクルを装備していくとドリームに殴りかかっていくがドリームはそれを避けると地面に辺り殴られた地面には穴が出来ている。王蛇・サバイブ「コレが私の憎しみの力よ・・・希望の力を粉碎

するね!!」

ドリーム「くっ!!!。・・・はあっ!!!」

ドリームは王蛇の攻撃を避けながらも反撃をしようとパンチを放つのだが王蛇のベノナツクルが盾のごとくドリームのパンチをガードするとドリームのボディにパンチが見舞われる。

ドリーム「ああああっ!!!」

お腹にめり込む王蛇の拳・・・ドリームは物凄勢いで飛ばされていくとそのまま闘技場の壁に叩きつけられてしまう。

ドリーム「ゴホゴホっ!!!。・・・はあ、はあ。はあ」

王蛇・サバイブ「ほらほらあっ!!!この程度で根を上げる気!？」

王蛇はまだまだこの程度で終わると思うなよという様に立ち上がったドリームに向かって走るとナツクルを突き出す。ドリームは同じくパンチを返して応戦して辺りには岩をも持ちあげる衝撃が走る。

王蛇・サバイブ「ちっ!!!まだそんな力が残っているなんて・・・」

まさか先程のダメージを受けても自分に抗える力が残っているとは思わない王蛇は驚く隙についてドリームが王蛇の装甲に渾身のパンチを叩き込んでいくと今までは逆に王蛇が今度は飛ばされてしまう王蛇はなんとかバランスを保ちながら着する。

ドリーム「はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

肩で荒い息をするようになってきたドリームに王蛇はベノナツクルを振り上げながらそう言うのだが追いつめられている筈のドリームの顔はその力に恐怖するどころか逆に彼女の闘志が燃えたぎるように王蛇を睨みつけていた

王蛇・サバイブ「へえ、この追いつめられている状況でまだそんな顔が出来るの？」

ドリーム「王蛇、貴女はこの世界を晴らさないと永遠に消えることな言って言ったよね？」

王蛇「それがどうしたの・・・何度同じ事を言わせる気？」

ドリームは今までにない口調で唐突にそう王蛇に聞いてきた。王蛇はその問いにウザったような態度でそう答えるとドリームは更に王蛇の中にある過去のトラウマを思い出させるようにそう聞いた。

ドリーム「その姿でこの世界にいる子供たちにも貴女と同じ目に合わせると言っの？」

王蛇・サバイブ「・・・それは・・・」

ドリーム「憎しみや怒りを束にして破壊するじゃけじゃ悲しみが増えるだけなんだよ?・・・貴女が受けて悲しみを他の人にも味合わせちゃうのよ!?本当にそれでいいの!!!???」

ドリームは悲しみが混じった声でそう訴えかけると王蛇の中にあつた僅かな迷いが王蛇の心を揺さぶりをかけていくだが彼女は迷いを振り切るように首を横に振りながらドリームの方を向いていく。

王蛇・サバイブ「言った筈よ?これはリセットだとね・・・全てを0に戻る事で何もかも最初からやり直すだけよ!!!!!!」

《これはただの破壊なんかじゃない!!!!!!私達が背負った悲しみを作らない世界を創造する為の正当なる行為なんだ・・・絶対にただの野蛮な殺戮なんかじゃない!!!!!!》

必死にそう言い聞かせる夏実。それでも迷いは吹っ切れない・・・どうして?。なぜ彼女は自分<sup>ドリーム</sup>を悲しむめで見つめてくる?

王蛇・サバイブ「見るなあ・・・そんな目で私を見るなああああああっ!!!!!!」

ドリームの目が王蛇に更なる迷いを生ませるようになってきているのがバイザーとナツクルをガチガチを震わせるまでに王蛇の身体は震えだしてきていることで分かる。王蛇はドリームの悲しげな視線に対して怒鳴る様にそう言っくとナツクルを振りつけていく。

その頃近くでは因縁の戦いが繰り広げられていた

ジェニス「まだそんな事を言っつもりか?・・・話したはずだぞ私がこの世界を憎む理由を」

ジェニスが世界をうらむようになった理由。それはただ単純に人造

人間である事だけではなかった。ジェニスはかつてとある世界のとある夫婦によつて失つた娘の代わりとして生み出された事でこの世に生を受けた。最初は彼女の両親も彼女の事を可愛がっていたのだが……

ピーチ「貴女を生み出した親の工ゴで貴女がどんなに傷ついたか私  
が知る事は出来ない……でもだからって全世界を憎んだって貴女  
の闇は晴れないよ!!!。前にも言ったかもしれないけど貴女は  
貴女じゃない……他の誰でもないただ1人の存在じゃない!!!」  
その後彼女は完全に自分の娘になりきれなかったジェニスに虐待を  
始めた拳句には自分達が二度と死なないようにとプリキュアデータ  
を使って強化したにもかかわらず彼女を生物兵器と罵り彼女を傷つ  
け最後にはゴミのように彼女を捨てたのだ。その後の彼女は当ても  
なく彷徨っていたが人造人間というだけで怪物と称された揚句ある  
施設に隔離された。

ジェニス「黙れえ……所詮はお前みたいなやつに私や白夜達の  
闇が理解できるわけがない!!!」

前に言われたその言葉。生まれて初めて自分を他の誰でもない1人  
の人間として認めてくれたのはピーチが初めだった事を思い出すジ  
エニス……。だが世界にすら捨てられてした自分を助けてくれ  
たデスリードの為に自分も成し遂げなければならぬ事があるの  
だからこそ憎しみを捨てることなど出来るわけがないのだ。自分の  
闇と自分の仲間の闇を晴らすためにも負けられない……。

ガイ・サバイブ「はあああああつ!!!!!!!」

メタルバイザーツバイとメタルクロウで攻めこんでいてもルージ  
ユとローズは諦めるどころか更に反撃の力を増していく……。

ガイ・サバイブ「ちっ!!!!!!!」

ガイは理解が出来ないながらも絶対に負けるものかクロウを盾にし  
て攻撃を受けとめるが……。

ルージユ・ローズ「はああああああああつ!!!!!!!」

2人のフルーレとミラーがガイのメタルクローに罅をいれていくと・・・。

ガイ・サバイブ「な、何っ!?!」

そのままバリオンとガラスが割れる様にクローが砕け散った。そしてガイが怯んだその隙を2人は見逃さずにボディにダブルキックを放っていきガイに肉体的にはなく精神的にダメージを与えてやる。ガイ「ば、バカな・・・こんな事あり得ない」

ガイはフラフラになりながらも立ち上がる。こんな事を認められるわけがないとガイは言い放つがルージユとローズはガイの疑問に答える様に口を開く。

ルージユ「確かに・・・サバイブで強化された貴方は強い。でも憎しみなんかで強くなった力は脆い・・・だから貴方は私達には勝てない!?!」

ガイ「この力が脆いだと!?!」

ローズ「ええ。本当の力は憎しみからは生まれてこない。強いだけが力なんかじゃないのよ!?!」

ガイは2人の言い分を行くと静かになり俯くように下に顔を下げ。その後ガイは迷わず顔を上げると同時にカードを引き抜いた。

ガイ・サバイブ「ならば思い知るがいい・・・君達の言う力など幻に過ぎない事を!?!?!」

電子音「アドベント」

ガイはアドベントのカードを装填するとメタルゲラスから進化したメタルエンパイアとなった契約モンスターを呼び寄せる。その姿は二足歩行のサイの怪人の姿ではなく4足歩行となり巨大化して重厚感あふれるものであった。赤い目を光らせながら主人の隣まで走るのを確認したガイはもう一枚カードを引き抜いくと自分のカードデッキの紋章に翼のシンボルが描かれたそれをルージユとローズに見せる。

ガイ・サバイブ「この一撃で君達との戦いと決着をつける・・・行くぞっ!?!?!」

電子音「ファイナルベント」

メタルガードナーの咆哮を合図にガイは飛び上がるとメタルエンパイアの後ろに飛び乗った。それを見たルージユ達2人も必殺技の準備を始める。

ルージユ「ローズ・・・私達の全力を彼にぶつけよう。彼の闇を消し去る為に!!!」

ローズ「ええ。行くわよ!!!」

ルージユは今出せる精一杯の炎をそしてローズはミルキイミラーにエネルギーを溜めるに構える。その間にガイが乗ったメタルエンパイアは変形して大型バイクに変形する。姿はライドシューターに酷似しているは先端はサイのツノを現わす様な鋭利なドリルが装備されている。

ルージユ「プリキュア・ファイヤーストライク!!!」

ローズ「邪悪な力を包み込む煌くバラを咲かせましょう!!!。ミルキイローズ・メタルブリザード!!!」

ルージユのファイヤーストライクとローズのメタルブリザードが合体してガイに降り注ぐように向ってくるがガイもファイナルベントのヘビーメタルクラッシュャーを発動させてぶつかり合うと力と力の押し合いが展開される。

ガイ・サバイブ「うおおおおおおおおお!!!」

ルージユ・ローズ「はあああああああああああ!!!」

炎と輝くバラが融合した2人の力はガイを包み込むように押しこんでいくがガイはエンパイアのドリルを突き刺して風穴を開けさせて消滅させようと企てるがドリルで穴が開いたと思えば光が穴を封じて逆にメタルエンパイアごとガイを呑みこむように包み始めていくのだ。

ガイ・サバイブ「な、何っ!?!」

メタルガードナーを包み始めた光はガイの身体も優しく包み込んで



いくとそれから数秒後にガイとメタルガードナーは全身を呑みこまれていった。

ガイ・サバイブ「うわあああああああああああああああああああつ！！！！！！！！！！」

生まれて初めて身体が光につつまこまれた勇治は不思議と心が落ちついていくのを感じた。この光は自分を傷つけるどころか自分の過去の傷を癒すように優しく身体を包み込んでいく。生まれて初めてかもしれない憎しみが優しく浄化される様なこの感覚にガイの仮面の下で勇治は涙を流した。

ガイ「つ！！！！？？？・・・ボクは負けたのか！？」

気が付くとガイの変身を解かれたその場で勇治は膝をついた。アレだけ戦った激しく戦った筈なのに身体を見れば自分には傷1つなかった。そして先程まであった憎しみも今の彼の心にすっかりと消え去っていたのだった。

ルージユ「立てる？」

勇治「・・・ああ」

今だに信じられない勇治の元にルージユが手を伸ばして彼を立たせた。自分とは違いルージユとローズの身体はボロボロで傷が痛々しく残っていた。どうして此処までして戦えるのか・・・その答えがやっと見えた気がした勇治は笑顔を見せると吹っ切れたように声を出した。

勇治「こんな気持ちは初めてだよ。1度は死のうとまで考えたのに・・・君達の言うとおりもう1度やり直せるかもしれない」

ローズ「そう思えるようになっただけでもアンタは1歩前に歩き出した・・・アンタの未来に向かってね」

勇治「全く君達の言葉は一々腹が立つ・・・と言いたいけど正論だな。もう1度足掻いてみるよ・・・ボクの未来を自分で切り開くために」

ルージユ「よかった これで貴方は大丈夫ね。じゃあ私達はシザースを止めに行くから貴方は此処にいて」

勇治「待つてくれ！！！！」

ローズ「え？」

勇治はひねくれた様にそう言うとルージユはグーサインを出しローズは笑顔を見せると早く先に進まない思い勇治に此処で待つているように言うのと走り出すが勇治は1度引きとめる。

勇治「ボクが言えることではない事は分かってる。でもお願いだシザースを・・・太陽さんを助けてやってくれ！！！！」

ルージユ「分かってるよ。必ず助ける」

ローズ「だから貴方は此処で待つて」

ルージユとローズはそれだけ言うのと部屋の出口に向かって走りして部屋を出ると残された勇治はカードデッキを確認するとカードがない事に気づく。

勇治「メタルガラスのカードが・・・契約のカードがない!？」

エルスに自分の守りを否定されたライアは怒りに任せて攻撃するようになったのだがそんな攻撃が彼女に通用するほど甘くはなかった。ライアの攻撃は巧みに避けれるよエルスのテクニカルか戦術に追いつめられるようになってしまう

エルス「はあああああつ！！！！！！」

ライア「サバイブ」ちっ！！！！！！・・・ぐっ！！!？」

エルスの剣がライアの強化された装甲を傷つけていくのだがやはり簡単にはあの鎧を傷つけることなど出来るわけがなかった。

ライア「サバイブ」お前は俺のしている事が守っている事ではないと言った・・・ならば力のない弱者が強者と対等に戦うにはどうすればいいと言うのだ!？ただ強者の言う事に従えと言うのか?ライアは自分の考える守りを否定されて明らかに動揺していた。自分は今こそが全てを守る己の武器であるはずだと考える故にエルスの言葉が理解できずにいるのだ。

エルス「そうじゃない！！！！」

ライア「サバイブ」じゃあなんだ?どうしろというのだ！！！！！！」

エルス「憎しみを募らせた力を使っても誰も守れはしないのよ・・・負の力を使っても負の連鎖が生まれるだけでしかないの・・・」  
エルスは一度ライトニングロッドをしまうとキリっとした目でライアを見た。

エルス「貴方に見せてあげる・・・本当の守りの力を!!!」

エルスもかつては大切な両親を殺された。だからこそシザーズ達の気持ちは近い出来ているつもりだった。だがそれだけではなかった。憎しみの力を使って自分や自分の大切な人を守れたとしてもそこからは負の連鎖しか生まれない事に代わりなどないのだ。だからこそライアのしている事は守りという行為ではない。エルスは右手から光を発するとブローチ型のアイテムの「ライジングブローチエ」を召喚する。

ライア・サバイブ「本当の守りの力？」

エルス「ええ。そして今から私の光で貴方を悲しみから救ってみせる!!!」

エルスはそのままライジングブローチエを胸のリボンに装着すると光に包まれるとコスチュームが変化していく。ライトグリーンに変化していき袖やアームカバー、フリルも一新して天使を思わせるような姿になり背中に薄緑の天使の羽が生えスカートの丈が長くなっていた

????「悲しみを照らす救済の光・・・ライジングエルス!!!」

ライア・サバイブ「ライジングエルスだと!？」

自分と同じように隠し玉を持っていた事にライアは驚くがすぐ剣を振り笑い声を上げた。

ライア・サバイブ「何だよ・・・お前も力に頼ってるんじゃないか・・・なにが守りの力だよ?力って言うのはな敵を粉碎する為にあるんだよ!!!!!!破壊こそ力の意味なのだあつ!!!!!!」

ライアは先手必勝とエビルウィップブレードでライジングエルスに斬りかかるのだがエルスは足を振り上げてライアのブレードを受け止めた。

ライア・サバイブ「なっ!?!?.....ぐううつ!?!?.....な、  
なんてバカ力だ.....ぐっ!?!?!」

ライジングエルス「ふっ!?!?!はあああああああっ!?!?!  
!?!?!?!」

ライア・サバイブ「ぐうおおおおあああああっ!?!?!?!  
!?!?!」

足で防御された上にそのまま剣を足ではじかれるように蹴られると  
ライアの鎧にライジングエルスのキックが放たれる。ライアはその  
まま物凄い気多いで飛ばされると船内の壁に叩きつけられてしまっ  
た。

ライア・サバイブ「.....ば、バカな.....さっきまでのキュアエ  
ルスとは違う?何が此処までの差を生んでいると言うんだ!?!」

ライアは信じられなかったがまだ自分には最後の切り札がある。こ  
うなれば最後の切り札を使う以外は手はないだろうとライアはカー  
ドを引き抜いた。

ライア・サバイブ「.....こうなれば全てを俺の全ての力をお前に  
ぶつけてやる!?!その力をお前は超えられるか?」

ライジングエルス「超えられるわ。貴方を悲しみをから救う為にもね」  
ライア・サバイブ「だったら.....それを俺に見せろ!?!?!」  
電子音「ファイナルベント」

ライアは自分のカードデッキの紋章が描かれたカードであるファイ  
ナルベントのカードをバイザーに装填していく。それに合わせるよ  
うにエビルダイバーは進化してエキソダイバーへとパワーアップし  
た姿を見せるとライアはその上に乗る。何倍にも大きくなったエキ  
ソダイバーの上に乗っかる様にしがみ付くとエキソダイバーは変形  
していきバイクの姿となった。そしてそのまま電撃を纏いながらエ  
ルスに突っ込んでいく。必殺技名はジャノサイド・ビックバン  
ライジングエルス「ライトニングザンバー!?!?!」

ライジングエルスはライトニングザンバーというライトニングロッ  
ドが強化された武器を取り出すとそれに光と闇のエネルギーを集め



耕輔は潔く負けを認めるとその場に座り込んだ。ライジングエルスは一度エルスの姿に戻り彼の顔を覗き込んだ。

耕輔「キュアエルス・・・お前のその力なら太陽さんを止められるかもしれない」

エルスは笑顔を見せると首を縦に振り頷いた。そしてそのまま耕輔を気遣いたたせようとしたが彼はその前に自分で立ち上がった。

耕輔「俺は大丈夫だから先に行け。そして改めて頼みがある。お前達の力で太陽さんも助けてやってくれ!!!」

エルス「勿論!!!」

エルスは耕輔の頼みにただ一言そう言うのと彼をその場に残して先に進んでいった。残された耕輔はふと自分のカードデッキを見てみるとライアの紋章であるエイのマークが消えている事に気がついた。ライア「っ!!!・・・まさか。やっぱり契約のカードがない!!!」

王蛇・サバイブ「はあああっ!!!」

ナツクルとバイザーでドリームを追い詰めようと攻める。パワーでは強化された王蛇は絶大的な力を秘めている為に未だに防戦一方ではあるのだがドリームはそれでも諦めようとはしなかった。

ドリーム・王蛇・サバイブ「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

肩で大きく息を切らす両者。一見すれば王蛇が圧倒的な力の差を見せつけて追いつめているようにも見えるのだが何度ナツクルで身体を殴りつけられようと何度キックを入れられようとドリームは立ち上がり王蛇に向かってくる。

王蛇・サバイブ「な、何だよ・・・どうしてボロボロになりながらも向って来れるのよ?こんな世界の為になんでそんなに我武者羅に頑張れるのよ?」

王蛇は信じられないとそして焦りが混ざった声で王蛇はそう聞く。ドリームは顔を上げながら王蛇の問いに答える。

ドリーム「言つたじゃない。私達は希望を捨てさせない為に戦っているって貴女達ももう一度希望を取り戻すために私はどんなに強い力を見せられても諦めない!!!!」

王蛇・サバイブ「希望・・・そんなものもう私達にはないのよ・・・この世界を破壊して新しい世界を創造する以外はね!!!!!!」

ドリーム「そんなことないよ!!!!!! 貴女は1度大切なものを手に入れたんじゃない・・・もう1度頑張ればまた大切なものを手に入れることだってできるんだよ!!!!!!」

王蛇・サバイブ「だ、黙れ・・・お前に私の何が分かるのよ!?!?・何かも失つた私の気持ちなんか!!!!!!」

ドリーム「未来の可能性は無限にある・・・その事を私が証明する!!!!!!」

ドリームは王蛇に向かって走っていきピンク色の光に包まれていき彼女のカラダに光が集約していく。王蛇もナツクルを消滅させるとカードを1枚デッキから引き抜く。そのカードは自分の切り札のあのカードだ

王蛇・サバイブ「何が・・・可能性だ・・・そんな戯言なんか私は絶対に信じない!!!!!!」

電子音「ファイナルベント」

そしてカードをベントインするとベノスネーカが進化したベノヴァイパーが出現し彼女の周りに咆哮えを上げながらドリームに向かって強硫酸の毒液を撒き散らしながらバイクに変形する。

ドリーム「プリキユア・シューティングスター!!!!!!」

それと同時にドリームは集めた光を一気に解放すると全パワーを出し切った渾身のシューティングスターを発動させる

王蛇サバイブ「消えされ、キュアドリーム!!!!!!」

対する王蛇もオリジナルの世界の龍騎サバイブと同等の破壊力のポイズントルネードクラッシュを発動させて硫酸を纏いながら猛スピードでドリームに突進していく

王蛇・サバイブ「うおおおおおおお!!!!!!」

「!」  
ドリーム「はあああああああああああああああつ!!!!!!!!!!」

ドリームの光と王蛇の毒牙がぶつかり合いどちらも相手を呑みこんでやろうと勢いを増していく。王蛇の毒がドリームの光を溶かすように蝕んでいこうと力を出し尽くすが。

ドリーム「もう1度、希望を取り戻して!!! 貴女なら絶対に幸せになれるはずだからっ!!!!!!!!!!」

王蛇・サバイブ「・・・っ!?・・・何?この光は・・・」

光が一層強くなると王蛇の身体をドリームが貫いていき包んでいった。この光を私は知っている・・・あの時捨てられた私を助けてくれたあの人がくれた優しさに似ている?・・・何年振りだろうこんな優しい気持ちになれたのは・・・王蛇の仮面の下で夏実は覚えがあるこの気持ちになりながら心が癒される。

夏実「っ!?!」

変身が解除され夏実はその場に立っていた。身体を貫かれた筈なのに痛みは感じなかった。傷の1つもついていないその身体はドリームとは対照的だった。

夏実「ど、どうして?・・・身体を貫いた筈なのに」

ドリーム「プリキュアの力は傷つける為にあるんじゃない・・・だれかを助ける為にある力なの」

夏実「助ける為の力・・・」

その言葉に夏実は彼女の言っていた言葉が身に染みてきて思わず涙が出てきた。夏実は最後にドリームにありがとうと一言言う。

ピーチ「はあああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ジェニス「でやあああああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ジェニスとピーチの宿命の戦いにも決着がつこうとしていた。戦闘能力が同じなだけに互角の流れは全く崩れることなく2人の体力は限界を迎えようとしていた、



ピーチ・ジェニス「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ……」  
恐らく後1発の必殺技が双方の限界だろう2人はそれを理解しながら立ち上がると最後の切り札を出すべく力を振り絞る。

ジェニス「コレで決めてやる……お前を倒し私が私になる為にもなあっ！！！」

ピーチ「くっ！！！」

今の体力ではどこまでいけるかは分からない。だが負けるものかと2人は同時に必殺は技を放つ。

ジェニス「行くぞ！！！ダークネスバースト！！！！！」

ピーチ「プリキュア・ラブサンシャインフレッシュ！！！！！」

2人の光が周囲を包み込んでいくと衝撃が走り2人は勢いよく飛ばされてしまう。

ジェニス「またしても引き分けか……くっ！！！！！」

フラフラになりながらも立ち上がりジェニスは舌打ちをする。

ピーチ「はあ、はあ、はあ、はあ……」

ジェニス「まあいい。この世界にはシザース達以外にもデスリード様と同じ強大な存在がいるのだ……そして封印されている邪神が蘇るその時こそ……全てが終わるのだっ！！！！……その時まで首を洗って待つておくんだな！！！」

電子音「パラレル・マキシマムドライブ」

ジェニスは最後にそれだけ言うたガイアメモリを使いその場から姿を消した。闘技場に残されたのはドリーム、ピーチ、そして夏実だけとなった。

夏実「……」

ドリーム「ピーチ！！！！！」

ドリームは倒れているピーチを起こしていくと何とか立ち上がる。

夏実「キュアドリーム、キュアピーチ」

夏実に呼びとめられるとピーチとドリームはどうしたのかと思った

のだが。

夏実「お願い、私を助けた様に太陽さんの憎しみを・・・彼の闇を消し去ってあげて!!!!!!」

彼女の今までとは違う態度に驚いてしまいがすぐに2人は笑顔を見せて首を縦に振る。そして背を向けてブロッサム達の元へ合流しに向う。

夏実「お願い・・・私の大切な人を助けて!!!!」

夏実はその場に座り祈る様にそう言った。だが彼女は気が付かなかったのだカードデッキからベノスネーカーのカードが抜き去られている事に・・・。

**第43話地球解放軍編XIII「決戦！憎しみを撃て」(後書き)**

今回は今までで一番長くなってしまいました。(汗)

なのでシザースとブロッサム達の出番は次になりそうです

さて次回はシザースサバイブの力と第3の兵器が動き出します!!!

次回もお楽しみに

第44話地球解放軍編XIV「決戦！ 召喚される究極甲獣？ 蛇帝」(前書き)

前回までのあらすじ

ガイVSルージユ&ローズ、ライアVSエルス、王蛇VSドリーム、ピーチVSジエニスの戦いはそれぞれプリキュア達の勝利で幕を閉じた。プリキュア達の光が絶望に落とされたミラーライダー達に希望をもたらすのだった。

だが彼らの契約のカードはある者によって回収されている事となった。

#### 第44話地球解放軍編XIV「決戦」召喚される究極甲獣？蛇帝」

シザースサバイブ「見るがいいプリキュア共よ！！コレがこの俺を帝王とする未来へ導く力の姿だ！！！！」

シザースはブロッサム達に自分の考えを否定された事で自分の最強の姿を露わにするとブロッサム達は彼のもつ今まで以上にない全身を揺さぶる様な圧倒的戦慄と威圧感を感じていた。

ブロッサム「それが貴方の心の闇の姿・・・なんですね」

ブロッサムは彼の姿を見て恐怖をいだくどころか逆に悲しそうな声を出した。その様子にシザースはバカにした様な声を出した

シザース・サバイブ「ふふふ！！！！・・・恐怖で言葉も出ないのか？くくくく・・・あははははははっ！！！！！！！！」

シザースは高笑いしながらプリキュア達を嘲笑う様にそう言うのだった。そして更に高ぶる気持ちを発する。

シザース・サバイブ「貴様らを倒しこの手に世界を取り込んでやる・・・行くぞおっ！！！」

シザースはシザースバイザーツバイを片手にブロッサム達めがけて振り下ろすが全員散り散りになる。

タ「っ・・・変身！！！」

電子音「H E N S I N」

タはシザースの攻撃を避けた後にゼクターを呼び出して手早くフェアリーの姿になるとマスクドフォームのままレイピアをガンモードにしてを構えてシザースに向ってビーム砲撃を放ってシザースに直撃させるのだがシザースには傷1つすらつかない

シザースサバイブ「ふはははははははっ・・・最早お前達の力ではサバイブで強化されたシザースにはついて来れまい」

電子音「ストライクベント」

シザースはカードを一枚引き抜きベントインさせるすぐにバイザーを腰の鞘に差し入れていき両腕にシザースピンチの進化系武器のシ

ザースカタールが装備される。

ブロッサム「そんな事ありません!!! 私達は皆の意思を受け継いで貴方の所まで来たんです・・・だから絶対に貴方に負けるわけにはいかないんです!!!」

シザース・サバイブ「そのガラス細工の自信などすぐに粉々に打ち砕いてやる」

ブロッサム・サンシャイン「やあああああああつ!!!」  
ブロッサムはシザースのカタールを避けながら隙を見て懐にはいこみパンチを入れるがただでさえ防御力が高い上にサバイブで強化されたシザースの鎧にダメージは皆無であり。

ブロッサム「つ!!!」

サンシャイン「そ、そんなっ!?!」

シザース・サバイブ「やれやれ・・・この程度だったとはなあああ!!!」

ブロッサム「あああああああああつ!!!」

サンシャイン「うわあああああああつ!!!」

シザースはそのままカタールでブロッサムを数回切り裂きサンシャインを蹴りつけ最後には彼女達のボディにキックを入れて蹴り飛ばしてしまう

マリリン「はあああああつ!!!」

飛ばされたブロッサムの仇打ちだとマリリンが上から踵落としをシザースの肩に叩き込んだ後右脇腹に回し蹴りを打ちこむがコレも手応えがない。

シザースサバイブ「雑魚が俺に触れるな!!!」

マリリン「っ!?!?・・・きゃあああああああああつ!!!」

シザースの低い声にマリリンが動揺した瞬間にカタールでマリリンを殴り飛ばしてやるとそのままダッシュで近づいていきカタールを倒れたマリリンの首元に向ける。

シザース・サバイブ「先ずら貴様からか? キュアマリン・・・死ね

えええっ！！！！」

シザースのカタールがマリンの喉を掻き切ろうとするがカタールがマリンに触れる前にヒマワリの形をした黄金の盾がマリンの身体を覆いかぶさる様に前に現れてシザースのカタールを防御する。

シザース・サバイブ「何っ!？」

ムーンライト「はああああああっ！！！！」

突然の事でシザースは当然動揺してしまう。その隙にマリンはサンシャインに救出されムーンライトが後ろからシザースの背中に向かってに回し蹴りを叩き込んでいく。流石のシザースも不意打ちには完全に対応しきれずにそのまま回し蹴りが直撃して勢いよく飛ばされるがダメージはそれでもほぼ0に近かった。

シザース・サバイブ「ちっ・・・瞬殺は免れたか」

飛ばされながらもシザースはすぐに立ち上がり舌打ちする。やはりただの物理的な攻撃では今のシザースにダメージを与える事は不可能なのか？

セイバー「はああああああああっ！！！！！！！！」

ただの物理攻撃でダメならこの伝説の金と銀の双剣でならばとセイバーが飛び出していきそのままシザースに刃を振りセイザースの右肩に向かって剣を振り下ろす。

シザース・サバイブ「ブラックリストメンバーの1人キュアセイバー・・・貴様の實力は他の雑魚と少しは違うと思っていたが・・・ふうん」

勢いよく火花が散りダメージを受けたと思ったプロツサム達だったがそれは見かけだけであつたらしく鎧に傷1つ付いていなかった。

セイバー「そ、そんなっ！！！！」

驚くセイバーをしり目にシザースはセイバーを振り払う。続いてコズミックとナイトが同時に前に出ていくとシザースにダブルパンチとダブルキックを放つが微動だもしない。

シザース・サバイブ「貴様たちもそれで本気か?・・・喰らえっ！！！！！！！！」

お返しにと回し蹴りとカターの斬撃を見舞わせるシザース・全員が束になっても本当に敵わないのか？

マリン「アイツにはアタシ達の攻撃が全然通らない……どうすれば」

マリンは思わずシザースの圧倒的な力の前にそう弱音を吐いてしまふ正に歩く鉄壁の要塞ともいえるシザースサバイブの圧倒的な力の差の前に追いつめられ地面に膝をつくブロッサム達。

シザース・サバイブ「これぐらいにしておけ。今なら命だけは助けてやろう」

全ては計算通りに進んでいる事にシザースは完全に勝ち誇りながらそう言う。だがブロッサムがすぐに反論の言葉を飛ばす。

ブロッサム「嫌です……まだ私達は諦めません！！！」

シザース・サバイブ「やれやれ……実に不毛な頑固さだな」

この圧倒的な状況でさえもブロッサム達はまだ諦めようとはしない。彼女達の力は何処から出てくるのかとシザースは呆れた様にそう言う。これ以上足掻いた所でこの圧倒的な力を持つ自分に勝てるなど万に一ついや億に一つのあり得ないと言う事が分らないらしい。

セイバー「こうなったら……私達の必殺技を全てぶつけるしか方法は無いかもしれないわね……でも彼に隙がないと通用しない」

サンシャイン「私に考えがあるわ。勝負は次にシザースがあのかたールで私達を狙った瞬間よ」

物理攻撃が全くシザースに通らないのならばプリキュアの必殺技を叩き込んでいくしかない。全員震える体に鞭を撃って立ち上がると専用アイテムを取り出すながら作戦を考える勝負は次の一瞬の駆け引きで決まる……ここはサンシャインの作戦に掛けるしかない。

シザース・サバイブ「ふん。何かするのようだが俺には通用せんぞ？」



シザースはカタールを構えながらもどうするつもりかは知らないが今のこの状況で勝てる道理などあり得ない。

シザース・サバイブ「そろそろ消える・・・世界の未来の礎となれ!!!」

シザースはカタールを光らせるとものすごいスピードで突進を始める。一気にカタールの刃で全員を切り裂くつもりだ。

サンシャイン「サンフラワー！ジス!!!」

だがまたしてもギリギリの所でサンシャインのサンフラワー！ジスがシザースを弾き飛ばしてしまう

シザース・サバイブ「ちっ!!!」

シザース地震にダメジは少ないのだが距離を思った以上に取られてしまう。勿論このチャンスをブロッサム達は逃すはずがなかった。

サンシャイン「集まれ花のパワー、シャイニータンバリン!!!」

シザース「っ!？」

シザースはすぐにカタールの装備を外すとカードを引き抜いてサンシャインの必殺技を防御する策を講じる。

サンシャイン「花よ舞い踊れ、プリキュア・ゴールドフォルテバースト!!!」

電子音「ガードベント」

シザース・サバイブ「バカがそんな物!!!!!!」

両腕に盾を発生させるガードパーフェクトガードを装備してサンシャインのフォルテバーストを防ぎ切ろうとするシザースがだがそれがサンシャインの狙いであったのだ。

シザース・サバイブ「っ!?!動けんっ!!!・・・これは罠か」

盾で防いだはずだったのが沢山のヒマワリの形をしたエネルギー体はシザースの身体にまとわりついて動きを封じ打のだ。この戦法はかつて砂漠の使徒との戦いで対ダークプリキュア戦にて動きを封じ心の大樹を守った時と全く同じものであった。

サンシャイン「今よ!!!!!!」

ブロッサム一同「うん!!!!!!」





ブロッサム「っ！！！！……皆さん！！！！」

そこには大人たち率いるライダーチーム、プリキュア5のドリームルージュ、ローズ。フレッシュのピーチ、そして彼女達の仲間のエルの姿だった。身形はボロボロだが気合は十分であると目をしていて闘志が溢れ出ているようだった

シザース・サバイブ「貴様ら……まさか夏実達を！！！！」

カブト（大人）「安心しな。お前の仲間は全員生きてるさ！！！！」

シザース・サバイブ「何だと？」

エルス「彼らの憎しみは私達が消し去ったわ！！！！。残るは貴方一人よシザース！！！！」

ドリーム「あの子達は言ってたよ。『貴方を助けてほしい』って……

・もうこんな事は止めようよ。今からでも遅くはないよ！！！！」

エルスとドリームはシザースにこれ以上の戦いは無意味だと言って降伏を迫る。だがシザースはそれに耳を傾けるつもりはなく「黙れ」と怒鳴り散らす。

シザース・サバイブ「（2パーセントの確率が大番狂わせをしてきたか……だがまだ手はある）……夏実達をどう洗脳したかは知らんが俺の答えは変わらんぞ……貴様らをこの手で倒す！！！！」

シザースはもう1枚のストライクベントのシザースカタールを装備する。例え何人集まろうが自分の勝利は揺るがないと信じて戦うつもりだ。

ブロッサム「だったらシザース。貴方の心にある憎しみや怒りを今この場で消し去ります！！！！」

シザース・サバイブ「ほざけえっ！！！！！！」

シザースはダッシュでブロッサム一同にカタールの刃を向けるがそれをブロッサムが受けとめる。

ブロッサム「やああああああつ！！！！！！」

シザース・サバイブ「ちっ！！！！！！」

カタールの刃を受けてブロッサムは片足を軸にしながらシザースの

ボディにキックを放つ。カタールで防御するがその次の瞬間にマリ  
ンのパンチがシザースの仮面に叩きこまれる。

シザース・サバイブ「っ!?!?・・・いつの間に」

怯んだその隙にサンシャイン、ムーンライト、ナイトのトリプルパ  
ンチがシザースのカタールに叩き込まれるとカタールは木っ端微塵  
に砕け散ってしまう。先程までとは違う何かの力がシザースの予想  
を覆していく。

シザース・サバイブ「な、何だと!?!」

カタールが砕かれてしまったシザースは急いで新しい武器を召喚し  
ようとカードを引き抜こうとするがそうはさせないとドリーム、ル  
ージユ、ローズの3人がシザースに猛ラッシュを放ちカードを引か  
せる暇を与えさせない。バイザーで3人を振り払おうとするが攻撃  
は避けられて重厚なボディは次第にその強度を弱めていく。

シザース・サバイブ「くっ!?!?!」

カブト（大人）「まだ終わってないぞっ!?!?!」

電子音「RIDER KICK」

更に追撃のライダーキックを大人率いるライダー軍団がシザースに  
叩きこむと流石のシザースもダメージは避けられなかった。

シザース・サバイブ「ちっ・・・己えッ!?!」

飛ばされたシザースはこのままでは流石の自分もマズイと一度自分  
からプロツサム達と距離をとり一枚カードを引き抜いてバイザーに  
ベントインさせる。

電子音「アドベント」

こうなればモンスターを呼び寄せて力でねじ伏せてやるとシザース  
はボルキャンサーの進化系のボルナハトウマーを呼び寄せる。その  
姿は軽くウルトラマンを思わせるほどの巨大な姿となり金色の甲殻  
と爪は正に化け物蟹の一言であった。

ガタツク「アレはっ!?!」

エルス「サバイブで進化したボルキャンサーです!?!」

ダークカブト「なんてデカさだ・・・シザースのやつ何をするつも

りだ!？」

シザース・サバイブ「ふうん、この場で貴様らまとめてこの俺の力で粉碎してくれる・・・先ほど言ったとおりこの俺の最強の力でなっ!?!?!?!」

シザースはファイナルベントのカードを引き抜いた。この場にいる全員纏めて消し去るつもりだ。

カプト（大人）「くっ・・・今の俺達にシザースの技を相殺できる力はない!?!?!・・・どうする？」

ブロッサム「私達に任せてください!?!」

ガタツク「な、何言ってるんだ!?!・・・奴の技に対抗できる術なんて・・・まさか、あれか？」

今の消耗したブロッサム達ではシザースの全力の攻撃を受け切る方法は1つしかない・・・それは危険なかけてもある。大人達はブロッサムだけにそんな危険な真似をさせたくはなかったのだが

カプト（大人）「分かった・・・そこまで言うのならお前達に任せよ」

だが今のブロッサム達は今何と言ってもこの場は譲らないつもりだろう。ならば此処はブロッサム達が持つあの奇跡の力を信じる以外はシザースを倒せる手段は残されていないかもしれない。

シザース・サバイブ「貴様ら5人で戦うつもりか?・・・いいだろう!?!?!」

電子音「ファイナルベント」

上等だとシザースはファイナルベントのカードをベントインしていくとボルナハトウマーはシザースの後ろに現れる。

ブロッサム「皆、行きますよ!?!?!」

マリン・サンシャイン・ムーンライト・ナイト「うん!?!?!」

シプレ・コフレ「今こそプリキュアの力を見せるときですっ!?!?!」

ポプリ「久々の出番でしゅ!?!?!?!」

妖精達がブロッサム達に応えるようにハートキャッチミラージュを召喚。ナイトは光を発してホーリーパヒュームを呼び寄せた。

ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト「鏡よ鏡、プリキュアに力を！！！！」

4人はポプリから受け取ったパワーアップの種をハートキャッチミラージュに装填、そのあと祈りをささげると光は4人を包んでいきコスチュームが変化していく。彼女達の背には天使の思わせる光の翼が装備されスカートやブーツも全体的に鋭利なものとなりカラーも淡くなる。

ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト「世界に輝く一面の花！！ハートキャッチプリキュア・スパールエツト！！！！」  
ナイト「聖なる光よ、私に更なる力を！！！！」

ナイトの掛け声にパヒュームに輝くが発せられたと思えば素早くイリユージョンロッドからプリキュアの種を取り出しそれをパヒュームに装填、その後ナイトは胸から香水を噴きかけると黒と銀がメインのコスチュームはホワイトに統一された者へと姿を変える。そしてナイトのおかつぱ頭も伸びてロングヘアとなり変身が完了する。ホーリーナイト「聖なる夜に輝く一輪の花、キュアホーリーナイト！！！！」

シザース・サバイブ「ふうん・・・今更何をしようが無駄だ、喰らえ、メルトバブル・バースト！！！！」

シザースはボルナハトウマーがバイクに変形したのと同時に変形したバイクに乗りこむ。そしてそのままスーパーシルエツトとなったブロッサムとホーリーナイトに必殺技を叩き込んでいこうとする。

これが決まれば全てが終わる・・・だがブロッサム達も対抗する準備は既に出来ていた。

ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト「花よ咲き誇れっ！！！！プリキュア・ハートキャッチオーケストラ！！！！」

ブロッサム達4人はタクトとタンバリンを振り必殺技名を叫ぶと背後に巨大な女神が出現する。淡いピンクの髪と純白のドレス姿の女

神は向ってくるシザースとボルナハトゥマーに立ち向かう。  
ムーンライト「ふん！！！」

最初にムーンライトが手をかざして女神をシザース達に前に降臨させる。

サンシャイン「はあああつ！！！」

続いてサンシャインが女神の手を持ちあげさせる。

マリ「たああつ！！！」

それに続いてマリが女神の手を拳に変えさせると光のエネルギーを集約させて拳の大きさを大きくさせていく。

ブロツサム「たあああああーーーーっ！！！！！」

最後にブロツサムが女神の光の拳を憎しみに捕らわれたシザースとその象徴のボルハトゥマーに放つていき光の力でそれぞれを包み込んでいこうとする・・・が。

シザース・サバイブ「バカが・・・貴様らの浄化技など俺には通用せん！！！」

光の力には闇の力で対抗してくれるとばかりにシザースはダークから課された試練で自らの物にした闇の力で対抗すると溶解泡につつまれたバイクに黒い闇の力をも纏わせ女神の手から離れるとそのまま闇の力の波動を放ってくるのだがすぐにブロツサム達は女神を操り光のエネルギーをぶつけていくがシザースのた闇の波動と光の波動が激突するとブロツサム達は押され始めてしまい光のエネルギーは押し戻されていく。

シザース・サバイブ「ははははははははつ！！！！俺の勝ちだああああ！！！！！」

ホーリーナイト「それはどうかな？」

シザースの闇がブロツサム達の光エネルギーを押し戻してやるとブロツサム達の必殺技を完全に押し返そうとしていこうとしていくがホーリーナイトがホーリーロッドを煌かせるように取り出す。

ホーリーナイト「花よ轟け、プリキュアホーリーフォルテストーム！！！！！」



ホーリーナイトのホーリーロッドに光が集約するとそのまま自分の最強の必殺技のブロッサム達の光エネルギー波に取り込んでいくとシザースの闇の波動を徐々に押し戻す。

シザース・サバイブ「ば、バカな・・・何だ・・・この俺が負けるなど・・・」

徐々に闇が押し戻されていき光がシザースの元の向ってくる。信じられないという声を上げた彼にブロッサムは声を上げた。

ブロッサム「コレが貴方にはない力・・・憎しみを打ち消す光の力なんです!!!」

シザース「ぐう・・・ぐあああああああああああああああ  
っ!!!!!!!!!!!!」

ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト・ホーリーナイト「あああああああああああああああああああっ!!!

!!!!!!!!!!!!」

シザースの身体を光が完全に飲み込み浄化をし始めブロッサム・マリンはクリスタルドームを回してサンシャイン、ムーンライト、ホーリーナイトはタクト、タンバリン、ロッドを弧を描くように動かして光エネルギーをシザースとボルハトウマーに送り込んでいく・・・が。

突然シザースを包み込んでいた光に黒い光線が放たれるとハートキヤッチオーケストラとホーリーフォルテストームを消し去ってしまう。マリン「なっ!?!?・・・何っ!?!?」

その場にいたシザースを含めた全員が驚きを隠せない表情となる。

シザースは光から解放されたがダメージはかなりのものであるらしくその場に膝をついていしまう

シザース・サバイブ「っ!?!?・・・はあ、はあ、はあ、はあ、はあ。今は・・・まさか」

シザースは光線が放たれた所をいってみるとそこには漆黒のマントに身を包んだ1人の人間と思われる人物は上空に浮いていた。

「????シザース・・・危なかったな」

シザース・サバイブ「お前はダーク・・・なぜお前が!？」

シザースの様子に全員はその人物の方に視線が集まる。ブロッサム達は本能的な直感の様なものでその黒マントの人物がただの人間ではないと判断できた。

ブロッサム「貴方・・・一体誰ですか!？」

ダーク「そうか君達には紹介がまだだったね・・・我が名はダーク!!!全てを闇に呑みこませる闇の支配者だ」

サンシャイン「闇の支配者!？」

ダーク「ふふふっ」

ダークは上空から舞い降りると膝をついているシザースに3枚のカードを投げ渡した。

シザース・サバイブ「!?!?!これは夏実達の契約のカード!？」

ダーク「シザースよ君の今の力だけではプリキユア達には敵わない。だが私が渡した闇とあのモンスターを召喚すれば・・・な？」

シザース・サバイブ「ふうん、止むを得んな。出し惜しみしている場合ではない」

電子音「アドベント」

シザースは立ち上がるとダークから受け取ったメタルグラス、エビルダイバー、ベノスネーカーの3枚のカードをバイザーにベントインする。

ボルハトウマーの後ろにサバイブ化した3体のモンスターが集まる。そしてシザースは更にもう一枚カードを引き抜いた。

シザース・サバイブ「見るがいい、そして慄くがいい!!!我々4人の力を合わせた全てを超越し全てを破壊する究極の力を!!!」

電子音「ユナイトベント」

そしてそのままシザースはもう一枚のカードをベントインさせると4体のモンスターがいる自給が歪み始め4体のモンスターが1つに合わさっていく。4体のモンスターの咆哮と眩いばかりの光が辺り一面を包み込んでいく。

シザース・サバイブ「出でよ我が最強の僕！！！！」

シザースは両手を広げながらそう言うのと徐々に自分と同士達の力を併せ持った最強を超える究極のモンスターの姿が現れていく。そして現れたその姿は・・・

シザース・サバイブ「究極甲獣？蛇帝、アルティメットジェノキヤンサー！！！！！！」

腕と本体はボルハトウマーの鍔と甲殻、足メタルエンパイア、背中にはエキソダイバー、そしてその上にボルハトウマーの甲殻がそして頭と首にはベノヴァツパーとメタルエンパイアの兜のようなものを纏われたその邪悪にまみれた姿が出現した。

シザース・サバイブ「これぞ史上最強にして華麗なる究極の破壊兵器の姿だ・・・アルティメットジェノキヤンサーで貴様らを倒す！！！！」

遂に現れた太陽の最後の兵器の前にプロツサム達是对抗手段があるのだろうか？ハートキャッチオーケストラは通用するのだろうか？

**第44話地球解放軍編XIV「決戦」召喚される究極甲獣？蛇帝」(後書き)**

とうとう出せましたオリジナルのモンスターを。

次回はつぼみ達に最大にピンチが……

次回もお楽しみに

第45話地球解放軍編XV「決戦〜絶望を崩せ奇跡の融合!〜」(前書き)

前回までのあらすじ

ハートキャッチオーケストラとホーリーフォルテストームの合体技にシザースは敗れ去ったと思ったのだがそこに闇の支配者を名乗るダークが現れシザース救出する。形勢不利と見たシザースにダークは夏実達から奪い取った契約のカードを太陽に切り札として渡し最後の切り札の究極甲獣?蛇帝アルティメットジエノキャンサーでブロッサム達を今度こそ追いつめようと反撃を開始する。

夢原さん、桔梗さん、GASHさんには感謝いたします!!!

## 第45話地球解放軍編XV「決戦〜絶望を崩せ奇跡の融合!〜」

おぞましい姿を見せた太陽シザースが従える最強を超えた究極のモンスターであるアルティメットジエノキャンサーは咆哮をあげてブロッサム達を威嚇するように睨みつけているその姿は蟹、蛇、サイ、エイの4体のモンスターが合体した文字どおりの最悪の殺戮兵器モンスターと言つてもいいだろう。それはは今まで戦ってきた怪物とはケタ違いの威圧感と戦慄が感じられブロッサム達をすぐには動けなかった。

シザースサバイブ「これが俺の最後の切り札であり滅びの神にして究極の殺戮兵器モンスター・・・お前達はここで終わる。殺やれアルティメットジエノキャンサー!!!!」

シザースは腕を胸のあたりで組んで自分の最狂殺戮兵器モンスターの威圧と戦慄に動けないブロッサム達を徹底的に見下す。そして先程やれた攻撃を倍にして返してやるとアルティメットジエノキャンサーに命令を下す。

ブロッサム達全員「つ!!!」

我に返った戦士達一同は近づいてくるアルティメットジエノキャンサーから距離をとるように散り散りになってアルティメットジエノキャンサーとの距離を確保しようとしていく。

アルティメットジエノキャンサー「ギシャアアアアアアアアッ!  
!!!!」

咆哮を上げるとベノヴァツパーの毒液を戦士達に撒き散らしながらその巨体で攻撃を仕掛けていくとブロッサム達は巨体の攻撃を避けるので精一杯で攻撃にまでは手が回らなかった。

ブロッサム「プリキュア・ピンクフォルテウェイブ!!!!」

マリノ「プリキュア・ブルーフォルテウェイブ!!!!」

サンシャイン「プリキュア・ゴールドフェルテバースト!!!!」

ムーンライト「プリキュア・シルバーフォルテウェイブ!!!!」

ホーリーナイト「プリキュア・ホーリーフォルテストーン!!!!」



シュート」を放つ。ドリーム達5人はすぐに逃げる為に移動するがビームの破壊力は凄まじく直撃は避けたものの爆風で飛ばされてしまう。

セイバー・コズミック「でやあああああああつ!!!!!!」

遠距離が効かないなら接近戦はどうだとセイバーとコズミックが同時に双剣とパンチを直接アルティメットジェノキャンサーに見舞わせていくのだがアルティメットジェノキャンサーは微動だもしないアルティメットジェノキャンサー「ギシャアアアアオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!」

アルティメットジェノキャンサーは咆哮を上げながら目障りな2人を一掃するために口からアルティメットシュートを放って2人に反撃の光線を放つ。

カブト（大人&総司）「ハイパーキヤストオフ!!!」

電子音「HYPER CAST OFF」

このままでは全滅は時間の問題だと大人と総司は一気に勝負を決める為にハイパーゼクターを起動させてハイパーフォームになるとパーフエクトゼクターを呼び出す。

電子音「All Zector Combine」

カブト（大人）「喰らえツ!!!!!!」

電子音「MAXIMUM HYPER CYCLONE」

大人と総司のマキシマムハイパーサイクロンが合わさって巨大な光となつてアルティメットジェノキャンサーに直撃すると今までで一番強力であろう爆発が起きて辺りに発生して閃光と爆風が起こる。

シザースサバイブ「ふうん」

アルティメットジェノキャンサー「ギシャアアアアオオオオオオオオオオオオ!!!!!!」

カブト（大人）「ば、バカなツ!!!!!!」

カブト（総司）「.....つ!!!!!!」

マキシマムハイパーサイクロンでさえもアルティメットジェノキャン



ンサーはやり過ぎてしまった。全員の最強クラスの必殺技を叩き込んでアルティメットジェノキャンサーには傷1つすらつける事は出来ていなかった。ポーカーフェイスが得意の総司でさえもアルティメットジェノキャンサーの圧倒的な防御力を受けいる事は出来なかったらしく普段は見せない動揺した態度を露わにした。

シザース・サバイブ「茶番は終わりにしてやる・・・アルティメットジェノキャンサーよ全てを消し去るのだあつ!!!」

シザースはアルティメットジェノキャンサーに命令を下すとアルティメットジェノキャンサーは口に光を発していき邪悪に満ちたエネルギーを集約させ始める。ブロッサム達は何とか立ち上がるが既に反撃の力は残されていなかった。

シザースサバイブ「貴様らに望みはない・・・滅びの光で塵となれえ!!!!!!滅びのバーストビックバン!!!!!!」

全員「うわあああああああああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

シザースの合図に合わせてアルティメットジェノキャンサーは口から超破壊拡散光線バーストビックバンを全員に向けて放つとブロッサム達の悲鳴がこだました。そして凄まじい閃光の後玉座の間全体を包み込むかのような大爆発が起きる。

大人「・・・み、皆あ・・・だ、大丈夫か？」

琢磨「な、なんとか・・・」

傑「い、生きてる」

最初に第一声を上げたのは大人だった。全員アルティメットジェノキャンサーの凄まじい全体攻撃を受けて飛ばされ変身は解除されて身体はボロボロであった。大人の近くにいた大人達率いるライダーチームの夕と総司は気絶してしまっているが琢磨、傑はなんとか意識を手放さなかったのだ。他の仲間の生存を確認するために痛みが走る身体に鞭を打ち立ち上がる3人の元にかすれた声が聞こえてきた

つぼみ「ひ、……ろと……さん」

大人「つぼみ？」

えりか「た、たく、……ん」

琢磨「この声はえりか？」

いつき「す……る……さ」

傑「まさか!!!」

慌てて大人達3人はは激痛が走るな身体を動かしてつぼみ達らしきものの声がした方向に向かうとそこには……。

大人「つ、つぼみっ!!!!み、皆あつ!!!!!!」

なんとそこにはプリキュアに変身する前のワンピース調の衣装を着たつぼみ達5人の姿があつた。彼女達は身体が見てもすぐにただ事ではないと理解できるほどボロボロであり瀕死の重傷と言つてもいいほどだろうその傷は深く早く治療しなければ本当に死んでしまいかもしれない。そしてすぐ近くにはセイバー、ドリーム、ルージュ、ローズ、ピーチ、エルス、コスミックの姿もあつた。どうやら彼女達は変身自体は解除されていなかったが傷が深い事には変わりはない。

シザースサバイブ「まだ息の根があると呆れ果てるほどのしぶとさだな」

大人「シザース、貴様あつ!!!!」

シザースサバイブ「どれだけ足掻こうと結末は既に決まっている。

上原大人、漆山琢磨、影山傑……貴様らがウルトラマンになつた所でアルティメットジェノキャンサーに敵いはしないぞ。さあ、どうする？」

大人「つぼみ達を死なせはしない!!!!……俺達が大切な仲間を絶対の守つてみせる!!!!……行くぞ2人とも。」

琢磨・傑「おう!!!」

こうなつたら今戦える自分達が最後の力を解放するしかない。3人はスパークレンスを起動させて光の巨人の姿に変わりアルティメットジェノキャンサーの前に立つ。つぼみ達の事を考え本来の巨大な

姿には変身が出来なかったがそれでも今できる事をする為に3人は立ち上がる。

ティガ「チャアアツ!!!!!!」

アース「デヤアアツ!!!!!!」

デュナミス「ハアアツ!!!!!!」

3人は同時にアルティメットジエノキャンサーに向かって走るとティガとデュナミスは飛び上がる。アルティメットジエノキャンサーの左右の腕にキックをアース胴体に向かってパンチを放つ。

アルティメットジエノキャンサー「・・・ギシャアアアアアアアアアアアアアアツ!!!!!!」

ティガ・アース・デュナミス「グワアアアアアアアアアアアアアアツ!!!!!!」

アルティメットジエノキャンサー自体には3人のウルトラマンの攻撃でさえもダメージは皆無に等しくそのまま腕や足で殴り飛ばされる。

ティガ「ハアアアアアアアツ!!!!!!」

アース「シャアアアアアツ!!!!!!」

デュナミス「ダアアアアアアアツ!!!!!!」

それでも怯まず3人は何度も何度も飛び上がってはキックやパンチ更にボディアタックを放つて少しでもアルティメットジエノキャンサーにダメージを与えようと奮闘するが健闘もむなしくダメージを与える事は出来なかった。

ティガ「ハアアアアアアアアアア!!!!!!」

あの手応えでは格闘技は通用しないと判断したティガはゼペリオン光線をアルティメットジエノキャンサーの胸に放つがアルティメットジエノキャンサーから雷光の様な光が発するとそのまま全身を覆い尽くすように身体が包まれてゼペリオン光線を相殺してしまった。ティガ「ハツ!?!」

ゼペリオン光線すらも通用しない事にティガ達3人のウルトラマンの心にも焦りが生まれてしまう。その様を見たシザーズは前に出て

いくと自信にあふれた声を出した。

シザースサバイブ「なぜコイツを倒せないか教えてやるのか？アルティメットジェノキャンサーにはプリキュアとライダー更にはウルトラマンの戦闘パターンを組み合わせるのだ。故にお前達がアルティメットジェノキャンサーに勝つ可能性は0・・・初めから貴様らが俺に勝つなど不可能だったと言う事だ。」

アルティメットジェノキャンサーは咆哮を上げるとティガ達だけではなくほぼ無差別にアルティメットシユートを放つと後ろには瀕死の状態のつぼみ達がいる事をすぐに思いだしたティガ達はつぼみ達を守るほどの大きさに巨大化してつぼみ達を自分の身体を盾にして守る。

ティガ「アース・デュナミス『グアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！！』」

アルティメットシユートがティガ達の背中に直撃すると激痛で大声を出す。それと同時にカラータイマーが鳴り響いて絶体絶命のピンチに立たされてしまう。

つぼみ「・・・てい、ティ・・・ガ？」

ティガ「ッ！！！！（このままじゃ本当につぼみ達が死んでしまう・・・せめてつぼみ達だけでも助ける方法はないのかあ！？）」

下からつぼみの力のない声が聞こえた来てくるとティガ達でさえも不安が心によぎる。既につぼみ達の体力は限界に近くこのままでは本当に死んでしまうかもしれない。何かつぼみ達を助ける方法が無いか懸命に考えるティガの頭の中に突然声がよぎって来た。

「???」一つだけ手がある」

ティガ「（！？・・・だ、誰だ！？）」

「???」ティガの中に眠る残像意識の存在とでも言っておこう。今は時間が無い落ちついて聞け」

ティガ「（・・・分かった）」

ティガは突然聞こえた来た声に半信半疑だったが今は猫の手さえも借りた状況である為に例えこの主の正体が幻想でも何でもいいか

ら今は頼らせてもらおうと声の言う事を聞く事を了承する。

「???」彼女達を助ける方法はただ1つ・・・お前達3人のウルトラマンの全エネルギーを彼女達に与えるのだ」

ティガ「(俺達のエネルギーを?)」

「???」そうだ・・・そうすればあの怪物を倒せる力が誕生するはずだ」

ティガ「(それで本当につぼみ達は助かるんだな!?)」

「???」ああ。だが彼女達の体力が君達の光エネルギーに耐えきれぬかは一か八かの賭けだ・・・それでもやるか?」

ティガ「(・・・やるしかない・・・このままつぼみ達を死なせるわけにはいかない)」

「???」・・・ならば光を託すのだ。そして世界を守れ!!!」

声の主は最後にそれだけを言うとは何も言わなくなった。ティガは立ち上がる。

アース「(ティガ?・・・)」

ティガ「(最後の手段だ・・・俺達の全エネルギーをつぼみ達に渡すんだ!!!)」

アース「(何だつて?!?・・・そんなことして大丈夫なのかよ?)」

ティガ「(分からない・・・でもこのままじゃつぼみ達もたないし奴に勝てる保証だつてはない。このまま全員倒れるよりも1%でもある僅かの可能性に掛けるしかない。)」

ティガの決意に溢れる視線にアースとデュナミスはティガの言う可能性に賭けてみると手を伸ばし3人は手を重ねる。

ティガ・アース・デュナミス「(・・・望みは最早1つだけ・・・ならばその希望に全てを賭ける!!!)」

このまま戦ってもアルティメットジェノキャンサーに勝てる可能性など殆ど無いかもしれないしつぼみ達の命が尽きてしまったら・・・。ならば僅かにある可能性に自分達の未来を託すという選択以外は今の自分達には残されていなければそれに全てを掛けるとティ

ガ達は等身大の大きさに戻るとつぼみ達に駆け寄り手を伸ばした。  
ティガ「(皆・・・俺達の力の全てをを皆に託す)」  
アース「(だから必ず勝て!!!)」  
デュナミス「(皆の勝利を俺達は信じてるぞ!!!)」  
身体から光を発しながらも自分達の残っている光エネルギー全てを  
つぼみ達の身体に照射する。自分達に出来る事はもうこれしかない  
彼女達の力を信じて全てを託す事以外は・・・。

つぼみ「(この光は・・・何?)」

えりか「(凄く暖かい・・・でも何で・・・この光をアタシは知って  
いる)」

いつき「(この光はいつもそばにいる・・・まるで・・・)」  
ゆり「(絶望を崩す・・・希望の光)」

アンナ「(夢をあきらめない・・・勇気の光)」

プリキュア達の中に入るティガ達3人のウルトラマンの光。光は彼  
女達の折れた心にもう一度希望を思い出させる様な優しい光で痛み  
を全て吹き飛ばし戦う勇気を取り戻させる。

シザースサバイブ「ふうん、何をしようがこの攻撃で俺に勝利はも  
たらさせる・・・行くぞおつ!!!アルティメットジエノキャンサー  
よ最後の攻撃だあつ!!!」

ドリーム「(『まだ終わっていない』って言うんだね?)」

ルージユ「(ウルトラマンにそこまでされたら)」

ローズ「(諦めるわけには行かないわね)」

ピーチ「(皆の幸せの為に!!!)」

エルス「(この光をくれた彼らの為に!!!)」

コズミック「(憎しみに捕らわれたシザース達を倒し世界を守るた  
めに!!!)」

セイバー「(そしてシザース達を救う為に!!!)」

ティガ達3人の姿が消え全ての光がプリキュア達に注ぎ込まれると  
プリキュア達は自分のカラダの中に燃え滾る凄まじいエネルギーを



ムーンライト「その心を」

サンシャイン「私達が」

マリン「キャッチする」

色はそれぞれのカラーが淡くなっている事に変わりはないが胸のあたりのプリキュアを象徴するクリスタルの形がティガ達ウルトラマンのカラータイマーを思わせる形になる。更にクリスタルを中心に胸のにはティガのプロテクターを模った様な金色のラインが入ったその姿はスーパーシルエットの進化系だ。

シザースサバイブ「・・・貴様らその姿は？」

ブロッサム「私達のこの姿はティガ達の力が融合した姿。その名は世界に咲く奇跡の花、ハートキャッチプリキュア・ウルトラシルエット!!!!」

ブロッサム達はポーズをとりながら凜々しく神々しい姿を見せつけるとその後に残り続きの面々も生まれ変わったその姿を見せつけながら名乗り上げを始める。

????1「未来を造る希望の光、ウルティメットドリーム!!!!」

????2「未来を造る熱き光、ウルティメットルージュ!!!!」

????3「未来を造る青い光、ウルティメットローズ!!!!」

????4「未来を造る幸せの光、ウルティメットピーチ!!!!」

????5「未来を造る新生の光、ウルティメットエルス!!!!」

????6「未来を造る星の光、ウルティメットコズミック!!!!」

????7「未来を造る救世の光、ウルティメットセイバー!!!!」

絶望を打ち破る未来を造る戦士が誕生した。シザースのアルティメットジェノキャンサーと3人のウルトラマンの光を託されたプリキュア達の最後の決戦が始まる。



第45話地球解放軍編XV「決戦、絶望を崩せ奇跡の融合！〜」（後書き）

目には目を融合には融合で対抗という事にしてみました。

さて今回は最終決戦の開始です！！！！

では次回もお楽しみに

前回までのあらすじ

アルティメットジェノキャンサーの圧倒的な力の前にプロツサム達は瀕死の重傷を負ってしまふ。彼女達を庇う様に大人達はウルトラマンとなり戦いを挑むがアルティメットジェノキャンサーにはプリキュア、ライダー、ウルトラマンの戦闘データがインプットされていてティガのゼペリオン光線すら受けつない。

絶体絶命のピンチに立たされた一同だったが最期の希望はあった。

それはティガの光エネルギーをつぼみ達に託す事だった。最期の望みに掛けティガ、アース、デュナミスは自分達の全エネルギーをつぼみ達に託す事で新たななる戦士「ウルティメイトプリキュア」が誕生するのだった。

辺りを照らす眩い光が消えていくとそこには新しい力を得た12人の戦士が堂々とした態度で立っていた。その姿は神々しの一言で全ての闇を消し去ってしまうと錯覚してしまうかのようだった。

シザースサバイブ「ウルトラシルエットにウルティメットだと？」

ダーク「っ！！！！」

シザースとダークは戸惑った声を上げるがシザースはすぐに鼻で笑うと余裕そうな声を漏らした。

シザースサバイブ「全く楽しませてくれる奴らだな」

シザースはまさかの展開に驚いた声しか出なかったがすぐに鼻で笑うとまるでこの展開を楽しむかのようにそう言う。

シザースサバイブ「この俺の憎しみに染まった心をキャッチするといったな・・・果たしてそんな事が本当に貴様らごときに来るかな？」

もう一度カタルを召喚するとシザースは低い声でそう言う。例えば相手がどんな力を得ようとも力で薙ぎ倒してやると言うかのようにであったそんな彼を見てブロッサムは静かに口を開いた。

ブロッサム「必ず出来ます！！。私達が得たこの光で」

シザースサバイブ「・・・」

ブロッサムの言うとおりシザースは強欲な権力者の為に自分の憧れた父を犯罪者と罵られた揚句に母親を失い妹とは生き別れを強いられた。そしてその後の彼は犯罪者の息子という烙印を押されて周囲の人間に差別を受け心に深い闇を背負うこととなった。そして本当の事を知り自分の父と母の仇をとるだけではこの闇は消えることなく『全世界をリセットする』にまで発展してしまった。もしも今目の前にいるプリキュアのような清く純粹な心を持った人間が数多くいたら今の自分はこの事にはならなかったのかもしれない・・・シザースは自分の忌まわしい過去を振り返りそう思いながらもすぐ

に自分の心の中でそれを否定する答えが出た。

《もう俺は旧世界には存在する事は出来ない・・・いや旧世界を受け入れることすらできないと言うのは明白であろう。今更になつて夏実達以外の人を信じることなど出来るわけがないのだ・・・そんな事はもう分かりきっている事。その為に俺は・・・だが奴らは・・・プリキュアはあつ!!!》

シザースサバイブ「・・・ふうん、だが貴様らの力ではアルティメットジェノキャンサーを倒す事など不可能だ!!!・・・貴様らが得た新しい力ごとこの手で粉碎してくれる!!!」

《奴らは本気でこの世界を守ろうとしている。・・・何故だ？この俺が復讐の為に戦っているのと知りながら何故自分の命を賭けて戦う事が出来るのだ？・・・ただ純粹に名も知らない他者の為に戦っていると言うのか!?!?・・・そんな事を本気で実行できる人間など・・・俺は1人しか知らない自分の父親しか・・・そしてプリキュア共がこの俺の邪魔をするのなら薙ぎ倒して進むまで》

シザースは自分の心の中でそう整理しながら吠える様にそう言った。だがブロッサムは達は不敵な笑みを浮かべている事に気が付くとシザースは鼻で笑ったがそれに合わせてブロッサムは口を開いた。

ブロッサム「それはどうでしょうかね?・・・今の私達に溢れる勇氣と力は貴方の究極殺戮兵器、<sup>アルティメットジェノキャンサー</sup>そして貴方の憎悪をも凌駕します!

!!!」

シザースサバイブ「ふうん、戯言を・・・そこまで言えるのであれば言葉などではなく貴様らの実力で示してみろ!!!」

シザースのその言葉を合図にブロッサムを先頭にプリキュア達はアルティメットジェノキャンサーとシザースに向つて突進していく。シザースは装備したカッターを構えながらアルティメットジェノキャンサーに攻撃の指示を出すとアルティメットジェノキャンサーは動き出した。

フェアリー「う、うう・・・て、天道さん・・・だ、大丈夫ですか

？」

カブト（総司）「あ、ああ・・・何とかな。それよりも・・・ブロッサム達のあの姿は」

フェアリー「新しい力・・・でしょうか？・・・そうだ大人達は？」

カブト（総司）「・・・分かん。だがアイツらはそう簡単にくたばらん筈だ・・・うつ・・・流石に身体が動かんか」

目を覚ました総司とフェアリーは激痛が走る身体を動かしながらも今の自分達に出来る事がないかを考える。今できる事・・・力が残されていない自分達には見守る以外は・・・。

セイバー「ブロッサム達はシザースと戦って私達はアルティメットジェノキャンサーを引きつけるから！！！」

ブロッサム「分かりました！！！」

ブロッサム達ハートキャッチのメンバーは迷わずシザースの元に降り立つ。シザースはその勝負を受けて立つと言つかのようにカタールを光らせる。

シザースサバイブ「お前達だけでこの俺を相手にするとはな・・・まあいいだろう決着<sup>ケリ</sup>をつけてやる！！！」

ブロッサム「皆、行きますよ！！！」

カタールを構えながらシザースとブロッサム達ハートキャッチメンバーの5人はお互いに睨み合うと同時に走る。

シザース・サバイブ「はあああつ！！！！！」

先手必勝とカタールで狙いを定め最初のターゲットはブロッサムとマリンに決めたシザースは彼女達2人を斬るつけるが2人の腕にカタールを受け止められるとその場から姿が消える。

シザースサバイブ「なっ！？・・・後ろかぁ！？」

そしてシザースの後ろに現れたのをシザースはすぐに後ろに刃を振うが2人に紙一重で避けられるとそのまま今度は正面に移動したブロッサムとマリンのダブルパンチがシザースの腹に叩き込まれる。

シザースサバイブ「がああつ！？・・・舐めるなああつ！！！！！」

ブロッサム・マリン「きゃああつ!!!」

まるで自分の攻撃を予知していたかのような全く無駄がなくシザースを惑わすその動きはただ者ではないと直感で感じ取ったシザース。ウルトラマンとプリキュアの力が融合したウルトラシルエットはサブイブで強化され力は凄まじいものだろう。だが怯むものかとシザースは回し蹴りをブロッサムとマリンに叩き込む。

サンシャイン「次は私の番だよ。」

シザースサブイブ「来い!!!」

飛ばされた2人をサンシャインとムーンライトが受けとめると次はサンシャインが前に出る。サンシャインの得意の格闘技とシザースのカタールの剣技が火花を散らすようにぶつかり合う。両者とも正に互角というところだ。両者一体の攻撃を繰り返していく。

サンシャイン「はああああああつ!!!」

シザースサブイブ「たあああつ!!!でやあああつ!!!」

シザースのカタールとサンシャインの拳と蹴りがぶつかり合う中とうとう流れを先に掴んだサンシャインがシザースのカタールを叩き折ってしまう。

シザースサブイブ「ちつ!!!...ぐうっ!?!」

カタールが無くなったことで一気に形勢は逆転されると最後にサンシャインはシザースの顔に回し蹴りを叩き込んでやる

シザースサブイブ「ぐおっ!?!?...ふうん」

咄嗟に腕を組んで顔に直接ダメシが入る事は回避できたが衝撃波凄まじく後ろ身体が下がってしまう。

シザースサブイブ「やるなあ?...だがこの程度で俺を倒せるなどあり得ん!!!」

まだまだ勝負は此処からであるとシザースは破壊されたカタールの残骸を腕から剥ぎ取るとシザースバイザーツバイを鞘から抜きとる。

アルティメットジェノキャンサー「ギシャアアアアオオオオオオオオオオオ!!!」

アルティメットジェノキャンサーはアルティメットシユートを放ちながらセイバー達に攻撃を仕掛けるがセイバー達はアルティメットジェノキャンサーの攻撃を彼に避けながら距離を縮める。アルティメットジェノキャンサーは業を煮やしたのか滅びの爆裂拡散弾バースト・ビックバンで纏めて消し去ろうと口に比ケリを集約させるとそれを待っていたとばかりにルージユがパワーアップした炎を手に集めてエネルギーを集約させる

ウルティメットローズ「プリキュア・ウルティメイトノヴァ!!!」  
ティガのデラシウム光流をモチーフにした超高温の炎の玉がアルティメットジェノキャンサーの口に向かって放たれるとそのまま呑みこんでしまいアルティメットジェノキャンサーの腹の中で爆発が起るとアルティメットジェノキャンサーは噎むせるような仕草を見せると怒りの咆哮を上げて巨大な腕を振り下ろしていくが当然全員は当たる直前に飛びあがって避ける。

アルティメットジェノキャンサー「ギシャアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

怒りに燃えるアルティメットジェノキャンサーはアルティメットシユートを無差別に放つが理性のない攻撃がプリキュアに通じるわけがなくことごとく避けられてしまうと。

ウルティメットエルス「プリキュア・ウルティメイトライジング!!!」

エルスの電撃を集めるとそのまま超電磁砲レールガンのような凄まじい雷撃の衝撃波がアルティメットシユートの胸と腕に叩き込まれると流石のアルティメットシユートもひとたまりもないのか痛み悶える様な咆哮を上げる。

ウルティメットローズ「ミルキローズ・ウルティメイトブリザード!!!」

ウルティメットコスミック「プリキュア・ウルティメイトブラスタ!!!」

このまま続けてアルティメットジェノキャンサーに反撃させまいと

ローズはミルキイミラーにコズミックは拳に光を集めるパワーアップした金色の薔薇の形をしたエネルギー波とコズミックの光の拳がその巨体に浴びせる。

反撃の隙すら与えないもう攻撃に徐々にアルティメットジェノキャンサーの体力が削られてダメージが蓄積されていく。

アルティメットジェノキャンサー「ギシャアアアアアオオオオオオオオオッ！！！！！！！！」

咆哮を上げながらもアルティメットジェノキャンサーはこの屈辱は許しはしないとも言つかのように鋭い眼光を光らせながら巨大な腕を振うのだがスピードではプリキュア達の方が上手であり攻撃が当たることなどなくアルティメットジェノキャンサーを惑わし体力を削り自滅への道へと進ませてやる。

シザースサバイブ「ふんっ、だあああっ！！！！」

ムーンライト「ううっ！？？」

シザースのパワーに対してプロツサム達はパワーアップした力と持ち前のチームワークでシザースと互角いやそれ以上の力で徐々にシザースを追いつめようとするが力ではまだシザースが上の様だ

シザースサバイブ「はははっ・・・終わりだ！！！！」

ムーンライトがタクトでシザースのバイザーを弾くように振うがパワーで押されてしまい組み伏せられるような体勢にされてしまうとシザースはバイザーをムーンライトの首に向ける。

ムーンライト「それはどうかしら？」

シザースサバイブ「何っ！？？」

ホーリーナイト「他の仲間<sup>プリキュア</sup>の事を忘れてない？」

シザースサバイブ「き、貴様あいつの間この俺の間合いに」

だがそれはムーンライトの罠であったのだ。不敵な笑みを浮かべた事を疑問に思ったその隙にホーリーナイトがシザースに向けてロッドをブーメランのように投げつけると油断してしまったシザースは体勢を崩していしまう。その事にシザースは怒りの視線をホーリー



ナイトにぶつけるのだがその後ろには姉の姿が……。

ムーンライト「私の事も忘れてない？」

シザースサバイブ「何っ!？」

当然この反撃の機会を逃すはずがなくそれに続いて体勢を崩したシザースに向ってムーンライトがキックとパンチを素早く身体に叩き込まれるとシザースは後ろに数歩下がられる。

シザースサバイブ「己え!!!!」

ブリキユア彼女達の動きはさっきまでとは格段に変わっている……まるで自分の力を読み取り受け流すかのように……シザースは徐々に焦り始めてしまう。

ブロッサム「まだまだ行きますよ!!!!」

怯んでいるシザースに追撃のパンチがブロッサムが放ってくるのをシザースはバイザーを盾にするように構えて防御するのだが

シザースサバイブ「ちっ!!!!（なんて力だ……さっきまでとは比べ物にならないぞ）」

パワーアップしたブロッサムのパワーに力負けしそうになって思わず剣を前に振ってブロッサムをふっ飛ばすが彼女ブロッサムは身軽な動きで着地をする。

マリリン「たりやあああああっ!!!!!!」

シザースサバイブ「っ!？」

続いてきたマリリンのラッシュの猛攻を避けながらも剣技と格闘技を混ぜながらも応戦するがマリリンのスピードはシザース上回っていて次第に対応が追い付かなくなる。

シザースサバイブ「ぐうっ……がはああ!!!!」

マリリン「はああああっ!!!!!!」

最後にシザースのマリリンの全パワーが注ぎ込まれたパンチを叩き込まれると踏ん張りが利かなくなったシザースはそのまま飛ばされる。だがそれでもシザースはなお立ち上がってくる……己の譲れない信念の為に……自分のプライドと魂を賭けたこの闘いを征し必ず自分の夢をかなえる為に最後の最後まで戦うつもりだ。

アルティメットジェノキャンサーとセイバー達ウルティメットプリキュアの戦いにも流れが生まれ始めていた。アルティメットジェノキャンサーの強力な攻撃を巧みに避けながらもその強靱な身体に着実にダメージを与えて少しずつでも流れをプリキュア達が支配し始めているのだ。

アルティメットジェノキャンサー「ギシャアアアアアオオオオオウウウウウウ!!!」

アルティメットジェノキャンサーはちょこまかと動きまわるプリキュアという小さな的に向かって腕を振ったりベノヴァツパーの属性を持つ毒液を撒き散らしたりするが全くもってその攻撃は当たらない。ウルティメットドリーム「プリキュア・ウルティメットアタック!!!」

ドリームがピンクと金色の光を身体に集約していくとそのままシューティングスターの要領でアルティメットジェノキャンサーの身体を貫く。

アルティメットジェノキャンサー「ギャアアアアオオオオオオオオオオオオ!!!」

怒りの咆哮を上げながらもなお攻撃の手を緩めようとはせず今度は毒液をスプリングカラーの様に拡散させるように撒き散らすだがそれをセイバーとピーチが前に出て手を翳していく。

ウルティメットセイバー「プリキュア・ウルティメットシャウト!!!」

ウルティメットピーチ「プリキュア・ウルティメイトサンシャイン!!!」

毒液を防ぎながらもセイバーとピーチの光がアルティメットジェノキャンサーの巨大な身体を包むと動きが鈍くなっていく。そう2人の放ったのは浄化光線でありアルティメットジェノキャンサーの中にある憎しみを消滅させて大人しくさせようとう魂胆なのだ。

ダーク「浄化光線か?・・・小癩な真似を!!!」

ダークはアルティメットジエノキャンサーに向けて腕を向けると闇のオーラをでアルティメットジエノキャンサーの身体を包み込んでいくとアルティメットジエノキャンサーの身体が一回り大きくなる  
と身体も鋭くなり凄まじい咆哮を上げた。

ウルティメットピーチ「なんて事を!!!!」

ウルティメットセイバー「まだ戦わせようと言うの!?!?.....そこまでして」

せっかく技が成功してあと少しで浄化できると言う所だったのに.....セイバー達全員の怒りがこもった視線が一気にダークに向けられるがダークは鼻で笑い蔑む様な視線を送る。

ダーク「当然だ。君達は私にとつても目障りな存在。此処で消せるのなら私は出来る事をするのみさ」

アルティメットジエノキャンサー「ギシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!!!!」

ダークは更にアルティメットジエノキャンサーに戦いを強いる様にエネルギーを送り込んでやる。それに比例するようにアルティメットジエノキャンサーの声が部屋中に響き渡る。その声はまるで憎しみと闇に支配された自分を解放してくれと願うかのようにプリキュア達には聞こえたのだった。

シザースサバイブ「ぐう.....己え」

既に鎧からは煙が上がるほどの大ダメージを負ったシザースは膝をついて肩で息をするほど疲労が溜まっていた。力では自分がまだ有利な筈なのにソレもプリキュア達には通用しなかった。ブロッサム達はシザースに対する攻撃を止めるとその光り輝く凛々しい姿を見せながら口を開いた。

ブロッサム「シザース、もう勝負はつきました。貴方の負けです」

マリン「早くアルティメットジエノキャンサーを止めてよ。もう充分でしょ?」

サンシャイン「これ以上は.....何をしても無駄よ」

ムーンライト「……今すぐ降参するならこれ以上は私達も手は出さないわ」

ホーリーナイト「……貴方を待っている人がいる。だから今すぐに降伏しなさい」

これ以上の争いは何も生み出さない。素直に負けを認めてくれと優しく言葉を投げかけるブロッサムとマリンだがシザースは首を横に振った。

シザースサバイブ「ほざけ……まだだ……まだ勝負はついとらんぞお……アルティメットジェノキャンサー!!!!!!」

シザースは残る体力を絞り出すように身体を動かすと立ち上がりアルティメットジェノキャンサーの名を呼んだ。するとアルティメットジェノキャンサーはセイバー達プリキュアに対する攻撃を中断するとシザースの元にまで移動し始めた。

シザースサバイブ「ダークが最後にくれた闇の力で貴様らを葬り去る……俺と貴様らどちらが勝つか……最後の勝負だ!!!!!!」  
うおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!!」

ブロッサム「アレは……まさか」

ムーンライト「アルティメットジェノキャンサーに自分の心にある負の感情を注ぎ込んでいるのよ」

ホーリーナイト「最後の勝負……全力をぶつけてくる気だね」

突然シザースの身体から物凄い勢いの黒いオーラが発生するとそれがアルティメットジェノキャンサーの身体に照射されていくとダークの闇の力で強化されたアルティメットジェノキャンサーの力を更に増幅させていくかのように見えた。

シザースサバイブ「これで……これで必ず終わらせてやる……行くぞお、アルティメットジェノキャンサーの最後にして最強攻撃!!!!!!」

シザースの合図に合わせてアルティメットジェノキャンサーの口と胸に禍々しく光る黒いエネルギーが集約されていく。その勢いやオーラは究極砲撃をも超える程のものだと言う事はすぐに判断が出

来た。

マリン「アイツ、今度こそ本気で……どうしよう!？」

ティガ達の力を受け継ぎパワーアップした自分達でもアレほどの破壊力を秘めるであろうあの攻撃を受けきれぬ保証はない。珍しく焦りの表情を見せるマリンだったがプリキュア達の不安を察した様な声が聞こえてきた。

????1「皆……聞こえるか？」

ブロッサム達一同『!!!????』

????1「驚くのは無理がないが信じて聞いて欲しい。私はティガだ」

全員は当然どこから声が出たのだと辺りを見渡すが声の主は落ちつかせるように自分の正体を打ち明ける。

ブロッサム「ティガ!？」

マリン「な、何でティガの声が」

????2「ティガだけではないぞ。アースと」

????3「デュナミスだ」

サンシャイン「アースにデュナミスまで!？」

ムーンライト「……本当に貴方たちなの!？」

声の正体はプリキュア達に光エネルギーを与えた3人のウルトラマンであった。ブロッサム達は戸惑いを捨てきれないが、この閃きを今は信じるしかない全員はアイコンタクトをしながら頷くとブロッサムが代表して口を開いた。

ブロッサム「分かりました、貴方達を信じましょう。教えて下さいシザースのあの技に対抗するにはどうすればいいんですか!？」

ティガ「方法は1つ。私達が与えた光エネルギーをブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライト、ホーリーナイトに移すんだ」

ウルティメイトセイバー「光エネルギーをブロッサム達に!？」

セイバーの声に続いてアースが説明のバトンを受ける。

アース「そうだ、その後ハートキャッチミラージュとシンクロさせ

て一気に光エネルギーを解放すれば私達の力とプリキュアの力が真に融合する事が出来る筈だ」

デユナミス「そしてそれが成功すればアルティメットジェノキャンサーを完全に消滅する事が出来る。だがそれをすればブロッサム達の精神に多大な負担がかかる・・・成功するかは五分五分だし失敗すれば命の保証はない」

プリキュア「!!!!!!」

失敗すれば命を失ってしまうかもしれないほどのハイリスクな手段・・・だが迷っている時間など今の自分達には残されていない。プリキュア達は覚悟を決めた目をする。ブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライト、ホーリーナイトは胸に手を当てる。

ブロッサム「・・・私達は出来る事をするだけです・・・ティガ、指示をお願いします!!!!!!」

もう今更逃げることなど許されない。ならば全ての希望をこの一撃に賭けるのみ・・・ブロッサムは凜々しくも力強く声を上げた。

ティガ「・・・そう言うと思っていたよ。ブロッサム達は前に出る!!!!!!」

ティガはその言葉を待っていたと言う口調でそう言う。ブロッサム達に前に出るよう指示を出す。

アース「セイバー達はブロッサム達の後ろに待機を!!!!!!」

デユナミス「シプレ達はミラーージュをブロッサム達に!!!!!!」

シプレ・コフレ・ポプリ「はいですう!!!!!!」

ティガ達の声に合わせてプリキュア達は動き始めシプレ達はハートキャッチミラーージュをブロッサム達に渡してそれを受け取った5人は前に集まりその後ろにセイバー達7人はその後ろに集まる。

ティガ「今だ皆、全光エネルギーをブロッサム達に移せ!!!!!!」  
準備は整ったとティガは合図を出す。

シザースサバイブ「まだ抵抗する気か・・・だが貴様らが束になるうともこの力で全てを打ち消してくれる・・・灰となれ!!!!!!」

シザースは自分の全闇エネルギーをアルティメットジェノキャンサーに送り込むとフラフラになりながらもその場に立ちそう言った。腕を前に出して高らかに最後に攻撃の技名を宣言する

シザースサバイブ「アルティメット・インフェルノ！！！！！！！！」  
放たれる青い閃光と衝撃波。アルティメットバースト究極砲撃の数倍の威力はある事はすぐに理解できた。

セイバー7人「私達の全ての思いよ光となって、ブロッサム達に届け！！！！！！」

7人は手をブロッサム達にかざしティガ達の光と自分達の光のエネルギーをブロッサム達に注ぎ込んでいくとハートキャッチミラージュから眩いばかりに光が発せられると同時にウルティメイトセイバー達は光をブロッサム達に移した事で元の姿に戻ってしまう。

ブロッサム・マリン。サンシャイン・ムーンライト・ホーリーナイト「未来を造る希望の光よ、全ての闇をその光で照らせ！！！」

ハートキャッチミラージュと共鳴し5人は両腕を前に出すとシザースの闇の光線に向かって声を張り上げる。

ブロッサム・マリン。サンシャイン・ムーンライト・ホーリーナイト「プリキュア・ウルティメイトパワーソリューション！！！！！！」

！！！！  
5人の両腕から金色の光のエネルギー波が放たれるとアルティメットインフェルノ究極地獄火炎とぶつかり合う。

ブロッサム・マリン。サンシャイン・ムーンライト・ホーリーナイト「あああああああああああああああああああああああああああ  
ああつ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

シザースサバイブ「うおおおおおおおおおおおおおおおおおつ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

全てを賭けた光線のぶつかり合いを繰り広げられる最後の切り札のぶつかり合いはお互い譲らぬ。

シザースサバイブ「貴様らの光などこの俺の憎しみと怒りが粉碎する……この腐りきった世界を破壊し新世界を創造する為に！！！！」

「！！！！消えれされ愚かなる戦士共！！！！」

シザースは最後の執念の力を怒りと憎しみに変え闇エネルギーを増幅させていく。光の波動が押し戻されるがブロッサム達は諦めない。ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト・ホーリーナイト「愚かなんかじゃない！！！！」

シザースサバイブ「何だと!?」

セイバー「人は確かに愚かかもしれない・・・でもそれは全てじゃない」

ドリーム「間違っているって誰かが気づけば人は誰だって変わるの」

ルージユ「他者を思いやり助け合う事が出来ることだって出来る」  
ローズ「そうやって少しずつでも良い方向に世界を変える事だって」  
ピーチ「絶対に出来ると信じてる、だからこそ私達はそんな人々を守るために」

エルス「ボロボロになりながらも戦えるのよ！！！！」

コズミック「それはシザース、君だって同じだ！！！！」

シザースサバイブ「この俺が同じだと?」

マリン「そうだよ。アンタだってただ1人の人間じゃない！！！！」  
サンシャイン「ただ憎しみに捕らわれただけ・・・心の闇に呑みこまれてしまっただけなんだ！！！！」

ムーンライト「でも人はやり直せる・・・何度だって絶望から立ち上がる事は出来るのよ！！！！」

ホーリーナイト「絶望を乗り越えて光を掴む権利は誰にだってあるんだよ！！！！」

ブロッサム「だからこそ私達は貴方の心の闇を消し去りもう一度、光を掴んでもらうんだからあああつ！！！！！！！！」

ブリキユア達全員の思いが集まり光の波動の中心が一瞬だけ輝くと闇を呑みこみ押し戻すほどの光が溢れ出てくると闇の波動を凄まじい勢いで押し戻していく。

シザースサバイブ「こ、この光は・・・何だ!?・・・何故これ





第46話地球解放軍編XVI

「決戦、反撃開始！！プリキュア・ウルティメ

更新遅れて申し訳ありません（汗）

中々技の名前が決まらずに悪戦苦闘しておりました。

さて次回は遂に……

次回もお楽しみに

## 第47話地球解放軍編XV E I

「戦いの終焉」(前書き)

前回までのあらすじ

最後の希望のウルティメットプリキュアはシザースとアルティメットジェノキャンサーを追いつめ形勢を逆転し始めた。

そして最後の攻撃のプリキュア・ウルティメットパワーソリユーションがシザースとアルティメットジェノキャンサーを包み込んでいき憎しみと怒りを完全に消滅させた。

## 第47話地球解放軍編XVII 「戦いの終焉」

眩サバイクすぎる光で目が開けられなずそれと共に衝撃波にも等しい風が太陽の身体に伝わって来た。シザースは顔の前に手を置いてその風を防ぐ仕草をしながらも光がおさまると前を見た。そこには光り輝くウルティメットプリキュアの姿があり神々しい光に包まれた凜々しい姿があつた。

シザースブラング「……くっ!!!」

シザースはただ呆然となつていた所だつた今の彼は契約モンスターと共に完全に失われ鎧は光を失いただの飾りと大差はない。つまりは完全に勝負は決してしまつたのだ。

シザースブラング「(俺の戦い……それは冤罪をきせられた父と亡き母の墓前に誓つた新世界創造の為に経過……プリキュア、その邪魔となる貴様らを消す事が俺の目的……俺の新世界帝王の称号……)っ!???……俺が負けた?」

震える手を上げながらも太陽は自分が負けた現実を直視していた。膝てのひらについて震える掌を見ながら……そして気がつけば変身が解けてシザースの鎧から白夜太陽の姿となつていた。

太陽「俺の戦術に非などなかった……全てにおいて完璧な手札がそろつていた筈……だが俺は負けた……」  
ブロッサム「……」

太陽の様子を見ながらも言葉が出ないブロッサム達。そして暫しの静寂の後ブロッサム達プリキュアのカラダが光を発すると3つに集まり3つの光は等身大サイズの人の形にへと変わっていくと徐々にその正体はつきりとわかつてくるようになるそう正体は3人のウルトラマンだ。ウルトラマンの姿が実体化すると同時にブロッサム達のプリキュアの変身も解けてつぼみ達の姿に戻つた。

つぼみ「ティガ、アース、デュナミス……本当にありがとうございまして!!!」

えりか「貴方達がいなきゃこの勝負は勝てなかったよ!!!!!!」  
いつき「3人の光とっても暖かった・・・助けてくれてありがとう!!!」

つぼみは頭を下げて礼儀正しくそう言いえりかといつきは感謝の視線を3人に贈った。ティガ達は振り返り頷くとそのままカラータイマーから光を放って姿を消した。

太陽「・・・・・・・・」

負けた事に絶望のどん底に叩き落とされた太陽はゆっくりと立ち上がっていたがその様は下を向いて俯いた姿であり既に戦う覇気など完全に消え去っていたのは言うまでもないだろう。つぼみ達は彼にゆっくりと近づき会話が出来る距離までになる所で足を止めた。

太陽「勝機は完全に無くなった・・・殺せ」

もう覚悟は出来ていた。今の自分に残された道はただ1つだけしか無い事ぐらい・・・それはこの命を潔く散らす事・・・・・・・・《もう今の自分がこの世界で生きていても何の意味も持たない・・・ならばこのままいつそ楽に死ねたら・・・このまま命を捨てて全ての重荷をすてされる事が出来ればどれだけ楽だろう?・・・もう俺を受け入れる仲間もない。だったらもうこの場で・・・》・・・太陽は静かに目を閉じた。

つぼみ「・・・・・・・・」

目を閉じた彼につぼみが近づいて行くとそのまま太陽の顔を思いっきり叩き飛ばしたのだ。その場にいた太陽を含めた全員の目が点になる。

太陽「つ!?!?・・・・・・・・」

つぼみ「今この場で貴方が死んで何の解決になるんですか?一体、誰が喜ぶんですか?・・・甘えないで!!!!!!」

いつものつぼみらしからぬ行動に全員が動揺を隠せないがそんな周囲の心情などお構いなしにつぼみは口を動かす。

つぼみ「貴方が犯した罪は決して許される事じゃありません・・・

でもだからこそ生きて罪を償うんです……そして貴方自身が世界を変える未来を造り出すんですよ。今度は正しい方法で!!!」

太陽「……正しい方法だと？」  
えりか「そうだよ!!!……今度は誰も傷つけない方法で世界を変えようと努力してみなよアンタなりに我武者羅に突っ走ってさ!!!」

いつき「遠回りになるかもしれないけど夢を捨てなければ絶対に叶うよ。……だからもう一度頑張るんだ!!!」

ゆり「人には無限の可能性があるわ……今の貴方に何が必要なのかは自分で考えて行動しなさい」

アンナ「貴方は一度闇に落ちた……でも闇に落ちても人は何度だってやり直す事が出来る。だから闇と負けない勇気を持って!!!」

太陽「……」

つぼみ達の言葉を聞いて太陽は自分の頭の中で必死に考え始める……  
《今の俺に世界を変えることなど出来ようか?……一度は人である事を捨てて破壊新になったこの俺に……》

真夜「これから物凄く辛い事が貴方を待っているかもしれない……でもそれは貴方1人に背負わせたりさせないって彼女達が言いたそうよ?」

迷いが捨てきれない太陽の心中を察した真夜が後ろを向いてそう言った先には太陽の事が心配になりたまらず此処まで来た夏実達だった。

太陽「夏実・、勇治、耕輔」

夏実達は迷わず太陽の元まで走っていくと夏実は太陽に飛び付いた。顔は涙で濡れていて太陽のカラダから離れまいと力一杯抱きしめる。  
夏実「よかった、本当に良かった!!!」

太陽「……夏実」

耕輔「太陽さん……もう一度やり直しましょう」

勇治「今度は正しい道で……人として」

夏実「私達は貴女にずっとついていきますから・・・だからもう一度0からリトライです」

夏実は自分のカラダから離れようとしない様子を見て太陽は初めて人の笑顔を見せた。そして耕輔と勇治の言葉を聞いて太陽は吹っ切れた様に鼻で笑う。

太陽「ふうん・・・夏実達にそう言われると俺が逃げ出すわけにはいかんか・・・いいだろう!!」

そして太陽は生氣ある眼差しをすると自信にあふれた声でそう言った。その様子を見たつぼみ達も満面の笑顔となった。太陽にとつての闇を照らす本当の光は夏実達という仲間だったのかもしれない。

夕「ホントプリキュアって凄過ぎ・・・」

総司「ああ。俺達の想像を超える事を時にはやってのけるんだからな」

後ろで動けない総司達はそう言い合う。

大人「全くだよ」

夕「ひ、大人!!・・・琢磨に傑も」

動けない夕達に大人達が声をかけた。

琢磨「つたくよ、俺達が気絶している間にとんでもねえ事をやりやがったみたいだな」

傑「見逃したのが惜しかったな」

夕「ホントよ。つぼみ達凄かったんだから」

大人「そうか・・・その話は後で夕ツプリ聞かせてもらおうか・・・

夕、立てるか？」

夕「・見て分らないかなあ？既に腰砕けで動けません!!!」

大人「ですよねえ、ほれ肩貸すよ。」

琢磨「天道さんも大丈夫ですか？」

総司「すまん」

夕と総司は大人達の肩を借りて何とか起き上がるとつぼみ達の元にゆっくりと向かう。そしてその後全員で悦びを分かち合うのだった





第47話地球解放軍編XVII 「戦いの終焉」(後書き)

次回で真夜以外のゲストキャラの活躍は終了となります。

夢原さんGASHさん本当にありがとうございました!!!

では次回もお楽しみに

第48話地球解放軍編XVII 「仲間の繋がり」(前書き)

前回までのあらすじ

太陽の憎しみを消し去り地球解放軍の作戦を見事に打ち破った戦士達一同。ダークは最後に全ての始まりだと告げると姿を消すのだった。

今回でコズミック、ドリーム、ルージュ、ローズ、ピーチ、エルスの出番は終了となります。

夢原さん、GASHさんありがとうございました!!!

あと最初の方とうとう大人とつばみが・・・つばみファンの方ゴメンなさい!!!

第48話地球解放軍編XVII 「仲間の繋がり」

全ての戦いが終わりバトルシップはGUTSによって回収されミラライダーのカードデッキは大人達の手によって粉々に砕かれ永遠の闇へと葬られ太陽達は罪を継ぐうためにGUTSに拘束され裁判にかけられることとなった。

大人「ふう〜」

そしてその数日後のある日曜日の昼下がりに大人は希望ヶ丘市が見渡せるあの丘にいた。草原に横になりながら空を見上げて自分の気持ちを考えていたのだ。そして暫くすると・・・

つぼみ「・・・大人さん？」

大人「・・・来てくれたか」

現れたのはつぼみであった。つぼみはキョトンとした表情でありながらも横になつている大人を見下ろしながら声をかけると大人は起き上がる。

大人「わざわざ呼び出してすまないな」

つぼみ「いいえ・・・それで話つて言うのは？」

つぼみは大人に話があると言われて呼び出されたつぼみは少し緊張しているかのようにだったが大人は普段から見せる笑顔を見せると彼女を落ちつかせる。

大人「前から言おうと思つていた事があるんだ・・・ずっと前から言おうと思つていた事が」

つぼみ「・・・」

二人は草原に座ると街と空を見る。いつもと全く変わらないこの景色。つぼみも幼い時はこの町に住んでいた。でも今となれば彼女にとってこの町は故郷であり大切な場所でもある。大人は自分の今の思いを言う場所は此処しかないと思つたこの場所を選んだのだ。

大人「落ちついて聞いてほしい。俺は・・・上原大人は花咲つぼみの事が好きだ。だから君の時間を俺と共有する権利を俺にください

「！！！」

つぼみ「っ！！！！！」

大人は勇気を振り絞り今まで隠していた自分の気持ちをつぼみに伝えた。つぼみは言葉が詰まり顔が真っ赤になる。だがすぐに大人の手を握ると。

つぼみ「はい。私も貴方の事が好きです！！・・・だから私でよければ」

つぼみも彼の思いに応えるように今までにないほどの緊張を押し殺しながら自分の気持ちを伝えた。すると大人は彼女を抱きしめる。

大人「ありがとう。つぼみ」

大人は自分がウルトラマンティガである事がつぼみ達に知られるのが怖かった。だから今まで自分の気持ちを押し殺してずっと耐えてきた。でもつぼみ達の言葉を聞いてそれは間違いだと気付いた。だからこそ大人は思いを伝えた。今度は自分の最大の秘密を彼女が受け入れてくれると信じて・・・。

そしてその次の日にのぞみ達が自分の世界に戻ると言う事になり大人達はお別れパーティーを植物園にて開くこととなった。

一同「かんぱあ〜い！！！」

久々のパーティー気分には大人達は心に余裕が出来る。この所は戦いばかりで気持ち的にもピリピリした事ばかりであったからこう言う事は久しぶりだ。

のぞみ「この世界とももうお別れかあ〜」

御子「なんか早かったよね。」

時間が流れていき夜も更けていくと月が出てきて月明かりが夜の街を照らす様子をバルコニーでのぞみと御子は眺めていた。たった1か月弱の出会いだった物が凄く懐かしく思えるのが不思議だ。のぞみ達は自分の世界に戻ったらまた戦いの日々が待っている。今度は自分達の戦いに決着をつけなければならぬ。明日には自分の世界に戻らなくてはならないという事を考えるとなんだかんだで少し寂

しいのかもしれない・・・。

大人「何を言ってるんだよ」

其処に大人とつぼみがやって来た。

大人「君達が来なかつたら今頃この世界は無かつただろう。感謝しているよ」

つぼみ「向こうの世界の私達にも宜しく言っておいてください」

御子「分かりました」

大人「あ、それとこれを」

のぞみ「これは？」

大人「太陽達が独自に解析したこの世界のブロッサム達ハートキヤッチのメンバー、マスクドライダー、3人のウルトラマンの戦闘データだ。これをダークエンジェルスとの戦いに役立て欲しい」

つぼみ「この世界は私達が全力で守ります。だから貴女達は貴女達の戦いに決着を」

のぞみ「ありがとうございます。必ず終わらせます」

大盛り上がりになったパーティーも終わり翌日。

大人「元気でつて言うのも・・・おかしいかな？」

のぞみ「そんな事ないですよ!!!。またこの世界に遊びに来ちゃいますから」

りん「んなわけないっしょ!!!」

のぞみのボケにりんのツッコミがさかさ入り周囲に笑いが起きる。

琢磨「向こうに戻つても頑張れよ」

傑「心配いららないだろうけどね」

夕「身体にだけは気をつけてね」

総司「勇奈・・・残りの世界も頼んだぞ」

えりか「向こうの皆にも宜しくね!!!」

いつき「また遊びに来てよ。今度はそっちのボク達も呼んでさ」

ゆり「そうなると大盛り上がりね。貴女達も闇何か負けないように頑張りなさい」

アンナ「のぞみちゃん達の事は絶対に忘れないからね!!!」  
大人「忘れないでくれよ。俺達は仲間だってこと」  
つぼみ「離れていても繋がっています。この絆は絶対に切れません  
!!!」  
皆それぞれ言葉を言い終える。最後くらいは笑顔でお別れをしよう  
と涙をこらえながらのぞみ達は灰色のカーテンの様な空間に包まれ  
るとそのまま姿を消したのだった。

その後数週間はダークによう攻撃はなかったが……………

つぼみ「(ティガ、アース、デュナミスと名乗ったあの声…………)

えりか「(ただ聞き覚えがあるってわけじゃないよね?)」

いつき「(…………貴方なんでしょ?)」

つぼみ「(大人)」

えりか「(琢磨)」

いつき「(傑)」

つぼみ達はあの時の声の事が気にかかりある疑惑が出てきた。だがそれは信じがたいものであったためまだ胸の奥底にしまっておく事にする。もしも本当だったら……………。

#### 第48話地球解放軍編XVIIII

「仲間の繋がり」(後書き)

これで地球解放軍編は終了となります。皆様の助言などもあり此処まで書く事が出来ました。

しかし始めて二カ月近くなっておりますが長編は大変です(汗)。

しかしティガ&ハトプリはまだまだ続けていきたいと思えますので今後ともご期待ください。

さて次回は私のプライベートが忙しくなりますので今月は更新がかなり停滞するかもしれません。また中休みとして初のギャグ編を少し考えています。

では次回もお楽しみに

## オリジナル設定〜ミラーライダー編〜

### 仮面ライダーシザースサバイブ

仮面ライダーシザースがオリジナルのサバイブー絶望ーの力を使って強化された姿。通常のシザースの数倍以上に強化されていて特に防御力はブリキユアやカブト達のクナイガンやパンチなどを何度も受けても傷一つ付かないほどである。また全ライダーの中でもステータスはマルチタイプでありオールラウンドに戦う事が出来。

『仮面ライダーシザースサバイブ ポテンシャルデータ』

身長 198?

体重 98?

パンチ力 19t

キック力 20t

最大走力 100mを3.2秒

ジャンプ力 55m

最高視力 30K

甲召剣シザースバイザーツバイ

シザースバイザーが進化した姿。2つの刃を持つ剣となり強度と切れ味は鋼鉄やダイヤモンドをも砕くほど強力。

ストライクベント シザースカタール AP4000

ガードベント パーフェクトガード GP6000

ファイナルベント メルトバブルバースト AP10000



『戦闘スタイル』

基本的にはカタールとバイザーによる近距離攻撃が可能であり更に持ち前の防御力を使い攻守一体の戦闘を得意としている。

契約モンスター   ボルナハトウマー   A P 9 0 0 0

ボルキャンサーの進化形態。2足歩行から完全な蟹の形態へと変化していてボルキャンサーの面影は既に全くない。防御力を受け継いだだけではなくキレ味が上がった缺、更にはあらゆるものを溶かす強酸性の泡を出す事も可能となった。(ちなみにナハトウマーとはドイツ語で絶望の意味である)

全長   1 0 m

体高   5 m

体重   6 0 0 K g

仮面ライダー王蛇サバイブ

仮面ライダー王蛇がオリジナルのサバイブー夢幻で進化した姿。元々攻撃的な性質であったがサバイブになる事で更に攻撃的となったがその分防御は捨てている形態である故に特殊能力を持つ敵とは相性が悪いため苦戦を強いられる事も多い。

『仮面ライダー王蛇サバイブ   ポテンシャルデータ』

身長   1 9 0 ?

体重 90? (一応中の人は女性であるため体重は軽め)

パンチ力 18t

キック力 15t

最大走力 100mを3.5秒

ジャンプ力 50m

最高視力 25K

蛇召手甲ベノバイザーツバイ

メリケンサック型のバイザー。王蛇の強化されたパンチ力を更に高める事が出来る。

ストライクベント ベノナックル AP4000

ソードベント ポイズンブレード AP5000

ファイナルベント ポイズントルネードクラッシュ 9000

『戦闘スタイル』

毒の属性を活かして敵の動きを制限しながらも圧倒的火力で敵をねじ伏せるスタイルを得意としている。特にポイズンブレードの一刺しを受ければ毒が身体に回り1分以内に常人は即死してしまうほどの強力な毒を備えている。

契約モンスター ベノヴァイパー AP9000

身長15m

体重400Kg

王蛇の契約モンスターベノスネーカーがサバイブの力を受けてパワ

ーアップした姿。持ち前の毒牙や強靱な身体を使って敵をジワリジワリと追いつめていく戦法を得意としている。性格はパワーアップした事で更に凶悪なものとなった。

#### 仮面ライダーガイサイバイク

仮面ライダーガイがオリジナルのサイバーク破滅を使ってパワーアップした姿。防御力はシザースを下回るものかなり高くなっていて更にパワーは全ライダーでもトップレベル。動く要塞とも呼んでも過言ではない。しかしシザースとは違いパワーは高いがスピードでは劣る。

身長200?

体重100Kg

パンチ力25t

キック力25t

最大走力100mを4.5秒

ジャンプ力30メートル

最高視力28K

突召機槍　メタルバイザーツバイ

槍とドリルの機能を持つバイザー。ガイのパワーを最大限に生かす事であらゆる敵のドテツ原に風穴を開ける事が可能。

ストライクベント　メタルクロー　AP3500

ガードベント　メタルガードナー　GP5000

コンファインベント

ファイナルベント　ヘビーメタルクラッシュャー　AP9000

『戦闘スタイル』

スピードでは劣るが強力なパワーで敵をなぎ倒し攻撃を鎧で跳ね返すスタイルを得意としている。またコンファインメントのカードもまだ使える為ある程度なら敵の攻撃を無力化する事も可能。

契約モンスター　メタルエンパイア　AP8500

メタルグラスが進化した姿。2足歩行から4足歩行となりトリケラトプスにも似た外見。スタミナは全モンスターでトップレベルで赤く光る眼に映るあらゆる敵をプラチナよりも硬いツノで薙ぎ倒す。

身長9m

体重600キロ

仮面ライダーライアサバイブ

仮面ライダーライアがオリジナルのサバイブー破壊ーの力を得て進化した姿。全ライダーの中で唯一シュートベントの能力を持ち遠距離でも近距離でも戦う事が出来る。また視力が高く狙った獲物を狩るまで逃がす事はない。

身長200?

体重100Kg

パンチ力18t

キック力20t

最大走力100mを4.5秒

ジャンプ力30メートル

最高視力40K

シュートベント　エビルキャノン　AP3000

ソードベント　エビルウィップブレード　AP　4000

コピーベント

ファイナルベント　ジャノサイド・ビックバン　AP　8000

『戦闘スタイル』

遠距離と近距離の両方のスタイルで戦う事が出来る。またエキソダイバーの帯電能力を使い雷撃の属性攻撃を行う事が出来る。

契約モンスター エキソダイバー AP7000

エビルだダイバーの進化形態。見た目こそはあまりエビルダイバーと大差はないが能力は大きく向上していて敵に雷撃の属性攻撃を行う事も可能。

全長8m

体重300K

究極甲獣？蛇帝 アルティメットジェノキャンサー AP4500  
00

身長20m

体重1t

サバイブで進化した4体のモンスターが融合した姿。手と腹にはボルナハトウマー、首と顔、尻尾はヘノヴァツパー、足と頭の鎧はメタルエンパイア、甲殻の下の翼はエキソダイバーという構造になっている。4体のモンスター全ての属性を備えている

アルティメットシュート AP3000

滅びのビックバンバースト AP5000

アルティメットバースト AP30000

アルティメットインフェルノ AP450000

第49話「夏祭りは恋を呼ぶ」(前書き)

ほのぼの恋愛&日常パートの番外編と言っておきましょう。

\*恋愛系が苦手な人にはお勧めしません。

## 第49話「夏祭りは恋を呼ぶ」

地球解放軍事件からあつという間に月日は流れて2ヶ月後の7月上旬。日差しは強くなりセミの鳴き声がうるさく響くようになって正に夏という雰囲気溢れ出ていた。

大人「あぢい〜」

猛烈な太陽の光が降り注いで肌を焼くのを感じながらも大人は1人自分の家にいた。この暑い中何処にも出かける気力など起きるわけがないのは当たり前だ。というか大人は季節では夏と梅雨が嫌いなのだ。

大人「も、もう嫌だ!!!。なんでこんなに暑いんだよ〜・・・地球温暖化のせいかな?にしても暑すぎるっての!!!」

ハーフパンツにタンクトップというだらしない格好で1人彼は愚痴をこぼしながら冷蔵庫にある水を取り出してがぶ飲みして一気に飲み干した。しかしそれでも暑さは和らぐことなどなかったのは言うまでもないだろう。

大人「・・・エアコン入れようかな〜。でないと蒸しまんじゅうになっちゃいそうだけ」

一応エアコンはあるのだが彼はあえて使わなかった。というのもエアコンを使用した時の電気代はバカにならずただでさえ今はお金がかかっている為そこまで回す余裕などはないのだ。というのも今のお金のお金の使い道と言えば1つしかないのだが・・・。だがこのままでは熱中症になりかねないとたまたまず大人はエアコンのリモコンに手を伸ばす。

大人「ん?・・・つぼみからメール?」

扇風機の風とうちわを仰いで作られる風を浴びながら体温を下げているとつぼみからメールが来た。内容を見てみると。『今日お祭りがあるので皆で行きませんか?えりかやいつき達も来るみたいですよ』という文面だった。



大人「あ、そう言えば今日はお祭りだったな・・・どうせ暇だし行くか」

大人は思いだした。そう言えばこのバカみたいに暑い季節と言えば夏祭りのシーズンではないかと言う事を・・・夏は嫌いではあるが楽しみの1つではある。そうと決まればいつまでもダラダラしてはいられないと行動に移す大人は着替える。

大人「待ち合わせ場所は此処だったな・・・しかし・・・俺達しかないとは(汗)」

メールに書いてあった待ち合わせ場所に大人達男性陣は集まっていた・・・のだが肝心の女性陣の姿がなかったのだった。

琢磨「にしても言いだしっぺ達は遅いな・・・」

傑「色々と準備があるんじゃないか？」

大人「準備って・・・何だ？」

琢磨「さあ？」

総司「(お前ら察する力が足りんな・・・)」

そんな会話を続ける事10分後に遠くから聞き覚えのある声が聞こえた来た。

大人「来たようだな・・・遅かった・・・!!!」

3人は声がした所に視線を集めるとそこには夏らしい涼しげな浴衣姿のつぼみ達の姿があった。

大人・琢磨・傑「・・・」

つぼみ「・・・ちよと3人とも？」

えりか「ど、どうしたの？」

自分達の浴衣姿を見て固まっている大人達に声をかける女性陣。いつまでたっても反応がないのでタが3人の頭を叩くとようやく3人は反応し始める。

大人「・・・いや、その似合いすぎてて言葉が出なかった」

琢磨・傑「・・・うん」

男性陣の素直な反応につぼみ達は笑い声を零す。そして全員はお祭

りの場所に向かう。ちなみに妖精達は人形のふりをして一緒に行くこととなった。

大人「うわあ、人が多いな」

つぼみ「ホントですね。しかも周りはカップルだらけです」

現地に着くと各自自由行動となった。つぼみと大人は手をつなぎながら辺りを歩く。お祭りという事もあり人はかなり多い。暫くすると金魚すくいの屋台を発見する

大人「お、金魚すくいか・・・やってみる？」

つぼみ「いいですね。あ、どうせならどっちが多く捕まえるか競争しません？」

大人「・・・いいだろう。でも手加減はしないぞ？」

つぼみ「望むところですよ！！！」

何やらカップル同士での金魚すくい対決が始まった・・・そしてその対決の結果はというと・・・

つぼみ「うう、負けちゃいました」

大人「言いだしたのに弱いなつぼみ（汗）って俺もそんなに威張れるほどの結果じゃないけど」

と言っても2人とも金魚すくいはあまり得意ではなく結果は大人が2匹でつぼみが1匹というものであった。

金魚すくい屋を後にするとつぼみの機嫌直しに大人は杏子飴を買ってやるとようやく機嫌が良くなった。大人は少し我儘なお姫様を世話しているかのような気分だったがとても楽しかった。

えりか「うわあ、綿飴だあ・・・イカ焼きもあるじゃん」

琢磨「えいかは食いしん坊だな・・・そんなに沢山買えないだろ？」

えりか「ふえ？・・・奢ってくれないの？」

えりかは琢磨の方を見てねだるように見つめるが琢磨は3秒で即答した。

琢磨「んなわけあるか！！」。第一、俺はお前の財布か？」

えりか「冗談だつてば〜」

実は半分は本気で奢ってもらおうと思つていたのであつたのだがそれを言うのと琢磨に怒られると思いえりかは悪戯っ子の様に笑顔を見せて誤魔化す。そんなえりかの態度を見て琢磨は自然と顔が笑顔になつた。

琢磨「お前はそう言う所が何故かいいんだよな・・・何故か心が落ちつくんだよ」

えりか「え？」

琢磨「・・・独り言だから気にするな」

琢磨は無意識に出た言葉をえりかに聞かれるとそう言つて誤魔化す。だがえりかにはハツキリ聞こえていたようで少し嬉しそうな顔になつていた。そしていつの間にか2人は手をつないでいた。

いつき「傑さん頑張つてえ!!!」

傑「よぉ〜し・・・今度こそ・・・行くぞ!!!」

いつきと傑はと言うと輪投げ屋の前にいた。いつきがぬいぐるみに一目ぼれしてしまつたのを察した傑が輪投げに挑戦していたのだが中々上手く決められず既に4回目の挑戦となつていた。そして結局は屋台の店主のお情けでいつきのお目当てのぬいぐるみはもらう事が出来たのだが傑は面子が立たず落ち込んでいたのだつた・・・。

傑「・・・うつ〜」

いつき「そ、そんなに落ち込まなくても（汗）・・・お目当ての物は手に入ったんだし・・・あ、あははは（大汗）」

いつきのフォローにならない言葉を聞いて更に落ち込む傑。暫くして機嫌を直そうといつきが傑にたこ焼きを買ってきた。流石の傑もいい加減に引きずるのは止めたのか機嫌が元に戻つていた。

傑「本当は・・・俺がとつてあげたかつただけど・・・はあ〜情けないな」

いつき「・・・その気持ちだけでもボクは嬉しいですよ」

傑「……ありがとう」

いつきの笑顔を見ると傑は吹っ切れたらしく再び祭りの道を歩き始める。

アンナ「うわあゝ凄い、凄い!!!」

ゆり「アンナったらあんまりはしゃじゃ駄目よ」

アンナは初めて見るお祭りの光景に大興奮していた。彼女にとっては何もかもが始めてみるものであり興奮が抑えきれないのは当然かもしれない。そんな彼女についていくゆり。ゆりにとっても夏祭りは久々であり無意識に楽しんでいるのだった。

夕「そう言うゆりも珍しく楽しそうじゃん？」

ゆり「ふふふ……バレちゃった？」

真夜「見ればバレバレよ？」

アンナ「3人とも早く!!!」

アンナは歩みが遅い3人を急かすようにそう言う就先に進んでしまふ。ゆり、夕、真夜はアンナを見失わない様に近くに駆け寄る。

えりか「うんゝおいひい」

えりかはやっぱり琢磨に奢ってもらっていて綿飴を食べているのだった。琢磨も自分の分を頼張りながら隣にいるえりかを見ていた。

えりか「ん？……どうしたの？」

琢磨「い、いや……その」

えりか「何よ？……らしくないわね」

なにやらいつもと違う様子の琢磨にえりかも戸惑うが琢磨はふとあの時の約束の事を聞く。

琢磨「覚えてるか？あの時の約束の話」

えりか「……日本一周とジャケットの話？」

琢磨「ああ。その、どうせならさ……えりか、俺はお前の事が……」

琢磨は言葉が詰まる。自分の気持ちは恐らく本物である。だけど自分の秘密がバレるかもしれない……。だが心は彼にその事を忘れさせる様に言葉をつづけさせた。

琢磨「俺はお前の事が好きだ。」

えりか「……………」

えりかは琢磨の告白に言葉を失う。普段の彼女なら考えられないほど動揺した顔だったがすぐに笑みを浮かべると…………。

えりか「アタシで…………いいんだね？」

それだけ聞き返すえりか。琢磨は何も言わずに頷くとえりかは笑顔を見せて「いいよ」と言った。どうやらえりかも琢磨の事を想っていたらしくいつもとは違う笑顔を見せて琢磨を受け入れた。

いつき「そろそろ花火の時間ですね。とっておきの場所があるからそこに行きませんか？」

傑「…………ああ」

なにやらいつきの様子が急に違う事に気がついてはいたが特になにも聞かなかった。

それから5分後に2人は花火がよく見える地元では有名な場所になっていた。周りはカップルだらけであり傑は場違いではないかと思うほどではあったがいつきが手をつないできた。

傑「いつき？」

いつき「あの…………その…………ボクは…………いや私は…………」

傑「…………待つてくれ。そこから先は俺に言わせてほしい。」

いつきの言葉を遮ると傑は言葉を続ける。せめてこう言う時ぐらいは自分がと持ったの事であった。

傑「…………いつき、俺は…………いつの間にか君を仲間以上の気持ちは芽生えた。その気持ちはこう言う事なんだと思う。だから俺と…………付き合ってくれ」

自然と言葉が出た…………驚くぐらいに。其の後ベストタイミングで花火が夜空を照らす。

花火の音「ヒュ~~~~~ツ!!!!.....パアアアアン  
!!!!!!」

夜空に色とりどりの花火が夏祭りに来ている全ての人の心を照らす。  
その光はただの爆発でしかない筈なのに人の心はその美しい光で癒  
されていく。

つぼみ「うわあ〜綺麗です」

大人「正に夏の風流だな」

えりか・琢磨「たまやあ〜!!!」

アンナ「アレって花火?」

ゆり「そうよ・・・綺麗ね」

夕「ホントだね」

真夜「ふふっ」

夏を象徴する花火は多くの出会いと見ているのかもしれない・・・  
夏祭りは恋を生み新しい出会いも生み出す正に魔法の様なものであ  
るのかもしれない・・・これは戦いの本の合間の休息と恋の物<sup>スト</sup>  
語である。

第49話「夏祭りは恋を呼ぶ」(後書き)

恋愛パートいかがだったでしょうか?・・・一度こう言っつのをやってみたかったので書いてみました

ちなみに天道は・・・別行動です(汗)

他にもご要望があれば書いていこうかなと思います。

さて次回は・・・夏と言えば海、海と言えば・・・

次回もお楽しみに

第50話「思いのこもった贈り物」(前書き)

今回から数話にかけてちょっとした番外編をお送りしたいと思います。

ええ、ただし・・・非常にカオスになる可能性がありますので、コはご容赦を。そして苦手な方はご遠慮を。



## 第50話「思いのこもった贈り物」

大人の家に琢磨達が集まっていた。彼ら大学生も夏休みになり折角の夏休みをどのように使うかを話し合っていたのだった

大人「旅行？」

タ「そう。せつかくの夏休みなんだしさゝ何処かに行こうよ!!!」  
タは旅行のパンフレットを大人達に見せるのだった。パンフレットの内容はビーチが近くにある貸しペンションのレンタ内容であった。琢磨「へえゝ結構いい感じじゃん？しかも安い」

タ「でしょ!？しかも団体様割引つてのもあるからさらに安くなるんだって」

傑「それは凄いなあゝ」

タは力説して3人を説得するかのようであったが大人は唐突に口を開いた。

大人「でもさ、旅行中に怪獣とか出たらどうすんだ？あのダークつて奴があのまま引きさがるのは俺には思えない」

その一言で全員は口を閉じる。たしかにその通りであった。

琢磨「まあゝでもさ、たまには息抜きしないと・・・この所は怪獣も減ってきているし」

確かに最近は怪獣の出現は減少傾向にあった。地球解放軍の時のように全くいなくなつたのではないが怪獣の急襲が無くなつてきているのは確かだ。

タ「そうだよゝ偶にはアタシ達も羽を休めないと身体や精神が持たないわよ」

大人「・・・」

確かにティガになつたからというものまとも心安らぐ日々など今までなかった。ギリギリの中を戦いぬいてきた事を考えると休息は確かに必要だ。だが万が一という事があるのも事実だ。

傑「大丈夫だつて。もしも敵が出てきたもクロックアップですぐに

現地に行ける・・・だろ？」

大人「・・・そうだな。なら偶にはこう言うのも悪くない」  
タ「じゃあ決定!!!!」

大人は傑の意見を聞き入れたまにはいいだろうと夕の提案を受け入れた。そうときまれば色々準備をするぞと夕は張り切り始める。

その頃海底では・・・

ダーク「闇の力は先の解放軍達のお陰で大分集まった・・・あと少しだ、あと少しで邪神は完全なる復活を遂げる・・・そして兄さんを取り戻せるのも」

玉座の間にてダークは一人でそう呟いていた。先の戦いでシザース達の心の闇のエネルギーをかなり集める事が出来た。そのお陰で自分が考えていた以上に邪神復活の為にエネルギーが集まりあと少しで邪神復活も近い。不気味に笑い声を響かせながら次の作戦を考えていたのだが突然闇の扉が出現し中からキリエロイドが出てきた。

ダーク「キリエル?・・・何しに来たんだい？」

異世界に闇エネルギーの調達に行かせたはずのキリエルがノコノコと戻ってきた事に腹を立てたようにそう問うダーク。するとキリエルは一礼して跪く。

キリエル「ダーク様、ドクタークレイズの殉職によって欠員が出た幹部に入りたいと申し出たモノがいるのですが・・・」

ダーク「幹部に申し出?・・・ふうん、通せ」

キリエル「はっ!!!」

ダークは面白いと新幹部候補を通させるとそこには3人組の影があった。

ダーク「君達、名前は？」

????1「はっ。我らは騙す事なら宇宙一『漆黒の翼』という団体でございます。そのリーダーである私ザラブ!!!!」

????2「漆黒の翼?2に漆黒の怪盗ヒマラ!!!!」

????3「?3にして怪獣使いのチャリジャ!!!!」

ザラブ「3人揃ってっ、我ら漆黒の翼!!!!」

3人の宇宙人トリオは自分達で考えたであろうカツコイイと思われるポーズをとっていくが……。

ダーク「漆黒の翼? ……聞いたことないね」

ダークのその一言に3人の宇宙人トリオはその場にずっこけて倒れてしまう。その様を見てダークは少し不安になったが使える手ごまが欲しい彼にとっては丁度いいと思うのだった。

ダーク「で? 君達は我々の軍団で欠員が出た幹部の仲間に入りたいと言っただね? ……だったら条件がある。 ……なあに簡単な事さ。コイツらを消してくればそれでいいんだ」

ザラブ「コイツらが ……例のウルトラマンとプリキュアですか?」

ダーク「そうだ。私がこの忌々しい海底に封印されることとなった元凶だ。コイツらを倒せたなら私は君達を喜んで幹部として迎え入れようではないか」

ダークは指を鳴らすとそこに大人達た映し出された。そしてティガ、アース、デュナミスに大人達が変身する姿、つばみ達プリキュアの戦闘シーンが映し出され今までの戦いのデータをザラブ達に見せる。ザラブ「お安いご用で ……この程度の餓鬼どもなど我々が必ずやこの世から消し去って御覧に入れましょう」

ダーク「そうか。期待しているよ? ……漆黒の翼の諸君」

ザラブ達はお安い御用だと意気揚々と引き受けると闇の扉をくぐって姿を消した。

キリエル「ダーク様、奴らごときに倒れるとは思えません?」

キリエルは疑問だった。何故あの程度の小物をわざわざ差し向けたのかと。するとダークは鼻で笑いながら答えた。

ダーク「まあ、そうだろうね? ……でも余興には丁度いいだろう? それに闇エネルギーが集まる事にさえ貢献してくればそれだけの利用価値はある」

ダークは冷徹にそう言い放った。例えティガ達を倒せなくても多少は闇のエネルギーが手に入れられる。その程度でも役に立ちさえす

ればあの程度の存在など彼にとってはどうでもいいのだ。

翌日。

大人「さてと旅行は来週の月曜日だったな。しかし、どうしてスイカが俺の担当なんだろうか・・・」

旅行まであと一週間であり大人が持つていく担当の者はなぜかスイカという事になっていた。海となれば必然的に持ち物は決まってくるので夕が割り振ったのだった。スイカを買いに行こうと出かけよう外に出ると家の近くにアンナの姿があった。

大人「アンナ？・・・どうしたんだい？こんな所で」

何事だと思い大人はアンナに声をかける。

アンナ「大人・・・ちよつと相談があるんだけどいいかな？」

大人「相談？どうしたんだよ改まって」

何やらかなり深刻そうな表情であるアンナ。もしかしたら何か重大な悩みを抱えているのかもしれないと大人は自分でよければ快くそう言う。

アンナ「実は・・・」

何やら真剣な表情をしながら相談の内容を離し始める。この事で大人はつぼみにちよつとした誤解を受ける事になるのだが・・・。

つぼみ「んんゝ いい天気ですね」

えりか「だけど暑っ」

つぼみとえりかも同じく夏休みを迎えており久しぶりに2人で買い物に行くこととなった。

つぼみ「言いだしたのはえりかですよ？早く行きましょうよ」

暑さにだらけるえりかに呆れたような顔になりながらもつぼみはえりかの手を引つ張りながら目的地のショッピングセンターへと向かう。そしてしばらくすると2人はショッピングセンターに着いた2人は色々なモノを見に回るのだった。

えりか「これと、これかなあゝ。お、水着の新作だつてゝちよつと見てこようよお！」

つぼみ「えええ！？・・・べ、別に水着なんていいじゃないですか」  
えりか「なあ〜に言ってるのよ・・・夏と言えば海なんだからちやんと用意しとかないと〜」

えりかは強引につぼみの手を取っていくとそのまま水着コーナーへと進んでいく。

えりか「うわあ〜色々あるね〜・・・おお〜こついうのとかセクシ〜じゃない？」

えりかは色々な水着をみながら唐突に黒い色のビキニを取り出す。

つぼみにそれを合わせるとつぼみは何故か顔が少し赤くなる。

つぼみ「そ、そうですね（大汗）こ、これなんかも・・・可愛いですよね？」

最初は嫌そうにしていたのだが満更でもないようでありなんだかんだで好みの柄の水着をそれぞれ1つずつ買ってしまふのだった。

つぼみとえりかは久々のショッピングをエンジョイするが・・・ふ

とつぼみの視界に信じられない光景が目に入った。

つぼみ「・・・・・・・・」

えりか「ん？つぼみ〜どうしたの？」

つぼみの動きが突然止まった事に気がついたえりか。つぼみが見ている方向を見るとそこには何と大人とあアンナが一緒にいる決定的場面があった。

えりか「ひ、大人にアンナじゃない・・・何で2人がこんなところに！？」

流石のえりかも驚いたのか開いた口がふさがらなかつた。するとつぼみは大人とアンナがいる方に見つからないように近づいていく。

えりか「ちよ、つぼみ!？」

突然動きだしたつぼみについていくえりか。つぼみの様子が明らかにおかしくなつた事もあり心配が隠せないが。

大人「・・・・・・・・」

アンナ「・・・・・・・・」

大人とアンナはアクセサリーショップで何かを話し合っているよう

だった。外から見れば2人は正にカップル同士であるのだがつぼみは信じられなかった。

つぼみ「(大人・・・なんでアンナと一緒にいるの?)」

つぼみはアクセサリーショップの外からその様子を見ていた。大人がまさか自分を裏切るようなことなどするわけがないと信じてはいたが今の大人の行動は・・・。つぼみは手を振わせながらも声をかける勇気が出ずただ見ることでしかできなかった。

えりか「つぼみ?・・・」

つぼみの近くで同じくその様子を見ていたえりか・・・つぼみと大人が付き合い始めたことはつぼみから聞いたばかりである為えりか自身も信じ難かった。だが今の2人の行動はまるで・・・。えりかはつぼみの手を取るとその場から離れる。

つぼみ「え、えりか!？」

えりか「違うところに行こうよ、あれは他人の空似だつて!!！」

つぼみ「いいえ。アレは間違いなく大人とアンナです・・・あ、2人がお店から出たようですね。えりか、2人を追いかけますよ!!！」

えりか「あ、ちょ、つぼみ!!！」

今は取り合えず別の所に行こうとつぼみにそう言うがつぼみは聞き入れなかった。アクセサリーショップを2人が出たのを確認するとつぼみはえりかの制止を振り切るように2人の後をつけ始める。何やら2人は会話をしているようだが見つからない距離を保っている為つぼみ達には内容までは聞こえなかった。

つぼみ「・・・」

えりか「つ、つぼみ、やっぱり止めようつてば。ちよつとつぼみ!？」

壁によりかかりながらも追跡を続ける2人だったがつぼみからは何やら凄まじい勢いで異質なオーラが放たれていて壁に罅が若干入っている。

つぼみ「えりか・・・ちよつと黙つてて・・・?」

えりか「っ、つぼみが怖いっ……」

普段なら滅多にこんな事は無いのでえりかはつぼみが放つ戦慄の様なものに恐怖してしまい目に涙を浮かべて震えてしまうのだった。

アンナ「今日はありがとう大人」

大人「大した事は無いよ。家まで送ろう」

つぼみ「……」

つぼみは2人のやり取りを見てどす黒い嫉妬オーラが前回になる・  
・後ろでえりかは怖々とそれを見ているのだった。

???「見つけたぞ!!!」

そんな2人にいきなり声を掛けられた。なんとその正体は漆黒の翼の例の3人組だ。

つぼみ「えりか!?!」

チャリジャ「貴様ら、ハートキャッチプリキュアのキュアブロッサムとキュアマリンだな!?!」

えりか「何よアンタ達!?!」

ザラブ「我々はダーク様の名を受け貴様らの命を狙うモノだ!!!。貴様らには悪いが此処で死んでもらおうかあ!!!」

ザラブ達3人はそう言う構えを見せて2人に近づいてくる。つぼみ達には今シプレ達がないので変身は出来ない……ヤバい状況だと思つたえりかだったのだが……。

えりか「つぼみ!?!」

つぼみは何やらどす黒いオーラを出しながら漆黒の翼3人衆を睨みつけるように鋭い眼光を放っていく。それを見た3人は威圧感と戦慄の様なものに恐怖してしまい動く事が出来なくなってしまう。

ヒマラ「ちよ、な、何だお前?」

つぼみ「すみません……私、今ちよつと物凄く気分が悪いんですよ……だから貴方達3人には申し訳ありませんが……」

ザラブ「な、何っ!?!」

目と鼻の先までつぼみとの距離が縮まった。そして次の瞬間に3人

はつぼみの恐ろしさを知ることとなった。

つぼみ「何処かに吹っ飛んでください!!!!!!」

つぼみは3人に近づくとオーラを纏った拳で3人を殴りつける。

ザラブ・ヒマラ・チャリジャ「ぎゃあああああああああああああああ  
ああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

なんとつぼみは素手で3人をふっ飛ばしてしまった。3人は空に飛ばされると夜でもないのに星のように輝くを放ってそのまま消えてしまった。

えりか「う、嘘お!?!」

プリキュアになってもいないのにあんな凄まじいパワーを出せるとはとえりかは驚きが隠せず声をもらししまう。だが驚いている暇をつぼみは与えてくれなかった。

つぼみ「ああ〜もう!!あの3人のせいで大人を見失ってしまいました。えりか、追いかけますよ!!!!!!」

えりか「う、うん(汗)」

えりかはどうツツコミを入れていいかわからずそのままつぼみにリードされるまま大人達を探すが見つかる事は出来なかった。そして無情にも時間だけが過ぎて行った

えりか「つぼみ……」

つぼみは落ち込んでしまい今にも泣きそうになっていた。えりかは意を決したかのような顔をする。つぼみの肩に手を置いて正面からつぼみの顔を見る。

えりか「こうなったら大人にこの写真を突き付けて本当の事を聞きだそう!!!!。コソコソしても前に進めないよ!!!!!!」

つぼみ「えりか……はい!!!!!!」

こうなったら本人に直接聞き出すしかない。とえりかは思いきつた事を提案する。そして2人は意を決して大人の家の前まで着いた。時刻は夕がたで夏の夕日が辺りを照らしていた。

つぼみ「……」



つぼみは大人の部屋の前にきてチャイムを鳴らす手が止まってしまった。やはり怖いのだ・・・もしも大人がアンナと関係を持っていたら・・・信じたくはないがその為には大人を信じる為の絶対的な確信が欲しい。心臓が爆発しそうなのだが恐怖故に実行できない。そんなつぼみの手にえりかの手が乗せられた。

つぼみ「!?!?・・・えりか?」

えりか「つぼみが本当に大人を信じてるなら絶対に大丈夫だって」

つぼみ「はい!!」

1人だったら此処までは出来なかっただろう。えりかの存在はやはりつぼみのとつては大きい存在だ。つぼみは意を決してチャイムを鳴らす。

大人「はあ〜い・・・つぼみ?、えりかまで。どうしたんだ?」

つぼみ「大人・・・話があるんですがいいですか?」

大人「話?」

大人は何やらいつになく真剣な態度のつぼみに大人はわけが分からなかったが。

大人「で、・・・話って何?」

つぼみ「たまたま見てしまったんですけど・・・今日アンナと一緒にアクセサリーショップにいましたよね?」

大人「つ!!」

えりか「正直に答えてよ・・・なんでアンナといたのよ?しかも楽しそうに」

大人はつぼみ、えりかの詰め寄ってくる態度になにやらバツが悪そうな態度になる。やはりつぼみの思っている通りという事なのか? つぼみは今までにないぐらい緊張してしまう。

大人「見てたならしょうがないか・・・実はな、アンナに今日偶々会って相談したい事があるって言われてさ」

つぼみ「え!?!?」

えりか「相談!?!?」

大人の言ってきた答えに2人は思わず目が点になった。それを無視

しながら大人は話を続ける。

大人「そう。アイツゆりに何かプレゼントしたいらしくてな。それでその相談を俺にしてきたんだよ」

つぼみ「じゃ、じゃあアクセサリーショップにいたのは」

大人「俺がアクセサリーでもどうだって言ったらアンナが『だったらどんなものがいいかな?』って聞いてくるもんだからさ近くに会ったあのアクセサリーショップによって一緒に選んであげてたんだよ。……おい2人ともどうしたんだ?」

つぼみ「えりか『……』」

説明が終わるとつぼみとえりかは固まっていた。全ては自分達の勘違いであったのだと頭の中で整理すると恥ずかしくて堪らなかった。特につぼみは泣きそうになったのにそれがただの勘違いとなるとうどうしようもなかった。

大人「あ、まさかつぼみ……お前」

つぼみ「う、う、うううっ!!!」

大人「えっ!?……ちよ、つぼみ!?!」

なんとつぼみは溜まっていた感情が爆発して泣き始めてしまった。大人とえりかは慌ててつぼみを宥めようとアタフタする。そしてしばらくするとつぼみはやつと泣きやんだ。

大人「……ご、ごめん……とにかくごめんなさい!!!」

大人はつぼみに土下座した謝った。理由はともあれ自分が泣かせてしまったのだから悪いの自分だと反省し必死に謝った。

つぼみ「グス……いいですよ。もう心配した私がバカでした!!!」

えりか「ホントだよ。もう金輪際、こんりんざい誤解を招くような事はしないでよね!!!」(怒)

大人「は、はいっ!!!き、肝に銘じておきます!!!」

大人はそう言うつとつぼみとえりかは笑った。もう完全に誤解は完全になくなった。大人はどうか2人の機嫌がよくなった事にホッとするとカバンから何かを取り出した。

大人「・・・つぼみ、こんなタイミングで悪いんだけど」

それはラッピングされているプレゼント用の箱だった。つぼみは何だろうと思いいそれを開けてみると中にはピンク色の石が装飾されている花の形をしたペンダントだった。宝石には「TH」のエンブレムがあった。

つぼみ「これは？」

大人「あのアクセサリーショップで買った物だよ。今、流行ってる花型のペンダントってあそこの店長さんに勧められたんだ・・・つぼみに似合うと思ったんだけど・・・どうかな？」

大人は少し照れた表情になりながらどうだろうかとつぼみに聞く。

つぼみは素直な感想を一言言った。

つぼみ「・・・綺麗」

ペンダントは本当に綺麗だった。つぼみが一番大好きな色のピンク色の石はさつきまであった感情を洗ってくれるかのようだ。

えりか「いいなあ〜!!!」

大人「これで機嫌を直せとは言わないよ。でもつぼみに宣言するよ。

・・・もう二度とお前を悲しませない!!!・・・えりかが証人だ」

大人はつぼみにそう宣言した。もう二度とつぼみを悲しませる真似はしない。それはいつか離すと気が来るであろうあの力の事も含まれているのかもしれない。

えりか「あ、アタシが!？」

大人「此処にいるんだからいいだろう？」

えりかはずいぶん突っ込んだが大人はえりかのツツコミをそう受け流した。だがその後つぼみとえりかは大人に誤解を与えた罰として手作りパスタを作らせたりと大人を色々ときき使う事になるとはその時の大人は思いもつかなかっただろう。

今回はとんだ事で騒動起きだがそれはつぼみと大人の絆を確かめる機械であったのかもしれない。大人はつぼみの意外な一面を見る事が出来てうれしい半面怒らせたらひどい目にあうと確信するのであった。

第50話「思いのこもった贈り物」(後書き)

話の都合により前回の予告とは違ってしまいました。

次回はえりか&琢磨編に突入します。・勿論あの3人組も・

では次回もお楽しみに

第51話「ザラブの罠・・・ニセえりか参上!」(前書き)

\*今回はキャラ崩壊が激しいです。特にえりかが・・・

それでも大丈夫な方はどうぞ!!!

第51話「ザラブの唄・・・ニセえりか参上!!」

大人と傑は琢磨に旅行の打ち合わせに琢磨に家に来たのだが其処に現れた琢磨はとうとなぜか包帯でグルグル巻きになっていた。

大人「琢磨・・・お前どしたの？」

大人は琢磨の家の玄関前で思わず絶句してそう問う。目以外は顔や身体に包帯が巻かれていてまるでミイラ男だ。琢磨は疲れたような目つきになりながらも大人達を招き入れる。

琢磨「まあ、入れよ・・・話は中ですからよ」

大人「あ、ああ。」

傑「お、お邪魔します」

何やらただ事ではない空気ではあった。一体、琢磨の身に何が起きたと言っのだろうか!?

琢磨「話は今から数時間前にさかのぼる・・・とにかくひどい目にあつたんだよ!!!!!!」

琢磨の部屋で取り合えず琢磨は泣きながら自分に降りかかった悲惨散々珍騒動劇を大人と傑に語り始めたのだつた・・・。

話の本編は今から数時間前の事。

琢磨「さてと俺の担当は花火とかのお遊びグッズか・・・何処で買うとするかな」

琢磨は夕に頼まれた物を買に行く為に外に出ていた。夏の定番と言えば花火だろうがそれだけでは面白くない・・・やはり何か1つ捻った物が欲しいのだが何がいいのかが思いつかない。何がいいかなぁ〜と考えながらショッピングセンターに足を運んでいたのだつた。

琢磨「う〜ん・・・やっぱりあれしかないか？」

無い知恵を絞って考える琢磨は何やら思いついたらしい。花火を購入した後、彼は何やら白い布生地などを買いあさるのだった。

ちなみにその頃の海底ではというと・・・

ダーク「全く・・・君達に期待した私がバカだったかな？（怒）たった数分で帰って来やがって・・・」

ダークに怒られているのはあの漆黒の翼の3人のバカ・・・ごほん、宇宙人トリオであった。

ザラブ「ナレーション、うるさいぞ!!!（激怒）」

失礼。とにかくこの3人が怒られている理由は前回つぼみとえりかを奇襲したと思ったら僅か数秒でつぼみに素手で殴り飛ばされてそのまま何の活躍も無しに昼間にしか見えないお星様になったからであった。

ヒマラ「だ、ダーク様・・・お願いします今一度だけ我等に汚名返上のチャンスを!!!!」

ダーク「ふうん・・・まあいい。今は少しでも邪神復活の為に闇エネルギーが欲しい所だ。好きにするといいさ」

ダークはため息をつくと仕方がないとばかりにそう言う。今は利用できるものは何度も利用したい・・・役に立ちそうは無いがやむを得ないとダークは心にそう決めた。

ザラブ「あ、ありがとうございます!!!（泣）今回こそは必ずやあ!!!!」

そう言うところ人は闇の扉を潜りそのまま現実世界へと向かうのだった。

キリエル「（アイツら・・・本当に大丈夫か?）」

キリエルは内心配になるのだったがその不安は的中することになった・・・。

その頃えりかはというとコフレ共にファッション部の夏休み活動物資の調達の為に色々と買い出しに出っていたのだった。ちなみに今日はリボンやビーズなどの装飾品を目当てに買いに行っているのだったえりか「~~~~」

コフレ「えりか、買いすぎですよ」

えりか「しゃーないでしょ！今日は思った以上にいいものが手に入っちゃったんだから」

目当てのビーズやリボンがかなり手に入ったのでかなり上機嫌であったえりか。今日は何やらついているぞと思ったのか鼻歌を歌っていた。その陰にはあの3人組の影があるとは誰も思いつかないだろう……。

ザラブ「いたぞ……キュアマリンと妖精だ」

ヒマラ「今は1人みたいだな」

チャリジャ「どうする？……妖精だけだったら造作もないし今すぐにも襲って片付けるか？」

3人組はえりかの姿を見つけるなりどうするかを話し合っていた。

ザラブ「いや……下手に手を出したらまたお星様ってことになりかねん」

ヒマラ「じゃあどうすんだよ!？」

どうやら3人組はつぼみに素手で飛ばされた事がかなりのトラウマになっているようだ。するとザラブは何かを思いついたように手を叩いた。

ザラブ「私にいい考えがある……いいか？ゴシヨゴシヨゴシヨ」

ザラブは2人の耳に手を当てて離し始める。話を聞いた2人は薄気味悪い笑い声を浮かべながらえりかに近づいていくのだった。

えりか「さあ〜と今日はこんなもんかなあ？……早く帰ってつぼみから借りた映画を見ないと」

コフレ「また夜更かしですか？」

えりか「うるさいなあ〜」

えりかはコフレと話しながら上機嫌に帰路を歩いていたがその目の前に突然チャリジャとヒマラがえりかの前に現れた。

えりか「あ!!!!……アンタ達はつぼみに素手で殴り飛ばされたヘタレ怪人!!!!」

ヒマラ「だ、誰がヘタレ怪人だ!!!（激怒）」

チャリジャ「お、俺達は漆黒の翼だ……覚えておけ!!!!」



えりかの発言に怒るヒマラとチャリジヤ。あの衝撃的な出来事があればヘタレの烙印を押されても仕方ないかもしれないが……。  
ヒマラ・チャリジヤ『ナレーション黙れえ!!!!（怒）』

ごほん……失礼。

コフレ「な、何か変な奴らです（汗）」

えりか「……漆黒の翼だか虫歯だか知らないけど（呆）とにかくアタシに何の用？」

何かいつもの敵とは違い調子が狂うえりか。取り合えず用があると  
言えば自分を倒すぐらいしかないだろうが何故か聞きたくないの  
でそう問う。すると後ろからザラブの影が……。

ザラブ「お前を人質にしに来たのだよ!!!!」

えりか「っ!?!」

何やら声が出たと思ったその瞬間に鈍い音が頭から響いていきた。

そうザラブが後ろからえりかの後頭部を殴りつけるとえりかは気絶してその場の倒れてしまう。

コフレ「え、えりかあ!!!!」

チャリジヤ「貴様も来い!!!!」

コフレ「う、うわあああ~~~~っ!!!!!!」

その後コフレも袋で身体を覆い被されてしまった。2人はマヌケ・  
・失礼。漆黒の翼に捕えられてしまっただった。

その数十分後……。

えりか「……こ、此処は……何処？」

何やら見知らぬ天井が見える。起き上がるとそこは牢屋だと言う事が分かった。

えりか「こ、コフレ、大丈夫？」

となりにはコフレが倒れていた野を見つけるとえりかは声をかける。幸い気絶しているだけであつたがえりかは一気に機嫌が悪くなった。????「お目覚めかな？」

えりか「っ!?!?……」

声がした方を見てみるとそこには何と自分とそっくりいや瓜二つの人物が牢屋の外に立っているのだった。

えりか「あ、アンタ誰よ!!!」

えりか(？)「ふふん・・・驚いたか?・・・これがザラブの変身能力だ」

なんとその正体はザラブであった。自らが得意とする変身能力でえりかに擬態して成り澄ましたと言う事なのだ。

えりか「アタシに化けて何するって言うのよ!??」

いきなり襲われたと思ったなら自分に变身されたとなるとえりかは黙っているわけがなく大声を上げてそうザラブに問いただす。すると笑い声を上げながらヒマラとチャリジヤも姿を現した。

二セえりか「何って・・・貴様の仲間を1人ずつ血祭りにあげるのさ!!!・・・仲間には殺されるとその絶望は計り知れないからな・・・そうなれば我々はダーク様に認められ新幹部として迎え入れられるのだ!!!」

これがザラブのやり方なのだ。信頼する仲間には化けて心を許した隙をついて確実に倒す。卑劣極まりない・・・だがえりかはその言葉を聞くと笑い始めた。

えりか「ふふふ・・・はははは・・・アンタ達さあ〜アタシ達を舐めてるでしょ?」

ヒマラ「何っ!??」

えりか「そんな二セモノ何かにアタシの仲間は騙されないわよ!!!」

えりかは堂々とドヤ顔を浮かべながらそう言った。すると宇宙人トリオは途端に拳動不審となるがザラブは冷静さを取り戻すと。

二セえりか「ふん、何とでも言うがいい・・・すぐに貴様のその自信を粉々にしてやるわ!!!」

そういうと二セえりかは姿を消す。残された2人はえりかの見張りをする事になった。

琢磨「やっぱり夏と言えば肝試しっしょ!!!これで幽霊グッズを作ったら大ウケ間違いなし」

琢磨が考えたのは肝試しの幽霊グッズだったのだ。これでつぼみ達を脅かしてやるうと言うちよっと思地悪ではあるが定番と言えば定番のものだ。

琢磨「さてと・・・幽霊と言えばあの魂が抜けたような感じのあれとミイラ男っているのもありだな・・・あとは火の玉とかもあるな・・・ふふふ、だんだん考えるのが楽しくなってきたぞ」

琢磨は意地悪タツプリの目になりながら家に帰って早速グッズ作成に取り掛かるうと張り切っていた。

ニセえりか「琢磨あゝ!!!」

琢磨「?・・・あれ、えりかどうした?」

後ろから声があったので振り返ってみるとそこにはザラブが変身したニセえりかがいた。

ニセえりか「偶然ね、その荷物どうしたの?」

琢磨「え、あ、ほら今度の月曜に皆で出かけるだろ?その時に使うやつだよ」

ニセえりか「(ほう、コイツら此処を離れるのか・・・覚えておこう)あ、そうか。にしても重そうだね〜1つ持ってあげるよ」

琢磨「あ、ありがとう」

琢磨はいつもと何か違うえりかに少し戸惑うがまあいいかと一緒に歩くのだった。

その様子を漆黒の翼の秘密基地にあるモニターから見ていた本物のえりかはというと・・・

えりか「・・・・・・・・」

ヒマラ「意外と単純だな?お前の仲間とやらも・・・」

えりか「(た、琢磨のバカあ!!!)」

琢磨が少し又けている事は分かってはいたがまさか此処までとは・・・えりかは拳を作ってプルプルと震えさせて怒りを溜めこみ始める。

琢磨「・・・なんか今日は優しいな?・・・どうしたんだ?」

だが流石の何かえりかの様子がおかしい事に感付き始めるが偽物はそうはさせるかとすぐに演技を始める。

ニセえりか「え?そんな事ないわよ」

琢磨「ホントか?・・・いつもなら荷物なんか持ってくれないよな?」

ニセえりか「(こ、コイツ男の扱いが悪いのか)」

琢磨「・・・さては俺にまた何か集ろうとでももしてるのか?」

琢磨は少しニセえりかにカマをかけるようにそう言うがザラブは何かいいセリフを考える・・・暫くして男なら言っしてほしいであろうセリフを考えついた。

ニセえりか「そんな事ないよ・・・ただ琢磨が大変そうだなって思っで・・・いつもいつも私は自己中心的な事言ってるからさ・・・偶にはこれ位しないって思っで」

琢磨「えりか・・・(な、なんだ今日のえりか無性に可愛い・・・こ、こんな奴だったけ?)」

えりか「コラあ琢磨あ、アタシはそんな事言わんぞお!!!なあゝにデレデレしとんじゃああああ!!!!!!」

コフレ「え、えりか怖いです(汗)」

えりかは琢磨の普段以上にデレデレした態度に怒りのオーラを燃えさせていく。その威圧感にコフレは一步引いてしまう。

ヒマラ「お、女って怖いな」

チャリジャ「あ、ああ。これは宇宙共通なのかも知れん」

見張りをしていた2人もその怒り狂う容姿を見てかなりビビっていた。今にも檻を破って暴走しそうなライオンの様なその姿を見てビビらない方がおかしいと言うものだ。

琢磨「・・・え、えりか・・・お前、ホントに今日は優しいなゝいつもなら人使い荒くて凶々しくて一緒にいるのが少し疲れるんだけ

ど（汗）」

ニセえりか「言ったでしょ？今日ぐらいは優しくさせてよ・・・  
だって琢磨は色々大変じゃない？」

琢磨「え、えりか／＼／＼／＼／＼」

琢磨は完全にこのえりかがザラブが変身したニセモノであると言う  
事に気がつくとうとしない・・・その様子を見ていた本物のえりかは  
とうとう・・・。

えりか「海より広いアタシの心も・・・此処らが我慢の限界よお！  
！！！！・・・コフレえ！！プリキュアの種！！！」

とうとうえりかは堪忍袋の緒が切れたらしくココロポットを取り出  
すとコフレにマリンの種を出すように言う。

コフレ「あ、あわわわ・・・は、は、はいですう！！！！（泣）」

コフレは怯えながらも種を召喚していきそれをえりかの手に渡す。

えりか「プリキュア・オープンマイハート！！！」

そしてそのままそれをココロポットに装填していく。それを見た見  
張りの2人はえりかから変身アイテムを取り上げる事を忘れていた  
事に今更気が付く

ヒマラ「し、しまった！！！」

チャリジャ「や、ヤバい！！！」

2人はダッシュでその場から逃げだしてしまう。もはや完全にマヌ  
ケとしか言いようがない失態だ。

マリ「海風に揺れる1輪の花、キュアマリン！！！」

マリンは高らかに名乗り上げるとそのまま檻を蹴り飛ばして壊して  
いき基地から脱出する。

琢磨「~~~~」

ニセえりか「早くコイツを始末しなければ・・・よおし今が絶  
好の機会だな」

そろそろ本性を出そうとザラブは琢磨に手を伸ばしていく・・・  
首を絞めてやるつもりだ・・・。

マリソ「ちょお〜と待った!!!!!!」

琢磨「え？」

だがその前に本物のえりかが変身したマリソが琢磨の前に現れた。琢磨はえりかが2人いる事に驚愕してしまう。

マリソ「よくもアタシに化けてくれたわね!？」

マリソは今まで怒りをニセえりかに向けるがにせりかはすぐに琢磨の後ろに隠れる。

琢磨「え!?!?ど、どういう事だ!?!」

ニセえりか「騙されないで!!偽物はアイツよ!!!!!!」

琢磨「はいっ!?!」

琢磨はわけが分からず混乱してしまう。業を煮やしたマリソがニセえりかに向かつてマリソシャワー発射する。

マリソ「あああ〜、もう!!!!!!これじゃ埒が明かない。いい加減に正体を見せなさいっての!!!!!!マリソシュート!!!!!!」

ニセえりか「ぐおおっ!?!?!」

マリソシュートのダメージによりとうとうニセえりかはザラブの姿になってしまう。これには流石の琢磨も驚いた。

琢磨「な、なんじゃこりゃあああ!!!!!!」

急いで偽物から離れる琢磨。ザラブはアタフタとなりながら何とかしようと考える。

ザラブ「ああ〜っ!!!!!!(汗)あとちょっとだったのにい〜い〜」

アタフタしているザラブにマリソが近づいていく・・・その様は鬼のように恐ろしく戦慄は半端なものではなかった。

マリソ「プリキュア・お星様パンチ!!!!!!」

ザラブにありつたけの力で拳をぶつけるとつばみに飛ばされた時のようにザラブは綺麗に宙を舞っていく。

ザラブ「ぎゃあああああああああ!!!!!!」

そしてそのまま技名どおりにお星様となって昼間の空に輝きを放つ



怖に震えていると誰かが来たらしくチャイムが鳴った。来客はなんと……えりかだった。

琢磨「……ゴメンなさいっ!!!!!!!!!!」

琢磨は途端に土下座して謝った。えりかはそれを見てドヤ顔をしながら頷いている。

えりか「……もういいって」

琢磨「は、はいっ!!!!!!」

琢磨の姿を見て大人と傑は琢磨がどれだけひどい目にあっただかを想像するのも恐ろしかった。

大人「……じゃあ、俺達はこの辺で(汗)」

傑「お邪魔様でした」

2人は逃げるように帰っていた。琢磨の静止する暇も与えてくれ無いほど高速でありまるでクロックアップのごとく迅速であった。

琢磨「あ、あわわあわわ」

琢磨はこの後何をされるかと思うとこわくてしょうがなかったが……。

えりか「ったく。あの2人も気を使わなくてもいいのに」

そう言つと何やらキーキの箱を取り出すえりか……琢磨はそれを見たとたんに緊張が解けた。

琢磨「……はあ」

えりか「何よ？また苛められるとでも思ったの？」

琢磨「だ、だつてえよあ(汗)」

えりか「もういいって言ってるでしょ？……ほら一緒に食べよう」

琢磨「は、はい……」

琢磨はえりかのいう事を黙って聞く事にした。今回の琢磨の珍事件はその後……大人達の間では伝説となったのだった。

そのころのあの3人組は……。

ザラブ・チャリジャ・ヒマラ「ぎゃあああああああああああああ





第51話「ザラブの罠・・・ニセえりか参上!」(後書き)

カオスすぎる・・・

えりかファンの方コメント下さい!!--!

今回は傑&いつき編です。

では次回もお楽しみに

第52話「真夏日の空夢―前篇―」(前書き)

\*今回もカオス回となっております・・・苦手な方はご注意ください。

## 第52話「真夏日の空夢―前篇―」

えりかによって琢磨がボコボコにされてミイラ男となった日の数日後には準備が完了し大人達一行は夕が予約したペンションへとはるばる向かっていった。その場所は電車で2時間ほどの場所でありペンションの近くに海と山があり遊ぶには正に天国と言ってもいいほどであり普段の町の生活で曇った心が癒されるかのようだった。

大人「ん〜っ〜っ・・・風が気持ちいいねえ〜」

琢磨「だなあ。凄く気持ちがいい」

傑「同感」

荷物を持ちながら大人達3人は山と海から吹いてくる風を身体にい浴びて伸びをするとすがすがしい気分になった。ウルトラマンになつてからこんなに心が休まる日などなかった。キリエル、バルタン、ドクタークレイズ、地球解放軍・・・そしてそのすべてを束ねている闇の支配者ダークとの闘いでギリギリの闘いをプリキュアや仮面ライダーフェアリーと言う仲間パートナーと共に戦ってきたから無理はない。

つぼみ「本当ですね！！。ふう〜空気が美味しいです」

つぼみが3人と同じように伸びをしながら空気を腹いっぱい吸いこんでいく・・・するとえりか達も荷物を持ちながら自分達に近づいてきたのが見えた。

夕「なあ〜に物思いにふけてんのよ？折角来たんだし思いっきり楽しもうよ！！！」

そしてその秘密が彼女達にはれるのではないかと恐怖もしながら日々を過ごしていた事も3人の心に大きな重圧プレッシャーとなつた事も紛れもない事実・・・常人ならばとてもではないが耐えられない重み・・・そんな事を考えていると夕の言葉で現実に引き戻される3人・・・この夏休みぐらいタツプリ楽しみもうと3人は荷物を持ってペンションへと向かう。

大人「つ、ついたあゝ」

駅からは少し離れていたもので20分程度歩いた一行。蝉の声が山から響き海からは潮の音が聞こえてくる。一行は荷物を部屋に運ぶとまずは貸しペンシヨンの掃除だと備え付けの掃除道具を使い掃除を始める。

琢磨「安い理由が分かった気がするかも。まさか掃除まで俺達ができるなんて」

安さの理由は利用契約にあった。なんと此処の掃除は借主が全て行うものであったのだ。そうとなれば安くせざるを得ないしそこまでさせておいて高かったら誰も利用などするわけがないのだ。全員部屋の隅々を掃除したまりにたまった埃や塵などの汚れを掃き取る。そしてその後1時間もすれば粗方は綺麗になった。

傑「だいぶ綺麗になったな。ふああゝ眠い」

9人がかりでペンシヨン中のあらゆる場所を綺麗にしたのでかなりの重労働であったために疲労もそれなりに溜るし傑はこのキャンプの準備をしていた事もあり前日は寝不足であった。

大人「傑、お前寝てないのか？」

傑「ああ。ちよつと大学のレポートやゼミ論文とかを一気に片付けてたからな。若干、寝不足気味だよ。」

徹夜で論文とレポートを片づけた傑はかなり眠気がしんどかった。

・電車の中でも思わず熟睡してしまうほどだった

傑「やばい。ホントにしんどい」

大人「大丈夫か？しんどのなら部屋で休んでろよ。夕食の買い出しは俺達がしてくるからさ」

傑「すまん。頼めるか？」

思わずフラフラになってしまう傑。そんな彼に気を使ったのか大人、つぼみ、夕、琢磨の4人が今夜と明日以降の食糧、その他の生活必需品を近くのスーパーで買い出しを行うことになり残りは留守番と言う事になった。

傑「じゃ、俺は少し昼寝するよ。何かあったら起こしてくれ

「いつき・えりか・アンナ」はあゝい  
ゆり「ご飯が出来るぐらいには起こすからゆっくり休んでおきなさいよ」

迷わず傑は割り振られた自分の部屋のベットに直進してそのままベツトに転がり込んでいく。そして深い眠りについていくのだった。・

ザラブ「んふふふ・・・」

ヒマラ「おいザラブ・・・本当にオフ中の奴らを襲うのかよ？」

全く同じ頃にえりかにパンチで飛ばされたザラブ率いる例の漆黒の翼の一行も大人達が旅行に出かけると言う事を知ってコソコソとついて来たのだった。

チャリジャ「しかしこのまま帰ったらまたダーク様に怒られるぞ・・・今度は電撃3時間だけでは済まされん(汗)」

ザラブ「そうだ・・・我々が幹部になる為にも手柄を立てて置かねばならんだ!!!・・・それに今回は秘密兵器があるのだ!!!」  
ヒマラ・チャリジャ『秘密兵器?』

ザラブが取りだした兵器・・・もとい何かの機会のようであったそれは一体何なのだろうか?

傑「・・・あれ?此処は・・・何処だ?」

気がつくと傑はペンションの外にいた・・・目の前には綺麗な青い海が広がっている・・・さっきまで自分はペンションのベットで眠ろうと思っていたのに・・・周りをしてみると後ろから聞き覚えのある声がしてきた。

「???」傑うゝ!!!」

傑「???いつき・・・か?」

振り返るとそこには五木の姿があった。いつもの彼女の姿が・・・



いつき「実は明堂院家には古くからの伝統があつて……結婚する際には明堂院家が出す試練を制覇しないとイケないんだ」

傑「試練？」

まるでよくある漫画のような展開に戸惑いが生まれる傑……まさか本当に現実でこういうことがあるなどは思いもしていなかったから無理はないだろう。しかし傑だつていつきの事を想っているのは同じ事……こうなれば試練だろうが何だろうが受けてやると心に決めた。

傑「ふうん……試練だろうが何だろうが受けて立つてやる……で、その試練とやらは何処で受けなければいいんだい？」

いつき「実は明堂院家には古くからの伝統があつて……結婚する際には明堂院家が出す試練を制覇しないとイケないんだ」

傑「試練？」

まるでよくある漫画のような展開に戸惑いが生まれる傑……まさか本当に現実でこういうことがあるなどは思いもしていなかったから無理はないだろう。しかし傑だつていつきの事を想っているのは同じ事……こうなれば試練だろうが何だろうが受けてやると心に決めた。

傑「ふうん……いいだろうを受けて立つてやる……で、その試練とやらは何処で受けなければいいんだい？」

もう覚悟は決まった。此処で逃げれば勇気を振り絞ってくれたいつきに申し訳が立たない。どんな試練だろうが何でも受けてやるうといつきに強い視線を送る。

いつき「そう言ってくれると思つてたよ。じゃあ皆には内緒で希望ヶ花に戻ろう」

傑「分かつた」

怒涛の急展開となつてしまった。2人は旅行中ではあるが最早そんなことなどどうでもよくなつてしまった……とりあえず2人は急いで希望ヶ花市にまで戻ることになった。

2時間ぐらいかかるのでついたのは夕方6時ぐらいと言つたとこ



るだ・・・そのまま2人は明堂院家に足を運んでいく。

傑「（一体どんな試練があると言うのだろう？）」

明堂院亭に入るとその中はかなり広くて庶民からすれば小さいお城のようにも思えるほどだ・・・とりあえず先に進もうと2人は歩き出す。

????『フハハハハハハハハハハッ！！！！！！！！』

しばらく歩くと突然笑笑い声が聞こえてきた

傑。いつき「!?」

突如してきた声の主の正体を探す・・・。すると何処からか2人組が現れた。1人は赤いカブトの仮面もう1人は青いクワガタの仮面をしている・・・まるでカブトとガタツクのようであった。

????1「来たようだな・・・明堂院家の試練を受けるものよ」

????2「先ずは我々が相手をしよう」

傑「試練つて戦いかよ（汗）・・・ていか誰だ貴様ら！！！」

仮面戦士達「我々は血統でいうならばいつきの義理兄に当たるものだ・・・貴様がいつきが惚れたという男か？」

傑「だったら何だ？ていうか・・・試練つてまさか・・・」

まさかと思いつついつきのほうを見る傑・・・

いつき「そう・・・私と傑が協力して四天王達を全員倒さないといけないの・・・受けてくれる？」

いつきは済まさなそうにそう言う。本当はこんな事したくはない・・・。だけどそうしなければならぬらしい・・・。傑は一度ため息をつくといつきに笑みを返す。

いきなり現れた謎の2人組・・・どうやら試練とは四天王ポジションのような輩と闘わなければいけないようだ。

傑「まるで漫画だな・・・いつき、行くぞ！！！」

いつき「はい！！！」

もう今更迷っていられるかと傑は持ってきていたライダーベルト、いつきはパヒュームを取り出す。

傑「変身!!!」

いつき「プリキュア・オープンマイハート!!!」

そして2人は変身し戦士の姿となる。仮面の2人は変身し終わった事を確認すると……

カブト仮面の男「行くぞお!!!」

クワガタ仮面の男「貴様の實力溜めさせてもろうか!!!」

変身し終わると同時に2人の男がダークカブトとサンシャインに向かって走り出すがすぐに応戦するべくダークカブトはクナイガンでサンシャインはタンバリンを取り出し応戦を開始する。

ダークカブト「はああっ!!!（この手ごたえ何処かで……ていうかこのカブトの仮面ってアイツにそっくりだ）」

ダークカブトは赤いカブト仮面の男のと戦いながら何処かがアイツに似ているとふっと思う。まさかな? ……やつが……そう思いながらもクナイガンで男の身体を斬りつける……が

カブト仮面の男「はああああっ!!!」

ダークカブト「グオっ!？」

男はクナイガンを弾くとそのままダークカブトに数発パンチを入れて彼を吹っ飛ばす。地面に転がってしまふ……ダークカブトはすぐにクナイガンの射撃で攻撃するが紙一重で避けられる。

ダークカブト「は、早い!？」

サンシャイン「はあああああっ!!!」

クワガタ仮面の男「でやああああああっ!!!」

その頃サンシャインはというと青いクワガタの仮面を被った男と格闘線で戦っているところだった。一進一退の攻防でありお互いに優勢を取ろうと譲らない。

サンシャイン「はあ、はあ、はあ……強い!!!（でも、この戦闘スタイル何処かで見覚えが）」

クワガタ仮面の男「……」

この男もカブト仮面の男と同じ戦闘スタイルが誰かに似ている……

・サンシャインはそう考えながら戦いを続けるが中々相手が隙を見せる事がない為思う様に進める事が出来ない。

ダークカブト「このままじゃ埒が明かないな・・・サンシャイン、俺に1つ手があるが・・・乗るか？」

サンシャイン「作戦でも思いついたの？」

ダークカブト「ああ、成功する確率は五分五分といったところだが多分大丈夫だ・・・いいか、やつらが攻撃を仕掛けた瞬間に・・・」

このままじゃ時間だけが過ぎていく・・・だが1つだけ一気に決着(ハケリ)をつけれる方法を思いついたのかダークカブトはサンシャインの耳元に顔を近づけて作戦の概要を説明する。

カブト仮面の男「何を考えているか知らないが我々を簡単に倒せると思わない事だな」

クワガタ仮面の男「黒いカブトの男よ・・・貴様は所詮その程度の器だったと言うことだ」

そんな2人の考えなど知る術もないまま勝気なまま向かっていく。

カブト仮面達は2人が何かを仕掛ける前に一気に決着(けり)をつける気がしい。

ダークカブトは身構えながら仮面男達がどう来るかの様子を伺う・・・

・チャンスは一瞬・・・黒点の太陽と黄金の太陽の技を一気に叩き

こんでいく事さえできればあの2人をも葬り去ることもできるはず・・・

カブト仮面の男「終わりにしてやる」

クワガタ仮面の男「ふふふふ」

2人の男はまるでクロックアップのごとく動き始める・・・だが光速移動をする相手との闘いはもうかなり慣れたもの・・・今更驚くことなどなくダークカブトとサンシャインは動きを見極めるように目で動きを追う・・・そして仮面男たちは同時に2人に飛びかかる・・・が。

仮面男2人「何っ!!?」

仮面男の攻撃が当たる前にサンシャインとダークカブトの姿は消えていた。戸惑う2人に向かって金色のヒマワリ型の光弾が2人の身体を拘束する。

ダークカブト「まんまとハマったな?」

サンシャイン「思惑通り・・・って言ったらちよつと卑怯かな?」

ダークカブトは勝ち誇ったような声で2人の前に姿を現した・・・その後ろにはサンシャインがシャイニータンバリンを構えた姿があった。

カブト仮面の男「う、動けん?・・・」

どんなにもがいても動く事が出来ない仮面男達・・・その間にダークカブトとサンシャインは2人に向かっていく。

ダークカブト「攻撃を仕掛けられる瞬間に俺とサンシャインはお前達の攻撃範囲から脱出、その後距離を確保してサンシャインのワールドフォルテバーストを発射したと言うことだ」

クワガタ仮面の男「わずかな間に此処までの連携を見せるとは・・・

」

カブト仮面の男「割れ話の負けか・・・」

仮面男たちはこの状況で勝ちを取ることは不可能と判断したのか下を向いて抵抗を止める

ダークカブト「あっさりだな・・・じゃあ俺達は先に進ませてもらおうか・・・サンシャイン」

ダークカブトはもういいだろうとフォルテバーストを消滅させる。

2人の男は潔い態度で仮面を外す・・・その素顔は・・・

ダークカブト「!!???」

なんと大人と琢磨にそっくり・・・いや瓜二つと言ってもいいだろう・・・あまりの出来ごとにダークカブトの仮面の下にある傑の顔は開いた口がふさがらないという感じになっているのは言うまでもないだろう・・・

大人と瓜二つの男「さあ先に言っただけ・・・我らはお前の力量

を見させてもらおう・・・」

琢磨と瓜二つの男「ふん」

何やらとんでもない展開となってきたが・・・今後は一体何が待っているのだろうか？

第52話「真夏日の空夢―前篇―」（後書き）

更新が遅れてすみません。

大学が夏休み中で実家の事業の手伝いで時間がなかなかとれなくて  
どうしても時間がかかってしまいました・・・

次回も傑いつき編となります・・・ギャグが出来るか心配だけど  
・・・

ではでは次回もお楽しみに

## 第53話「真夏の空夢―後編―」

3人組の宇宙人軍団はつかの間の休みに心身を癒している傑達の影にいる。・・・ザラブは何やらラジオサイズの機械マシンを持っているザラブ「ぐふふふつ」

チャリジャ「此処が奴らが借りてる宿か？」

ヒマラ「奴ら案外広いの借り手やがる・・・俺達の宇宙船よりも広いんじゃないか？」

案外大きい貸しペンションに思わずヒマラはそう呟く。この3人組は懲りずに何を考えているのだろうか？

ザラブ「よし、では手筈通りにオペレーション・ノンスリープ睡眠打破作戦を開始するぞ」

チャリジャ「・・・本当にうまくいくのかよ？」

ラジオサイズの機械をもったザラブが先頭に2人に指示を出す。チャリジャはザラブの案が成功するかは正直信用し難かった。現に前回はザラブが変身して琢磨アースをだました言いが本物の登場マリンによってあつという間に正体をばらされた揚句また昼間に輝くお星様となつてしまったから心配であるのは仕方あるまい。

ザラブ「黙らっしやい。今度こそは必ず成功する!!!」

ヒマラ「(ホントかよ)」

何処からか出てくるのか分からない自信にヒマラが心の中でそうツッコミを入れる。

ザラブ「では透明迷彩作動!!!」

3人は腰につけていた迷彩機能ステルスを持つ機会を始動させると姿が消える。そして貸しペンションへと足を忍ばせていく。

傑「・・・大人達・・・だよな？」

いつき「傑？」

仮面2人組を倒した傑といつきであったが何やらすつきりしない・・・ああの2人の正体がまさか仲間であるはずのあの2人・・・のそ

つくりさんだつたとは。・・・何かがおかしいと傑は疑問視し始めるがその傑にいつきが声をかけてきたので思考は中断してしまう。

傑「ん？・・・ああ、何でもない」

何やらすつきりしないまま先に進む傑といつき・・・しばらく歩いていくとまた大きい扉の前についた・・・「いつきの家ってこんなに異様な広さだったけっ？」と傑は思うが。

傑「ま、まあいいか・・・開けよう」

扉を開けるとまた広い広場のような場所が広がっている・・・何やら嫌な予感しかしないと思っていた傑だったがその予感的中することとなった。

「???」おーほほほほほほほほっ!!!!!!!!!!!!!!」

傑「・・・」

やっぱりフラグだったのかと傑は少し呆れたように溜息をついた。

声からして女であると言う事は分かったしもしかしたらあの2人組かと推測も立ってしまった。身形は先程と同じく仮面を被った姿だった。今度はピンクとライトブルーという何処かで見事ある2人組のパーソナルカラーと同じ・・・傑はまさかなと思うのだったがその予想は的中することとなった。

謎の仮面少女ズ「ここを通りたければいつきの妹である私達二人・・・大地と海に咲く可憐な花シスターズを倒していきなさい!!!!!!」

突然現れたピンクの花と青い花の形のような仮面をかぶった2人の少女が現れた・・・この声、そしてあの背格好・・・あの2人しか考えられなかった・・・あからさまの事に普段は冷静の傑も傑は思わず興奮した様子を見せながらもすごい剣幕で口を開いた。

傑「お前らつぼみとえりかだろうがーっ!!!!!!!!!! ついでにさっきの二人も大人達だろうが!!! なんだ、そんなに俺の恋路を邪魔したいのか? というかなんなんだこの試練わよ~~~~!!!!!!」

だんだんと傑も何が何だか理解できずらしくないツツコミを入れてしまう・・・というか明らかにつぼみとえりかだと分かってしまっているだけにツツコミを入れずにはいられないので無理もないかも



しれない・・・

傑「ええ〜い！！こうなりや何でも来い！！」

いつき「ちょ、傑！！」

もうこうなったら自棄だ<sup>やけ</sup>と傑はゼクターを呼び出してダークカブトに変身する。いつきも急いでサンシャインに変身していく。

ダークカブト「もう一気に片付けてやる！！！」

電子音「CLOCK UP」

こうなれば開幕一気にクロックアップを決めるとベルトの腰の部分のスイッチを勢いよく叩いて起動させると一気に間合いを詰めるとすかさずゼクターのフルスロットルスイッチに手を伸ばす。

電子音「ONE、TWO、THREE・・・」

ダークカブト「ライダーキック」

「RIDER KICK」

そのまま下段回し蹴りを叩きこんでいくダークカブト・・・だったが紙一重で2人の姿はまるで蜃気楼のごとく歪んで消える。すぐに辺りをダークカブトは確認するが何処にも姿は見えない。

ダークカブト「何処に行った!?!」

必死に探すダークカブトの前にピンク仮面の少女が現れたかと思うとそのままダークカブトに回し蹴りを返す。

ダークカブト「だ、なんつースピードだ」

ダークカブトは驚愕する。クロックアップは光速の領域でありこれに対抗できるのはダークカブトと同じマスクドライバーシステムまたはその基礎となっている怪人ワームでしか対抗手段はない・・・ある1つの手段を除いては。

ブルー仮面の少女「驚いた?」

ダークカブト「まさか・・・レッドの種? (だがアレはプロッサム達プリキュアでなければ使えないはず・・・ま、まさかこの2人は本当に・・・)」

もしも仮に目の前にいる少女達がつぼみとえりかとか何か関連性があるとしたらパヒュームのレッドの種以外は考えられなかった・・・

だがそれを使う仕草すらあの2人は見せていない……まさか最初からダークカブトがクロックアップを使う事を予想していたとでも言うのか？

ピンク仮面の少女「まだまだ行きますよお！！！！」

追撃の攻撃を緩める来なく当然放つていくピンク仮面……ダークカブトは序盤から流れを掴まれる苦しい戦いとなってしまった。ライダーシステムのスペックではあの2人以上である筈であるのに……ダークカブトは冷静さを装いつつも動揺は隠せないのか防戦一方となってしまう。

サンシャイン「ダークカブト！！！！」

サンシャインは見ていられないとピンク仮面少女をつけ放す。

ダークカブト「さ、サンシャイン……」

サンシャイン「落ち着いて。貴方らしくないよ……こんなに我武者羅な戦い方なんて」

ダークカブト「っ！！」

確かに今の戦い方はダークカブトもとい傑らしい戦い方ではない。焦りからか冷静さがなく分析力が欠如している……ダークカブトはサンシャインの言葉に目が覚めたのか一度クナイガンを取り出す。そして黄色い目を光らせる。

ダークカブト「サンシャイン……ありがとな。お陰で目が覚めたぜ……俺は俺らしく……な」

ピンク仮面&ブルー仮面「!?」

仮面少女達はないやら異様な空気を出してきたダークカブトの様子に驚くが何か仕掛ける前に一気に片付けてやると2人同時に前に出るが……。

ダークカブト「ダークネス・ソードブレイカ」

ダークカブトは静かにそう言い2人の少女を斬りつけた瞬間に黒い閃光が放たれる。その様はまるで侍が敵を一閃するかのようにもすごいスピードとテクニカルな技……それにより2人の仮面少女はその場に膝をつき咳を込む

ピンク画面の少女「ぐふう!?!」

ブルー仮面の少女「がはああ!?!」

突如限界突破したダークカブト・・・変身者の傑は何かに覚醒したのか?

ダークカブト「・・・ただ単に気力を集中させた・・・それだけだ」  
ピンク仮面少女「何故トドメを刺さない?」

そう言うときナイガンを収めるダークカブト・・・ピンク仮面はそう問うた。するよダークカブトは落ち着いた口調で答える

。今の彼女たちに反撃の力などは残されていない・・・仮面少女達は立ち上がると仮面を外した。やはり外見はつぼみとえりかと売り2つであったが・・・別人ということらしい

ダークカブト「(一体どういうことなんだ?・・・どうしてこんな茶番が・・・これ本当に現実なのか?)」

ダークカブトは次第にこの事態に疑問を抱き始める・・・本当に今のこの状態はハッキリ言ってカオスすぎる・・・これは本当に現実なのだろうか?

その後には何とゆりやアンナ更には加々美新と瓜二つのそっくりさんまで登場すると言う展開が待っていた・・・

傑「・・・(もう何が起きてても驚かなこれは)」

殆どわけのわからない事になってきているがとにかく次がラストだと言ふことらしいが・・・扉を開けた先には誰もいなかった・・・いや1人神父のような格好をした天道総司がいた。

傑「つ、次は・・・神父?」

最期の最後で大玉が来たなと傑は身構え始めたが

神父「待て、お前の相手は俺ではない」

傑「はい?」

神父が相手ではないと言う事は・・・不意に後ろを見るといつきはいつの間にかサンシャインに変身しているのだった・・・傑はまさかと思いきや汗をかく。

いつき「最後の相手は・・・私だよ」

傑「は、はい！？」

ウソだろうと傑はかなり戸惑う。彼を落ち着かせる為にいつきは説明に入った。

いつき「最後に相手を見極めるのは・・・私自身の役目なの。それは・・・分かるよね？」

傑「・・・そう言うことなら避けられない・・・よな？」

そう言うことならもう何でもやってやると傑はゼクターを呼び寄せそのまま装填し最期の変身を行う。

ダークカブト「行くぞサンシャイン！！！」

サンシャイン「いつでもいいよ！！！」

漆黒の太陽と黄金の太陽の闘いが始まった。先ずは小手調べだと2人は突進して拳と拳をぶつけ合う・・・周りにはものすごい衝撃波が放たれていき力では互角の鏝迫り合いになりそうだ。

サンシャイン「やるね・・・私が鍛えた甲斐があるってもんかな？」

サンシャインは不敵に笑みを浮かべてうれしそうにそう言った。いつきが傑を強制的に鍛え上げた甲斐はあったというものだろう。

ダークカブト「ああ。誰かさんに散々苛められた成果かな？」

ダークカブトはサンシャインのセリフにそう言い返す。元々は体力がなくそれが弱点であったが今となってはそれはいつきとのトレーニングで完全に克服し体術もかなりレベルアップしている・・・今は技は互角とらないが力では傑が有利であるところになんてなった。サンシャイン「・・・それって嫌味？」

ダークカブト「バレた？」

ダークカブトの嫌味にそう聞くサンシャイン。声は穏やかであるが表情は真剣そのものであり2人は拳の鏝迫り合いを一度止め離れる。離れたその瞬間ダークカブトはクナイガンのガンモードを構えサンシャインに射撃の嵐を見舞わせてやる。だが当たる瞬間にサンフラワイージスで全て弾かれてしまう。

ダークカブト「ちっ・・・やっぱり遠距離は通用しないか」

遠距離はサンシャインには全て弾かれてしまう・・・攻守一体スタイルの彼女の攻略法・・・何かある筈だとダークカブトはフルに頭を回転させて考える。

サンシャイン「言うまでもないと思うけど今更クロックアップなんか通用しないよ？・・・分かってるよね？」

3年前のワームとの戦いでプリキュア達にも光速移動クロックアップの対処法は考案済みであるから今更それで彼女を攪乱することなどは出来はしない事は分かっている。しかしどんな相手でも必ず弱点はある筈だと傑は必死に思考を集中して考える・・・何かある筈だと。

ダークカブト「(サンフラワイージスは正面からの攻撃は通用しない・・・だがあの技にも死角はある!!!)」

ダークカブトは一か八かの賭けに出ることにする。成功する確率は高いがサンシャインの動き次第でそれは変わってくる・・・だが試してみる価値はあるとキヤストオフシマスクドフォームからライダーフォームに変わる。そしてクナイガンの連続射撃をサンシャインに向かつてもう一度放っていく。

サンシャイン「サンフラワー・イージス!!!」

当然サンシャインはそれを全て防御する。土埃が舞い視界が悪くなる・・・しばらくすると土埃がおさまるのだがその目の前からダークカブトの姿が消えていた。

サンシャイン「っ!?!」

まさかと思いサンシャインは真横口向くとそこにはダークカブトがクナイガンの銃口を額に向けている姿が見えた。

ダークカブト「・・・パン」

作戦は見事に成功した。土埃で視界を悪くさせたことでサンシャインの注意を前方に引き付けたその隙にクロックアップでサンシャインとの距離を縮めたのだ。ダークカブトはクナイガンの引き金トリガーに手をかけていつでも発射できる状態であるのでサンシャインは下手な動きは出来ない・・・勝負はどうやらダークカブトの作戦勝ちに終わったようだ。



えりかは先日 of 恨みがあったのだろうか3人を開いている窓から思  
いつきり投げ飛ばしてやった。

「????」す・・・

傑「?」

「????」すぐ・・・

傑「う、うん・・・」

何処からか声が聞こえた。傑はとりあえず目を開けてみる・・・する  
と何やら心配そうになっていたいつきが目の前にいたのだった。

傑「ん?あれは・・・夢?」

傑は頭がボーとするなか傑は自分に起きた事を整理し始める・・・  
自分はこの部屋で仮眠を取っていた・・・つまりはいつきと結ばれ  
る話は・・・夢?

傑「いつき、聞いて言いか?・・・俺は今まで何をしていたんだ?」

傑は確かめるにはいつきに問いただすのが一番早いと思ったからだ。  
いつきはわけが分からないがすぐに答え始めた。

いつき「何をしていたって・・・ずっとこの部屋で昼寝してたよ?..  
..どうしたの?急に」

傑「い、いや・・・その実はな・・・」

傑はいつきに自分が見た夢の話語り始めた・・・そして衝撃の最  
後の事も。

いつき「僕と傑が結婚!?・・・それで衣装がボクが花婿で傑が花  
嫁衣裳だった?・・・ふふふふ・・・あははははははっ!!!!」

いつきは思わず笑い出してしまった。そんなあり得ない夢の話を見  
いたら笑うしかないだろう・・・

傑「わ、笑うなよ!!!・・・マジで俺だったビビったんだからな  
傑は笑ういつきにそう不機嫌そうに言い返した。あんなあり得ない  
事はやっぱり夢であったと内心ほっとしてはいるが・・・もしも夢  
みたいなことになったらと冷や汗を浮かべるのだった」

第53話「真夏の空夢―後編―」（後書き）

やっぱり私にはギャグは向いていないかも……  
次回はゆりアンナの姉妹編です

ではでは次回もお楽しみに



## 第54話「父との再会―幽霊珍騒動―」

傑の夢落ち騒動から時間はあつという間に流れていき大人達一行はつかの間の休暇を楽しんでいた。腕の海で泳いだりスイカ割りや波乗りえりか主催のフアッションショー更には怪談話と色々な事をした・・・そして今夜は・・・。

大人「今日はいよいよ・・・肝試し大会やるぞおおっ!!!」

今宵は夏最大のイベントの1つである肝試し大会をペンション近くの山でやるうと言ったことになったのだこれを考案したのは琢磨でありお化け役となっているのは・・・なんと男性陣全員であった。

つぼみ「ほ、本当にやるんですかあ!？」

えりか「つぼみ、もしかして怖いの？」

つぼみは幽霊の類は苦手であり肝試し大会は正直やりたくないものであった。だがえりかが後ろからつぼみに抱きつきからかい始める。

つぼみ「ひっ!?・・・べ、別に怖くなんてないですよ!!!」

大人「(つぼみ・・・強がりかバレバレだ)」

大人はつぼみの強がりがすぐに分かった。これから自分達がおばけ役となつて盛大に脅かす事になるのだが大人は少し申し訳なくなるのだった。

琢磨「よし、じゃあ俺達はお化けトラップを仕掛けてくるから・・・合図が出来たら連絡する」

そう言うとき大人、琢磨、傑の3人は先に山に入る。夜の山の森林は昼間と違い禍々しく嫌な雰囲気を感じている・・・本物のお化けが出てきそう女子陣はゆり以外冷や汗を浮かべるのだった。

そして10分後になるとトラップがしけか終わったと連絡が入ったのでじゃんけんでつぼみ達は2人ひと組のペアに分かれる。

最初のペアはつぼみといつきとなった。

つぼみ「・・・(い、嫌だなあ〜こういうの)」

いつき「つぼみ、顔真っ青だけど大丈夫？」

つぼみ「だ、大丈夫です!!!」

明らかに顔色が真っ青なつぼみにいつきがそう声をかける。つぼみは身震いをしながらも先に進んでいく。すると草むらがガサガサと音がした。

つぼみ「ひつ!?・・・い、今のは？」

いつき「風・・・じゃないよね？」

つぼみはともかく流石のいつきも恐さゆえに声が震えている。恐る恐る2人は草むらに近づいていく・・・と

???「グオオオオオオオオオオ!!!!!!」

つぼみ・いつき「ぎゃああああああああ!!!!!!!!!」

なんと草むらから狼男の仮面をかぶった誰かが出てきた。唸り声に  
つぼみといつきは抱き合って悲鳴を上げる。そして大急ぎで逃げる。  
つぼみ「いやあ~~~~っ!!!!!!・・・来ないでえええええっ

~~~~~」

いつき「ちょ、つぼみ、待つてえええ~~~~っ!!!!!!」

つぼみは半泣きになりながらもすごい勢いで狼男から逃げる。いつきもパニックになっているのか大慌てで逃げる。2分・・・突  
然目の前に人影が見えてきた。

つぼみ「あ、あれは・・・人？」

大人(????)「よお!!!つぼみ、いつき」

つぼみ「大人?・・・よ、よかつ・・・」

いつき「・・・」

声の主は大人・・・だったのだが彼の顔は・・・なんと!!!

大人「大丈夫かあ~~~~!？」

懐中電灯で照らしたその顔には血まみれとなっていた・・・勿論メ  
イクで造ったものではあったが、つぼみといつきの顔は一気に血の気  
が引いたように真っ青になった。

つぼみ・いつき「い、いやあああああ~~~~~~~~っ!!!

!!!!!!!」

大声を上げるとまわれ右で2人は後ろに走り出すが狼男が前から姿を見せると挟み撃ちとなつてしまった。

狼男「ガオオオオオオツ!!!!!!!!!!」

血まみれ大人(?)「何で逃げるんだよお~~~~?」

つぼみ「あ、あわわわわわわあ!!!!!!!!!!」

いつき「ひい~~~~っ!!!!!!!!!!」

挟み撃ちとなつてしまった事で完全にパニックになつてしまった2人だが本能だけは健在であり完全に逃げ道がなくなる前に2人は別の方向に全速前進で走っていく。すると今度は前から包帯グルグル巻きのミイラ男の姿が。

ミイラ男「ウオオオオオオツ!!!!!!!!!!」

つぼみ「ぎゃあああああああつ!!!!!!!!!!」

いつき「か、囲まれたあ!!!!!!!!!!」

3人に取り囲まれてしまったことととうとう2人は逃げ道がなくなつてしまう。パニックと恐怖で2人は既に半泣き状態になっている。。

オオカミ男(?)「ははははっ!!!!!!!!!!。。。そんなに怖がってくれ」と企画したかいがあるな」

ミイラ男(?)「だが。。。すこしやりすぎたか?」

もうそろそろいいだろうと思つたのか吠えるのをやめるとオオカミ男とミイラ男はその場に立ち止まると狼男は顔のマスクをミイラ男は包帯を外し始める。。。ミイラ男は傑、狼男は琢磨であつた。正体を知つた2人はとたんに態度が一変する。

つぼみ・いつき「3にん共お~~~~っ!!!!!!!!!!(激怒)」

つぼみ「冗談が過ぎます!!!!!!!!!!」

いつき「女の子を虐めるなんて最低!!!!!!!!!!」

いつきはまだ落ち着いているが対するつぼみは最早泣きが入つていて3人に近づいてもう抗議タイムに入る。流石にやり過ぎたと3人は謹んで2人の意見を聞き入れる。

大人「ごめん、ごめん。。。ていうか言いだしっぺは琢磨だぜ?」

琢磨「お、俺のせいにするのかよ!?・・・お前らだってノリノリだっただろうがぁ!!!」

責任転嫁し始める大人に琢磨は猛反発し始める。そんな2人を置いておいて傑は2人に近づくと・・・

傑「なあ、次はお前たちもおばけ役・・・やらないか?」

つぼみ「え?」

いつき「ボク達も?」

傑「衣装は用意してあるから好きなのを選ぶといい・・・脅かされた分はタツプリと脅かしてやればいいだろう?」

何やら物凄く黒い笑みを浮かべている傑。つぼみといつきも最初は躊躇したがこれは面白いかもしれないとノリノリになって衣装を選び始めるのだった。

その頃。あの宇宙人3人組はというと・・・

ザラブ「きよ、今日こそは彼奴等（まがやうじ）に我々の怒りと恨みをぶつけてくれる!!!」

なんと大人達がいる山に大型の機械を持ってきていたのだ・・・この3人は懲りずに今回も大人達に奇襲をかけるつもりであるようだ。ヒマラ「なあ、これで本当に幽霊（ゴースト）なんて呼び出せるのかよ?」

その機械は銀河連邦のとある宇宙シヨツピングにて購入したものでありその機械の効果とは幽霊を呼び出し持ち主の思い通りに操れるというものであった。しかし宇宙でも幽霊なんてものはまだ未開拓の分野であり胡散臭さが隠せない。

ザラブ「心配するな!!!今から試せば問題ない」

チャリジャ「今から試すんかい!!!」

ザラブ「しっ!!!。静かにしろ!!!・・・誰か来たようだ」

ザラブのボケにチャリジャがそうツツコミを入れる。そんな会話をしているとな人の足音が聞こえてきたので3人は機械（マシン）を持って草陰に隠れるのだった。

えりか「さ、流石に雰囲気出てるなあ」

タ「うん。．．．ちよつ、えりか押さないでつて！！！」

えりか「だつて．．．夕さんこういうの得意でしょ？」

タ「得意じゃないつて！！！」

来たのはえりかと夕のペアであった。流星のえりかと夕も暗いのは逃げたてであるのかおっかなびつくりになりながらお互いにくっ付いた状態で進んでいた。ザラブ達はこの2人である機械<sup>マシン</sup>を試してみようと考える。

ザラブ「よし、スイッチをオンにして．．．先ずはオーソドックスに着物を着た女で行つてみようか。あの生意気なガキを泣かしてやる！！！」

ザラブはえりかにこの前殴り飛ばされた事を思い出すとあの時の借りを数倍にして返してやると思つているのか何やら声に怒りがこもつている。

えりか「つ、つぼみ達．．．大丈夫かな？」

タ「た、多分大丈夫じゃない？．．．いつきもいるし」

???「．．．や」

2人は何か会話しないと間が持たないらしく何でもいいから話を續いていく．．．だが突然声が聞こえると動きが止まつてしまう。

えりか「タ」

2人は顔を見合せながらも何が起きたのか気になつて動けなくなつてしまう。風が草や木の葉をなびかせて擦れる音が響いていくが静かすぎて逆に怖い．．．。

???「うらめしや」

えりか「い、今の声．．．」

タ「つ、つぼみ？．．．それともいつき？．．．い、悪戯にしちゃ性質が悪いよ！！！」

今度は確かに聞こえた。女の人の声だつたのだが恐怖で混乱して誰の声かわからない。夕は強気にそう言うが身体は少し震えていて明らかに恐怖が隠せていない．．．えりかは夕の後ろに隠れてしまつている状態だ。2人は声がした方向に近づいていくと其処にあつた

のは・・・。

????「うらめしやあ~~~~~っ!!!!!!!!!!!!」

着物の来た女の霊がいた。2人はその姿を見て氷のように固まってしまふ事3秒後・・・

えりか・タ「出たああああああああっ!!!!!!!!!!!!」

2人はそう言うのと半泣きになりながら大急ぎで走り去ってしまったのだった。

ザラブ「ふふふ大成功だな・・・これが逆襲じゃあああああ!!!」

大成功したことで機械マシンの能力は本物だとザラブ達は幽霊マシンを本格的に起動させるのだった。

その頃一番最後に山に入ったゆりとアンナはというと

アンナ「く、暗い」

ゆり「大丈夫よ。こんな子供だましなんだから」

アンナはそれなりに怖がっていたのだがゆりは流石にしっかりとしているようで全く怖がっていなかった。流石にメンバーの中でクールビューティー且つ戦士としての経歴が長い事はないようである。そんな姉の姿を見て頼もしそうにくっ付いているアンナ。

アンナ「強いなあ〜お姉ちゃんは」

まるで微動だもしないゆりにアンナはそんな姉を頼りにしているぞというかのように後ろに隠れながら前に進んでいく。

ゆり「？」

アンナ「どうしたの？」

ゆり「いえ、今・・・タとえりかの声が聞こえたような気がする・・・」

アンナ「タとえりかの？」

ゆりは突然立ち止まるよ耳を澄ませてそう言う。アンナは分からなかったがゆりは目が何か感じ取ったかのような目になっている。

ゆり「嫌な予感がする……この前の宇宙人たちがまた何かを仕掛けていたのかしら？」

アンナ「ま、まさか……いやあり得るかな？あの宇宙人ってなんかしつこいからね」

ゆりの予感は当たっていた。……その頃のザラブ達はというと・

・  
大人・琢磨・傑・つぼみ・いつき「いやあああああああゝゝゝゝゝつ！！！！！！！！！！」

大人達5人を襲っていた……というより幽霊たちに襲わせていた。

大人達はガイコツと鎌を持った死神に追いかけており全速前進で逃げていた。しばらく逃げていると大人達は何かにぶつかって飛ばされた。

大人「いつつ……一体何だ？……えりか、夕……どうしたんだよ？」

大人は前を見るとそこにはえりかと夕がかなり動揺した様子になっている……こちらもものすごく大変であったが何事だと思わずえりか達にそう聞いてしまうのだが直ぐにえりか達は大人達の後ろを指差した。するとガイコツと死神がすぐ傍にまで来ていた。

全員「ぎゃあああああああああつ！！！！！！！！！！」

全員パニック状態となり大慌てで逃げ始める。脅かしていた大人達も半泣き状態となっている。その頃ゆりとアンナと言うと……

アンナ「あ、アレって幽霊？」

ゆり「……」

流石のゆりも目の前に幽霊が大行進しているのを見ると信じ難い光景に動きが止まるが冷静さは削がれていなかった。すぐにこの状況を分析しようと頭を回転させるのだが幽霊たちの中に見覚えのある影が……

ゆり「あ、あれは……お父さん？」

なんとその正体は3年前に死んだ父の姿だった。ゆりは思わずその

霊のあとを追ってしまっ。

アンナ「お、お姉ちゃん!？」

珍しく動揺した姿の姉の姿にアンナも戸惑いながら彼女の後を追った。するとアンナにもそしてしばらく追いかけると2人の前に月影博士の姿がはつきりと見えるようになった。

月影博士「久しぶりだな・・・ゆり・・・そしてダーク・・・いやアンナ」

ゆり「お父さん・・・本当に貴方は」

ゆりは信じられなかった・・・3年前に死んだはずの父親が今目の前に姿を現しているのだから無理もないだろう。ゆりは再会した父と何を話したらいいか分からず口を閉じたまま黙ることしか出来なかった・・・

アンナ「お父さん・・・お父さん・・・なの？」

アンナも過去の記憶が蘇ってきた。3年前に一度命を失い消える寸前に父親が見せてくれたあの顔・・・優しさと哀しさが混ざった父の顔が・・・間違いない彼は自分の父親だ。

月影博士「成長したな。ゆり・・・とてもたくましくなったよ」

ゆり「はい。私は・・・大切な仲間とともに大切なこの世界を守るために・・・今日まで色々な事がありました。」

ゆりは自然と言葉が出てきた・・・今自分が守るべきもの。大切妹の事も・・・妹の事アンナを話すとアンナも自分の思いを語り出した。

アンナ「お父さん・・・今度は私むかし、お姉ちゃんや大切な仲間と一緒にいるよ。三年前とは違う。もう影ダイクフリキユアなんかじゃない・・・だから心配しないで」

今の自分は今もう闇の存在などではない。姉ゆりと共に光の戦士として戦っている。アンナの笑顔を見て彼（月影博士）も安心したのか安堵の表情を見せた。

月影博士「お前達2人がいれば仲間も安心だな・・・私はこれからもお前たちを見守っているぞ」

ゆり「ま、待って!!!まだ・・・話したい事が」



アンナ「お父さん!!!!」

月影博士はそう言って姿がだんだんと薄くなっていく。ゆりとアンナは思わず彼に近づいくが障る事は出来ない・・・煙を掴んでしまう様に手はすり抜けてしまう。

月影博士「私はお前達の心の中にいる・・・お前達が私を忘れない限り私はお前達の心で生き続ける・・・だから忘れるな」

最後に彼は屈託のない優しい顔を見せるとそのまま姿が消えていった。ゆりとアンナは彼が戻る姿をしつかりと見届けた。

その頃・・・ザラブ達はというと・・・

ザラブ・チャリジャ・ヒマラ「ぎゃあああああああああああああああ  
っ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

なんとこの3人も幽霊たちに追いかけられていた。機械が暴走し始めてしまったのだこの機械で出てきた幽霊は敵味方の判別がつかないと言う致命的な弱点があったのだ。

ザラブ・チャリジャ・ヒマラ「ぐおおおっ!!!!!!!!!!??」

そしてとうとうひたすら逃げ回る3人は同じく逃げ回っていた大人達と遭遇してしまう。

大人「あ、お前らあ!!!!・・・その機械は何だ!!!!!!」

ザラブ「あ?これは幽霊を呼び出す・・・っ!!!!!!!!!!・・・ヤバっ!!!!!!」

大人達全員「黒幕は貴様らかあああああっ!!!!!!!!!!!!!!!!」

ザラブ・チャリジャ・ヒマラ「ぎゃあああああああああああああああ  
っ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ザラブが思わずポロリと機械の事をばらしてしまったので大人達の怒りの鉄拳が3人に降り注がれたのは言うまでもないだろう。

ゆり「お父さん・・・」

その頃のゆりとアンナは先にペンションに帰っていたのだった。というのもアンナが父と別れに耐えられずに泣きだしてしまいそれを

宥める為に一度戻ったのだ。ゆりも思いを堪えながら泣きじゃくる  
アーナを落ち着かせる。

アナ「ひぐ……うう……。お姉ちゃん……。お父さんが行ってた  
言葉……。私一生忘れない」

ゆり「……」

アナ「私……。強くなる!!!お姉ちゃんみたいに……。誰にも  
負けないくらい」

ゆり「……。頑張りなさい。私も精一杯強力する」

今宵は月影姉妹にとっては一生忘れる事が出来ない1日となった。

彼女達は父に誓い誰も悲しませない戦士になると決意を新たにす  
のだった

第54話「父との再会―幽霊珍騒動―」（後書き）

ちよつと今回はシリアスを濃くしておきました・・・公式でも  
ゆりはお父さん子だったと思います。さて次回からは新長編スタ  
トでありウルトラの初ゲストも登場予定！！！！

では次回もお楽しみに

**長編予告「バルタンの大逆襲―地球総攻撃計画―」（前書き）**

今回が次回の長編内容の確定版となります。

概ねはこの流れにそろつと思いますが変更も十分あり得るのでご了承を。

## 長編予告「バルタンの大逆襲―地球総攻撃計画―」

?????1「われらの同胞の敵を取らせてもらおうか・・・プリキュア、そしてウルトラマン共よ」

ダーク「君達・・・復讐しようと言っのか？同胞の為に・・・」

ティガ「（青のバルタン？）」

バルタン（？）「フオフオフオフオフオフオフオフオフオフオフ！！！！」

突如現れる青い身体バルタン星人。その強さはこれまでの闘いで強くなったティガ達をも圧倒してしまう。

マリン「っ、強い・・・う、ウソでしょ？」

アース「アアア・・・（こ、このままじゃ・・・負ける・・・）」

絶体絶命の時・・・空から青い彗星がティガ達の前に現れバルタンの攻撃から身を守る。その彗星の正体は・・・。

ブロッサム「青い目の巨人？」

銀色の体色に青い目の巨人・・・彼は敵か？味方か？

つぼみ「貴方は？」

そしてつぼみたちの前に現れる青年。

????2「俺の名前は・・・パスワードと言っておこうか」

????3「そしてその相棒です!!!」

青年と共にいるバルタン星人の子供・・・彼らの正体は・・・

????1「貴様らのデータを取らせてもらおうか・・・わが宇宙恐竜が完璧に強くなる為に・・・」

????4「ギシャアアアアア!!!」

????5「・・・ピポポポポポ」

いつき「バルタン星人はどうしてあそこまで人間を蔑むんだい？」

????3「それは・・・バルタン星の過去にあります・・・ボク達の星が爆発してしまったことがバルタン星人にとっての明けない夜の始まりでした。」

語られるバルタン星の過去・・・バルタン達の抱える闇を聞いた大人達・・・そして同時に現れる黒い影

????6「アンタ達が光の巨人?・・・どれほどの力が見せてみなよ!!!」

大人「お前は・・・真夜!？」

真夜と瓜二つの漆黒の身を纏った衣装を纏った戦士コスチューム・・・彼女の正体と目的とは?フリキョア

????1「貴様ら下等生物に我らの気持ちがあつてたまるか・・・  
行けえ惑星サウリアの奴隷たちよ！！！！この美しき星を我れら  
の第2の故郷に！！！」

バルタンはサウリアから採取した怪獣たちを改造して誕生させた改  
造怪獣たちがバルタンの命を受け総攻撃を開始する。バルタンはそ  
のまま暴走し独断で地球を壊滅させようと目論む。

????5「ゼットン！！！」

そして解放される宇宙恐竜・・・果たして大人達はこの危機を  
乗り越える事が出来るのかあ！？

近日執筆開始予定！！！！

**第55話バルタンの大逆襲―地球総攻撃計画―？「青い復讐者と銀色の追跡者」**

今回より長編の始まりです。以前アンケートした怪獣たちも登場予定なのでどうかご期待下さい！！！！



## 第55話バルタンの大逆襲―地球総攻撃計画―? 「青い復讐者と銀色の追跡者」

宇宙空間にある巨大な戦艦がまっすぐに地球に向かってきていた・  
・戦艦は禍々しい雰囲気を放ちながら刺々しくシャープながらも巨大であった、全長は軽く500メートルを超えているだろうか? その戦艦は一度月の真後ろで止まる。

???1「行け、光の巨人を殺し我らが同胞の敵を討つのだ・  
・そしてこの美しき星を我らの第2の故郷にする!!!」

その号令を受けると戦艦の先端のドーム状の部分が開いていくと3つの緑色の光を放ったモノが地球に向かって放たれていく。この時はまだ誰も知らなかった・  
・その光の正体ともう1つの光の戦士次元を超えてこの世界にが向かってきている事も・  
・。

その数日後に大人達が住む地球では希望ヶ丘のとある廃業となった町工場から不気味な笑い声が聞こえてくると言う通報を地元警察が受理し所轄刑事が現場へと急行した。

刑事A「此処が連絡のあった町工場か?」

刑事B「ネコか何か入り込んだんじゃないかねえのか? ・  
・。つたく積まんねえ通報受けやがって」

一人は何処にでもいるような感じの刑事だがもう一人は明らかにやる気がなさそうな感じが見受けられる。2人は工場の中に入るとその中から物凄い異臭がしてきた・  
・。まるで虫の死骸が何カ月も放置されたような生物的な独特の臭いが。

刑事B「うわっ・  
・。なんだこの臭いは」

刑事A「虫の死骸のような臭いか? ・  
・。凄い臭いだな」

長居をしたら本当に体調がおかしくなりそうだ・  
・。さっさと調べて帰った方がよさそうだと2人は奥へと進んでいく。所々に謎の繭の残骸のようなものが転がっており異臭の原因はどうやらこれであるようだ・  
・。よく見ると繭は数種類あり羽化して古いものと中身が羽化してからまだそれほど時間は立っていないようなものもあっ

たのだった。そして暫くすると人間の成人男性程度の大きさの抜け殻のようなものを発見した。

刑事A「な、何なんだこれは」

真面目そうな刑事は今まで見たことのないその物体に戸惑った様子だった。しかもそのグロテスクな様に思わず吐き気が出てきそうになったそれを見てもう1人はだらしないと蔑んだ目線を送った。

刑事B「まったくだらしねえくな。しっかし通報があつた声の主はこの中身かもな・・・一体何だこいつは？」

この抜け殻はほんの数時間前に羽化した感じで辺りには体液のようなネバネバした液体が撒き散らされていて臭いも凄まじかった。この正体不明のその抜け殻をまじまじと見ていた2人であつたが突如その抜け殻の主が2人に迫っていたのはこの時は予想できなかっただろう

?????2「フオフオフオフオフオフオフオフオフオフオフ!!!  
!!!!」

突然笑い声のような声が出た来たので2人は辺りを見回した。これが通報のあつた声の主の正体であるのかと思つたその時上を見るとその主が2人に姿を見せるのだった。

刑事A「こ、コイツが声の正体か!？」

上を見るとそこには無数に分身している青い体色の巨大な鋏の腕となっているその異形な姿は以前見た事がある。

刑事B「こ、コイツはGUTSの仕事だな!!!!」

刑事は苦笑いしながらそう言った。2人は銃を取り出すとそれに合わせてバルタンが襲いかかってきたのだった。

バルタン(?)「フオフオフオフオフオフオフオフオフオフオフ!!!  
!!!!」

刑事A&B「うわあああああ~~~~~つ!!!!!!!」

2人の刑事の声と銃声がその日は響き渡った・・・そしてその翌日にはGUTSにも出勤要請が入り矢車と影山が調査を開始するのだつた。

矢車「……何だこれは」

廃工場の中には巨大な繭が数多くあった。羽化したのも最近である様で中身は湿っていて液体のようなものが残っていた。矢車達はそれを採取するとすぐに極東本部に戻る。採取した液体と繭は地球外生物のモノであるという結果が出た。

その頃に大人達はというと夏が終わり残り少ない大学の夏休みを楽しんでいたのだがつぼみ達は学校が始まっていて実質いえば大人はかなり暇人であつたのだつた

大人「全く……大学生という者は時間がたつぷりあるな……つぼみは学校だし高校生と大学生の違いってちよつと大きいかもな」  
大人は時間をどう潰そうか考えているのだった。家がどうやってポ―としているのもただの時間の浪費でしかないと考えつくると突然立ち上がり部屋着から私服に着替えると家を出た。そしてそのまま宛てもなくカブトエクステンダーに乗り込み希望ヶ丘の町を走るのだつた。

大人「（闇の支配者ダーク……奴が俺達の闘いの元凶。アイツを倒さない限り太陽達のような復讐心に堕ちる人間は絶対にいなくなる……くつそ！！俺がウルトラマンになつても助けられない人がいるなんて……何の為に俺はこの力を手に入れたんだよ！！！！！！）」

バイクに乗りながら大人は地球解放軍事件の事を思い越していた……。彼らはダークに心の隙を付け入れられて自分達と闘う事ように仕向けられた……ただ愛や人としての感情に飢えていただけの人間を利用すると言う卑怯極まりない方法で……あの時はつぼみ達が奇跡を起こし彼らの闇を切り裂いて消滅させたが今度も同じ奇跡が起きるなんて保証はない。

それから大人は自分の力の無さを思い知らされた……だからこそもつともつと大人が心も身体もともに強くならなければならぬ……

……

圧倒的な力が欲しい……誰にも負けたくないような……全ての人を守りとおせるような絶大な力が……敵を完膚なきまでに叩きつぶす事が出来るような力が……。

大人はアレ以来ずっとある事を考えていた。例え1人でも大切な人を守るような存在になる……誰も悲しませない完ぺきな戦士になる事が超人テイガの力を手に入れた自分の宿命。光テイガその為にある筈なのだ。彼女つぼみに頼ることなく守る存在になる事が……男ウルトラマンとしての自分に課せられた義務なのだ。

大人「（その為に俺はまだつぼみに言う事は出来ないんだ……今の中途半端な状態じゃつぼみの不安を増やすだけだ。力テイガの事は俺自身の中で留めておくのが今の俺自身の責務なんだ……例えばつぼみが感づいて俺に問い掛けてきたとしても全てを隠しやり通さなければ!!!!」

いつかは力テイガの秘密がばれるときが必ず来るはずだ。3年前に自分がカブトの力に覚醒した時につぼみ達がプリキュアだと発覚した時のように。

大人「……」

もしもそうなら本当につぼみは俺を受け入れるのだろうか？一歩間違えば怪物と大差がない力を持つこの俺を……つぼみと付き合い始めてつぼみの見えていない部分が見えてきた最近はその不安が更に強くなってきている……

考え込むと色々な事が頭を回ってきて脳が疲れる……考える議題が大きすぎるだけに簡単に答えが出せないから当然だ。

あてもなく走る事1時間も立つと町の全体を一周してしまった。もう家に帰った方がいいと家に向かってバイクを走らせていく大人……。

矢車「これは……この工場は地下道に繋がっているのか？」

?????1「フオフオフオフオフオフオフオッ!!!!!!フオフオフオフオフオフオフオフオフオ!!!!」

矢車と影山は廃工場を調べていると秘密の抜け穴がある事を発見した。そこには上の階と同じように物凄い異臭に包まれているだけなら同じだが笑い声が聞こえてきた。

影山「この声は・・・バルタン星人？」

以前戦ったことのある星人の声を忘れるわけがない。そのまま奥に進んでいくと広いホールのような場所に出た。そこには案の定3匹のバルタンがいたのだが以前見たバルタンとは姿が異なり青い体色に身体が全体的にシャープになっている

矢車「三匹いるな・・・」

影山「なら3匹とも仕留めてやる!!!」

2人は同時にGUTSハイパーを取り出し乱射する。辺りは煙に包まれていき3匹の姿は見えなくなったが何かきが軋むような音がしていくと地下道が崩れ始めたのだ。2人は大急ぎで脱出しGUTS隊の他のメンバーも廃工場から脱出する。

3体のバルタン星人は1人に合体していき巨大化する。だが以前とは違い身体は青で鉄は開き威圧感が以前のものとは全然違う種族と言ってもいいかもしれない。

バルタン星人(?)「フオフオフオフオフオフオフオフオフオフオフオフオフ!!!」

巨大化したバルタンは町をバイオビームで破壊していく。ビルから火が上がり人々は逃げ纏う・・・  
シンジヨウ「今度はバルタンかよ・・・ふざけやがってえ!!!」  
すぐにガッツウィングが出勤しシンジヨウ、ホリーのウィング1号がバルタンにレーザー砲で攻撃を開始するが鉄でレーザーを弾き返されてしまう。

矢車「これならどうだ!!!」

ウィング2号に乗り込んだ矢車達がデキサスビームをバルタンの顔面に向かって発射するとバルタンの顔に大きな火花が散らばるとバルタンは頭から地面に向かって倒れる。

影山「やった!!!」

バルタンが倒れたのを喜ぶ影山だったがバルタンはすぐに虫が抜け殻を剥ぐかのように倒れた個体とゆっくり分離するように立ちあがっていく。

ホリイ「なんちゅーやつちゃ」

並みの怪獣程度なら一発で倒せるほどの威力があるデキサスビームを受けてもびくともしない。動揺するGUTS隊にバルタンのバイオビームが放たれる。

バイオビームをギリギリで回避するGUTS隊。レーザーもミサイルも通用せずバルタンはただ町を破壊しつそうと迫る。

その頃の大人はというとエクステンダーで家に帰ろうとしていたところにバルタンの急襲を聞き入れ大急ぎでバルタン元へと向かっていた。そして目と鼻の先までエクステンダーで近づくとエクステンダーから飛び上がり……

大人「これ以上……お前の好きにはさせない!!!!!!」

スパークレンスのスイッチを入れ光に包まれ超人<sup>ティガ</sup>へと姿を変える。

光の巨人、ウルトラマンティガの降臨だ

矢車「ティガ」

バルタン（？）「……待ッテイタゾ……光ノ巨人」

ティガ「（青いバルタン？）」

ティガ登場の開口一番に青いバルタンはそう言った。赤い目は鋭く光を放ち敵意むき出しにティガに迫る。ティガは以前現れたバルタンを倒した時に言い捨てた最後の言葉を思い出した。

バルタン「我々バルタンの同胞はまだ全宇宙に散り散りとなっているのだ……その同胞が貴様らを!!!!!!」

バルタン（？）「我々八貴様ラガカツテ倒シタバルタン星人ノ同族・

・パワードバルタン!!!!!!」

ティガ「（あの言葉はハツタリではなかったのか……そんな事どうでもいい……今はコイツを倒すのが先決だ!!!!!!）」

ティガ「ハアアアアッ!!!!!!」

ティガは走りバルタンに向かっていくと回し蹴りをバルタンの右脇腹に放つがバルタンの鉄でそれを受け止めるとそのまま巨大な鉄でティガの片足を刈り上げ押し倒す。

パワードバルタン「フオオオッ！！！！」

ティガ「ウオオ！？」

そしてそのまま倒れたティガの顔面に向かって鋭利な鉄を衝きいれる。ギリギリでパワードバルタンの鉄を回避するとそのままバルタンの下腹部にキックでバルタンを吹っ飛ばすと立ち上がる。

ティガ「ハアアッ！！！！」

立ち上がった瞬間飛び上がり空中で身軽なその動きを見せつけていくとびりる勢いを付けて威力を上げた踵落としをバルタンの頭に放つ。

バルタン「フオオオッ！！！！」

だがパワードバルタンは分身の術で透けるように回避する。

ティガ「！？」

踵落としが外れ地面に落ちるティガ。だが着地には成功しすぐに後ろを見るがバルタンの姿はない・・・気配は感じるのだが姿が見えない事にティガは必死に辺りを見回してパワードバルタンを見つけて出そうとするのがパワードバルタンの痕跡は一切見つからない。

パワードバルタン「・・・フオオオオオオオオオオオオッ！！！！」

「！！！！」

見つけ出すのに戸惑っているティガの真後ろに突然姿を現すとそのまま零距离のバイオビームをティガの背中にぶつけていく。

ティガ「！？・・・グオオオオオッ！！！！」

気がついた時にはもう遅かった。真後ろからのバイオビームの攻撃は例えティガでも大ダメージは避けられない。そのまま前のめりになる様に飛ばされてビルに仰向けに倒されてしまう

ティガ「グウ・・・ハアアッ！！！！」

すぐに前を向くとハンドスラッシュを放って反撃をするティガ。だがそれも分身の術で避けられる。





その正体は当然ブロッサム達であった。姿が見えない事をバルタンと同じように利用し瞬時にティガを救出したのだ。

ティガ「!!!!!!」

今度も助けられてしまったことにティガ（大人）はバツが悪そうになっってしまう……がブロッサムはティガの方に飛び上がってきた。ブロッサム「ギリギリ間に合いましたね……助けられてよかった」ティガ「（……情けない。またしても俺はブロッサムに助けられるなんて）」

拳を作り自分の不甲斐なさに心でそう呟くティガ（大人）……もつと強くならなければと立ち上がるとパワータイプにタイプチェンジする。

パワードバルタン「フオオオ……フオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!」

バルタンが1笑いすると更に2体のバルタンの援軍が現れた。1体でも苦戦させられる相手だと言うのに……ティガは焦りが生まれるのだがバルタン達は待つてなどくれなかった。

パワードバルタンA・B・C「フオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!」

3体の連続バイオビームを放つパワードバルタン。ティガとサンシヤインがすぐウルトラシールドとサンフラワーイージスを張りバイオビーム3連弾を防御するも3連続のバイオビームを受けきるには無理があった。

ティガ「グウウツ!!!!!!」

何とかして防ぎきろうとするのだがティガは耐えられてもプリキュア達は耐えきれるかどうかは分からない……。

サンシヤイン「っ!!!!!!……も、持たない!!!!!!」

やはり先に精神力に罅が入ったのはサンシヤインの方だった……その証拠にイージスにも罅が入り亀裂が大きくなっていく……このままではティガよりも先にブロッサム達が……

ティガ「……ダアアアアアッ!!!!!!……グワアアアアア



バルタンは止めの一撃とバイオビーム3連弾をティガに放つとティガは爆炎に包まれる。煙と爆炎に包まれて数秒後……ティガは2つの光に助け出されていた。

パワードバルタン『!?!?!?』

ティガを助けたのは赤き炎の戦士ウルトラマンアースと青い氷結の戦士ウルトラマンデユナミスであった。2人はティガにエネルギーを分け与え回復させる。

アース「シュワツ（何とかギリギリ間に合ったな）」

デユナミス「デヤアツ（無茶しやがって）」

2人はティガを立たせると3体のバルタン星人に向かってファイティングポーズを見せる。

パワードバルタンA「来タカ……3人ノ光ノ巨人……フオフオフオフオフオフオツ!!!」

これで役者はそろつたとバルタンは不気味な笑いを受けべるように独特の笑い声を発すると姿を6体に分裂させた……今までは本気を出していなかったということなのか？

ブロッサム「向こうは今度こそ本気で私達を倒す気ですね……ならば私達も最初から本気で!!!」

ブロッサムのセリフに全員は頷くとナイトがホーリーパヒュームを取り出してもう1つの姿を発動させる準備を整えていく。

ナイト「聖夜の光よ漆黒の戦士に更なる力を!!!!」

フェアリー「キャストオフ」

電子音「CAST OFF CHANGE BUTTERFLY」

ナイトはパヒュームに白い種をセットし白い光に包まれもう1つの姿、「キュアホーリーナイト」へと強化変身<sup>パワーアップ</sup>をフェアリーもマスクドフォームからライダーフォームにキャストオフする……これでブロッサム達の方の準備は整った。

パワードバルタン「フオフオフオフオツ!!!!!!!」

分身して6体が増えたパワードバルタン達はそのままティガ達ウルトラマン、ブロッサム達プリキュアチームを翻弄しようと目論むが

サンシャイン「どれが本物が分からなくても纏めて動きを止めてしまえば・・・花よ舞い踊れ、プリキュア・ゴールドフォルテバースト！！！！！！！！」

サンシャインの一斉射撃をパワードバルタンは当然分身の術を使って攪乱しようとするのだがヒマワリ型の光弾はバルタン達の身体に纏わりつき動きを封じる。

サンシャイン「今よ、皆！！！！」

その瞬間にティガ、アース、デユナミス達ウルトラマンはそれぞれの最強必殺技の発射態勢に取り掛かりブロッサム、マリン、ムーンライト、ホーリーナイトのペアに分かれそれぞれのタクト、ロッドの先端を重ね合わせる。

ブロッサム・マリン・ムーンライト・ホーリーナイト「プリキュア・フォルラルパワー・フォルテツシモ！！！！！！」

それぞれ2組のフォルテツシモがバルタン達に突撃する。その数秒後には

ティガ・アース・デユナミス「ジュワアアアアアアアアアアッ！！！！」

！！！！！！

フェアリー「ライダーバースト！！！！」

ティガのゼペリオン光線、アースのボルテックスストーム、デユナミスのインブレイスバースト、フェアリーのライダーバーストが1つに重なり合いブロッサム達のフォルテツシモを包み込む。これぞプリキュアとウルトラマンの合体技・・・その名も

ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト・ホーリーナイト「プリキュア・ウルティメイト・フォルテツシモ！！！！！！！！」

この新必殺技が決まれば例えパワードバルタンと言えど大ダメージは避けられない・・・だがバルタン達は直撃の前に笑い声を上げ不敵に目を光らせる。

パワードバルタン「ソナ策略ナド読メテイルゾ！！！！！！」

突如バルタン達の胸が開くとウルティメイトフォルテツシモのエネルギーが吸収されてしまう。それにより直撃前に技を不発に終わら

せられてしまったのだ！1つに集まった全員のエネルギーは拡大膨張させられると・・・

パワードバルタン『《アンチウルティメイト合金》ニヨル「スペゲルン反射光」ノ威力ヲ貴様ヲ自身ヲ味ワウガイイ！！！」

そのままエネルギーはブロッサム達に叩きこまれてしまいプリキュア達は変身を強制解除させられてしまうそして生身同然の彼女たちに更にエネルギー光線が降り注がれるが間髪一髪ティガ達がその身を盾にしつぼみ達に被弾するのを防ぎきった。

ティガ「ハア、ハア、ハア・・・」

だがこれにより3人はエネルギーを使い果たしカラータイマーが点滅をし始める。それでも必死に身体を地に伏せることなくつぼみ達を守る抜く

つぼみ「み、皆・・・無事ですか？」

えりか「な、なんとか」

いつき「だ、大丈夫だよ」

何とか命だけはつなぎとめた・・・不意に上を見ると自分たち以上にポロボロになりながらも身体を盾にしブロッサム達を落下物や光線から守っているティガ達の姿があった・・・つぼみ達はその姿を見て声を失った・・・。

つぼみ「このままじゃティガ達や私達も・・・」

えりか「でもアイツ強すぎる・・・このままじゃ今度こそ本当にアタシ達が負けちゃう」

いつき「・・・」

バルタン達は完全に自分達の行動パターンを分析し生半可ではない対策を立てていた。一歩先に行くその戦略を打ち崩す手立てはないのだろうか！？

パワードバルタン『トドメダ・・・今度こそ消エ口！！！！』

バルタン6体は一斉射撃体勢に入る・・・町ごと完全に消し飛ばすつもりなのだろう・・・今度は本当に避けられない・・・。絶体絶命の時、突如赤い彗星がバルタンとティガ達の合間に割入

つてきた……その彗星は色が赤から青に変わり徐々に人の形に変化していく……光を放ちながら地上に着地するとバルタン達もその彗星の方に近づいて戦闘対象を入れ替えたように見えた。

つぼみ「あ、あれは……ウルトラマン？」

青い光は消えてその主の正体が明らかになる。なんとその主の正体は青い目に銀色の体色をした巨人であった……ティガ達と同じウルトラマン超人の仲間なのか？

パワードバルタンA「貴様……マサカ!!!」

???「バルタン……この次元でも侵略を繰り返ると言うのなら私は何処へでも現れる……わが名はM78星雲光の国の戦士、ウルトラマンパワード!!!!」

銀色の巨人は構えと取るとバルタンに向かっていった……対するバルタン達も彼を返り討ちにするべく剣を振りかざしながら走っていく。

第55話バルタンの大逆襲―地球総攻撃計画―？「青い復讐者と銀色の追跡者」

いきなりプロツサム達大ピンチ・・・

今回はバルタンVSパワードの因縁対決！！！！

では次回もお楽しみに

第56話バルタンの大逆襲―地球総攻撃計画―？「バルタンの悲劇」(前書き)

前回までのあらすじ

新たな敵・・・その正体とは以前倒したバルタン星人の同胞の「  
パワードバルタン」であった。

分身の攪乱攻撃に更には対ウルトラマン&プリキュア対策としてバ  
ルタンが開発した「スペルゲン反射光」よりティガ達は絶体絶命の  
ピンチに追い込まれてしまう。今度こそ負けると思った全員を助け  
たのは青い光を放つ彗星、その正体は青い目の巨人であった。



## 第56話バルタンの大逆襲―地球総攻撃計画―? 「バルタンの悲劇」

青い光と共に現れた銀色の巨人・・・その名はウルトラマンパワー  
ドと言っらしい。彼は素早く身体を動かし一気に距離を縮めるよう  
にパワーバルタンに向かっていくのに対して3体のバルタン星人  
は即座に分身を行い6体が増える。

パワーバルタンA「死ネツ!!!」

バイオビームを放ってパワードにダメージを与えてやろうとしてい  
くのだがパワードはバイオビームを手で弾き返して分身を打ち消し  
てしまう。

パワードバルタン「何っ?!?!?」

全く微動だもしないパワード。そのまま腕を前に組み右腕に青い光  
を集めると光の輪の様なものを形成すると一気に腕を振り落として  
いき光の輪をバルタンに向かって投げつけて行った。

パワード「ダアアアッ!!!!!!!」

右手から光のノコギリ状のカッターを発射する。高速に動くカッタ  
ーは2つにわかれると3体のうち2体のパワードバルタンに炸裂し  
真つ二つに切り裂かれると大爆発を起こして消滅した。これはパワ  
ードの独自の切断技の「パワード・スラッシュ」だ。

パワードバルタン「オノレエ!!!!!!!」

パワードバルタンはこのままでは不利になると背中から羽を出すと  
そのまま上空に飛び立っていく。

パワード「・・・シュワッ!!!!!!(バルタンめ・・・時間稼ぎのつ  
もりか?・・・逃がさんぞ!!!!!!)」

パワードもすぐに飛びあがりパワードバルタンを追いかける。

それまでの様子を見ていたつぼみ達はティガ達のカラダの下でパワ  
ードパワーバルタンの戦いを見ていた。

つぼみ「す、凄い」

つぼみは彼の強さを食い入るように見ていた。自分達が束になって

も手も足も出なかったバルタンをいとも簡単に倒してしまったのだから当然の反応と言えるだろう。

セイバー「皆!!!!!!」

食い入るように見ていたつぼみ達にセイバーが声をかけてきた。セイバーのとなりには何と妖精サイズのバルタン星人の姿があった。

えりか「ば、バルタン!!!!!!」

えりかは思わず驚いたようにその声を上げるがすぐにセイバーが説明に入る。

セイバー「落ちついて皆、この子は味方なのよ。そしてあの銀色の巨人も」

セイバーがそう言うと皆落ちついたのか警戒を解くと隠れていたバルタンの子供は顔を出す。

その頃パウードとバルタンの戦いは空中戦での攻防の応酬が繰り広げていた。パウードとバルタンの戦いは戦いは互角でありながらも徐々に流れが付き始めていたのだった

パウードバルタン「グオオオツ!!!!!!」

パウードの回し蹴りを受けるとそのまま街に叩き落とされたパウードバルタン。パウードはゆっくりと舞い降りるように地上に戻っていく。反応がない事に誰もがパウードバルタンが死んだと思ったのだったが

パウードバルタン「フオフオフオフオフオフオフオフオフオフオツ!!!!!!」

パウードの真後ろに瞬間移動しており両手の鉄から連続バイオビームがパウードに向けて放たれていくのだった。

パウード「グオオオツ!!!!!!」

両腕で何とか腕でバイオビームを防いでいくパウード・・・パウードバルタンの猛攻は勢いを先ずばかりであったが全てを腕の身で受けきっている。

いつき「このままだとあの巨人まで!!!!!!」

その様子を見ていたプリキュア達は援護しようともう一度変身しよ

うとするだがパワーの様子に変化が現れる。

右手をカラータイマーの前に添え置き左手は足の方に伸ばすポーズをとるとバイオビームがパワーに直撃してもパワーは微動もしなくなつたのだ。パワーバルタンはパワーの様子の変化に気が付かないまま何発もバイオビームを放っていく……だが何発当たろうともパワーはダメージを受ける様子などなかった。流石のパワーバルタンも焦りが生まれてきたのかバイオビームの連射速度が速くなっていくのだがビクともしない。

徐々にパワーの上に青い稲妻の様なものが集まり始める。そして疲れて動きが止まってしまっている

パワー「ジュワアアツ!!!!!!」

そして次の瞬間にはバルタンに向かってパワーは腕を十字に組んでいくと青い光の光線が放たれていく……光線はパワーバルタンの身体に十字を描いて貫かれていくように降り注がれる……これぞパワーの最強必殺光線の「メガスペシウム光線」だ!!!。パワーバルタン「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!」

!!!!!!!!!」  
暫く光線を受け続けたパワーバルタンは緑色の光を放っていきながら断末魔を上げていく……暫く抵抗のそぶりを見せていくのだが何もできないまま消滅していった。

ティガ「……(凄い)」

ティガ達は立ち上がるとパワーに近づいて行った。光の巨人の本能的な感とも言えるものがパワーが自分達の味方であると感じる事が出来た。パワーも同じようにティガ達を見つめながらゆっくりと光線のポーズを解いた。

パワー「……………」

気がつけばパワーは目を赤く光らせている……青だったその目は鮮やかな真紅色に輝きを放ちながら下からの目線に気がついたのか下を見る。

つぼみ・えりか・いつき・ゆり・アンナ「……………」

思わず威圧感を覚えたのかつぼみ達は若干引いてしまう。

パウード「シュワァツ!!!」

カラータイマーの音を響かせながらもパウードは素早く飛び上がり空の中に姿を消していった・・・それに続きティガ達3人も飛び上がる。

つぼみ「何者なんでしょう・・・あの巨人は」

つぼみは不思議そうにそう呟いた。アレだけ苦戦したパウードバルタン達をいとも簡単に打ち倒したのだから謎が多いのも無理はないだろう。

えりか「分からない・・・でも物凄く強いつてのは分かったね」

つぼみの問いにえりかはそう答えた。ただ1つ言える事と言えばあの銀色の巨人・・・パウードの強さは自分達とは比較にならないほどという事ぐらいだろう。

セイバー「とにかく私たちも一度此処を離れよう。いつまでも此処にいるわけにもいかないし」

セイバーがそう言うかつぼみ達は街を後にした。とにかく今は状況を整理する必要がある・・・今この場にはいない大人達も呼び出すべきだろうかと悩んでいたのだが大人達からも連絡が入り全員で集まることとなった。

全員はいつもの会議場となっている植物園へと集まっているのだ。セイバーと共にいたバルタン世人の子供も会議に参加するのだ。つた・・・そしてもう1人青い瞳の謎の青年も。

つぼみ「貴方達は・・・何者ですか？」

つぼみは少し鋭い口調で聞いた。青年は少し考え込むと口を開いた。???「私の名前は・・・パウードと言っておこうか」

青年は静かにそう言う。そして真夜の近くにいたバルタン星人の子供はパウードのどこにとんでいくと元気っぱいに自己紹介を始めた。???「そしてその相棒のタイニーです!!!」

えりか「あ、あの聞いてもいい?・・・もしかして貴方ってあの銀

色の巨人？」

えりかの思わぬ発言に全員は息をのんだ。するとパワードはしてやられたなと言う様な顔になったが静かにうなずいた。そもそもバルタン星人の子供と共に行動をしている時点で只の人間というのは無理があるのだから仕方ないだろう。

大人「パワード、タイニーだね？宜しく俺は上原大人だ。後の面々も紹介しよう」

大人はそう言つて握手を求め手を伸ばした・・・その瞬間に突如脳裏に声が聞こえてきたのはそれと同時だった。

パワード「（お前が光の巨人・・・ウルトラマンティガだな？）」  
大人「！！！」

パワードはテレパシーで大人にそう聞いてきた事に大人は驚いた・・・どうして彼は自分の秘密を感じたのだ？・・・色々話したい事があつたが今この場ではまずいと思ひ残りの面々の紹介をし始めた。そしてお互いに名前と顔が分かつた所で本題に入る。

大人「バルタンの同胞・・・《パワードバルタン》」

つぼみ「あの強さは私達の戦い方を今まで見たいたと思ひませせん。最初のバルタン星人が最期に言つていた言葉をもつと深く考えているべきだったのかも」

あの時のバルタンの最期の捨て台詞の意味はこの事だったのだ。バルタン星人達は何かの手段で自分達の戦いのパターンを分析し対ウルトラ、対プリキュア用の兵器まで開発していた。地球解放軍事件の時も陰ながらバルタン達は自分達を静観していたとしたらかなり不味い状況なのを言うまでもない。つぼみがそう言い終えた後にパワードが続けて口を開いた。

パワード「まさかこの次元にもバルタンがいたとは私も思いもよらなかつた。・・・そして私達ウルトラ一族以外にも光の力を持つ戦士がいた事も。」

ゆり「ウルトラ一族？・・・貴方達はティガの仲間ということではないのかしら？」

パワードの発言にゆりはそう聞いてきた。パワードのゆりの感の良さに驚いたように彼女を見る。

パワード「《同類》という意味ではこの世界のウルトラマンのティガ、アース、デユナミスもそう言えるだろう。・・・君達には話した方がいいかもしれないな・・・私の故郷である《光の国》そして《宇宙警備隊》について」

パワードは説明を始める。自分はこの世界とは別次元にある宇宙のM78星という光の速度で何億光年もかかると言われている星雲にある《光》という名に相応しく光り輝く美しき星からやってきたという事。宇宙警備隊とはパワード達ウルトラマンが宇宙の掟に背くモノから弱きものを守るための銀河の平和を守る組織であると言う事を。

つぼみ「じゃあ、貴方達は此処とは別次元の地球を守り抜いた英雄・・・という事なんですか？」

パワード「簡単に言えばそうなるだろう」  
えりか「どうしてそこまでして地球を？」

パワード「・・・その理由は私達の祖先がこの星と同じ人間の姿をしていたからだ。かつて私達の祖先は・・・」

パワードは再び語る。自分達の祖先のウルトラ一族はかつて人間と川なる姿をしていたのだが突然太陽が爆発した事で多くの人々が死んだ。彼らは暗黒の中再び太陽を取り戻そうと人工太陽を開発したんだ・・・長い長い時間をかけて。そしてようやく完成した人工太陽ウルトラマンの光を浴びた彼らは超人の力を手に入れたと言う事らしい。そしてウルトラマン達は自分達の故郷と似ている地球を守る事や弱きものを守る事が力を得た意味だと結論づけたらしい。

タ「・・・なんかスツゴイよ。ウルトラマンって」

いつき「うん。・・・ボク達プリキュアなんか目じゃないくらい。・・・でも分らないのがバルタン星人はどうしてあそこまで人間を蔑むんだい？まるで地球人を憎んでいるように見えるんだけど」

壮大すぎる話を聞いて力が抜けそうになった。世界には自分達が知



太陽系をパトロールしていた時だった。謎のワームホールを見つけた事がパウードが此処に来るきっかけであったのだ。

パウード「・・・なんだあれは？」

土星付近を飛行していると何やら空間が歪みワームホールが出来ているのを発見する。何やら禍々しい空気とはなっているので迂闊には近づけないと思っていたのだが突如吸い込まれるように次元の裂け目から重力派がはなたれていくと彼の巨体もその威力は生半かなものではなかった。

パウード「んぐっ!??・・・な、何だ・・・この力は!!・・・うわあああああああ~~~~~~~~っ!!!!!!!!!!」

パウードはそのままワームホールに吸い込まれてしまった。異空間に吸い込まれて数分後にはさっきと同じようである宇宙空間に飛び出されてしまった。

パウード「こ、此処は・・・別の宇宙か？」

パウードは普段とは違う感覚に自分がさっきまでいた宇宙とは別次元であると判断が出来た。ワームホールはまだ健在であるからまた此処に入れば元いた場所に戻る事は出来るだろう。とりあえず今いるのがどの宇宙領域か判断する為飛び立とうとしたが小さな物体がこちらに向かってきた。

????!「助けて下さい!!!」

パウード「わっ!?!?・・・き、君は？」

????2「お、追われてるんです!!!・・・ああ、来た!!!」  
巨人の懐に飛び込んだのは何とバルタン星人の子供であったのだ。慌てている様子で何やらただ事ではないと巨人は察した。そしてその数秒後になんと青い身体をしたバルタンが現れた。

バルタン兵士A「見つけたぞ・・・タイニ!!!」

バルタン兵士B「貴様の処分は既に將軍から通達が来ている。バルタン一族でありながら命令に背いた罪で貴様を即時排除だ」

タイニ「ひいっ!?!?」

どうやらバルタンの子供はタイニ という名前らしい。巨人はタイ



二 を自分の後ろに下げさせると自分は前に出る。

パワード「そうはさせん!!!」

パワード身構え独特のポーズをとる。目の前で弱きものが困っているのに見す見す放っておくなど毛頭ないようだ。

バルタン兵士A「銀色の体色・・・貴様M78星雲のウルトラ一族のウルトラマンパワード!!!」

バルタン兵士B「貴様らには我等先祖の恨みがある・・・貴様には悪いが先祖の仇を取らせてもらおうか!!!」

パワード「バルタン、この世界でも殺略を繰り返しているのか・・・目的の為なら身内にまで手をかけるなど絶対にさせん!!!」

巨人の正体・・・銀色の体色に清い輝くを放つ青い目を持つ彼の名はそうかつてバルタン星人の侵略から地球を守り抜いた電ゼツの戦士の1人ウルトラマンパワードであったのだ!!!。彼は青い目を紅く光らせるとそのままバルタン兵士達と闘うべく勢いよく前に飛び出すと同時にバルタン達も迎え撃とうと剣を光らせながら前に出る。

パワード「ハアアアアッ!!!」

その頃の銀色の巨人ことパワードとバルタン兵士の闘いは互角の1途を辿っていた。最初は2人相手に苦戦を強いられてはいたのだがそれでも伊達に戦闘訓練を受けていないのか敵の攻撃パターンをあっという間に見切るとパワー溢れる体術でバルタン達の懐にチョップやパンチを放って徐々に流れを掴み始めていくのだった。

バルタン兵士A「お、おのれえ・・・初代サイコ様の計画を打ち破った戦士だけの事はあると言うことか」

バルタン兵士B「・・・こうなればコイツは後回しだな・・・死ぬええタイニ!!!」

バルタン兵士の1人はこうなればパワードよりも裏切り者を倒す事を優先すると離れていたタイニにバイオビームを放つ。

タイニ「ひ、ひい!!!」

身動きが取れないタイニ・・・赤い閃光が迫ってきて身体を包み

こんでいこうとしていく・・・もう終わりだと諦めかけたその時青い閃光がギリギリタイニを守り抜いたそしてタイニの周りには青く輝くシールドが発生していたのだった

パワー「大丈夫か!？」

タイニ「は、はい!!!」

そう守ったのはパワーだったのだ。ギリギリのところバイオビームを光線で相殺しシールドを発生させてタイニの身を守ったのだ。

バルタン兵士B「き、貴様あ!!!何故ウルトラ一族がバルタンを庇う?」

パワー「一族など関係ない!!!・・・私達は弱きものをただ守るだけの事。貴様らのような宇宙の掟を破る者からな」

バルタン兵士A・B「き、貴様あつ!!!ならば貴様から死ねえええ!!!」

バルタン達は遂に激昂しバイオビームを連発するがパワーはそれを身体で受け止めそのまま凝縮したエネルギー弾をバルタン2匹に叩きこんでいった。

パワー「シユワア!!!!!!」

バルタンA・B「グオオオオツツ!!!!??」

2匹のバルタンは幸い命だけは助けられた。このまま戦っても勝ち目はないと判断したのか何も言わずに消えていった。

パワー「大丈夫かい?」

タイニ「は、はい。ありがとございます!!!」

タイニに張っていたシールドを解除させるとパワーはそう言った。よく見るとタイニの身体はよく見るとボロボロであったのが確認できる・・・逃げるさなかで追った傷であるのだろうとパワーは判断した。

パワー「で、一体何で奴らに追われていたんだ?・・・君もバルタンだろ?」

早速本題に入るパワー。バルタンの考える事はかつてバルタン星

人と闘ったことのあるパスワードは大体察しがついてはいる・・・そしてこの世界にもあの星があるのなら・・・パスワードはそう思っていた。

タイニー「私達の同胞が・・・地球に総攻撃を仕掛けようとしているんです。仲間が光の巨人に倒されたその仇を討とう・・・それだけじゃなく地球支配を目論んでいるという情報を掴んだので今地球を守っている光の巨人にこの事を伝えようとしたら彼らに見つかってしまつて・・・」

パスワード「光の巨人！？（まさか彼らがこの次元の地球に・・・確認した方がよさそうだな）わかつた。案内してくれるか？」

タイニー「はい！！！」

~~~~~

大人「そうだったのか」

パスワード「ああ。気をつけた方がいい・・・バルタン達はあの程度で侵略を諦めるような奴らじゃない・・・恐らく私が君達の助けに入った事でまた新しい策を練っているはずだ・・・以前レッドキング達の星を奇襲したという事もタイニーから聞いてるからそれです手に入れた怪獣達をまた利用するかもしれない。」

パスワードはバルタン達はまだ諦めていないと忠告を始めた。確かにもしもタイニーの言う事が本当だとしたら新しい策を練っているに違いないからだ。だが今更この程度で動じるほど大人達は器が小さいわけではない・・・大人はパスワードに対して上等だと言うばかりに目を見せて口を開いた。

大人「もしもそうなら・・・今度は絶対に負けないようにする・・・それだけだ！！！」

大人は静かにそう言った・・・それに続きつぼみは立ち上がった。

つぼみ「そうです！！！！。また怪獣達が来たら私達プリキュアが助け出すまでです！！！！」

えりか「バルタン達が相手でも今度は絶対に負けない・・・絶対に  
!!!」

いつき「うん。今度も負けられない戦いになるね」

つぼみに続きえりか、いつきもそう言って覇気を見せる。相手は仮にも以前に戦った相手・・・どんな理由わけがあるうとも殺戮を許すわけにはいかない・・・今この場（希望ヶ丘）には自分達の世界を守れるのは自分達しかいないから・・・今度も負けないと全員の意思はすぐに決意へと固まった。

ゆり「当然ね。でも敵が策を練っている以上は私達もバルタン達の対策を考えた方が良さそうね」

今時点での問題はただ1つ・・・それは自分達の光線や特殊攻撃を無力化する「アンチウルテイメイト合金」だ。あれを何とかしなくては勝ち目はないのは明らかだろう・・・するとパワーは笑みを見せて立ち上がる。

パワー「それに関しては考えがある。君達にはこれから【気力】を鍛えてもらう」

大人達全員『気力？』

パワー「そう、【気力】だ」

パワーは全員にそう言った。パワーが言う【気力】とは一体何なのだろうか？

その頃の地球の衛星の月の裏側では全長500メートルのバルタン戦艦内でバルタンの総司令官のサイコバルタン星人がいた。

サイコバルタン「ウルトラマンパワー・・・コノ次元ニモ姿ヲ見セルトハ」

バルタンの過激派とパワーバルタン星人を統括する高い知能を持ったバルタン星人・・・それがサイコバルタンであるのだが別次元からパワーがやってくる事までは想像が出来なかった事は彼にとつては誤算であった。

サイコバルタン「マア、イイ。貴様ヲノ更ナル【データ】ヲ取ラセ

テモラウダケ・・・我が宇宙恐竜ガ完璧ナル強サニ得ル為ニ」

バルタン兵士「サイコ様・・・次ノ手ハ如何致シマシヨウ？」

サイコバルタン「次ハ例ノ改造怪獣達ヲ投下シロ！！！！・・・ソシテ・

・・・【ドラコ】モ共ニナ」

サイコバルタンはそう指示を出した。次なる手はすでに考えているようであった。以前ウルトラマンパワーと戦った事がある彼ならではの作戦があるようであった。

着々と進んでいくバルタン総攻撃計画を大人達は阻止する事が出来るのであるうか！？

第56話バルタンの大逆襲―地球総攻撃計画―？「バルタンの悲劇」(後書き)

パワードが光の巨人に反応した理由とは？・・・

次回からはアンケートで要望がある怪獣達が登場します！！まだ第

3のアンケートは期限があるので要望があればどうぞ！

では次回もお楽しみに

第57話バルタンの大逆襲―地球総攻撃計画―？「特訓開始」(前書き)

前回までのあらすじ

明かされるバルタン一族の過去とウルトラ一族の真実・・・つぼみ達は着実進みつつあるバルタンの地球総攻撃計画を止めるべくパワードから気力の鍛錬を課される事になった。

一方バルタンの長「サイコバルタン」は次なる策として惑星サウリアから採取した改造怪獣達の投下準備に入った。

小説内で気力について説明する部分がありますがあくまでも私の設定ですので公式でいわれている気力とは全く無関係です。

## 第57話バルタンの大逆襲―地球総攻撃計画―？「特訓開始」

パウード「訓練は此処で行ってもらおう。」

まずはプリキユア達の始動が先だと言う事で大人、琢磨、傑以外の面々はパウードに光に包まれた空間につれてこられたのだった。その光は物理の法則を完全に無視していて地平線が果て無く広がっていた。この異空間は一体何なのだろう？・・・外と比べると身体が重く感じた・・・それになんか夏は過ぎたというのに気温も蒸し暑くも感じた。

つぼみ「此処は一体？」

つぼみ達は何が何だか分からなかった。プリキユアパレスとはまた違う雰囲気だ・・・パウードはつぼみ達の方見る。

パウード「此処は私達ウルトラ一族が惑星間を光速で・・・いわば光の速度で移動するときに発生させる異空間だ。外とは時間軸が違いうし此処でどれだけ騒いでも外には何も影響がない。」

つまりはパウードの宇宙船の中とも言ってもいいだろう。

えりか「へえ・・・すっごいなあ！！！」

えりかははしゃいだ様にそう言う。これからどんな特訓があるのだろうかと誰もが思っているとパウードは先ず全員に【気力】の講義を始めると言い出した。

パウード「先ずは【気力】の事について理論を学んでもらう。【気力】とは誰にも存在するんだ・・・人の感情、つまりは怒り、悲しみ、喜び・・・心にある様々な感情が複雑に混ざり合いながら形成される。」

いつき「じゃあ、一般の人間でも気力を操る事は出来るの？」

パウード「ああ、使い方さえ覚えれば子供でも扱える・・・ただしそれなりの素質センスが必要となる。」

パウードが言うには気力とは人間の生体エネルギーを具現化したものであるとのことらしい。パウードのメガスパシウム光線やパワー



ドスラツシユがバルタンの「アンチウルティメイト合金」に競り勝ったのはスペシウムエネルギーの中に自身の気力のエネルギーを送り込んだことで破壊力が増大させた事とスペルゲン反射光がパウードのエネルギーを跳ね返す前に一気に蒸発させるほどのエネルギーを撃ちこんだ事がバルタンに勝った原因であると告げた。

真夜「成程ね・・・だからああも簡単にアンチウルティメイト合金を持ったパウードバルタンを倒せたと言うわけね」

真夜も納得したようにそう言った。ティガ達のゼペリオン光線すら跳ね返す筈のスペルゲン反射光がパウードに通用しなかった理由が気力のエネルギーを混ぜ合わせていたと言うからくりがあると言うのなら納得がいくからだ。

パウード「そうだ。アンチウルティメイト合金の唯一の弱点は君達の中の光エネルギーしか反射できないと言う事・・・つまりは他のエネルギーと混合させてしまえば簡単に突破できるんだ。」

パウードは更に解説を進めていく。【気力】が持つ無限の可能性を・・・攻撃以外にも応用さえできれば回復術も行えると言う。

パウード「さて、ではそろそろ始めようか・・・気力の鍛錬を」  
パウードはそう言うと言つて自分の上着のポケットからカプセルを取り出すとそのままカプセルを空に掲げるとそのまま青い光に包まれる  
パウード「・・・この空間では私の時間制限も無くなる。君達も変身するといひ」

等身大の姿となったパウード。青い稲妻を辺りに放ちながら余裕そうにつぼみ達にそう言う。

つぼみ「分かりました。」

それぞれココロパヒューム、ココロポット、イリユージョンロッドを取り出す5人は5色の光を放ち妖精達から種を受け取ると変身準備は完了する・・・

つぼみ・えりか・いつき・ゆり・アンナ『プリキュア・オープンマ  
イハート!!!!』

5色の光に包まれていくとつぼみ達の姿は戦士プリキュアの姿に一瞬で変化し

ていた。それに続き夕はゼクターを呼び寄せ。  
夕「変身」

電子音「HENSIN」

ブローチにゼクターを装填すると白銀の鎧に包まれたマスクドライダー仮面戦士へと変身する。それに続き真夜とロモモも準備を始める

真夜「ロモモ、私達もいくよ」

ロモモ「オツケーロモ!!!」

ペンダントに姿を変えたロモモ。それを手に取り真夜は念じるように眼を閉じた。

真夜「プリキュア・セントリバーズ!!!!」

真夜も一瞬にして救世の戦士キュアセイバーへと変身を完了させた。これで完全に役者は揃った・・・パワーは青稲妻を光らせながら全員の姿を見た。

パワード「・・・(コレがこの世界の守護者の姿か)よし、では特訓に入る」

7人の前にパワードは岩石の様な物体を召喚する・・・見た目は青く輝く水晶の様に透き通っていてガラス玉にも見えた

パワード「まずは、全員でこれを素手のみで砕いてくれ・・・1人でも全員でも構わない・・・とにかく素手だけで粉々に砕いてみる」意味ありげな口調でそう言うパワード・・・全員は一体何の訓練なのだろうかと思議そうな顔になる。

ブロッサム「じゃ、最初は私がいきます」

わけが分からないがとにかくこの岩を砕けばいいだけの話であるのだらうと最初にブロッサムが前に出た。一度大きく息をして集中力を高めると勢いよく腕を岩石に向かって打ちこんだのだが・・・。

ブロッサム「い、いたあゝいつ!!!」

ブロッサムの全力パンチを受けても岩石はビクともしない・・・逆にブロッサムの手が赤くはれ上がってしまった。

マリン「だ、だいじょーぶ!？」

慌ててマリンが駆け寄りブロッサムに駆け寄る。その様子を見てい

たパワーは少し高圧的になっていて腕を組んでそのそう見ているの。その様子を見てマリンは少し膨れた表情になっているのも完全無視であったのだが。

パワード「さあ、どうしたんだ？・・・早く砕いてみなよ」

少し高圧的な態度を見せてパワードはプリキュア達にそう言い放つ。プロツサムに続き少しムツとしたマリンとサンシャインが前に出た。マリン・サンシャイン「はあああああっ！！！！！！！！！！」

ムーンライト・ホーリーナイト「たああああああっ！！！！！！！！！！」

セイバー・フェアリー「でやああああああああああっ！！！！！！！！！！」

マリンとサンシャインがダブルパンチを放ったが岩石はびくともしなかった。・・・それに続きムーンライト、ホーリーナイトの【月影姉妹】、フェアリー、セイバーの一斉攻撃を放つても素手では傷1つ付かなかった。その後全員がかりで岩石に向かって全員の一斉パンチ、一斉キックを放つていくのだがどんなに力を叩き込んでいても結果は変わらなかった。

プリキュア一同「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

体力ばかりが削られてしまい全員一度小休憩を取り始めてしまう。

パワードはそれを見てそろそろ種明かしをしよう岩石に近づく。

パワード「砕けないのも無理はない。この岩石はM78星雲のメタル星特有の純度の高い【ブルーライト鉱石】・・・この星にあるダイヤモンド以上の強度を持つゆえに”力だけ”では簡単に碎ける筈はない・・・だが」

パワードは腕に青い稲妻をバリバリと溜め始めるとそのままブルーライト鉱石に向かってパンチを放つ・・・すると次の瞬間には粉々に碎かれた。

プリキュア達一同「・・・・・・」

一瞬で碎け散った事に驚かない方がおかしいだろう。パワードは驚いているプリキュア達の視線を感じながらも涼しい態度を見せている。

パワード「コレが【気力】の力だ・・・純粹な力では砕けない壁

も砕く」

腕にバチバチと青い稲妻を放ちながらパワーは全員にそう言った。これが「気力」の可能性と力<sup>パワー</sup>……。これを自分達の力としてモノにできれば今までと違い超人と対等に戦う事が出来る……。プロツサム達は更に気合が入りパワーと共に血の滲む様な特訓を開始した。

その頃大人達はというとパワーに言われて現実世界で待機ささられていた。流石に全員で特訓を開始してしまうとバルタン達の襲撃に対して誰も応戦出来なくなってしまうと言う事をパワーに言われて自分達で残ると言ったからである。

大人「……………」

大人は落ち着きのない様子であった。……パワー曰く現実世界の1日で修業は終わるとのことらしいがその間にバルタン達の攻防に自分達が耐えきれるかどうか分からない。

琢磨「落ちつかないな……大人」

落ちつけと言う方が無理なのは琢磨も傑も分かっている。今の自分達でバルタン達のアンチウルティメイト合金に敵わない。修行出来ると言うのに待たされる歯痒さに苛立ちを覚え始める。

傑「…………嫌なぐらいの静けさだな……。まあ、まだあの襲撃から1時間も経っていないから当然か」

数時間たつても何も無い……。いや、何もない事が逆に恐怖を煽っているのだ。もしも今唯一パワーがいない状態でアンチウルティメイト合金を持ったバルタンの尖兵が街を襲撃でも始めた……。そんな事を思うと怖くて堪らない。

琢磨「…………今は奴ら<sup>バルタン</sup>が来ない事を祈るばかりだな」

琢磨も傑も同じ気持ちなのか落ちつかない様子であった……。嫌な予感しかない。つばみ達がパワーと共に異空間に入ってから約3時間がたったころだった……

爆発音「ドゴオオオオオオオオオンッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

大人「・・・変な予想するんじゃないかたかも」

琢磨「言えてるな・・・」

傑「・・・行くぞ」

3人の予想が的中したかのように街から爆発音が響いてきた。大人達は大急ぎで爆発があったと思われる街へと向かう。

パワードガギ「ギシャアアアアアウウウウウウウツ!!!」

パワードテレスドン「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

パワードビサーモ「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

パワードシルバゴン・パワードゴドラス「ガアアアアアアアオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

パワードジェロニモン「ゴゴゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

そこには生体改造を受けた6体の怪獣が剛炎の中で合唱をしていた。かつてバルタンが襲った惑星サウリアで捕えた怪獣たちだ。その目には生氣は無く只の機会の様に暴れ回っている姿を見て大人達は憤怒の感情が一気に心から込み上げてきた。

大人「バルタンめえ!!!」

クレイズや白夜太陽も非道ではあった・・・非道以外にも白夜の場合は復讐心があったかもしれないがバルタンにはさらに別のものを感じられる。

大人達3人は一斉にスパークレンスを取り出す・・・そのままスパークレンスのスイッチを押し光を解放し怪獣達の前に立ちふさがった。

ティガ「ハアアア!!!」

アース「デヤアア!!!」

デユナミス「ハアアツ!!!」

3人はこれ以上は好きにさせるわけにはいかないと6体の怪獣に向

かって走る。ティガはシルバゴン、ガギにアースはテレスドンとビスサーモにデュナミスはゴルドラスとジエロニモンに分担する。3人は怪獣隊の被害を食い止めながらもこれ以上は被害が出ない所まで引きつけた。よって場所は街から離れた山岳地帯に移り変わった。

ティガ「ハアアツ!!」

シルバゴン・ガギ「グオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!」

「!!!!!!!」

極力怪獣たちを傷つけないようにしようと格闘戦のみを駆使する・  
・だが生体改造を受けたシルバゴンとガギが腕力が強力でティガを押し飛ばしてしまった。

ティガ「グウ・・・（なんて馬鹿力だ。仕方ない）」

ティガは上を前に組むとティガクリスタルに赤い光を集めてその腕を一気に振り下ろすとマルチタイプからパワータイプにタイプチェンジする。すると何やらシルバゴンはそれを見て物珍しそうになり・  
・・・。

パワードシルバゴン「グオオオツ!?グルルルル・・・ガアアアアアツ!!!!!!・・・グウウ!!!!!!・・・?」

なんとシルバゴンもティガと同じようなポーズをとって同じように構えと取る。だがシルバゴンのカラダの色は当然変化するわけがなかった・・・それを見てシルバゴンは怒ったような仕草をしながら思わずガギに張り手を喰らわした。

パワードガギ「ギシヤアアアツ!!!?????・・・グルルルルルッ!!!!!!!」

ガギは何やら納得がいかない様な目になったが力では敵わないと言う事が分かっているのだろうか?睨みつけはしたがそれ以上の事はしなかった。

ティガ・パワータイプ「・・・(漫オコンビ?)」

思わずティガは心の中でそう呟きながらも暴走を止めようとシルバゴン、ガギに向かう

アース「ハアアアアアッ！！！！！！」  
パワードテレスドン「ギシャアアアアアアアアッ！！！！！！！！！！」  
アースとテレスドン、ビスーモの対決は格闘戦で優れるアースは序盤は追いこんでいた。だが防御力はテレスドンは負けておらずアースの剛腕をも防ぎきる。

パワードビスーモ「グオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！！！！！！」  
アース「グアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！！！！！！！！」

さらにビスーモがテレスドンの援護に入り雷撃弾を放ちアースの力ラダを痺れさせる。その隙にテレスドンがアースの力ラダに押し掛かり巨体でアースを押し潰そうとしていく。

アース「グウツ！？・・・ウオオオオ・・・アアアアアッ！！！！！！」

だがアースも潰されるのを黙っているほど優しい性格ではない。持ち前のパワーを使って下からテレスドンを持ちあげるとそのままビスーモに向かってテレスドンを投げ捨てた。テレスドンの重量に辺り軽い自身があるほど揺れる。

アース「ハア、ハア、ハア、ハア・・・デヤアアッ！！！！！！」  
息が切れそうになりながらも立ち上がるアース。そして慌てている2匹に向かって飛び蹴りを放つ。しかしちゃんと加減はしているように必要以上には攻撃はしない。

デユナミス「ハアアアアアッ！！！！！！！！！！」

パワードゴルドラス「ギシャアアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！！」

パワードジェロニモン「ゴオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！！！！！！！」

パワーでは押されてしまうデユナミス、シルバゴンの同族のゴルドラスとジェロニモンの対決はパワー勝負では分が悪いと判断したデユナミスがスピード戦法で攪乱しながらゴルドラス達に攻撃を行う

ていた。しかしセイバーは使わず素手のみで攻撃をしているその様は忍者を想わせた。

デユナミス「シューワアツ！！！！」

クロックアップ

光速移動を思わせる超高速攻撃をゴルドラスとジェロニモンに見舞わせ敵に反撃の隙を与えない。だが流石のジェロニモン達もいい気にはさせまいと白色光線をデユナミスに浴びせるとデユナミスは重力に逆らう様に飛び上がらせられるとそのまま地面にたたきつけられてしまった。

デユナミス「グウ・・・っ！！！！」

そのまま一気に接近戦に持ち込まれてしまうとデユナミスはピンチに立たされる。何とか距離を置かなくてはと離れようとするがゴルドラスとジェロニモンに挟まれてしまい身動きが取れない。

デユナミス「ウウウツ！？・・・デヤアアアアアアアアアアアアアアアアツ！！！！！！！！」

このままでは自分がやられてしまうと判断したデユナミスはエネルギーを身体内部で爆発させてそのまま2匹をふっ飛ばしその瞬間に離れる。そして今度は上空に飛び上がる。

デユナミス「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！！！！！！！！！！」

そのまま垂直に飛び下がり上空から2体の怪獣に足を突き刺す。体力を奪うだけならばこれだけでも十分なダメージを与える事が出来るだろう。

サイコバルタン「フウン・・・ヤハリ下等生物デハ生体改造ヲシテモコノ程度・・・ダガ・・・コイツニハ勝テマイ」

バルタンが母艦から怪獣達の様子を見ていた・・・サイコバルタンは少しがっかりしたような声になっていたがすぐにその声は自信にあふれる口調に変わった。

ティガ・パワータイプ「（このまま戦っても傷つけるだけ・・・だがそれでも奴らを気絶させる事が出来れば）」



あくまでも殺しはしない・・・バルタン達を倒す以外には根本的な解決は望めない以上は無益な殺生はしたくない・・・今の状態ならばあの技で何とかなるかもしれない。そう思ったティガはテレパシーで2人に話しかけた。

ティガ「アース、デユナミス・・・今ならば6体を封じ込めるかもしれない・・・あの技を使おう!!」

アース「アレを?・・・そうだな。実戦で試すのは初めてだけど・・・やるしかないな」

デユナミス「ああ・・・今から使えばつぼみ達が戻るまでの間なら時間もある筈だ」

3人は空に飛び上がり上空で体内の光エネルギーを解放しピラミッド型のフィールドを作り始める・・・そのフィールド内に弱った怪獣達は閉じ込められた。これぞ3人のウルトラマンの力で唯一敵を封じ込める技でありその名は「ウルトラ・トリニティーフィールド」ティガ「(コレでしばらくはコイツらを封じ込められる・・・後はつぼみ達が戻った後にこのフィールドを解放しプリキュアの力で浄化してもらえば・・・殺さずに済む)」

大量のエネルギーを消費したが目的は達成できた。ティガ達は飛び上がるうと空を見上げるのだが・・・。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!!!!!!!!

突然自分達の魔後ろに巨大な隕石の様なもの落ちたきた。3人はすぐに後ろを振り返ると巨大な隕石が姿を見せていた・・・そしてその隕石は卵が割れるように罅が入ると中から新たに別の怪獣が姿を現した。

????「ギシャアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!!!!

!」  
巨大な羽を持ち手は袋状になったいるその姿からは不気味さを漂わせている・・・体色はその不気味さにはあわないピンク色で目は

バルタン星人を想わせるように白目がなく赤い光を放っていた。  
サイコバルタン「フオフオフオツフオオフオツ！！！！・・・サア、  
行ケドラコ・・・パワードトプリキュアガ姿を現サナイ今コノ時に  
3人のウルトラマンノデータを採取シロ！！ソシテ願ワクバ・・・  
ソノカデ殺シテシマエエ！！！！」  
パワードドラコ「ギシャアアアアアアアアアッ！！！！！！！！」  
口を横に開かせて袋状の手から巨大なカマを取り出しドラコはサイ  
コバルタンの命を受け3人のウルトラマンの前に向かっていく。ゆ  
っくりと殺し屋がターゲツトに近づくかのように・・・  
ティガ「（な、何なんだコイツは！？）」  
ティガ達はドラコを見てすぐにタダならぬものを感じ取った・・・  
コイツは今さつきまで戦っていた怪獣達とは格が違う・・・コイツ  
は恐らくバルタンが造り出した造獣<sup>キメラ</sup>・・・生体改造の跡など見ら  
れないし何より目の光に生物特有のオーラと言うべきものが何一つ  
も感じられない・・・本能的な何かが自分達に言っている・・・  
コイツには本気で戦わなければならないと。つぼみ達が戻るまで何  
としても守り通さねばならない3人のウルトラマンは全力で暗殺者<sup>ドラコ</sup>  
に向かっていく。

**第57話バルタンの大逆襲―地球総攻撃計画―？「特訓開始」(後書き)**

怪獣は今回出た以外にもまだまだ登場しますので楽しみにしてください

さてさて次回はドラコに挑むティガ達・そしてつばみ達の特訓により開花した力  
ではでは次回もお楽しみに

第58話バルタンの大逆襲―地球総攻撃計画―？「闇のプリキュア・・・キュア

前回までのあらすじ

パワードの特訓による強化を計るつばみ達。同じころ6大怪獣達の奇襲を何とか退けていたティガ達であったのだがサイコバルタンの造獣・・・ドラコが現れた。

パウードドラコ「ギシャアアアアアアアアアッ!!!!!!」

パウードドラコは口を開いて声を上げるながらもゆつくりと近づいてくる。その動きからは何かしらか戦いに対しての余裕を感じられる。最初にティガがパワータイプのまま向っていくと一発胸に重たいパンチを放っていくが袋状の右腕に受け止められるとそのまま逆にドラコの左手で飛ばされてしまった。

ティガ・パワータイプ「（見かけによらずパワーが強い・・・防御力も堅そうだな）」

飛ばされたティガは身軽な動きをしながら着地しながらドラコの動きを観察する。仕草にも隙は見られない・・・接近戦でダメならばとアースとデユナミスは光線技で勝負だとバーンシューターとスプラッシュトルネードを同時発射すると赤と青の光が混合しドラコのカラダに降り注がれたが・・・。

ドラコ「・・・・・・・・」

全くもって効いている様子はない・・・身体は後ろの仰け反らせるような仕草はするもダメージを受けた様な様子などは無い。口を開きながらもドラコは天空に顔を上げる仕草をする・・・それは特殊な音波が空に向けて放たれているとはこの時のティガ達は知る由もなかった。

サイコバルタン「・・・来タカ」

サイコバルタンはドラコが送ってきたデータを戦艦内部に転送しある培養液ポットにインプットする・・・データを送信した瞬間に培養液に入っているソレは鼓動が始まる・・・まるで心臓が動くかのように。

????「ピポポポポポポポポ」

ティガ「ハアアッ!!!!、デヤアアアアッ!!!!!!」

光線技も通用しないのならば格闘戦で弱らせてから一気に倒すしか

ないとティガがスカイタイプにチェンジしスピード戦法に持つていくも全て避けられて効果が見られない。上手く当たっても腕で防御されてしまい直接的なダメージは与えら得ない……。只でさえエネルギーを消費した今の状況では短期決着が望まれるが……。ドラコの攻撃は素早くて確で自分達は動きについていけない……。このままではと焦り始める3人。

カラータイマー「ピコン、ピコン、ピコン」

遂にはカラータイマーも点滅を始めてしまう……。エネルギーが切れる前に早期決着を狙ったが故にまともな攻撃もできずに時間だけが過ぎていく……。流星にもう躊躇ってはいられないとティガはゼペリオン光線、アースはボルテックヒート、デユナミスはインブレイスバーストを同時発射しドラコに浴びせるもドラコのカラダからまるで鏡が光を反射するかのようティガ達に光線が跳ね返されると身体に直撃してしまった。

ティガ「グウウッ!!!…………グオオオオオオ」

アース・デユナミス「アアア…………ツ」

カラータイマーの点滅が早くなりからがに力が入らなくなってしまう……。ドラコは手からカマを取り出しそれを上に振りかざす。

このままではティガ達3人は切り裂かれてしまうだろう……

ティガ・アース・デユナミス「!!!!!!」

カマが振り下ろされた瞬間に3人は力を振り絞りジャンプしてドラコと距離を置くと一時撤退するように空へと飛びあがった。

ドラコ「ギシャアアアアアアアアッ!!!!!!」

ドラコは逃げたティガ達を見て勝ち誇ったかのように翼を広げて雄叫びを辺りの轟かせた……。そしてゆっくりと何か怪しい光に包まれると何処かに姿を消すのだった。

大人「な、なんて奴だ……。俺達の光線を跳ね返すなんて」

変身を解いた大人達は傷だらけのカラダに鞭を打ちながらも植物園に戻っていた……。ドラコが並大抵の怪獣でない事は見た瞬間か

ら分かつてはいたがこれほどまで強敵であるとは想定外もいい所だった。

琢磨「怪獣たちを閉じ込めていた事でエネルギーを消費していたのもあるけど・・・アイツは例え全力であったとしても・・・勝つのは難しかっただろうな」

傑「ああ。あの鏡のように光線を反射する皮膚は・・・恐らくアンチウルティメイト合金だろう・・・とにかく早くパウードに【気力】を教えてもらわないと・・・奴に勝てる手段は無い」

痛みが突き刺さるように大人達に襲いかかってくる・・・もうこれ以上はバルタンの奇襲がない事を祈るばかりであった・・・それから約半日は何もなかったが勿論それはバルタン達の優しさなんかではない。

サイコバルタン「マズハジヨウト言ツタ所カ・・・ダガマダマダ足リン！！次ハ、パウード、プリキュアノデータヲ採取シナクテハ」

サイコバルタンは初代の長の事を聞いていた。かつて同じようにパウードを追いつめ一度は地球侵略まで追い込んだものの寸前の所で地球人とパウードの同胞の邪魔が入り全てを崩された。今度は徹底的に穴がない様にすべてのデータを取りつくし完全勝利を手にする事・・・それが開けない夜を開けさせる唯一の方法。サイコバルタンはその野望を実現するべく次の手をすでに考えていた・・・次で願わくば地球を我がものに出れるという完璧な作戦を造る下準備を着々と進めているのだった。

そして翌日・・・  
大人・琢磨・傑「・・・」

植物園で大人達は一晩過ごしていた。昨日の戦いで疲れ切っていたのか照らすのテーブルにうつ伏せとなり椅子の上で爆睡している状態だった。彼らの事を気遣った薫子が毛布をかけてくれた事で風邪はひかなかった・・・朝日が自分達を照らすが大人達は一向に起きない・・・しかし突然赤い光が彼らの目の前で発生してその光で

3人は目が覚めた。

大人「んっ？・・・つぼみ？・・・皆・・・っ！！！！！」

光の方向を見てみるとそこには修行を終えたつぼみ達の姿があった。少し背が伸びた感じがしたがそれ以外は特になにも変わった様子はない。大人は立ち上がるとつぼみ達に近づいた。琢磨と傑も気配に気がついたのか目をこすりながらつぼみ達を見つめるといつもと変わらない彼女達の顔がそこにはあった。

大人「少し背が伸びた？」

つぼみ「はい。それに・・・ちよっだけ、たくましくなりましたよ」

つぼみは大人のセリフにそう返した。彼女の態度から察するに気力をマスターしたようだ。後は自分達の番だ。

大人「次は・・・俺達の番だな。そうだ、お前達が修行している間にバルタン達が怪獣たちを送り込んできたんだ・・・中でも1体・・・最悪の奴が・・・」

大人は自分達が修業を始める前に6体の怪獣の事とドラコの事をつぼみ達に報告する。中でもドラコの事を離すとパワーは目の色が変わった。

パワー「そいつはドラコだな・・・バルタンめ・・・最悪の怪獣を呼び寄せるとは。こうなればグズグズしてはいられないな・・・大人達の修行に入る。真夜、君も来てくれるか？」

真夜「ええ。」

大人「琢磨・傑！！？」

どうして真夜も一緒に来る必要があるのだろうか？・・・大人達は一瞬わけがわからなかったが今は一刻の有余もない。パワーと共に光に包まれ赤い空間に瞬間移動すると大人達はすぐにティガに等身大サイズに変身する。

ティガ「・・・この空間は異空間？」

パワー「そうだ。ここでの時間は外とは時間枠が違うから現実世界での少しの有余でも十分にトレーニングは出来る。それにウルト



ラマンであるお前たちなら気力の基礎は基礎はすぐにマスターできるだろう」

気がつくとパウードもウルトラマンの姿に変わっていた。そしてテイガ達はパウードから気力の基礎理論を教え込まれ早速訓練に入ろうと思ったが何やらパウードは少し離れる。

パウード「お前達には彼女と戦ってもらおう」

テイガ「彼女？」

パウードが見た方向には既に人影が見えた……何とどのその正体は……真夜だ。いや正確には真夜であって真夜でない誰かであった。

???2「へえ……コレが光の巨人ってやつ？」

テイガ「アース・デユナミス『!!!!????』」

真夜の声であるはずだが何か雰囲気違った……良く見ればいつもの真夜……でも言うべき名のあるのか?……とにかく真夜が2人になっているではないか。

テイガ「ま、真夜が2人?……な、何かのマジックか!？」

分身の術かと思ったテイガだったがどうやらそうではないようだ……何故ならばもう”1人の真夜”には右目に眼帯が付いている……いやそればかりか”いつもの真夜”とは違い何か邪悪で底知れぬ負の感情が感じられる。

アース「お前……真夜……だよな？」

真夜(?)「ええ、真夜よ……ねえ?真夜」

真夜「……ええ。私よ」

デユナミス「な、何がどうなっている!……わけがわからない」  
3人のウルトラマン達の戸惑いなど眼中にない様に眼帯を付けた真夜は3人をクスクスと嘲笑い始めた。隣の真夜は彼女の態度に少し呆れたよ巢になっている。

真夜(?)「答えは単純よ?……私は今からアンタ達の光を試す」

……闇のプリキュア……此処まで言えばアンタ達でもわかるでしょ?」

何やら妖艶な目付きを見せながらも真夜はそう言つと何かを取り出した・・・それは口紅だ・・・ティガ達は彼女のタダならぬ殺気の様なものにドラコと戦つた時・・・いやそれ以上の恐怖が身体に染み付いてしまふ。

真夜（？）「プリキュア・ダークネス・エヴォリューション!!!」  
真夜はその声と同時に全身を漆黒の闇に包み私服から蛇の目のような紋章が変えた漆黒の衣装に変わる。そして髪は黒いリボンで結ばれたツインテールとなつた彼女はギロリとティガ達を睨みつけると高らかにこう言つた。

???2「全てを無へ誘<sup>いざな</sup>う漆黒の墮天使、キュアリベリオン!!!」  
キュアリベリオン・・・それはかつて真夜が世界に絶望し闇に落ちた時の姿・・・プリキュアでありながら闇の力を自由に操る漆黒の墮天使にして死神。何故彼女が今復活したのかは分からないがそれはこれからティガ達にとつては自分の中にある限界という壁との戦いを意味しているのだつた。

第58話バルタンの大逆襲―地球総攻撃計画―？「闇のプリキュア・・・キュア

- ・ 此処で予告していた通りとうとう彼女にも登場して頂きました・・・

第59話バルタンの大逆襲―地球総攻撃計画―？「VSリベリオン―覚醒する信

前回までのあらすじ

ドラコの驚異的な力に一行も有るもないと大人達も遂に特訓を開始した。しかし特訓の相手とはパスワードではなく真夜のもう1つの姿・  
・・・闇のプリキュアにして死神・・・・キュアリベリオンであった！！！！

今回は基本は大人視点になりますが今後の章の伏線を多く含みます。

第59話バルタンの大逆襲―地球総攻撃計画―？「VSリベリオン―覚醒する信

漆黒の闇から眼帯をした少女はティガ達をその片目で睨みつけるように視線を送り込んでいた。その姿はナイトの黒ではなく闇を象徴するような邪悪なる黒……。しかし大人達はその闇に対して恐怖は既に無くなっていった……。寧ろその吸いこまれそうな闇に見惚れてしまいそうになるほどであった。

リベリオン「どう？真夜わたしのもう1つの姿は……。見惚れちゃってるの？」

だがそれもリベリオンの言葉を聞いてすぐに現実世界に引き戻された。

ティガ・アース・デユナミス「っ！！！！」

何を考えているのだろうか……。闇に心がときめくなど光の戦士では絶対にある得ない事。だが今の感覚は一体何なんだ！？まるで故郷の空気を物凄い久しぶりに吸うような懐かしいようでとても清々しい心地よさとも言えるかのようなこの安堵感。自分がかつてこの闇を知っている？

パワード「では特訓に入るぞ……。ティガ、先ずはイメージを強く持つてもらおう。君の大切な人が今目の前にいるリベリオンに殺された……。としよう。そのイメージを持ちながらリベリオンに勝ってみる。」

パワードの唐突言葉にティガは理解に苦しんだ。俺の大切な人がリベリオンに殺された事にしろ……。そんな事急に言われても出来るわけがない。その様子を見たりベリオンはニヤリと意地悪な笑みを見せると突然指をパチンと鳴らした。

リベリオン「なら……。無理矢理にも持たせてあげる。」

リベリオンはそう言うのと眼帯から突然闇を発生させていく……。ティガ達は声を上げる間もなく闇に包まれてしまった。漆黒の闇のドームが赤い空間内部で形成されるのを見ていたパワードは一言口を

開いた。

パウード「つぼみ達もこの試練に耐えた・・・お前達も耐える・・・光の巨人としての宿命を本当の意味で受け入れる為に」

大人「・・・こ、此処はどこだ？」

闇の空間に呑みこまれたかと思っただら何処か別の場所に飛ばされていた大人。超人に変身した筈なのに人間の姿も戻っている自分の目の前には全く覚えのない街が広がっている。少なくとも希望ヶ丘ではなさそうだ。この町はどこか見覚えがあるが思いだせない・・・非常に懐かしい・・・でも自分はこんな場所に来た覚えなどない筈だ・・・でもこの風景・・・何処かで

大人「外国か？・・・前に来たフランスの街に似ている気がする」  
そう言えばこの街並みは日本と言う感じではない。何処かで見た事あると思っただら3年前につぼみ達と一緒にフランスのパリでファッシュショーに参加する事になって一緒に来た時に見たパリの街の雰囲気にも似ていた。だから懐かしいと思ったのか？・・・いやそれにしても故郷に帰る様な懐かしさなどたった1度しか行っていない国で思うだろうか？

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！

突然爆発音が響き渡ったかと思うと空にリベリオンの姿があった。死神の様なカマを持つている姿は破壊神・・・いや悪魔とていう方が適切だろうか？とにかく人がいないといえ早く止めなければと大人はスパークレンスを起動し等身大サイズのティガに変身するとそのままリベリオンの前に飛び上がった。

ティガ「止める真夜！！！！何をするんだ！！！！？」

黒い炎を辺りに撒き散らしながら街を破壊する真夜リベリオンにそういいかけるティガ。あの真夜のかつての姿であったとしても”同じ真夜”であるのなら優しさがあるはずだと・・・だが大人ティガに向かって真夜リベリオンは冷徹で嘲笑う目を向ける。

リベリオン「ふふふっ そんなに慌てることないのよ？・・・ここ

「は私が造った幻想世界ワイプワールドなんだから」

ティガ「幻想世界ワイプワールド?」

リベリオン「そうよ。此処は貴方の潜在意識の中にある記憶サイジョンを立体化した世界・・・つまりは実態じゃないの。だからどんなにこの町をめちやくちやに破壊しても誰も困らないのよ」

この現実感あふれる世界が仮想現実?・・・壁や地面の感触だつて感じられる筈なのにコレが仮想の空間だつて?・・・今だに信じられないティガを余所にリベリオンは淡々と説明を始めた。

リベリオン「じゃあ、今からトレーニングのルールを説明するわ。

とつても簡単な事よ・・・私がこの町を私が全滅させる前に私を倒しなさい。でもただ私を倒すだけじゃ意味がないから条件を付けるわ・・・その条件はただ1つ。そこにいる女の子を守る事だけ」

ティガ「女の子?」

ワイプワールド

幻想世界は仮想現実なのだろう?・・・だつたら人なんているわけが・・・ティガはリベリオンの言葉に半信半疑になっているがその疑いはすぐに消える事になった。

リベリオン「ほらあ、そこにいるわよ?・・・さあ私から守ってみなさい!!!!」

リベリオンはニヤリと悪魔の様な表情をティガに見せながら突然黒炎の塊を発生させるとある一点に狙いを定め始めている。その標的ターゲットをティガは確認するないやな

ティガ「っ!?!??. . . や、止めるリベリオン」

まさか本気でこの女リベリオンは少女を殺す気なのか?ティガは黒炎の塊を放とうとしているリベリオンに向かってハンドスラッシュを放ち黒炎を無理矢理消滅させる。

ティガ「逃げる!!!!. . . . リベリオンは俺が全力で食い止める!!!!!!」

少女「!!!!!!」

ティガの声を耳にいして少女は必死に逃げるように走っていく。ソレを確認するとティガは迷いを捨てた様にリベリオンを睨みつけた。

リベリオン「ふうん、案外やるじゃない？」

真夜はそうでないと言われないと突然片腕に黒炎を発生させると巨大な鎌……「希望狩」<sup>ウイッシュ・ハント</sup>を召喚するとソレをティガに向かって振り下ろした。

ティガ「ッ!? ……ゲウウッ!!!!!!」

何とか両腕で巨大な鎌を受け止めるティガ……こんな大きなものをあの華奢な身体で持ち上げているあたりは相当な腕力がある。

マルチタイプではこの大鎌を受け止め続けるのはキツイものがある。ティガ「うっつ……ウー……ッ!!!!!!……ハッ!!!!!!」

ティガクリスタルを輝かせるとティガはパワータイプにチェンジしていき巨大な大鎌を握りしめながらリベリオンを投げ飛ばそうとパワー対決を申し込む。例えばプリキュアであろうとも超人<sup>ウルトラマン</sup>の力を超えることなどは出来ないはずだと思っではいたが……。

リベリオン「流石に【光の戦士】って言うだけの事はあるじゃない……でも力だけじゃ……勝負は勝てないよ？」

大鎌を握りしめながらティガの赤いボディに向かって蹴りを一発放つていくと怯んだ隙にそのままティガを思いつきり鎌で斬りつけて地面まで飛ばしてしまった。

ティガ「パワータイプ「ぐうっ!?! ……力だけじゃない……スピードはスカイタイプ並みじゃないか」

腕力はパワータイプ、スピードはスカイタイプを思わせるほど戦闘<sup>スベ</sup>能力に地面にたたきつけられたティガは信じられないという口調になりながらそう言った。

リベリオン「さあ……獲物は何処に行ったのかなあ……？」

リベリオンは戦いを楽しみながら狩り（ハンティング）もスツカリ楽しんでた。逃げ出した少女を上空探し出してやろうと辺りを見回すと西のほうに走っているつばみと思われる少女を見つける。

リベリオン「みい……つけた」



リベリオンは笑みを浮かべるとリベリオンはものすごいスピードで獲物に向かっていく巨大な大鎌が少女の首に向かって振り下ろされる……。

ティガ・スカイタイプ「ああああああっ！！！！！！！！！！」  
だがギリギリのところまでティガが受け止めに入った希望狩の重たい刃をティガの蒼の身体スカイタイプが受けとめているがスカイタイプではスピードの代償にパワーが削がれてしまうのでいつまでも受けとめられない……ティガは身動きが止まっている少女に向かって震える声を上げた。

ティガ・スカイタイプ「に、逃げろお………は、早く！！！！」

ティガは何とか逃がそうと全力を絞り出す……リベリオンは今の場ではタイプチェンジする隙も与えてはくれないだろう。少女は震えているがティガの言葉に我に返ったのかその場に大急ぎで走りつつ逃げる。

リベリオン「ふん、残念でした！！！！」

だがソレも既に計算済みだと逆に斧に体重をかけながらリベリオンは少女に向かって片腕を伸ばすと……

リベリオン「リベリオン・デストロイド・ボール」

最初に出した漆黒の炎の方塊を少女に向けて発射した……ティガは急いでリベリオンから離れ少女に向かっていく……ティガは何とかと様と飛び出すも間に合わない。

ティガ・スカイタイプ「逃げろおおおおおっ！！！！！！！！」  
少女の背中に向かってそう叫ぶティガ（大人）。だがティガの声も虚しく響くだけで少女は動けないまま炎の中に身が包まれて消えてしまった……そしてその少女の顔は……見覚えがある顔だった。

ティガ・スカイタイプ「ああ………つばみ？………」

その顔はつばみに似ていた……いやそっくりなんてものじゃない



大人自身の怒りや憎しみ、悲しみが複雑に混ざり合い大爆発を起こした事こそが全てはパワーが計画した試練という事であったのだ。気力を会得するには自分自身の心に一時的に無意識にかけている理性を壊す必要があるという事らしい・・・その為には自分の一番大切なものを目の前で壊される等の深い絶望と喪失感で満たす必要がある。つまり大人の場合のソレはつばみが目の前で殺されるという事なのだ

普通の人間ならば暴走を起こして暴れ回るのだが超人やプリキュアは違う。己の心の闇を制御し今まで戦ってきた人間だからこそ理性を外しても暴走は起こさない。そして限界を超えたその時こそ新しい力は目覚める。リベリオン曰くつばみ達もこの仮想空間でパワーに自分達が殺される幻を見せられて覚醒したらしい。

ティガ「お前は全てを知った上で今までの行動をしていたというのか!?!?!?!?! 俺を怒らせ理性を潰すためだけに!?!?!?!?!」  
リベリオン「ええ、そうよ?」

ティガ「お前・・・本当に真夜の片割れなのか?・・・プリキュアを名乗っている癖に何でこんな非道な真似が淡々と出来る!?!?!?!?!」  
「お前は俺がどんな思いになったと思ってるんだ!?!?!?!?!」

ティガはリベリオンの態度に更に怒りが込み上げてきた・・・いくらパワーと打ち合わせてがあつて手筈を決めていたとしてもこんな非道な真似を楽しそうに出来るものだろうか?・・・激昂しているティガに対してリベリオンは鼻で笑うとらしておぞましく微笑を見せた。

リベリオン「お生憎様・・・一応私はプリキュアだけど“悪”のプリキュアなの・・・真夜との前の戦いである程度改心はしたけどね

「  
邪悪なオーラを全身から放ちそう言い放つリベリオン。正に完璧だ・・・完璧な悪魔を演じ切ったと思っっているリベリオンだったがティガはゆっくりと近づきリベリオンの顔に向けて拳を飛ばしたが寸止めど止めてしまった。

リベリオン「……殴らないの？」

ティガ「……悪のプリキュアであるうと俺には女の子を殴る趣味などない。だが1つ言っておく……お前、悪魔だな」

リベリオン「褒め言葉どうも……あ、琢磨と傑も気力に覚醒したみたいよ？」

リベリオンは皮肉にそう返すとコピーから琢磨と傑のテストも完了したとの知らせを受けたようだ。ティガは拳を下ろすと同時にリベリオンは幻想世界を消滅させてようと眼帯から光を放つと辺りの風景はガラスが割れるように崩れていく……リベリオンが発生させた幻想世界は一気になくなり闇のドームになるもソレもすぐに崩れいく……。そして気がつけが赤い空間あ広がってきた……。辺りを見ると自分と同じようにそれぞれのイメージカラーの稲妻を身体に纏ったアースとデユナミスがいた

パウード「戻ってきたか」

ティガ「ああ……。パウード、気力を発生させる事は出来た。あとはどうすればいい？」

パウード「お前達の場合、後はコントロールする術と光線への変換術をマスターすれば完璧だ……。3人とも……。すまなかつた。」  
パウードには一応罪悪感はあるようで謝った。3人は今更どうでもいいと言う様な態度で受け流した。

パウード「では今から急ピッチでトレーニングに入るぞ!!!!!!」

ティガ・アース・デユナミス「おう!!!!!!」

リベリオン「私はお役御免？」

真夜「そうね。もう充分よ」

これからが本番だ。これからが本当の地獄の始まりだと覚悟を決めたティガ（大人）達は怒涛の訓練が待っているのだった。時間は制限されているが今から絶対にマスターしてやると血の滲む特訓が始まった。

第59話バルタンの大逆襲―地球総攻撃計画―？「VSリベリオン―覚醒する信

リベリオンが悪魔すぎる。・・・ちなみにリベリオンの出番はコレで終わりではありませんがこの章では此処で出番は終わりになります。

では次回もお楽しみに

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5245q/>

---

ウルトラマンティガ&ハートキャッチプリキュア！～光と闇の超決戦～

2011年10月17日02時00分発行